

豊 後 府 内 7

中世大友府内町跡第20次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

2007

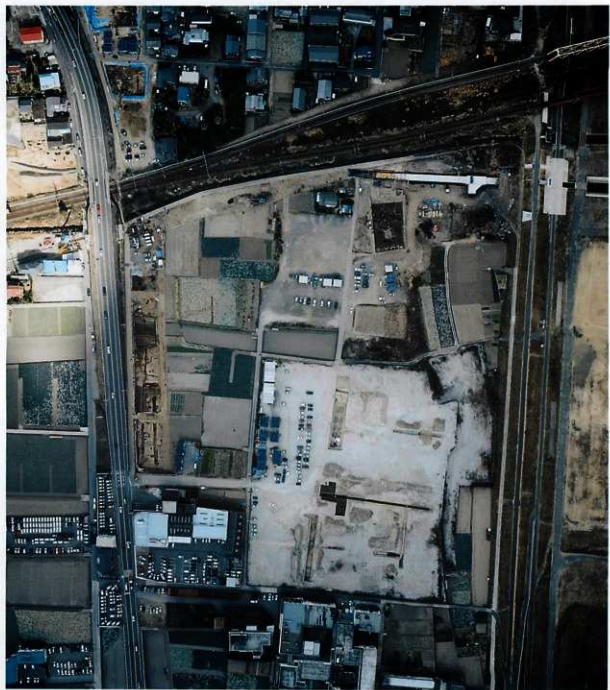
大分県教育庁埋蔵文化財センター



万寿寺 東北部上空から



万寿寺 南上空から



万寿寺 空中写真

府内町跡20次調査C区 全景

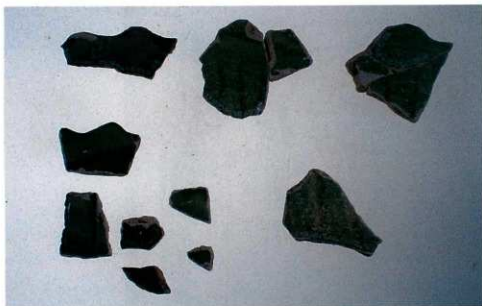


府内町跡20次調査C区出土小物



府内町跡20次調査A区 A-SB01





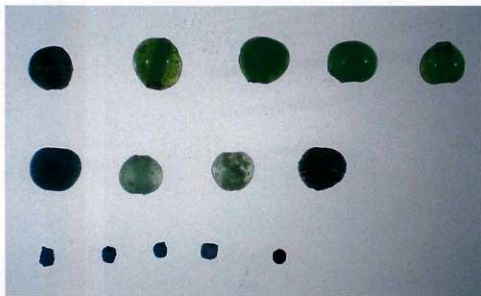
府内町跡20次調査A区 出土磁甗窯系陶器



府内町跡20次調査A区 出土龍泉窯系青磁



府内町跡20次調査A区 出土玉類



府内町跡20次調査B区 出土ガラス玉類

序 文

本書は、大分県教育委員会が国道10号古国府拡幅事業に伴い、国土交通省大分河川国道事務所から委託され実施した中世大友城下町跡発掘調査の報告書です。

大分市にあるこの遺跡は、かつて九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれ、その周辺には町屋や寺院が建ち並び、中世において「府中」とか「府内」と呼ばれる豊後国の中心地でした。近年の発掘調査は、こうした中世都市の構造や、そこで暮らした人々の生活の様子を明らかにしています。

本書に収録した第20次調査区は、戦国時代の「府内」の町の景観を描いたと伝えられる「府内古図」で見れば、その中でも最大面積を持つ「万寿寺」の北西隅に当たります。室町時代の「万寿寺」は禅宗寺院の官位制である五山十刹制のなかに数えられる九州最大級の規模と格式を備え、大友家と密接な関係を持っていました。

発掘調査では、「万寿寺」を創建した頃の溝、境内に建ち並んでいた建物の跡、16世紀の北側の境となる大規模な堀の跡、僧侶たちが利用した井戸などが検出されました。また、こうした遺構の中からは、当時、中国大陸からもたらされた青磁や白磁をはじめ、国内各地の窯業地で生産された壺や甕が出土し、「万寿寺」の交流範囲の広さを知ることができました。そして、16世紀の堀はすぐに埋め立てられ、屋敷地や街路に変わることがわかり、古文書では知ることの出来ない事実が明らかになりました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深めるための一助となるとともに、学術研究資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、ここから感謝申し上げます。

平成19年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 小 玉 学 司

例 言

1. 本書は、大分市元町に所在する中世大友府内町跡第20次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府拡幅事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第20次調査は平成14年5月から平成15年3月にかけて実施した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行ったほか、明大工業と国際航業に委託した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、老鮫尾可奈子・大野瑞恵（大分県埋蔵文化財センター嘱託）があたり、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門197）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と（ ）内の世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。

SD：溝、SB：掘立柱建物、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、SP：柱穴および小穴

SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）

9. 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。

青花 小野正敏「15～16世紀の染付陶・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）

青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁陶の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）

白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）

備前系陶器

乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）

乗岡 実「近世備前焼播鉢の編年案」（『岡山城三之曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一』岡山市教育委員会 2002年）

中国南部産焼締陶器鉢

吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）

京都系土師器および土師質土器

塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」（『博多研究会誌』第6号 1998年）

塩地潤一「九州出土の京都系土師器Ⅲ」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）

坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）

吉備系土師器碗

山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡－第5次調査－（医学部および同付属病院管理棟新設予定地）』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）

瓦 森田 克「屋瓦」（『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）

10. 本書の執筆は第1～3・6章を坂本嘉弘、第4章を後藤晃一が行った。

11. 本書の編集は、坂本嘉弘・後藤晃一で協議して行った。

目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査の経緯	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	1
3.	調査の体制	4
第2節	遺跡の立地と環境	6
1.	地理的環境	6
2.	歴史的環境	6
第3節	報告書作成にあたって	9
1.	府内古図と街路名称の設定	9
第2章	中世大友府内町跡第20次調査A区	
第1節	調査の経過と概要	10
1.	調査の経過	10
2.	遺構の概要	10
第2節	遺構と遺物	16
1.	溝及び関連遺構	16
2.	建物遺構	41
3.	土坑	44
4.	井戸	86
5.	柱穴及び柱穴状遺構	90
6.	整地土及び包含層	96
第3節	小 結	110
第3章	中世大友府内町跡第20次調査B区	
第1節	調査の経過と概要	111
1.	調査の経過	111
2.	遺構の概要	111
第2節	遺構と遺物	117
1.	溝及び関連遺構	117
2.	土坑	170
3.	井戸	211
4.	建物遺構	224
5.	柱穴及び柱穴状遺構	232
6.	各土坑・柱穴出土遺物	235
7.	整地土及び包含層	238
第3節	小 結	250

第4章 中世大友府内町跡第20次調査C区	
第1節 調査の経過と概要	251
第2節 遺構と遺物	259
1. 溝	259
2. 土坑	303
3. 包含層出土遺物	312
第3節 小結	319
第5章 自然科学的分析	
第1節 中世大友府内町跡第20次調査C区出土人骨について	321
1. はじめに	321
2. 人骨所見	321
3. まとめ	322
第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査	324
1. はじめに	324
2. 資料	324
3. 鉛同位体比の原理	325
4. 分析方法	325
5. 測定値の表し方	325
6. 化学組成	326
7. 結果	326
8. 考察	326
第6章 総括	
第1節 文献・絵画資料から見た万寿寺	332
1. 万寿寺の変遷と意義	332
2. 16世紀の万寿寺	332
3. 禪宗寺院と万寿寺の構造	334
第2節 考古学から見た万寿寺跡の西北隅	336
1. 万寿寺の建立期	336
2. 14世紀の万寿寺	336
3. 16世紀の万寿寺西北隅	337
遺物観察表	341
写真図版	379
報告書名抄録	406

挿 図 目 次

第1章

- 第1-1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 ……………2
 第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡 ……………5

第2章

- 第2-1図 府内町跡20次調査A区位置図 ……………10
 第2-2図 中世大友府内町跡20次
 調査A区遺構配置図(折込) ……11~12
 第2-3図 A-SD1501実測図 ……………17
 第2-4図 A-SD1501上層出土遺物実測図 ……18
 第2-5図 A-SD1501下層出土遺物実測図 ……19
 第2-6図 A-SD1501出土遺物実測図(1) ……20
 第2-7図 A-SD1501出土遺物実測図(2) ……21
 第2-8図 A-SD1501出土遺物実測図(3) ……22
 第2-9図 A-SD1501出土銅銭実測図 ……23
 第2-10図 A-SD1501出土瓦実測図 ……24
 第2-11図 A-SD1504実測図 ……25
 第2-12図 A-SD・SK1505実測図 ……26
 第2-13図 A-SK1505実測図 ……27
 第2-14図 A-SK1024実測図 ……28
 第2-15図 A-SD・SK1505出土遺物
 実測図(1) ……29
 第2-16図 A-SD・SK1505出土遺物
 実測図(2) ……30
 第2-17図 A-SD・SK1505出土遺物
 実測図(3) ……31
 第2-18図 A-SD・SK1505出土遺物
 実測図(4) ……32
 第2-19図 A-SD・SK1505出土銅銭
 実測図 ……32
 第2-20図 A-SD1506出土遺物実測図(1) ……34
 第2-21図 A-SD1506出土遺物実測図(2) ……35
 第2-22図 A-SD1506出土遺物実測図(3) ……36
 第2-23図 A-SD1506出土遺物実測図(4) ……37
 第2-24図 A-SD1506出土遺物実測図(5) ……38
 第2-25図 A-SD1506出土遺物実測図(6) ……39
 第2-26図 A-SD1506出土遺物実測図(7) ……40
 第2-27図 A-SD1506出土銅銭実測図 ……40
 第2-28図 A-SB001のA-SP026実測図 ……41
 第2-29図 A-SB001実測図 ……42

- 第1-3図 中世大友城下町跡と周辺の
 戦国時代遺跡 ……………7
 第1-4図 「府内古園」と街路名称の設定 ……9
 第2-30図 A-SB001の柱穴出土遺物実測図 ……43
 第2-31図 A-SB001のA-SP026
 出土遺物実測図 ……43
 第2-32図 A-SK040・A-SK041・
 A-SK042・A-SP069・
 A-SP070実測図 ……44
 第2-33図 A-SK052出土銅銭実測図 ……45
 第2-34図 A-SK041・A-SK042・
 A-SP069・A-SK040
 出土遺物実測図 ……46
 第2-35図 A-SK102実測図 ……47
 第2-36図 A-SK102出土遺物実測図 ……47
 第2-37図 A-SK112・A-SP113・
 A-SP114実測図 ……48
 第2-38図 A-SK112・A-SK113・
 A-SK114出土遺物実測図 ……48
 第2-39図 A-SK1010実測図 ……48
 第2-40図 A-SK1010出土遺物実測図 ……49
 第2-41図 A-SK1013出土銅銭実測図 ……50
 第2-42図 A-SK1013・A-SK1013(A)
 実測図 ……50
 第2-43図 A-SK1013出土遺物実測図 ……51
 第2-44図 A-SK1012・SK-A1014実測図 ……52
 第2-45図 A-SK1014出土遺物実測図 ……52
 第2-46図 A-SK1014出土玉類実測図 ……52
 第2-47図 A-SK1017実測図 ……53
 第2-48図 A-SK1017出土遺物実測図 ……53
 第2-49図 A-SK1018・A-SP1035
 ・A-SK1036実測図 ……54
 第2-50図 A-SK1018出土遺物実測図 ……54
 第2-51図 A-SK1019出土銅銭実測図 ……55
 第2-52図 A-SK1019実測図 ……55
 第2-53図 A-SK1019出土遺物実測図 ……55
 第2-54図 A-SK1023実測図 ……56
 第2-55図 A-SK1023出土遺物実測図 ……57

第2-56图	A-SK1026实测图	57	第2-97图	A-SK1094出土遗物实测图	74
第2-57图	A-SK1030实测图	58	第2-98图	A-SK1096·A-SK1097实测图	75
第2-58图	A-SK1030出土遗物实测图	58	第2-99图	A-SK1096出土遗物实测图	75
第2-59图	A-SK1035出土铜钱实测图	58	第2-100图	A-SK1099实测图	76
第2-60图	A-SK1039实测图	59	第2-101图	A-SK1099出土遗物实测图	77
第2-61图	A-SK1039出土遗物实测图	60	第2-102图	A-SK1099出土铜钱实测图	77
第2-62图	A-SK1042实测图	61	第2-103图	A-SK1100实测图	78
第2-63图	A-SK1042出土遗物实测图	61	第2-104图	A-SK1100出土遗物实测图	79
第2-64图	A-SK1043实测图	62	第2-105图	A-SK1101出土实测图	80
第2-65图	A-SK1043出土遗物实测图	62	第2-106图	A-SK1101铜钱实测图	80
第2-66图	A-SK1050·A-SK1051· A-SK1052实测图	63	第2-107图	A-SK1101出土遗物实测图	80
第2-67图	A-SK1051出土遗物实测图	63	第2-108图	A-SK1104实测图	81
第2-68图	A-SK1056实测图	64	第2-109图	A-SK1104出土铜钱实测图	82
第2-69图	A-SK1058实测图	65	第2-110图	A-SK1104出土遗物实测图	82
第2-70图	A-SK1058出土遗物实测图	65	第2-111图	A-SK1105出土遗物实测图	83
第2-71图	A-SK1059出土遗物实测图	66	第2-112图	A-SK1105·A-SK1106 实测图	83
第2-72图	A-SK1059实测图	66	第2-113图	A-SK1107实测图	83
第2-73图	A-SK1065出土遗物实测图	66	第2-114图	府内町跡20次調査A区土坑 出土遗物实测图	85
第2-74图	A-SK1065实测图	66	第2-115图	A-SE1045实测图	86
第2-75图	A-SK1068出土遗物实测图	67	第2-116图	A-SE1045出土遗物实测图(1)	88
第2-76图	A-SK1068实测图	67	第2-117图	A-SE1045出土遗物实测图(2)	89
第2-77图	A-SK1069实测图	67	第2-118图	A-SK1045出土铜钱实测图	89
第2-78图	A-SK1069出土遗物实测图	67	第2-119图	府内町跡20次調査A区主要 柱穴实测图	91
第2-79图	A-SK1070实测图	68	第2-120图	府内町跡20次調査A区主要 柱穴出土遗物实测图	92
第2-80图	A-SK1081出土遗物实测图	68	第2-121图	府内町跡20次調査A区柱穴 出土遗物实测图	93
第2-81图	A-SK1081实测图	68	第2-122图	府内町跡20次調査A区各遺構 出土遗物实测图	94
第2-82图	A-SK1082出土遗物实测图	68	第2-123图	府内町跡20次調査A区 出土遗物实测图(1)	97
第2-83图	A-SK1082实测图	68	第2-124图	府内町跡20次調査A区 出土遗物实测图(2)	98
第2-84图	A-SK1083实测图	69	第2-125图	府内町跡20次調査A区 出土遗物实测图(3)	99
第2-85图	A-SK1083出土遗物实测图	69	第2-126图	府内町跡20次調査A区 出土遗物实测图(4)	100
第2-86图	A-SK1084实测图	70	第2-127图	府内町跡20次調査A区 出土遗物实测图(5)	101
第2-87图	A-SK1084出土遗物实测图	70			
第2-88图	A-SK1089出土遗物实测图	71			
第2-89图	A-SK1089实测图	71			
第2-90图	A-SK1091出土遗物实测图	71			
第2-91图	A-SK1091实测图	72			
第2-92图	A-SK1092出土遗物实测图	73			
第2-93图	A-SK1092实测图	73			
第2-94图	A-SK1093实测图	73			
第2-95图	A-SK1093出土遗物实测图	73			
第2-96图	A-SK1094实测图	74			

第2-128图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(6)	102
第2-129图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(7)	103
第2-130图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(8)	104
第2-131图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(9)	105

第3章

第3-1图	府内町跡20次調査B区 位置図	111
第3-2图	中世大友府内町跡20次調査 B区遺構配置図(折込)	113~114
第3-3图	B-SD001・B-SD002 出土遺物実測図	118
第3-4图	B-SD003・B-SD004・ B-SD004・A-1506実測図 (折込)	121~122
第3-5图	B-SD003出土遺物実測図(1)	123
第3-6图	B-SD003出土遺物実測図(2)	124
第3-7图	B-SD003出土遺物実測図(3)	125
第3-8图	B-SD003出土遺物実測図(4)	126
第3-9图	B-SD003出土遺物実測図(5)	127
第3-10图	B-SD003出土遺物実測図(6)	129
第3-11图	B-SD003出土遺物実測図(7)	130
第3-12图	B-SD003出土遺物実測図(8)	131
第3-13图	B-SD003出土遺物実測図(9)	132
第3-14图	B-SD003出土遺物実測図(10)	133
第3-15图	B-SD003出土遺物実測図(11)	134
第3-16图	B-SD003出土遺物実測図(12)	135
第3-17图	B-SD003出土遺物実測図(13)	136
第3-18图	B-SD003出土遺物実測図(14)	137
第3-19图	B-SD003出土遺物実測図(15)	138
第3-20图	B-SD003出土遺物実測図(16)	139
第3-21图	B-SD003出土遺物実測図(17)	140
第3-22图	B-SD003出土銅銭実測図	141
第3-23图	B-SD004出土銅銭実測図	142
第3-24图	B-SD004出土遺物実測図(1)	143
第3-25图	B-SD004出土遺物実測図(2)	144
第3-26图	B-SD004出土瓦実測図(1)	146
第3-27图	B-SD004出土瓦実測図(2)	147

第2-132图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(10)	106
第2-133图	府内町跡20次調査A区 出土遺物実測図(11)	107
第2-134图	府内町跡20次調査A区 出土銅銭実測図	108

第3-28图	B-SD004出土瓦実測図(3)	148
第3-29图	B-SD004出土瓦実測図(4)	149
第3-30图	B-SD004出土瓦実測図(5)	150
第3-31图	SD-B004出土瓦実測図(6)	151
第3-32图	B-SD004出土瓦実測図(7)	152
第3-33图	B-SD004出土瓦実測図(8)	153
第3-34图	B-SD004出土瓦実測図(9)	154
第3-35图	B-SD004出土瓦実測図(10)	155
第3-36图	B-SD004出土遺物実測図(1)	157
第3-37图	B-SD004出土遺物実測図(2)	158
第3-38图	B-SD004出土遺物実測図(3)	159
第3-39图	B-SD004出土遺物実測図(4)	160
第3-40图	B-SD004出土遺物実測図(5)	161
第3-41图	B-SD004出土遺物実測図(6)	162
第3-42图	B-SD004出土遺物実測図(7)	163
第3-43图	B-SD004出土遺物実測図(8)	164
第3-44图	B-SD004出土遺物実測図(9)	165
第3-45图	B-SD004出土遺物実測図(10)	166
第3-46图	B-SD004出土遺物実測図(11)	167
第3-47图	B-SD004出土銅銭実測図	168
第3-48图	B-SK015出土遺物実測図	169
第3-49图	B-SK015出土銅銭実測図	170
第3-50图	B-SK015実測図	170
第3-51图	B-SK016出土実測図	171
第3-52图	B-SK016出土遺物実測図	171
第3-53图	B-SK018出土実測図	172
第3-54图	B-SK018出土遺物実測図	172
第3-55图	B-SK020実測図	174
第3-56图	B-SK020出土遺物実測図(1)	175
第3-57图	B-SK020出土遺物実測図(2)	176
第3-58图	B-SK020出土遺物実測図(3)	177
第3-59图	B-SK020出土遺物実測図(4)	178

第3-60图	B-SK020出土銅錢実測図	179	第3-101图	B-SK132実測図	198
第3-61图	B-SK022実測図	179	第3-102图	B-SK132出土遺物実測図	198
第3-62图	B-SK022出土遺物実測図	179	第3-103图	B-SK134実測図	199
第3-63图	B-SK023・B-SK024実測図	180	第3-104图	B-SK145実測図	199
第3-64图	B-SK023出土銅錢実測図	181	第3-105图	B-SK146実測図	200
第3-65图	B-SK023・B-SK024 出土遺物実測図	181	第3-106图	B-SK146出土遺物実測図	200
第3-66图	B-SK031実測図	182	第3-107图	B-SK147出土遺物実測図	201
第3-67图	B-SK047実測図	182	第3-108图	B-SK147実測図	201
第3-68图	B-SK047出土遺物実測図	183	第3-109图	B-SK153実測図	202
第3-69图	B-SK048実測図	183	第3-110图	B-SK153出土遺物実測図	202
第3-70图	B-SK048出土遺物実測図(上層)	184	第3-111图	B-SK153出土銅錢実測図	202
第3-71图	B-SK048出土銅錢実測図	185	第3-112图	B-SK157実測図	202
第3-72图	B-SK048出土遺物実測図(下層)	185	第3-113图	B-SK157出土遺物実測図	202
第3-73图	B-SK057出土遺物実測図	186	第3-114图	SK-B161実測図	203
第3-74图	B-SK057実測図	186	第3-115图	SK-B161出土遺物実測図	203
第3-75图	B-SK060出土遺物実測図	186	第3-116图	SK-B164実測図	203
第3-76图	B-SK060実測図	186	第3-117图	SK-B170実測図	204
第3-77图	B-SK063実測図	187	第3-118图	SK-B170出土遺物実測図	204
第3-78图	B-SK063出土遺物実測図	187	第3-119图	SK-B177実測図	204
第3-79图	B-SK066実測図	188	第3-120图	SK-B177出土遺物実測図	204
第3-80图	B-SK066出土遺物実測図	188	第3-121图	SK-B178実測図	205
第3-81图	B-SK066出土遺物実測図	189	第3-122图	SK-B179実測図	205
第3-82图	B-SK097実測図	190	第3-123图	SK-B179出土遺物実測図	205
第3-83图	B-SK097出土遺物実測図	191	第3-124图	SK-B184実測図	206
第3-84图	B-SK098実測図	192	第3-125图	SK-B184出土遺物実測図	206
第3-85图	B-SK098出土遺物実測図	192	第3-126图	SK-B187実測図	207
第3-86图	B-SK100実測図	192	第3-127图	SK-B187出土遺物実測図	207
第3-87图	B-SK107実測図	193	第3-128图	府内町跡20次調査A区土坑 出土遺物実測図(1)	208
第3-88图	B-SK107出土遺物実測図	193	第3-129图	府内町跡20次調査A区土坑 出土遺物実測図(2)	209
第3-89图	B-SK113実測図	193	第3-130图	B-SE006実測図	211
第3-90图	B-SK113出土遺物実測図	193	第3-131图	B-SE006出土遺物実測図	212
第3-91图	B-SK122出土遺物実測図	194	第3-132图	B-SE009出土銅錢実測図	213
第3-92图	B-SK122実測図	194	第3-133图	B-SE009実測図	214
第3-93图	B-SK124実測図	194	第3-134图	B-SE009出土遺物実測図(1)	215
第3-94图	B-SK124出土遺物実測図	194	第3-135图	B-SE009出土遺物実測図(2)	216
第3-95图	B-SK126実測図	195	第3-136图	B-SE009出土遺物実測図(3)	217
第3-96图	B-SK126出土遺物実測図	196	第3-137图	B-SE010実測図	218
第3-97图	B-SK128出土遺物実測図	197	第3-138图	B-SE010出土遺物実測図	219
第3-98图	B-SK126実測図	197	第3-139图	B-SE010出土銅錢実測図	220
第3-99图	B-SK131実測図	197	第3-140图	B-SE017実測図	221
第3-100图	B-SK126出土遺物実測図	198			

第3-141图	B-SE017出土遗物实测图	222
第3-142图	B-SE056出土遗物实测图	223
第3-143图	府内町跡20次調査B区建物 遺構配置図	224
第3-144图	B-SB190实测图	225
第3-145图	B-SB191实测图	226
第3-146图	B-SB192实测图	227
第3-147图	B-SB193实测图	228
第3-148图	B-SB194实测图	229
第3-149图	B-SB195实测图	229
第3-150图	B-SB196实测图	230
第3-151图	B-SB197实测图	230
第3-152图	B-SB198实测图	231
第3-153图	B-SB199实测图	231
第3-154图	B-SB200实测图	231
第3-155图	B-SPI33实测图	233
第3-156图	B-SPI33出土遗物实测图	233
第3-157图	府内町跡20次調査B区主要 柱穴实测图	234
第3-158图	府内町跡20次調査B区主要 柱穴出土遗物实测图	235

第4章

第4-1图	府内町跡20次調査C区位置図	251
第4-2图	中世大友府内町跡20次調査 C区遺構配置図(折込)	253~254
第4-3图	調査区東壁土層図(折込)	255~256
第4-4图	調査区西壁土層図(折込)	255~256
第4-5图	C-SD-C001・C-SD-C010实测图	261~262
第4-6图	C-SD01出土遗物实测图(1)	268
第4-7图	C-SD01出土遗物实测图(2)	269
第4-8图	C-SD01出土遗物实测图(3)	270
第4-9图	C-SD01出土遗物实测图(4)	271
第4-10图	C-SD01出土遗物实测图(5)	272
第4-11图	C-SD01出土遗物实测图(6)	273
第4-12图	C-SD01出土遗物实测图(7)	274
第4-13图	C-SD01出土遗物实测图(8)	275
第4-14图	C-SD01出土遗物实测图(9)	276
第4-15图	C-SD01出土遗物实测图(10)	277
第4-16图	C-SD01出土遗物实测图(11)	278
第4-17图	C-SD01出土遗物实测图(12)	279

第3-159图	府内町跡20次調査B区各 柱穴出土遗物实测图	236
第3-160图	府内町跡20次調査B区各土坑・ 柱穴出土銅銭实测图	237
第3-161图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(1)	239
第3-162图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(2)	240
第3-163图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(3)	241
第3-164图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(4)	242
第3-165图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(5)	244
第3-166图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(6)	245
第3-167图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(7)	246
第3-168图	府内町跡20次調査B区出土 遗物实测图(8)	247
第3-169图	府内町跡20次調査B区出土 銅銭实测图	248
第4-18图	C-SD01出土遗物实测图(13)	280
第4-19图	C-SD01出土遗物实测图(14)	281
第4-20图	C-SD01出土遗物实测图(15)	282
第4-21图	C-SD01出土遗物实测图(16)	283
第4-22图	C-SD01出土遗物实测图(17)	284
第4-23图	C-SD01出土遗物实测图(18)	285
第4-24图	C-SD01出土遗物实测图(19)	286
第4-25图	C-SD01出土遗物实测图(20)	287
第4-26图	C-SD01出土遗物实测图(21)	288
第4-27图	C-SD01出土遗物实测图(22)	289
第4-28图	C-SD01出土遗物实测图(23)	290
第4-29图	C-SD10出土遗物实测图(1)	292
第4-30图	C-SD10出土遗物实测图(2)	293
第4-31图	C-SD10出土遗物实测图(3)	294
第4-32图	C-SD02・C-SD12实测图	295
第4-33图	C-SD02出土遗物实测图	296
第4-34图	C-SD02・C-SD12出土 遗物实测图	297

第4-35図	C-SD04実測図	298	第4-52図	C-SK10出土遺物実測図(3)	310
第4-36図	C-SD04出土遺物実測図	298	第4-53図	C-SK10出土遺物実測図(4)	311
第4-37図	C-SD05実測図	299	第4-54図	C-SK10出土遺物実測図(4)	312
第4-38図	C-SD05・C-SD06出土 遺物実測図	299	第4-55図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(1)	313
第4-39図	C-SD07・C-SD08・ C-SD09実測図	300	第4-56図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(2)	314
第4-40図	C-SD11実測図	301	第4-57図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(3)	315
第4-41図	C-SD11出土遺物実測図	302	第4-58図	府内町跡20次調査C区 出土遺物実測図(4)	316
第4-42図	C-SK01実測図	303	第4-59図	府内町跡20次調査C区 出土銅銭実測図(1)	317
第4-43図	C-SK01・C-SK02出土遺物 実測図	304	第4-60図	府内町跡20次調査C区 出土銅銭実測図(2)	318
第4-44図	C-SK05実測図	304	第4-61図	府内町跡20次調査C区 遺構変遷図	319
第4-45図	C-SK01・C-SK02出土 遺物実測図	305	第4-62図	府内町跡20次調査C-SD01 出土京都系土師器法量分布図	320
第4-46図	C-SK06実測図	305			
第4-47図	C-SK08実測図	305			
第4-48図	C-SK08出土遺物実測図	305			
第4-49図	C-SK10実測図	306			
第4-50図	C-SK10出土遺物実測図(1)	308			
第4-51図	C-SK10出土遺物実測図(2)	309			

第5章

第5-1図	頭骸骨(正面観)	323	第5-8図	第5-7図の拡大図	329
第5-2図	前頭骨病変部拡大図	323	第5-9図	今回測定した金属製品とこれまで 測定した中世大友町跡出土 金属製品及び鉛玉の鉛同位対比 (²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	330
第5-3図	上顎骨・歯牙	323	第5-10図	今回測定した金属製品とこれまで 測定した中世大友町跡出土 金属製品及び鉛玉の鉛同位対比 (²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	330
第5-4図	頭骸底に見られる切痕	323			
第5-5図	大友府内町跡から出土した 金属製品の鉛同位対比 (²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	328			
第5-6図	第5-5図の拡大図	328			
第5-7図	大友府内町跡から出土した 金属製品の鉛同位対比 (²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁶ Pb- ²⁰⁸ Pb/ ²⁰⁶ Pb)	329			

第6章

第6-1図	中世大友府内町跡20次調査区 遺構変遷図	339
-------	-------------------------	-----

付図

中世大友府内町跡20次調査区遺構配置図

表 目 次

第 1 章

第 1-1 表 中世大友城下町跡調査一覧表(1) ……3	第 1-2 表 中世大友城下町跡調査一覧表(2) ……4
------------------------------	------------------------------

第 2 章

第 2-1 表 中世大友城下町跡 20 次調査 A 区遺構一覧表(1) ……13	第 2-3 表 中世大友城下町跡 20 次調査 A 区遺構一覧表(3) ……15
第 2-2 表 中世大友城下町跡 20 次調査 A 区遺構一覧表(2) ……14	

第 3 章

第 3-1 表 中世大友城下町跡 20 次調査 B 区遺構一覧表(1) ……112	第 3-3 表 中世大友城下町跡 20 次調査 B 区遺構一覧表(3) ……116
第 3-2 表 中世大友城下町跡 20 次調査 B 区遺構一覧表(2) ……115	

第 4 章

第 4-1 表 中世大友城下町跡 20 次調査 B 区遺構一覧表(1) ……252	第 4-3 表 府内町跡 20 次調査 C 区西壁土層観察表 ……258
第 4-2 表 府内町跡 20 次調査 C 区 東壁土層観察表 ……257	

第 5 章

第 5-1 表 頭骨計測値 ……322	第 5-5 表 中世大友府内町跡から出土した 製品に関する鉛同位対比值 ……327
第 5-2 表 頭蓋小変異観察表 ……323	
第 5-3 表 府内町跡 12・20 次調査出土の 測定金属製品一覧表 ……324	第 5-6 表 付録 蛍光 X 線スペクトル ……331
第 5-4 表 中世大友府内町跡から出土した 製品の化学組成 ……326	

遺 物 観 察 表 目 次

遺物観察表 1 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ① ……341	遺物観察表 5 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ⑤ ……345
遺物観察表 2 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ② ……342	遺物観察表 6 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ⑥ ……346
遺物観察表 3 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ③ ……343	遺物観察表 7 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ⑦ ……347
遺物観察表 4 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ④ ……344	遺物観察表 8 府内町跡 20 次調査 A 区 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類) ⑧ ……348

遺物観察表9 府内町跡20次調査A区	遺物観察表30 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨ ……349	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑩ ……366
遺物観察表10 府内町跡20次調査A区	遺物観察表31 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑩ ……350	出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……367
遺物観察表11 府内町跡20次調査A区	遺物観察表32 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……350	出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……368
遺物観察表12 府内町跡20次調査A区	遺物観察表33 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……351	出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……368
遺物観察表13 府内町跡20次調査A区	遺物観察表34 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……351	出土遺物観察表(瓦類)① ……369
遺物観察表14 府内町跡20次調査A区	遺物観察表35 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(金属製品) ……352	出土遺物観察表(瓦類)② ……370
遺物観察表15 府内町跡20次調査A区	遺物観察表36 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(瓦) ……352	出土遺物観察表(銅銭) ……370
遺物観察表16 府内町跡20次調査A区	遺物観察表37 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(銅銭) ……352	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)① ……371
遺物観察表17 府内町跡20次調査B区	遺物観察表38 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)① ……353	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)② ……372
遺物観察表18 府内町跡20次調査B区	遺物観察表39 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)② ……354	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③ ……373
遺物観察表19 府内町跡20次調査B区	遺物観察表40 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③ ……355	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④ ……374
遺物観察表20 府内町跡20次調査B区	遺物観察表41 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④ ……356	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤ ……375
遺物観察表21 府内町跡20次調査B区	遺物観察表42 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤ ……357	出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥ ……376
遺物観察表22 府内町跡20次調査B区	遺物観察表43 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥ ……358	出土遺物観察表(土製品・石製品)① ……376
遺物観察表23 府内町跡20次調査B区	遺物観察表44 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦ ……359	出土遺物観察表(土製品・石製品)② ……377
遺物観察表24 府内町跡20次調査B区	遺物観察表45 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑧ ……360	出土遺物観察表(玉・ガラス製品) ……377
遺物観察表25 府内町跡20次調査B区	遺物観察表46 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨ ……361	出土遺物観察表(木製品)① ……377
遺物観察表26 府内町跡20次調査B区	遺物観察表47 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑩ ……362	出土遺物観察表(木製品)② ……378
遺物観察表27 府内町跡20次調査B区	遺物観察表48 府内町跡20次調査C区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑪ ……363	出土遺物観察表(瓦) ……378
遺物観察表28 府内町跡20次調査B区	遺物観察表49 府内町跡20次調査B区
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑫ ……364	出土遺物観察表(銅銭) ……378
遺物観察表29 府内町跡20次調査B区	
出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑬ ……365	

写真図版目次

巻頭写真図版 1	万寿寺東北上空から 万寿寺南上空から	写真図版 7	B-SK047385 B-SD003 B-SD003土層断面 B-SD064面 B-SD004瓦出土状況 B-SD004
巻頭写真図版 2	万寿寺空中写真	写真図版 8	B-SD003とB-SK020386 B-SK020全景 B-SK020近景 B-SK048 B-SK184 B-SK063
巻頭写真図版 3	府内町跡20次調査C区全景 府内町跡20次調査C区出土小柄 府内町跡20次調査A区 A-SB01	写真図版 9	B-SE009 (井戸)387 B-SE006 (井戸) B-SE010 井戸内の楕鉢 B-SE010 裏込めの石 B-SK015 B-SD004出土状況
巻頭写真図版 4	府内町跡20次調査A区出土 磁壇窯系陶器 府内町跡20次調査A区出土 龍泉窯系陶器 府内町跡20次調査A区出土玉類 府内町跡20次調査B区出土ガラス玉類	写真図版 10	タイ産陶器 (四耳壺)388 朝鮮王朝産陶器 (舟德利) 備前系陶器 (掛花入れ) B-SK1505のこね鉢 スタンプ文のある瓦質土器
第1章		写真図版 11	備前系陶器のヘラ記号389 石鍋 亀山系須恵質土器とその格子叩き目
第2章		写真図版 12	金銅製品390 分銅 土製玉 石製品 (滑石製)
第3章		写真図版 13	常滑系陶器391 備前系陶器 (楕鉢) 備前系陶器ヘラ記号1 備前系陶器大甕のヘラ記号 備前系陶器ヘラ記号2
第4章	C-SD01を西側から望む200 府内古図C類200	写真図版 14	吉備系土師器392 瀬戸美濃系陶器 土鍋 東播系須恵質土器 瓦質土器 (鉢)
第5章			
第6章			
写真図版 1	府内町跡20次調査区と万寿寺跡 (西上空から)379		
写真図版 2	府内町跡20次調査区全景写真380		
写真図版 3	府内町跡20次調査と国道10号線381 府内町跡20次調査A区全景		
写真図版 4	府内町跡20次調査各溝の接合部382 府内町跡20次調査B区礎石建物群		
写真図版 5	A-SB01近景1383 A-SB01近景2 A-SB01の礎盤の川原石 (A-SP026) A-SK1505 A-SD1505		
写真図版 6	A-SD1501384 A-SD1501土層断面 A-SD1506 A-SK1017 A-SE1045(井戸) A-SK1039		

写真図版15	B-SK048出土在地系土師質土器 ……393	写真図版21	C-SK01遺物出土状況 ……399
	B-SK184出土在地系土師質土器		金箔土師器出土状況
	B-SK047出土土師器		C-SK05完掘状況・遺物出土状況
写真図版16	B-SD004出土各種瓦 ……394		C-SK06遺物出土状況
写真図版17	B-SD004出土丸瓦の製作痕 ……395		C-SK08遺物出土状況
	九州タイプの吊り紐痕		C-SK10遺物出土状況(1)
	本州タイプの吊り紐痕		C-SK10遺物出土状況(2)
写真図版18	C-SD01〔上層〕遺物出土状況 ……396		瀬戸美濃系陶器出土状況
	C-SD01〔上層〕青磁人物像燭台		備前系陶器出土状況
	出土状況		京都系土師器出土状況
	C-SD01〔中層〕遺物出土状況	写真図版22	C-SD01出土遺物〔備前系陶器〕 ……400
	C-SD01〔中層〕粘質土内遺物出土状況		C-SD01出土遺物〔土師質土器〕
	C-SD01〔中層〕猿形木製品出土状況	写真図版23	C-SD01出土遺物〔瓦質土器〕 ……401
	C-SD01〔中層〕華南三彩・舟形徳利		C-SD01出土遺物〔土製品〕
	出土状況	写真図版24	C-SD01出土遺物〔石製品・ガラス
	C-SD01〔下層〕遺物出土状況(1)		製品・金属製品〕 ……402
	C-SD01〔下層〕遺物出土状況(2)		C-SD01出土遺物〔木製品〕(1)
写真図版19	C-SD01〔下層〕燭台出土状況 ……397	写真図版25	C-SD01出土遺物〔木製品〕(2) ……403
	C-SD01〔下層〕土師質土器出土状況		C-SD10出土遺物〔備前系陶器〕
	C-SD01〔下層〕下駄出土状況	写真図版26	C-SD10出土遺物〔土師質土器〕 ……404
	C-SD01〔下層〕舟形木製品出土状況		C-SD10出土遺物〔木製品〕
	C-SD01〔下層〕C-SD01・C-SD10		C-SD02出土遺物
	切り合い状況	写真図版27	C-SD04出土遺物 ……405
	C-SD10遺物出土状況		C-SD05出土遺物
	C-SD10人骨出土状況(1)		C-SD11出土遺物
	C-SD10人骨出土状況(2)		C-SK05出土遺物
写真図版20	C-SD01直上 街路検出状況(東から) ……398		C-SK10出土遺物
	C-SD01・C-SD10完掘状況(東から)		包含層出土遺物
	C-SD02遺物出土状況		
	C-SD12遺物出土状況		
	C-SD04遺物出土状況		
	C-SD11遺物出土状況		
	C-SD05・C-SD07・C-SD08		
	・C-SD09遺物出土状況		
	C-SD05・C-SD07・C-SD08		
	・C-SD09完掘状況		

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の路線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省ではこれに併せ、道路幅を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古国府拡幅事業」を計画した。

府内古園

大友館

万寿寺

一方、大分川左岸沿いには、自らキリシタンとなり、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では「府内古園」と、明治時代の地籍図と照合し、さらに現状の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、平成5年に「中世大友城下町跡」として周知遊跡となった。

「一般国道10号古国府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友館の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う、中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この遊跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。また、前年度から「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う調査も開始されており、同じ遊跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、遊跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友館部分は「大友館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。

大友館跡
府内町跡

こうして、「一般国道10号古国府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡9次調査」が実施され、本誌で報告する「府内町20次調査」は平成14年に実施された。この調査区は、対象面積が南北約100m、東西約21mの約2100㎡あることから、調査区の北側3分の1をA区・残り3分の2をB区とし、3組の調査班を投入し実施した。そして万寿寺の北側境の堀をC区とし、その北側の「府内町跡21次調査」の担当者が調査を行った。その開始順序は、A・B区を平成14年5月下旬から開始し、C区は出水が予想され、渇水期の平成14年12月から着手した。そして、平成15年3月中旬に



第1-1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 (数字は調査次数)

平成18年12月現在

第1表 中世大友城下町跡調査一覧(1)

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書発行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成17年3月	10基の堀前地の遺構
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上町	平成14年3月	名ヶ小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11～13年度	JR日豊・豊肥線高架	御蔵場	平成17年3月	御蔵場の土塁
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	J A 奉祭場	寺小路町・万寿寺		万寿寺の南側の堀？
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	平成18年3月	第1南北街路・屋敷墓
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	柳町・館の南側	平成17年3月	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	平成17年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	JR日豊・豊肥線高架	上町・祐向寺	平成19年3月	キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	称名寺		称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・桜町・名ヶ小路町	平成18年3月	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	平成17年3月	ヴェロカメダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	唐人町	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	御北町		
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	JR日豊・豊肥線高架	上町	平成18年3月	短冊形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺		横町の街路・鍛冶屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・街路	平成18年3月	大友館の第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町	平成18年3月	大友館の東北隅の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	柳町		陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	万寿寺	平成19年3月	礎石建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	平成17年3月	府内町跡ダイ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	平成18年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺		
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町		万寿寺の塔の確認
府内町跡25-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	ノコギリ町		
府内町跡25-2次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐向寺	平成18年3月	16世紀代の竝立柱建物群
府内町跡25-3次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		
府内町跡25-4次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町		16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外		
府内町跡25-6次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	祐向寺	平成18年3月	
府内町跡26-1次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡27-1次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	妙藏寺		
府内町跡27-2次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	御北町		
府内町跡28次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	桜町	平成18年3月	
府内町跡29次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	後小路町		14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成13年度	JR久大線高架	瑞光寺		
府内町跡32次	大分市教委	平成15年度	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	国庫補助 範囲確認	府内町の南限付近	平成15年3月	15・16世紀後半の大溝
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	柳町		万寿寺西側の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町・万寿寺		
府内町跡36次	大分県教委	平成15年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御蔵場		
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御所小路町		推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	中町		
府内町跡40次	大分県教委	平成16年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町		
府内町跡41次	大分県教委	平成16年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町		御蔵場の周辺の街路と町屋
府内町跡42次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡43次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺西側の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	御西町		
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	中町・コレジオ堂付近		
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	駐車場建設	万寿寺		
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	店舗建設	称名寺		
府内町跡48次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	妙ヶ小路	平成18年3月	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	柳町・街路		
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路		御蔵場の西側の街路と側溝
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・御内町		萬寿寺西北隅・大友館東出隅
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・大友館		第2南北街路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	称名寺の東		
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	庄原佐野線	御蔵場		
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	国庫補助 範囲確認	御西町		
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名ヶ小路町		
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御所小路町		
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	市下水道	桜町		
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	萬寿寺西側の堀		
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	J R 久大線高架	瑞光寺		
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	確認調査	第1南北街路		街路跡

第1節 調査の経緯

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	確認調査	御西町		
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アバウト建設	御西町		
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	確認調査	御西町		
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	確認調査	御西町・大友館		
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町		
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	萬寿寺		
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		御蔵場西側の市路・六角井戸
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	末廻寺		
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	J R 久大線高架	瑞光寺		将ヶ池の一部
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		名ヶ小路の北側側溝
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	坂ヶ丘雨水管線	萬寿寺西側の堀		
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建設	大雄院の北側		
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		備前焼指鉢と中国産青花皿
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		

「府内町跡20次調査」全体が終了した。

埋蔵文化財
センター

なお、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁埋蔵文化財センターが、この事業に伴う発掘調査を継承して担当し、全体の発掘調査次数も平成18年12月現在、76次に至っている。

また、大分県教育委員会では中世大友城下町跡の発掘調査の刊行にあたっては、大分県土木建築部の「大分駅付近連続立体交差事業」、国土交通省の「一般国道10号古国府拡幅事業」など、委託先に関わらず、「豊後府内」を書名とし、副題に事業名を明記した。そして「豊後府内1」を「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う発掘調査「府内町跡5・8次調査」の成果として平成16年度に刊行した。「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う発掘調査の最初の報告書は「府内」の御内町にあたる「府内町跡9・13・21次調査」の調査成果を「豊後府内2」として平成16年度に刊行した。そして平成17年度の「一般国道10号古国府拡幅事業」に伴う発掘調査報告書は「豊後府内4」で、平成18年度の本報告書は、万寿寺跡の北西隅にあたる「府内町跡20次調査」の成果を「豊後府内7」として報告する。

3. 調査の体制

大友館跡

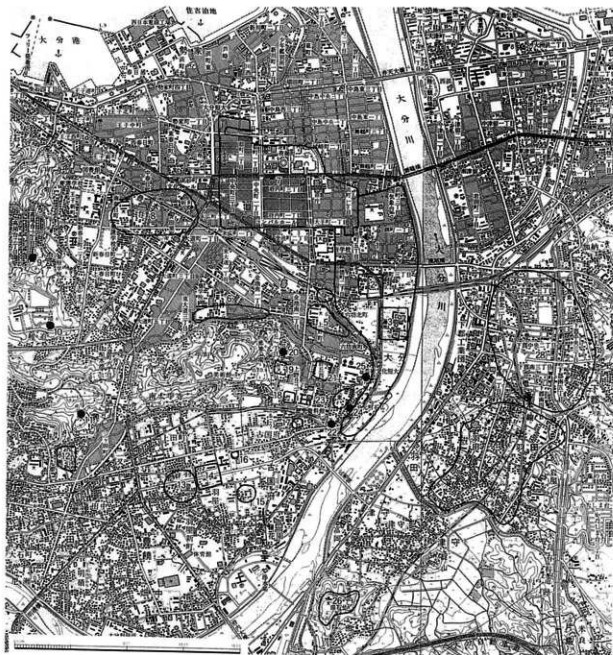
「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の西側に隣接して「大友館跡」が想定されており、この遺跡に対して平成11年度から国指定史跡のための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、土木事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとした。

本書に報告する府内町跡20次調査を実施した平成14年度の発掘調査は以下の体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

平成14年度

調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）
文化課長	岩男 康晴
参事兼課長補佐	麻生 祐治
参事兼課長補佐	清水 宗昭
受託事業担当主幹	坂本 嘉弘（府内町跡20次調査B区担当）
副主幹	友岡 信彦（府内町18次東区調査担当）

主査	山本 恭弘 (府内町跡20次調査B区担当)
主査	槇島 隆二 (府内町跡22次調査担当)
主査	後藤 晃一 (府内町跡21次・20次調査C区担当)
主事	恒賀健太郎 (府内町跡20次調査A区担当)
嘱託	加藤美成子
嘱託	阿比留史郎
嘱託	井上 素裕
嘱託	畔津 宏幸



第1-2図 大分平野の地形と主要遺跡

1. 中世大友城下町跡
2. 大友館跡
3. 万寿寺跡
4. 上野町・願徳寺遺跡
5. 若宮八幡遺跡
6. 東大道遺跡
7. 府内城・城下町
8. 東田堂遺跡
9. 龜甲山古墳
10. 古宮古墳
11. 千人塚古墳
12. 永興遺跡
13. 羽屋園遺跡
14. 金剛宝成寺跡
15. 石明遺跡
16. 町口遺跡
17. 岩屋寺遺跡
18. 円寿寺
19. 金剛宝成寺
20. 上野供寺
21. 大友上原館跡
22. 岩屋寺石仏
23. 魔王畑遺跡
24. 元町石仏
25. 大臣塚古墳
26. 守岡遺跡
27. 羽田遺跡
28. 下郡遺跡群

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古園に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

近世府内

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がりが確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を走り、北の別府湾方向に伸び、府内古園に描かれる舟入に続き、近世府内では、府内城の縄張りの外郭である東側の外堀に継承されている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。こうした土層の堆積状況は、大分川に近いほど厚く、中世大友城下町跡の井戸の調査では、大分川に近い「府内町跡8次調査」や「府内町跡17次調査」では、4m近くあるが、大分川から遠い、「府内町跡5次調査A区」や「府内町跡10次調査」では2mに満たない深さであった。

この沖積土の堆積時期は、下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8世紀頃の遺物が出土している。その間は無遺物層であり、おそらく短期間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

2. 歴史的環境

亀甲山古墳
大臣塚古墳

別府湾に近い大分川左岸地域の古墳時代には、4世紀代の前方後円墳で、三角縁神獣鏡を出土した亀甲山古墳が、この地域を見下ろす西側の丘陵上に築造される。5世紀代になると、大分川や右岸の下部地区を見下ろす上野丘陵の先端部に前方後円墳の大丘塚古墳が築造される。こうしたなか、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるようになるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳がある。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大海人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている¹⁾。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の鑑方をもつ大型掘立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている²⁾。

古宮古墳
壬申の乱
恵尺・稚臣

その後設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ掘立柱建物や築地塀跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている³⁾。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺

(1) 後藤宗復「古宮古墳考」『大分県地方史』117 大分県地方史研究会 1985年

(2) 坪根伸也・堀地潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ」『大分県地方史』163 大分県地方史研究会 1996年

(3) 高橋信武「大分県大分市上野遺跡群龍王畑遺跡」『日本考古学年報』50(1997年度版) 日本考古学協会 1999年

元町石仏 石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽根地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

こうした、古国府・上野丘陵の状況は、その周辺である大分川右岸でも確認され、下郡遺跡では、8・9世紀の大型建物跡や井戸跡などが検出されている。また、中世に「府中」・「府内」と呼ばれるようになる地域でも同様な遺構が認められる。すなわち、「府内町跡8次調査」では大型の掘立柱建物が発見されており、「府内町跡18次東調査」では井戸跡が確認されている。こうした遺構の広がり、この地域の広範囲に認められる。

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1059)、承保4年(1077)に「勝津留島四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」を強引に割譲する。このため「高国府」「勝津留島」については守護所の設置場所と関わる重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東限北廻り、二方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古園に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている¹⁾。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の新御成敗状



第1-3図 中世大友城下町遺跡と周辺の戦国時代遺跡

1. 中世大友城下町跡 2. 高崎城跡 3. 金谷治城跡 4. 賀来氏館跡 5. 肥ヶ城跡 6. 雄城城跡 7. 石明遺跡 8. 町口遺跡
9. 岩屋寺遺跡 10. 大友上原館 11. 東大道遺跡 12. 守岡城 13. 津守遺跡 14. 片島遺跡 15. 下郡遺跡 16. 千歳城跡
17. 猪野新土井遺跡 18. 猪野中原遺跡 19. 横尾遺跡 20. 沖ノ浜(推定)

(1) 鹿毛敏夫「戦国大名の外交と都市・流通—豊後大友氏と東アジア世界—」思文閣出版 2006年

で、都市の規範を示す条項が書かれている。このような文書資料では、13世紀代に豊後の中心地である府中が、都市として成立していた様子を示す¹⁾。

しかし、こうした状況は考古資料で証明できていないわけではない。「勝津留畠」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明遺跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、最初に豊後に南向した三代大友頼泰初期の守護館の指摘もある。

14世紀代になると、徳治元年（1306）に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

この時期の遺跡は、「府内」周辺でも多く確認されている。上野丘陵の南側の町口遺跡では地籍図に短冊形区割り認められ、発掘調査の結果、16世紀後半の町屋跡が確認されている²⁾。また、大分川の右岸にある下郡遺跡群の津守遺跡・片島遺跡・下郡遺跡でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されており、異様な居館は、さらに東の猪野新土井遺跡、猪野中原遺跡、横尾遺跡でも発掘調査されている。こうした遺跡からは、「府内」と同じように、中国南部や東南アジアからの貿易陶磁器が出土しており、規模の違いはあるものの、同じレベルの集落が存在していたことを示している。

さらに、防衛体制を見ると、「府内古図」の「府内」の南側にある上野丘陵に土塁と堀を廻らす上原館があり、その南側の大分川を渡った場所には、独立性の強い守岡丘陵があり、山城的存在である。このような城館は金谷迫城・雄城城・尼ヶ城・千歳城など数箇所が確認されている。そして、西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城、「高崎城」として知られている。

このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている³⁾。

(1) 玉永光洋「豊後府内の形成と寺院」『都市と宗教』中世都市研究4 中世都市研究会 1997年

(2) 讃岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査 大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から」『大分県地方史研究会 1985年

(3) 坪根伸也「守護大友氏と豊後府内(府中)の空間構造」『守護所・戦国城下町を考える』第12回東海考古学フォーラム岐阜大会 2004年

第3節 報告書作成にあたって

1. 府内古園と道路の名称

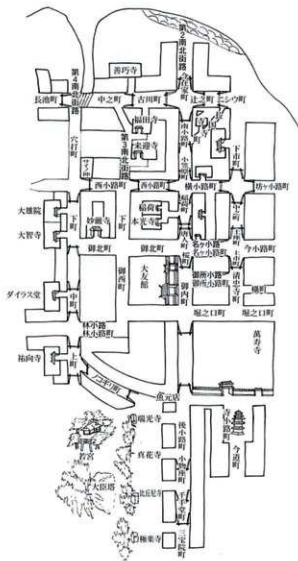
戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古園」は、3種類12枚が確認されている。「府内古園」は、その研究によると成立年代は寛永13年（1634）を遡らず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされている¹⁾。すなわち、A類には見られない「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」の名称もB・C類、大友館の東北部の「称名寺」の名称は、B類にのみ書き込まれている。

しかし、「府内古園」に描かれている、4本の南北の街路と5本の東西の街路名についてはいずれの「府内古園」にも記載されていない。このため、近年の研究では様々な仮称が冠されてきた。

そこで、報告書作成にあたり、こうした「府内古園」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じ、大分川側から「第1南北街路」・「第2南北街路」・「第3南北街路」・「第4南北街路」とした。「街路」の名称を選択したのは、ルイス＝フロイスの日本史の訳文で府内の

道路を「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用する。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町等の道路名を含む町名があるため、それらについては「御所小路」・「名ヶ小路」とした。

また、本書では、万寿寺の北側に堀之口町の名称が見られ、その間に「第2南北街路」と「第1南北街路」を繋ぐ東西方向の街路が描かれている。この街路は、「万寿寺北側街路」とする。



第1-4図 府内古園と街路名称の設定
(府内古園A類をトレースし一部改変)

(1) 木村幾多郎「府内古園の成立」『大分市歴史資料館年報1992年度版』大分市歴史資料館 1999年

第2章 中世大友府内町跡第20次調査A区

第1節 調査の経過と概要

1. 調査の経過

中世大友府内町跡第20次調査の調査区は「府内古図」の復元案上では万寿寺跡の西北隅にあたる。この場所の現状は、水田と畑地になっており、特に万寿寺の北側境と想定されている場所は東西方向に幅約10mの細長い水田があり、遺跡の東側を北流し、別府湾に注ぐ大分川へ続いている。この細長い水田は、周辺の水田や畑地よりも約0.5mから1m低く、現状の地形からも堀の存在が推測されている。

府内町跡第20次調査区はこの万寿寺北側境の堀と推測される部分から南に約100m、東西幅約21mの約2100㎡の範囲で、西側に南北に走る国道10号線に沿って設定した。しかし、中世大友城下町跡は遺構密度が高く、しかも文化層が複数枚にわたる。このため年間の発掘調査面積は約800㎡しか完了できなかった。そこで、この調査区を3分し、万寿寺北境の堀をC区、それから南に約700㎡をA区、その南の1400㎡をB区として発掘調査を実施した。

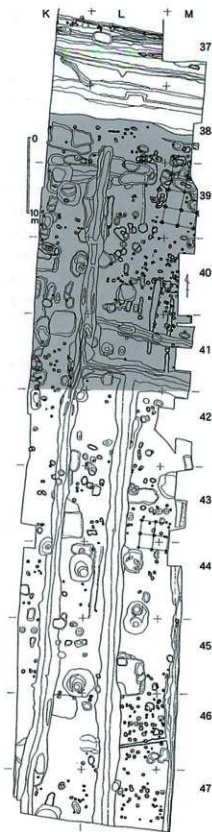
A区は重機で表土である水田耕作土を除去し、16世紀代に形成された整地土層を露出させた。この段階では、遺構は明確でなく、全面を20～30cm掘り下げた。その結果、14世紀から16世紀までの遺構がほぼ全面に分布することが判った。そこで、順次遺構の掘り下げをし、出土遺物の状況で時期の決定を行った。

2. 遺構の概要

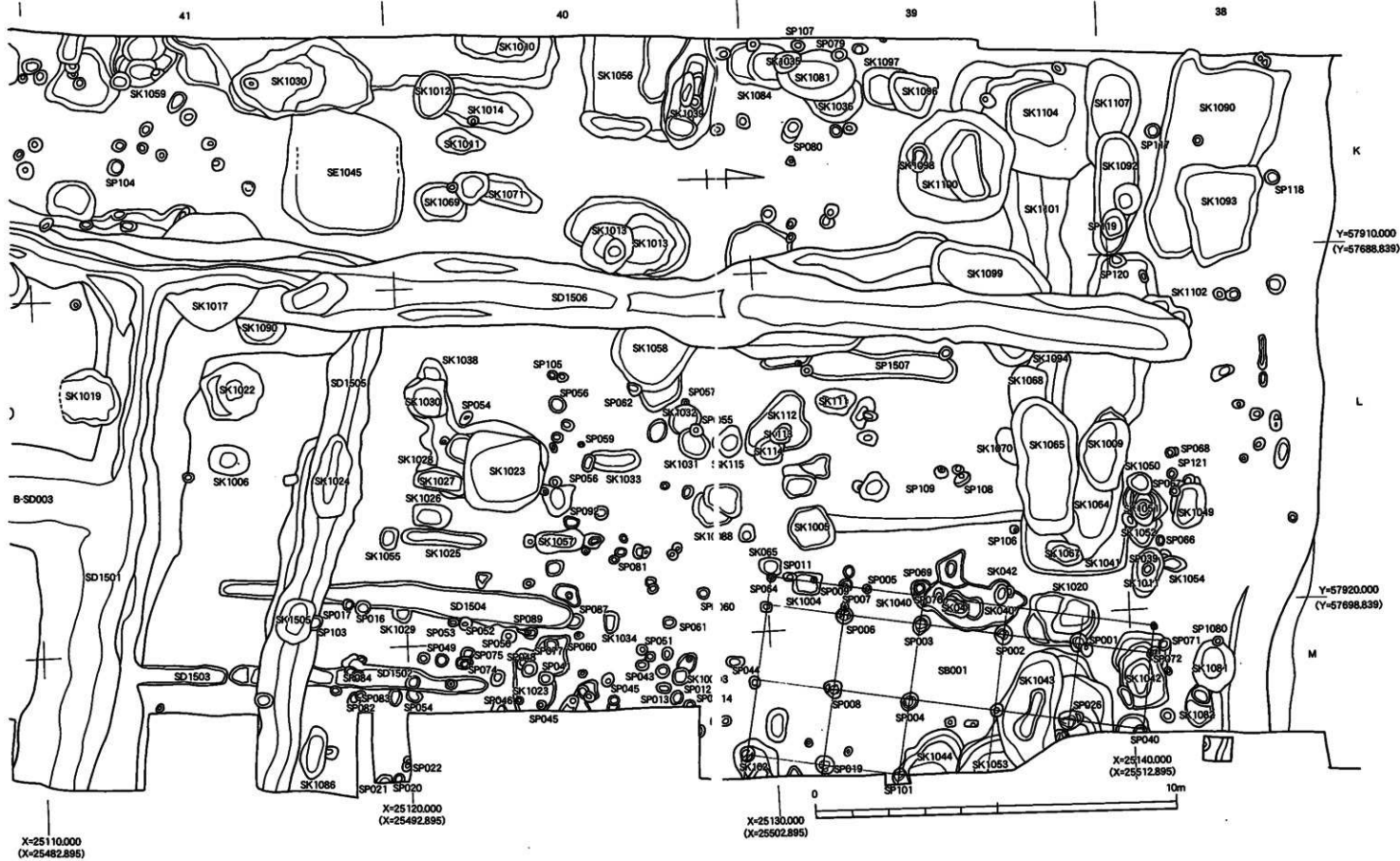
中世大友府内町跡第20次調査A区で検出された遺構の種類は、溝とその関連遺構、さまざまな形状・規模の多数の土坑、井戸1基、底に扁平な石を配した柱穴による礎盤建物が1棟、配置は不明であるが不規則に掘り込まれた多数の柱穴状遺構などがある。

溝は、8条を検出したが、南側のB区から延びるものは規模も大きく、万寿寺の区画や「府内」の町割りに係わる可能性が高い。時期も14～15世紀と16世紀が認められ、前者は万寿寺の創建時から最盛期にかけての遺構の可能性が高い。府内町跡第20次調査B区から北に延びてきたものが、東方向に直角に屈曲する。

土坑は16世紀代のもは規模が大きい傾向にある。万寿寺北側境の堀の近くで検出された礎盤建物の時期は、14世紀末から15世紀である。A地区で検出された井戸は16世紀後半の1基のみである。また多数検出された柱穴と土坑の区別は規模と形状で行ったが、本来は機能差であるが、それは区分できなかった。



第2-1図 府内町跡20次調査A区位置図



第2-2図 府内町跡20次調査A1 区道網配置図 ()内は世界測地系

第2-1表 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(1)

本報告での 遺構番号	調査時の 遺構番号	遺構の 性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載 頁
A-SB01	S-001	礎盤建物	M-39	11世紀中葉～後葉	底付き5間×2間以上の規模	41
	S-002	ピット	M-39			
	S-003	ピット	M-39			
A-SF004	S-004	ピット	M-39	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SF005	S-005	ピット	M-39	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SF006	S-006	ピット	L-39	11世紀中葉～後葉		
	S-007	ピット	L-39			
	S-008	ピット	L-39		SB01礎盤	
	S-009	ピット	L-39			
	S-010	ピット	L-39			
	S-011	ピット	L-39	11世紀代		
	S-012	ピット	M-40			
A-SP013	S-013	ピット	M-40	11世紀代		92
	S-014	ピット	M-40			
	S-016	ピット	L-41			
	S-017	ピット	L-41		古代	
	S-018			11世紀代		
A-SP019	S-019	ピット	M-39	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SP020	S-020	ピット	M-41	11世紀代		93
	S-021	ピット	M-41	11世紀代		
	S-022	ピット	M-41			
	S-023					
A-SP025	S-025	ピット	M-39	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	41
A-SP026	S-026	ピット	M-39	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	41
A-SP036	S-036			15世紀前葉		90
	S-039	ピット	L-38			
A-SK040	S-040	土塼	M-38	11世紀中葉～後葉	SB01礎盤	42
A-SK041	S-041	土塼	L-39			41
A-SP042	S-042	ピット	L-39	11世紀後半～13世紀前葉		45
A-SP043	S-043	ピット	M-40	11世紀代		90
A-SP044	S-044	ピット	M-40			41
A-SP045	S-045	ピット	M-40	11世紀代		90
	S-048	ピット	M-40			
A-SP048	S-047	ピット	M-40	11世紀代		
	S-048	ピット	M-40	11世紀代		93
	S-049	ピット	M-40			
	S-050	ピット	M・L-40			
	S-051	ピット	M-40			
A-SP052	S-052	ピット	L-40	15世紀後半～16世紀	銅銭	45
	S-053	ピット	L-40			
	S-054	ピット	M-41			
	S-055	ピット	L-40			
A-SP056	S-056	ピット	L-40	14世紀代		93
	S-057	ピット	L-40			
	S-058	ピット	L-40			
	S-059	ピット	L-40			
A-SP060	S-060	ピット	L-40	14世紀代		93
	S-061	ピット	L-40	14世紀代		
	S-062	ピット	L-40			
	S-063	ピット	L-39			
A-SP064	S-064	ピット	L-39	14世紀代		93
A-SP065	S-065	ピット	L-39	14世紀代		93
	S-066	ピット	L-38			
	S-067	ピット	L-38			
	S-068	ピット	L-38			
	S-069	ピット	L-39	14世紀～15世紀前半		45
	S-070	ピット	L-39	14世紀～15世紀前半		45
A-SP070	S-071	ピット	M-38			
	S-072	ピット	M-38		SB01礎石	
	S-073			11世紀代		
	S-074	ピット	M-40			
A-SP075	S-075	ピット	M-40	11世紀代		93
	S-076	ピット	M-40			
	S-077	ピット	M-40			
A-SP077	S-078			11世紀代		90
A-SP078	S-078			11世紀代		93
A-SP079	S-079	ピット	K-39	11世紀代		93
	S-080	ピット	K-39	16世紀代		
A-SP081	S-081	ピット	L-40		瓦片	90
A-SP082	S-082	ピット	M-41			90
A-SP083	S-083	ピット	M-41	11世紀代		90
	S-084	ピット	M-41	11世紀代		

第1節 調査の経過と概要

表2-2 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(2)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
A-SP085	S-085	ピット	M-10	14世紀代		90
A-SP086	S-086			14世紀代		93
	S-087	ピット	L-40	14世紀代		
	S-088	ピット	L-40		古代	
	S-089	ピット	L-40			
A-SP090	S-090			14世紀代		93
A-SP091	S-091			14世紀代		93
	S-092	ピット	L-40			
A-SP101	S-101	ピット	M-39	14世紀代	SB01礎盤	43
A-SK102	S-102	土坑	M-40	14世紀後半?		47
A-SP103	S-103	ピット	L-41	14世紀代		90
A-SP104	S-104	ピット	K-41			92
	S-105	ピット	L-40	14世紀代		
A-SP106	S-106	ピット	L-39	14世紀代		92
A-SP107	S-107	ピット	K-39	14世紀代		93
A-SP108	S-108	ピット	L-39			93
	S-109	ピット	L-39			
	S-110	ピット	L-39	14世紀代		
	S-111	ピット	L-39	14世紀代		
A-SK112	S-112	土坑	L-39	14世紀後半		47
A-SP113	S-113	ピット	L-39	14世紀末～15世紀前半		47
A-SP114	S-114	ピット	L-39	16世紀後葉～末葉		47
	S-115	ピット	L-40	14世紀代		
	S-116	ピット	L-38	14世紀代		
A-SP117	S-117	ピット	K-38	16世紀後葉～末葉		92
A-SP118	S-118	ピット	K-38	14世紀代		93
A-SP119	S-119	ピット	K-38	16世紀後葉～末葉	木屑糞	93
A-SP120	S-120	ピット	L-38	14世紀代		
A-SP121	S-121	ピット	L-38	14世紀代		93
A-SP122	S-122	ピット	K-38			
A-SP123	S-123	ピット	K-41	14世紀代		93
	S-124	ピット	K-41			
A-SP125	S-125	ピット	K-41	16世紀後葉～末葉		93
A-SP126	S-126	ピット	L-38	14世紀代		93
A-SP131	S-131			14世紀代		93
A-SP132	S-132			14世紀代		93
A-SP163	S-163			14世紀代		93
A-SK1001	S-1001	土坑	L-38	14世紀代		84
	S-1002	土坑	L-38			
	S-1003	土坑	M-40			
	S-1004	土坑	L-39	14世紀代		
A-SK1005	S-1005	土坑	L-39	16世紀後葉～末葉		84
A-SK1006	S-1006	土坑	L-41		備前	
A-SK1009	S-1009	土坑	L-38・39		砥石	84
A-SK1010	S-1010	土坑	K-40	16世紀後葉～末葉		48
	S-1011	土坑	K-40	16世紀代?		
A-SK1012	S-1012	土坑	K-40			49
A-SK1013	S-1013	土坑	K-40	16世紀後葉～末葉	銅銭	49
A-SK1014	S-1014	土坑	K-40	16世紀後葉～末葉	ヒスイ玉	52
A-SK1017	S-1017	土坑	K・L-41	16世紀後葉～末葉	石列	52
A-SK1018	S-1018	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	増埴・土玉	54
A-SK1019	S-1019	土坑	L-41	16世紀後葉～末葉	銅銭	55
A-SK1020	S-1020	土坑	L・M-39	14世紀?		84
	S-1021			14世紀代		
A-SK1022	S-1022	土坑	L-41			84
A-SK1023	S-1023	土坑	L-40	14世紀代	「ひねり土」銘の備前系大甕	56
A-SK1024	S-1024	土坑	L-41	14世紀後半	S/D1505に切られる	27
A-SK1025	S-1025	土坑	L-40	14世紀		84
A-SK1026	S-1026	土坑	L-40			57
	S-1027	土坑	L-40	14世紀代	炭が塊で残存	
	S-1028	土坑	L-40	14世紀代		
A-SP1029	S-1029	ピット	L-40・41	14世紀代		94
A-SK1030	S-1030	土坑	L-40	16世紀後葉～末葉		58
A-SP1031	S-1031	ピット	L-40	14世紀代		94
	S-1032	土坑	L-40			
	S-1033	土坑	L-40			
	S-1034	土坑	L-40	14世紀代		
A-SK1035	S-1035	土坑	K-39		銅銭2点	59
A-SK1036	S-1036	土坑	K-39	16世紀後半?		59
A-SK1037	S-1037	土坑	L-40		円形土器片加工品	84

表2-3 中世大友府内町跡第20次調査A区遺構一覧表(3)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
	S-1038	土坑	L-40			
A-SK1039	S-1039	土坑	K-40	16世紀後葉	集石・タイ産四耳壺	59
A-SK1040	S-1040	土坑	L・M-39	14世紀後半～15世紀前葉		41
A-SK1041	S-1041	土坑	L-38・39	16世紀後葉～末葉		81
A-SK1042	S-1042	土坑	M-38	14世紀前葉～中葉		60
A-SK1043	S-1043	土坑	M-39	14世紀中葉～後葉		62
A-SK1044	S-1044	土坑	M-39	14世紀代	S-101を切る	84
A-SE1045	S-1045	井戸	K-40・41	16世紀後葉～末葉		86
A-SK1047	S-1047			16世紀後葉～末葉		84
A-SK1049	S-1049	土坑	L-38	14世紀後半～15世紀前葉		84
A-SP1050	S-1050	ピット	L-38			63
A-SK1051	S-1051	土坑	L-38	14世紀後半		63
A-SK1052	S-1052	土坑	L-38			63
A-SK1053	S-1053	土坑	M-39	14世紀代		84
A-SP1054	S-1054	ピット	L-38	14世紀代		94
A-SK1055	S-1055	ピット	L-41	14世紀代		95
A-SK1056	S-1056	土坑	K-40	16世紀後葉～末葉	集石	64
	S-1057	土坑	L-40			
A-SK1058	S-1058	土坑	L-40	14世紀後半	燗台	65
A-SK1059	S-1059	土坑	K-41	14世紀中葉～後葉		66
A-SK1060	S-1060	土坑				84
A-SK1061	S-1061	土坑		16世紀後葉～末葉		84
A-SK1062	S-1062			14世紀代		84
A-SK1063	S-1063			14世紀中葉～後葉		84
A-SK1064	S-1064	土坑	L-38・39	14世紀後半～15世紀前葉		84
A-SK1065	S-1065	土坑	L-39		火鉢 古代の土器	66 84
A-SK1066	S-1066					84
	S-1067	ピット	L-39			
A-SK1068	S-1068	土坑	L-39	16世紀後葉～末葉	天目茶碗・石臼	67
A-SK1069	S-1069	土坑	K-40	14世紀末～15世紀前葉		67
A-SK1070	S-1070	土坑	L-39		集石	68
A-SK1071	S-1071	土坑	K-40	14世紀代		84
	S-1072					
A-SK1073	S-1073			14世紀代		94
	S-1079					
A-SE1080	S-1080	ピット	M-38	14世紀末～15世紀前葉		95
A-SK1081	S-1081	土坑	M-38	14世紀代	常滑系甕	68
A-SK1082	S-1082	土坑	M-38	14後半		68
A-SK1083	S-1083	土坑	L-41	14世紀中葉～後葉		69
A-SK1084	S-1084	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	澤州系青花2点・馬輪陶器の壺	69
	S-1085			16世紀代		
A-SK1086	S-1086	土坑	M-41	14世紀末～15世紀前葉		94
	S-1087	土坑	L-39	14世紀代		
	S-1088	土坑	L-40	14世紀代		
A-SK1089	S-1089	土坑	M-41	14世紀中葉～後葉		71
	S-1090	土坑	L-41	16世紀末葉	S-1017・1506に切られる	
A-SK1091	S-1091	土坑	K・L-38	16世紀後葉～末葉	青銅製品・焼土	71
A-SK1092	S-1092	土坑	K-38・39	16世紀後葉～末葉	焼土	73
A-SK1093	S-1093	土坑	K・L-38	16世紀後葉～末葉	焼土・六角青花壺	74
A-SK1094	S-1094	土坑	L-39	16世紀後葉～末葉		74
A-SK1095	S-1095			16世紀代		94
A-SK1096	S-1096	土坑	K-39			75
A-SK1097	S-1097	土坑	K-39	14世紀後半～15世紀前葉		75
A-SK1098	S-1098	土坑	K-39	16世紀代		94
A-SK1099	S-1099	土坑	K・L-39	16世紀後葉～末葉	S-1506を切る	75
A-SK1100	S-1100	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉		78
A-SK1101	S-1101	土坑	K・L-39	15世紀後葉以前	燗前・銅銭	79
A-SK1102	S-1102	土坑	L-38	16世紀末葉	S-1506に切られる	94
A-SK1103	S-1103			16世紀代		94
A-SK1104	S-1104	土坑	K-39	15世紀末葉～16世紀前葉	末葉銭	81
A-SK1105	S-1105	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	焼土	83
A-SK1106	S-1106	土坑	K-39	16世紀後葉～末葉	銅銭	83
A-SK1107	S-1107	土坑	K-38・39	16世紀末葉		83
	S-1108	土坑	L-38	14世紀代		
A-S D1501	S-1501	溝	L・M-41	14世紀末葉～15世紀前葉	B区のB-003とつながる A-SD1506から東に分岐	16
	S-1502	溝	M-10・41	16世紀後半		23
A-S D1503	S-1503	溝	M-41	16世紀後半		23
A-S D1504	S-1504	溝	L-40・41	16世紀後半		23
A-S D1505	S-1505	溝	L・M-41	14世紀中葉～後葉		25
A-S K1505	S-1505	土坑	L-41	14世紀末葉～15世紀前葉	掘鉢内から銅銭3枚	25
A-S D1506	S-1506	溝	K-39～H・L-38～H	16世紀後葉～末葉	B区のB-064と同じ	33
	S-1507	土坑	L-39			
	S-1512			14世紀代		
A-SP1606	S-1606			16世紀後葉～末葉		94

第2節 遺構と遺物

1. 溝及び関連遺構

府内町跡20次調査A区では、規模や形状に差はあるが、6条を溝として考えた。これらの溝は、基本的には南北方向に構築され、一部はほぼ直角に東方向に屈曲する。このうち、A-SD1501・A-SD1505・A-SD1506は、規模も大きく、検出された位置が、万寿寺跡の西北隅の寺域内であることから、その構造にかかわるものと推測する。これ以外は、細く、浅い溝であり、中には10mに満たないものもある。時期は、14世紀前半から16世紀後半である。

A-SD1501 (第2-3図)

A-SD1501は、A区の南端で東西方向に約14mを検出した。方向はW-9°-Nである。この溝の規模と形態は、上面の幅が約3m、底面の幅は約0.7m、深さ約1.2mで、断面が逆台形をしている。底部は、西から東に緩やかに傾斜し、その高低差は約20cmである。また、この遺構は、南側のB区のB-SD003やB-SD064 (A-SD1500)の時期の異なるふたつの溝と交わり、複雑な状況を見せる。土層断面ではこのことを反映し、掘り直しの跡が観察できた。第2-3図によると、規模と形状は、上面の幅が約1.8m、底面の幅約1m、深さ約60cmで、断面の形状はU字状を呈し、最初に掘られた溝よりも約60cm浅い。底面の傾斜は出土遺物の時期から想定すると、西に傾斜し、A-SD1506と合流する。

この遺構から出土する遺物は上層と下層で様相を異にする。代表的な遺物は、第2-4~2-10図に99点を図示した。第2-4図1~12と第2-6図44・48、第2-7図67・68・70・73は上層出土の遺物である。第2-6図44は暗緑色の釉の上に刷毛で白色釉を塗った、朝鮮王朝系粉青沙器の可能性が高い。第2-4図1と第2-6図48は備前系陶器であるが、1は徳利の底部で、48は小型の鉢である。2・3は底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在地系土師質土器の坏である。4~6・66・67・69・72は京都系土師器で、7は内面に刷毛目調整のある瓦質の鉢である。8は口縁部の周辺に突帯を運らす鈿付の土鍋である。9は口縁部の形態や硬く焼成されていることから東播系須恵質土器の鉢と考えられる。10は口径約33cmの土師質土器の大型の鉢である。11は大型の瓦質土器の底部で、火鉢であろうか。12は、弥生土器の変形土器の底部で、混入品である。12・13は、紡錘形の土鍾である。

一方、下層出土の遺物は、第2-5図に図示したものが主要なものである。15~27は底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在地系土師質土器である。これらの中には、15~17の皿とそれ以外の坏が認められる。さらに、25は底部がやや小さく口縁部が内湾する、塊状の形態を呈する。28は口縁部に自然釉が付いた東播系須恵質土器の鉢であり、30も須恵質土器でその底部の可能性が高い。29は内面に刷毛目、外面は指圧痕のある土鍋である。31も須恵質土器の底部であるが、器壁は厚く備前系陶器の摺鉢の可能性が考えられる。32~34は同じ器種の資料である。ロクロ成形の在地系土師質土器の皿に脚を付けたもので、燭台と考えられる。35はフイゴの羽口の資料で、空気孔の径は2.5cmである。36は扁平な土製品で、37は紡錘形の土鍾の完形品で、7.2gである。38は小型の砥石である。

このように、発掘調査の途中で上層と下層で遺物の様相が異なることに気づき、分層して遺物を取り上げたが、それ以前の多くの遺物は一括した。その遺物は第2-6~2-10図に図示した。第2-6図30~41・43・45~47は貿易陶磁器である。39は龍泉窯系青磁碗である。40は青白磁で合子の蓋である。41も青白磁の小型の壺である。43は景徳鎮窯系青花碗で、45は中国産の褐輪陶器の底部である。46は磁電窯系の大鉢の口縁部の破片で、47は華南三彩の魚形水滴の小破片である。

42は国産陶器で、瀬戸美濃産の天目碗である。49~51と第2-8図86は備前系陶器で、49は小型、52は大型の徳利形で、52の底部には×印の記号が描かれている。また、50・51は摺鉢であるが、

粉青沙器

備前系

土鍋

東播系

土鍾

燭台・フイゴ

土鍾

龍泉窯系

景徳鎮窯系

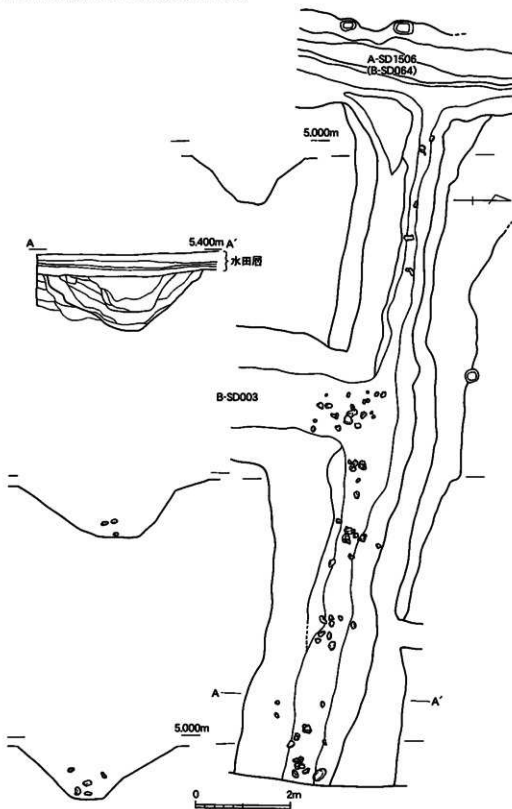
華南三彩

瀬戸美濃系

備前系

50は7本の櫛歯で、口縁部に直角に摺り目を入れた14世紀末、51は10本の摺り目を口縁部に対し斜めに摺り目を入れた、16世紀後葉と考える。86は底部径17.2cmの大甕の底部である。

53・55は内面に刷毛目があり、外面は指圧痕のある瓦質の鉢である。55は口縁部周辺が幅広く肥厚する。54は口縁部が屈曲する土鍋の資料である。



第2-3図 A-SD1501実測図 (1/80)

第2-7図56~66はロクロ成形による在地系土師質土器である。器種は56の皿とそれ以外の坏で構成されるが、坏には61・63のように、他に比べると底部の直径が、口縁部径に対し小さく、口縁部が内湾気味に立ち上がる塊状のものも存在する。また、口縁部断面の形態は、58は底部近くが厚く、口縁部が尖るように成形しているのに対し、59・62・65は底部近くの器壁は薄く、中位で厚くなる成形をしている。また、62・65の底部には板目圧痕が残る。

67~79は非ロクロ成形による京都系土師器である。計測できる法量は69が8.4cm、70・71が約10cmで、72・74・76・79は12cm強、73・75・77は14cm前後である。なお、78は他の京都系土師器に比べると、器高が高く、約3cmで、坏形をしている。

80は口縁部が外反する甕で、胴部は内外面とも刷毛目で器面調整している。胎土は硬織で、焼成は瓦質である。

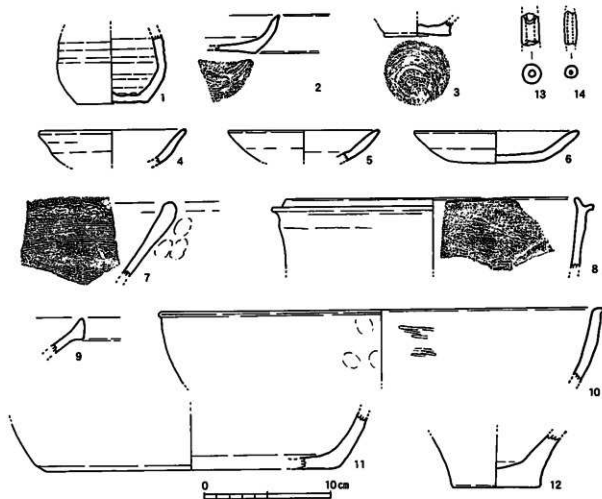
東播系

81・83・85は東播系須恵質土器の鉢である。81・83は口縁部の資料で、81には注口部が認められ、自然軸が付着している。83は口径27.5cmで底部近くまで残る。85はその底部であり、これらの器面は横でで仕上げられている。

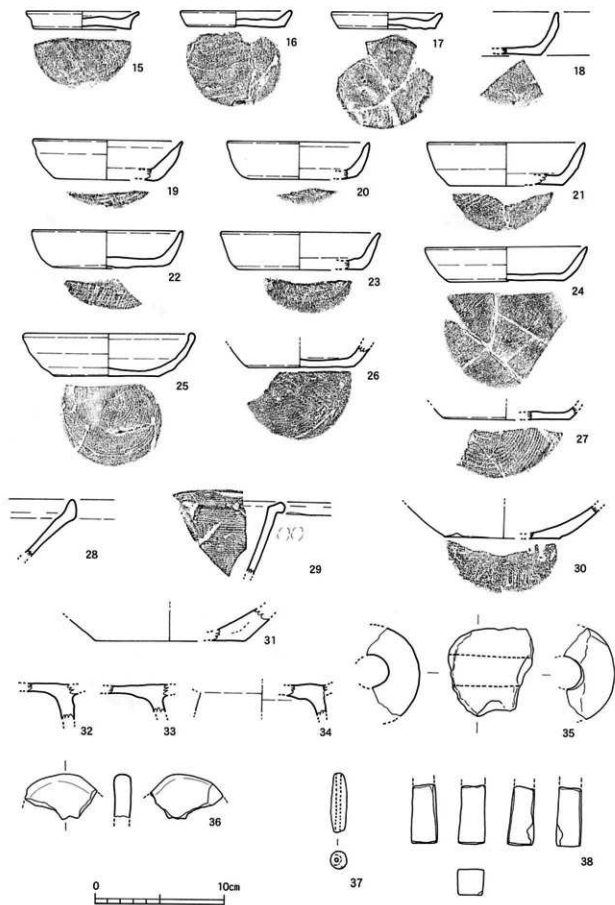
防長系桶鉢

82は、口縁部内面がカマボコ状に肥厚した瓦質の桶鉢である。掘り目は8条の櫛歯状工具で、口縁部に直角に施文されている。いわゆる防長系桶鉢である。

87は胴部のふくらみがなく、口縁部が外反する甕形土器である。口縁部周辺は横進で、胴部外面は縦方向の刷毛目調整である。88は尖る端部を内側に巻いた約4cmの資料で、甕形土器の把手と考える。



第2-4図 A-SD1501上層出土遺物実測図



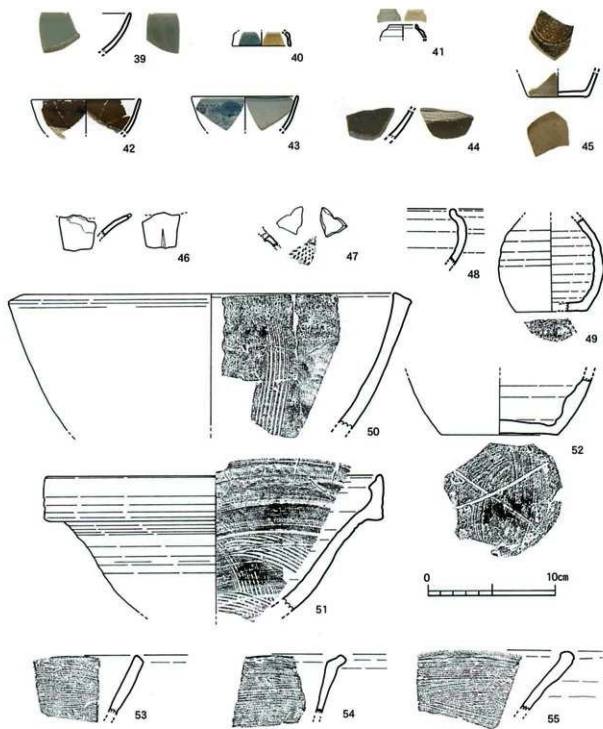
第2-5図 A-SD1501下層出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

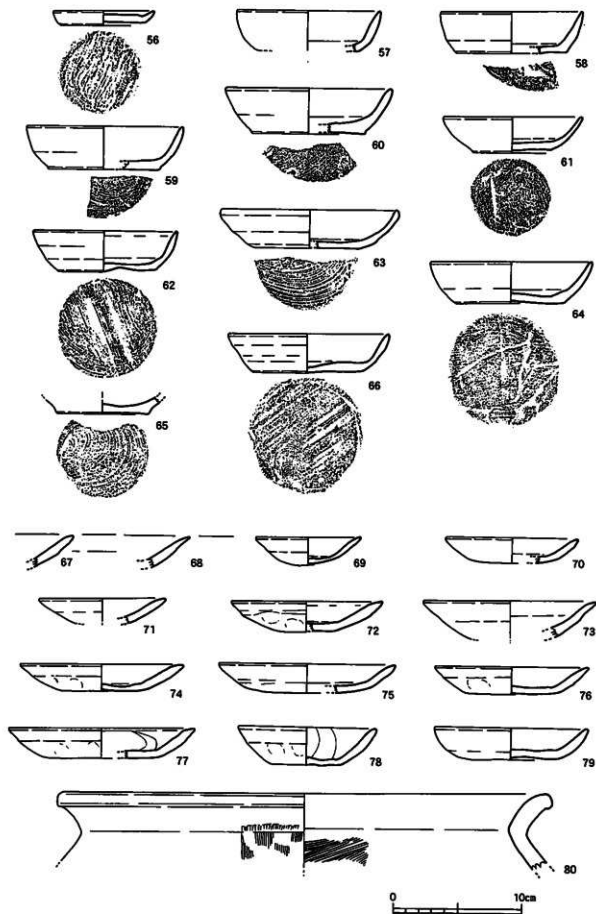
89は、ロクロ仕上げの高台付の壺形土器である。焼成は須恵質で、灰白色を呈しており、古い備前系陶器の可能性もあるが、区別は困難である。87～89は古代の遺物と考える。

古墳時代 90は高坏の脚部で、91は壺形土器、92は甕形土器の底部である。90は古墳時代前期、91は弥生時代後期、92は弥生時代中期のものとする。

銅銭 第2～9図は出土した銅銭である。93・96は篆書体で書かれた「元祐通寶」で、初鑄は1086年(北宋)である。96は一部を破損している。94は真書体の「天聖元寶」で初鑄は1023年(北宋)である。95は篆書体の「紹聖元寶」で初鑄は1094年(北宋)である。95・96は上層からの出土である。



第2-6図 A-SD1501出土遺物実測図(1)

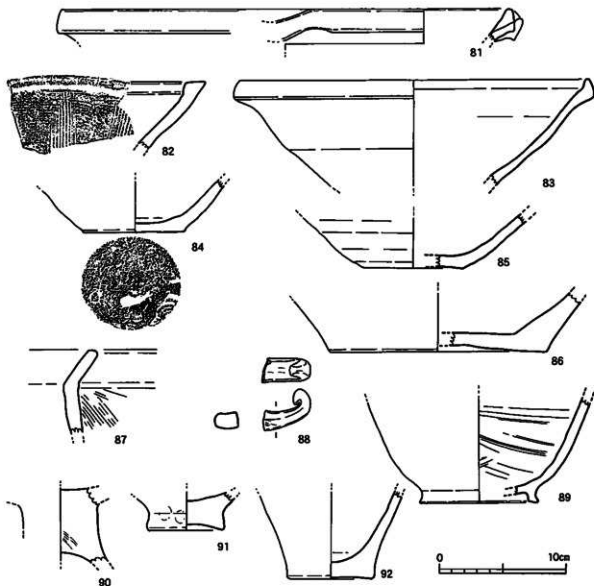


第2-7图 A-SD1501出土遺物実測図(2)

軒平瓦 97～99は平瓦である。97は軒平瓦で、文様の中心飾りが残されており、左右に唐草文が展開していることが判る。98・99は平瓦の幅が判る資料である。98の幅は28.5cm、99はやや狭く21.3cmである。また、瓦の反りも98と比較すると99は平坦である。

以上がこの溝から出土した遺物であるが、土器の様相と土層断面の観察から、2時期が存在すると考える。ひとつは上層出土土器に見られるように16世紀後葉から末葉の京都系土師器を含む時期である。一括して遺物を取り上げた中にも、67～79に見られるように京都系土師器が一定量存在する。また、備前系陶器の摺鉢である51も16世紀後葉から末葉と編年されている。

もうひとつの時期は、下層出土土器に代表されるように、ロクロ成形による在地区土師質土器である。この土器も一括して遺物を取り上げた中に50～66に図示したように、多く出土しており、備前系陶器の摺鉢である50や東播系須恵質土器の鉢などの同時期と想定される。これらの遺物からこの時期は、14世紀末から15世紀前葉と考えられる。そこで、このA-SD1501との掘削時期とA-SD1506・B-SD003の関係を推測すると、14世紀末から15世紀前葉にB-SD003が南北方向に存在し、L-41区で東に直角に屈曲する。その後、この溝は埋め立てられ、16世紀後葉から末葉にA-



第2-8図 A-SD1501出土遺物実測図(3)

SD1506が南北方向に掘削される。その際に、この溝は、深さも幅もほぼ半分のみ掘り返されたと推測できる。

A-SD1502 (第2-2図)

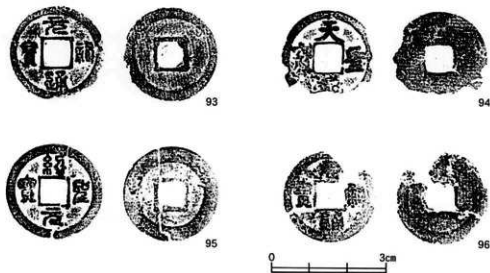
A-SD1502はほぼ南北方向に約7m検出された溝状遺構である。規模は、幅約50cmで、深さは約20cmである。床面はほぼ平坦であるが、半分より南側はさらに約10cm程度掘り下げられている。遺物は土器の小破片が出土したが、その一部を第2-122図12・13に図示した。12は京都系土師器の小皿で、口縁部内面にススが付着しており、灯明皿として使用している。また、13は紡錘形の土錘である。12の京都系土師器から、この遺構の時期は、16世紀後半と考えられる。このことは、遺構の南部分が、A-SD1505と切り合い、その前後関係は、このA-SD1502が新しいことと矛盾しない。さらに、溝の方位も、北から東に約4度振り、16世紀後半の街路を中心とした町割りの方位と同じであり、このことから、同時期の遺構の可能性が高い。

灯明皿
土錘

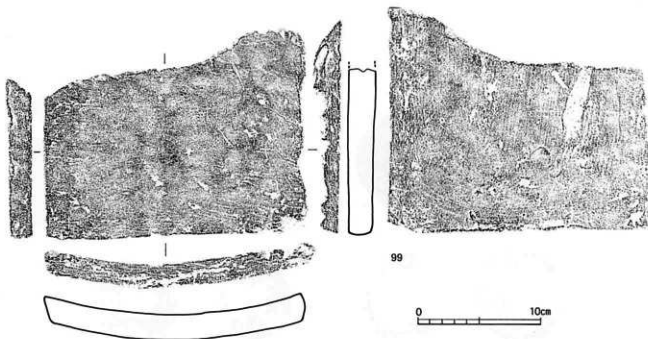
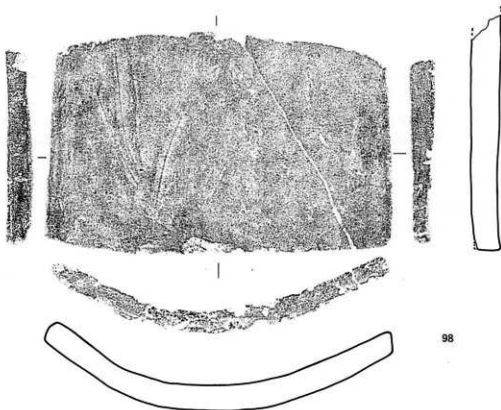
A-SD1503 (第2-2図)

A-SD1503はA-SD1502のすぐ南側に接続するよう同じ方向性をもって検出された。本来は同じ遺構の可能性が高い。幅も約50cmで、深さも約20cmを測り、床面は平坦である。

遺物は小破片が少数出土したが、時期を明確に判断できない。しかし、A-SD1503と関連性の強い遺構であるならば、16世紀後半の可能性が高い。



第2-9図 A-SD1501出土銭実測図



第2-10図 A-SD1501出土遺物実測図

A-SD1504 (第2-11図)

A-SD1504は、主軸をほぼ南北方向に取る長さ9.7mで、幅は北がやや広く80cm、南が40cmである。深さは約20cmで、床面は平坦である。

遺物はロクロ成形による在地系土師質土器が7点と備前系陶器3点の小破片が出土したが第2-122 図14に1点のみ図示した。この土器は、14・15世紀の、底部に糸切り痕のあるロクロ成形の在地系の土師質土器の坏である。しかし、A-SD1505との切り合い関係は、このA-SD1504が新しく、遺構の方向性は、東側に約2m離れた位置で検出されたA-SD1502・A-SD1503と平行しており、両者との関連が強い可能性がある。そうすると、この遺構も、16世紀後半の可能性が強いと考える。

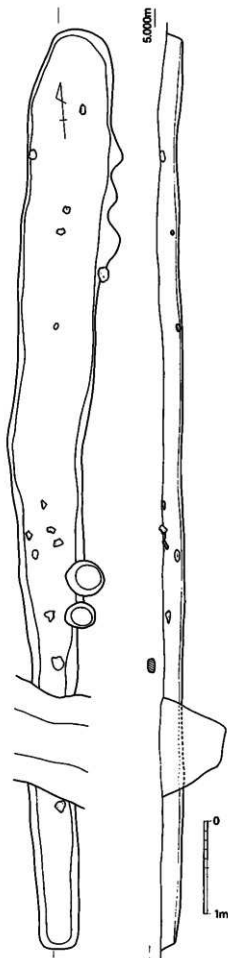
A-SD1505 (第2-12図)

A-SD1505は、A区の南で東西方向に約12mを検出した。方向は $W-10^{\circ}-N$ である。この溝の規模と形態は、上面の幅が約1.5m、底面の幅は約0.5m、深さ約0.5mで、断面が逆台形をしている。底部は、西から東に緩やかに傾斜し、その高低差は約20cmである。この溝には2ヶ所に土坑が掘り込まれているが、調査の最終段階にその存在が判明したため、遺構名を西側の細長い土坑をA-SK1024とし、東側の隅丸方形を溝と同じA-SK1505とした。こうした遺構は、溝との関連が深いと考え、報告はこの項で行う。

A-SK1505 (第2-13図)

確認されたA-SK1505の規模は、短軸約0.9m、長軸約1.3mで、平坦な床面は、短軸約0.4m、長軸約0.7mの緩い隅丸の長方形を呈する。床面は溝であるA-SD1505の床面より約15cm深い。その前後関係は、遺物の出土状況から見ると、土坑の方が新しい。

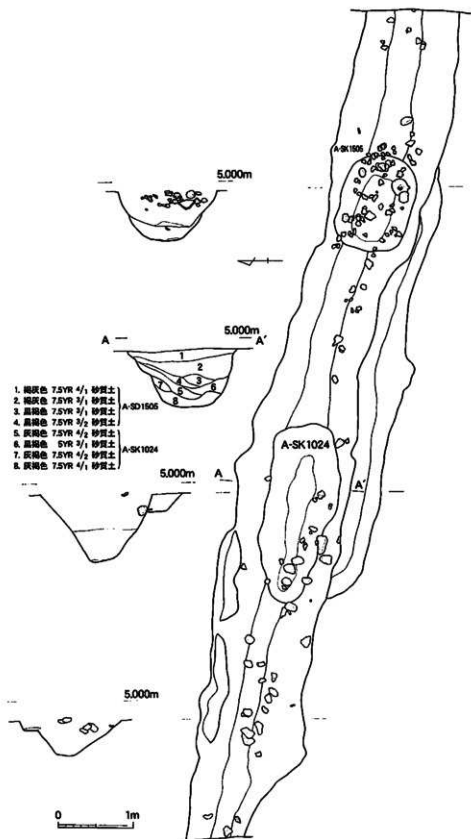
遺物の出土状況としては、溝全体から見ても、この土坑周辺からロクロ成形の在地系土師器の坏が集中して出土している。特に、鉢の内面底部に3枚の銅銭が置かれた状態で出土しているが、これらは全て土坑が埋まって行く段階に埋納、あるいは廃棄されたものと考えられる。



第2-11図 A-SD1504実測図

第2節 遺構と遺物

遺物はA-SD1505全体からの出土として第2-15~2-19図に73点を図示したが、A-SK1505とその周辺から出土したものは、2・5・8・10・12~15・17~30・33・34・37・43・47~50・54と



第2-12図 A-SD・SK1505実測図

銅銭の69～71である。2～5・8～10はロクロ成形による在地系土師器の皿である。いずれも口径は約8cmで、口縁部の立ち上がりは小さく、特に8～10は、底部の器壁が厚く、その特徴が明確である。

この皿とセットになるのが12～15・17～30・33・34・37・43のロクロ成形による在地系土師器の坏である。特に第2-15図12～15・17～29・第2-16図30の口径は10.5cm～13.2cmであるが、12cm前後が中心である。器高は3.4cm～4.4cmを測るが、4cm前後のものが目立つ。口縁部の形成は、底部から外傾して立ち上がり、端部は外反気味になり尖る特徴を持つ。

54は口径21cm、底径8.7cm、器高8.5cmで、注口部を持つ鉢である。口縁部は外面が肥厚し断面が三角形を呈する。器面調整は、外面が横撫で、指圧痕が残るが、内面は横方向の刷毛目が観察できる。胎土には斜長石・角閃石・石英が含まれ、色調は灰色や暗灰色をしており、焼成の甘い須恵質である。この完形品の資料は銅銭3枚を入れ、底部を下にし、埋置した状態で検出された。

56は口縁部が屈曲する土鍋の破片である。61は内外面とも刷毛目調整の後、撫で仕上げで外面には指圧痕が残される。口縁部断面は三角形で、色調は淡灰褐色を呈するが瓦質の土鍋と考える。

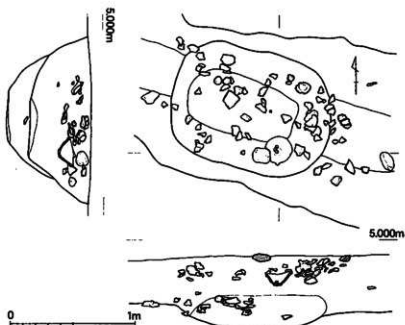
54の内底部に貼り付いた状態で出土した銅銭は69～71であるが、69・70は篆書体で書かれた「政和通寶」で初鋳は1111年（北宋）である。71は篆書体で書かれた「宣和通寶」で初鋳は1119年（北宋）である。

A-SK1024（第2-14図）

A-SK1024はA-SD1505に沿って細長く検出された土坑である。確認された土坑の規模は、上面の長軸が約2.4m、短軸が約0.9m、平坦な底面は長軸約1.8m、短軸約0.2～0.3mで、A-SD1505の底面より約30cm深く掘り込まれている。溝の底面を精査中にこの土坑を検出したため、両者の前後関係は明確ではない。

この遺構の上面や周辺から出土した遺物は、第2-15図1、第2-16図40・41・44・45がある。1のロクロ成形による在地系土師質土器の皿は、口径7.8cmで、底部から口縁部の立ち上がりは器壁がほぼ均一である。

在地系土師質土器の坏の40は口径が13cmであるが、底径は8.1cmで口縁部が内湾気味に立ち上がる。41は口径12cm、底径7.8cmで、側面観が逆台形状である。44は口径12.3cm、底径8.4cmで、口縁部断面を見ると、底部からの立ち上がり部より、上位の器壁が厚く、三角形になる。45は口径12cm、底径7.7cmで、底部からほぼ均一の厚さで、口縁部が立ち上がる。



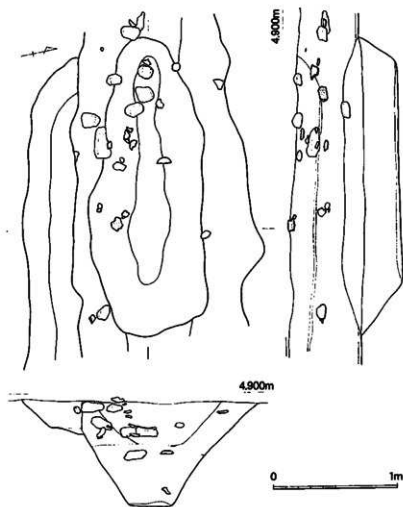
第2-13図 A-SK1505出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

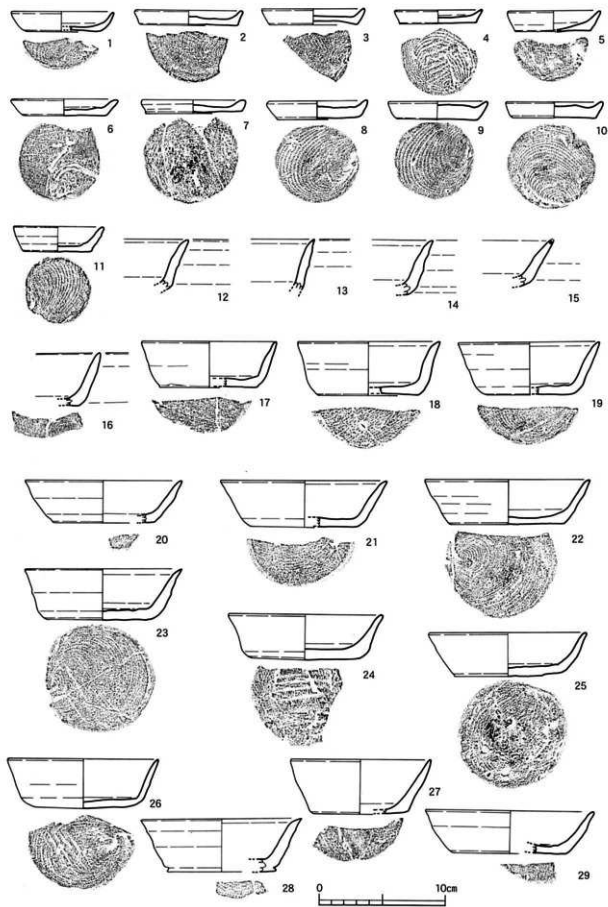
以上がA-SD1505と重複する二つの土坑とそれに関連する出土遺物であるが、これ以外を、溝出土の遺物とし、その報告を行う。ロクロ成形による在地系土師質土器の皿は6で口径8.1cmであり、底部から口縁部にかけてほぼ同じ厚さの器壁で立ち上がる。坏は16・31・32・35・36・39・42である。16はA-SK1505出土と同類であり、この遺構に伴う遺物の可能性が強い。31は口径10.8cm、底径8.7cm、器高3.6cmで、口縁部の器壁は中位で若干厚くなる。32は口径12.6cm、底径8.8cm、器高3.4cmで31と同様、底部から立ち上がった口縁部の中位が厚くなる。35は、口径12cm、底径8.2cm、器高3.6cmで、口縁部内側にスズが不連続に付着しており、灯明皿として使用されている。36は口径12.6cm、底径8.6cm、器高4.1cmで、底部には板状圧痕が付着している。39は口径11.4cm、底径6.8cm、器高3.6cmで口縁部は内湾気味に立ち上がり、埴状の器形になる。42も39と同様の器形で、口径12.2cm、底径7.8cm、器高3.8cmで口縁端部が尖る。

瓦器埴
東播系
亀山系

52は色調が黒色の瓦器埴の底部である。わずかに高台の痕跡が残る。53・55は口縁部断面が三角形になる東播系須恵質土器の鉢で、須恵質である。57・58は口縁部が屈曲する土鍋である。器面調整は内面が横方向の刷毛目で、外面は撫で仕上げである。59・60は須恵質の壺形土器である。両者とも口縁部は横撫でであるが、60の外面は格子目の叩きで仕上げられており、亀山系須恵質土器である。

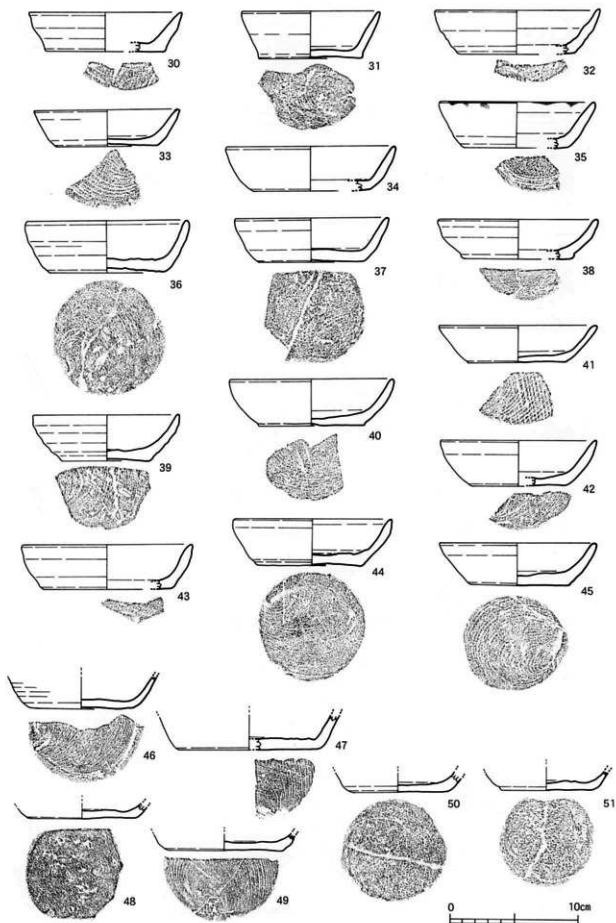


第2-14図 A-SD1024実測図

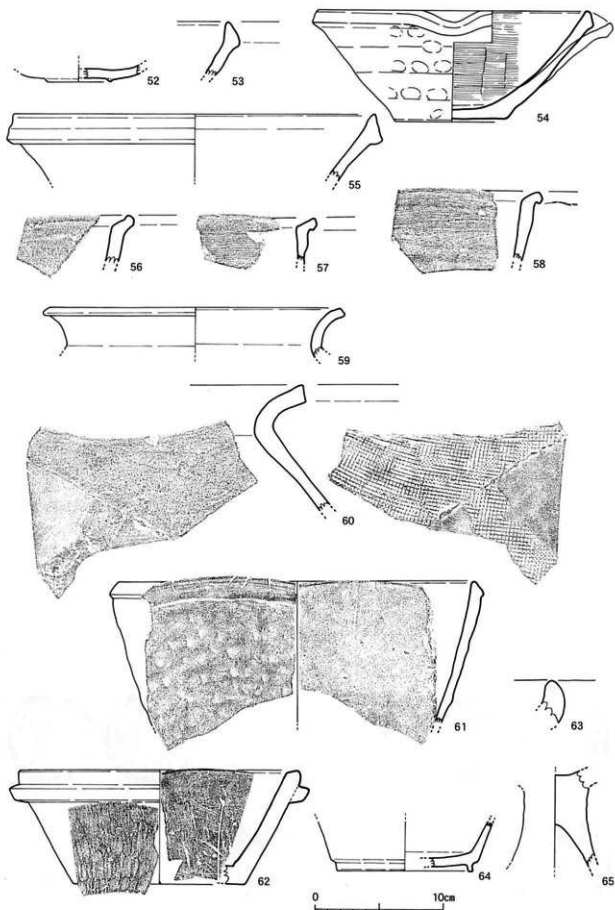


第2-15図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物



第2-16図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(2)



第2-17図 A-SD・SK1505・A-SK1024出土遺物実測図(3)

第2節 遺構と遺物

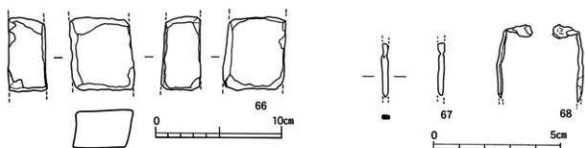
滑石製石鍋 62は口径22cm、底径9.1cm、器高13.8cmの滑石製の石鍋である。口縁部外面に幅約1.4cmの突帯が造り出されている。器面は内外面ともに縦方向に削られ、成形された痕跡が残る。外面にススが付着しており鍋として使用している。63は埴塙の口縁部である。

埴塙 64は底径10.6cmの高台の付いた須恵器の坏である。65は高坏の脚部の資料である。64は8世紀後半から9世紀前半、65は弥生時代のものである。

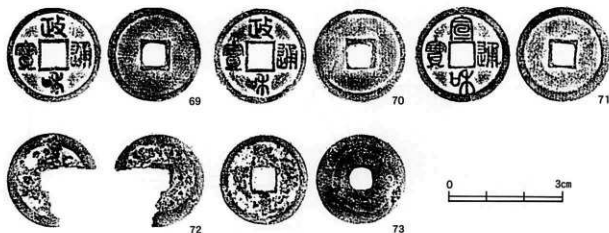
砥石 66は両端を欠くが、四面を磨り面とした砥石である。67・68は青銅製品であるが、器種や用途は不明である。

銅銭 銅銭は第2-19図72・73の2点が出土しており、72は上部に「成」、左に「寶」の可能性のある文字が見える。73は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄は1068年（北宋）である。

これらの3つの遺構の前後関係と時期は、A-SD1505とA-SK1024の関係は不明確であるが、14世紀後半代と考える。A-SK1505は遺物の出土状況や土師質土器の型式変化等を考慮すると、A-SD1505に明らかに掘り込まれたもので、14世紀末から15世紀前半と考えられる。



第2-18図 A-SD・SK1505出土遺物実測図(4)



第2-19図 A-SD・SK1505出土銭実測図 (69~71はSK1505出土)

A-SD1506 (第2-2図・第3-6図)

A-SD1506は府内町跡第20次調査A・B区を南北に貫くように約90mにわたり検出された。このため、同一遺構であるが名称は、A区ではA-SD1506とし、B区ではB-SD064として調査を実施した。

ここでは、遺構全体の概要を述べつつ、A区の部分であるA-SD1506の報告を行う。

A区で検出されたA-SD1506は概ね方位をN-6°-Eとなるものの、区画性に乏しい。すなわち、完掘後の底面の状況を見ると、緩やかに蛇行している。しかも幅も一定ではなく20~80cmを測る。また床面も平坦ではなく、L-40区の部分では約2.5mの範囲で約20cm高くなっている。深さは起伏があるものの、1m前後は保たれている。検出面での状況も、幅が一定ではなく、1.5m~2mを測る。この溝は万寿寺北境の堀の約3.5m手前で端部が確認され、その部分でも深さは1.1mを測る。

出土遺物は、第2-20図に約1mの深さの溝を上・中・下層の3段階に区分して取り上げた遺物を図示した。1~12は上層から出土した資料である。1~5は京都系土師器で、1は口径が11.8cmで器高の高い埴形になる。2は口径9.6cm、器高1.9cmで、3の口径は10.8cm、器高1.8cmである。4の口径は10.2cm、5の器高は11.8cmである。6・7は口縁部が屈曲する土鍋であり、7の復元口径は31.9cmである。内面は横方向の刷毛目で調整されているが、外面は撫で仕上げである。8は口縁部に突帯が巡る瓦質土器で、鈔付の土鍋の可能性が高い。9は底径8.4cmの柱状の土製品で、燭台と考える。10も土製品であるが、土鍋の脚であろうか。11・12は扁平な砥石の破片である。12は片面に縦方向の調整痕が残されており、赤間石の可能性が高い。

燭台
砥石
赤間石

13~22は中層出土の主要遺物である。13~15はロクロ成形による在地系土師質土器である。13はいびつであるが口径は約7.5cmの皿である。14・15は坏であるが、15の口径は12.2cmで、口縁部中位が厚く、断面は三角形になる。16~19は京都系土師器の坏である。いずれも復元口径であるが、16は9.0cm、18は10.6cm、17は12.6cm、19は14.4cmである。20は口縁部が屈曲する土鍋で、21は滑石製の土鍋の破片である。22は、口径23.9cmの東播系須恵質土器の鉢である。

土鍋・土鍋
東播系
常滑系

23~35は下層出土の主要遺物である。23は常滑系陶器の裏の口縁部である。24はロクロ成形による口径8.4cmの在地系土師質土器の皿である。25は京都系土師器で、26は白色をした吉備系土師器の底部の資料である。27・30・32は口縁部が屈曲する土鍋である。31も瓦質であり、土鍋と考えられる。28・29は東播系須恵質土器の鉢である。29の口径は26cmである。33は鉢形をした口径33.6cmの瓦質土器である。34・35は古代の土師器埴で、34は口径11.8cmの埴で、須恵質であるが、14世紀代の瀬戸美濃系陶器の可能性が高い。35は高台付の土師器で、器面は磨きで仕上げている古代の資料である。

吉備系土師器
土鍋
東播系
瀬戸美濃系

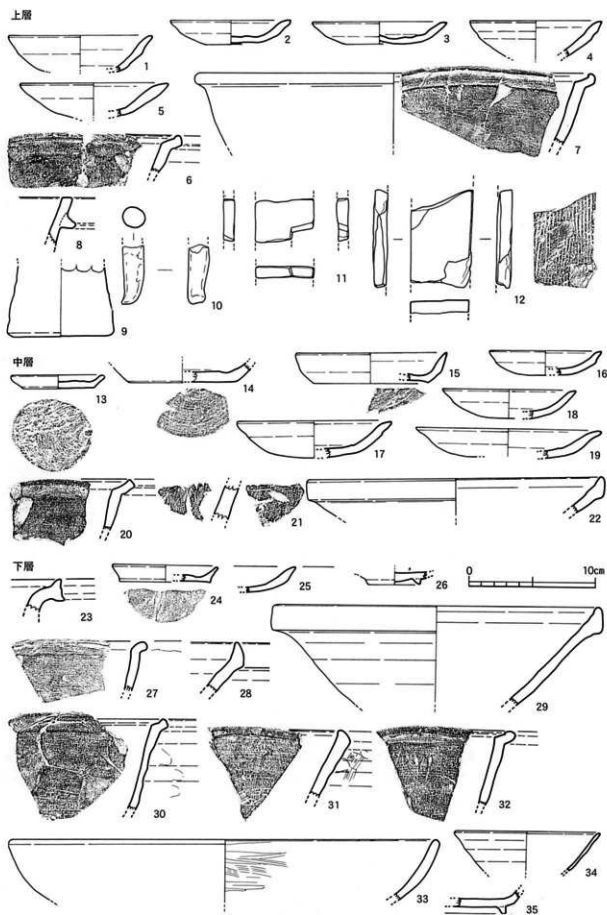
第2-21~2-27図の36~95はA-SD1506から出土したもので、一括して取り上げたものである。36~39・41・42は貿易陶磁器である。36は漳州窯系青花皿で、38は同じく口径14.4cm、底径5cm、器高6.1cmの青花碗で、外面下位に芭蕉葉文が描かれている。37・39・41は京徳窯系青花皿である。復元底径は、37が6.0cm、39が11.2cmで大皿である。41には「・年造」の銘が確認できる。42は龍泉窯系の青磁製品で、装飾品で飾られた動物の臀部である。

漳州窯系
京徳窯系

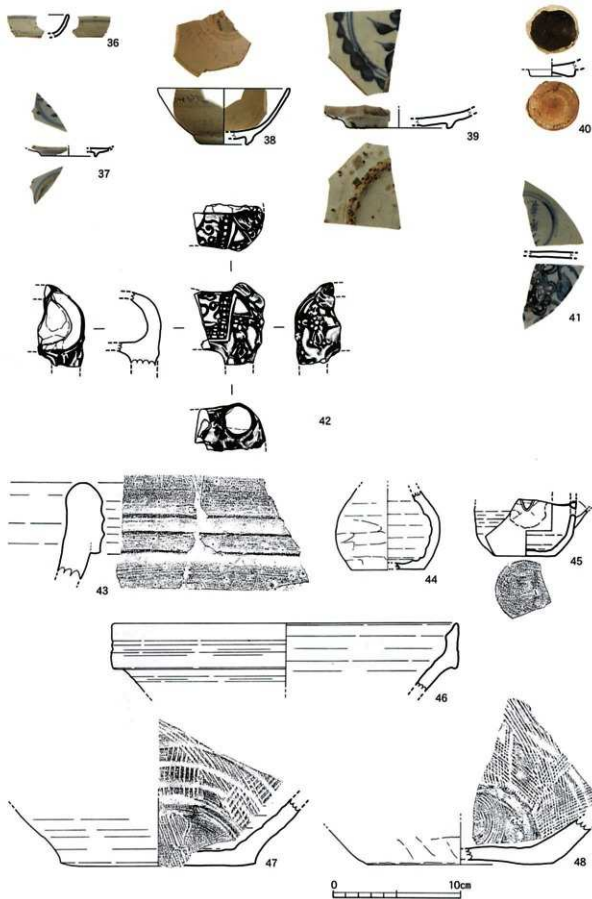
40は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗の底部である。底径は4.3cmであるが、周囲を打ち欠き円盤状に仕上げている。43~48と76は備前系陶器である。43は口縁部外面を肥厚した大甕である。44は底径5.4cmの小盃又は小型の徳利と推測される。45は注口部を持つ容器で、底径は4.8cmで、底にヘラ記号が描かれている。46~48は摺鉢である。46は口径27cmで、47と48の底径は、15.4cmと14.2cmであり、摺り目は口縁部に直角に入れ、その後斜め方向を加えている。76もわずかに口縁部に直角に入れられた摺り目が確認でき、14世紀代の摺鉢である。

龍泉窯系
天目茶碗
備前系
ヘラ記号

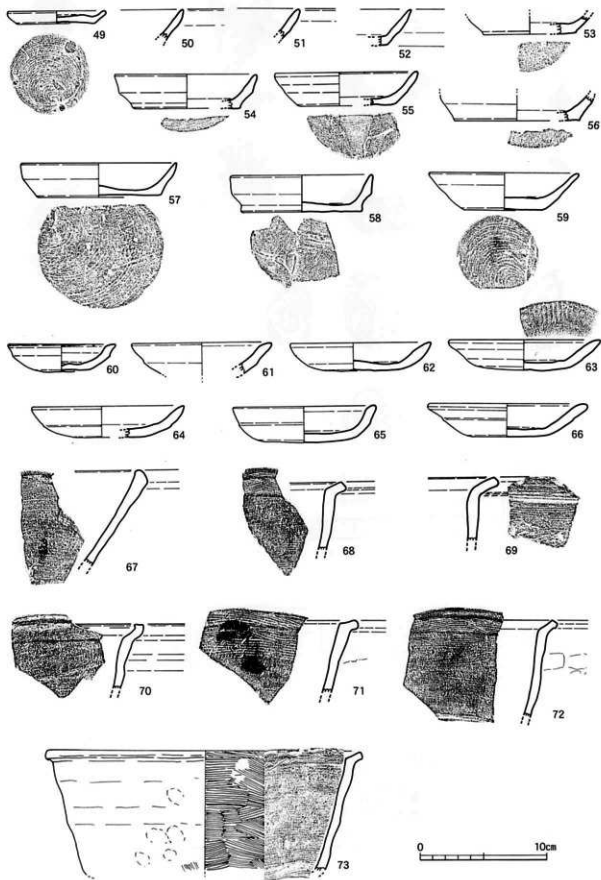
第2節 遺構と遺物



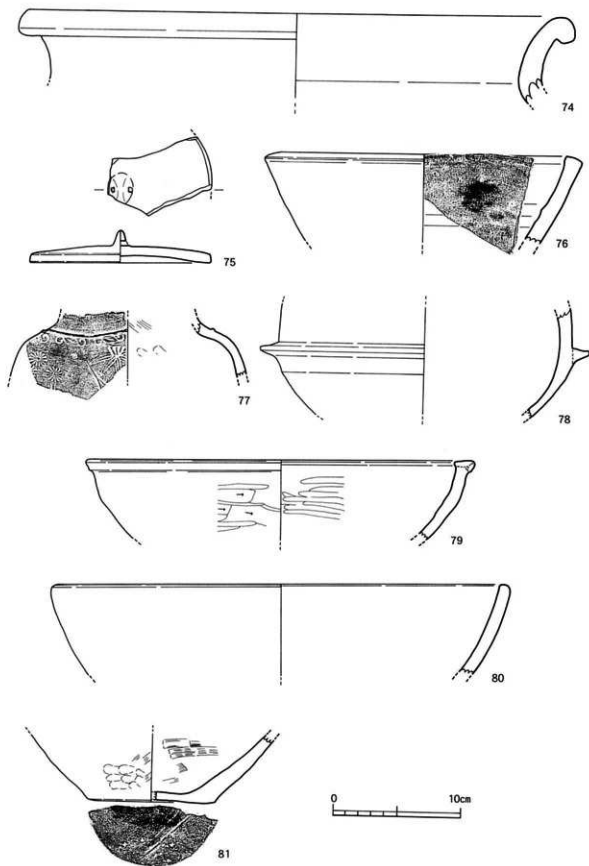
第2-20図 A-SD1506出土遺物実測図(1)



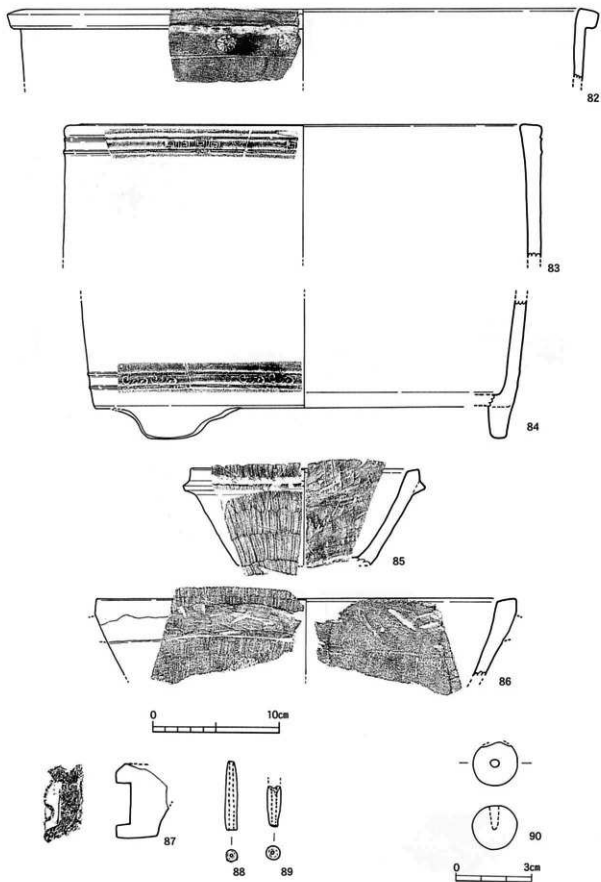
第2-21图 A-SD1506出土遺物実測図(2)



第2-22図 A-SD1506出土遺物実測図(3)



第2-23図 A-SD1506出土遺物実測図(4)



第2-24図 A-SD1506出土遺物実測図(5)

第2-22図49～59は、ロクロ成形の在地系土師質土器である。49は口径7.8cm、底径6cmの皿である。これ以外は坏であるが、50～52は口縁部の資料である。底部の資料である53・56の底径は、7.1cmと9.8cmである。54は口縁部の中位が肥厚し、口径11.2cm、底径は8.4cm、器高2.7cmで、55は口径12.4cm、底径は9cm、器高2.6cmである。57は口径12.2cm、底部は9.6cm、器高2.7cmである。58は口縁部中位が肥厚し、断面が三角形形状になり、口径11.4cm、底部は9.6cm、器高3cmを測る。58は側面観が逆大形状に口縁部が開き、口径11.8cm、底部は6.2cm、器高3cmである。

灯明皿

60～66は京都系土師器の皿で、60は口径8.4cmで、口縁部周辺にススが付着しており、灯明皿として使用されている。口径は61が11cm、62は12.2cm、63は12cm、64が13cm、65は11.4cm、66は12.6cmであるが、65は口縁部の立ち上がる角度が異なり、器高も2.9cmと他の同類の土師質土器よりも高く、坏状になる。

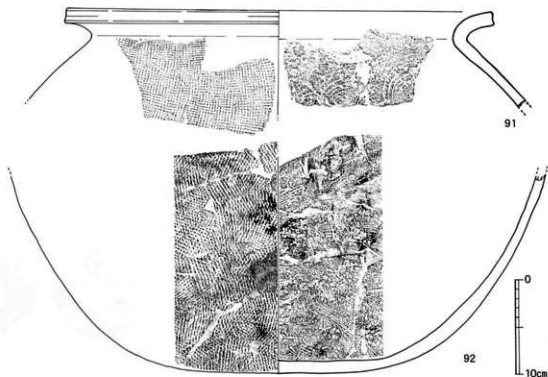
土鍋

67～73は土鍋である。67は口縁部が屈曲せず外傾し、肥厚する。内面は横方向の刷毛目、外面は撫でて器面調整されている。これ以外は、口縁端部が外側に屈曲する形態の土鍋である。いずれも、器面調整は67と同様、内面は横方向の刷毛目、外面は撫でて仕上げられている。75は大形の破片から復元したものであるが、口径は25cmで、外面には指圧痕が残る。胴部は外傾し、底部は丸底になると推測できる。

備前系

74は口径42cmの甕で、外反する口縁部の端部は玉縁状に肥厚する。須恵質で灰褐色をしており、備前系陶器の可能性が高い。

75は口径14.8cmの蓋である。中央部には先端の尖ったつまみが付けられており、これに横方向の孔が穿かれている。胎土に砂粒は少なく精製粘土が使用され、焼成は橙色であるが、瓦質土器と考える。77は胴部上位に連続したスタンプ文を入られた瓦質土器である。胴部最大径で18.8cmを測る壺形土器である。78は器面を研磨された瓦質土器で羽釜と考える。胴部最大径部に突帯をめぐらせる。この部分より下位はススが多量に付着している。79は口縁部を肥厚した口径30.6cmの暗褐色をした瓦質土器の鉢である。器面調整は内外面ともに横方向の篋磨きで調整されている。80は口径



第2-25図 A-SD1506出土遺物実測図(6)

第2節 遺構と遺物

36.1cmの鉢形土器である。色調は灰褐色をしているが、内外面横方向の撫で仕上げで、瓦質土器の範疇に入ると考える。81は底径10cmの瓦質土器の底部である。内面は横方向の刷毛目で、外面は指押圧が残る。焼成の不十分な須恵質土器の可能性もある。

瓦質土器火鉢 第2-24図82～84は瓦質土器の火鉢である。82は口径43.5cmで、口縁外端部が「コ」の字状に肥厚し、その下位には菊花文のスタンプ文が連続して施文されている。83は口径37.9cmで、直口する口縁端部がやや肥厚し、その外面に約1cm間隔の細い突帯を巡らせ、さらに間に2回押捺を1単位とした雷文のスタンプ文を施文している。84は83の底部の可能性があり、底径は33cmで、脚が3ヶ所に付く。底部外面には約1cm間隔の細い突帯を巡らせ、その間に横向きの「S」字文を2回押捺し1単位としたスタンプ文が施文されている。

滑石製石鍋 第2-24図85・86は滑石製の石鍋である。85は底部を欠くが、口径18cm、底径10.5cm、器高は約8cmで、口縁部外面には断面三角形の突帯が削り出されている。内面は平滑に仕上げられているが、外面は4段にわたり、縦方向に削り成形した痕跡が残る。86は、口径33.2cmの石鍋であるが、割れた後再利用するためか、口縁部下の突帯が削られている。器面は、内面が平滑に仕上げられているが、外面は縦方向に削り成形した痕跡が残る。

平瓦唐草文 87は平瓦である。瓦当部の幅は約6cmで、唐草文の端の一部が確認できる。88・89は紡錘形の土錘である。88は完成品で長さ5.5cm、最大径0.9cm、重さ5gで、89は一部を欠くが、長さ3.2cm、最大径3.2cm、重さ3gである。90は直径1.7cmの球形の土玉である。1ヶ所中心部まで穴が開けられている。

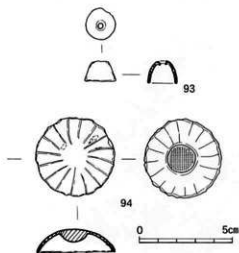
第2-25図91・92は同一個体と考えられる須恵質土器の大甕である。91の口縁部は外反し、内外面横方向の撫で仕上げで仕上げられており、外面は肩部から下位は交差する叩き調整で格子状になっている。また内面は、同心円状の叩き痕が認められる。92はその底部で丸底になると推測するが、外面は肩部と同様の叩きであるが、粗雑であり、内面は粗い刷毛目が認められる。

青銅製品 第2-26図93・94は青銅製品である。93は直径1.0cm、高さ1.1cm、重さ2.1gの釣鐘状の形態をし、頂上部に径0.3cmの穴が見られる。また、94は、直径4.1cm、高さ1.2cmの半球形で、全体を16等分し、菊花文状に仕上げている。また頂部内面には直径1.4cm、厚さ0.5cmの突起する部分がある。2点とも何らかの飾り金具と推測される。

銅銭 第2-27図95の銅銭は、篆書体で書かれた「元祐通寶」で初鑄年は1086年（北宋）である。直径2.4cm、重さ2.4gである。

このA-SD1506からは、多くの14・15世紀代の遺物を出土する。しかし、遺構内からは一定量

の16世紀後半の備前系陶器の描鉢や、16世紀後葉から末葉の京都系土師器、16世紀後葉の漳州窯系青花碗などが出土しており、16世紀後葉から末葉と考える。



第2-26図 A-SD1506出土遺物実測図(7)



第2-27図 A-SD1506出土銅銭実測図

2. 建物遺構

府内町跡20次調査A区では、多くの柱穴の可能性のある掘り込みが検出された。しかし、掘柱建物としてまとまるものは少ない。ただ1棟のみ、調査区の東北隅で川原石を礎盤とした大型建物が確認できた。これをA-SB01として報告をする。

A-SB01 (第2-29図)

A-SB01は万寿寺の北境の堀の南側で検出された南北5間、東西2間以上で西側に半間の底が付く大型の建物である。方位はN-9°-Eで、第1南北街路とほぼ同じである。その構造は、南の1列と、西側の途中3ヶ所不明な1列の2列は柱穴内に礎盤とする石がなかったが、他の検出された12ヶ所の柱穴の内、11ヶ所に柱を支えるための人頭大の扁平な川原石が据えられている。すなわち、建物の主要部分を支える柱穴には川原石が礎盤として置かれている。柱間は南北間が南から2.24m、2.12m、2.28m、2.12m、2.12mであり、東西間は西から0.8m、2.15m、2.08mである。これらの柱間は7尺で設計された可能性が高い。

遺物は、各柱穴で見られるが、第2-28図に図示したA-SP026からまとまって出土している。この遺構は長径1.02m、短径0.78mで検出面から約30cmで二段堀になっており、深い方に57cm×37cmの扁平な川原石を埋めている。遺物はやや空間のあるこの石の西側で集中的に出土しており、地鎮祭行為

地鎮祭行為

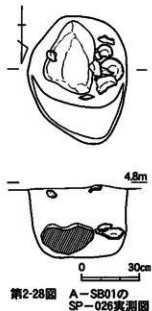
などの祭行為が想定できる。出土遺物は第2-31図の4~16に図示したが、全てロクロ成形の在地系土師質土器である。5は口径8cm、底径6cm、6は口径9cm、底径6.4cmで、器高はいずれも1.3cmの皿である。9~15は杯である。完形品又はそれに近い11は口径12.7cm、底径8.5cm、器高3.4cmで、12は口径13.6cm、底径9.3cm、器高3.4cm、14は口径12.6cm、底径8.2cm、器高3.2cmであり、口縁部は内湾気味に立ち上がり、中位で厚みを増し、口縁端部は尖る。7・8は皿との中間形態の小型の杯で、7は口径8.3cm、底径7.1cm、器高1.6cmで、8は口径7.3cm、底径8.2cm、器高2.3cmである。

16は流れ込みと考えられる土製品で、土鍋の脚と考える。

その他の柱穴からの出土遺物は第2-31図1~3と第2-30図に図示した。A-SP001は第2-31図1~3であるが、いずれもロクロ成形の在地系土師質土器である。1・2は皿であり、3は口径11cm、底径7cm、器高2.7cmの杯である。A-SP004出土遺物は第2-30図1の土鍋であり、A-SP005出土遺物は2のロクロ成形の在地系土師質土器の杯である。3はA-SP006出土の遺物であるが、ロクロ成形の在地系土師質土器の皿に脚を付ける燭台の可能性が高い。4・5はA-SP019出土のロクロ成形の在地系土師質土器の杯の底部である。6はA-SP040出土のロクロ成形の在地系土師質土器の皿で口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.6cmであり、7はその杯で、口径12.8cm、底径8.8cm、器高3.3cmである。

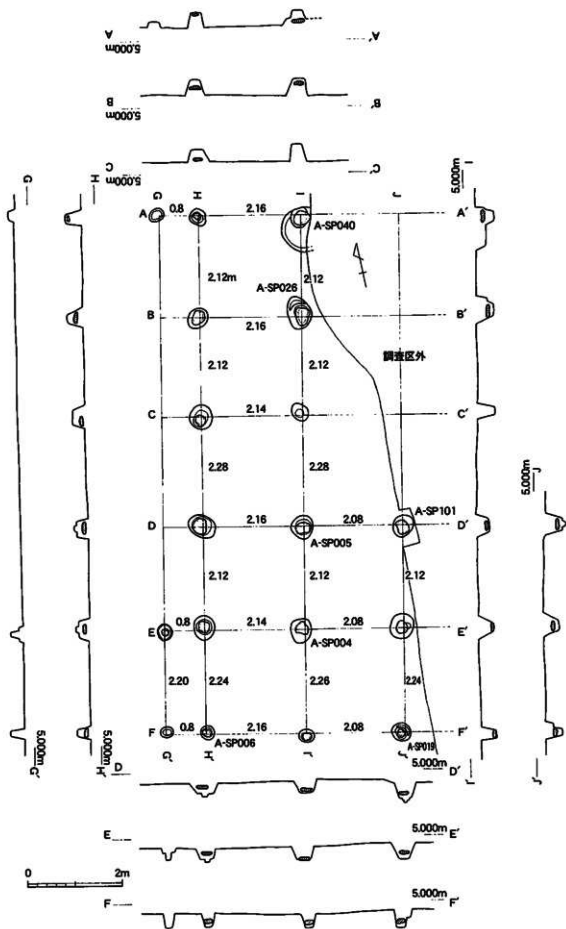
燭台

以上、このA-SB01と密接な関係で出土したと考えられるA-SP026の遺物を中心にこの遺構の建設時期を推定すると、ロクロ成形の在地系土師質土器の杯の口縁部形態から、14世紀中葉から後葉と考えられる。

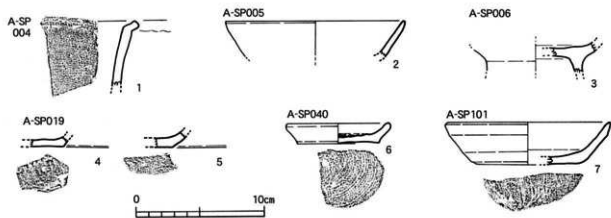


第2-28図 A-SB01のSP-026実測図

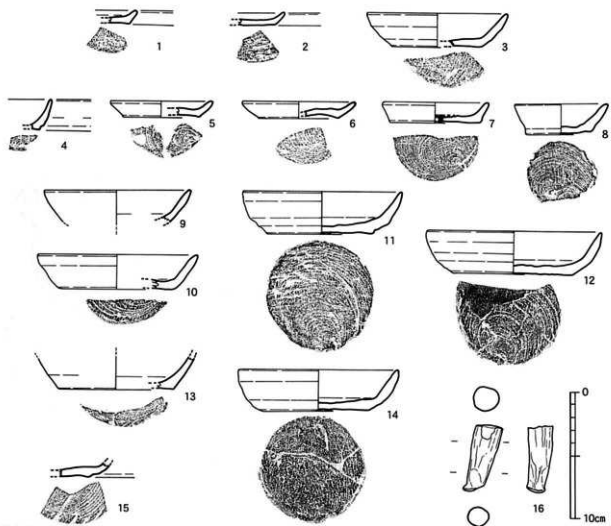
第2節 遺構と遺物



第2-29図 A-SB001実測図



第2-30図 A-SB001の柱穴内出土遺物実測図



第2-31図 A-SB001のA-SP026出土遺物実測図

3. 土坑

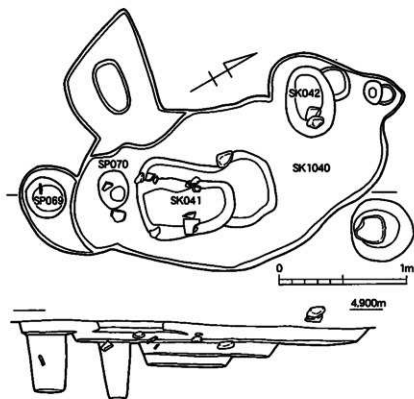
府内町跡20次調査A区からは、多くの土坑や柱穴が検出された。これらは、比較的大型のものを土坑、小型で検出面が円形に近いものを柱穴とした。ここでは、遺物がまとも出土したものや、形態のしっかりした土坑を中心に、それと切り合う柱穴も報告を行う。

A-SK041・A-SK1040 (第2-32図)

A-SK041・A-SK1040は礎盤建物であるA-SB01の西側に隣接して検出された。土坑は幾つもの掘り込みが複雑に重複し、その前後関係は不明である。この中で、最大規模の遺構がA-SK1040で、南北2.8m、東西1.3mで深さ10数cmの床面が平坦な土坑である。これに長径約1m、短径0.5mで深さ約35cmの二段堀の土坑であるA-SK041がほぼ中央部に掘り込まれている。さらに、北端にはA-SP042、南端にはA-SP069やA-SP070の柱穴が検出された。この柱穴は、床面を精査している際に検出されたため、土層での切り合い関係を把握することは出来なかった。

これらの遺構から出土した遺物は第2-34図に図示したが、A-SK041の遺物は1～4である。4は口径36cmの瓦質土器の鉢である。ほぼ直口する口縁部は端部がやや肥厚し、断面が「コ」の字状に仕上げられている。器面は外面が横撫で、内面はヘラ磨きされており、色調は明褐色であるが、焼成の問題と考えられる。これ以外の3点はロクロ成形による在地系土師質土器である。1・2は皿で1の口径は8cm、底径は6.5cm、器高1.1cmである。2は口径7.4cm、底径6.2cm、器高1.6cmであり、3はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、図示はしていないが復元推定口径は12.8cmの坏である。

この遺構は、出土遺物から14世紀後半から15世紀初頭と考えられる。



第2-32図 A-SK1040・A-SK041・A-SK042・A-SP069・A-SP070実測図

古代瓦

A-SK1040出土の遺物は第2-34図8・9であるが、8は口径29.4cmの瓦質土器の鉢で、口縁部は斜めに立ち上がる。外面は横撫でや指押さえによる調整痕が認められ、外面は横方向の撫で仕上げである。9は格子目叩きと布目が見られ、古代の平瓦と考えられる。

A-SK1040の時期は14世紀代であろうか。

A-SP042 (第2-32図)

A-SP042はA-SK1040の床面で検出されたもので、上面の規模は、長径55.5cm、短径36cm、深さは約50cmで、床面は33cm×22cmを測り、平坦である。出土遺物は第2-34図5のロクロ成形による在地系土師質土器の皿である。器壁は薄く、器高は1cmで、口縁端部は尖る。

時期は遺物で見る限り、14世紀後半から15世紀前葉のものである。

A-SP069 (第2-32図)

A-SP069は検出面での径は約35cmのほぼ円形である。深さは約50cmで、平坦な底面の直径は約14cmである。出土遺物は第2-34図に図示した6・7で、6はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、7は直径33.4cmの瓦質土器の口縁部が直口し、端部が肥厚する鉢である。器面調整は外面が横方向の撫で、内面はヘラ磨きで仕上げられている。

時期は、14世紀から15世紀前半と考えられる。

A-SP070 (第2-32図)

A-SP070は検出面が24cm×33cmの小さな柱穴である。深さは約60cmで、平坦な底面の規模は直径10数センチである。図示できる遺物は無かったが、ロクロ成形による在地系土師質土器の薄片が多数出土している。時期は、14世紀から15世紀前半と考えられる。

A-SP052 (第2-2図)

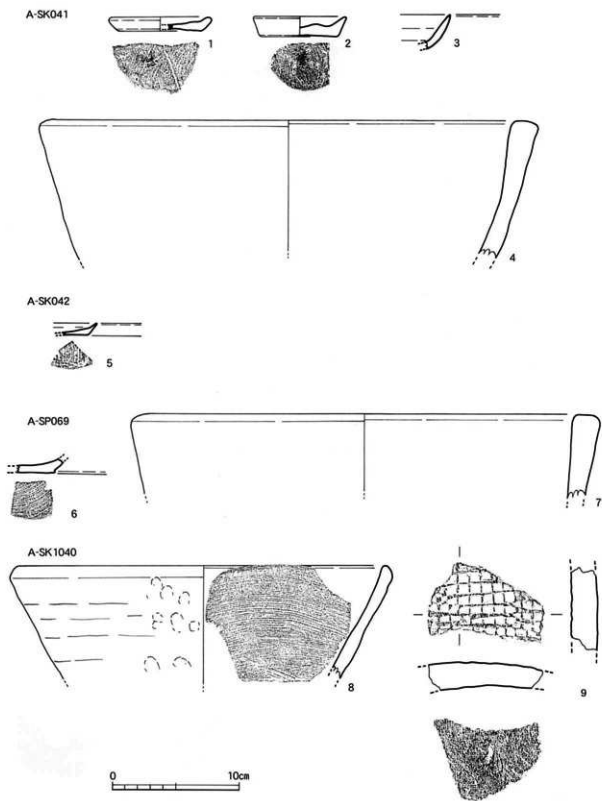
A-SP052はA-SD1504の東側の縁で検出された柱穴である。検出面での大きさは40cm×35cmで、深さは45cmで、底面の規模は15cm×18cmである。出土遺物は第2-33図に図示した銅銭である。銅銭は一部を欠き、真書体で「口元通寶」と書かれているが銭種は不明である。他の出土遺物としては、瓦質土器と須恵質土器・備前系陶器の小破片が出土している。

時期は、備前系陶器の色調から15世紀後半代～16世紀代と推測する。

銅銭



第2-33図 A-SP052出土銅銭実測図



第2-34図 A-SK041・A-SK042・A-SK069・A-SK1040出土遺物実測図

A-SK102 (第2-35図)

A-SK102は礎盤建物であるA-SB01の検出された柱穴のうち、南東隅の柱穴を含む土坑である。東側は調査区外になるため、全体を把握することは出来ないが、南北約1.1m、東西は1.2m以上ある。検出面からの深さは約20cmであるが、東側の調査区境がさらに約20cm掘り込まれ、二段堀になっている。また、この遺構の西隅で検出された直径37cm、深さ42cmの柱穴は、A-SB01の南側の川原石による礎盤を持たない列のものである。

東播系
土鍾

第2-36図の3点はこの遺構から出土した遺物である。1・2は口縁部外面を肥厚した東播系須恵質土器の鉢である。1には注口部の一部が確認できる。3は紡錘形をした土鍾の完形品で、長さは5.5cm、直径1.1cm、重さは1.1gである。

時期は14世紀後半であろうか。

A-SK112 (第2-37図)

A-SK112は府内町跡第20次調査A区の中央北寄りのL-39とL-40の境で検出された遺構である。この遺構の規模と形状は、南北1.9m、東西1.6mで、北側の部分がやや凹む緩い「ハート形」をしている。深さは、浅く10数cmで、床面はほぼ平坦である。この遺構には、A-SP113とA-SP114のふたつの柱穴が掘り込まれている。しかし、この三者の前後関係を土層や遺構の切り合いで把握することは出来なかった。

A-SK112の出土遺物は、第2-38図1に図示したロクロ成形による在地系土師質土器の小型の坏がある。この土器は、口径8.7cm、底径6.3cmであるが、器高は、器形がいびつなため、1.7~2.1cmを計る。

時期は14世紀後半と考える。

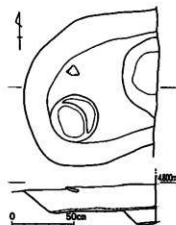
A-SP113 (第2-37図)

A-SP113はA-SK112のほぼ中央部に掘り込まれた柱穴である。規模は直径約50cmで、深さはA-SK112の床面から10数cmで、浅い。出土遺物は第2-38図2に図示したクワロ成形による在地系土師質土器の坏があるが、小破片である。

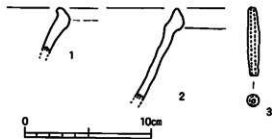
底部近くの器壁が厚く、口縁端部が尖る形態は、A-SK1505出土の在地系土師質土器と類似しており、時期は14世紀末から15世紀前半の可能性が高い。

A-SP114 (第2-37図)

A-SP114はA-SK112とA-SP113と切り合う柱穴である。検出面での遺構の規模は、直径約85cmの円形を呈し、深さは約60cmで、床面の規模は約55cmで平坦である。出土遺物は第2-38図3~6であるが、4は器面に磨き認められ、古代土師器の坏の可能性が高いが、3・5は非ロクロ系土師



第2-35図 A-SK102実測図

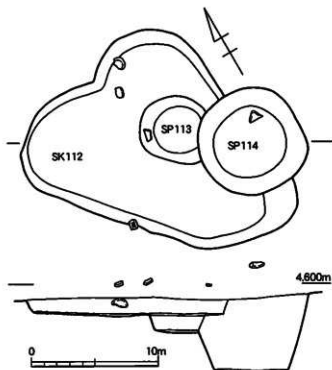


第2-36図 A-SK102出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

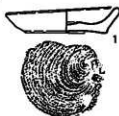
質土器である京都系土師器である。
5は復元口縁13.2cmで、3ともども、器面は横方向の撫で仕上げである。
6は口縁部を外側に屈曲する土鍋である。器面は外面が横方向に刷毛目で調整され、外面は撫でによる平滑な仕上げで、指圧痕も残る。

以上、A-SK112・A-SP113・A-SP114の3遺構の前後関係は、発掘調査時点では把握できなかったが、出土遺物から見ると、A-SK112・A-SP113は14世紀後半から15世紀初頭の可能性が強いが、A-SP114は京都系土師器が出土しており、16世紀後葉から末葉である。このことから、A-SK112・A-SP113の2遺構の前後関係はなお不明であるが、最後にA-SP114が掘り込まれたことになる。



第2-37図 A-SK112・A-SP113・A-SP114実測図

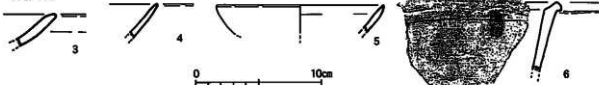
A-SK112



A-SP113



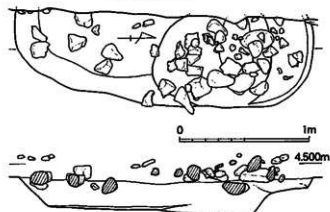
A-SP114



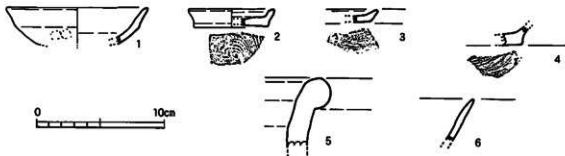
第2-38図 A-SK112・A-SP113・A-SP114出土遺物実測図

A-SK1010 (第2-39図)

A-SK1010はK-40の調査区西際で検出された遺構である。遺構の全体の形態を把握することは出来なかったが、調査できる部分を完掘した結果、遺構は二つの掘り込みから構成されることが判った。しかし、その時点までひとつの遺構としてとらえていたため、ここではひとつの遺構として報告を行う。ただこの二



第2-39図 A-SK1010実測図



第2-40図 A-SK1010出土遺物実測図

つの遺構の前後関係は、土層や遺物の出土状況からとらえることができた。

遺構はまず、南北約1m、東西約0.7mで深さ約0.3m、底面が南北約0.3m、東西約0.6mの南側が緩やかな斜面になる土坑が掘り込まれる。その後、南北約2.1m、東西約0.7m、深さ約0.25cmの土坑が掘り込まれ、その底面はほぼ平坦であるが、北側が浅くなり、南北約2.1m、東西約0.8mの規模である。この後で掘り込まれた土坑には人頭大から拳大の石が多量に投げ込まれて、埋め立てられている。

出土遺物は第2-40図に図示したが、1は口径11.2cmの京都系土師器である。内外面撫で仕上げで、外面には指跡が残る。2～4はロクロ成形による在地系土師質土器で、2・3は皿である。2は口径0.8cm、底径6cm、器高1.5cmで、3も同じ器形である。4は、大ききから推定すると坏と考えられる。5はほぼ直立する口縁部の先端が玉縁状に肥厚する備前系陶器の甕である。6は撫で仕上げの薄口縁部の資料であるが、器壁や形態から古代の土師器の坏と考える。

備前系

以上がA-SK1010であるが、二つの遺構の前後関係はわかるものの、時期については明確ではない。出土遺物も、図示したものを以外に龍泉窯系青磁の小片や、30点近いロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。しかし、これらの中に16世紀後葉から末葉の京都系土師器が出土していることから、最終的な遺構の掘り込みはその時期と考える。

A-SK 1012 (第2-44図)

A-SK 1012はK-40区で検出された土坑で、先に報告したA-SK 1010の南東に約1m離れた場所にある。規模は上面の長軸が1.35m、短軸が約1mで、卵形をしている。深さは約35cmで、底面は平坦で長軸が1.2m、短軸が約0.9mである。

遺物は、備前系陶器や須恵質土器・瓦質土器など7点が出土したが、図示できるほどの良好なものではなかった。また、時期を知る手がかりとなる土師質土器は出土しなかった。

A-SK 1013 (第2-42図)

A-SK 1013は府内町跡第20次調査区を南北に貫くA-SD 1506のK-40区の西側に接する位置で検出された。この遺構も、検出時の規模は南北約3.5m、東西約2.2mの楕円形をしており、ひとつの遺構と想定して掘り下げを行った。しかし、結果的には少なくとも3つの土坑が重なり合う遺構であることが判った。しかも、これらの遺構の前後関係は調査中に明確に把握することは出来なかった。遺構を掘り込みが浅い順に報告すると、最初に検出した規模とほぼ同じの南北約3.5m、東西約2.2mの楕円形をした土坑がある。この土坑は深さが15cm～20cmと浅く、底面も平坦でその規模も南北3.1m、東西約1.8m程度と想定出来る。次に、この土坑の南寄りに南北約1.5m、東西約1.8m、深さ約55cm、平坦な底面の規模が東西約0.9m、南北約1mの掘り込みがあることが判明した。さらに、

第2節 遺構と遺物

この土坑の北側と重複して上面が径約0.9mで、二段堀になった最深部までの深さ0.8mの土坑が確認され、この土坑の最深部周辺から出土した遺物はA-SK1013 (A) として取り上げている。

銅銭

出土した主要遺物は第2-41図の銅銭と第2-43図に図示したものである。銅銭は、真書体で書かれた「政和通寶」で初鋳造年は1111年（北宋）である。

瀬戸美濃系

第2-43図2は小片であるが青磁の瓶と考える貿易陶磁器である。3は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。4～6は備前系陶器の播鉢である。4は口径28.1cmで、口縁端部がわずかに肥厚する。内面には7本の揃り目が口縁部に直角に入れられている。5もほぼ同じ器形であるが、4よりも口縁端部の肥厚は明確になる。口径は25.2cmで、内面の揃り目は明瞭ではない。6は口縁部が立ち上がる口径27.8cmの播鉢である。内面の揃り目は斜めに入れられている。色調は4・5が灰色・灰褐色をしているが、6は海老茶色をしている。7はロクロ成形の在地系土師質土器の坏で、口縁部が内湾気味に立ち上がる。

備前系

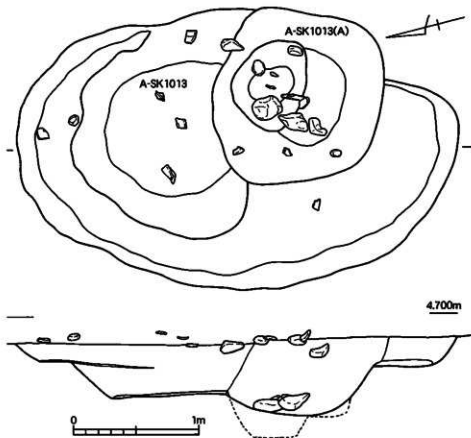
8～13は京都系土師器である。口径は8が9.4cm、9は12cm、10は11.8cm、11は12.2cm、13は11.6cmである。8～11は皿であるが、12・13は器高が高く、坏状になる。なお7～9・12は最深部を持つ土坑であるA-SK1013 (A) からの出土である。

土鍋

14～16は瓦質土器である。14は口縁部外側に長く突き出た突帯が運る、釘付の土鍋である。また、15は口縁部が屈曲する土鍋で、内面には横方向に刷毛目が入れている。16は、内湾する胴部に直口する口縁部が付き、端部は肥厚し、口唇部は平坦に仕上げられている。口径は35.8cmで、器面調整は胴部から口縁部周辺



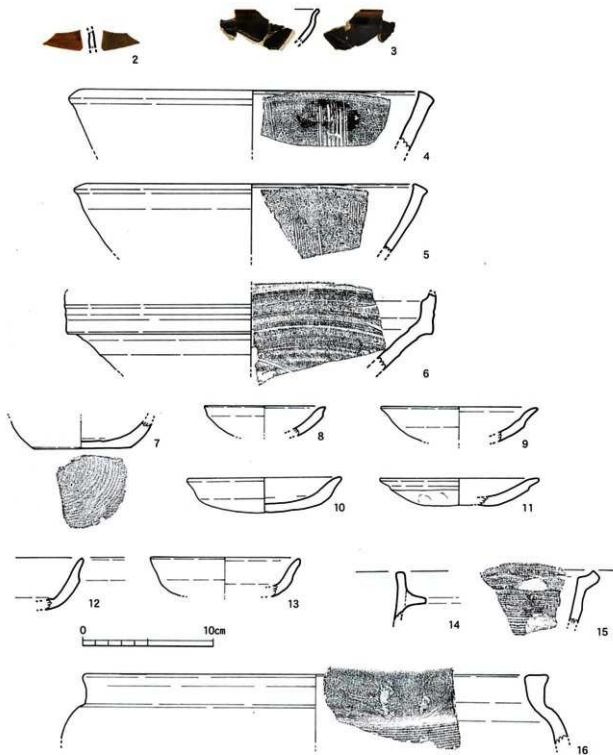
第2-41図 A-SK1013出土銅銭実測図



第2-42図 A-SK1013・A-SK1013 (A) 出土遺物実測図

は横方向の撫で仕上げで、胴部内面は横方向の刷毛目が認められる。色調は暗灰色である。

以上の状況から、この3つの掘り込みが重複する土坑は、最深部を持つ土坑であるA-SK1013(A)が、16世紀後葉の可能性が高い。またこれ以外の土坑についてもロクロ成形の在地系土師質土器の出土が少なく、京都系土師器の出土が目立つ。また、図化はしていないが、景德鎮窯系や漳州窯系の小破片の青花が他の土坑に比較すると多く出土している。このことから、他の2つの土坑も16世紀後葉から末葉の可能性が高いと考える。



第2-43図 A-SK1013出土遺物実測図

A-SK1014 (第2-44図)

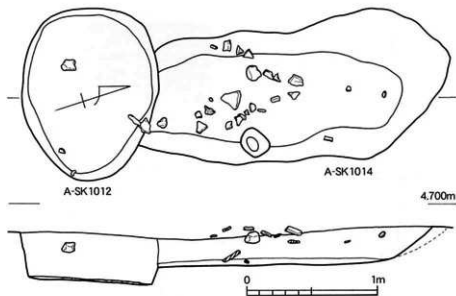
A-SK1014はA-SK1012の北側に切り合った状態で検出された。このため、先に報告したA-SK1010の東側に約1m離れて同じ方向に平行して掘り込まれた、ほぼ同規模の土坑である。土坑の規模は、南側は不明であるが南北約2.5m、東西約1mで、深さは28cm前後である。底面はほぼ平坦で、南北約2m、東西約0.7mである。床面に東側の壁際で、直径20cm、深さ30cmの柱穴を検出したが、この土坑との前後関係は不明である。

出土遺物は、貿易陶磁では景德鎮窯系青花碗や龍泉窯系青磁碗、備前系陶器・瓦質土器等が出土しているが小片が多く、第2-45図に景德鎮窯系青花碗を图示した。この資料は、口径7.4cmで、高台を欠く器高は4.8cmである。第2-46図は薄緑色のヒスイ製の玉である。上面径1.83cm、高さ1.55cm、幅1.35cmで、孔の径は0.5cmである。

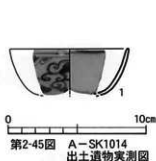
遺構の時期は、第2-45図の出土遺物から16世紀後葉と末葉と考える。

A-SP1017 (第2-47図)

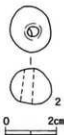
A-SP1017は、L-41区のア-SK1012の上面で検出された遺構で、この溝が埋め立てられた後に掘り込まれている。その規模は、南北2.04m、東西1.7mで深さは0.37mである。底面はほぼ平坦で南北1.26m、東西1.5mである。この遺構が埋め立てられた後に、上面には拳大の川原石が東西方向に並べられている。



第2-44図 A-SK1012・A-SK1014実測図



第2-45図 A-SK1014
出土遺物実測図



第2-46図 A-SK1014出土玉類実測図

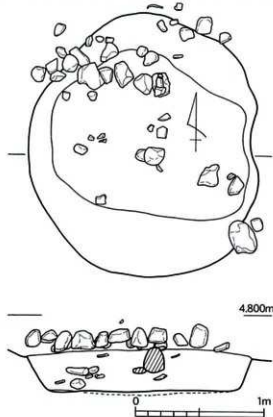
磁甕系 出土遺物は、第2-48図に図示した。1は磁甕系の鉢の碎片である。2は、瀬戸美濃系の皿で、瀬戸美濃系 底部外面が露胎である以外はオリーブ色の釉葉がかかる。口径10cm、高台の底径5.6cm、器高2.6cm 備前系 である。3・4は備前系陶器である。3は播鉢で、口縁部内面には凹線状の段が付く。内面に掘り目が見える。

4は徳利状の器形である。口縁部を欠くが、高さ約12cmほど残り、底径は6.8cmで、底部外面の中央部に「井」の字状のヘラ記号が書かれている。「井」の字

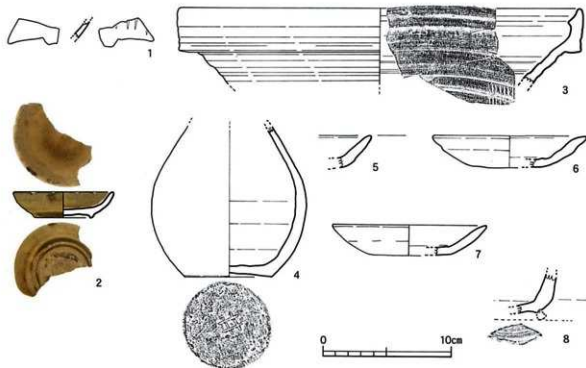
5～7は非ロクロ系の土師質土器である京都系土師器の皿である。5の口径は不明であるが、6・7は口径12cmである。器高は6が2.6cm、7は2.4cmである。これらは、器壁が厚く、中世大友府内町跡出土の京都系土師器の中でも新しい傾向を見せる。

8は、須恵質土器の小片である。高台は破損しており不明である。古代の遺物と考える。

この遺構の時期は京都系土師器が出土することから16世紀後半であるが、同じ時期の溝の上に構築されているという切り合い関係から、溝より新しいことが明らかである。備前系陶器の播鉢の形態や京都系土師器の器壁が厚いことから、16世紀後葉から末葉と考えられる。



第2-47図 A-SK1017実測図



第2-48図 A-SK1017出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SK1018 (第2-49図)

A-SK1018は調査区の西側のK-39区で検出された土坑で、A-SK1036とA-SP1035と切り合う。A-SK1018は南北方向に長い楕円形の平面観を見せ、長軸である南北方向に2.3m、東西方向に1.4mで、深さは0.7mを測る。底面の状況はほぼ平坦で、規模は南北方向が1.4m、東西方向は約0.8mである。この遺構の東北部にはA-SK1036が検出され、南西側でA-SP1035が検出された。

出土遺物は第2-50図に図示したが、1は備前系陶器の鉢で器形は口縁が内湾し、胴部は球状に張る。外面底部はヘラ削りで仕上げられている。2は常滑系陶器の甕である。3はロクロ成形による在来系土師質土器である。

口径は7.6cm、底径6.6cm、器高0.9cmの皿である。4は瓦質土器の釘付の土鍋の口縁部である。5はフィゴの羽口で、内径は約3cmが想定される。

備前系

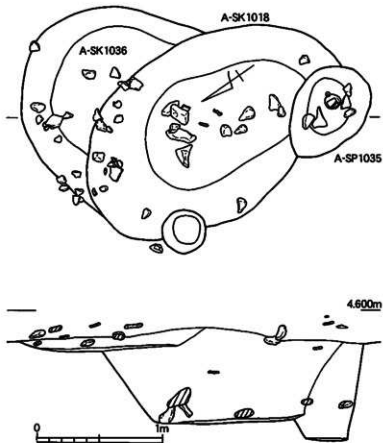
常滑系

フィゴ羽口

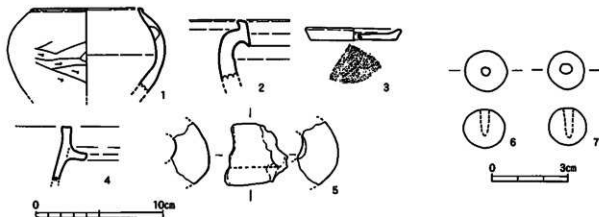
土玉

6・7は土玉であるが、穿孔は貫通していない。6は1.5×1.7cmの球形で、3.6gを測る。7も1.5×1.4cmの球形で、2.7gを測る。

時期は良好な資料はなく、14世紀代の遺物も含むが、1の備前系陶器の鉢は、新しい器種であり、これを軸に考え、16世紀後葉から末葉ととらえておく。



第2-49図 A-SK1018・A-SP1035・A-SK1036物実測図



第2-50図 A-SK1018出土遺物実測図

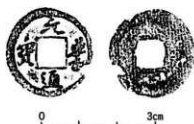
A-SK1019 (第2-52図)

A-SK1019は調査区の南端、L-41区で検出された土坑で、A-SD1501と切り合う。遺構の規模は南北約1.8m、東西1.6mで、深さは約0.5mである。床面はほぼ平坦で、南側には焼土面がある。床面の規模は南北1.5m、東西1.2mである。

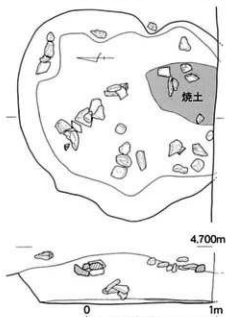
出土遺物は、第2-51・2-53図に図示した。1～6はロクロ成形による在地系土師質土器である。法量の判る2は口径8.8cm、底径6.6cm、器高1.6cmで、6は口径8cm、底径6.6cm、器高1cmである。1・2・6は皿であるが、3～5は坏で、5の口径は11.4cmで、器高は3と共に3.3cmである。7・8は京都系土師器で8の口縁端部にはススが附着している。9は口径21cmの須恵質土器の鉢である。10は土師質土器の甕で、11は瓦質土器の火鉢で、底部近くの細い二条の平行突帯の間には「横S字文」の2単位のスタンプが押されている。12は石臼の鉢である。第2-51図の銅銭は初鑄年が1078年(北宋)の「元豊通寶」である。

以上の遺物から、この土坑の時期は15世紀前半の遺物を含むが、A-SD1501を切ることや、京都系土師器を含むことから16世紀後葉から末葉と考えられる。

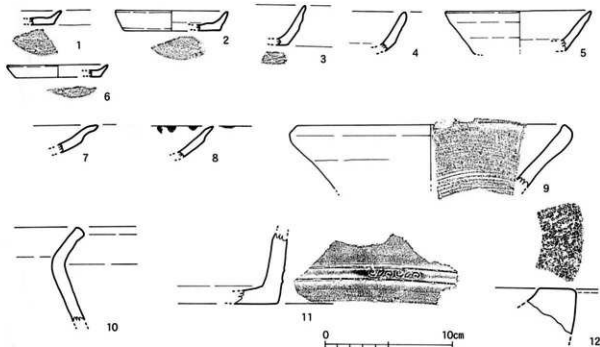
石臼
銅銭



第2-51図 A-SK1019出土銭実測図



第2-52図 A-SK1019実測図



第2-53図 A-SK1019出土遺物実測図

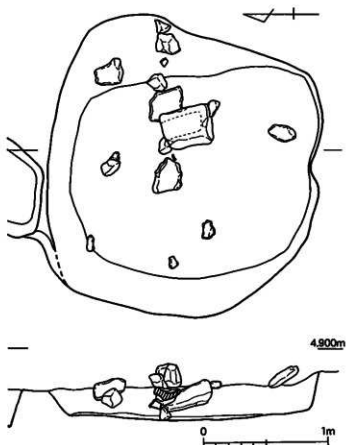
第2節 遺構と遺物

A-SK1023 (第2-54図)

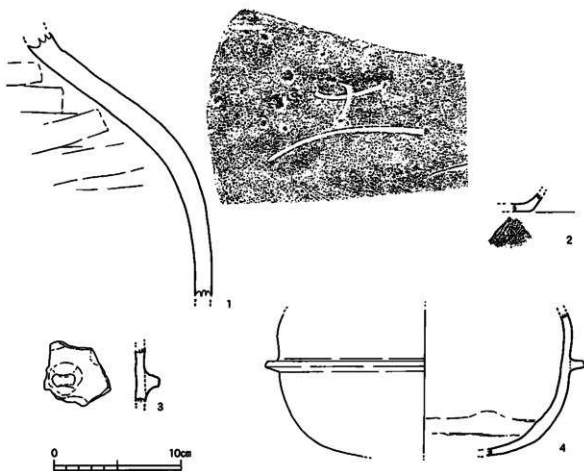
A-SK1023は調査区のほぼ中央、L-40区で検出された土坑で、南北2.1m、東西2.3m、深さ約0.4mを測り、床面は南北1.8m、東西1.6mで、ほぼ平坦である。

備前系 出土遺物は多くないが、第2-55図に図示した。1は備前系陶器の大甕で、肩部に「土」の文字「ひねり土」が見られ「ひねり土」の一部であろう。2はロクロ成形による在地系土師質土器である。3は土師質土器のつまみであるが、器種は不明である。4は胴部最大径部に鈎が通る瓦質土器の茶釜と考えられる。鈎での復元径は約25cmである。

この遺構の時期は、1の備前系陶器の大甕が出土していることから10世紀後葉から末葉と考える。



第2-54図 A-SK1023実測図

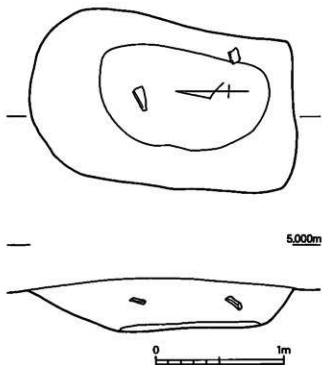


第2-55図 A-SK1023出土遺物実測図

A-SK1026 (第2-56図)

A-SK1026は、A-SK1023の南東に約50cm離れて検出された小規模な土坑である。規模は南北2.1m、東西1.2mで、深さは0.4mで、底面の規模は南北1.4m、東西0.8mである。

出土遺物は少なく、小破片であったため、図示はしておらず、時期を想定することも出来なかった。

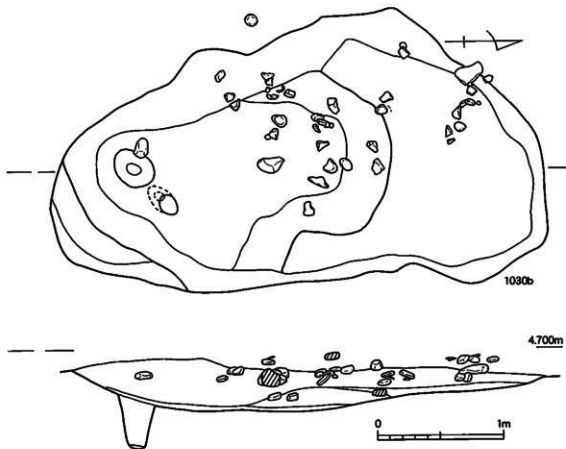


第2-56図 A-SK1026実測図

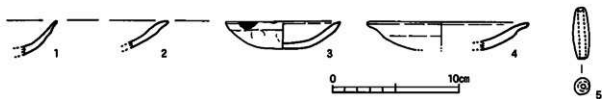
第2節 遺構と遺物

A-SK1030 (第2-57図)

A-SK1030は調査区の西壁沿いのK-30区で検出された南北に長い楕円形の土坑である。検出面の規模は南北約4m、東西約2.1mで、床面の形状は緩い二段掘り状になり、北から南にかけて深くなる。最深部の深さは約40cmである。遺構の南端で直径約30cm、深さ約40cmの柱穴を検出した。



第2-57図 A-SK1030実測図



第2-58図 A-SK1030出土遺物実測図



第2-59図 A-SK1035出土銭実測図

土鍾

出土遺物は、第2-58図に図示したが、1~4は京都系土師器である。法量が判る3と4は、口径が9cmと13.8cmであり、3の器高は2.1cmで、口縁部周辺にはススが付着している。5の土鍾は、長さ4cm、直径1.2cm、重さ6.3gで、紡錘形をしている。

この遺構の時期は、図示した以外にも京都系土師器が多数出土しており、16世紀後葉から末葉と想定できる。

A-SP1035 (第2-49図)

A-SP1035はA-SK1018の南西部で切り合うように掘り込まれた柱穴である。上面の直径は、0.8mが想定され、深さも約0.8mである。底面の径は約0.45mで、柱穴としては規模が大きい。

銅銭貼付

出土遺物は、備前系陶器や瓦質土器がわずかに出土したのみであるが、2点の渡来銭が出土している。この2枚の銅銭は貼り付いた状態で出土した。第2-59図に図示したものであるが、1は真書体で書かれた「明道元寶」で、1032年(北宋)に初鋳造されたもので、直径2.5cmで2.7gである。2は真書体で書かれた「皇宋通寶」で、1038年(北宋)に初鋳造されたもので、直径2.4cmで1.4gである。

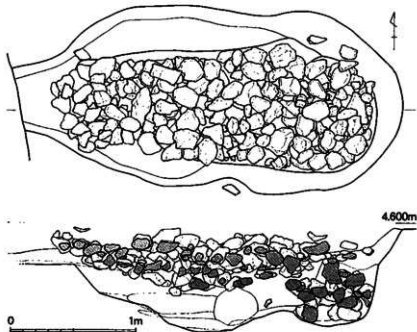
A-SK1036 (第2-49図)

A-SK1036は、A-SK1018の東北部で重なり合って検出された土坑であるが、A-SK1018にほとんど切り込まれているため、全体の形状や規模を把握することは出来ない。残された遺構の規模は、南北が約1.6m程度、東西が1.5m以上あり、深さは10cm程度で、平坦な床面に達する。

出土遺物は、極わずかであるが、景徳鎮窯系青花陶器が出土しており、16世紀後半の可能性が高い。

A-SK1039 (第2-60図)

A-SK1039は遺構の西端が調査区の西側の壁にかかる状態で検出された。検出面での遺構の規模は南北約1.5m、東西約3mあり、拳大の礫が充填されていた。実測図を見ると、この礫群は遺構の上部に集中し、東端は底面まで達している。遺構の深さは、約90cmであるが、底面は平坦ではない。数度にわたる掘り返しの結果と考えられる。そして、最後の土坑が礫を充填したものであろう。



第2-60図 A-SK1039実測図

第2節 遺構と遺物

出土した遺物は、第2-60図に図示したが、1は頸部の径が約18cmで、一部に白泥輪が観察されるタイ産陶器の四耳壺と考えられる。2は瓦質土器の鉢である。器面は撫でて、口縁部は丸く丁寧に仕上げられている。3も瓦質土器で、底部に3ヶ所、脚が付く。底部の径は約18cmで、外面は撫でて丁寧に仕上げられているが、内面は多方向の刷毛目で調整されている。器種は火鉢と考えられる。

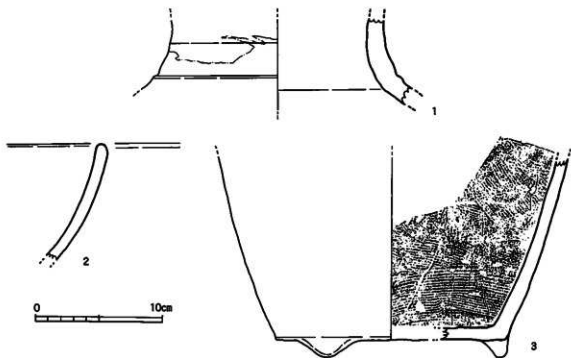
A-SK1039の時期は、図示はしていないが、京都系土師器が出土しており、1のタイ産陶器の四耳壺からも、16世紀後葉と想定できる。

A-SK1042 (第2-62図)

A-SK1042は、調査区の東北部、M-38区で検出された土坑で、礎壇建物遺構であるA-SB01の北西隅の主柱穴と切り合う。検出時の規模は、南北1.4m、東西2.1mであったが、発掘調査の結果、三段に掘り込まれており、二段目の深さは約30cmで、二段目の底面は東西1.7m、南北1.1m、深さ約40cmである。そして、三段目は二段目の中央部に掘り込まれ、底面の規模は東西0.8m、南北0.45mで、検出面からの深さは約53cmである。

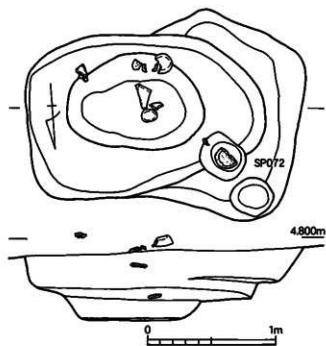
出土遺物は、第2-63図に図示したのが主要なものである。1～6はロクロ成形の在地系土師質土器の坏である。1は口径約12cm、2は口径11.5cm、底径8.4cm、器高2.8cmで底部近くが厚く、口縁端部は尖る。3は口径12.2cm、底径7.6cmで、器高は3.5cmあり、口縁部の立ち上がりはやや内湾する。4は口径12.6cm、底径8.2cm、器高3.2cmで、口縁部中位の器壁が厚い。5は口径12.7cmで、底径7.8cm、器高3.4cmである。6も径12.7cmで、底径7.8cm、器高3.1cmで、2点とも4と同様、口縁部中位の器壁が厚く、口唇部が尖る。

7は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目、外面は撫でて仕上げである。8は刷部が球状に張り、口縁部が外反する、土師質土器の口径37.5cmの甕である。外面は木目の細かい縦方向の刷毛目、内面は粗い横方向の刷毛目で器面調整されている。

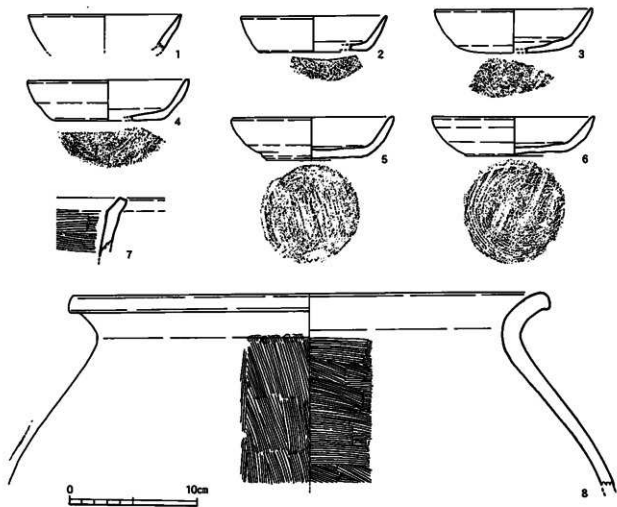


第2-61図 A-SK1039出土遺物実測図

このA-SK1042には、A-SB01の礎盤柱穴であるA-SP072が後で掘り込まれている。しかし、同じ建物の礎盤柱穴であるA-SP026出土の遺物と比較すると、口縁部中央の器壁が厚く、口縁端部が尖るなど、形態に大きな差は認められない。おそらく、14世紀前半から中葉にかけての、同時期、あるいは極めて近い時期に掘り込まれた土坑であろう。



第2-62図 A-SK1042実測図

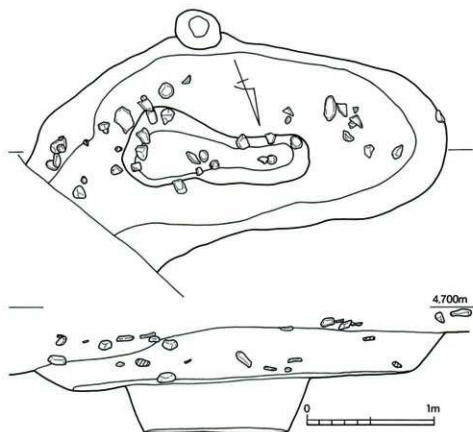


第2-63図 A-SK1042出土遺物実測図

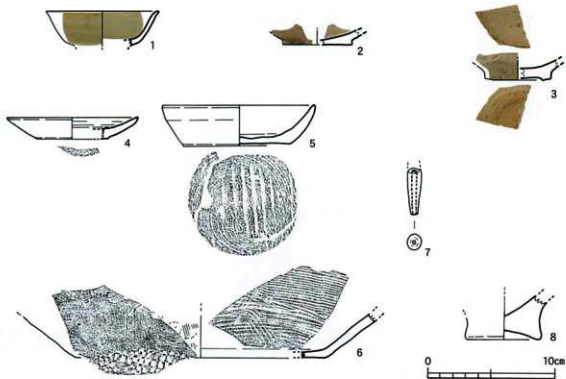
第2節 遺構と遺物

A-SK1043 (第2-64図)

A-SK1043はA-SK1042の約2m南で検出され、A-SB01と切り合う。遺構の規模は、検出



第2-64図 A-SK1043実測図



第2-65図 A-SK1043出土遺物実測図

面では東西3.3m以上、南北約1.5mであったが、発掘調査の結果、この土坑は二段掘りになっており、1段目は深さ約35cmで、底面は東西2.7m、南北1.3mである。二段目は中央部に掘り込まれ、東西約1.2m、南北約0.3mで、検出面からの深さは約0.8mになる。

龍泉窯系

白磁

遺構からは卒大の礎が多く出土したものの、出土遺物は少なく第2-65図に代表的なものを図示した。1は龍泉窯系の口径13cmの青磁の碗である。3は白磁の碗の底部で、底径は7cmである。4は口径10.4cm、底径5.8cmで、器高1.7cmのロクロ成形の在地系土師質土器であるが、口縁部が「八」字状に開き、内面にロクロ回転による段が認められる。5は口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.3cmで、口縁部の立ち上がりは底部近くの器壁が厚く、口縁部が尖る。

6は瓦質土器の鍋であろうか。底径は19.8cmで、底面は、格子目の叩き、外面は横方向の撫で、内面は横方向の刷毛目で、器面調整されている。

土錘

7は半分を欠く紡錘形の土錘である。残された長さは3.8cm、幅1.1cm、重さ3.5gである。

弥生土器

8は底径6cmの弥生時代の変形土器の底部である。弥生時代中期後葉である。

緑釉陶器

2は底径7.5cmの土師質土器の焼成であるが、器面は緑釉がかけられている8世紀後半から9世紀前半の古代の緑釉陶器である。

以上の遺物から、この土坑の時期は、4や5のロクロ成形の在地系土師質土器に新しい傾向が見られることから、14世紀中葉から後葉と考える。

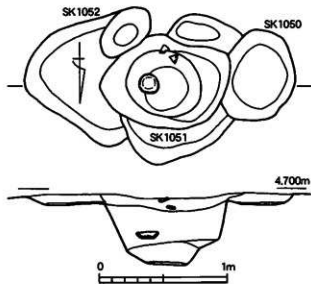
A-SK1050 (第2-66図)

A-SK1050・A-SK1051・A-SK1052は調査区の北側、L-38区で近接、切り合い関係で検出された。A-SK1050は上面が72cm×約60cmであり、深さは7～8cmで、底面は48cm×42cmである。遺構が小さいため、遺物は出土しておらず時期は不明である。

A-SK1051 (第2-66図)

A-SK1051はA-SK1050の東に接して掘り込まれ、上面が東西約1cm、南北約0.7mで、二段掘り状になった底は、検出面からの深さ約51cmである。底面は径約30cmである。

遺構内からは、ほぼ完形品のロクロ成形の在地系土師質土器の坏が出土している。図示したのは第2-67図の1で、同類の土器である。時期は14世紀後半と考える。

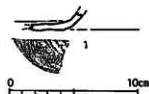


第2-66図 A-SK1050・A-SK1051・A-SK1052実測図

A-SK1052 (第2-66図)

A-SK1052はA-SK1051の東側でと切り合う。遺構の規模は、南北約1m、東西も1m近くあったと思われ、深さは7～8cmである。底面は南北約80cm、東西も約80cm程度と想定する。

遺物は遺構が浅いため、出土しておらず時期は不明である。



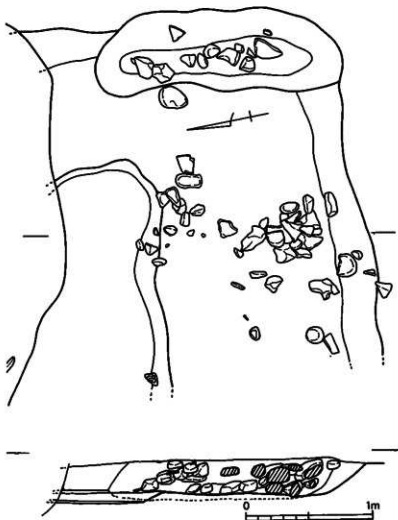
第2-67図 A-SK1051出土遺物実測図

A-SK1056 (第2-68図)

A-SK1056は調査区の中程西側の壁に接したK-40区で検出された遺構である。遺構は、調査区の西側の外から延びて、2.5mが検出された。その検出された遺構の規模は、東西2.5mで、北に延びる方形状で、深さは約30cmであり、中央部にさらに深さ10cm前後の底面が平坦な掘り込みがある。この掘り込みの北側は、先に報告した礎を充填した土坑であるA-SK1039と重複している。このため、南北方向の遺構の規模は不明である。

また、南東隅には南北約2m、東西0.6m、深さ35cmで、底面は南北1.5m東西30cmの細長い土坑が掘り込まれている。この土坑からは遺物は出土していないが、準大の礎が多数出土している。礎の出土状況から、A-SK1056が埋め立てられた後に掘り込まれた可能性が高い。

A-SK1056は比較的規模の大きな遺構であるが、礎を多く出土するものの、遺物は少なく、須恵質土器や瓦質土器の小破片が出土したのみである。このため、遺構の時期を想定することはできなかったが、遺構の北側でこの遺構を切るA-SK1039は16世紀後葉から末葉と考えており、これよりも古いことは確実である。



第2-68図 A-SK1056実測図

A-SK1058 (第2-69図)

A-SK1058は調査区の中央部、L-40区でA-SD1506と遺構の西側の一部が重なり合った状態で検出された。基本的には、検出面の規模が南北1.3m、東西1.5mであるが、南西側にも浅い掘り込みが見られる。深さは約48cmで底は丸く掘られている。

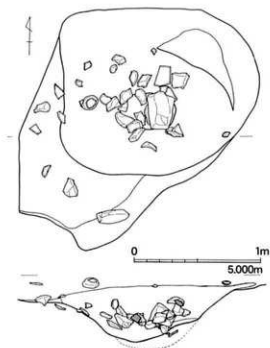
遺物は、第2-70図に図示したが、1はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。2も同様な技法で作成されたものであるが、口径9.4cmの皿に脚を付け、皿の底に焼成前の穿孔が認められる。器高は3.5cmで燗台の可能性が高い。3は瓦質土器の八角形の火鉢と考える。直口する口縁部は肥厚し、口唇部を平坦に仕上げ、角の部分に穿孔が見られる。外面には巴文のスタンプが連続して付けられている。器面調整は横方向のヘラ磨きで、黒色に焼成されている。4はこの火鉢の横断面で、角度が45°で八角形であることが判る。

燗台

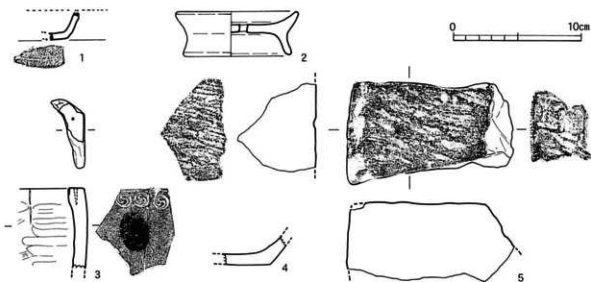
凝灰岩製切石

5は凝灰岩製の切石である。図面の上部・下部・裏面は破損しているが、残りの部分にはノミ跡と思われる加工痕が残り、角度は90°と125°に仕上げられている。

遺物はこの他、白磁や備前系陶器の破片や、須恵質土器・瓦質土器が出土している。これらから、この遺構の時期を推測すると、西側を16世紀後葉の溝で切られていることや、2の古いタイプの燗台が出土していることから、14世紀後半と考える。



第2-69図 A-SK1058実測図



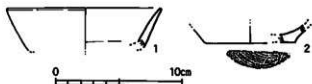
第2-70図 A-SK1058出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

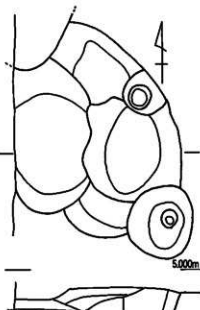
A-SK1059 (第2-72図)

A-SK1059は調査区の南西隅の壁際、K-41区で検出された遺構である。この遺構は検出時には一つと思われたが、掘り下げを行った結果、複数の土坑と柱穴が重なり合うことが判った。しかし、これらの遺構の前後関係を捉えることが出来ず、出土遺物も少なかった。そこで、検出された土坑・柱穴群をまとめて、A-SK1059とした。これらの遺構で、最深のものは、北寄りで検出された直径約40cmのもので、深さ約70cmである。また、その南側にある土坑は底面が南北65cm、東西43cmで比較的大きい。

出土遺物は、第2-71図に図示したが、2点ともロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。1は口径12cm、2は底径7.4cmである。時期は、坏の形態から、14世紀中葉から後葉と考える。



第2-71図 A-SK1059出土遺物実測図

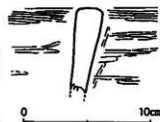


第2-72図 A-SK1059実測図

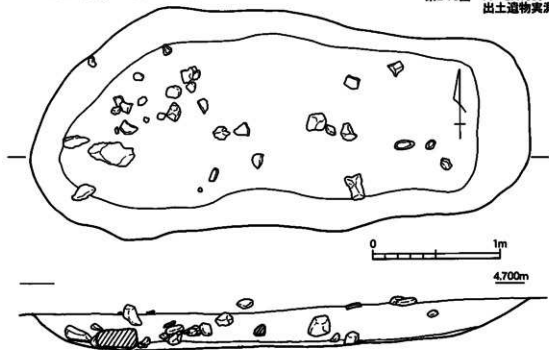
A-SK1065 (第2-74図)

A-SK1065は調査区の中央北寄りで検出された東西に長い土坑である。検出面での規模は東西3.9m、南北1.7mで、底面までの深さは30cmである。底面の規模は東西3.3m、南北1.2mである。

遺構の規模は大きいですが、内部からは人頭大から拳大の礫が多量に出土したが、遺物はわずかであった。



第2-73図 A-SK1065
出土遺物実測図



第2-74図 A-SK1065実測図

第2-73図に図示したのは、両面をヘラ磨きされた瓦質土器の鉢である。時期は不明である。

A-SK1068 (第2-76図)

A-SK1068は、A-SK1065の上面で検出された土坑である。遺構は前後関係の不明なふたつの掘り込みから構成される。ひとつは東側の東西約90cm、南北90cm、深さ約40cmで、底面は東西60cm、南北60cmのほぼ円形の土坑である。もうひとつはこの土坑の西側に掘り込まれた、東西約1.4m以上、南北1.1m、深さ約30cmで、底面は東西1.2m以上、南北45cmの土坑である。

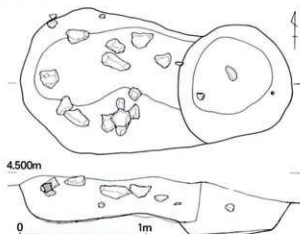
遺構内からは拳大の礫が出土しているが、遺物は少ない。第2-75図に図示したのは、

瀬戸美濃系
天目茶碗

口径7.4cm、底径3.4cm、器高3.2cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。その他、京都系土師器も出土しており、遺構の時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第2-75図 A-SK1068出土遺物実測図



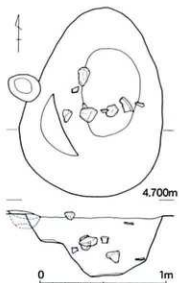
第2-76図 A-SK1068実測図

A-SK1069 (第2-77図)

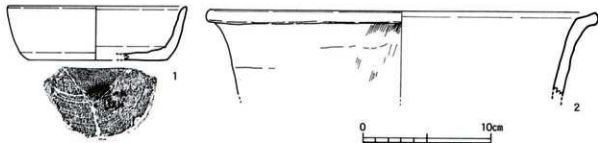
A-SK1069は調査区の南西部、K-40区で検出された土坑である。遺構の規模は、検出面で南北1.5m、東西1.1mの卵形をしており、掘り下げを行うと、約20cm下部で小さい段が確認され、最深部までは45cmであった。底面は、徐々に狭くなり、丸くなっているが、南北70cm、東西45cmの規模を測る。

土坑内からは、拳大の礫以外にも、第2-78図に図示した1のロクロ成形の在地系土師質土器の坏と、2の口縁部が外反する土鍋が出土している。1は口径14.2cm、底径11.4cm、器高4.3cmで、他の同時期の坏に比較すると大型である。2は、口径30.8cmであり、口縁端部は横撫であるが、内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目で器面調整されているが、一部は撫で消されている。

時期は、1の坏から14世紀末から15世紀前葉と考えられる。



第2-77図 A-SK1069実測図



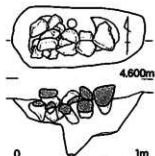
第2-78図 A-SK1069出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SK1070 (第2-79図)

A-SK1070は先に報告したA-SK1065の南側に接して検出された土坑である。その規模は、南北約50cm、東西約1mである。掘り下げの結果、土坑内からは礫が充填された状態で検出された。底面は中央部分が柱状に深く、最深部は検出面から約55cmある。

遺物は、遺構が小さく礫が多数のため少なく、瓦質土器の破片が1点のみ出土した。時期は不明である。



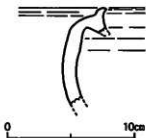
第2-79図 A-SK1070実測図

A-SK1081 (第2-81図)

A-SK1081は調査区の東北端部、L-38区で検出された遺構である。検出面の規模は、南北約1.2m、東西約1.4mである。掘り下げの結果、検出面から約75cmで底面に達した。底面は南北60cm、東西87cmで、平坦である。この遺構の西側で重なり検出された柱穴はA-SK1080で、深さは約30cmであった。

常滑系

出土遺物は、第2-80図に常滑系陶器の口縁部を図示したが、この他ロクロ成形の在地系土師質土器の坏の小破片が出土している。このことから、14世紀代の遺構と推測する。A-SK1080からもロクロ成形の在地系土師質土器の坏の破片が出土している。

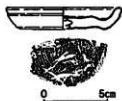


第2-80図 A-SK1081出土遺物実測図

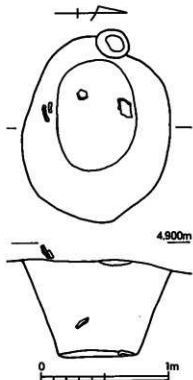
A-SK1082 (第2-83図)

A-SK1082はA-SK1081の東側に接して検出された土坑で、両土坑とも万寿寺の北側境界の堀に近い位置である。土坑の規模は、東西1.2m、南北0.7mで、深さ約20cmと約55cmの2段掘りになっている。遺物は検出面より上位でロクロ成形の在地系土師質土器の坏が出土しているが、この土坑に伴わない可能性が高い。

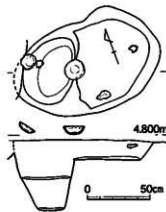
この土坑に伴う遺物は、第2-82図に図示したロクロ成形の在地系土師質土器の皿で、口径9.2cm、底径7.8cm、器高1.7cmで、14世紀後半と考えられる。



第2-82図 A-SK1082出土遺物実測図



第2-81図 A-SK1081実測図



第2-83図 A-SK1082実測図

A-SK1083 (第2-84図)

A-SK1083は、L-41で検出された遺構で、南側が、A-SD1501と切り合う。規模と形状は、東西約75cm、南北約60cmの緩い三角形をしている。掘り下げた結果、遺構の壁は同じ状態で立ち上がる。壁はA-SD1501と切り合うため、一様ではないが、遺存状態の良い部分の高さは、約25cm残っている。底面は、東西65cm、南北約50cmである。

遺構内からは出土した遺物の代表は、第2-85図に図示した2点のロクロ成形の在来土師質土器の坏である。1はほぼ完形品の坏で、口径12.3cm、底径9.5cm、器高はいびつなため、3~3.2cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は、下位が厚く、口縁先端部が尖る。2は完形品の坏である。口径12.4cm、底径7.1cm、器高3.5cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は、上位が厚くなり、1の坏とは異なる。また、底部の径も1の坏に比較すると、2の坏の直径は、2.1cm小さく、全体的に碗状になる。

時期は、2の器形が中世大友城下町跡の14世紀代の遺構から出土しており、1の坏との組合せで14世紀中葉から後葉と考える。

A-SK1084 (第2-86図)

A-SK1084は、調査区の西側の壁沿い、K-39区で検出された土坑である。遺構上面の規模は、南北約2m、東西1.3mであるが、北側はA-SK1018・A-SP1035・A-SK1036の遺構群と重なり合う。

A-SK1084を掘り下げた結果、遺構は、深さ約45cmで一段目の底面が南側で検出され、さらに、北側は検出面から60cmのところまで底面を検出した。その規模は南北約80cm、東西は75cmで南側に向かいやや傾斜する。

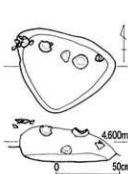
景徳鎮窯系
龍泉窯系
褐釉陶器

遺構内からは礎も多数出土したが、代表的な遺物は、第2-87図に図示した。1~4は貿易陶磁器である。1は底径8.1cmの景徳鎮窯系の青花碗の底部である。高台の断面は三角形である。2は底径10.1cmの龍泉窯系の青磁の皿である。3と4は同一個体の褐釉陶器の壺である。2点は接合しないが、口径は3.8cmで、底径は9cmで、器高は14.4cmである。高さ9.6cmの部分で屈曲し胴部最大径となり、18.1cmを測る。全体に褐色の釉がかかるが、底部周辺は露胎となっている。

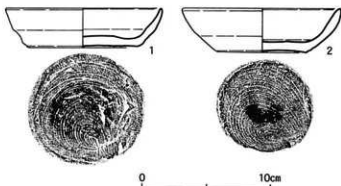
5・6は京都系土師器で、5は口径9.4cm、器高2.3cmであり、ほぼ完形品の6は、口径12.6cm、器高3.4cmである。7は瓦質土器の脚付きの火鉢である。器面は、内外面共に丁寧な撫で仕上げである。色調は本来なら黒色であるが、焼成の関係で明褐色となっている。

以上の遺物以外に、備前系陶器や須恵質土器の小破片が出土している。

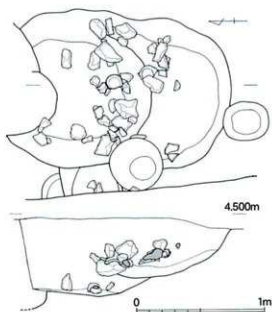
この遺構の時期は、1の青花碗や5・6の京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉から末葉と考えられる。



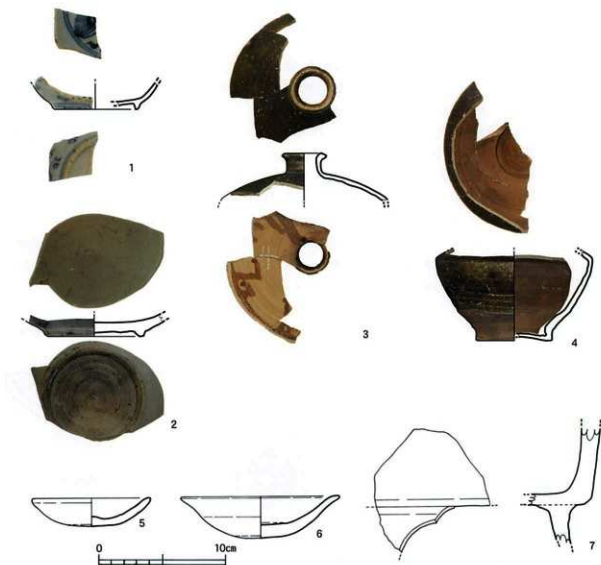
第2-84図 A-SK1083
実測図



第2-85図 A-SK1083出土遺物実測図



第2-86図 A-SK1084実測図



第2-87図 A-SK1084出土遺物実測図

A-SK1089 (第2-89回)

A-SK1089は、調査区の南東隅、M-41区で検出された遺構で、南側をA-SD 1505と切り合う。遺構の規模は、南側と西側は不明であるが、南北約1m、東西も約1mの円形の土坑と想定される。底面は南に傾斜し、径約70cmの規模である。壁の遺存状況は北側が良好で、約60cm残る。

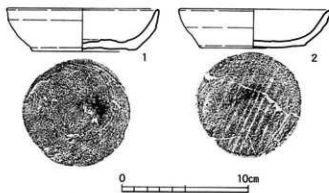
遺物の出土状況は、床面近くから2点のほぼ完成品のロクロ成形の在地系土師質土器の坏が出土している。第2-88図に図示した遺物がそれであるが、1は口径12cm、底径8.2cm、器高はいびつなため3.2cm～3.1cmを測る。底部から口縁部は、内湾気味に立ち上がり、器壁は下位が厚く、口縁先端部が尖るように仕上げられている。2は口径12cm、底径8.4cm、器高はいびつなため2.4cm～3.1cmを測る。底部から立ち上がる口縁部の器壁は上位が厚く、先端部が尖り、外反気味になる。また、糸切痕の残る底部には、板状の圧痕が付いている。遺物は、この2点以外に、図化していないが、龍泉窯産青磁碗や須恵質土器の小破片が出土している。

この遺構の時期は、出土したロクロ成形の在地系土師質土器の坏の形態から、14世紀中葉から後葉にかけてと想定する。

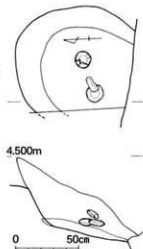
A-SK1091 (第2-91回)

A-SK1091は、調査区の北西隅、K-38区で検出された遺構である。北側は万寿寺北側境の堀である。遺構の東北部はA-SK1093と切り合う。遺構の規模は、南北の最大幅は約3m、東西は約6mの不定形をした土坑である。規模の大きな土坑であるが、底面までは深さはほぼ一定で、全面約30cmを測り、平坦である。

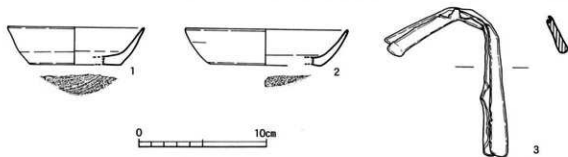
遺構内から出土した遺物は第2-90図に図示したが、1は口径10.8cm、底径7.2cm、器高3cmで、2は口径12.8cm、底径8.6cm、器高2.9cmである。2点とも、口縁部は底部から直線的に斜めに立ち上がり、先端が尖る。



第2-88図 A-SK1089出土遺物実測図



第2-89図 A-SK1089実測図

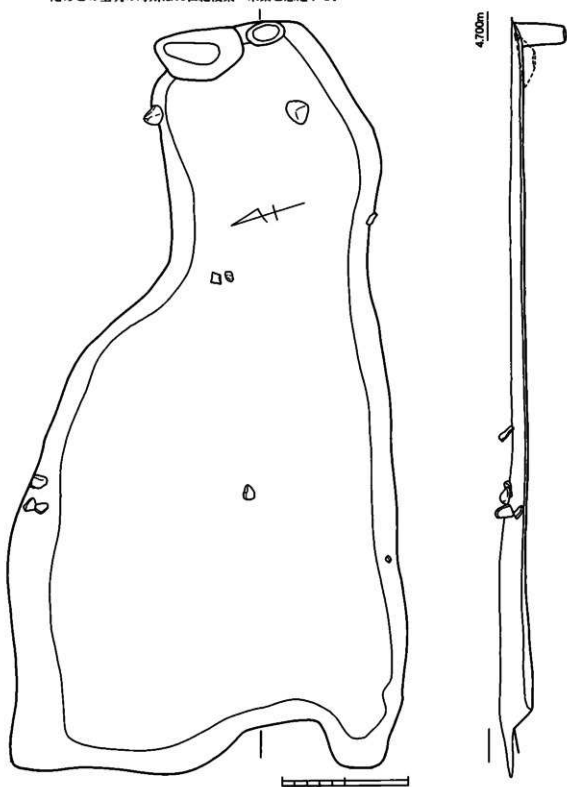


第2-90図 A-SK1091出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

青銅製品 3は青銅製品である。折れ曲がっているが、長さは約10cmである。遺物は、厚さ0.2~0.4cmの細長い青銅板を長軸方向に二つ折りにし、幅約1.8cmの製品に仕上げている。

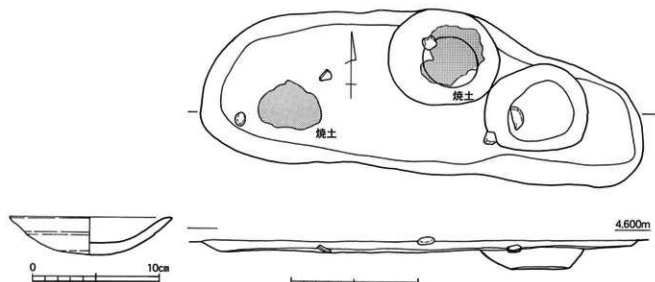
遺構の時期については、図示した2点のロクロ成形の在地系土師質土器の坏は、その形態から14世紀中葉から後葉と考えられる。しかし、図示していないが、遺構内からは龍泉窯産青磁碗なども出土するが、景德鎮窯や漳州窯系の青花碗や京都系土師器の小破片が一定量出土している。このためこの土坑の時期は16世紀後葉~末葉と想定する。



第2-91図 A-SK1091実測図

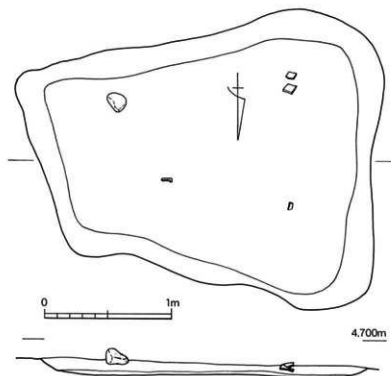
A-SK1092 (第2-93図)

K-38区で検出されたA-SK1092はA-SK1091の南側に隣接して検出された土坑である。遺構の西部はA-SK1104と切り合う。検出面での遺構の規模は東西3.5m、南北1.3mで、深さは約10cm

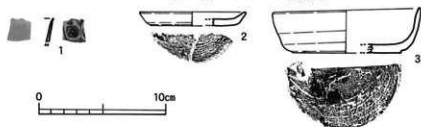


第2-92図 A-SK1092出土遺物実測図

第2-93図 A-SK1092実測図



第2-94図 A-SK1093実測図



第2-95図 A-SK1093出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

と浅い。底面の西側と中央部で、焼土の広がり確認された。中央部の焼土の下部には、直径75cmで、深さ約30cmの土坑を検出した。A-SK1092以前の土坑と考える。また、この土坑の東側に隣接して直径約70cm、床面からの深さ約15cmの土坑が検出された。

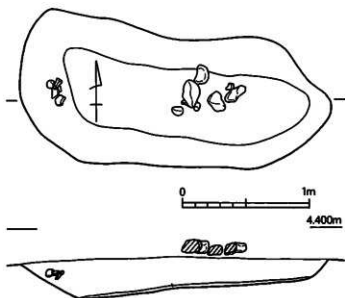
遺構内からは、第2-92図に図示した京都系土師器が出土している。その法量は、口径12.3cm、器高3cmで器壁は厚い。その他、景徳鎮窯系青花の小破片が8点出土しており、この遺構の時期は、16世紀後葉から末葉と考えられる。

A-SK1093 (第2-94図)

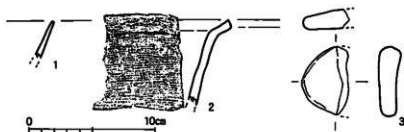
A-SK1093は、A-SK1091と切り合い関係で検出された。規模は南北2.4m、東西約2.7mで、西側を底辺にした台形をしている。深さは12~15cmでほぼ平坦である。

景徳鎮窯系 第2-95図に図示した遺物は主要な出土遺物である。1は景徳鎮窯系青花文の小坏で、横断面を見ると、上面観が六角形になる。遺構からはこの他、景徳鎮窯系青花文の磁器の小片が数点出土している。2・3はロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏である。2の皿は口径8.4cm、器高1.1cm、底径6.0cmである。坏である3は、口径11.1cm、底径8.5cm、器高3.2~3.7cmで口縁部は直口気味に立ち上がる。

以上の他、龍泉窯系青磁碗や白磁、備前系陶器・常滑系陶器が出土しているものの、京都系土師器などの小片や景徳鎮窯の青花文の磁器が出土していることから、A-SK1093の時期は、16世紀後葉から末葉と想定する。



第2-96図 A-SK1094実測図



第2-97図 A-SK1094出土遺物実測図

A-SK1094 (第2-96図)

A-SK1094は調査区の中央北寄りのL-39区で検出された遺構である。遺構の規模は東西2.5m、南北約1mで、東西に細長い。深さは西端が最深部で約30cmであるが、東端は15cmで、底面は傾斜している。遺構内からの遺物の出土は少ない。

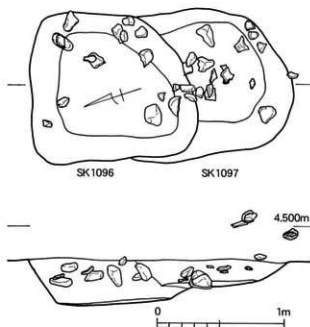
出土遺物は、第2-97図に図示したが、小片が多い。1は須恵器の坏の口縁部である。この調査区で多く出土する8世紀後半から9世紀前半のものと考えられる。2は口縁部が屈曲する瓦質土器の土鍋で、外面は横方向の撫で仕上げ、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。3は厚さ1.3cm、直径5.3cmの円形の土製品であるが、半分を欠く。重さは30gであるが、不明品である。遺物はその他、備前系陶器や瓦質土器が出土している。

この遺構の時期は、決定付ける遺物の出土はない。しかし、切り合い関係にあるA-SD1506・A-SK1065・A-SK1068との関係から、16世紀後葉から末葉と考える。

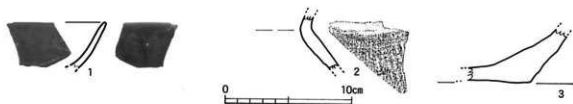
A-SK1096 (第2-98図)

A-SK1096はA-SK1097と切り合い、調査区の北寄りの西壁沿い、K-39区で検出された。A-SK1096の規模は南北約1.3m、東西約1.2mで、緩い方形を呈している。深さは33cmで、底面の規模は南北約1m、東西約0.8mである。

遺構内からは、拳大の礎が多数出土したが、遺物の数は少なく、ロクロ成形の在地系土師質土器と須恵質土器の小破片が4点出土したのみである。このため、遺構の時期は不明である。



第2-98図 A-SK1096・A-SK1097実測図



第2-99図 A-SK1096出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SK1097 (第2-98図)

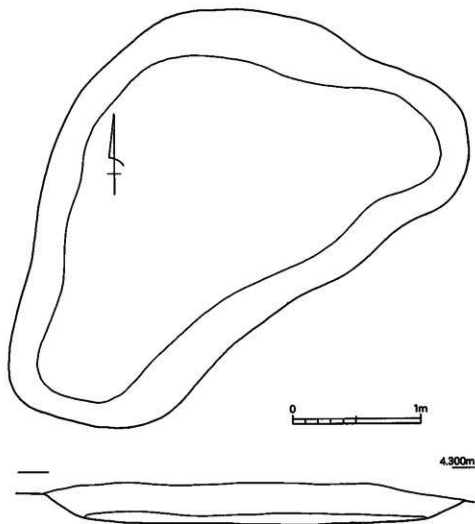
A-SK1097はA-SK1096と切り合い、発掘調査の結果、遺構の北側のほぼ半分の底面は不明である。

残された部分から推定できる遺構の規模は、南北1.2m以上、東西約1.2m、検出面からの深さは23cmで、底面の規模は、南北約1m、東西0.7mと想定する。

龍泉窯産

遺構内の底面に準大の礫が多数見られるが、遺物もわずかながら出土している。第2-99図に図示した3点はその代表的な遺物である。1は龍泉窯系の青磁碗で、外面には縮避弁が施文されている。2は須恵質土器の壺の肩部で、外面には叩き目の調整痕が付く。3は備前系陶器の大甕の底部で、ヘラ削り痕が認められる。この遺構からは、この3点以外に、土師質土器の甕、須恵質土器、瓦質土器などの小破片が出土している。

この切り合い関係にあるA-SK1096とA-SK1097の時期は、良好な状態で遺物が出土しないため、明確な時期を決定できない。ただ、京都系土師器や京徳鎮窯系青花碗など、中世大友城下町跡で見られる16世紀的な遺物が出土していない。そこで、14世紀後半から15世紀前半の時期を想定する。



第2-100図 A-SK1099実測図

A-SK1099 (第2-100図)

A-SK1099は調査区中央の北寄り、L-39区で検出された土坑である。土坑の規模は南北3.3m、東西3.3mで、平面形が緩い三角形をしている。深さは約30cmで床面は平坦である。遺構の真ん中を南北にA-SD1506が掘り込まれているが、A-SK1099はそれが埋め立てられた跡につくられている。

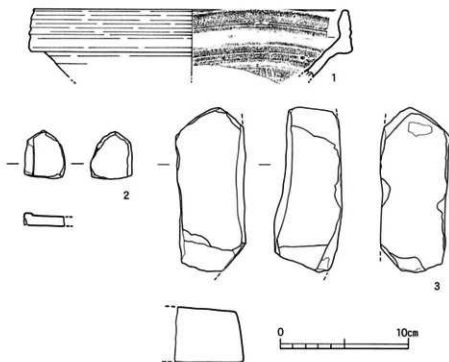
備前系

遺構内からは第2-101図に図示した遺物が出土した。1は備前系陶器の插鉢である口径24.6cmで、内面に掘り目がわずかに認められる。2は碗の破片である。3は周辺を欠くが、長さ13cm、幅5.4cmが残されている。この3点以外にも、土坑からは、景德鎮窯系青花碗、龍泉窯系青磁碗、中国産白磁皿、ロクロ成形による在地系土師質土器、須恵質土器等の破片が出土している。

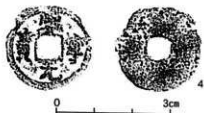
銅銭

また、第2-102図に図示した銅銭は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年(北宋)である。

以上の遺物の出土状況や、遺構の切り合い関係から、A-SK1099の時期を考えると、A-SD1506よりも新しい16世紀後葉から末葉と想定できる。



第2-101図 A-SK1099出土遺物実測図



第2-102図 A-SK1099出土遺物実測図

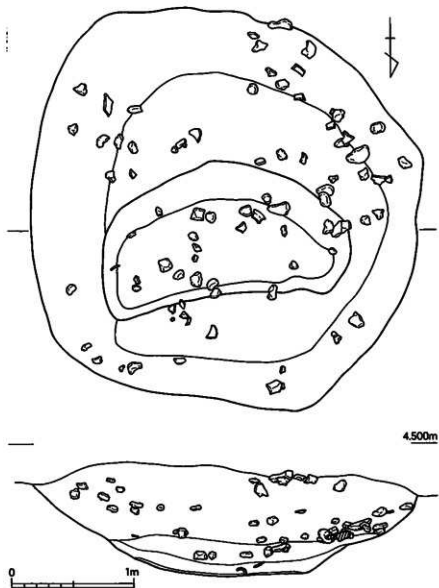
第2節 遺構と遺物

A-SK1100 (第2-103図)

A-SK1100は調査区の北西部、K-39区で検出された土坑である。検出面では南北3.1m、東西3.1mのほぼ円形土坑で、深さは0.9mである。底面は不定形で、二段階状になっており横断面が丸くなっている。

龍泉窯系
備前系

この遺構からの遺物の出土は比較的多く、第2-104図に図示したのがその主要なものである。1は龍泉窯系青磁碗である。2は備前系陶器の壺の口縁部である。3・4はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。3の口径は10.8cm、4は口径11.2cm、底径8.4cm、器高3.5cmで、糸切り底の底部には板目が付いている。口縁部の器壁は中位が厚くなり、先端は丸く仕上げている。5・6は京都系土師器で、口径は5が8.2cm、6は10.2cmで、器高は2点とも2cmである。ほぼ完形品の6の口縁部にはススが付着しており、灯明皿として使用されている。



第2-103図 A-SK1100実測図

7は口縁部が屈曲する土鍋である。外面は横方向の撫で、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。8は厚さ1.8cmの平瓦である。両面撫でで仕上げられている。9は口径42cmの瓦質土器である。器面はヘラ磨きされており、口縁端部はやや肥厚し、2cm幅の平坦面を造り出している。遺構内からは、これ以外に景徳鎮窯系青花碗・龍泉窯系青磁碗・中国産白磁・備前系陶器・須恵質土器などの小片が多数出土している。こうした遺物の状況から、この遺構の時期を考えると、景徳鎮窯系青花碗と京都系土師器が一定量含まれることから、16世紀後葉から末葉とする。

A-SK1101 (第2-105図)

A-SK1101は調査区の北西部で検出された遺構で、A-SK1099・A-SK1100・A-SK1104・A-SD1506と複雑に切り合う。このため、遺構の形態は不明確で、確認できる範囲では長さ約3mの溝状である。幅は約1.5mで、検出面からの深さは約60cmある。底面は平坦であるが、幅は30~70cmと一定していないが、断面は逆台形を呈する。発掘中に磁が多数出土したが、第2-105図に見られるように、これらは遺構が埋められる最終段階に投入されたものであろう。

備前系

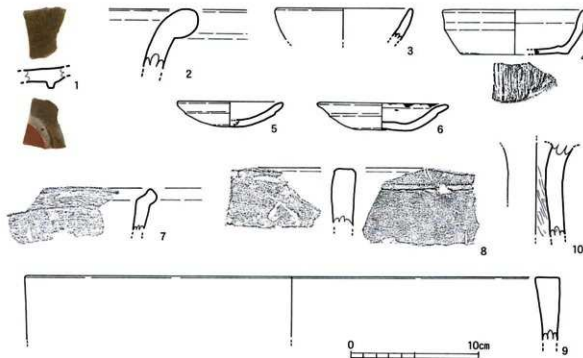
遺構から出土した遺物は第2-107図に図示したが、1は備前系陶器の口縁部が直立する壺である。

焼塩壺の蓋

口縁端部の肥厚が目立たない。2~4はロクロ成形の在地系土師質土器である。2は口径9.2cm、底径7cm、器高1.3cmの皿である。口縁端部が尖るように底部から引き出されている。3は非ロクロ成形の皿である。京都系土師器と胎土と焼成が類似し、焼塩壺の蓋の可能性もある。口径5cm、器高1.5cmである。4は口径10.1cm、底径5.4cm、器高2.1cmで、同種の土師質土器に比較すると底径が小さい。5は瓦質土器の鉢である。口縁部は内湾し、端部を肥厚させ、口唇部を平坦に仕上げている。外面は低い凸帯を平行して二条巡らせている。第2-106図の銅銭は初鋳年が1078年(北宋)の「元豊通寶」である。

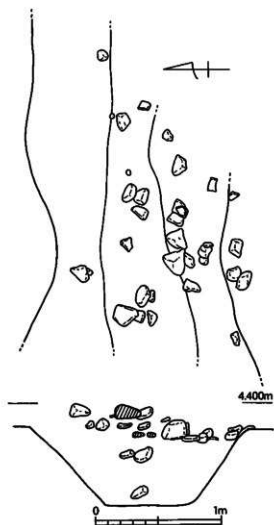
銅銭

遺構の時期は、3の土師質土器は16世紀代の可能性はあるが、他の遺物やA-SK1099・A-SK1100・A-SK1104・A-SD1506との切り合い関係などから15世紀後葉以前と想定される。

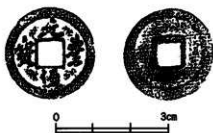


第2-104図 A-SK1100出土遺物実測図

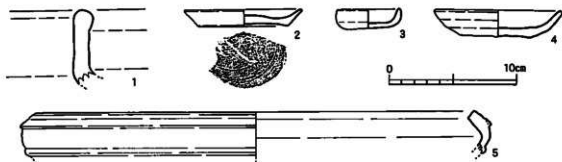
第2節 遺構と遺物



第2-105図 A-SK1101実測図



第2-106図 A-SK1101出土銭実測図



第2-107図 A-SK1101出土遺物実測図

A-SK1104 (第2-108図)

A-SK1104は、調査区の西寄り、K-39区で検出された土坑である。遺構の東南部を16世紀後葉から末葉のA-SK1100と切り合い、東側はA-SK1101、北側はA-SK1107と切り合う。土坑の規模は、上面が南北約4.2m、東西約3mの緩い方形をしている。遺構内を掘り下げた結果、北側の壁は緩斜面となっており、検出面から底面までの深さは約1mである。底面の規模は南北1.8m、東西1.85mである。

備前系

遺構内からは拳大の礫が多数出土したが、第2-108図に見られるように、上層と下層に分かれており、埋め立ての状況を知ることができる。遺物も多く、備前系陶器や在地系土師質土器など、約200点が出土している。第2-110図はその代表的な遺物である。1・2は備前系陶器の挿鉢である。1は口縁部が小さく屈曲して立ち上がり、先端部は尖る。内面には口縁部に直角に入られた罫目が認められる。2は口径26.4cmで、口縁部は屈曲して直立し、幅広い口縁帯を形成している。口縁



第2-108図 A-SK1104実測図

第2節 遺構と遺物

端部は丸く仕上げられ、外面は横ナデで、明確な凹線状の文様は認められない。内面には、8本単位の備前状工具による描目が4cm間隔で、口縁部に直角に施文されている。

3～6は口くろ成形による在地系土師質土器である。3は器高1.5mの皿である。4は口径7.2cm、底径6cm、器高1.6cmの小型の坏である。5は底径6.6cmで、底部には糸切り痕の後、板目が付いている。6は口縁部が底部から直線的に伸び、内面にはラセン状の段が生じている。

東播系

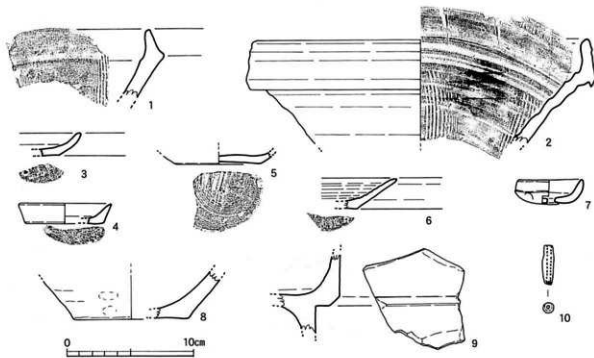
器高は2.5mである。7は京都系土師器と同じ製作方法で胎土と焼成である。底部には穿孔が認められる。8は須恵質土器の底部である。器面調整は外面が横撫でで、東播系須恵質土器の握ね鉢の底部と考えられる。9は瓦質土器で、鉢の脚部である。10は紡錘形の土錘で、長さ3.1cm、直径0.9cm、重さ1.9gを測る。遺物は、以上の10点以外にも龍泉窯系青磁や中国産白磁の小破片や、口くろ成形による在地系土師質土器が出土している。第2-109図の銅銭は初鑄年が1408年（明）の「永楽通寶」である。

永楽通寶

A-SK1104の時期は、出土遺物の中に、7のような京都系土師器が極わずかに含まれるものの、上面からの出土ととらえられる。また、周辺の遺構との切り合い関係も考慮すると、備前系陶器の描鉢や6の内面にはラセン状の段がある在地系土師質土器の時期である15世紀末から16世紀前葉と考える。



第2-109図 A-SK1104出土銭実測図



第2-110図 A-SK1104出土遺物実測図

A-SK1105 (第2-112図)

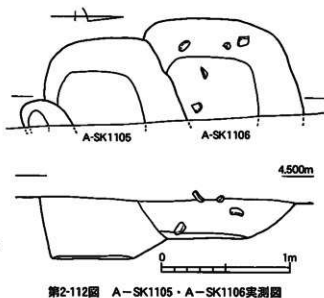
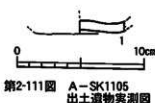
A-SK1105は北側でA-SK1106と南側で柱穴と切り合い関係にある。遺構の規模は、東側が未調査で不明であるが、遺構の規模は、南北約1.2m、東西も1m以上ある。深さは45cmで、底面は南北約70cm、東西50cm以上が想定される。

出土遺物は、第2-111図にロクロ成形による在地系土師質土器の坏を図示している。その他、龍泉窯系青磁・中国産白磁・瀬戸美濃系陶器・京都系土師器の小片が出土している。

A-SK1106 (第2-112図)

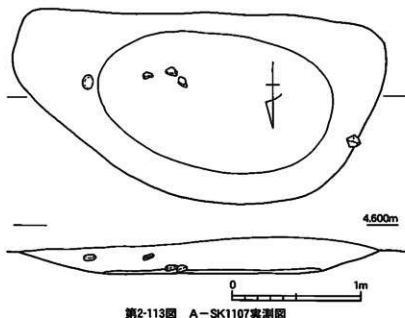
A-SK1106はA-SK1105と南側で切り合う。土坑の規模は、南北約1.5m、東西1m以上、深さ30cmで、底面の規模は、南北約1m、東西50cm以上と推定できる。

遺構内からは、景徳鎮系青花・瓦質土器・ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土している。



A-SK1107 (第2-113図)

A-SK1107は調査区の北西隅、K-38区で検出された。南側を15世紀末から16世紀前葉のSK1104、東側を16世紀後葉から末葉と考えられるA-SK1107と切り合う。遺構の規模は、南北1.5m、東西2.9m、深さ約30cmで、底面の規模は南北1m、東西1.2mの楕円形をしている。



第2節 遺構と遺物

遺構内からは、小皿が出土したものの、遺物はほとんど出土していない。このため遺物から時期を決めることはできないが、他の遺構との関係で、16世紀末葉と考えられる。

その他の土坑出土遺物

府内町跡20次調査A区で検出した土坑は、以上報告した以外にも、多く確認された。以下それらの土坑出土の遺物を第2-114図に図示し報告する。

A-SK1001 1・2はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1005 3は口径9cm、器高2.6cmの京都系土師器の坏である。器壁が比較的厚く、16世紀後葉から末葉と考える。

砥石

A-SK1009 4は砥石の破片である。

A-SK1020 5は口縁端部が肥厚する瓦質土器の口縁部である。

A-SK1022 6は8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の蓋である。口径12.4cmで、器面は回転へら磨きである。

A-SK1025 7はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、底径9.4cmである。底部に回転糸切の後、板目の圧痕が付く。

A-SK1037 8は土師質土器を円形に加工したメンコ状の土製品で、径3cmである。

A-SK1041 9・10はロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、10の口径は8.4cm、底径6.6cm、器高1.3cmである。11・12は京都系土師器である。遺構の時期は16世紀後葉から末葉と考える。

A-SK1044 13は須恵質土器の底部である。外面は横撫でで調整されている。

A-SK1047 14~16・18はロクロ成形による在地系土師質土器で、14は皿である。15は口径11.4cm、底径7.4cm、器高3.3cmである。口縁部の器壁は中位で肥厚し、先端部は尖る。16は口径13.6cm、底径9cm、器高3.9cmである。口縁部の器壁は上位で肥厚する。18は底径9.6cmである。17は京都系土師器で器高が高い。19は口縁部が肥厚する東播系須恵質土器の鉢である。20は口縁端部が肥厚する瓦質土器である。器面は内外面横方向のへら磨きで調整されている。京都系土師器が出土しており16世紀後葉から末葉と考える。

東播系

A-SK1049 21~23はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。21は器高2.8cmである。口縁部は底部近くが厚く、口縁先端部に向けて尖るように成形している。22は口径11cm、底径8.6cm、器高3.4cmで口縁部は直立気味に立ち上がり、端部はやや外反する。23は口径11.8cm、底径8.6cm、器高3.1cmで口縁端部は直線的に伸び、尖る。時期は14世紀末から15世紀前葉と考える。

A-SK1053 24は底径6cmのロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1060 25はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。

A-SK1061 26は口径12.2cm、器高2.3cmの京都系土師器で、16世紀後葉から末葉と考える。

A-SK1062 27は8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の蓋と考えられる。28はロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、器高は1.5cmである。口縁部の立ち上がりは小さく、底部の器壁は厚くA-SD1505出土の同類の皿に類似する。

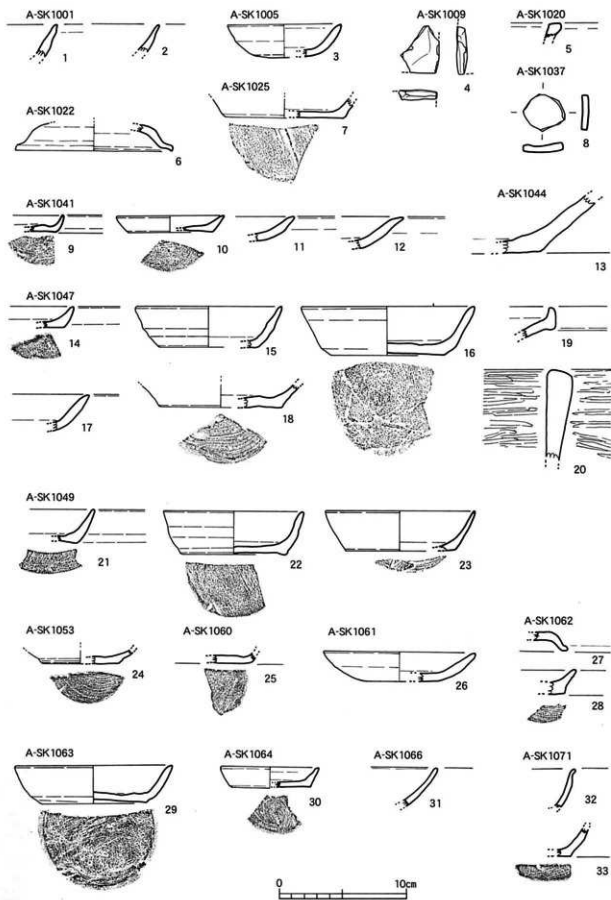
A-SK1063 29はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、口縁部の器壁はほぼ一定で、先端が尖る。

A-SK1064 30は口径9.8cm、底径6.4cm、器高1.6cmのロクロ成形による在地系土師質土器で、口縁部の立ち上がりが高く、小型の坏である。

A-SK1066 31は、器壁が均一で薄く、器面調整は横方向のへら磨きであり、この調査区で出土する8世紀後半から9世紀前半頃の土師器の坏の口縁部と思われる。

内黒土器

A-SK1071 32は外面が褐色、内面が黒色の内黒土器である。33はロクロ成形による在地系土師質土器で、口縁部の立ち上がりから坏と考える。



第2-114図 府内町跡第20次調査区土坑出土遺物実測図

4. 井戸

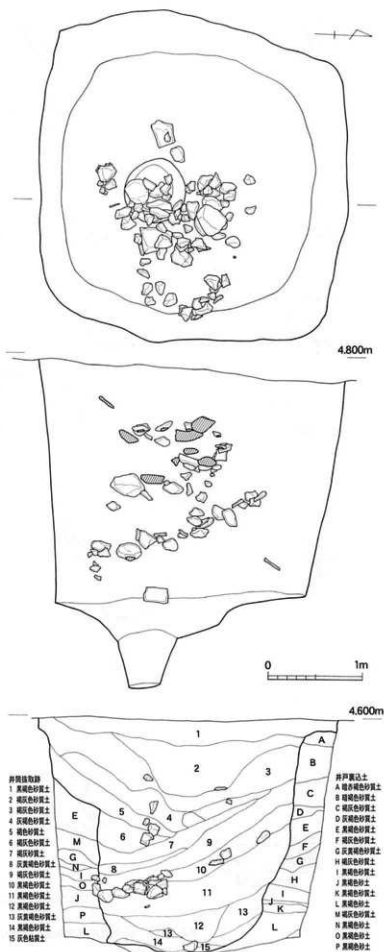
府内町跡20次調査A区からは井戸が1基検出されている。この調査区の周辺である北側の府内町跡21次調査区や南側の府内町跡20次調査B区では、数基の井戸が検出されていることから、井戸の空白地帯とも言える。

A-SE1045(第2-115図)

井戸遺構であるA-SE1045は調査区の南西隅、K-41区で検出された。井戸は、平面を南北8.2m、東西3.4mの緩い方形形状にとり、それをほぼ垂直に2.5m掘り下げ、竪穴を掘削している。それから、その底面のほぼ中央に、上面径約80cm、底面径約40cm、深さ約80cmの円形土坑が掘り下げ、最下部の井筒を設置したと思われる。

しかし、土層断面を観察すると、最下部まで完全に掘り返しが行われており、井筒は撤去されている。

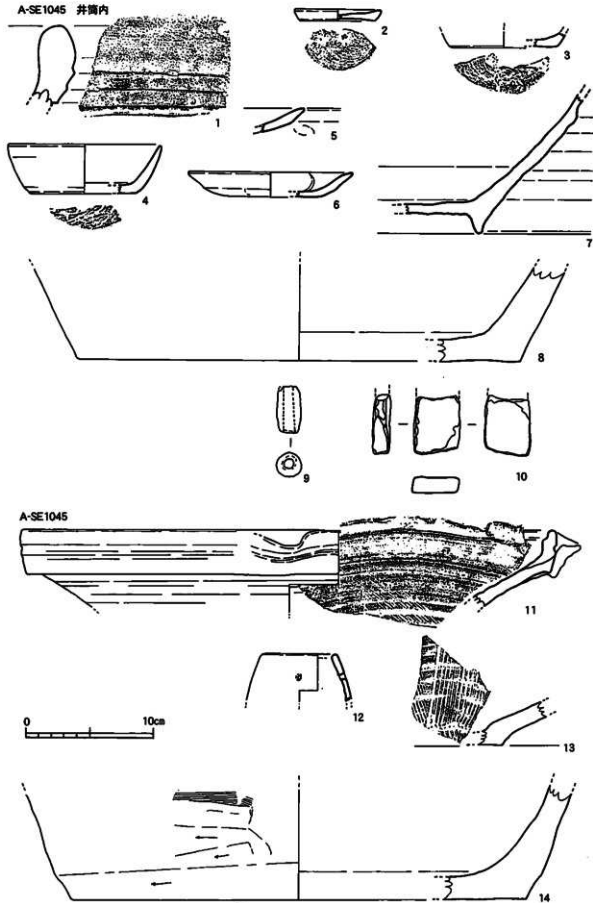
出土遺物は、この掘り返しを行った時の埋め戻し作業の中で、大小の礫と一緒に廃棄されたものである。これらの遺物は、第2-116図に図示したが、1~10の井筒内と表示したのは、遺構の掘り下げ直後、中心部から集中的に遺物が出土したため、井筒が残っていると考え、取り上げを別にしたものである。しかし、結果的にはこの遺物も他に図示したものと同じ状況で埋まったものと推測される。



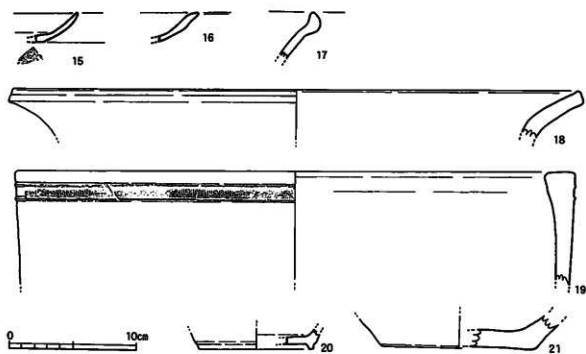
- 備前系 1は備前系陶器の大甕の口縁部である。2・3・4はロクロ成形による在地系土師質土器である。2は皿で口径7cm、底径6cm、器高0.9cmで、口縁部の立ち上がりはほとんど無く、端部が肥厚した状態である。3は底径8.4cmの坏で、4も口径12cm、底径8.4cm、器高3.9cmの坏である。この3点は、東側にあるA-SD1505と同類で、井戸を埋める際に混入したものと考えられる。
- 備前系 5・6は京都系土師器で、5は外面に指圧痕が残る。6は口径13cm、器高2cmで、内面には指による撫で上げ痕が残る。7は断面三角形の高台が廻る鉢の底部で、備前系陶器であろうか。8も備前系陶器で、大甕の底部で、底径35cmである。
- 土鍾 9は土鍾の完形品である。長さ3.7cm、最大径2cm、12.5gで、他の紡錘形の土鍾に比較すると太くて穴が大きく、0.7cmである。
- 砥石 10は半分を欠くが、扁平な天草石製の小型の砥石である。残された長さは4.5cmで、幅は3.7cm、厚さは1.3cmである。
- 備前系 以下、第2-116図11-14・第2-117図の遺物は、A-SE1045の全体から出土した遺物である。
- 備前系 11-14は備前系陶器である。11・13は罎鉢で、11は口径42cmで、注口部を持つ。口縁部内面には凹線状の窪みが廻る。罎目は斜め方向に施文されている。13は底部であるが、ここにも斜め方向の櫛齒状工具による罎目が施文されている。12は口縁部が内湾する器壁の薄い器種である。口径6cmの口縁部下には焼成前の穿孔があり、掛け花入れの可能性もある。14は底径36cmの、大甕の底部である。内面は横方向の撫で、外面底部近くは、ヘラ削りによる器面調整で、自然釉が付着している。
- 第2-117図15はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、断面を見ると、口径に比較すると底径が小さい碗状の形態と考えられる。16は京都系土師器である。器面は横方向の撫でで調整されている。17・18は須恵質土器で、17は口縁部外面が肥厚する東播系の鉢である。18は口縁部が大きく外反する口径約45cmの大甕と考えられる。胴部は不明であるが、格子目叩きが想定され、亀山系須恵質土器と考えられる。
- 19は、瓦質土器の火鉢である。器面は内外面横方向のヘラ磨きで器面調整され、口径44cmの口縁部は肥厚し、口唇部は平坦に仕上げている。口縁部外面には平行に二条の細い突帯文が廻る。その間には2単位を1つとする雷文を並べて二度押す、スタンプ文が付けられている。
- 20は底径9cmの須恵器の坏である。底部に高台が付く、8世紀後半から9世紀前半と考えられる。
- 21は瓦質土器の底部である。底径11.8cmで器面は撫で仕上げで、器面調整されている。
- 銅銭 第2-118図22の銅銭は行書体で書かれた「紹聖元寶」で、初鑄年は1094年（北宋）である。
- 以上の出土遺物から、井戸の時期は、第2-116図5・6の京都系土師器や11の備前系陶器の罎鉢が出土していることから16世紀後葉から末葉に近い時期に機能していたものとする。

第2節 遺構と遺物

A-SE1045 井筒内



第2-116図 A-SE1045出土遺物実測図(1)



第2-117图 A-SE1045出土遺物実測図(2)



第2-118图 A-SE1045出土銭実測図

5. 柱穴及び柱穴状遺構

府内町跡20次調査A区では、さまざまな規模の掘り込みが検出された。このうち比較的大型のものを土坑として報告を行った。これに対し、小型の掘り込みは、直接遺物とは結びつかないが、遺物の出土したものを中心に、柱穴及び柱穴状遺構として、第2-119図に遺構、第2-120・2-121図に遺物を図示し報告を行う。

A-SP036

A-SP036は南北40cm、南北40cm、深さ15cmの規模の浅い遺構である。出土遺物は第2-120図1～5に図示した。1・3・4はロクロ成形による在地系土師質土器である。1は口縁部のみで、3は底径9.2cmの底部である。4は口径12cm、底径8.2cm、器高4.1cmの坏である。2点の坏は底部周辺の脚壁が厚く、口縁端部にかけて直線的に延び、先端が尖る。

2は口縁部を欠くが、底径3.6cmの須恵質であり、瀬戸美濃系陶器の坏と考える。5は底径6cmの瓦質土器の坏である。

この遺構の時期は、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏の形態から、15世紀前葉と考える。

A-SP043

A-SP043は直径32cm、深さ約50cmの遺構である。遺物は第2-120図6～8で、6の口縁部と、7の底径6.4cmの底部は、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。8は一部を欠くが残された長さは4.2cm、最大径1.1cm、重さ5.4gである。

A-SP045

A-SP045は直径約32cm、深さ26cmの遺構である。遺物は第2-120図9で、口縁部が屈曲する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は横方向の撫で、指圧痕が残る。

A-SP077

A-SP077は長径40cm、短径30cm、深さは22cmの遺構である。遺物は第2-120図10の、底径7.2cmのロクロ成形による底部の厚い在地系土師質土器の坏である。

A-SP081

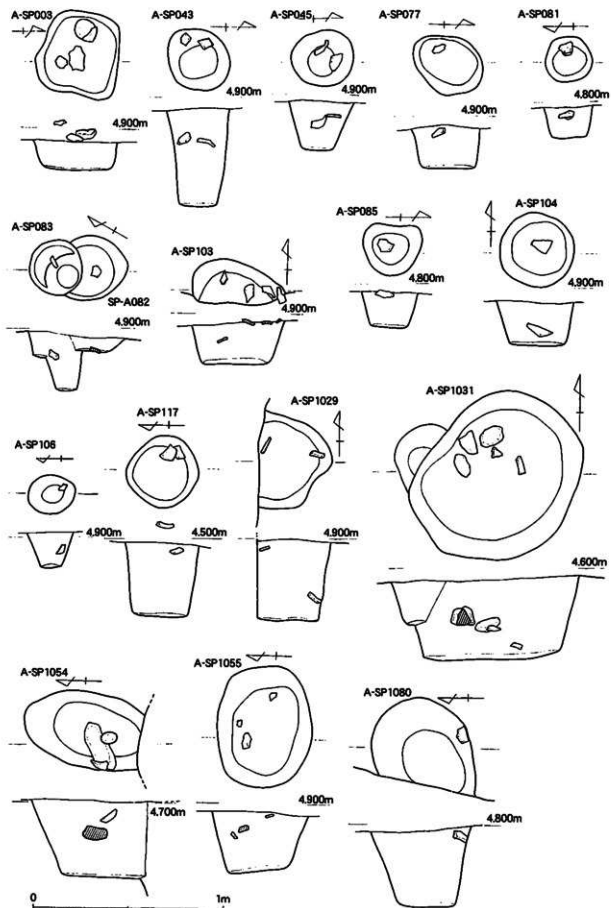
A-SP081は直径24cm、深さは15cmの遺構である。遺物は第2-120図11の土器で、底径6cmの上げ底の弥生時代の変形土器である。磨滅しており、混入品と考える。

A-SP082

A-SP082はA-SP083と切り合う直径33cm、深さは7cmの遺構である。図示はしていないが、土師質土器の破片が出土している。

A-SP083

A-SP083はA-SP082と切り合い、直径28cm、深さは30cmの遺構で、二段掘りになっている。遺物は第2-120図の12のロクロ成形による在地系土師質土器の坏と瓦質土器の破片が出土している。



第2-119図 府内町跡20次調査A区主要柱穴実測図

第2節 遺構と遺物

A-SP085

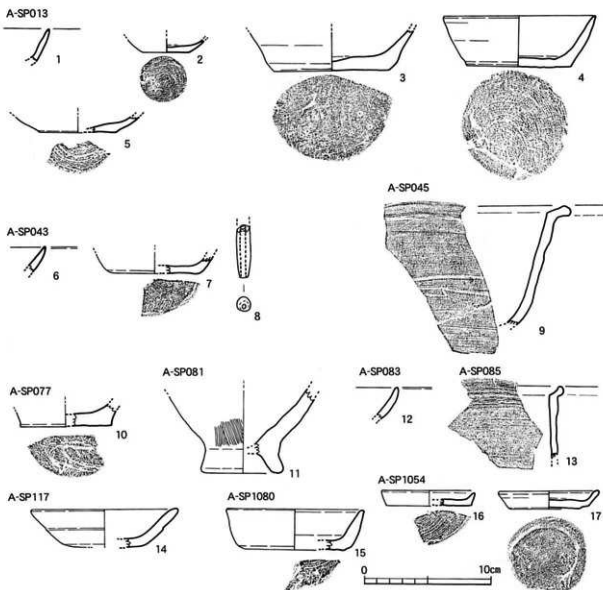
A-SP085は、東西27cm、南北32cm、深さ18cmである。遺物は、第2-120図に図示した13の口縁土鍋

A-SP103

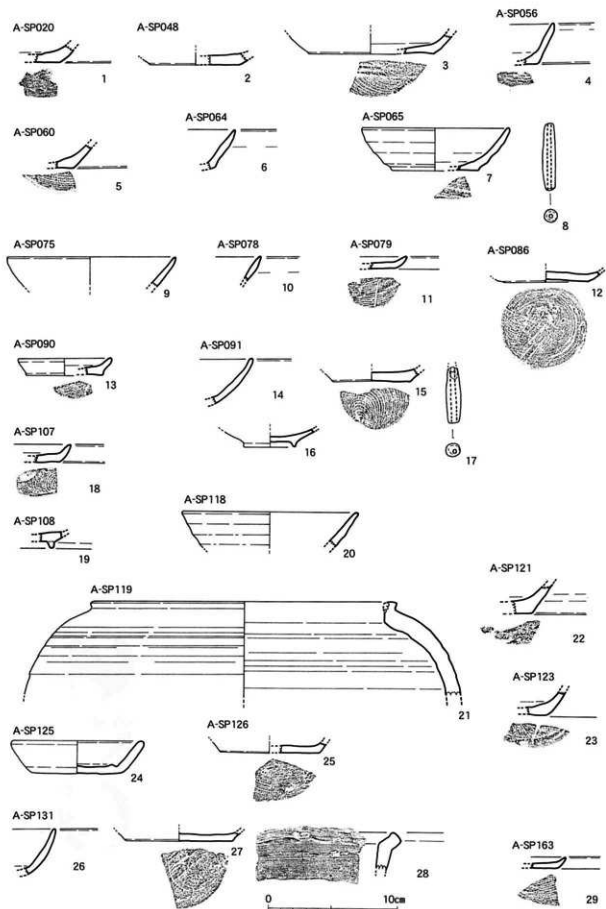
A-SP103は南側をA-SD1505と切り合う。確認できる規模は、東西50cm、南北20cm以上、深さ22cmである。遺物は、ロクロ成形による在地系土師質土器の破片が出土している。

A-SP104

A-SP104は直径39cm、深さ23cmで、遺構内からは、備前系陶器の小片が出土している。



第2-120図 府内町跡20次調査A区主要柱穴出土遺物実測図



第2-121图 府内町跡20次調査A区SP出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

A-SP106

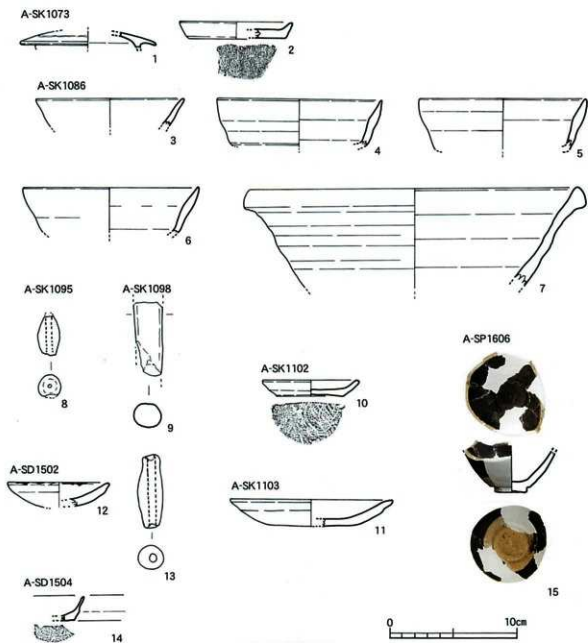
A-SP106は南北25cm、東西20cm、深さ18cmである。遺構内からは、ロクロ成形による在地系土師質土器の破片が出土している。

A-SP117

A-SP117は直径38cm、深さ40cmで、遺構内からは、第2-120図14の口径10.4cmの京都系土師器が出土している。16世紀後葉から末葉である。

A-SP1029

A-SP1029は西側の壁沿いで検出された直径約50cm、深さ43cmの遺構で、ロクロ成形による在地系土師質土器と須恵質土器の小片が出土している。



第2-122図 府内町跡20次調査A区各土坑出土遺物実測図

A-SP1031

A-SP1031は南北90cm、東西80cm、深さ42cmの大型の遺構である。遺構内からは、礫のほか、ロクロ成形による在地系土師質土器の破片が出土している。

A-SP1054

A-SP1054の南側は、京都系土師器を出土するA-SP1030と切り合う。遺構の規模は南北約70cm、東西40cm、深さも40cmである。出土遺物は、第2-120図に図示した16と17のロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、口径7.4cm、底径6.8cm、器高1.1cmで、17は口径8cm、底径6cm、器高1.4cmである。

A-SP1055

A-SP1055は南北約65cm、東西50cm、深さも33cmである。遺構内からは小破片であるが、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器、須恵質土器が多数出土している。

A-SP1080

A-SP1080は西側の壁沿いで検出された南北約52cm、東西55cm、深さも42cmである。遺構内から第2-120図15に図示した、底部周辺の器壁が厚く、口縁端部にかけて尖るように成形する、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口径11cm、底径9cm、器高3.3cmである。

以上のほか各柱穴および柱穴状遺構から出土した遺物を第2-121図に遺構名を明記し報告する。

1～6はいずれも小破片であるが、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。2の底径は7cm、3は9.8cmで、口縁部である4は器高3.2cmである。7・8はA-SP065出土であるが7は口径11.6cm、底径6.8cm、器高3.3cmの碗形の在地系土師質土器である。また8は土鍾で、長さ5.3cm、径1cm、重さ5.4gである。9～13はロクロ成形による在地系土師質土器で、9の口径は13.2cm、皿である11の器高は1cm、12の底部の径は6.4cmで、復元完形の13の皿は口径7.2cm、底径6cm、器高1.3cmである。

A-SP091からは14～17が出土している。15は底径6cmの在地系土師質土器の坏である。14・16は吉備系土師器は色調が白く、底部は径4cmで断面三角形の小さい高台が付く吉備系土師器である。また17は一部を欠く土鍾で、長さ4.5cm、径1.2cm、重さ4.7gである。

18は器高1.4cmの在地系土師質土器の皿である。19は小さい高台が付く瓦器碗の底部である。20は口径14cmの在地系土師質土器の坏である。21は備前系陶器で、口縁内端部を欠く径21cmの水屋甕である。22～29の24は口径12.4cmの京都系土師器で、28は口縁部が屈曲する土鍋であるが、それ以外はロクロ成形による在地系土師質土器である。

第2-122図は土坑出土の遺物である。1・2はA-SP1073出土で、1は備前系陶器の径10.6cmの受けの付く蓋である。2は口径9cm、底径7.8cm、器高1.3cmの在地系土師質土器の皿である。3～7はA-SP1080出土で、7は東播系須恵質土器の口径27cmの鉢であるが、それ以外はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。口径は3が11.6cmであり、4は12.8cm、5は12.8cm、6は13.5cmで口縁部の器壁は中位が厚く口縁端部は尖る器形で同一個体の可能性が高い。

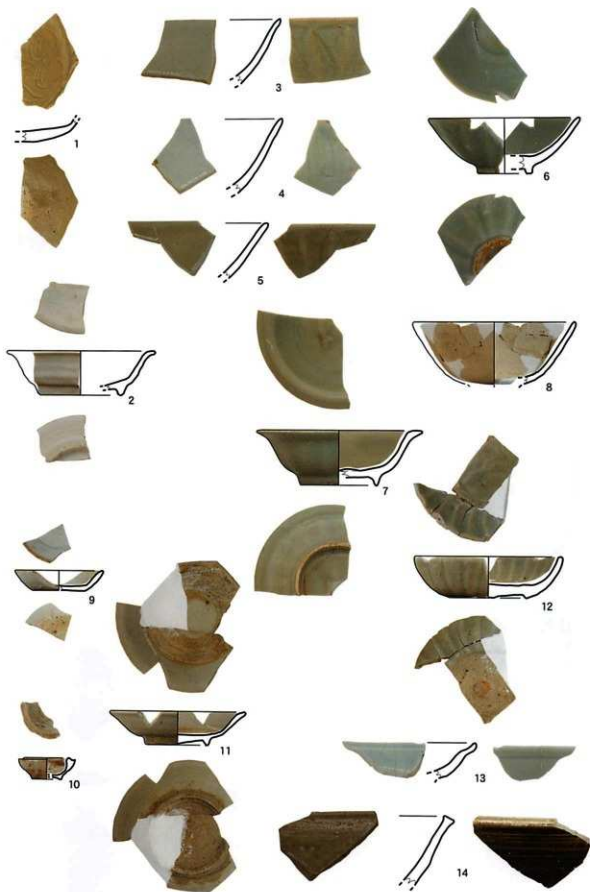
土鍾
A-SP1095出土は長さ3.3cm、最大径1.8cm、重さ6.8gの紡錘形の土鍾である。9はA-SP1098出土で、土鍋の脚で、長さ5.8cm残されており、径約2.2cmである。A-SP1102からは10の在地系土師質土器の口径7.8cm、底径5.8cm、器高1.3cmの皿が出土しており、A-SP1103からは11の口径12.9cmの京都系土師器が出土している。16はA-SP1606出土で、底径3.1cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。

瀬戸美濃系

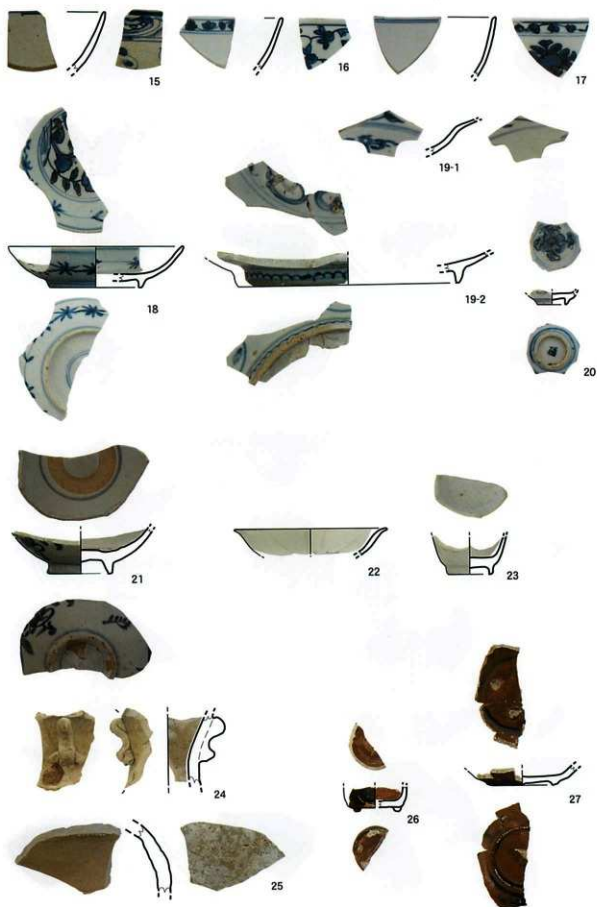
6. 整地土及び包含層

府内町跡20次調査A区の調査では、表土の除去から遺構検出に至るまでの整地層、又は遺物包含層から多量の遺物が出土している。ここでは、それらの中から、主要な遺物を第2-123-2-133図に図示し、報告する。

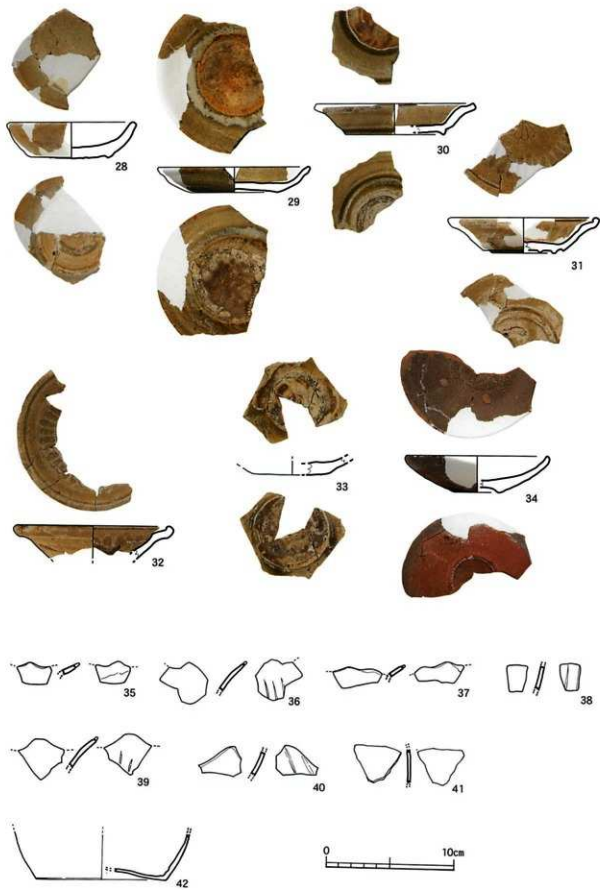
- 第2-123-2-125図の24~34以外は貿易陶磁器である。第2-123図の1は見込みに文様のある同安窯系青磁である。2は口径11cm、底径5.8cm、器高3.3cmの中国産白磁である。3~6は龍泉窯系青磁碗の口縁部で、外面には鑄蓮弁が付く。図上復元できる6は口径11.8cm、底径3.4cm、器高4.9cmで外面に鑄蓮弁が運る龍泉窯系青磁碗である。7も龍泉窯系青磁碗であるが、口縁端部が外反し口径は11.4cm、器高4.3cm、底径5.7cmで全面施軸され、見込みに双魚文の一部が確認される。8は口径12.2cm、残された器高は4.7cmの中国産白磁碗である。9は口径6.6cm、底径4.0cm、器高1.5cmの中国産の口壳の白磁皿である。
- 10は口径3.2cm、底径2.2cm、器高1.6cmの中国産青白磁の合子である。11は口径10cm、底径4.3cm、器高2.5cmの中国産白磁皿である。底部は蛇の目軸刺ぎである。12は口径10.4cm、器高3.0cm、底径5.6cmの龍泉窯系青磁皿である。見込みに「富貴長春」と推定される銘が確認される。13は、龍泉窯系青磁の皿で、14は中国産羯輪陶器である。
- 第2-124図の15~20は景徳鎮窯系の青花磁器である。15~17は碗であり、18は口径13.2cm、底径6.6cm、器高3.1cmの皿である。19-2は底径16.9cmの大皿の底部で、19-1は、皿の口縁部である。20は底径2.1cmの小杯の底部である。見込みに花文、底面に「福」が書かれている。21は底径4.2cmの漳州窯系青花碗である。見込み部は蛇の目軸刺ぎである。22は口径11.8cmの皿、23は底径2.6cmの小杯で、中国産白磁である。第2-125図の24~27は瀬戸美濃系陶器で、24は細い頸部の瓶で、装飾が付く。25は梅瓶の肩部と考え、菊花文のスタンプが連続して付く。26は底径3.4cmの香炉と考える。3ヶ所に小さな脚が付く。27は底径4.8cmの皿で、全面施軸されており、見込みに胎土目が見られる。
- 第2-125図の28~33は瀬戸美濃系陶器の皿である。28は口径9.2cm、底径5.9cm、器高2.7cmで、高台内側は露胎である。29は口径11.4cm、底径6.4cm、器高1.9cmで、高台内側と見込み部は露胎である。30は口径11cm、底径7cm、器高2.3cmの折縁皿で見込みは露胎である。31は口径11cm、底径4.4cm、器高2.9cmの折縁ソギ皿である。見込み中央に菊花文がスタンプされている。32は口径11.3cmの折縁ソギ皿である。33は底径5cmの底部で、見込みに重ね焼きの跡が残る。
- 34は国内産で、肥前系陶器と考えられる。口径10.6、器高2.8cm、底部は萁苜底で、径は3.2cmを測り、外面の口縁部周辺以外は露胎で、見込みに胎土目が付く。
- 第2-125図35~41は磁壇窯系陶器で、口縁部は外反し輪花状になり、外面にヘラで文様が描かれる。小片であるが、器面には緑色の釉が付けられている。
- 42は朝鮮王朝産陶器の舟徳利の底部で、底径は10cmである。内外面撫で仕上げである。
- 第2-126図の43~45は常滑系陶器で、口縁部の折返し部の幅は3cmである。44と45の口径は、15.2cmと17.6cmで小型の壺であり、45の口縁部には自然釉が見られ、胴部最大径は21.6cmで、周辺は縦方向の刷毛目調整である。
- 46~59は備前系陶器である。46は口径6.2cmで、47と同一個体であり、最大径は8.2cmの掛花入れ考えられる。また、この2点と第2-116図12は同一個体と考えられる。48~52は口縁部が内湾する鉢である。中でも51は口径28.2cm、底径18cm、器高9.2cmで口縁端部がわずかに内湾する皿状をしている。底部にはヘラ記号が書かれている。また、52は口径14.8cm、底径8.8cm、器高4.9cmの鉢形である。いずれも器面は横撫でで調整されている。53~56は徳利形と考えられる。53は口縁部で、口径3cmである。54~56は底部で、底径は54が5cm、55が7cm、56が5.2cmで、54と55にはヘラ記号が



第2-123図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(1)



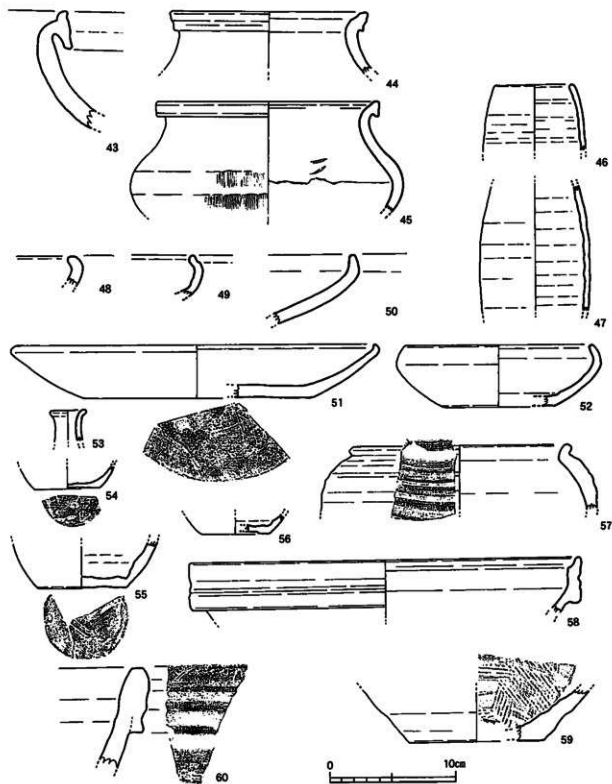
第2-124図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(2)



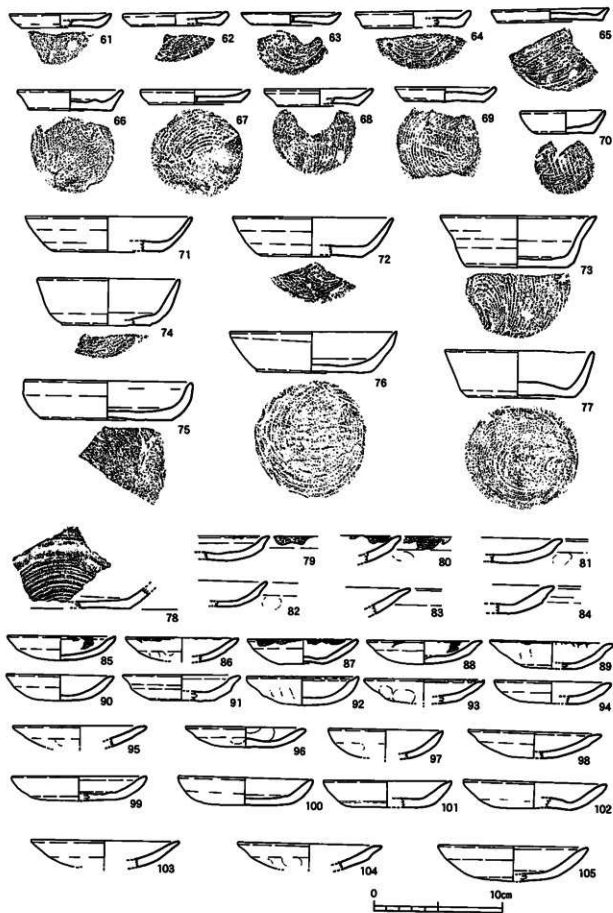
第2-125図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(3)

第2節 遺構と遺物

水屋裏 ある。また、56の底部は幅広の低い高台が廻り、精製粘土を使用している。57は口径17.4cmの水屋裏で、58は口径30.8cmの楕鉢で、底径10.4cmの59の底部斜め襷目目に加えられると想定される。60は大甕の口縁部である。

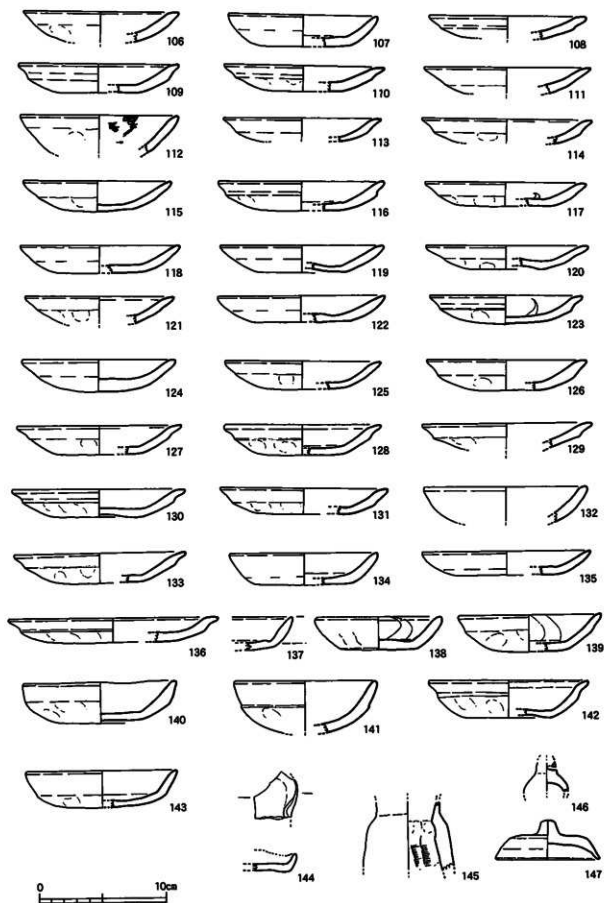


第2-126図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(4)

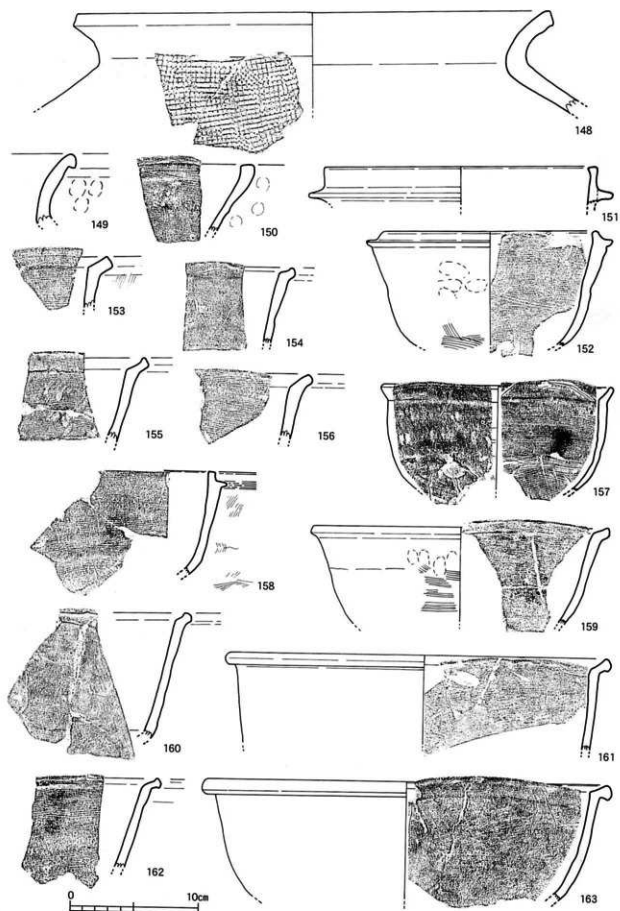


第2-127图 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(5)

第2節 遺構と遺物

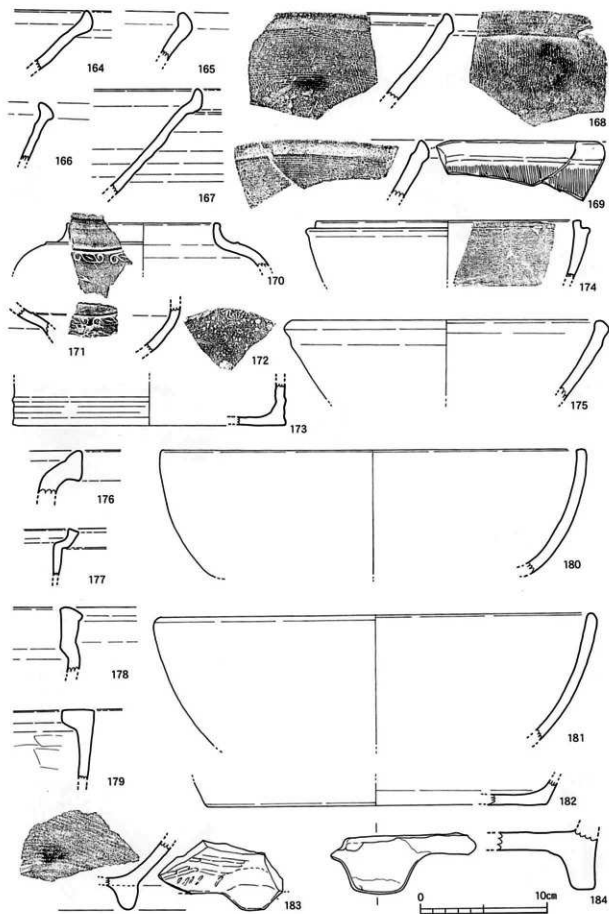


第2-128図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(6)

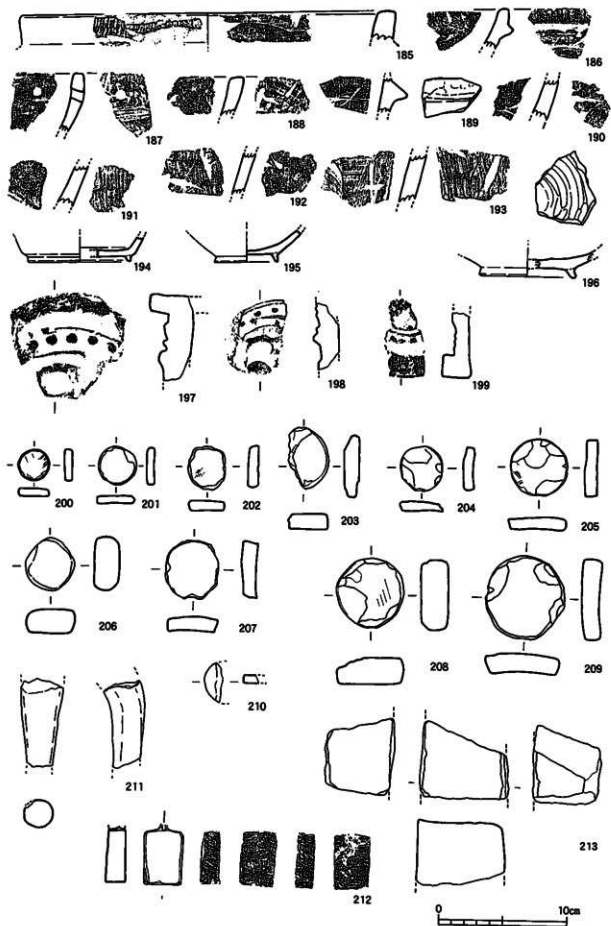


第2-129図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(7)

第2節 遺構と遺物



第2-130圖 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(8)



第2-131图 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(9)

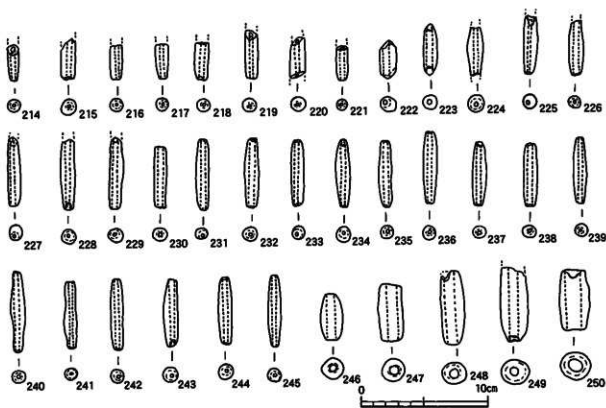
第2節 遺構と遺物

第2-127図の61~77はロクロ成形による在地系土師質土器の皿である。61~69の口径は64・65が9cmを超すが、他は8.5cm前後である。糸切された底径も、68が最大で口径より2.2cm小さい6.4cmであるが、他は1~2cm小さい。器高は、66は器高が1.6cmとやや高いが、他は1~1.4cmである。70は口径6.7cm、底径4.7cmに対し器高が1.8cmと高く、小型の坏状をしている。71~77は在地系土師質土器の坏である。口径は74・77がやや小さく11.2cmと11.6cm、76はやや「歪」であるが最大で13.2~13.5cmを測る。71と75は13cmで、72・73は12.6cmと12.2cmである。底径は74が最小で7cm、75が最大で10cm、他は8.5cm前後である。器高は、口縁部形態と関連し、内湾気味になる75は3cmと低いが、大きく外反する73は4cmである。また、口径が小さく底部周辺の器壁が厚く、口縁端部にかけて薄くなる74・77も3.7cmと比較的高い。これに対し、口縁部の器壁の薄い71、口縁部上位が厚くなる76などは3cm前後である。

第2-127図78もロクロ成形による在地系土師質土器の皿であるが、内面に小さな段が付き、口縁部は「ハ」の字状に開く。

第2-127図79~105・第2-128図106~143は非ロクロ系土師質土器である京都系土師器である。85~94・96・97は口径8~9cm前半台がほとんどで、小型である。これらのうち、85~89の口縁部にスガが付着しており、灯明皿として再利用されている。95・98~105の口径は、10.5~11.5cmが主体を占める。また、第2-128図106~135は、口径12cm台から13cm前半である。そして、最大の口径は136の16.4cmである。このように、京都系土師器は少なくとも4~5法量に分化していることが判る。京都系土師器の時期は、16世紀中葉以降のもので、器壁の薄い119は比較的古いタイプであるが、大部分は16世紀後葉から末葉に属する。137~143は口径が10~12cmであるが、器高は3cm前後と、先に報告した京都系土師器より1cmは高く壙形をしている。

灯明皿



第2-132図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(0)

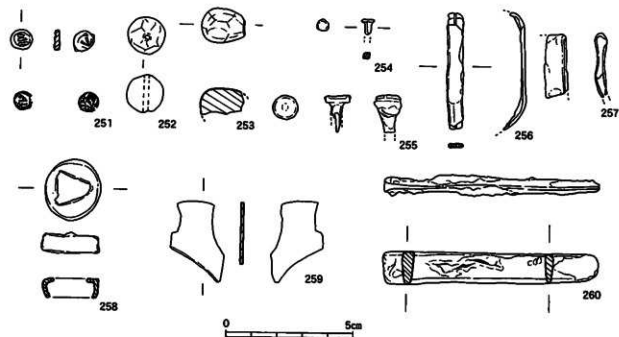
144は京都系土師器の口縁部2方向を内側に折り曲げて成形した耳皿である。145は頂部の径5cmの焼塩壺の破片と考える。146は上部につまみ状の突起が付き、そこに横方向に穿孔され紐状の形を呈する。土鈴であろうか、147は口径8.2cm、器高3.1cmのつまみの付く蓋と考える。

亀山系
第2-129図148は口縁部が外反し、胴部を格子目叩きで器面調整した口径36.8cmの亀山系須恵質土器の甕である。149も須恵質土器の口縁部で、外面には指圧痕が残る。

第2-129図150~163・第2-130図174は土鍋である。口縁部の形態は、150が外傾し口縁端部が肥厚する。内面は横方向の刷毛目で、外面は指圧痕があり、互質土器である。151は口縁部外面に突帯が廻る口径21.4cmの鈎付の土鍋である。152の口径は16.4cmであり、器面調整は内面横方向の刷毛目であり、外面は指圧痕があり、底部周辺には刷毛目が残る。153~157・159~163は口縁端部が小さく屈曲する土鍋である。口径が計測できるものは、157が18.4cm、159が23.2cm、161が24.4cm、163が32cmである。このように、土鍋には大きさに種類がある。器面調整は、内面は横方向の刷毛目であるが、外面は刷毛目のあと口縁部から胴部にかけて横方向の撫でや指押さえで調整している。なお、第2-131図211は6cm残された土鍋の脚である。

東播系
第2-130図164~167は口縁端部が肥厚する東播系須恵質土器の鉢である。器面は横方向の撫でで、内外面仕上げられている。166の一部には注口が認められる。また、167の口縁肥厚部の下位は変色しており、重ね焼きをしたものと思われる。

第2-130図168~184は互質土器である。168・169は口縁部が外傾する鉢で、内外面とも刷毛目で器面調整されている。170~172は同一個体である。口径12cmの壺形土器で、肩部に低い突帯が一条廻り、その下位に横方向の「S」字状スタンプ文が連続して押されている。また、胴部には菊花文のスタンプが押されている。A-SD1506出土の第2-23図77と同一個体の可能性が高い。173は底径21.5cmで、底部外端とその上位に細い突帯が廻る。175は口縁部外面に凹線が一条廻る口径24.4cmの鉢である。176~179は口縁部が屈曲する鉢である。176は外反し端部が肥厚する。177は口縁部が外側にクランク状に屈曲する。これに対し、178は内側にクランク状に屈曲する。さらに179は



第2-133図 府内町跡20次調査A区出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物

内側に突出するように肥厚する。これらの器面はヘラ磨きで平滑に調整されている。180は口径33.6cm、181は口径34.2cmの鉢である。器面はヘラ磨きで、口縁端部を丸く仕上げている。183と184は以上の鉢の底部に付く脚である。これらもヘラ磨きで丁寧に仕上げられている。

滑石製石鍋

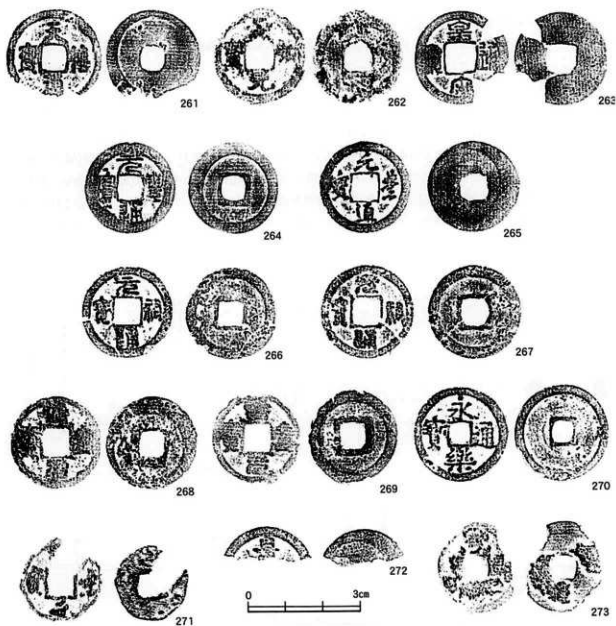
第2-131図185～193は滑石製の石鍋である。185の口径は29.6cmで、口縁部外面に186・189のような突帯が付く。また、187には穿孔が見られる。これら9点の滑石製品は、石鍋が破砕した破片の縁辺を研磨し、再利用している。

194は高台を持つ須恵器の底径8cmの坏である。195は底径5cmの瓦器碗である。196は底径7.4cmの土師器碗で、内面にヘラ磨き調整の跡が残る。

軒丸瓦

197～199は軒丸瓦である。瓦当には連珠文が見られ、中央には巴文があると推測される。

200～210は土師質土器の土器片を打ち欠き、研磨して円形に仕上げた遺物である。大きさは200が直径2.5cm、重さ5.7gで、最大は209で、直径約6.3cm、重さ92.2gである。素材も土器片が多いが、206・208は瓦と思われる。



第2-134図 府内町跡20次調査A区出土銅銭実測図

212・213は石製品で212は高さ4.5cm、幅3cm、厚さ1.4cmの滑石製で、上部に穿孔のあるつまみが付く。重さは50.2gである。213は大部分が打ち欠かれた砥石である。黄白色をしており、天草石の可能性はある。

土鍾 第2-132図は紡錘形をした土鍾である。37点を図示したが、半分近く破損している。完形品である230～250で、その様相を見ると、大きさや重量、形態から幾つかのグループに分類できる。214～245は細長い紡錘形をしており、長さは5.5cm前後に収まる。重量も5.5g前後である。次に大きいのが246で、長さ3.8cmと、短い紡錘形をしているが、重量は10.8gで、細長い紡錘形の倍近い重量である。次に重いグループは15.1gの247と17.3gの248である。しかし両者は形態が異なり247は側面観が長方形で4.7cmであるが、248は長く5.9cmを測る。次に、247の重量を増した形態が250で、重量は21.4gである。同様に、248の重量を増した形態が249で、一部を欠くが25.5g以上が想定できる。

太鼓形分銅 第2-133図に府内町跡20次調査A区から出土したガラス類似製品・金属を図示した。251は青銅製の太鼓形分銅である。大きさは、直径0.8g、厚さ0.2cmで、重量は0.5gで片面は丸く縁取りした中に「三」の字状の文様が陽刻されている。また、その裏面には「ノ」の字の傷状の文様が彫形に三つ陰刻されている。このタイプの太鼓形分銅は、中世大友城下町跡の調査でさまざまな大きさと重量が出土しているが、この資料が最小である。

水晶製の玉? 252と253は透明の玉である。水晶製の可能性が高い。252は直径1.5cmで、中央に1.5mmの孔が通っている。全体にヒビ状の亀裂が入る。253も同じ水晶製と思われる。破損しているため全体の形は不明である。

青銅製品 254はピン状の形態をした先端を欠くが残された長さ6mm、上面径4.5mmの青銅製品である。255は254を大きくした類似形態の青銅製品である。残された長さは1.5cmで、上面径は0.7mm、重さは1.3gである。256は長さ4.5cm、幅0.6cm、厚さ0.1cmの細長い青銅製品である。両端が湾曲する。257は厚さ約1mmの青銅製の板を二つに曲げた状態で出土した。残された形状は約2.4cm、幅0.7mmの二つ折り状である。258は直径2.2cm、高さ0.7cm、重さ3.3gの蓋状、あるいはキャップ状に仕上げた青銅製品である。259は、3.3cm×2.1cmの青銅板である。表面は平滑で、和鏡の破片の可能性もある。260は小柄と思われる青銅製品である。長さは8.4cmで、幅1.4cm、厚さ約0.5cmである。

以上の他、錆びて粘土と一体化し、形状が不明になっている鉄器が多数出土している。

銅銭 第2-134図には出土した銅銭を図示した。261は真書体で書かれた「天禧通寶」で初鑄年は1017年(北宋)である。262は「景祐元寶」で初鑄年は1034年(北宋)である。263は篆書体で書かれた「皇宋通寶」で、初鑄年は1038年(北宋)である。264は篆書体で書かれた「元豊通寶」で、初鑄年は1078年(北宋)である。265は行書体で書かれた「元豊通寶」で、初鑄年は1078年(北宋)である。266・267は篆書体で書かれた「元祐通寶」で、初鑄年は1086年(北宋)である。268・269は篆書体で書かれた「紹聖元寶」で、初鑄年は1094年(北宋)である。270は「永樂通寶」で、初鑄年は1408年(明)である。271は銭の周辺を研磨し、小さくした銅銭である。銅銭の名称は不明である。272は銅銭の一部である。「景・・」のみ判読できる。273は「寛永通寶」と考える。初鑄年は1636年(江戸)である。

永樂通寶

第3節 小 結

府内町跡20次調査A区は、「府内古園」や明治時代の地籍図を基に、現在の地図上に復元した16世紀後半の豊後「府内」の中での位置は、万寿寺の北西の隅にあたる。発掘調査の結果、ほぼ全面から溝・廃棄用の土坑・礎盤建物・大小の柱穴状空穴など各種の遺構が検出された。その時期は、おおきく14世紀中葉から15世紀前葉に属するグループと、16世紀後葉から末葉のグループの2時期に分けられる。

礎盤建物 14世紀中葉から15世紀前葉に属する主要遺構は、南北4間、東西3間以上に南側に7尺半、西側に約3尺の軒が付くA-SB01の礎盤建物遺構と、区画性の強い溝であるA-SD1501とA-SD1505である。これら以外の土坑も、A-SB01周辺で検出されている。A-SB01の礎盤建物遺構と二つの溝との関係は、同時期に存在していた可能性もあり、方位はN-9°-Eを基本とし、二つの溝はこれに直交する角度かまたそれに近い。また、距離関係はA-SB01の南端の柱穴列から南に約12.8m(42尺)離れてA-SD1505は掘削されている。この溝は、東端は調査区外に延びているため、不明であるが、西端は16世紀代の溝であるA-SD1506に切られているもの、この位置で終わると推測される。また、A-SD1505の南に掘削されている溝であるA-SD1501との間隔は、中心部間で、約6m(20尺)であり、両者はほぼ平行する。

第1南北街路 こうした主要な3遺構の施工角度は、第1南北街路の角度と同じである。この街路は府内町跡7次調査で、15世紀末葉から本格的に整備されるさらることが判明しており、それに先立ってこの街路の両側に大規模な溝が構築されている。また、府内町跡20次調査A区の北西方向に約150m離れた、府内町跡8次調査でもこの方位の15世紀代の溝が検出されていることから、14世紀中葉頃から万寿寺北辺部では、N-9°-Eを基軸とする計画的な町割りが行われていたことが推測できる。

16世紀後葉から末葉の遺構は、調査区の西寄りに南北方向に掘られ、万寿寺北境の堀の手前約3.5mの位置で止まる溝A-SD1506、万寿寺北境の堀から約25m南に掘られた井戸A-SE1045が主要な遺構である。このほか、廃棄土坑と推測される遺構が多く検出されたが、多くはA-SD1506周辺から調査区の西側で検出された。

こうした遺構分布の背景には、天正10年(1582)正月22日付けで友友義統が家臣の柴田筑前入道に対して発給した文書がある。義統条々と言われるこの文書には「萬壽寺築地之内并西之屋敷兩所、令所望候之事」とあり、16世紀後葉から末葉の万寿寺の西側沿いに町屋が建ち並んでいたことが判る。

「西之屋敷」 しかし、府内町跡20次調査A区からは、「築地之内并西之屋敷」と考えられる建物遺構は検出されておらず、井戸や土坑が検出されたのみである。こうした遺構群は町屋の真手の状況を見せていることと推測される。そうすると、方位N-6°-Eを示すA-SD1506は「築地之内并西之屋敷」と万寿寺境内の境となる施設の可能性が考えられる。

以上の遺構のほか、注目される場所として、万寿寺北境の堀の南側に沿った幅約3.5mがある。この場所は、周辺に比べると遺構の掘削が少なく、検出されたA-SK1091・A-SK1093も深さが30cm・10数cmと浅い。しかも、この場所に沿った南側には東西方向に細長い土坑の掘り返しが行われた状態で検出された。こうしたことから、この場所には、万寿寺の区画施設が構築されていた可能性が高い。

万寿寺の区画施設については、先の文献に「萬壽寺築地之内并西之屋敷兩所」とあるように、また「府内古園」には省略され南側のみの記載と思われるが、白壁の築地と山門が描かれている。万寿寺北境の堀沿いにある遺構空白地帯は、このような文献・絵画資料に見られる「築地」が北側にも廻っていたため、生じたことと想定できる。

第3章 中世大友府内町跡第20次調査B区

第1節 調査の経過と概要

1. 調査の経過

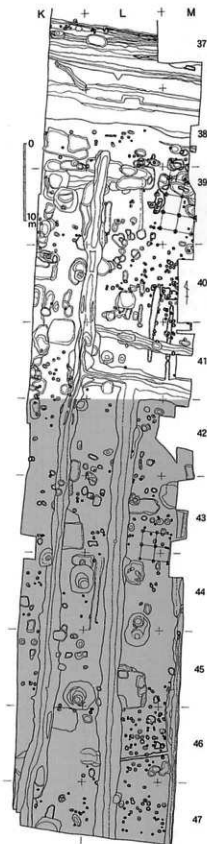
府内町跡第20次調査A区の南側、南北約55m、東西約21mの約1200m²の範囲を府内町跡第20次調査B区として発掘調査を実施した。このため、調査区名はA区と連続し、東西方向に西からK・L・M、南北方向に北から42・43・44・・・47となる。

調査はA区と同時に開始し、表土である近世までの水田層を重機で除去した。その結果、16世紀代の整地層と想定される遺物包含層が露出した。その時点では、遺構の確認は出来なかったが、14世紀から16世紀にかけての遺物が散見された。発掘調査は、この整地層を掘り下げ、遺構の検出に努めた。調査区全面を約20cm掘り下げると14世紀から16世紀の主要な大型の遺構が確認でき、この大型遺構の調査を行いながら、さらに遺構検出面を精査し、土坑や柱穴の検出を行った。こうして検出された遺構は、南北方向の溝や井戸・礎盤建物・土坑・柱穴など多種にわたり、出土する遺物も8世紀後半から9世紀、14世紀代・16世紀代と幾つかの時代のまとまりが確認された。

2. 遺構の概要

府内町跡第20次調査B区で検出された遺構は、A区でA-SD1506とした溝の南側約55mをB-SD064として調査した。また、A区で東西方向の溝として調査したA-SD1501と交わる溝をB-SD003とした。また、調査区の東壁沿いに瓦を多量に含む溝も検出された。井戸は調査区境のため完全に調査できなかったものを含め5～6基が確認された。井戸の時期は、14～15世紀代と16世紀後半代の2時期に分かれる。また土坑は形態や規模はさまざまであるが、ほとんどは廃棄土坑と思われる、埋土の中から遺物や礫が多く出土する。この他、注目される遺構として、礎盤建物がある。この遺構は主として、調査区の南西隅で集中的に検出され、幾度か建てかえが行われたようで複雑に重複する。

以上の中世遺構の他、調査区の南東隅であるL・M-47区では、8世紀後半から9世紀代の柱穴状の小堅穴が検出され、土師器の坏や甕が埋設された状態で出土した。



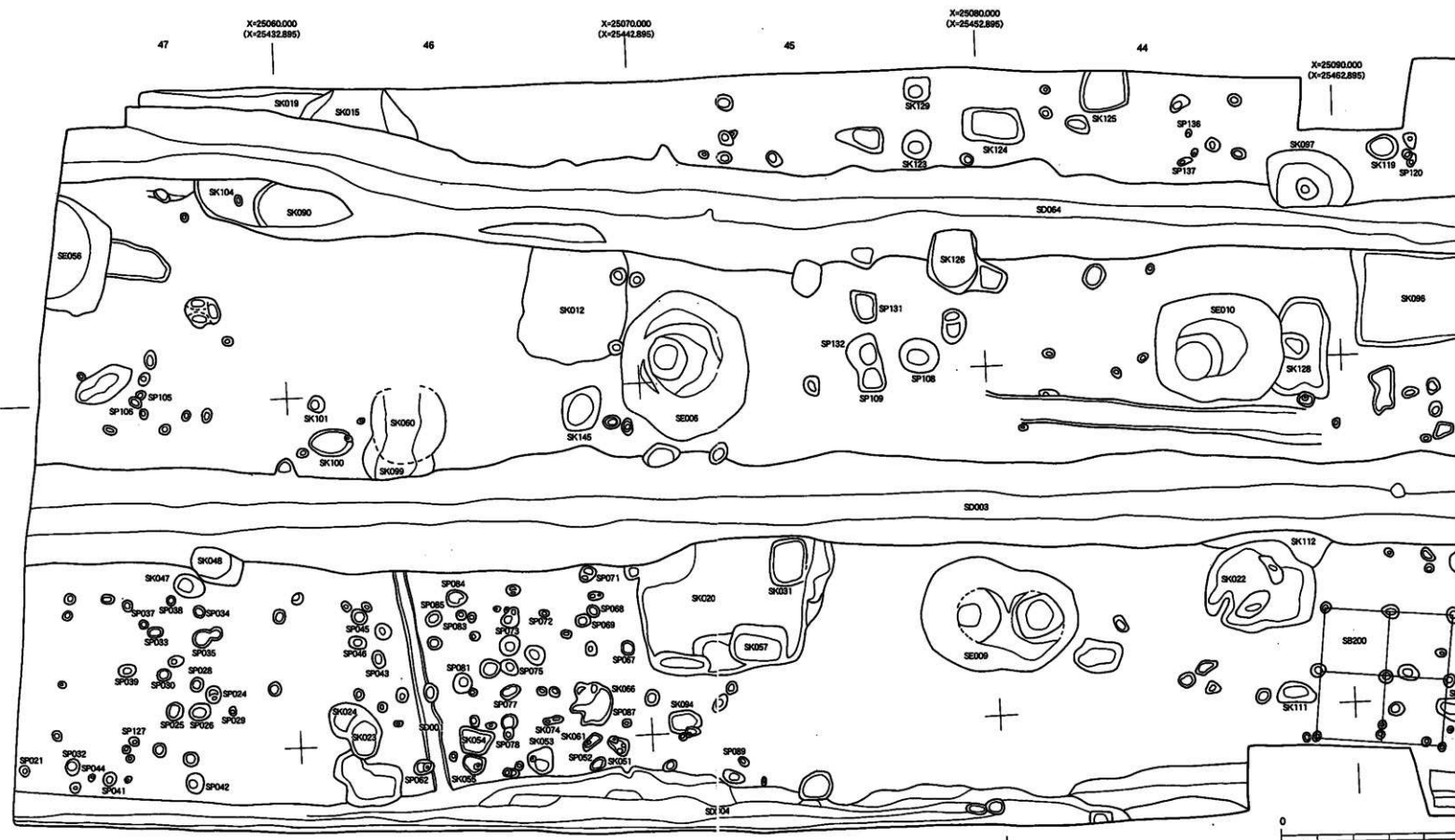
第3-1図 府内町跡20次B区位置図

礎盤建物

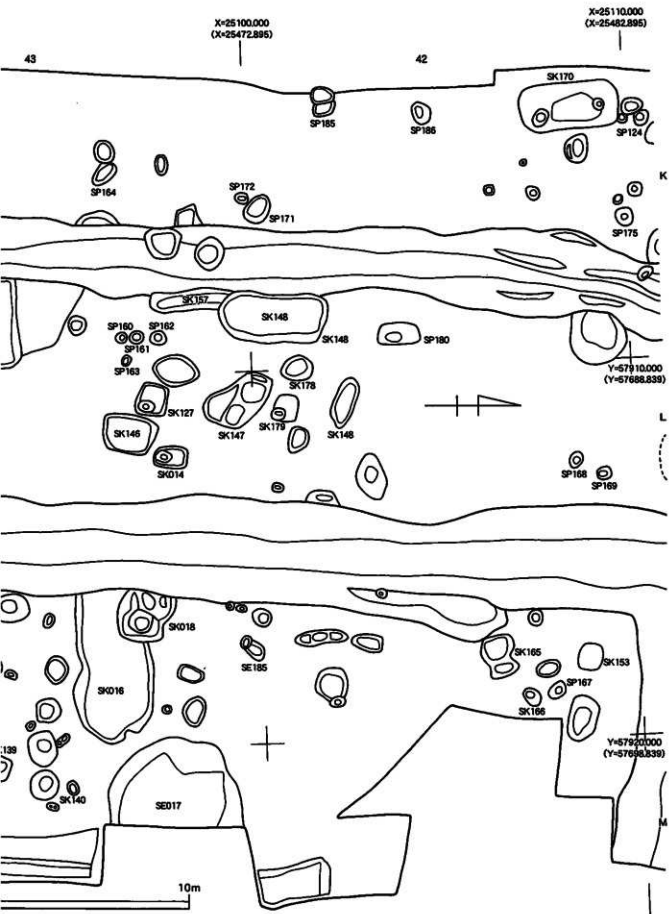
第1節 調査の経過と概要

第3-1表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(1)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
B-SD001	S-001	溝	K・L・M-46			117
B-SD002	S-002	溝	K-46・47			117
B-SD003	S-003	溝	L-42~47	14世紀末葉	万寿寺創建時に近い区画溝	119
B-SD004	S-004	溝	M-44~47	14世紀中葉~後葉	瓦が多量に出土	142
B-SE006	S-006	井戸	K-45・46	16世紀後葉~末葉		211
B-SE009	S-009	井戸	L-44・45	14世紀中葉~後葉	掘りかえされ隣接した井戸2基	214
B-SE010	S-010	井戸	K・L-44	16世紀後葉~末葉		118
	S-011		K・L・M-46		攪乱	
B-SK012	S-012	土坑	K-46	16世紀後葉~末葉		208
	S-013		L・M-42			
B-SK014	S-014	土坑	L-43		ガラス玉	208
B-SK015	S-015	土坑	K-46	16世紀末葉	折縁ソギ皿出土	170
B-SK016	S-016	土坑	L-43	16世紀末葉		
B-SE017	S-017	井戸	L・M-43	14世紀中葉~後葉		221
B-SK018	S-018	土坑	L-43	14世紀中葉~後葉	土師質土器? 個体出土	172
	S-019	溝?	K-47			
B-SK020	S-020	土坑	L-45	16世紀後葉~末葉	大型土坑遺物多量出土	173
	S-021	土坑	M-47			
B-SK022	S-022	土坑	L-44	14世紀代?		180
B-SK023	S-023	土坑	L・M-46	14世紀中葉~後葉	土師質土器がまとまって出土	180
B-SK024	S-024	土坑	L-46	14世紀前葉?		181
	S-025	ピット	L-47			
	S-026	ピット	L-47			
B-SP027	S-027	ピット	L-47		土師出土	235
	S-028	ピット	L-47			
	S-029	ピット	L-47			
	S-030	ピット	L-47			
B-SK031	S-031	土坑			SK020に切られる	182
B-SP032	S-032	ピット	M-47	8世紀後半	土師器埴	232
	S-033	ピット	L-47			
	S-034	ピット	L-47			
	S-035	ピット	L-47			
	S-036	ピット	L-47			
	S-037	ピット	L-47			
	S-038	ピット	L-47			
	S-039	ピット	L-47			
	S-040	ピット	L-47			
	S-041	ピット	L・M-47			
B-SP042	S-042	ピット	M-47			
	S-043	ピット	L-46			
	S-044	ピット	M-47			
	S-045	ピット	L-46			
	S-046	ピット	L-46			
B-SK047	S-047	土坑	L-47	8世紀後半~9世紀前半	甕を埋納	182
B-SK048	S-048	土坑	L-47	14世紀中葉~後葉	在地系土師質土器が上層と下層で一括出土	183
B-SP051	S-051	ピット	M-46	8世紀後半		232
B-SP052	S-052	ピット	M-46	14世紀中葉~後葉		232
B-SP053	S-053	ピット	M-46	8世紀後半		232
	S-054	土坑	L・M-46			
B-SP055	S-055	ピット	M-46	14世紀前葉	吉備系土師器出土	232
B-SE056	S-056	井戸	K-47	16世紀後葉~末葉		223
B-SK057	S-057	土坑		14世紀~15世紀前半		186
	S-058	土坑	K-47			
B-SK060	S-060	土坑	K・L-46	16世紀後葉~末葉		186
	S-061	ピット	M-46			
B-SP062	S-062	ピット	M-46	14世紀代		232
B-SK063	S-063	土坑	L-42	14世紀中葉~後葉	在地系土師質土器が3点出土	187
	S-064	K-43~47	溝			



第3-2図 中世大友府内町跡第20次調査8区画配置図 () 内数字は世界測地系



第3-2表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(2)

本報告での 遺構番号	調査時の 遺構番号	遺構の 性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載 頁
B-SP065	S-065	ピット	L-46	14世紀代		235
B-SK066	S-066	土坑	L-46	14世紀代	8～9世紀の遺構を切る	187
B-SP067	S-067	ピット	L-46			233
	S-068	ピット	L-46			
	S-069	ピット	L-46			
B-SP070	S-070	ピット	L-46	14世紀末から15世紀前半		235
B-SP071	S-071	ピット	L-46		土樋	236
	S-072	ピット	L-46			
B-SP073	S-073	ピット	L-46	8世紀代		235
	S-074	ピット	L-46			
	S-075	ピット	L-46			
	S-076	ピット	L-46			
	S-077	ピット	L-46			
	S-078	ピット	L-46			
	S-079	ピット	L-46			
	S-080	ピット	L-46			
B-SP081	S-081	ピット	L-46	8世紀後半		233
	S-082	ピット	L-46			
B-SP083	S-083	ピット	L-46	14世紀前半	口先白磁	237
B-SP084	S-084	ピット	L-46	8世紀後半		233
	S-085	ピット	L-46			
	S-086	ピット	L-46			
	S-087	ピット	L-46			
	S-088	ピット	L-47			
B-SK090	S-090	土坑	K-47	16世紀後半～末葉		208
B-SP091	S-091	ピット	L-42	16世紀後半～末葉	備前系陶器の水屋甕	237
B-SK092	S-092	土坑	L-42			208
	S-093	ピット	L-42			
B-SP094	S-094	ピット	L-42	8世紀代		237
B-SK096	S-096	土坑	K-43	16世紀末葉	集石	188
B-SK097	S-097	土坑	K-44	16世紀後半～末葉	備前系陶器のへら記号のある徳利	190
B-SK098	S-098	土坑	L-44	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器4点出土	192
	S-099	土坑	L-46			
B-SK100	S-100	土坑	L-46	16世紀後半		192
B-SP101	S-101	ピット	L-46			233
B-SP102	S-102	ピット	L-46	14世紀後半		237
	S-103	土坑	K-47			
	S-104	土坑	K-47			
	S-105	ピット	K-47			
	S-106	ピット	K・L-47			
B-SK107	S-107	土坑	L-43	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器出土	193
B-SK108	S-108	土坑	K-45・46	14世紀中葉～後葉		208
B-SP109	S-109	ピット	L-46	14世紀中葉～後葉		237
B-SP110	S-110	ピット	L-46	14世紀前半	吉備系土師器	237
	S-111	土坑	L・M-44			
	S-112	土坑	L-44			
B-SK113	S-113	土坑	K-46	16世紀後半		193
	S-119	土坑	K-43			
	S-120	土坑	K-43			
B-SP121	S-121	ピット	L-46		集石	237
B-SK122	S-122	土坑	K-45	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器2点出土	193
B-SK123	S-123	土坑	K-45	14世紀中葉?		203
B-SK124	S-124	土坑	K-44	16世紀後半～末葉	津州窯系青花	195
	S-125	ピット	K-44			
B-SK124	S-126	土坑	K-44・45	14世紀中葉～後葉		195
B-SP127	S-127	ピット	L-47	14世紀代		233
B-SK128	S-128	土坑	K・L-44	16世紀後半		197
B-SK129	S-129	土坑	K-45	14世紀中葉～後葉		208

第1節 調査の経過と概要

第3-3表 中世大友府内町跡20次調査B区遺構一覧表(3)

本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
B-SP130	S-130	ピット	K-45	14世紀中葉～後葉		237
B-SK131	S-131	土坑	K-45			197
B-SK132	S-132	土坑	K-45	15世紀中葉		198
B-SP133	S-133	ピット	K-46	14世紀中葉～後葉	B-SB196の北西柱穴	232
B-SK134	S-134	土坑	L-45	14世紀代		199
B-SP135	S-135	ピット	K-45	14世紀末～15世紀前葉		237
	S-136	ピット	K-44			
	S-137	ピット	K-44			
	S-138	ピット	K-44			
B-SP139	S-139	ピット	M-43	16世紀末葉		237
	S-140	ピット	M-43			
B-SP144	S-144	ピット	M-43	14世紀代		237
B-SK145	S-145	土坑	L-46			199
B-SK146	S-146	土坑	L-43	16世紀後葉～末葉	見込みに「畷」の文字の青花	200
B-SK147	S-147	土坑	L-43	14世紀中葉～後葉		201
B-SK148	S-148	土坑	K-42	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器がまとまって出土	208
B-SP149	S-149	ピット	M-45		古代の坏	237
B-SP151	S-151	ピット	M-45	14世紀前葉	吉備系土師器	237
B-SK153	S-153	土坑	L-42		土玉	202
B-SK156	S-156	土坑	L-42	16世紀後葉～末葉		209
B-SK157	S-157	土坑	K-43	16世紀後葉～末葉		202
	S-158	ピット	K-43			
B-SP159	S-159	ピット	K-43	14世紀代		237
	S-160	ピット	K-43			
B-SK161	S-161	土坑	K-42・43	14世紀代		203
B-SP162	S-162	ピット	K-43			233
	S-163	ピット	K-43			
B-SK164	S-164	土坑	K-43			203
B-SP165	S-165	ピット	L-42	14世紀代		237
	S-166	ピット	L-42			
	S-167	ピット	L-42			
	S-168	ピット	L-42			
	S-169	ピット	L-42			
B-SK170	S-170	土坑	K-42		13世紀代の常滑系陶器	203
	S-171	ピット	K-42			
	S-172	ピット	K-42			
B-SK177	S-177	土坑	L-43	16世紀後葉		204
B-SK178	S-178	土坑	K・L-42	14世紀代		205
B-SK179	S-179	土坑	L-42	14世紀代		205
	S-180	ピット	K-42			
	S-182	ピット	L-43			
B-SK184	S-184	土坑	L-42	14世紀中葉～後葉	在地系土師質土器6点一括発掘	206
B-SP185	S-185	ピット	K-42	16世紀後葉～末葉		233
	S-186	ピット	K-42			
B-SK187	S-187	土坑	L-43	14世紀末～15世紀前葉	東播系須恵質土器	207
B-SK188	S-188	土坑	K-42	16世紀後葉～末葉		209
B-SP189	S-189	ピット	K-42	14世紀中葉～後葉		236
B-SB190		遺物	L-43			
B-SB191		遺物	L-46			
B-SB192		遺物	L-46			
B-SB193		遺物	L-46			
B-SB194		遺物	L-46			
B-SB195		遺物	K-45			
B-SB196		遺物	K-46	14世紀中葉～後葉		
B-SB197		遺物	L-46			
B-SB198		遺物	L-46			
B-SB199		遺物	L-47			
B-SB200		遺物	L-47			

第2節 遺構と遺物

1. 溝及び関連遺構

B-SD001 (第3-2図)

B-SD001はL・M-46区でB-SD003とB-SD004を繋ぐように検出された小規模な溝である。遺構の規模は幅約50cm、深さ約10cmで、底面は平坦である。方位はW-10°-Sであり、東西方向に約6mを発掘調査しているが、西側はB-SD003、東側はB-SD004と切り合い関係にあり、確認できなかった。

出土遺物は、第3-3図に図示したが、1は備前系陶器の楕鉢である。2・3は京都系土師器で、口径は2点とも12.5cm、4は胴部最大径部に突帯が廻る瓦質土器である。突帯部での径は29.1cmで、内面の一部に刷毛目、外面は横方向のヘラ削りのあと、磨きである。5は口径13cm、器高2.8cm、底径7cmの古代土師器の坏である。器面は回転ヘラ磨きで、底部は回転ヘラ切りである。

B-SD001の時期は、2点の京都系土師器が出土していることから16世紀後半から末葉と考える。

B-SD002

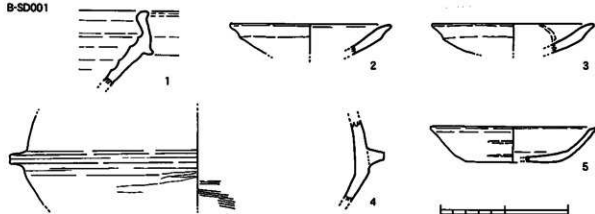
B-SD002は図示していないが、B-SD001の南に平行するように、L・M-46とL・M-47の間で発掘調査の初期の頃に検出された幅が約1.5m、深さ約10cm程度の東西に長い窪地状であった。遺構の輪郭が明確でなかったが、遺物がまとまって出土したため、溝状遺構として報告する遺物は第3-3図に図示したが、6は常滑系陶器の甕である。器面は内面が撫でであるが、外面は自然軸のため不明である。7は備前系陶器の楕鉢の注口部の資料である。8は亀山系須恵質土器の肩部である。頸部が横方向の撫でであるが、肩部外面には格子目の叩きによる器面調整痕が残されている。9は東播系須恵質土器の口縁部である。口縁端部が断面三角形に肥厚する。10・11は9の底部となるような東播系須恵質土器の鉢の底部の資料である。底径は10が8.3cm、11は11cmであり、器面は回転を利用した撫で、平滑に仕上げている。

12は口縁部の内外面をヘラ磨きで器面調整した土師器の坏である。13は口径11.7cmで、口縁端部は玉縁状に肥厚し、内外面ヘラ磨きの土師器の坏である。14は口縁端部をやや外反し、口唇部を尖らす。器面調整は内外面横方向の撫でであるが、底面は回転を利用したヘラ切りで切り離している。口径13.6cm、器高3.3cmである。15は口径20.5cmの甕形土器である。口縁部は器壁が厚く、外反するが、これに対し、胴部は薄い。器面調整は、口縁部外面と胴部内面は撫で、口縁部内面と胴部外面は横方向と縦方向の刷毛目調整である。16と17は高台付きの土師器の坏である。16は底径7.6cm、17は9cmで、器面調整は内外面とも横方向の回転を利用したヘラ磨きである。

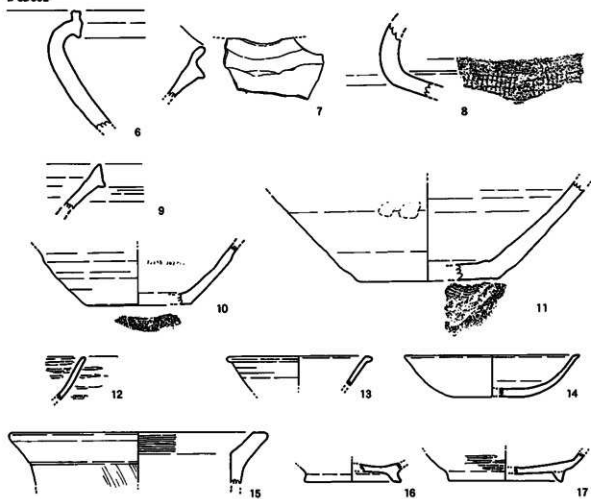
B-SD002の時期は、12~17のような8世紀後半から9世紀の前半の土師器が出土しているが、6~11は14世紀から15世紀前半の遺物であり、この時期に近いと考える。

第2節 遺構と遺物

B-SD001



B-SD002



第3-3回 B-SD001・B-SD002出土銅銭実測図

B-SD003 (第3-4図上)

B-SD003は、調査区の中央部を南北方向に約55m検出された区画性の強い溝である。北側はA区のA-SD1501とT字状に交わるが、方位はN-2°-Eで、直交はしない。また、この溝の規模は、断面が逆台形状をし、上面の幅が約3m、底面幅は1.2m前後で、深さは約1.4mである。溝の底の傾斜は、南端の底面の標高が3.86mで、A-SD1501との交差部が3.61mであり、緩く北に傾斜している。

B-SD003からは多くの遺物が出土し、一部新しい遺構と切り合っていたため、後出の遺物が混入している。これらを合わせて、第3-5~3-22図に図示する。

上層 第3-5図は、B-SD003を掘り下げる際に部分的に約50cmごとに遺物を取り上げ、上層・中層・下層出土としたものである。1~7は上層出土のロクロ成形による在地系土師質土器である。1~4は口径が8~8.4cmの皿で、底径は6~7.4cm、器高は1~1.4cmである。5は口径7.6cm、底径4.2cm、器高1.9cmの口縁部が「ハ」の字状に開く皿である。口縁部にはスガが付着し、灯明皿として使用されている。6・7は坏である。6は口径13.4cm、底径9.8cm、器高3.3cmで、口縁部の器壁は底部近くが厚く、先端が尖る。7は、口径12.8cm、底径10cm、器高2.6cmで、器壁は中位がやや厚く、口縁部が外反する。

中層 第3-5図8~17は中層出土のロクロ成形による在地系土師質土器である。8~12は、口径7.4~8.2cmで、底径5.4~7.2cmで、器高は0.9~1.4cmである。13は口径7.6cm、底径5.5cm、器高2.1cmで、器高が高く、小型の坏である。口縁部にはスガが付着し、灯明皿として使用されている。14~17は坏である。14と17は口径が11.6cmと12.4cmに対し、底径は2点とも7cmと小さく、器高は3.1cmと2.8cmであり、椅状をしている。これに対し、15と18は口径が11.6cmと13cmであるが、底径は8.6cmと10cmで安定感がある。口縁部の器壁は、15は底部近くが厚いが、他の3点は中位から上位が厚くなっている。

下層 第3-5図18~23のロクロ成形による在地系土師質土器うち18は口径8.7cm、底径7.0cm、器高1.1cmの皿であるが、他は坏である。21は口径11.8cmであるが底径は7.8cmで、器高は3cmであり、口径に対し、底径が小さく椅状をしており、器壁は底部近くが厚い。19は口径12.4cm、底径8.6、器高2.9cmで口縁部の器壁は上位が厚い。20は口径12.5cmで、底径9cm、器高2.9cmで口縁部の器壁は中位が厚い。22も同様で、口径12cm、底径8cm、器高3.4cmである。23は口径11.8cm、底径9.0cm、器高3.2cmで、口縁部の器壁は、底部近くが厚く、先端部が尖る。

以上層位的に取り上げた遺物を見ると、14世紀中葉から後葉と考えられ、上層と下層で大きな差異を認めることは出来ない。そこで、第3-6~3-22図に出土した遺物を図示し、報告を行う。

双魚文 第3-6・3-7図は中国産陶磁器を中心に図示した。24~35は泉屋窯系青磁で、29・30・33・34以外には外面に筋違弁が施文されている。また、底部のみの破片である34の見込み部には線描きの文様があり、35の見込み部には双魚文と推測される陽刻の文様があり、口縁部が屈曲する第2-122図7の形態になると思われる。法量は、29が口径14cm、底径6.3cm、器高4.7cmであり、33の口径は8cmである。

36~40は中国産白磁である。36は口縁部が玉縁になる形態である。37は口径11cmで、胴部が屈曲する。38は口径10.6cm、底径5.6cm、器高3.5cmで口縁部は口禿である。39も同じ器形で、口縁部が11.2cm、底径5.6cm、器高3.4cmで外反する口縁部は口禿である。40は口縁部が直線的で、端部が無軸の口禿であり、外面の底面から胴部下位にかけては露胎である。口径11cm、底径6.3cm、器高3.5cmである。

第3-7図は、一部国内産陶器を含む。41は景德鎮窯系青花碗である。42は褐色の発色をした磁器で、景德鎮窯系であろうか。43・44は小片であるが43は内面が白磁、外面は青白磁、44は内面が露胎、外面は青白磁で、これらも磁器であり、景德鎮窯系であろうか。45は柳歯又は刷毛目状工具で

文様を描き緑青釉をかけている。46は口径3cm、底径2.7cm、器高0.5cmの極小の皿で、薄く釉がかかっている。瀬戸美濃系陶器であろうか。47は底径10.4cmの中国産陶磁器の梅瓶の底部と考える。48は底径6cmの須恵器緑釉の皿と考えられる。

49・50は直立する口縁部の端部が玉縁状に肥厚する。49は内外面ともに、白い化粧土を器面に塗り、緑色の釉をかけている。50は同様に褐色をしている。51と第3-8図51-Aに図示したものは同じ資料であるが、口径27.7cm、底径24.7cm、器高9.2cmの鉢である。底部外面は胎跡であるが、他は淡黄褐色の釉がかかり、口縁部内面には鉄釉が文様が描かれている。さらに広い見込み部には鉄釉で「天下太平」と書かれている。49~51は磁電業系である。

「天下太平」

瀬戸美濃系

第3-8図52~54は瀬戸美濃系陶器で、灰色をしており、法量は52が口径7.2cm、底径3.6cm、器高3cm、53は口径9.8cm、底径4cm、器高3cm、54は口径10.6cm、底径4.6cm、器高2.8cmである。

常滑系

第3-8図55~61・第3-9図は常滑系陶器の蓋・甕である。55~57・60・61の口縁部は、受け口状や断面N字状の折り返しになる形態で、常滑系陶器の蓋・甕でも13世紀中葉から後葉に編年されている。また、58・59・62・63は口縁部が3~4cmの緑帯状になっており14世紀後半である。また、61の肩部や64・67・68には押印文状の叩きが認められ、66にはスタンプ文がある。62の口径は38.6cm、63は47cmである。

備前系

第3-10・3-11図は備前系陶器である。69~79は頸部が直立し、口縁部は外反する。口縁端部は肥厚し、玉縁状になる。器面は横方向の撫で、色調は灰色をしている。78は口径16.4cmで、肩部に二条の沈線が廻る。また、79は口径23.6である。これらの甕は13世紀末から14世紀後半に編年されている。80は口径13.6cmで胴部が菱形に張る。備前系陶器以外も考えられる。81は大型の甕の底部の資料であるが、常滑系陶器の可能性が高い。

第3-11図は備前系陶器の摺鉢の資料である。82は口径32.4cmで、5~6本の櫛歯状工具で掘目を口縁部に直角に入れている。84は口径31.3cm、底径11.9cm、器高14.8cmで、口縁下端部がわずかに肥厚する。内面は6~7本の櫛歯状工具で掘目を口縁部に直角に入れている。83を含め、これら3点の口縁部形態は、14世紀代後半に編年されている。85の口縁部は口唇部が尖る断面三角形になり、掘目が口縁部に直角に入る。この口縁部形態は15世紀前半に、86の口縁部が屈曲するタイプは15世紀後半に編年されている。87・88はこうした摺鉢の底部で、口縁部から底部にかけて直線的に6~7本の櫛歯状工具で掘目が施文されている。

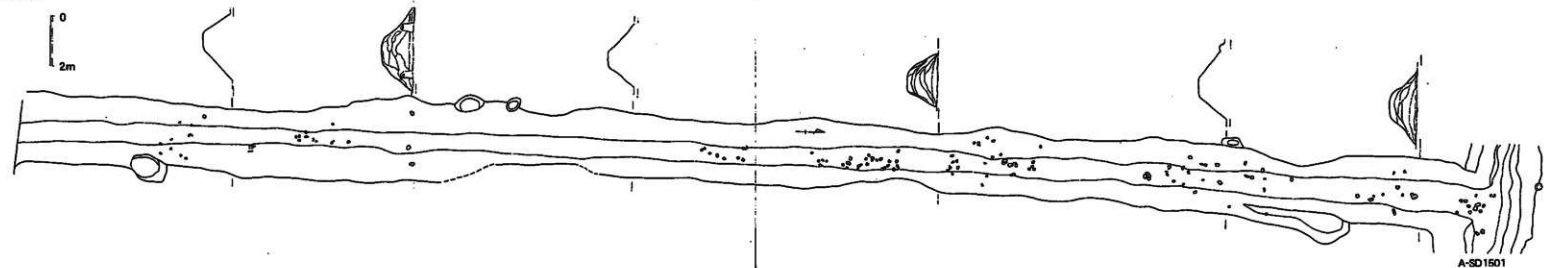
第3-12図は口縁部成形による在地系土師質土器である。89~106は口径が小さく器高が低い皿である。皿の平均法量は口径約8cm、底径約6.5cm、器高約1.2cmである。器壁は93の底部は厚く、口縁部の立ち上がりも小さい。92も類似している。これら以外は、底部の器壁は薄く、口縁部の立ち上がりもしっかりしている。104の底部にはスダレ状の窪痕が残る。

107~112は口径が小さく、器高が高い小型の杯である。これら6点の平均量は口径約7.3cm、底径約5.3cmで、皿よりも小さい。しかし器高は約2.2cmで、倍近くある。口縁部の立ち上がりは、107・112は逆ハの字状で、口縁端部が尖るように成形されている。109~111の口縁部は端部が丸く仕上げられている。小型杯の口縁部の器壁は底部近くを厚くしている。

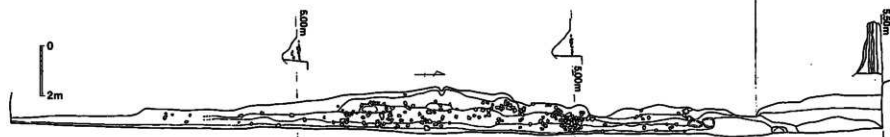
第3-12図114~123・第3-13図124~132は杯である。平均法量は口径約12.1cm、底径約7.9cm、器高約2.9cmであるが、器形は118や131のように口径12.8cm、13.2cmに比較すると底径が6.6cm、7.2cmと小さく碗形になるものや、132のように口縁部が「ハ」の字状に開き、側面観が逆台形になるものなどがある。また、口縁部の立ち上がりは、125~128はやや内湾気味になり、器壁は底部近くが厚い121・124・127、上位が厚くなる120・122・128・130がある。なお、107・123・130は口縁部にススが付着しており、灯明皿として使用されている。

第3-12図113は口径11.4cm、器高2.1cmの京都系土師器で混入品と考える。

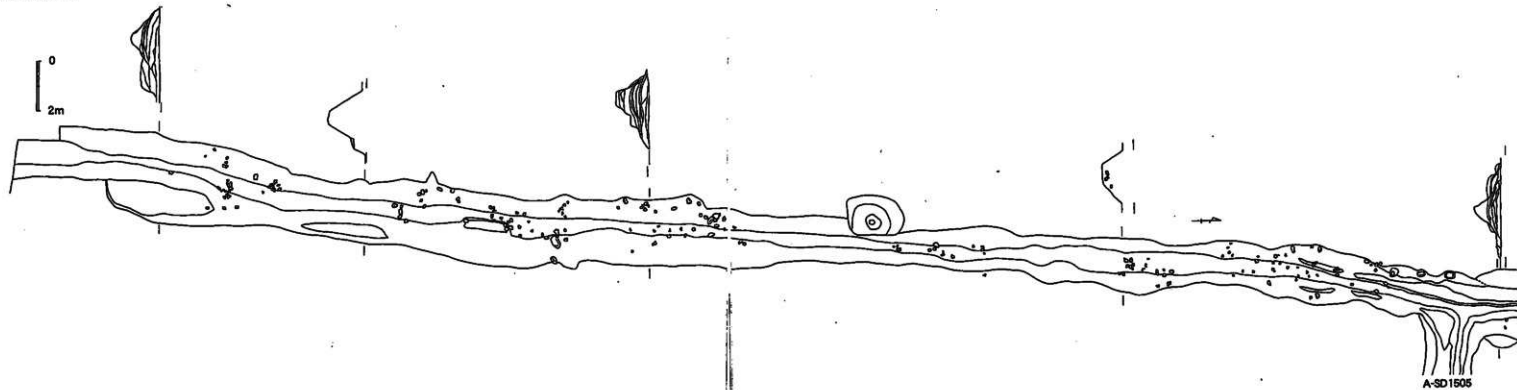
B-SD003



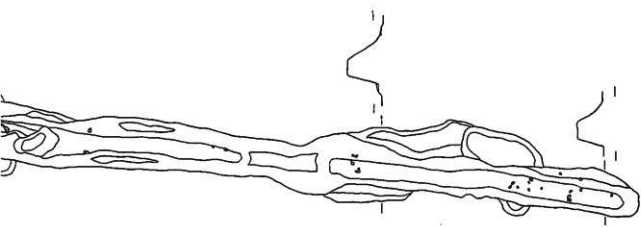
B-SD004

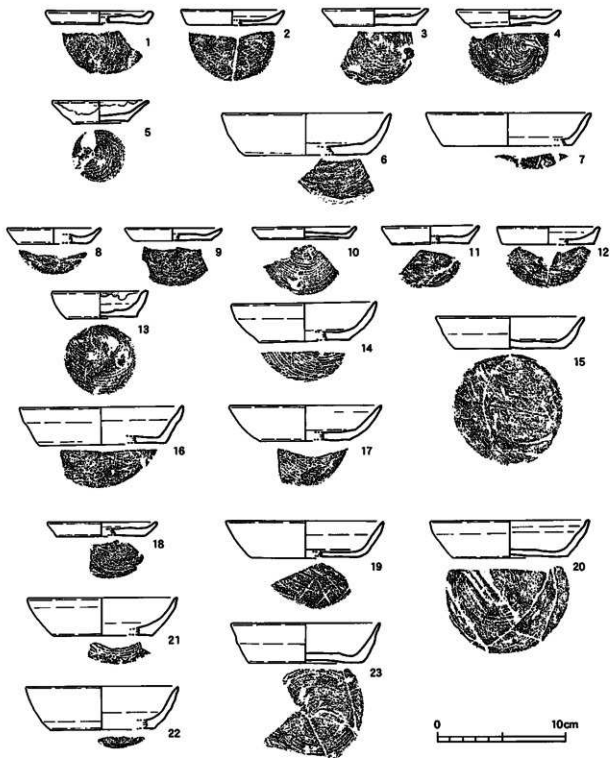


B-SD064 · A-SD1506

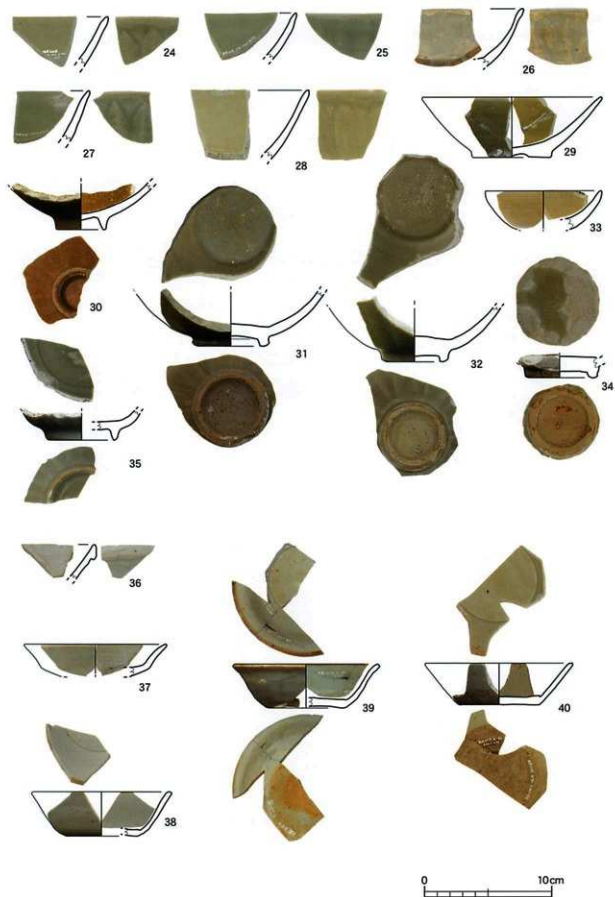


第3-4圖 SD-8003 · SD-8004 · SD-8064 (A-SD1506) 實測圖

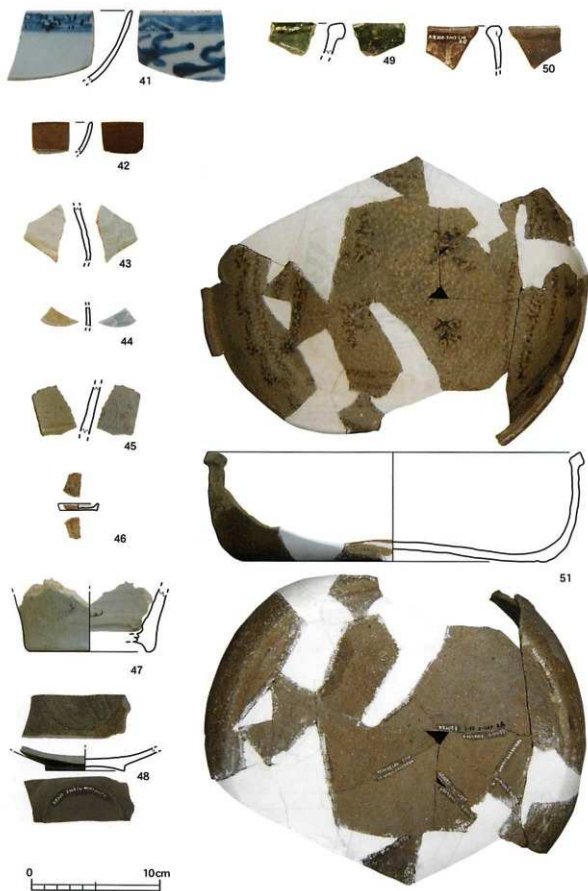




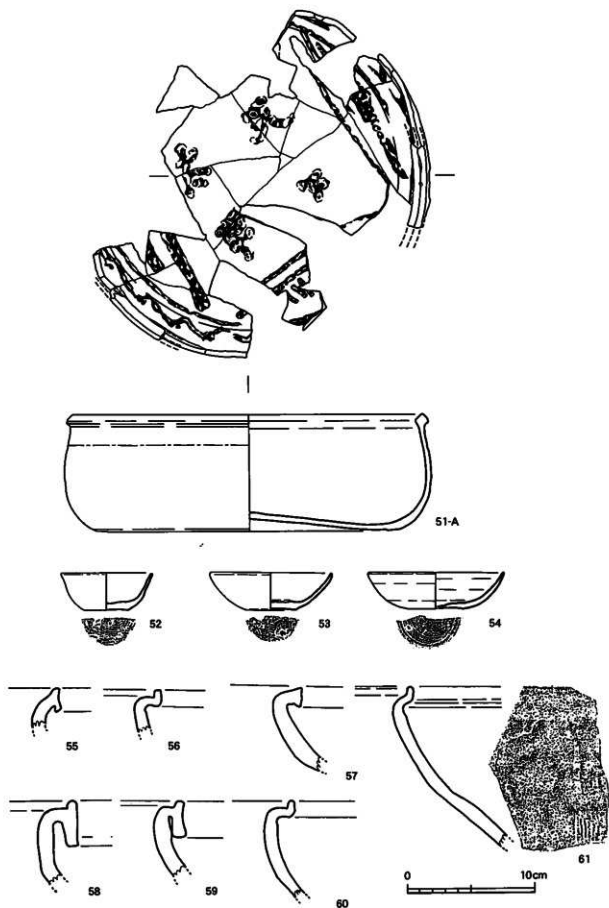
第3-5圖 B-SD003出土遺物実測図(1)



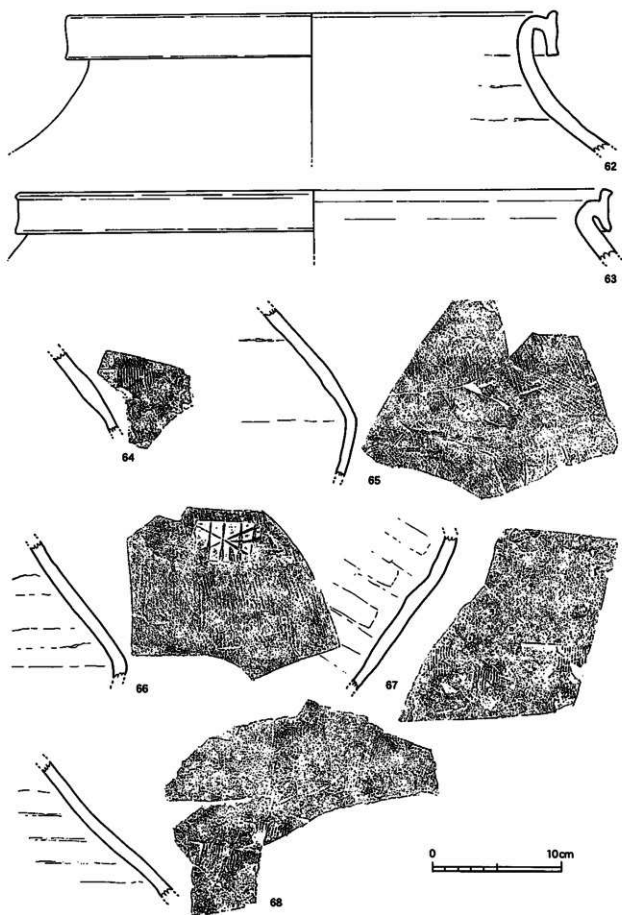
第3-6図 B-SD003出土遺物実測図(2)



第3-7図 B-SD003出土遺物実測図(3)



第3-8圖 B-SD003出土遺物実測圖(4)



第3-9圖 B-SD003出土遺物実測図(5)

第2節 遺構と遺物

第3-13図133~144は胎土が白色で、器壁が薄く、底部に高台が廻る特徴を持つ土師質土器で、古備系土師器 古備系土師器や早島式土器と呼ばれている資料である。口径は134が12cm、135が11.2cm、136が10.6cmである。底径は137~144の資料を見ると、平均4.4cmである。高台は粘土を貼り付けて形成しているが、簡略化している。これらは、岡山県で13世紀末葉から14世紀前葉に位置づけられている¹⁾。

第3-13図145・146は色調が白色で、極めて得く仕上げられた非ロクロ系の土師質土器である。145京都系土師器 は口径8cm、器高1.8cmで、146は器高が2cm以上ある。搬入された古い京都系土師器の可能性もある。

第3-13図147・148の特徴は底部に焼成前の穿孔を持つ。147は口径8.7cm、底径7.6cm、器高1.2cmのロクロ成形の在来系土師質土器の皿であるが、中央部に径0.4cmの穿孔がある。また、148も底径5.8cmのロクロ成形の在来系土師質土器の厚い底部であるが、中央部に穿孔がある。149は口径が7.8cmの在来系土師質土器の皿に脚を付けたもので、中央部を欠くため確認できないが、他の調査区の出土例では、皿に穿孔がある。これら、3点は燗台として利用された可能性が強い。

第3-13図150~152 第3-14図は土鍋の資料である。B-SD003出土の土鍋には口縁部を外側に屈曲させる150~156のタイプと、口縁部外面に突帯を廻らす57~161の鈎付きタイプの2種類がある。口縁部を屈曲させる土鍋は、さらに屈曲が小さくなり、口縁部が肥厚した状態になる155と156がある。器面調整は、155を除き、内面は横方向の刷毛目、外面は刷毛目の後、横方向の撫でや指押さえて平滑に仕上げている。口径は153が24cm、154が29cm、155が34.4cm、156が32.6cmである。

鈎付タイプの土鍋は、単純に突帯が廻る160、突帯の下位の器壁が肥厚する157・158、突帯が口縁部より上位に跳ね上がる159・161がある。器面調整は、いずれの鈎付タイプの土鍋も内面は横方向の刷毛目であるが、外面は157・158が撫でや指押さえて、159~161は縦方向の刷毛目である。口径は158が23.1cm、160が21.8cmである。

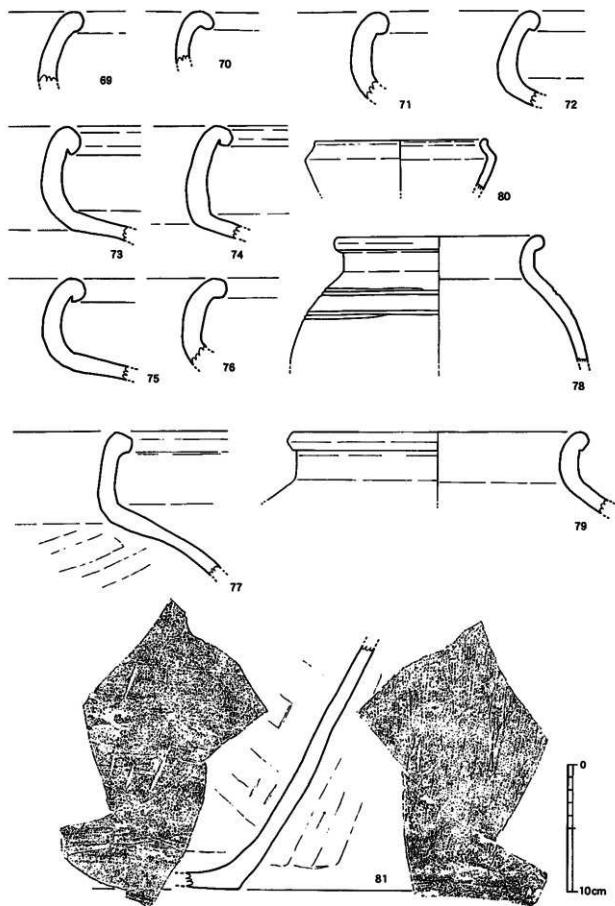
土鍋 162~164は土鍋の底部である。既述の二つのタイプのいずれか判断はつかないが、3点とも胴部下位で稜を生じて屈曲し、丸底になる。162は屈曲部での径が25cmである。器面は、内外面とも刷毛目で調整されている。163の屈曲部での径は24.6cmで、外面の丸底部は刷毛目調整で、その上位は指押さえてある。164の屈曲部での径は23.6cmで、器面調整は外面が指押さえてある。165は土鍋の脚である。

東播系 第3-15図の171以外は東播系須恵質土器の鉢である。口縁部が外側に肥厚し、断面がカマボコ状や三角形になる特徴を持つ。器面調整は、回転を利用した横方向の撫で、外面の一部には176に見られるような指圧痕が残る。169は注口部の資料である。法量は口縁部が計測できる172は23.4cm、173は26.2cmで、底径が計測できる175は9cm、176が9.4cm、177が8.4cmである。また図上復元できた174は口径22.6cm、器高9.5cm、底径7.8cmである。

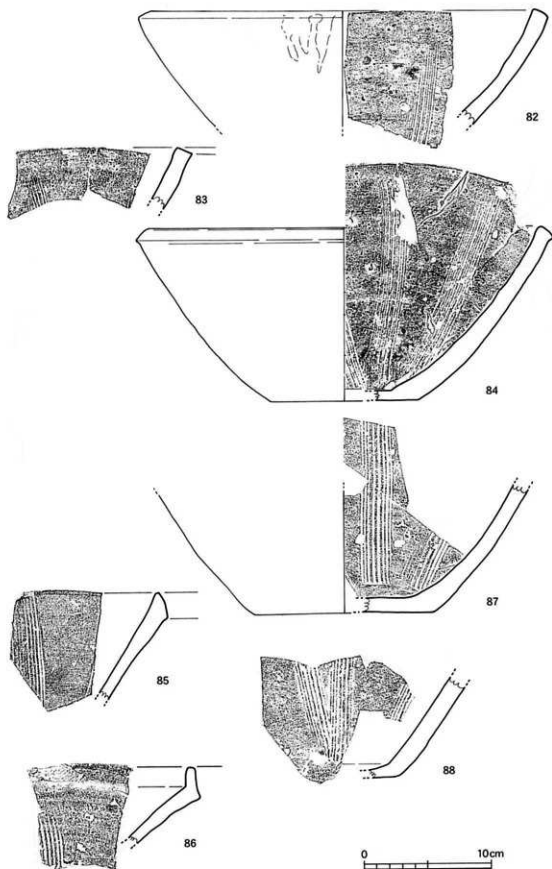
第3-16図は須恵質土器として10点を図示したが、焼成の不良な土器は瓦質土器と区別が困難である。178~180は反外する口縁部の資料で、横方向の撫で仕上げである。181は口縁部が屈曲して直立する鉢であるが、東播系須恵質土器の可能性もある。口径24cmである。182は小型の須恵質土器の甕で、底面に糸切り痕が残る。底径4cmである。183は肩部外面に格子叩きがある須恵質土器である。178の形態の口縁部が付くと思われる。頸部の径が40cmの岡山系須恵質土器である。184も同じ器形の甕で、胴部外面全体に格子叩きが残されている。185は線形状の叩き目が器面に残されている須恵質土器の甕である。187は外面に格子叩きが残り、底部が平底の甕である。186は径10cmの須恵質土器の底部の資料である。東播系須恵質土器の鉢の底部である。

第3-15図171・第3-17・3-18図は瓦質土器である。171は内面の器面調整が斜目方向の粗い刷毛目である。第3-17図188~190は瓦質土器の碗の資料である。188の口径は12.4cm、底径は5.0cmで

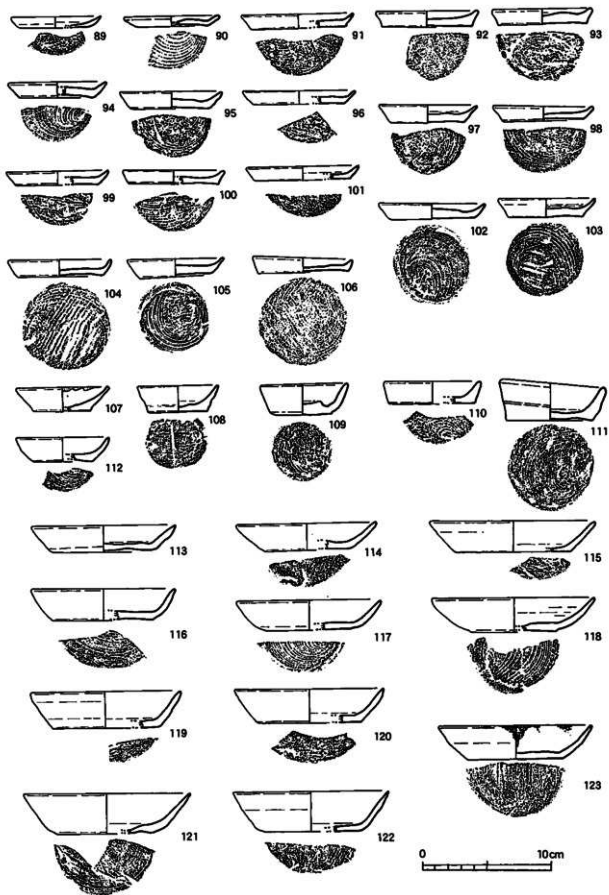
(1)山本悦代「古備南部地域における古代末~中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会 1992年



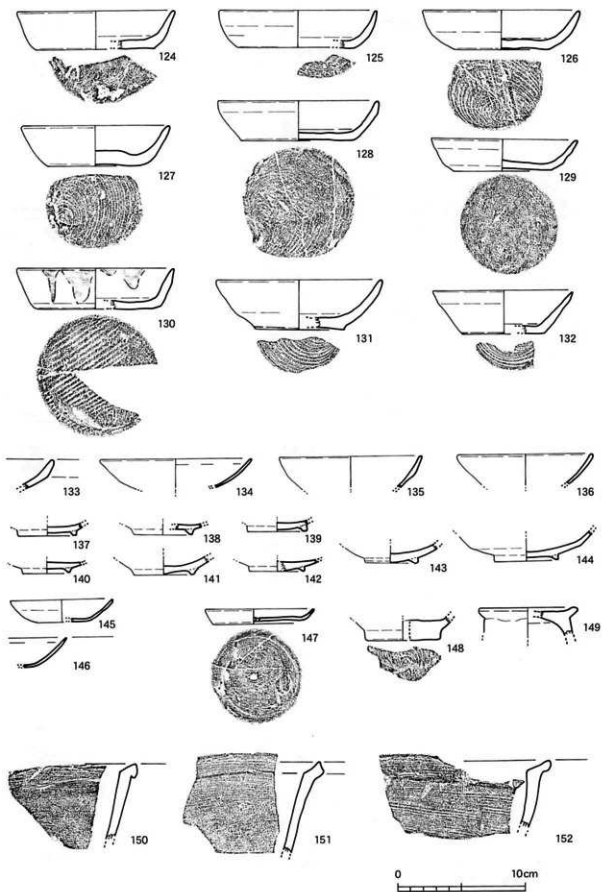
第3-10図 B-SD003出土遺物実測図(6)



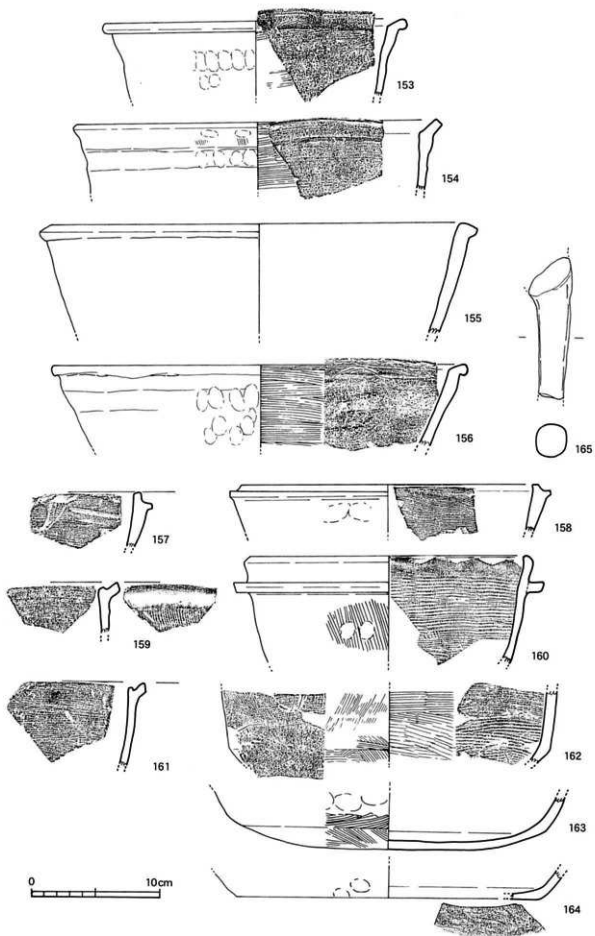
第3-11圖 B-SD003出土遺物実測図(7)



第3-12圖 B-SD003出土遺物與測圖(8)



第3-13図 B-SD003出土遺物実測図(9)



第3-14図 B-SD003出土遺物実測図(0)

第2節 遺構と遺物

防長系播鉢

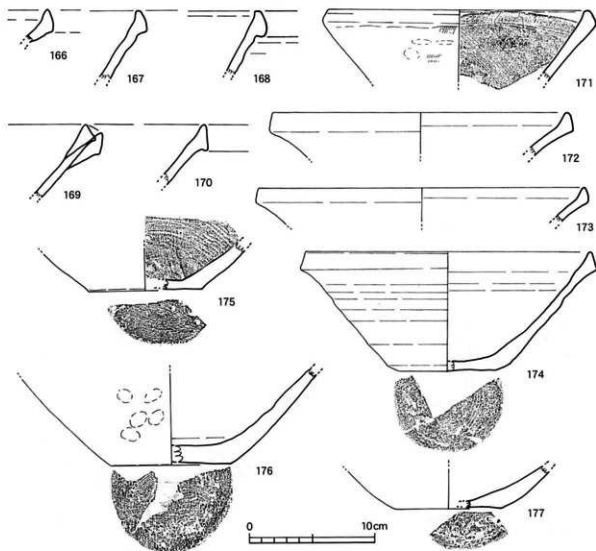
ある。191～199は鉢である。器面調整は内外面とも刷毛目で仕上げているが、外面はさらに撫でや指押さえの跡が194～197に見られる。また、200の内側には7～8本の櫛歯状工具で掘り目が入れられており、防長系播鉢と考える。194の口径は34cmで、底径は195が10.4cm、196が10.8cm、197が9.2cm、198が10.2cm、199が10cm、200が11.2cmである。

第3-18図201・202・203は口径42cm・47.8cm・22cmの壺である。器面は口縁部が横方向の撫でで、胴部には一部に刷毛目が残されている。204は全面横方向にヘラ磨きされた瓦質土器で、器高は6cmで、器形は上面観が方形になる。205は204を大型にした瓦質土器の角の資料である。全面ヘラ磨きされ、黒色に焼成されている。206と207の外面には菊花文が付いている。

滑石製石鍋

第3-19図に図示したのは石製品・土製品・ガラス製品である。208～212は滑石製品で、本来は212の底径20.8cmの石鍋であったが、再加工している。210は両面に溝を入れており、切断作業の途中と考える。重量は208が22.2g、209が144.2g、210が118.2g、211が113.8g、212が78.8gである。213の長さは不明であるが、幅4cm、厚さ0.4～0.7cmの砥石である。

214～241は土鍾である。241以外は紡錘形で、長さは3cm代と5cm代を含むが、ほとんどは4cm代であり、重さも5g前後のものが主体を占める。ただ241は側面観が長方形で、直径が大きく11.1gある。



第3-15図 B-SD003出土遺物実測図(1)

ガラス製品 242～247はガラス製の玉で、242～244は青色をした小玉である。ビーズ状に穴が開くが、外面は螺旋状になっている。245～247の玉は半分に欠けており、割れ面は研磨されている。245・146は緑色で、247は紺色をしている。直径は1cm弱である。

248は土製の玉で1ヶ所、竹串で突いたような跡が残る。

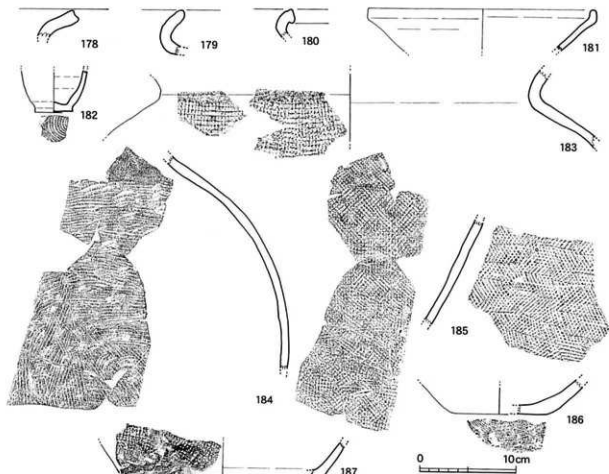
第3-20・3-21図は古代の遺物である。249は口縁部内面に沈線が廻る口径19.2cmの内黒土器である。251は底径6.0cmの土器で外面はヘラ磨きされている。252は口径18cmの土師器の皿である。内外面ヘラ磨きされている。253は口径19cmの須恵器の坏蓋である。250・254～259は底部が回転ヘラ切りの坏である。口径は13cm前後で、器高は3.6cm前後である。260～265は高台付きの坏である。底径は9cm前後である。なお、262・265は須恵器である。また、267も須恵器で、壺の底部と想定する。268と269は須恵器である。壺の口縁部と胴部である。270は口縁部が直口する土師器で口径は27cmである。甕と考えられる。

第3-21図271～274は胴部が直線的に伸び、口縁部が外反する甕形土器である胴部外面は縦方向の刷毛目で、他は撫で仕上げである。口径は271が22.2cm、272が24.4cm、273が21.8cm、274が24.6cmである。275は胴部最大径が44.8cmの甕形土器である。時期は中世の可能性もある。276は弥生時代後期の甕形土器の口縁部である。277は古墳時代前期の高坏である。

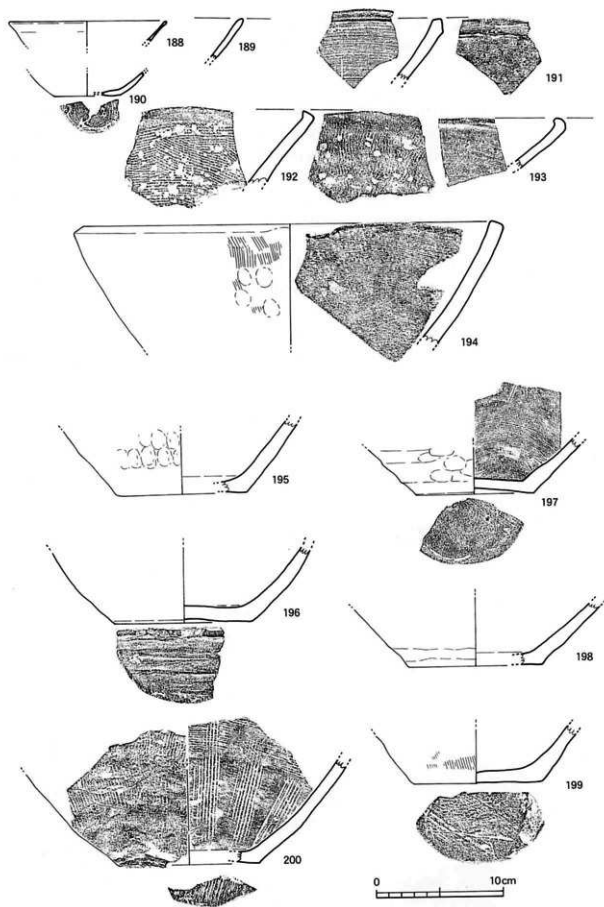
弥生土器

銅銭

第3-22図にはB-SD003から出土した銅銭を図示した。278は一部を欠くが「開元通寶」で初鑄年は845年(唐)である。279は「咸平通寶」で初鑄年は998年(北宋)である。磨輪銭の可能性はある。280は「景德元寶」で初鑄年は1004年(北宋)である。281は篆書体で書かれた「天聖元寶」



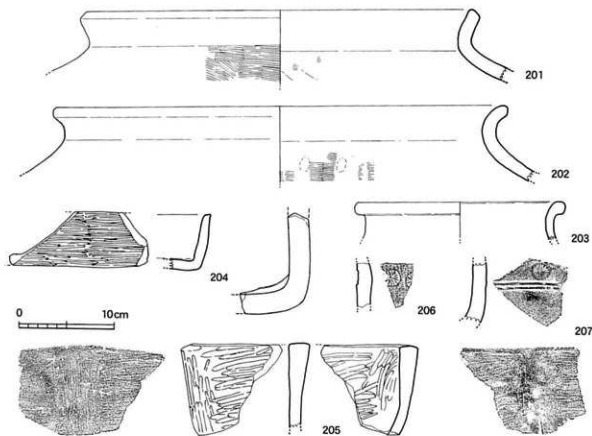
第3-16図 B-SD003出土遺物実測図②



第3-17図 B-SD003出土遺物実測図(3)

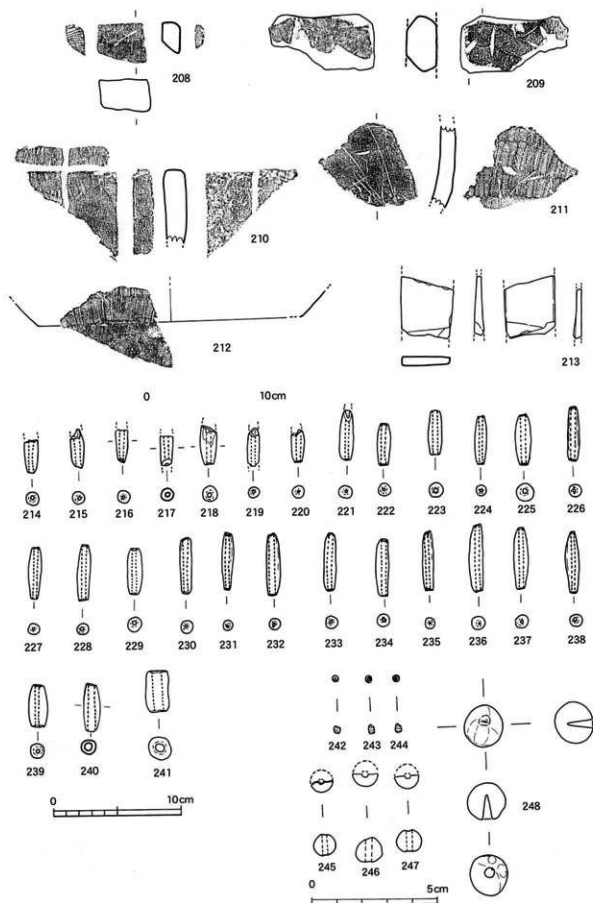
で初鑄年は1023年（北宋）である。孔の部分にズレがあり星形孔状である。282は真書体で書かれた「嘉祐通寶」で初鑄年は1056年（北宋）である。291の「元祐通寶」と貼りついて出土した。283は真書体で書かれた「治平元寶」で初鑄年は1064年（北宋）である。284・285は行書体、286は篆書体で書かれた「元豊通寶」で初鑄年は1078年（北宋）である。287は篆書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年（北宋）である。288・290・291は行書体の「元祐通寶」で初鑄年は1086年（北宋）である。288は星形孔になっており、291は282と貼りついて出土した。289・292の「元祐通寶」は篆書体である。293・294は篆書体で書かれた「紹聖元寶」で初鑄年は1094年（北宋）である。295は真書体で書かれた「政和通寶」で初鑄年は1111年（北宋）である。296は銭貨名が全く読めないが、297は真書体の「元」「寶」が読めるものの、不明である。

B-SD003から出土した遺物の時期は13世紀後半から16世紀後葉まで及ぶ。しかし、15世紀以降の遺物はごくわずかで、溝を切る確認できなかった遺構からの出土と考える。古い時期の遺物の混入は当然ありうる。これらを除くと、遺構の時期は14世紀中葉から後葉と考える。

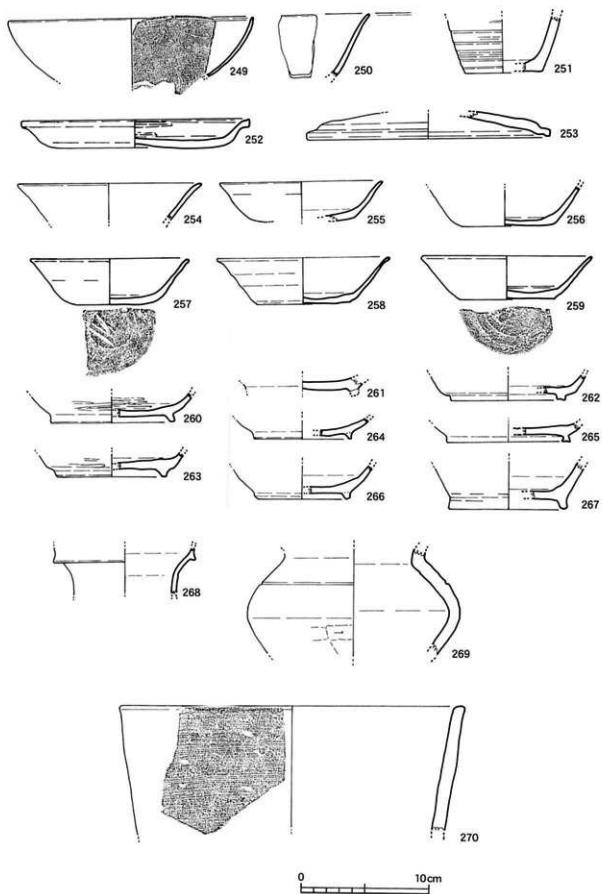


第3-18図 B-SD003出土遺物実測図(4)

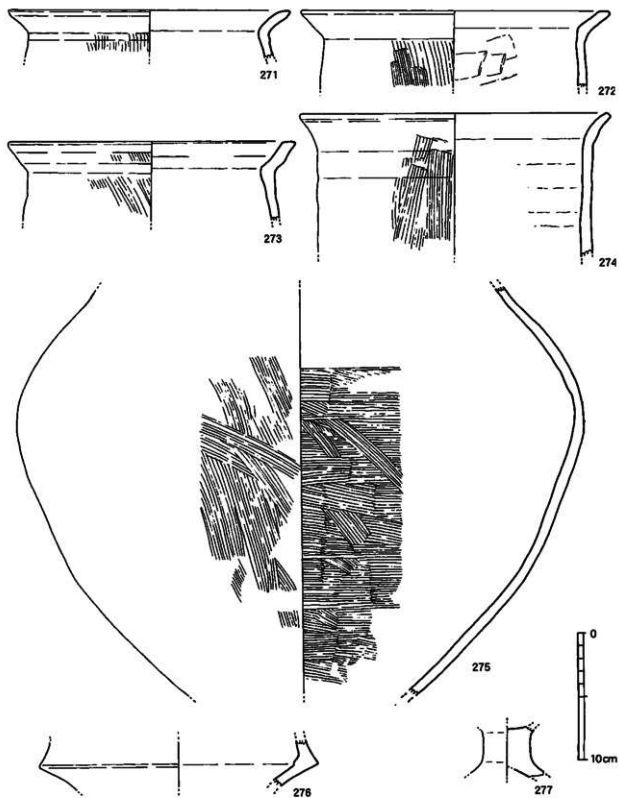
第2節 遺構と遺物



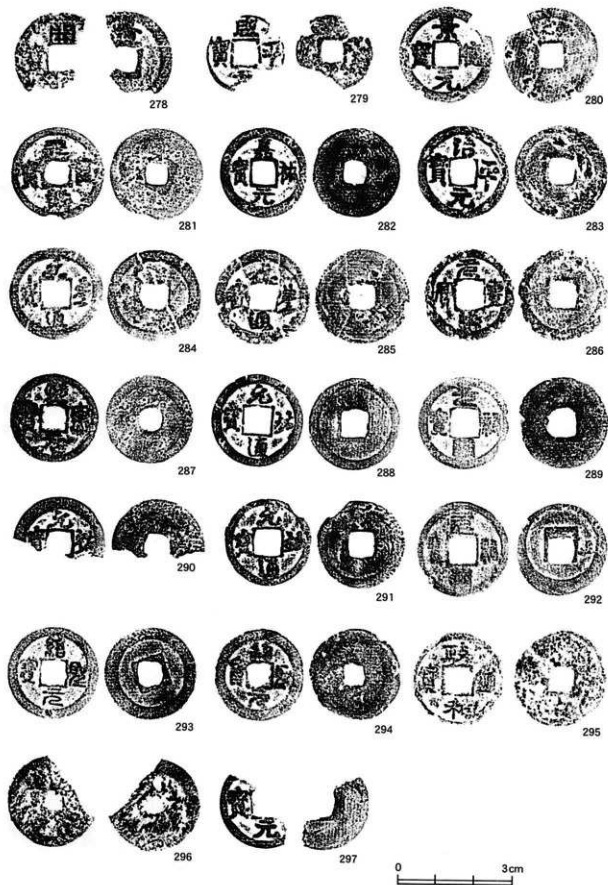
第3-19図 B-SD003出土遺物実測図(5)



第3-20図 B-SD003出土遺物実測図(6)



第3-21圖 B-SD003出土遺物実測図(7)



第3-22図 B-SD003出土銅銭実測図

B-SD004

B-SD004は調査区の東壁沿いで、南北方向に掘り込まれた状態で検出された溝である。溝は南北に約45m確認されたが、大半は調査区外で、西側の掘り込み面を調査したに過ぎず、深さは約50cmまでしか掘り下げることが出来なかった。溝は北端で東に屈曲すると考える。

龍泉窯系

遺物は溝の上面を中心に、瓦が廃棄された状態で多量に出土し、第3-23~3-35図に図示した。第3-24図1~3は龍泉窯系青磁碗である。外面には鎚蓮弁が施文されている。4・5は備前系陶器である。壺である4は外面に自然釉が付着し、5の挿鉢の内面には口縁部に直角に6本の歯菌状工具で掘り目が入えられている。

6~19は口ク口成形による在地系土師質土器である。6~13は皿であるが、法量の平均は、口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.1cmである。器形は8が底部の器壁が厚く口縁部の立ち上がりは小さいが、他は円盤状の粘土塊から口縁部を引き出ししている。12~19は坏である口径は、12.5cm前後で、底径も8.5cm前後、器高は15が2.4cm、16は2.9cmであるが、他は3cmを越える。器形は、14が口縁部の器壁が中位にあるが、16~19は底部周辺が厚くなっている。15は口縁端部が外反気味になる。

吉備系土師器

20~23は胎土が白色で、底部に高台が廻る非在地系の土師質土器で、吉備系土師器や早島式土器と呼ばれるものである。21は図上復元されたものであるが、口径11.2cm、底径4.3cm、器高3.1cmである。また、底部の資料である22・23は、21と同様の断面三角形の退化した高台が廻っている。底径は22が5.1cm、23が4.4cmで、B-SD003から出土した同類の資料と類似する。

土鍋

24・25は小片であるが、土鍋と考える。24は口縁部が屈曲するもので、口縁部は撫であるが、胴部の内外面に刷毛目が残る。また25は外面が横撫であるが、内面は横方向の刷毛目で器面調整されている。26は外面に縦方向の刷毛目がわずかに残る土師質土器の壺の口縁部である。27・28は大きさに差があるが、器形は東播系須恵質土器である。口径は27が19.2cm、28は36.5cmである。

瓦質土器

第3-25図の29は口縁部が直口する口径11.9cmの瓦質土器の鉢である。器面は横方向の撫で仕上げられている。30・31も瓦質土器の鉢の口縁部である。内外面とも横方向のヘラ磨きで、30は口縁端部が肥厚し、口唇部は平坦である。

土鍾

32~34は土鍾である。32は両端を欠くが残された部分は、長さ3.3cm、直径1.3cm、重さ5.5gである。33は完形品で長さ5.1cm、直径1cm、重さ5gである。34は大型で、長さ6.3cm、最大径2.9cm、重さ49.3gである。また、36はガラス製と考えられる小玉で、長さ、径ともに0.3cmで、重さは0.1gである。35は長さ7.5cm、幅2.6cm、厚さ0.9cmの一部を欠く砥石である。

ガラス製玉

37・38は坏蓋で、37は宝珠形つまみが付き、38の口径は19.3cmである。39~41は坏身で、口径は39が16.3cm、40は13.1cmで、41の底径は7.6cmである。器形は口縁端部が外反し、底部の高台は断面三角形である。器面調整は内外面とも横方向のヘラ磨きで仕上げられている。

42・43は口縁部が外反する甕形土器で、内外面撫で仕上げである。43の口径は19.5cmである。44は高坏の脚で、縦方向のヘラ削りにより、断面八角形に整えている。45は口径24.5cmの胴部が屈曲する鉢で、内外面とも撫で器面調整されている。46は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部の資料である。外面は櫛波状文とその上位に竹管刺文が施文されている。47は全面刷毛目で器面調整された土師質土器の大型の平底の甕である。37~44は8世紀後半から9世紀前半のものであるが、47は中世のものであろう。第3-23図47は真書体で書かれた「熙寧元寶」の銅銭で初鑄年は1068年(北宋)である。

弥生土器

銅銭

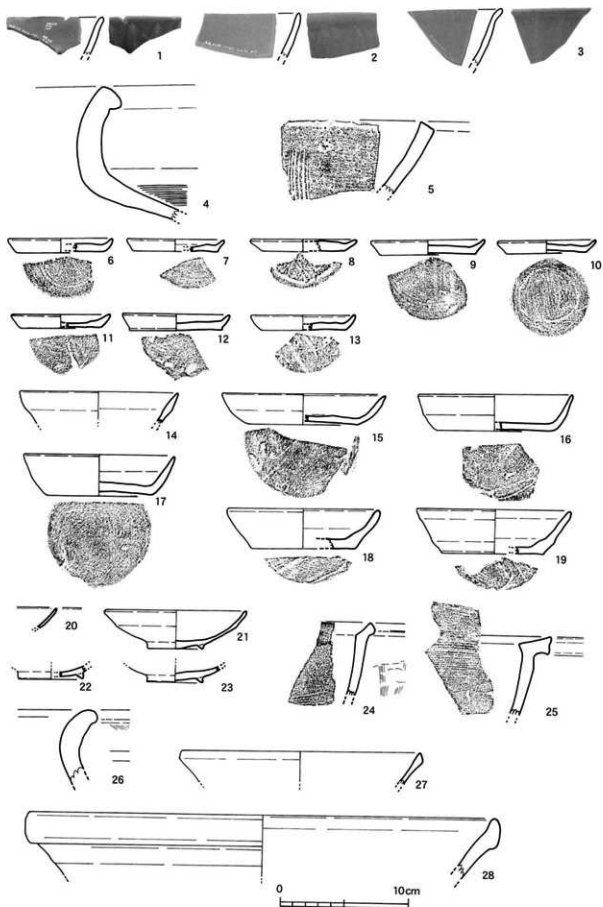
瓦

鬼瓦

第3-26~3-35図はB-SD004の上層から出土した瓦である。第3-26図48・49は鬼瓦で、48は厚さ2.8cmで、縦方向に珠文が並ぶ。49はヘラで刻み目を加えられた突

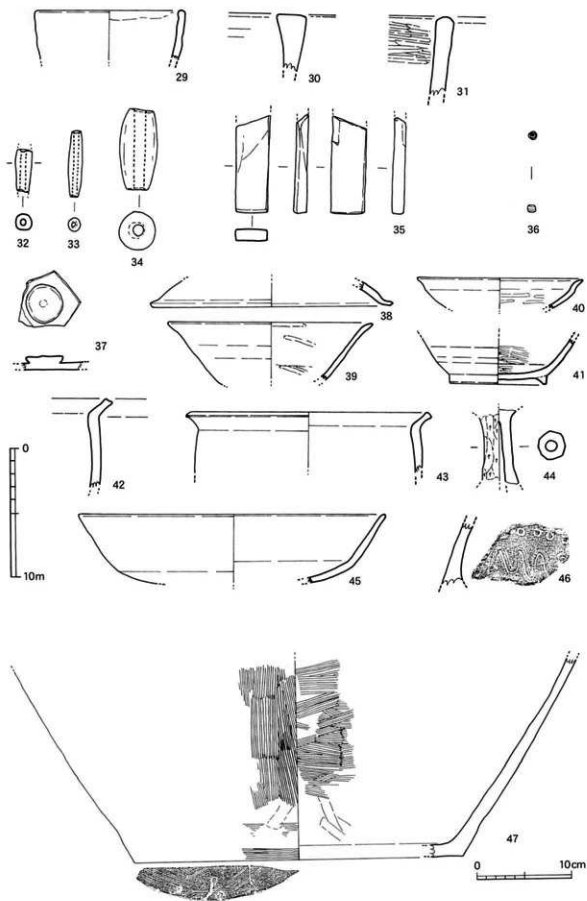


第3-23図 B-SD003出土実測図



第3-24図 B-SD004出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物



第3-25図 B-SD004出土遺物実測図(2)

帯が平行に付けられているが、部位不明である。50～59・第3-27図60は軒丸瓦である。瓦当部の良好な資料が少なく、全体を捉えることは困難であるが、57から、中央部に三巴文を配し、内周線はなく、周辺に連珠文を施文する。外周線は57以外には認められる。また、50・52は瓦部と瓦当との角度が鋭角であり、鳥舎の可能性もある。瓦面の外面はヘラ撫でであるが、内面は56・58～60に布目痕が残り、58にはコピキAの擦過痕がある¹⁾。

コピキA

丸瓦

第3-27・3-30図の61～85に丸瓦を図示した。63～69は軒に近い部位で、64は瓦当を付けるためのヘラによる斜め方向の連続した細かい傷が加えられている。63の瓦は幅16.8cm、厚さ2.8cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられている。内面は布目と横方向に細い紐を10段以上に縫った痕跡である九州タイプの吊り紐の圧痕が残り、その下位は8.8cmの幅で横撫でされている。65の瓦も同様な成形で、内面に布目と九州タイプの吊り紐の圧痕が残り、下位の撫で幅は約5cmである。66は全面に布目が残る、下位の撫で幅は約3cmである。67の瓦の幅は16.8cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられている。内面は布目の圧痕が残り²⁾、その下位は8cmの幅で横撫でされている。68の瓦は幅14.4cmで、外面は縄目叩きの後撫でで平滑に仕上げられ、内面は布目の圧痕が残り、その下位の横撫での幅は3cmである。69は外面を縦方向にヘラ撫でされており、内面はコピキAの斜め方向に擦過痕が残る。下位の横撫での幅は約4cmである。

九州タイプの
吊り紐

70・73・74・77・78・79・81・85は玉縁部の資料である。玉縁の長さは70が5.2cm、73は4cm、79は8.4cm、81は4.4cm、85は4.6cmである。器面は外面が縄目叩きの後、縦方向のヘラ撫で、70・73・74の内面には布目と大きく波状になる吊り紐の圧痕が残る。73はさらに九州タイプの吊り紐に大きく波状になる吊り紐の圧痕が残る。74の幅は14cmである。77・78・81・85は布目のみが残る、79は九州タイプの吊り紐痕が残る。以上の他、内面に吊り紐痕の残る主な資料を図示した。61・76・82・84には九州タイプの吊り紐痕があり、71・75・80には大きな波状の吊り紐痕、72・83は九州タイプの吊り紐痕と大きな波状の吊り紐痕が見られる。

軒平瓦

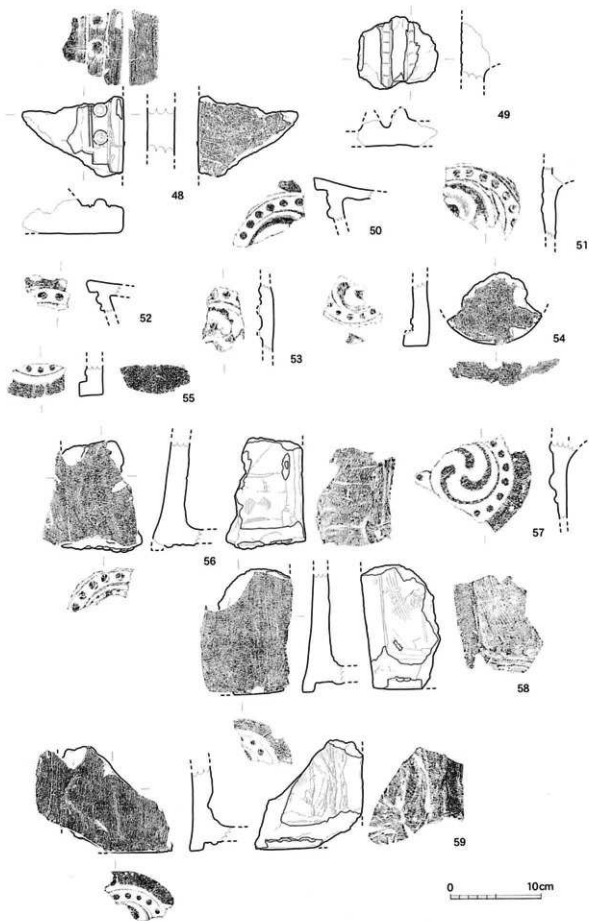
第3-31図は、軒平瓦である。瓦当の文様は、86が連珠文で、他は均正唐草文である。文様は、同類である91・94に比較すると87の中心飾りの蓮華文や唐草文は明瞭であり、前者の2点が簡略化していることが判る。さらに、88の文様はさらに簡略化されている。

第3-31～3-34図は平瓦である。瓦の両面は縦方向の撫でで平滑に仕上げている。厚さは1.6cmから2.8cmであり、残りの良好な96では幅が24cmで、全形が判る97は、台形になり、上位幅20cm、下位幅約24.8cm、長さ30.4cmである。95は上位の破片であるが、釘穴が見られる。98～110も上位の破片であり、上辺の側面は、断面を見ると、横撫でで鋭角的に仕上げている。これに対し、下位の111～116の下辺の側面は直角に近く切断されている。

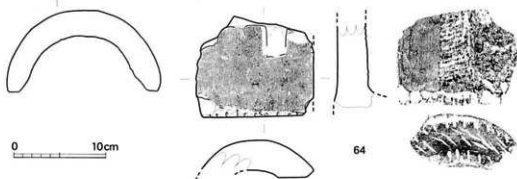
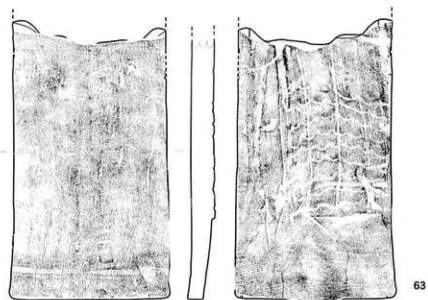
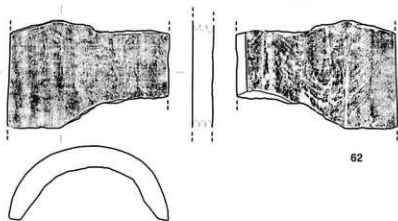
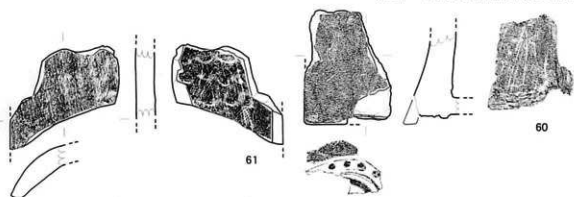
第3-35図の117は横断面が屈曲しており、雁振瓦であろうか。118～128は？である。厚さは3cm前後で、側面は直角に切られている。面は撫でで平滑に仕上げられているが、120はコピキAによる擦過痕が残る。118には押印による菊花文が施文されている。

B-SD004の時期は、出土したロクロ成形による在地系土師質土器の形態や、備前系陶器の揺鉢から14世紀中葉から後葉と考える。

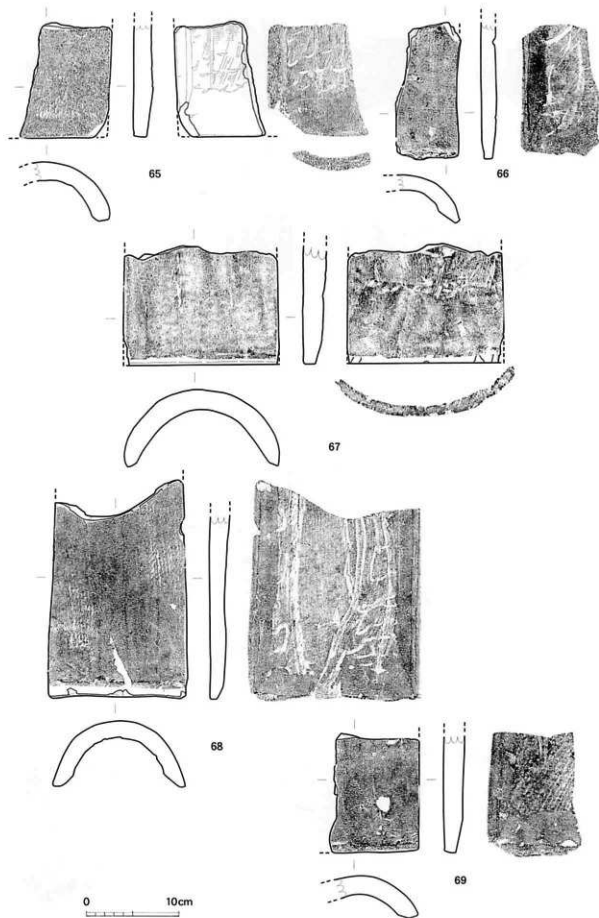
(1)森田克行「屋瓦」『摂津高槻城』高槻市文化財調査報告書 第14冊 高槻市教育委員会 1984年
 (2)山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報 第59冊 奈良国立文化財研究所 2000年



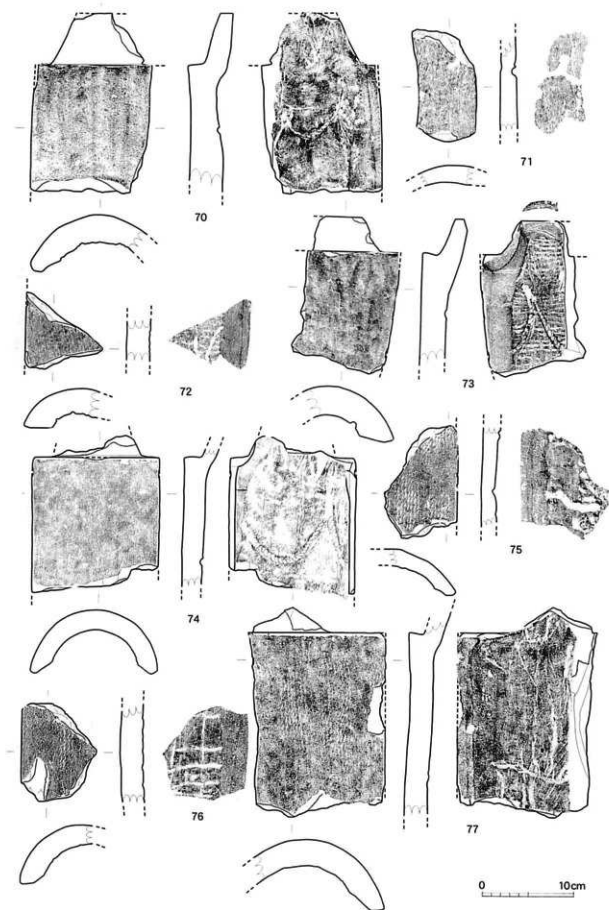
第3-26図 B-SD004出土瓦片・軒瓦実測図(1)



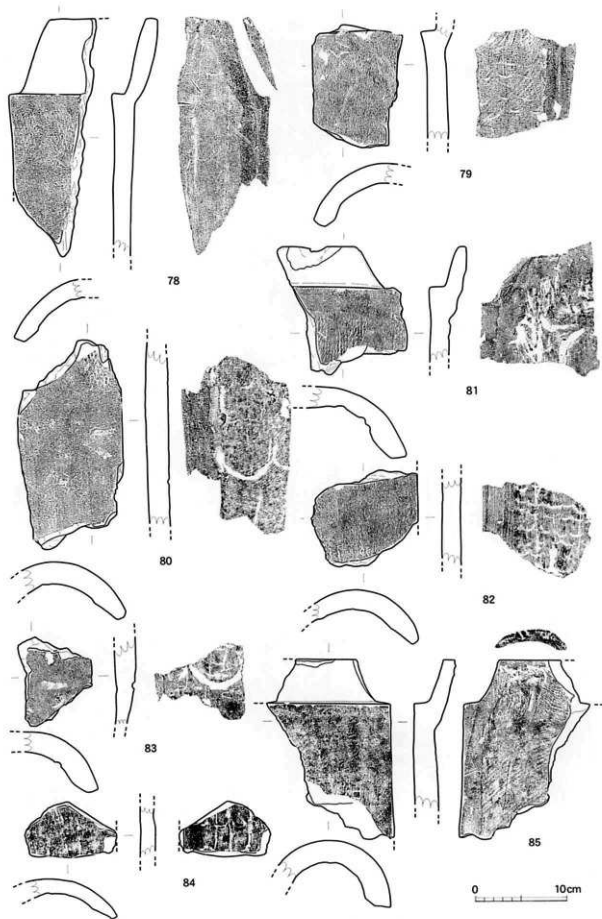
第3-27図 B-SD004出土丸瓦実測図(2)



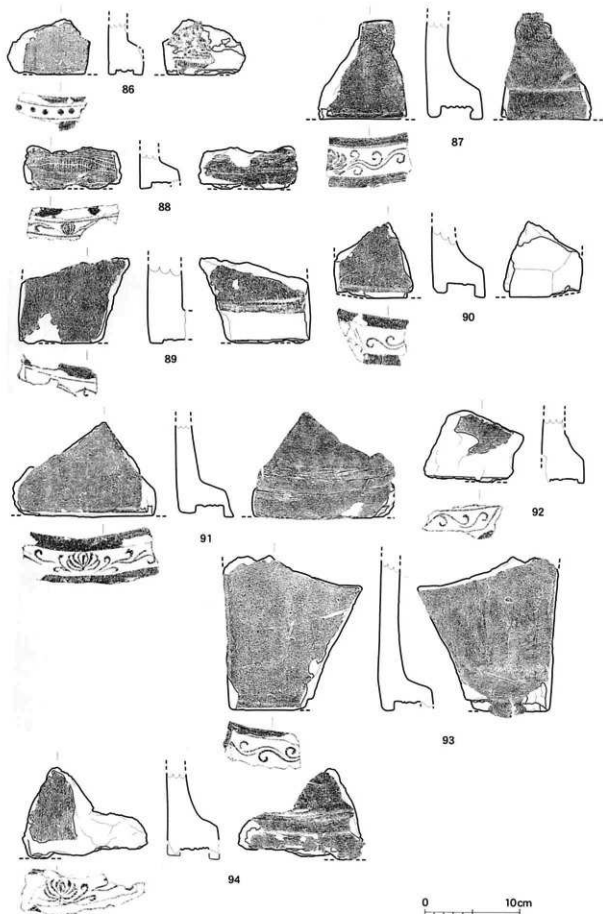
第3-28図 B-SD004出土丸瓦実測図(3)



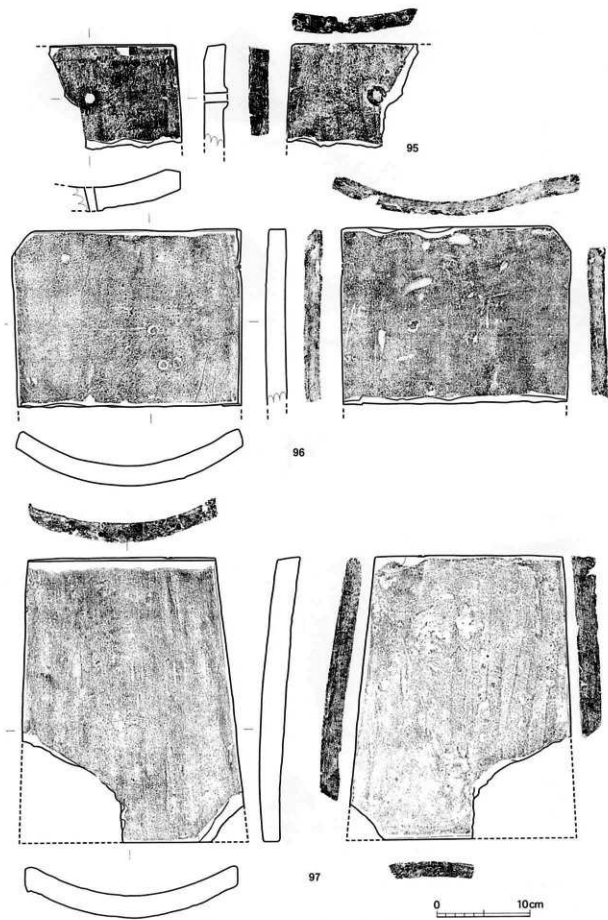
第3-29図 B-SD004出土瓦実測図(4)



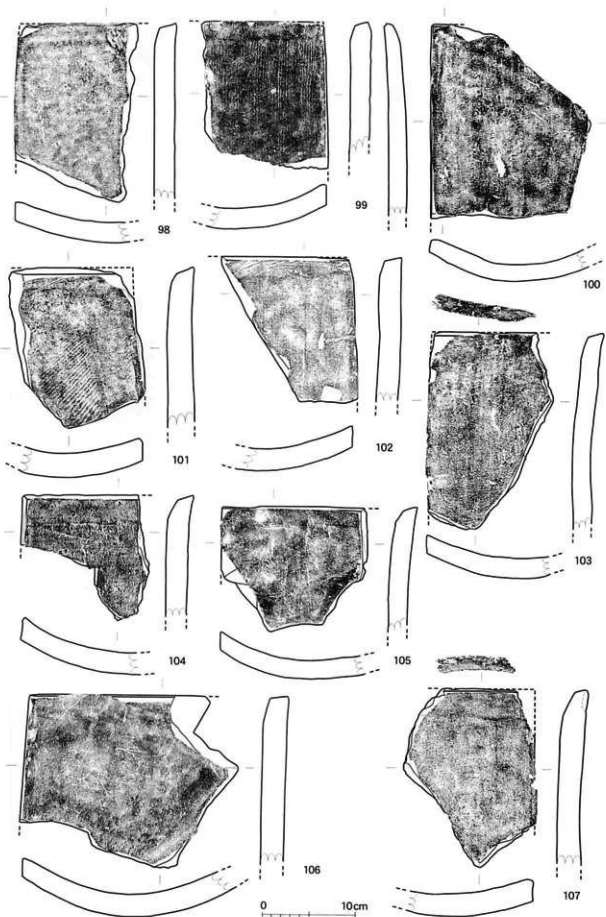
第3-30図 B-SD004出土瓦実測図(5)



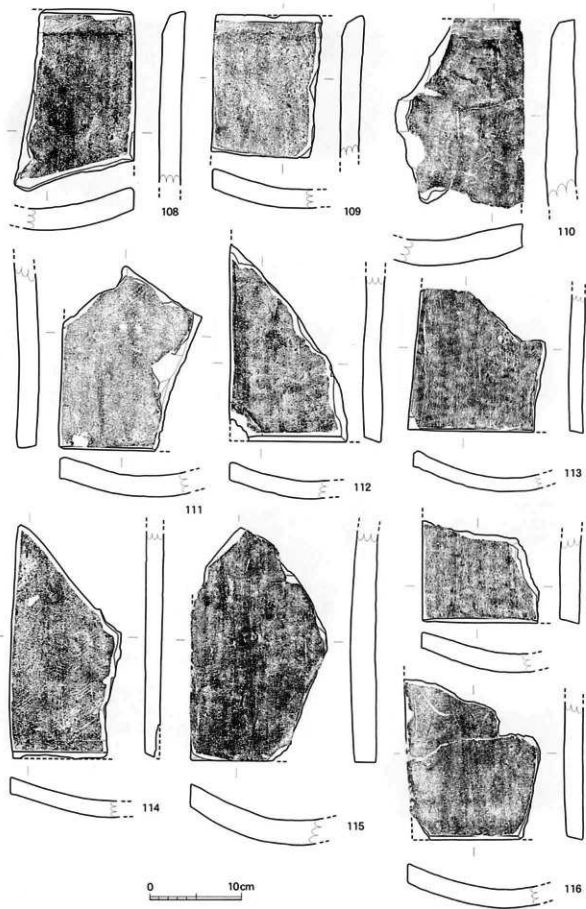
第3-31图 B-SD004出土軒平瓦実測図(6)



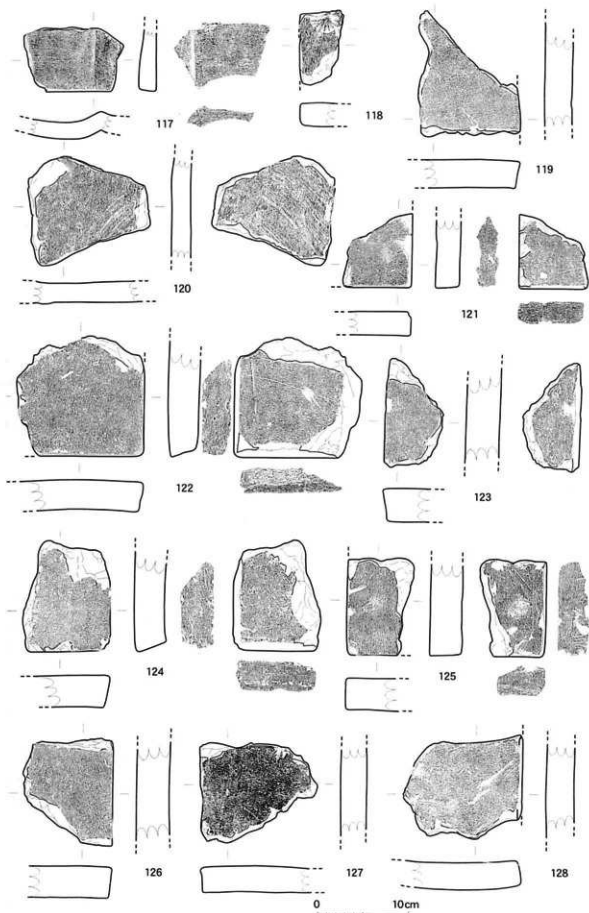
第3-32図 B-SD004出土平瓦実測図(7)



第3-33图 B-SD004出土平瓦実測図(8)



第3-34図 B-SD004出土平瓦実測図(9)



第3-35図 B-SD004出土埴実測図(0)

B-SD064

B-SD064は調査区の西寄りを南北に貫く溝で、府内町跡20次調査A区でA-SD1506と接続する同じ遺構である。形骸はB-SD003と比較すると企画性に乏しく、緩やかに蛇行し、特に南半分は顕著である。幅も約1.5mから3mで、底面の幅も0.3~1cmで、深さは1.6mであり、南端部が標高約3.5m、中程が3.7m、北端が約3.5mで中央部が高い。

出土遺物は第3-36~3-47図に図示した。第3-36図1~8は中国産青花で、1は口縁部がわずかに外反する。2は口縁部が外反する皿で、小野編年の皿B2群である。3は口縁部が屈曲する小野編年の皿F群である。また、4は萐荷底になり、底径2cmの皿C群である。5の底径は7.8cm、6は8cmであり、皿F群の底部と考える。8は口径12.3cm、底径6.7cm、器高2.9cmで、底面に「年」の字のみが判読できる。小野編年の皿E群である。以上7点は景德鎮窯系青花である。7の底部は見込みに青花があり、外面は一部に露胎がある。底径5.8cmでの薄州窯系青花である。

景德鎮窯系

薄州窯系

龍泉窯系

同安窯系

9~14は龍泉窯系青磁である。9・10・12・14の外面には鎊蓮弁が施文されている。口径は12が15.2cm、13が10.8cm、14が10.6cmである。15は底径口径9.9cm、4.2cm、器高2.3cmの同安窯系青磁皿である。16は見込みに細いヘラ描きで花文が描かれている。黄褐色で、龍泉窯系の焼成の悪い碗であろう。

白磁

17~23は白磁である。17は口縁部が外反する。18は底径5cmで器壁は薄い。19は白磁の輪花皿である。20は口径10.4cm、底径5.2cm、器高2.9cmで、口縁部は露胎でスガが付着する。21は口縁部が玉縁になる白磁の碗である。22は器壁が厚い白磁の皿で、23は外面にヘラ描きで文様が入られ軸がかかっている。17~22は中国産白磁であるが、22と23は白磁の色調や器壁の厚さなどから朝鮮王朝産陶磁器の可能性もある。24は青色をした瑠璃釉の皿である。25・26は緑色をした磁器窯系の鉢の小片である。

磁器窯系

タイ産四耳壺

第3-37図27~30はタイ産陶磁器で、四耳壺の資料である。27は玉縁の口縁部で28~30は胴部の資料である。外面には白泥釉が付着しており、胴部破片である28には平行線紋が認められる。

瀬戸美濃系

常滑窯系

備前系

水屋製

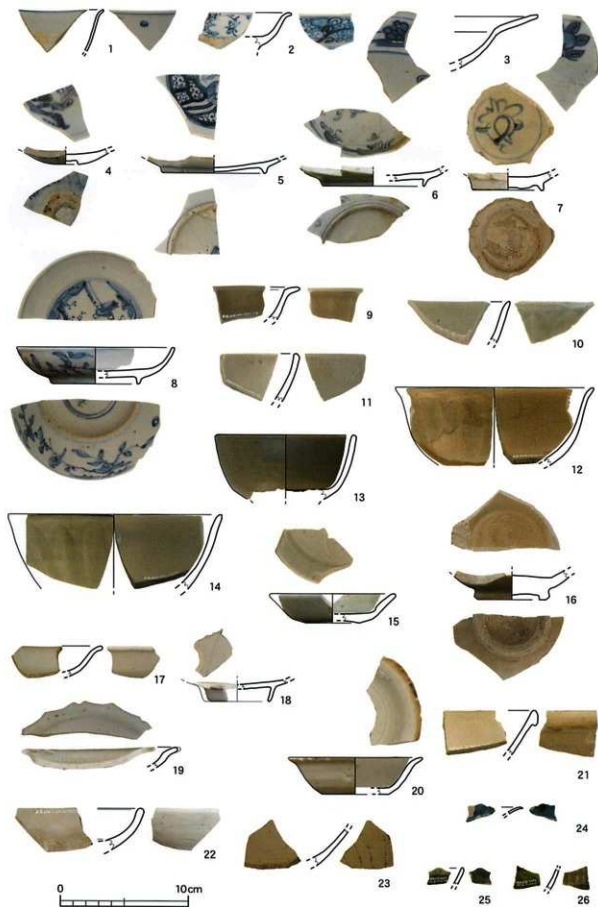
31・33・34は瀬戸美濃系陶器で、31は天目茶碗である。33は底径4.2cm、34は口径0.6cm、底径4.4cm、器高2cmの小皿である。32は常滑窯系陶器の壺で、口縁部は約2.5cmの緑帯を形成している。

第3-37図35~43と第3-38図及び第3-45図177は備前系陶器である。35は底径6cmの小型の徳利である。36~39は同一個体の可能性のある水屋製である。口径は12cm、底径は15cmで胴部に低い突起が1条廻り、下位にかけて、この器種独特の39の円形の浮文が貼り付く。40・41は壺の口縁部である。口縁部は直立し、外面が玉縁状に肥厚する。42~52は挿鉢であるが、42・43は14世紀後半であるが、口径33cmの42は口唇部が「コ」の字状であるが、口径31.6cmの43は口縁部内端部が尖り、新しい傾向を見せる。内面には球らに楕目が付けられている。177は口径約50cmの大甕である。

44~50の挿鉢は口縁部が屈曲して立ち上がり、緑帯部を形成し、口唇部は尖り、その下位の内面は凹線状になる。内面の楕目は、46~50に見られるように口縁部に直角に入るものに、斜め方向のものが加わり、交差する。また50の底部内面にも十字に楕目が入る。口径は45が28.2cm、46が29.2cm、48は注口部が認められ34cm、49が37.2cmである。45は図上復元され口径32.2cm、底径12.8cm、器高12.3cmである。これらは、16世紀後葉から末葉のものである。51と52は底部であるが、51は16世紀代、52は14世紀代と考える。

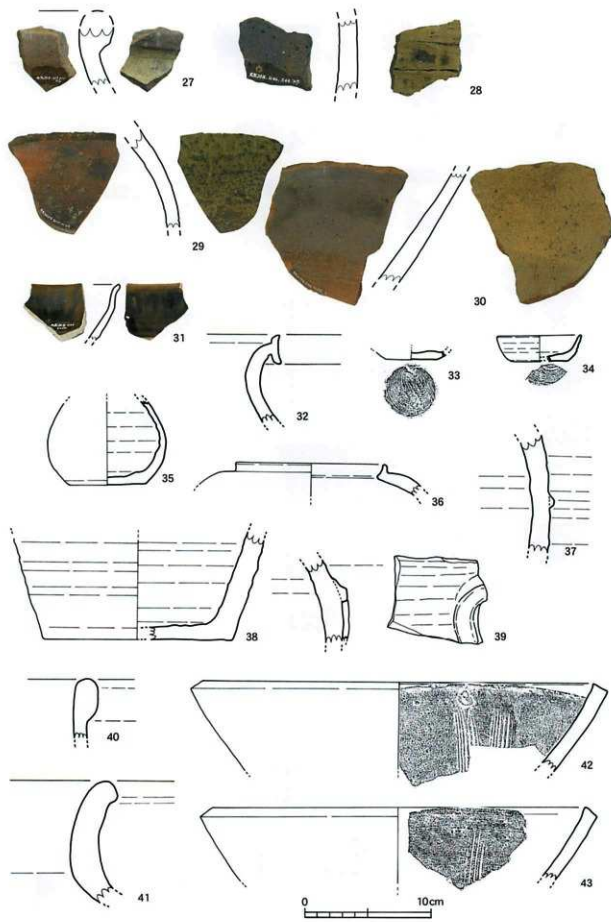
第3-39図と第3-40図84~95はロクロ成形による在地系土師質土器である。第3-39図53~67は皿であるが、67は口径8.4cmに比べ、底径は5.5cmで小さく、器高は2.1cmで高い特徴を持ち、他とは器形が異なる。これに対し、53~66の口径・底径・器高の平均は、8.4cm、6.8cm、1.3cmである。

68~95は坏であるが、93・94は口径13cmであるが、底径は7.6cmと6.6cmで、器高は3.1cmであり、口径に対し、底径が小さく、底部外端部が明瞭な稜を生じて、口縁部は内反り気味に立ち上がり、

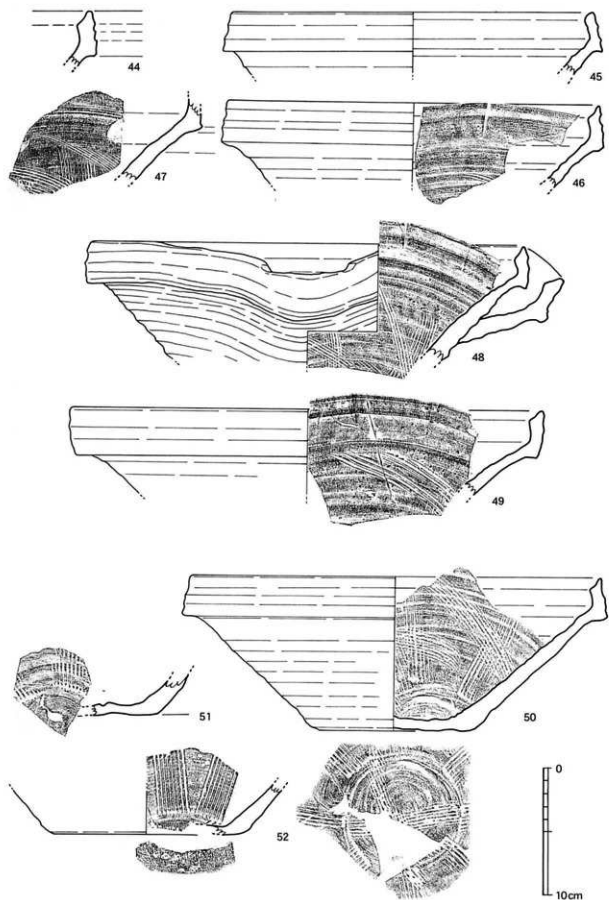


第3-36図 B-SD064出土遺物実測図(1)

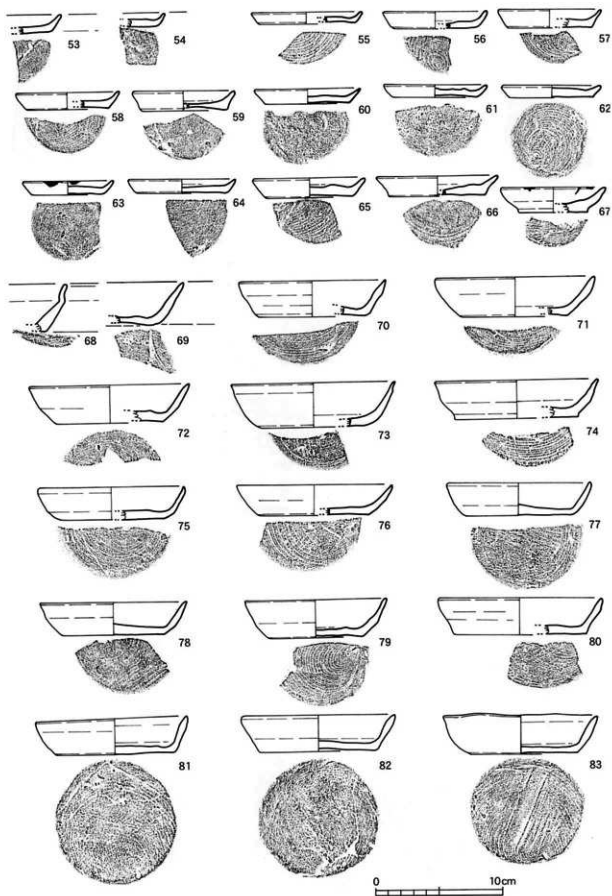
第2節 遺構と遺物



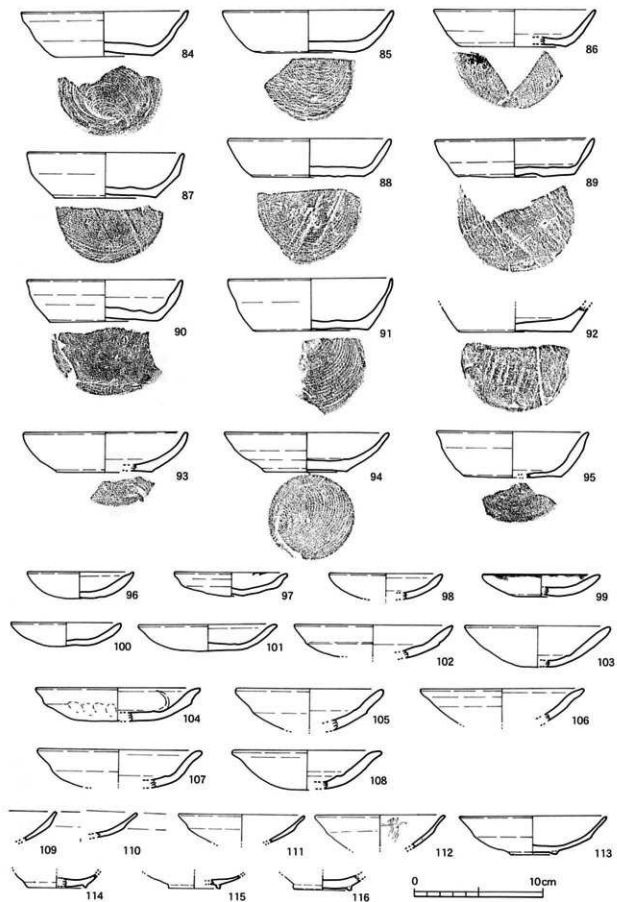
第3-37图 B-SD064出土遺物実測図(2)



第3-38図 B-SD064出土遺物実測図(3)



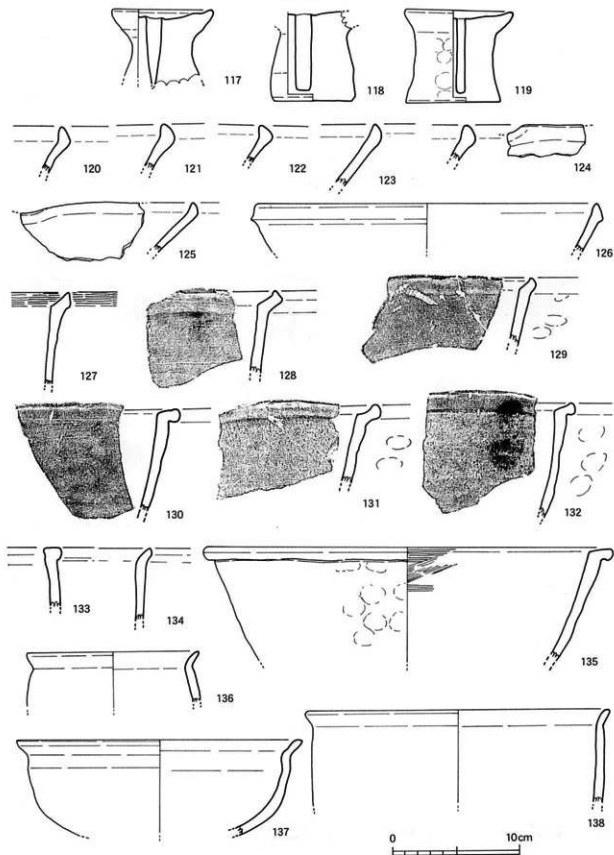
第3-39図 B-SD064出土遺物実測図(4)



第3-40图 B-SD064出土物実測图(5)

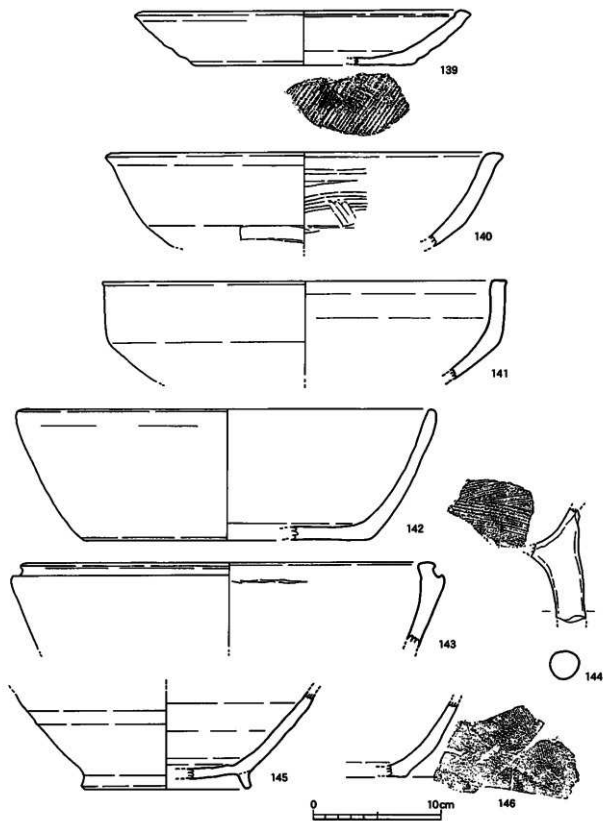
第2節 遺構と遺物

他とは器形が異なる。70～92・95の法量の平均は、口径12.4cm、底径8.6cm、器高3.1cmとなる。しかし、口縁部の器壁は、70～72・78・80～83・87・89・90・95は中位から上位が厚くなり、73・74・



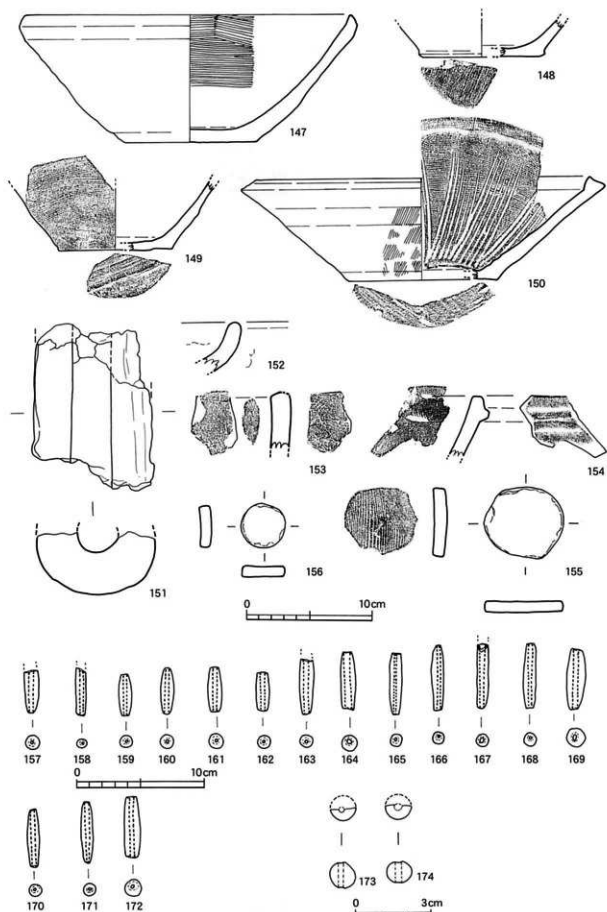
第3-41図 B-SD064出土遺物実測図(6)

76・79・85・86・41などは、底部と近くが厚くなり、口縁端部に向けて、尖るように立ち上がる。
また、83・88・89・92には板状圧痕が残る。



第3-42図 B-SD064出土遺物実測図(7)

第2節 遺構と遺物



第3-43図 B-SD064出土遺物実測図(8)

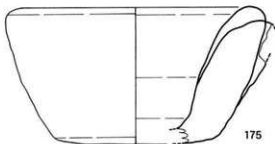
第3-40図96~108は非クロコ系土師質土器である京都系土師器である。京都系土師器には量量分
 化が認められ、96~100の平均口径は8.8cmで、これに次ぐ大きさは、101~103・105・108で平均口
 径は11.7cmである。さらに104・106・107は12.9cmとなる。内面には、104のような、撫で上げ痕が
 認められる。また、99の口縁部にはススが付着しており、灯明皿として使用されている。

灯明皿

吉備系土師器 第3-40図109~116は他の土師質土器に比較すると色調が白色であり、吉備系土師器や早島式土
 器と呼ばれる土師質土器の皿である。図上で完形品に復元できる113は、口径11.6cm、底径3.5cm、
 器高3.1cmである。他の資料の口径は、111が10cm、112は10.2cmである。また、細い粘土紐を廻らせ
 形成される高台の断面は113・114が細い三角形になるが、115と116は「コ」の字状になる。底径は
 114が4.6cm、115は4cm、116は4.6cmである。

燭台

第3-41図117~119は中央の穴に木心を
 立て、燭台と理解している土製品である。
 上面は窪み、円柱状に成形された上位がやや
 細く、底部を広げて安定させている。
 117は底部を欠くが、上面径8cmである。
 118は上面を欠くが、底径は6.7cmで、器高
 は約7.5cmである。119は完形品で、上面径
 8.5cm、底径7.4cm、器高7.4cmである。



東播系

120~126は口縁端部が肥厚し、断面三角
 形になる東播系須恵質土器の鉢である。
 124と125は注口部である。126は口径27.2
 cmを測る。



土鍋

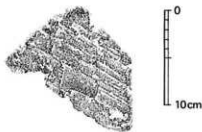
127~132・135は口縁部が屈曲する土鍋
 である。図示した7点とも土師質土器である。
 器面調整は、内面が細かい横方向の刷
 毛目で、外面は撫でや指押さえ痕が残る。
 135の口径は32.2cmである。



瓦質土器

133・134・136~138は瓦質土器である。
 133が口縁端部が肥厚する。134・136・137
 は類似する器形であるが、口径は136が13.4
 cm、138が24cmで変形をしている。137は口
 縁部が屈曲し外反する鉢で、口径は22.6cm
 で、底部を欠くが器高は約25cmが推測でき
 る。

第3-42図と第3-43図147~150は瓦質土
 器である。器形は鉢形をしており、器面は
 ヘラ磨きや撫でで仕上げられている。第3-
 42図139は口径26.4cm、底径17cm、器高4.3
 cmである。140は口縁外端部が突出し、口
 径31.2cmを測る。141は口径31.8cmで、胴部
 中位で屈曲し、口縁部が直立する。142は
 タライ状の形態で、口径33cm、底径23cm、
 器高10.4cm、143は肥厚した口縁部外面に



第3-44図 B-SD064出土遺物実測図(9)

第2節 遺構と遺物

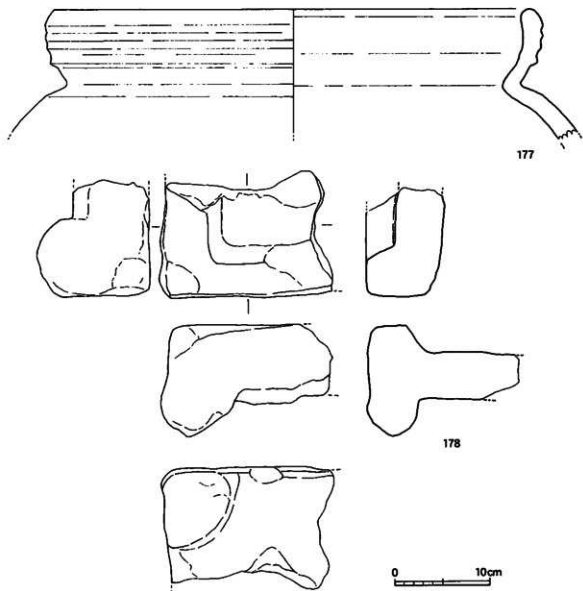
凹縁が廻る。口径37.6cmである。144は土鍋の脚である。155は底径13.2cmの高台の付く底部である。147は内面が刷毛目仕上げの鉢で、口径26.6cm、底径10.6cm、器高10.1cmである。150は口径28.6cm、底径11.8cm、器高8cmで、口縁端部が肥厚し、内面は刷毛目調整の上に6本の櫛歯の工具で掘り目を防長系摺鉢に入れている防長系摺鉢である。146・148・149は底部で、148・149の底径は9cmである。

増埴 第3-43図151は外径9.3cmに径3cmの穴を開けた大型のフイゴの羽口口縁部の破片である。また、152は増埴のフイゴの羽口口縁部の破片である。

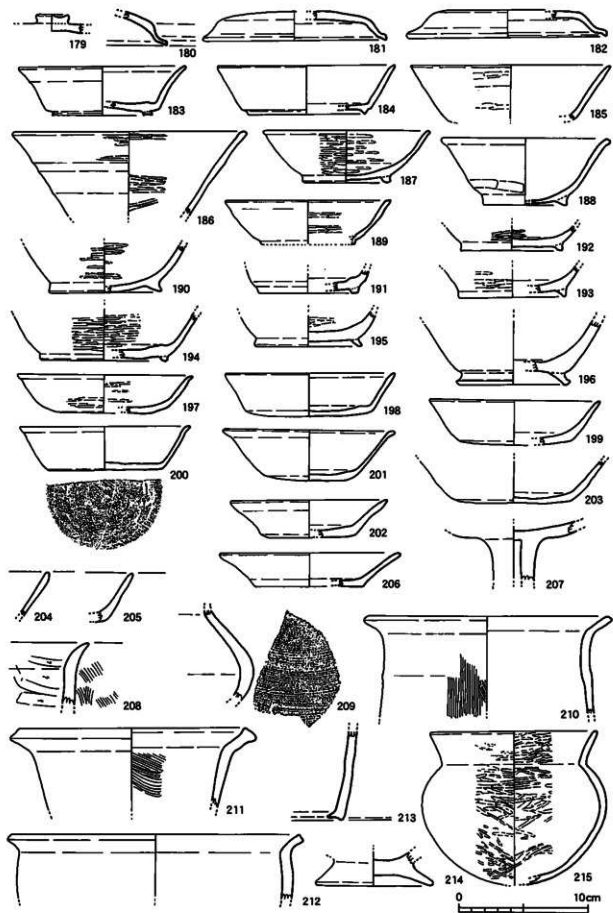
石鍋 152・154は滑石製の石鍋の破片である。154は跨が付く口縁部であるが、2点とも再加工されている。155・156は土器片を再加工し円盤状に仕上げている。155は径3.4m、12.6g、156は5.4×6.3cmで39.4gである。

土錘 158～172は紡錘形の土錘である。完形品の大きさから、159～162は長さ3cm前後で4g前後であるが、164・165・166・168～172は5cm前後で5g前後である。

ガラス玉 173・174は緑色をした直径約1cmのガラス玉で、半分に欠けている。



第3-45図 B-SD064出土遺物実測図(0)



第3-46图 B-SD064出土物実測図(1)

無縫塔

第3-44図と第3-45図178は阿蘇凝灰岩製の石造品である。175は口径26.4cmで、注口があり、器高は14.4cmである。176は厚さ約17cmの八角形の石塔の台座と考える。無縫塔の一部の可能性が高い。178は方形で少なくとも四隅に脚が付く台である。高さは11.5cmで上面には高さ2.8cmの縁が付く。

第3-46図は214・215を除くと、8世紀後葉から9世紀前葉の遺物である。179～182は土師器の坏蓋で、179はその宝珠形のみである。183～206は坏であるが、高台が付くタイプと回転ヘラ切りで仕上げる2種類がある。前者には183・180・191の須恵器や、190や195のような内黒土器が含まれる。また、196は高台付の壺の可能性が高い。器面は、須恵器を除き、全面ヘラ磨きで調整している。

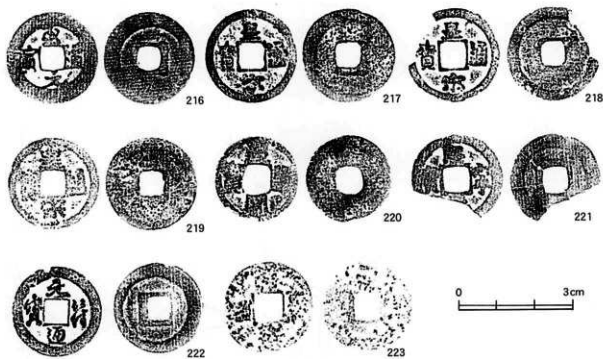
207は高坏で器面はヘラ磨きされている。208・210～212は甕である。胴部外面は刷毛目仕上げで、内面はヘラ削りである。209は須恵器で小型の壺と考える。213は甕と考える。

214は鉢形土器の脚であろう。215は古墳時代前期の小型丸底甕である。

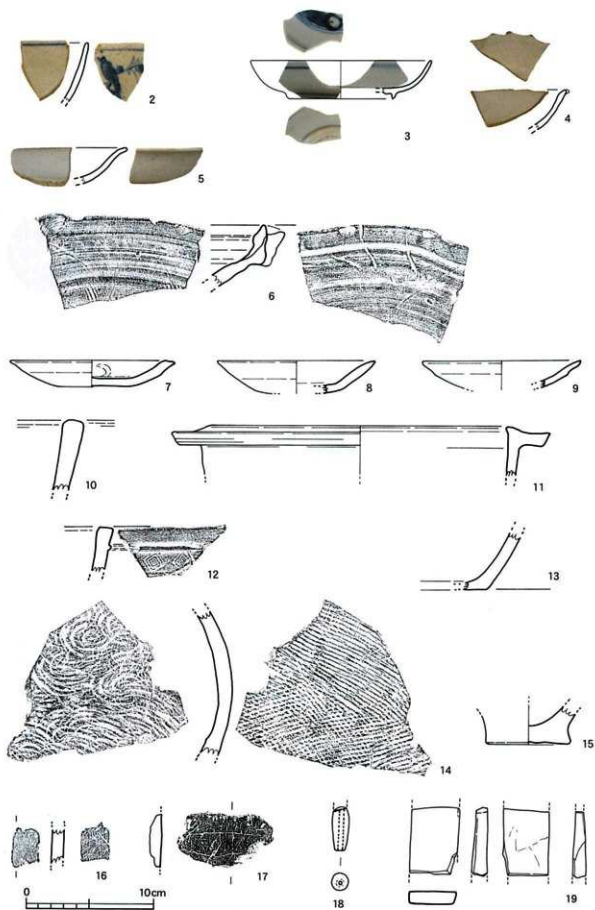
銅銭

第3-47図にB-SD064から出土した銅銭8点を図示した。216は草書体で書かれた「至道元寶」で初鑄年は995年（北宋）である。217は真書体で書かれた「皇宋通寶」で初鑄年は1038年（北宋）である。217～219は真書体で書かれた「皇宋通寶」で220は篆書体である。初鑄年は1038年（北宋）である。221は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年（北宋）である。222は行書体で書かれた「元符通寶」で初鑄年は1098年（北宋）である。227は判読不能である。

B-SD064からは古代に始まり、14世紀代の遺物が多量に出土した。しかし、京都系土師器や景德鎮窯や漳州窯系の中国産陶磁器、内面に斜め揺り目を持つ備前系陶器の揺鉢が一定量あり、しかも遺構の底面近くからも出土している。このことから、B-SD064を16世紀後葉から末葉と考える。



第3-47図 064出土銅銭実測図



第3-48図 B-SK015出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

2. 土坑

B-SK015 (第3-50図)

B-SK015は調査区の南西隅で検出された土坑で、西側は調査区の壁で、東側はB-SD064と切り合う。確認できる遺構の規模は南北3.4m、東西2.5m以上で、中央部が最深で30cmを測り、皿状をしている。土坑の北側には、凝灰岩製の五輪塔の地輪や八角形の台座で、石列が東西方向に約1.5m構築されている。その方位は、W-7°-Nである。

五輪塔

銅銭

景徳鎮窯系

白磁

備前系

土鍾

砥石

遺物は第3-48図と第3-49図の1~19に図示した。1は判読不明の銅銭である。2~5は貿易陶磁器である。2は碗、3は皿の景徳鎮窯系青花で、小野瀬年の皿E群の2は口径13.8cm、底径8cm、器高2.9cmである。4・5は中国産白磁である。6は備前系陶器の罐鉢で、斜め播目が入る。7~9は京都系土師器で、口径は12.3~13cmである。10~13は瓦質土器で、11は罎付の土鍋で、12は外面に菱形のスタンプ文が連続して施文される。14は内面に同心円文、外面に平行線の叩き目のある須恵質土器である。15は弥生土器の底部である。16・17は滑石製品で、18は一部を欠く土鍾である。19は砥石である。



第3-49図 B-SK015実測図

B-SK015の時期は出土遺物から16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK016 (第3-51図)

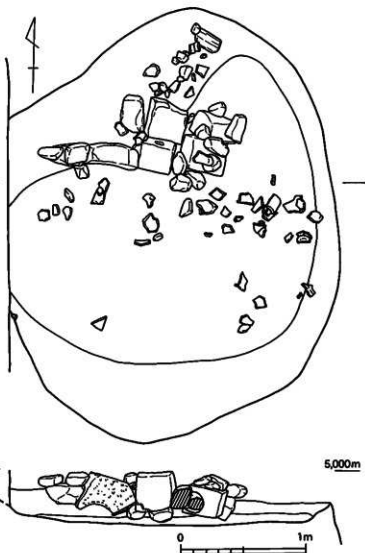
B-SK016は調査区の北寄り、西側をB-SD003、北西部をB-SK018と重複する。土坑の規模は南北約2m、東西4.2m以上で、東西に長い。深さは中央部が最新で約30cmである。

遺物は第3-52図に図示した。1は中国産白磁である。2は口縁部が屈曲し、端部が肥厚する瀬戸美濃系陶器の折縁ソギ皿である。3は口径12.3cm、底径7.6cm、器高2.1cmのロクロ成形による在地系土師質土器である。4は非ロクロ系の京都系土師器で、口径9.1cm、器高1.7cmである。5は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。

白磁

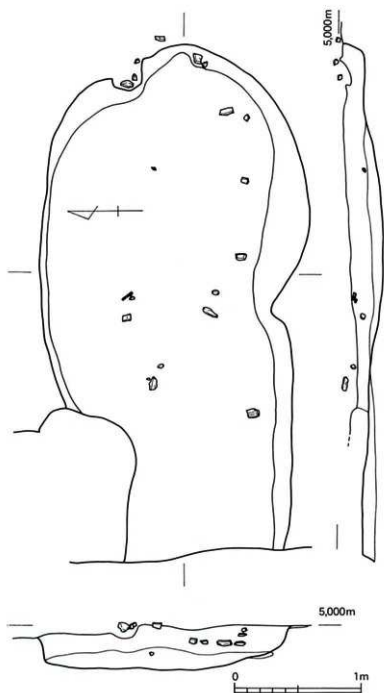
瀬戸美濃系

東播系

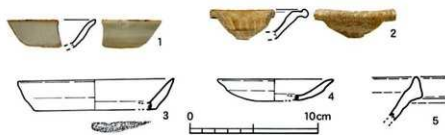


第3-50図 B-SK015実測図

B-SK016の時期は、
B-SD003・B-SK018と
の切り合い関係や、2の折
縁ソギ皿が出土しているこ
とから、16世紀末葉と考え
る。



第3-51図 B-SK016実測図



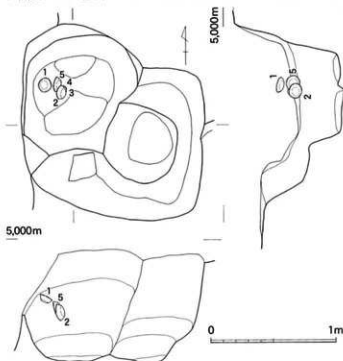
第3-52図 B-SK016実測図

B-SK018 (第3-53図)

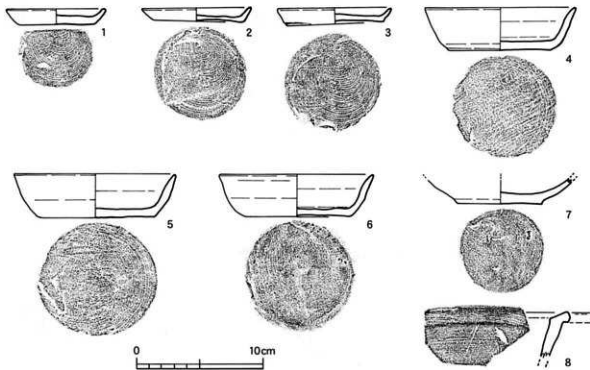
B-SK018はB-SD003と重複し、南半分の上面をB-SK016が切る。遺構の規模は東西約1.5m、南北1.5m、深さ約90cmで、ほぼ同規模の二つの土坑から構成される。

遺構内から第3-54図に図示したロク口成形による在地系土師質土器がまとまって出土した。このうち、1~5は第3-53図に図示したように遺構の中位から完形品で、6も近接して一括して出土した。1~3は皿で1は口径7.8cm、底径5.9cm、器高1.3cmで、2は口径8.7cm、底径7.3cm、器高1.1cmで、3は口径9.1cm、底径7.5cm、器高1.4cmである。4~6は坏で、4は口径12cm、底径8.2cm、器高3.4cmで、5は口径12.7cm、底径9.3cm、器高3.4cmで、6は口径12.2cm、底径8.3cm、器高3.3cmでほぼ同規格である。口縁部も端部が外反する。7は底部が6.7cmで小さく、内湾気味に口縁部が立ち上がる塊状の器形になる。8は口縁部が屈曲する土鍋の口縁部の資料である。

B-SK018の時期は土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。



第3-53図 B-SK018実測図



第3-54図 B-SK018出土遺物実測図

B-SK020 (第3-55図)

B-SK020はB-SD003の上部に構築された大型の土坑である。規模は東西4m、南北5.2mで、深さは約50cmで、底面は大部分が平坦であるが、北壁沿いにB-SDK031、東壁部沿いにB-SDK057などが囲り込まれている。遺構の内部には埋め立ての際に、礫を集中的に廃棄したためか3ヶ所で集石状能が検出された。

焼締陶器
黒軸陶器
瀬戸美濃系
備前系

出土遺物は第3-56～3-60図に図示した。第3-56図の1は底径3cmで、中国産焼締陶器の甕である。2は外反する口縁端部が玉縁になる中国産青磁の甕である。3は底径10cmの、黒軸陶器の底部である。4は瀬戸美濃系陶器の梅瓶の底部で、径7.8cmである。

第3-56図5～12と第3-57図13・14は備前系陶器である。5は口径25.4cm、底径16.2cm、器高3.8cmの皿である。6～14は楕円鉢である。6～8・10・12は、口縁部である。口径は10が28.4cm、12が33.8cmであるが、口縁部の形態は口唇部内面に凹線状の窪みが一列廻る。また、楕目も口縁部に直口するものと斜めになるものが交差する。8は注口部である。9・11・13の底部も同様な斜目楕目である。14は斜楕目が無い。底径は9が13.4cm、11は12.1cm、13は13.9cm、14は13.8cmである。

常滑系

第3-57図15・16は常滑系陶器で、15は底径14.4cm、16は胴部最大径部の資料で、肩部には菊花文状の円形のスタンプが押印されている。

17～19は瓦質土器であるが、17は鉢で外面に菊花文のスタンプが連続して2回押捺されている。18は胴部が張り、口縁部が外反する甕である。19は口径27.2cmで、口縁部が大きく外反し、端部が立ち上がる。器面はヘラ磨きされている。

東播系

20は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。21外面に突帯が廻る鈎付の土鍋である。22は須恵質土器で甕の肩部の破片で、内面に円形、外面には平行線の叩きによる調整痕が残る。

23は土師質土器の片口の付く鉢である。口径は19.5cm、器高11cmで、底部は丸底である。器面は横方向の撫でで仕上げられている。

石鍋

24・25は滑石製の石鍋の破片である。

吉備系土師器

第3-58図の26～31は吉備系土師器で、口径は28が11.2cm、29は10.4cm、30は12cmである。31の底径は5.1cmであるが、高台は退化縮小した断面三角形をしている。

第3-58図32～49はロクロ成形による在地系土師質土器である。32～35は皿で、32は口径7cm、底径は5.7cm、器高1.3cmである。33は口径8cm、底径は6.7cm、器高1.2cmで、34は口径8.3cm、底径は7.3cm、器高1.4cmである。35は口径8.4cm、底径は6.5cm、器高1cmである。

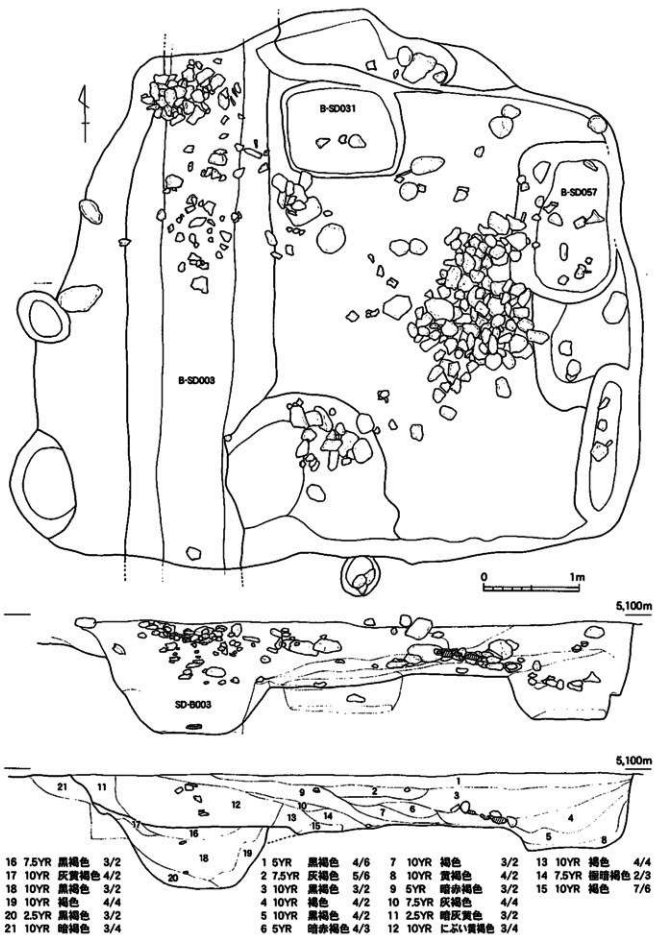
36～46は坏である。法量の平均は口径12.3cm、底径9.2cm、器高2.7cmである。口縁部の器壁の厚さは38～43・46のように中位から上位にかけて厚いものが目立つ。また底部には、42のような板状圧痕や39・43・46のようなスダレ状の痕跡が残る。

47～49は以上の皿や坏と同じロクロ成形の在地系土師質土器であるが、口径に比較すると底径が小さい15世紀末から16世紀前半に編年される皿である。47は口径8.2cm、底径4.8cm、器高1.8cmで、48は口径7.8cm、底径4.3cm、器高1.7cm、49は口径7.5cm、底径4.8cm、器高2.4cmである。口縁部は逆ハの字状に開き、48の内面にはラセン状のロクロ目が残り、口唇部にススが附着する。

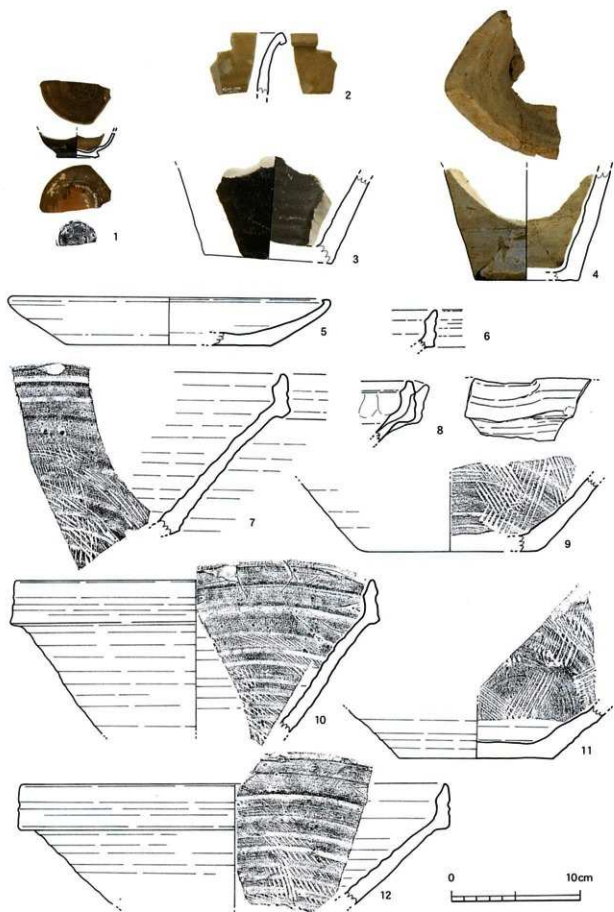
50～66は京都系土師器であるが、規格や器形で幾つかに分類できる。50は口縁部にススが附着し、口径8.8cm、器高2.2cmで最小である。次に大きいのが51・52で、口径11cm前後である。そして、53～59は口径12.5cm前後で、器高は平均2.6cmである。これに対し、60～65は口径に対し器高が高く、61・62は口径10.2cm、10.8cmと小さいが、器高は3.3cm、3cmと高く坏形をする。他の口径も63が12.3cm、64は11.8cm、65は12cmであるが、器高はいずれも3cm以上あり、坏形を呈している。

焼塩壺

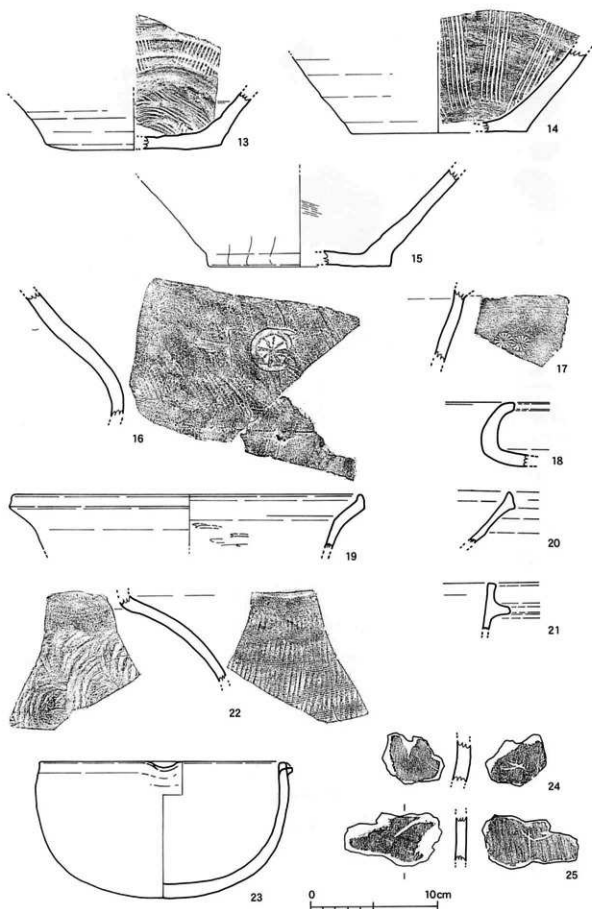
66は口径6.3cm、器高1.9cm、底径4.9cmの小型のロクロ系土師器である。焼塩壺の蓋の可能性もある。



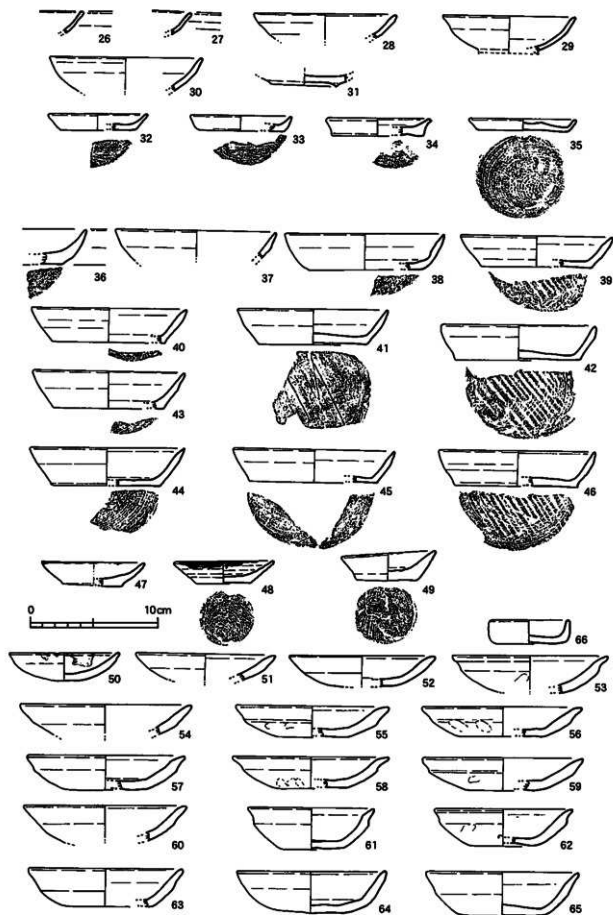
第3-55図 B-SK020実測図



第3-56图 B-SK020出土遺物実測図(1)



第3-57図 B-SK020出土遺物実測図(2)



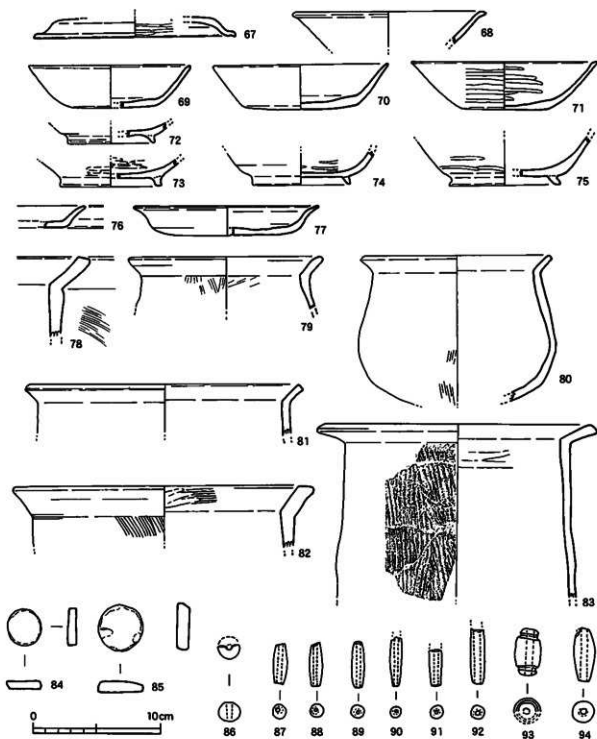
第3-58圖 B-SK020出土遺物実測圖(3)

第2節 遺構と遺物

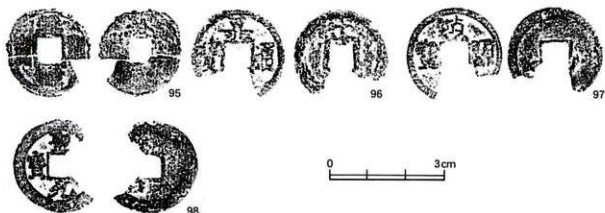
第3-59図67~83は8世紀後半から9世紀前半の遺物で、67は土師器の坏蓋である。69~71は回転ヘラ切りの底部をもつ坏である。72~75は高台が付く土師器碗である。76・77は土師器皿である。これらの器面は横方向のヘラ磨きで調整されている。78~83は口径15cm前後と22cm前後の甕である。口縁部周辺は横方向の撫で、胴部外面は縦方向の刷毛目である。83は口径に対し、長胴である。

84・85は土器片加工品で土器片を研磨し円形に仕上げている。84は2.7cm×3cm、85は3.5cm×4.8cmである。

ガラス製品 86は緑色をしたガラス製品である。半分欠けるが径は0.8cmである。



第3-59図 B-SK020出土遺物実測図(4)



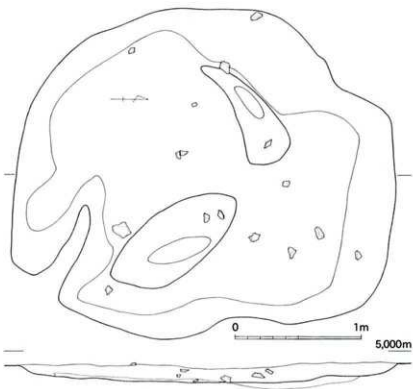
第3-60図 B-SK020出土銅銭実測図

土鍾

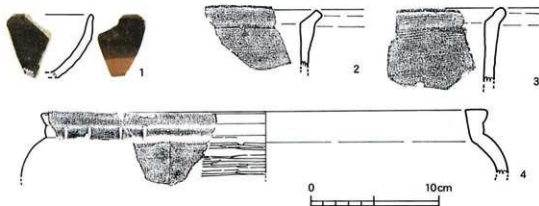
87～94の土鍾は93以外紡錘形をしている。規格は87～89は長さ3cm台、重さ4g程度であるが、90～92は長さ4cm以上ある。94は他に比較すると太く、重さも11.5gある。93は両端部に紐を巡らすくびれを持つ土鍾である。長さは3.8cmであるが、重さは12.9gを測る。

銅銭

第3-60図95～98は銅銭である。95は篆書体で書かれた「天聖元寶」で初鑄年は1023年(北宋)である。96は「嘉定通寶」で初鑄年は1208年(南宋)である。



第3-61図 B-SK022実測図



第3-62図 B-SK022実測図

第2節 遺構と遺物

97は篆書体で書かれた「政」・「通」・「寶」は判読できるものの、銭銘は特定できない。98も行書体で書かれた「聖」・「元」・「寶」は判読でき「天聖元寶」の可能性がある。

B-SK020の時期は、京都系土師器や斜め掘り目の備前系陶器の播鉢が床面などから一定量出土することから16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK022 (第3-61図)

B-SK022は調査区中程のL-44区で、B-SD003と西側を接し検出された不定形な浅い土坑である。遺構の規模は南北約3m、東西約2.4mで深さは10数cmである。床面にはさらに2ヶ所細長い10数cmの掘り込みが検出された。

瀬戸美濃系

遺物は第3-62図に図示した。1は器高4.9cmの瀬戸美濃系陶器の天目茶碗である。2・3は口縁部が屈曲するタイプの土鍋である。内面は横方向の刷毛目で器面調整されており、外面は横撫である。4は口径35.2cmの瓦質土器である。内外面横方向に丁寧にヘラ磨きされて、頸部にはヘラで連続的な刻み目が付く。黒色に焼成されている。

瓦質土器

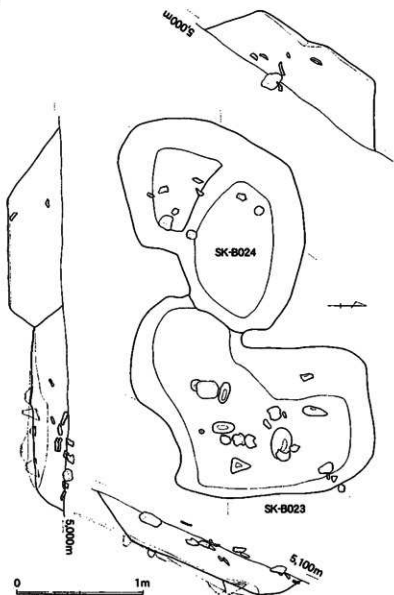
時期は14世紀代の可能性が強いが、決定できる良好な資料はない。

B-SK023 (第3-63図)

B-SK023とB-SK024は調査区東南部のL-46で検出された連続する2つの土坑である。B-SK023は南北約1.8m、東西約1.5mで、深さは約25cmの不定形土坑である。

遺構内から出土した第3-64図の銅銭は、篆書体で書かれた「天聖元寶」で初鋳年は1023年(北宋)である。銭銘間には4ヶ所穿孔されている。また、第3-65図2～7に図示したロクロ成形による在り土系土師質土器は、7の坏以外は皿で、法量は、2が口径8cm、底径7.2cm、器高1.4cmで、3は口径7.8cm、底径6.5cm、器高1.2cmである。4は口径8.0cm、底径7cm、器高1.3cmで、5は口径8.8cm、底径7.7cm、器高1.2cmである。6は口径8.8cm、底径6.8cm、器高1.2cmである。7は坏で口径12.8cm、底径はいびつで

銅銭



第3-63図 B-SK023・SK024実測図

あるが8.7cm、器高は3.1cmである。

B-SK023の時期は、在地系土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。

B-SK024 (第3-63図)

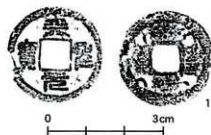
B-SK024は、B-SK023の南西部に接続するような位置で検出された土坑である。規模は、南北1.4m、東西1.5mで、深さは約45cmあり、二段掘りになっている。

龍泉窯系

遺構内からは第3-65図8～12に図示した遺物が出土している。8は底径8cmの龍泉窯系青磁碗である。見込み部にはヘラ描きの花文がある。9～11はロクロ成形による在地系土師質土器である。9は口径8.2cm、底径約7cm、器高約1cmの皿である。10は口径約8.8cm、底径約7.6cm、器高1.7cmの小型の坏である。11は口縁端部を欠くが、底径9.5cmの坏で、口縁部の器壁は中位から上位が厚くなる。12は断面三角形で径4.6cmの小さな高台が廻る吉備系土師器である。

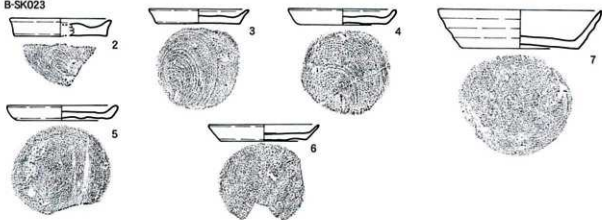
吉備系土師器

以上の出土遺物から、B-SK024の時期は、14世紀前葉の可能性があり、B-SK023と共に、この周辺で多数検出された、後述する礎盤建物群と係わると考える。

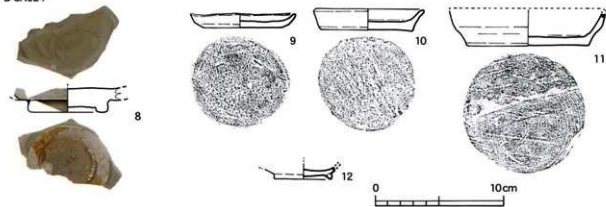


第3-64図 B-SK023出土銅銭実測図

B-SK023



B-SK024



第3-65図 B-SK023・SK024出土遺物実測図

B-SK031 (第3-66図)

B-SK031はB-SK020の底面を精査中に検出された土坑である。検出面での規模は、東西1.26m、南北0.98mの隅丸長方形をしていた。底面は中央部が最深となる緩い船底状になり、検出面からの深さは30cmである。底面の規模も、東西1.1m、南北0.87mで、隅丸長方形をしている。

土坑内からの出土遺物は、図示出来るような良好な資料が出土しなかったが、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏の破片14点が礫と共に出土し、京都系土師器などは見られない。このため、時期は14世紀から15世紀前半の可能性が強い。この隅丸長方形の堅穴があった場所に18世紀後葉から末葉にB-SK020を掘り込んだものと思われる。

B-SK047 (第3-67図)

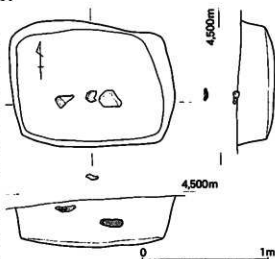
埋納土坑

B-SK047は調査区の東南部シ-47区で検出された埋納土坑である。検出面での土坑の規模は、東西65cm、南北30cmの楕円形をしている。底面は東西45cm、南北50cmであり、深さは南西部が最深で約20cmを測る。土坑内からは、第3-68図2に図示した土師器の甕が出土した。その状況は、土坑中央部に底部を下、口縁部を上にした正位置で、埋納された状態であった。

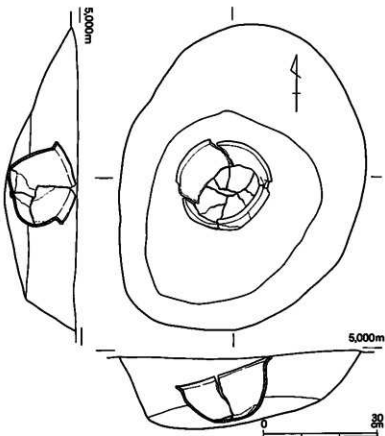
甕は底部を欠くが、ほぼ完形品で、穿孔などは確認できなかった。器形は胴部が寸胴で、ほぼ直立し、口縁部は外反し、口縁端部はやや肥厚する。底部は丸底で、一部にスガが付着する。器面調整は、粘土植みの痕跡が残るが、全面横方向の撫でで仕上げられている。

1は土坑内から出土した土師器の坏である。法量は口径は13.8cm、底径7.9cm、器高3.4cmである。器面調整は、底部以外内外面とも撫でで成形しているが、その後へら磨きされている。底部は回転へら切りで、粘土塊から切り離されている。口縁部の器壁はほぼ一定で、口縁端部が緩く外反する。

B-SK047の出土遺物の時期は、8世紀後半から9世紀前半で、府内町跡20次調査で出土する古代の遺物とほぼ同時期であるが、遺構として確実に認識できるのは、このB-SK047のみである。



第3-66図 B-SK031実測図

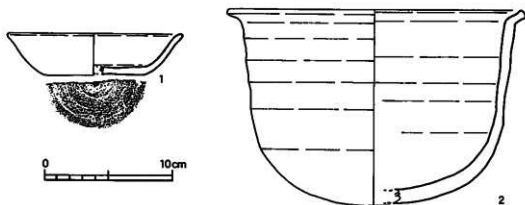


第3-67図 B-SK047実測図

B-SK048 (第3-69図)

B-SK048は調査区の南側1-48区で、B-SD003の東壁を精査中に検出した土坑である。B-SD003を調査中は、この遺構の上面の輪郭を確認することは出来なかったため、B-SD003より古い可能性が高い。検出された遺構の規模は、上面が南北約1m、東西約1mの円形であるが、底面は東側隅が最深部となり、東側の壁はオーバーハングするが、西側の壁はそれに比較すると緩やかである。深さは、検出面から約1.2mあり、底面は約南北70cm、東西約50cmで比較的平坦である。

遺物の出土状況は図示しているように、深さ約1.2mの遺構内で、検出面から約50cm前後の位置から出土するグループ10数点と、底面近くで出土する5点のグループに明瞭に分かれる。前者を上層出土遺物、後者を下層出土遺物として報告する。



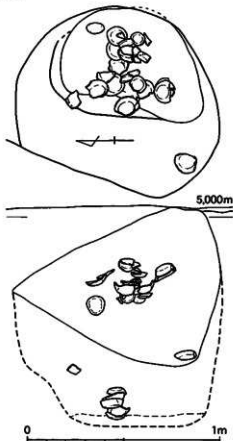
第3-68図 B-SK047出土遺物実測図

まず、上層出土遺物は第3-70図に図示した。これには、下層との間で検出された16もこれに含める。

集中して出土した遺物は、全てロクロ成形による在地系土質質土器である。このうち、1～8は皿である。

1は口径7.5cm、底径6.7cm、器高1.3cmで、2は口径9.1cm、底径7.2cm、器高1.2cmである。3はいびつであるが、口径約8.5cm、底径約7.1cm、器高1.1cmで、4は口径9cm、底径7.2cm、器高1.1cmである。5は口径8.3cm、底径6.3cm、器高1.3cmで、6は口径8.4cm、底径7.3cm、器高1.2cmである。7は口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.3cmである。7は口径8.8cm、底径6.1cmであるが、器高が約1.7cmと他の皿に比較すると高い。これらの皿は5の底部が厚いものの、他は口縁部との差は少ない。4・5・8の底部には板状やスタレ圧痕が付く。

9～17は坏である。9は口径12.4cm、底径9.5cm、器高2.6cmで、口縁部中位の器壁が厚い。10は、口径12.2cm、底径8.1cm、器高2.9cmで、口縁部の器壁は一定で端部が尖る。11は口径13cm、底径9.8cm、器高3cmで、12は口径13.2cm、底径10.2cm、器高2.9cmで、2点とも口縁部中位の器壁が厚い。13～15は口縁部の器壁はほ



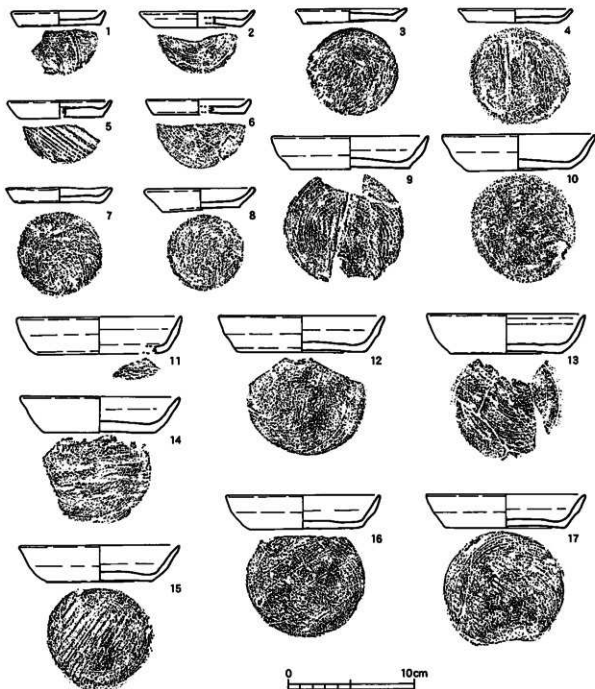
第3-69図 B-SK048実測図

第2節 遺構と遺物

ほぼ均一である。13は口径12.4cm、底径9.1cm、器高3.2cmで、14は口径12.7cm、底径9.1cm、器高2.8cm、15は口径12.6cm、底径8.3cm、器高3cmである。16は口径12.3cm、底径9cm、器高2.2cmで、17は口径12.6cm、底径9.6cm、器高2.7cmである。15・17の底部にはスグレ状圧痕が付く。

銅銭 第3-71図は銅銭の破片である。新書体の「宋」・「通」の文字が判読でき、1038年（北宋）が初鋳年の「皇宋通寶」の可能性はある。

第3-72図は下層出土の資料を図示した。19-23はロクロ成形による在地系土師質土器の坏であるが、19と20は他の坏に比較すると、口径に対し底径が小さく、器高が高い傾向を示す。19は口径12.9cm、底径7.3cm、器高3.1cmで、20は口径12.1cm、底径7.4cm、器高3.3cmである。20の底部には



第3-70図 B-SK048出土遺物実測図（上層）

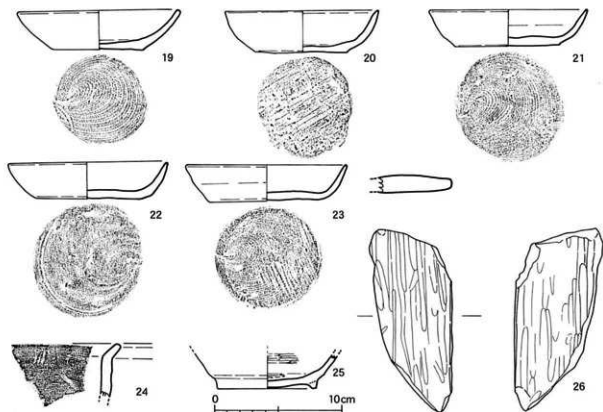
スタレ状の圧痕が付く。21は口径12.4cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、22は口径12.6cm、底径8.8cm、器高3cmである。23は口径12.7cm、底径9cm、器高2.9cmで、18・19に比較すると口径はほぼ同じであるが、底径は1cm以上小さい。20・23の底部にはスタレ状圧痕が付く。

24は口縁部が外反する土鍋と考える。25は高台が廻る古代の碗で、器面は横方向にヘラ磨きされている。26は全面ヘラ磨きされた瓦質土器で、竈などの一部であろうか。これら3点は流入遺物である。

B-SK048から出土したロクロ成形による土師質土器は、切り合い関係にあるB-SD003と一緒に考えると、古い順に下層出土→上層出土→B-SD003出土となる。下層には口径に比較すると底径の小さい19・20があるが、上層には見られないなど、遺物相に若干の変化も見られるが、数量が少なく、遺構のも小さいため、埋没するのに長時間が考えられず、ここでは14世紀前葉から中葉と考える。



第3-71図 B-SK048出土銅銭実測図



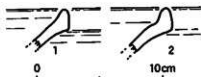
第3-72図 B-SK048出土遺物実測図（下層）

B-SK 057 (第3-74図)

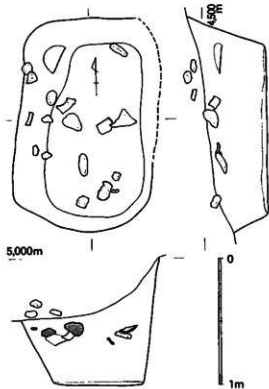
B-SK 057はB-SK 020の底面を精査中に東壁沿いで検出された土坑である。検出面での規模は、東西1.65m、南北1.1mの隅丸長方形をしている。底面ほぼ平坦で、検出面からの深さは約50cmであるが、B-SK 020の検出面からだと約1mに達する。底面の規模も、東西0.75m、南北1.4mで、隅丸長方形をしている。

東播系

土坑内からの出土遺物は、第3-73図に東播系須恵質土器の鉢の口縁部を2点図示したが、この他、龍泉窯系青磁の小片や、ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土している。こうした傾向は、同じ状況で調査されたB-SK 031と同様で、遺構内からは京都系土師器など16世紀代の遺物を出土しない。このため、B-SK 057はB-SK 020が掘削される以前の14世紀から15世紀前半代の遺構と考える。



第3-73図 B-SK057出土遺物実測図



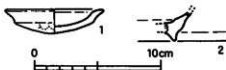
第3-74図 B-SK057物実測図

B-SK 060 (第3-76図)

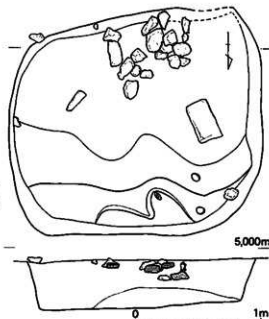
B-SK 060は調査区の南、L-46区で検出された土坑である。遺構の規模は東西約2m、南北約1.8mの隅丸長方形をしている。底面は明確ではなく、北側は浅く段廻りになっているが、南側は深く、約40cmで、底面は平坦である。

遺構内からは、図示している礎の他、龍泉窯産青磁や備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器のなどが出土している。第3-75図に図示した1は京都系土師器で、法量は口径7.6cm、器高2.3cmで口縁部外面を指で強く押さえて撫でている。2は高台の付いた碗の底部である。

B-SK 060からは14世紀代から16世紀代の遺物が出土しているが、京都系土師器が図以外に



第3-75図 B-SK060出土遺物実測図



第3-76図 B-SK060実測図

も4点出土しており、備前系陶器にも16世紀代と考えられる破片があり、16世紀後半から末葉と想定する。

B-SK063 (第3-77図)

B-SK063は調査区北寄りのL-12区で検出された小竪穴である。検出面での規模は南北90cm、東西60cmで、底面は南北60cm、東西36cmで、深さは32cmである。遺構内からは、ロクロ成形による在地系土師質土器の坏が3点、遺構が埋没する段階で流れ込んだ状態で出土している。

出土した在地系土師質土器の坏は第3-78図に図示したが、1は半分を欠くが、口径12.8cm、底径9.2cm、器高2.6cmで口縁端部が尖る。2は歪であり、口径は12.3~12.5cmで、底径は8.2~8.9cm、器高は2.8cm前後である。口縁部の器壁は、上位で肥厚する。3も歪であり、口径は12.8~13.2cmで、底径は9.4~9.6cm、器高は2.8~3.1cmである。口縁部の器壁は、底部近くが薄く、口縁端部にかけて、断面が紡錘形状に肥厚する。

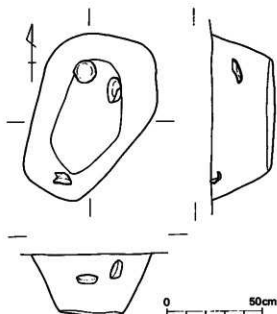
B-SK063の時期は、在地系土師質土器の形態から、14世紀代と考える。

B-SK066 (第3-79図)

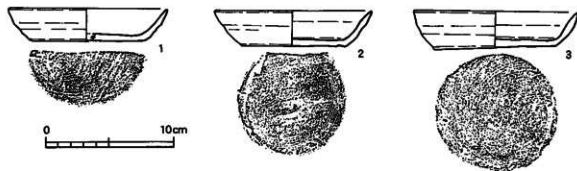
B-SK066は調査区の南寄り、L-16区の東北隅で検出された遺構である。幾つかの土坑が切り合っていた可能性もあり、不定形で、複雑な形状を呈する。全体の規模は、南北約1.1m、東西も約1.1mであるが、南側が複雑に入り組む。また深さは、南西隅に少なくとも3つの小土坑や柱穴状土坑が囲り込まれており、最深部は西壁沿いの柱穴で、約30cmである。

出土した遺物は第3-80図に図示したが、1・2はロクロ成形による在地系土師質土器の皿で、1は口径7.6cm、底径6.8cm、器高1.2cm、2は口径7.8cm、底径6.8cm、器高1.4cmで底部から口縁部をつまみ出している。3・4は坏蓋である。口径は3が口径14.6cm、4が17.8cmで、2点とも器面は横方向のヘラ研磨で調整されている。5は口径24.8cmの甕で、口縁部は内側に稜を生じて屈曲する。

このB-SK066から出土した遺物は、1・2が14世紀代と想定されるが、3~5は8世紀後半から9世紀前半である。遺構自体も幾つかの土坑が切り合った状況であり、判別はできないが、二時期の遺構で構成されている可能性が高い。



第3-77図 B-SK063実測図



第3-78図 B-SK063出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

B-SK096

B-SK096は調査区のK-43区で検出された方形の土坑で、規模は南北3.3m、東西は西側をB-S D064と切り合い関係にあるが、2.8m以上はある。形態はほぼ方形で、深さは約20cmである。

白磁

瀬戸美濃系

第3-81図に図示したものは、遺構内から出土した主要遺物である。1は底径5.8mの中国産白磁で、底部を含め、全面に施釉である。2・5・7は瀬戸美濃系陶器で、2は口径10cmの折縁ソギ皿である。3は口径10.6cm、底径6cm、器高2.3cmの折縁皿である。4は口径8cm、底径4cm、器高2cmの高台の付く皿で、薄く施釉されており、胎土から判断した。5は天目茶碗の破片で、3.2cm×3.6cmの円盤状に加工している。7も天目茶碗の底部で、部位を利用し、径4.4cmの円盤状に仕上げている。6は底径5cmの緑色の釉がかかった碗で、底部は露胎である。龍泉窯系青磁碗の粗悪品の可能性もあるが、雰囲気異なる。

備前系

8~11は備前系陶器である。8は口径2.8cm、器高3.8cm、器高2.4cmの小型の製品である。口縁部は内湾し、端部は内側に連続して指押さえて曲げられている。9~11の擂鉢の口縁部の形態は、端部内側が、凹線状に窪み、口唇部が尖る。内面の撚り目は、口縁部と直角になるものと斜めになるものが交差する。

瓦質土器

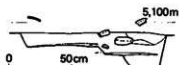
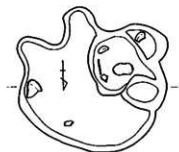
12・13はロクロ成形による在地系土師質土器である。12の皿は口径8cm、底径7cmで、器高は1.2cmである。13の坏は口径12cm、底径7.8cm、器高3.3cmで、口縁部の器壁は中位が厚い。

14・15・17は瓦質土器で、14はB-SK022の4と同一個体と思われる。内湾する胴部に直立する口縁部が付き、端部は肥厚する。頂部にはヘラによる縦方向の短沈線が連続して入れられている。15は口径31.8cmで、鉢状の器形をしている。17は底部に円形の穴が開く容器である。

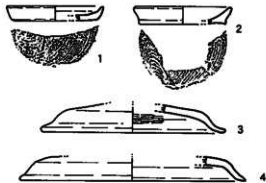
16は京都系土師器で、口径は12cm、器高は2.5cmで、器壁が厚い。

18は口径18.4cmの甕で、口縁部は横撫で、胴部は縦方向の刷毛目調整である。

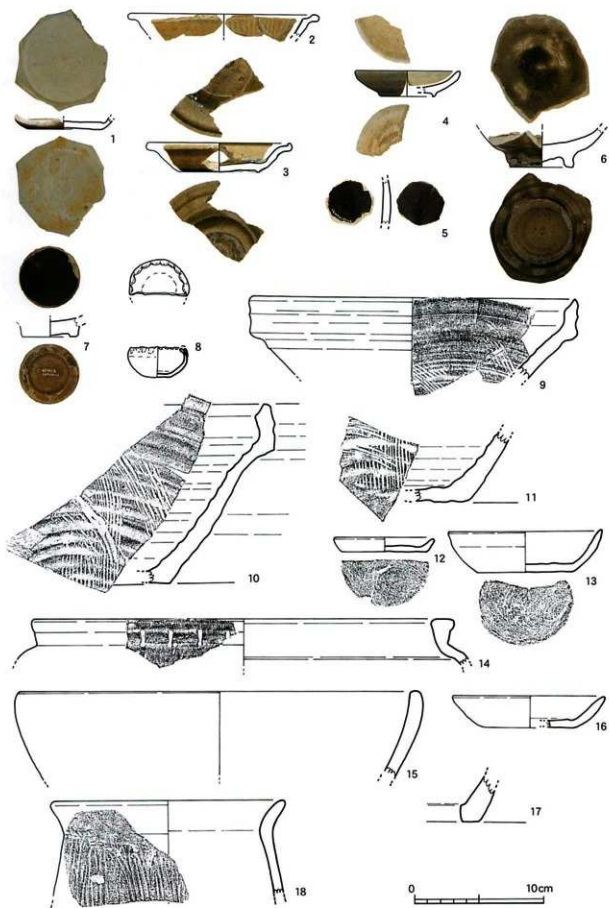
B-SK096の時期は、2の折縁ソギ皿、9~11の斜め撚り目に入る備前系陶器の擂鉢、16の京都系土師器などが出土していることから、16世紀末葉と考える。



第3-79図 B-SK066実測図



第3-80図 B-SK066出土遺物実測図



第3-81图 B-SK096出土遺物実測図

B-SK097 (第3-82図)

B-SK097はK-44区でB-SD064を切った状態で検出された土坑である。遺構の規模は、南北約2.3m、東西1.8mの南北に長い楕円形をしており、底面は検出面から約75cmで達し、南北1.5m、東西1.2m以上ある。底面はさらに中央部が径50cmの範囲で、約30cm掘り窪められ、径20cm程度の底面を形成する。遺構内からは、土坑を埋め立てる際に、半分埋まった時点で、川原石を多量に投棄していた。このため、遺構の中央部に厚さ約50cmの範囲で人頭大から拳大の川原石が集石状態で検出された。また、集石やその周辺から第3-83図に図示した遺物も出土している。

備前系

火埴

第3-83図1～4は備前系陶器である。1は底径6.4cmで、低い高台が廻る徳利形の器形が想定できる。高台の内側中央にへら書きによる「太」の文字が刻まれている。また、底部から胴部にかけて、備前系陶器独特の火埴が見られる。2は大甕であり、肩部にへら書きによる文字が見られる。「ひねり土」の「土」の字であろうか。3は口径4cmの小壺である。口縁部は一ヶ所片口になっており、液体容器であった可能性を強くする。胴部の最大径は約9cmで、その部分に「1大」とへら書きされている。4は口径31.2cm、底径16.2cm、器高12.1cmの榑鉢である。口縁部は注口部を一ヶ所に持ち、口唇部は斜めにカットされている。内面の罫目は、口縁部から底部にかけて直角に、6本の櫛歯状工具で入れられている。

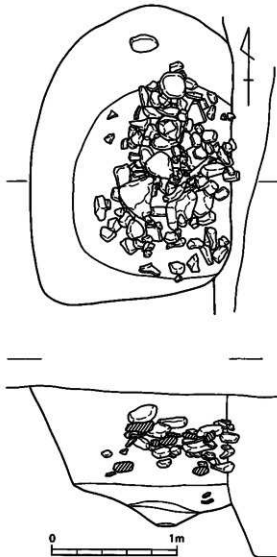
5はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。口唇部を欠くが、口径は約11.7cm、底径8.8cm、器高約2.6cmである。口縁部の器壁は、底部からほぼ均一である。

6・7は京都系土師器である。6は口縁部下に強い指押さえによる凹線状の窪みが廻る。7は口径8.8cm、器高2.2cmの小型品である。2点とも器壁が厚い。

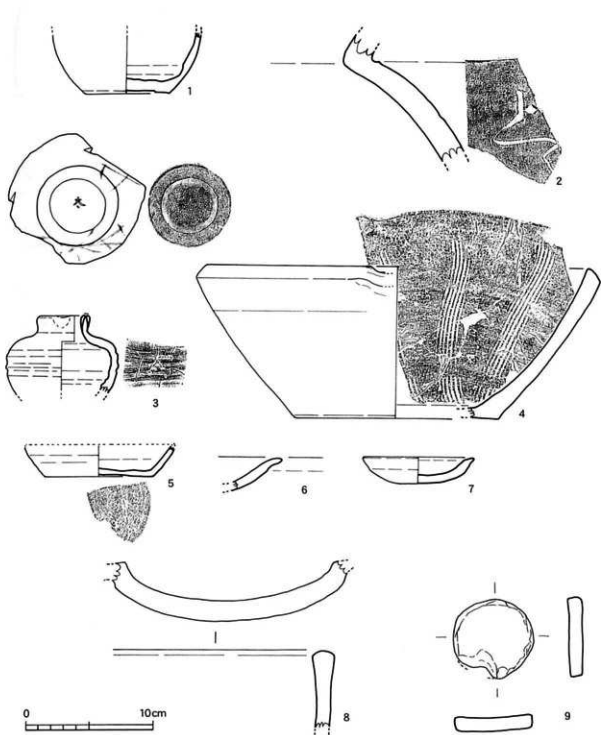
8は瓦質土器の口縁部の大きな破片である。口縁部は直立し、端部は肥厚する。器面は横方向のへら磨きされ、口唇部は丸く仕上げられている。口縁部の上面観は、花卉状、または方形の一部が丸く突出する形態と想定される。

9は瓦質土器の破片を敲打、研磨し、6cm×6.2cmの円盤状に仕上げた加工品で、46gある。

B-SK097の時期は、4の15世紀代に編年される備前系陶器の榑鉢の良好な資料が出土している。しかし、他の備前系陶器の1・3の小物は16世紀後半に量産されるものであり、2の大甕の破片も16世紀後半に属すると考える。さらに、6・7の京都系土師器も16世紀後葉から末葉に編年されるものである。こうしたことから、16世紀後葉から末葉の時期と考える。



第3-82図 B-SK097実測図



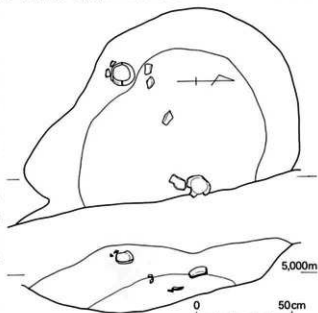
第3-83図 B-SK097出土遺物実測図

B-SK 098 (第3-84図)

B-SK 098はB-SE 009の上面で検出された土坑である。東側の一部はB-SE 009を半載して掘り下げた際に失われた。遺構上面の規模は、南北1.4m、東西1m以上で、皿状に窪み、南東部が最深であるが、検出面から約20cmである。遺構内からは第3-85図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器が、埋まっていく途中で廃棄された状態で検出された。

第3-85図1は口径12.6cm、底径8.4cm、器高3.3cmで、口縁部は底部近くの器壁が厚く、口縁端部にかけて尖るように立ち上がる。2は口径12.2cm、底径約8.8cm、器高2.7cmで、口縁部の器壁は、底部近くが薄く、上位が厚い。3は口径13.1cm、底径9.3cm、器高3.4cmで、口縁部の器壁は、ほぼ均一である。4は口径13cm、底径9.4cm、器高3.2cmで、口縁部の形態は、端部がやや外反する。底部にはスタレ状圧痕が付く。

B-SK 098の時期は14世紀中葉から後葉と考える。



第3-84図 B-SK098実測図



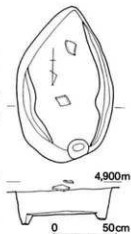
第3-85図 B-SK098出土遺物実測図

B-SK 100 (第3-86図)

B-SK 100は調査区の南、L-46区の南西隅で検出された土坑である。南北約1.2m、東西約0.8mの楕円形をしている。北端部には直径18cm深さ25cmの柱穴状の掘り込みと重複する。また、遺構の深さは、検出面から約20cmで、底面は平坦である。底面には、西側と東側に幅10cm、深さ10cm弱の側溝状の溝が付けられている。

遺構内から出土した遺物は、図示していないが、龍泉窯系青磁の小破片、京都系土師器、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器などがわずかに出土している。

以上の状況や出土遺物から、B-SK 100の時期は、14世紀代の遺物を含むものの、京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉と考える。



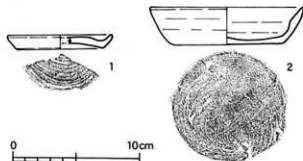
第3-86図 B-SK100実測図

B-SK107 (第3-87図)

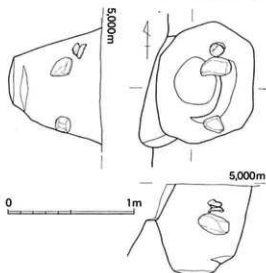
B-SK107はK-45で検出された土坑で、西側をB-SD064から切られる。確認できた規模は、東西約0.8m、南北約1mで、検出面からの深さは約70cmで、東側の壁に小さい段が付き、二段掘り状になる。遺構内からは、人頭大の川原石とともに第3-88図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器が出土した。

第3-88図1は口径8.2cm、底径7.2cm、器高1.2cmの皿である。2は坏で、口径12cm、底径8.9cm、器高2.9cmで、口縁部の断面は、底部付近が薄く、中位が厚くなる。

B-SK107の時期は、在地系土師質土器の形態から14世紀中葉から後葉と考える。



第3-88図 B-SK107出土遺物実測図



第3-87図 B-SK107実測図

B-SK113 (第3-89図)

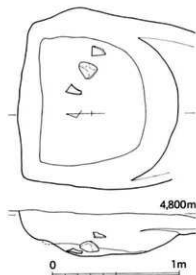
B-SK113はK-45で検出された土坑である。北を底辺にした二等辺三角形の浅い掘り込みの、北隅に掘り込まれた土坑である。規模は、東西1.2m、南北1.2mであるが、半円形となる。底面は中央部が深く約35cmである。

B-SK113から出土した遺物は第3-90図に1点のみ図化した。口径28.8cmで、口縁端部が内側に肥厚し、断面が三角形になる瓦質土器で、防長系播鉢である。この遺物以外にも、遺構内からは、景德鎮窯系青花の小破片、備前系陶器の破片、京都市土師器などが少量であるが出土している。

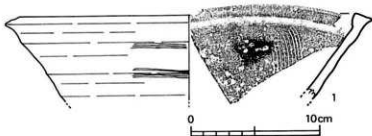
以上の出土遺物の状況から、B-SK113の時期は、16世紀後半と想定する。

B-SK122 (第3-92図)

B-SK122は調査区の西寄り、K-45で検出された土坑である。検出面での規模は東西約0.7m、南北1mの楕円形をしている。遺構内は検出面から30cmの南側で段が検出され、さらに北側を掘り下げると約25cmで底面が検出された。遺構内からは、第3-91図に図示したロク



第3-89図 B-SK113実測図

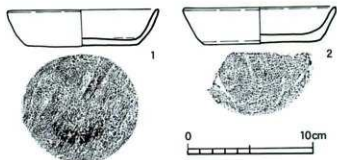


第3-90図 B-SK113出土遺物実測図

防長系播鉢

第2節 遺構と遺物

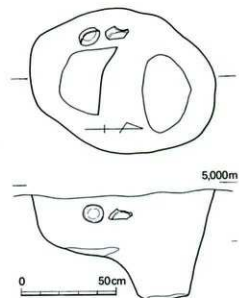
口成形による在地系土師質土器が2点、上部から出土した。この他、小破片であるが、同類の土師質土器や瓦質土器が、遺構の規模の割には多量に出土している。



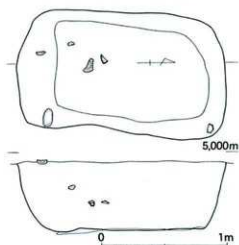
第3-91図 B-SK122出土遺物実測図

第3-91図1は口径11.9cm、底径8.7cm、器高3cmで、底面にスタレ状圧痕が付く。口縁部の形態は、底部近くが比較的薄く、中位が厚い。2は口径12.2cm、底径9.6cm、器高2.8cmである。口縁部は底部近くが厚い。

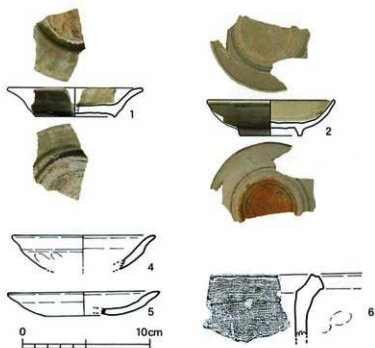
時期は14世紀中葉から後葉と考える。



第3-92図 B-SK122実測図



第3-93図 B-SK124物実測図



第3-94図 B-SK124出土遺物実測図

B-SK124 (第3-93図)

B-SK124はB-SK122の北側、K-44で検出された土坑である。規模は、上面が南北1.6m、東西0.93mの隅丸長方形をしている。深さは検出面から約53cmで、底面は概ね平坦で、南北1.2m、東西0.7mである。遺構の規模は小さいが、内部からは、第3-94図に図示した多様な遺物が出土した。

瀬戸美濃系
埴州窯系

第3-94図1は瀬戸美濃系陶器で、大きく外反する口縁部は、口径10cm、低い高台が付く底部の径は6cm、器高は2.3cmである。全体に軸がかかる。2は口径10cm、底径5cm、器高2.8cmの埴州窯系青花の皿である。文様は口縁部内外面、底部内外面に圈線のみが入れられている。底部の高台の内側は露胎である。この資料以外にも埴州窯系青花片が5点出土している。3は口径11.2cm、萐荷底状になる底径は8.4cm、器高は2.7cmの青磁の菊花皿で、底部外面は蛇の目軸刺ぎである。4は京都系土師器である。4の口径は11.4cmで、外面に手づくねの痕跡を残す。5は口径12cm、器高1.9cmである。6は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目で、外面は撫でて仕上げている。その他、小破片であるが、景徳鎮窯系青花、龍泉窯系青磁、備前系陶器、瓦質土器などが出土している。B-SK124の時期は、埴州窯系青花が一定量出土し、京都系土師器が伴うことから16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK126 (第3-95図)

B-SK126はK-45で検出された遺構で、B-SD064が西側を切る。遺構を検出した時点ではひととつと想定したが、発掘調査の結果、南北に連続した大・小の二つの土坑から構成されることが判明した。遺構の規模は、南側が大きく南北約1.3m、東西1.6mの方形をしている。壁はほぼ垂直に立ち、平坦な底面までの深さは、検出面から約70cmである。この遺構の北東部に接して、小さな土坑が検出された。その規模は、南北約60cm、東西70cmで、深さは検出面から約35cmである。

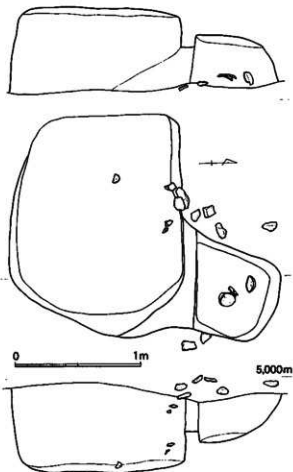
遺構内から出土した主要遺物は、第3-96図に10点を図示した。このうち、3～5は北側の小さい土坑の上面から上位で検出された遺物である。南側の大きな土坑から出土したのはそれ以外の遺物で、1は口径15.8cmの龍泉窯系青磁碗である。外面には鎮逆弁が施文されている。2は口径9.9cm、底径4.9cm、器高2.2cmの中国産白磁の坏である。口縁部は露胎で、いわゆる口禿となっているが、この部分以外は全面軸がかかっている。

龍泉窯系
白磁

6・7はいずれも在地系土師質土器に比較すると白色の色調をした、底径5cmの吉備系土師器である。底部には断面逆台形の高台が廻るが、6は高台より下に坏部の底部が突き出ており、器を安定させる役割を果たしていない。

吉備系土師器

8～10は瓦質土器である。8は底部の外



第3-95図 B-SK126実測図

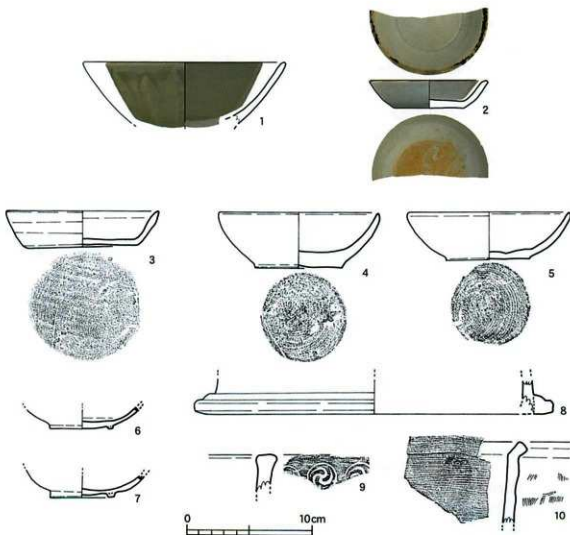
側に装飾的な段を持つ突帯が一条廻る。底部の形状は不明であるが、底径は28.4cmある。胴部はほぼ直立し、タライのような形態が想定される。9は口縁端部が肥厚し、口唇部を平坦に仕上げられ、器面調整は、横方向のヘラ磨きである。外面には直径2cmの三つ巴文のスタンプが連続的に押捺されている。10は口縁部が外反する土鍋である。器面調整は内面が横方向の刷毛目、外面は縦方向の刷毛目を付けた後、横方向の撫でや、指押さえて仕上げている。

北側の小さい土坑とかかわる3～5はロクロ成形による在地系土師質土器の坏である。3は口径12cm、底径9.3cm、器高2.9cmで、口縁部の形態は、底部近くの器壁が薄く、上位が厚くなり、口唇部が尖る。

4は口径12.9cm、底径7cm、器高4.1cmである。底部の器壁が厚く、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部が尖る。5も口径12.9cm、底径6.5cm、器高3.8cmで、口縁部は内湾気味に立ち上がる。3と比較すると、4・5は明らかに底径が小さく、器高が高く異なる器形を呈している。

二つの遺構の時期は、南側が、中国産白磁は白磁皿群で14世紀前半、吉備系土師器は14世紀初頭に編年されており、ほぼその時期が想定できる。

一方小さい北側の土坑は、上面や上位からの出土で、この土坑との関係は希薄な感もするが、土師質土器の器形と組成から14世紀前葉と考える。

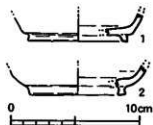


第3-96図 B-SK126出土遺物実測図

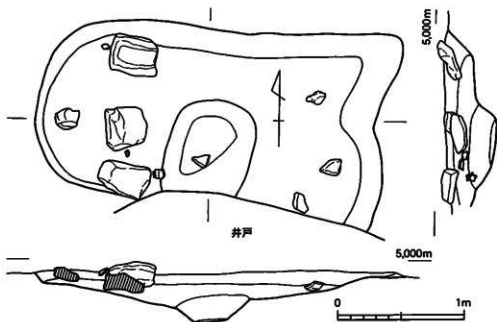
B-SK128 (第3-98図)

B-SK128はK・L-44で検出された土坑で、南側をB-SE010と重複する。遺構の規模は、東西2.7m、南北約1.5mで、検出面からの底面までの深さは約20cmで、中央部にさらに東西60cm、南北90cmで、深さ10数cmの小土坑が掘りこまれている。遺構内の西側には、人頭大の凝灰岩の角礫を3個並べた状態で検出した。

遺構内出土の遺物として第3-97図に2点の8世紀代の高台付きの須恵器碗を图示しているが、龍泉窯系青磁・中国産白磁・京都系土師器・ロクロ成形による在地系土師質土器・東播系須恵質土器など、多時期にわたる遺物が出土している。このため、遺構の時期は、最新の京都系土師器の16世紀後葉とする。



第3-97図 B-SK128出土遺物実測図



第3-98図 B-SK128出土遺物実測図

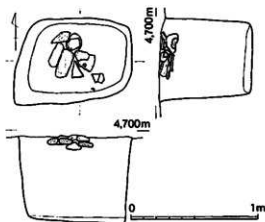
B-SK131 (第3-99図)

B-SK131はK-45区で検出された土坑である。検出面での遺構の規模は東西約1m、南北約0.7mで、隅丸方形をしている。深さは検出面から約70cmで、底面はほぼ平坦で方形である。底面から立ち上がる壁は垂直に近い。遺構内からは、上面中央で扁平な礫を敷き詰めるように配した集石が検出された。

土鍋

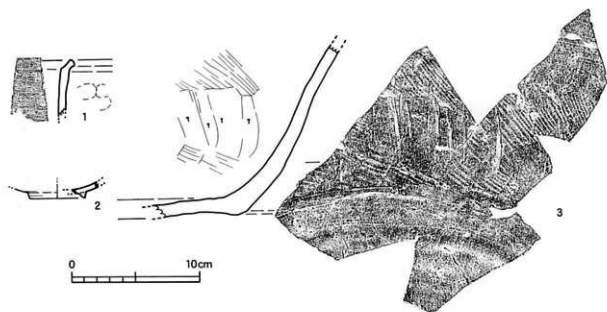
吉備系土師器

遺構内から出土した主要遺物は第3-100図に图示した。1は口縁部が外反する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は撫でや指押さえの痕跡が残る。2は底径4.4cmの吉備系土師器である。高台は断面三角形である。3は常滑系陶器の甕の底部と考える。内外面刷毛目で器面調整されている。



第3-99図 B-SK131実測図

B-SK131の時期は吉備系土師器などから14世紀前半代と考える。

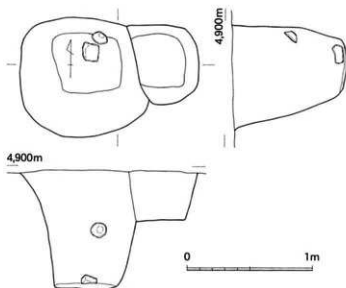


第3-100図 B-SK126出土遺物実測図

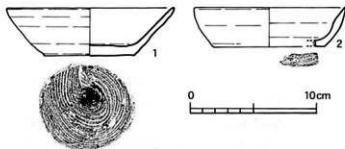
B-SK132 (第3-101図)

B-SK132はB-SK131の東側で隣接して検出された。遺構は切り合う二つの土坑で構成される。東側の規模は60cm×60cmで、深さは40cmである。西側が深く東西1m、南北1mの方形をしており、深さも約1mを測る。底面は50cm×50cmで方形をしている。

遺構内からは第3-102図に図示したが、1は遺構中位から出土したもので、口径13.2cm、底径7cm、器高3.9cmで、口縁部は「ハ」の字状に開き、器壁は均一である。2は口径12cm、底径8.7cm、器高3.1cmで、口縁部は、中位の器壁が厚く、先端は尖る。時期は15世紀中葉であろうか。



第3-101図 B-SK132実測図



第3-102図 B-SK132出土遺物実測図

B-SK134 (第3-103図)

B-SK134は西側をB-SD064で切られた状態で検出された。規模は、南北0.9m、東西1mで方形をし、深さは検出面から約1mである。底面も方形をしており、平坦である。壁はほぼ垂直に立つ。

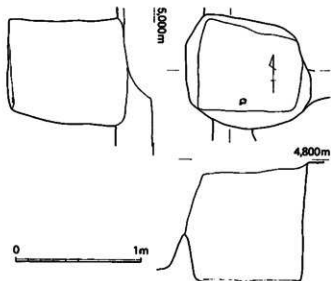
遺構内からは小破片であるが、龍泉窯系青磁、備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器などが出土しており、時期は14世紀代と考えられる。

B-SK145 (第3-104図)

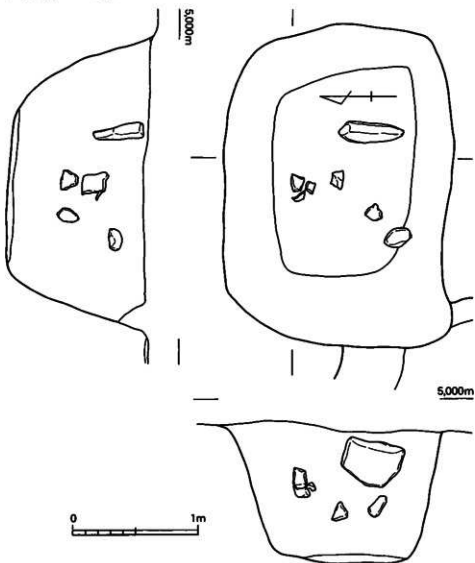
B-SK145はL-46区で検出された土坑である。東西約1.3m、南北約0.9mの

隅丸長方形で、深さは約50cmである。底面は東西約80cm、南北50cmの隅丸長方形である。遺構内からは東寄りで扁平な川原石が意図的に立てられて状態で検出した。また、遺物の出土は備前系陶器と考えられる破片と土師質土器が1点出土したのみで、極めて少ない。

B-SK145の時期は決定できる遺物の出土がなかったため、不明である。



第3-103図 B-SK134実測図



第3-104図 B-SK145実測図

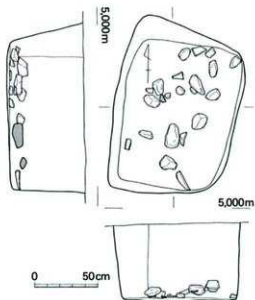
B-SK146 (第3-105図)

B-SK146はL-43区で検出した土坑である。検出面での規模は南北約1.4m、東西約1mで、深さは約60cmである。底面は平坦で、その規模は南北1.1m、東西約0.9mで、隅丸方形である。底面近くからは拳大の礫が投棄された状態で検出された。周囲の壁は北側がやや傾斜が緩いものの、ほとんど垂直に立ち上がる。

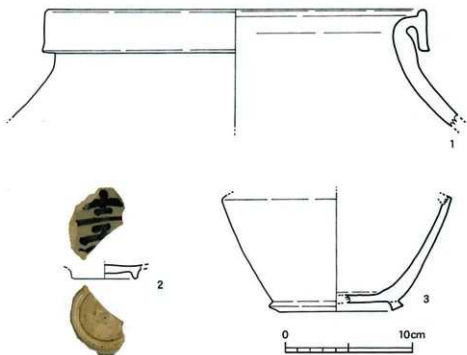
常滑系
漳州窯系

遺構内から出土した遺物は第3-106図に図示した。1は口径30.3cmの常滑系陶器の壺で、特徴的な緑帯の幅は3.5cmである。2は底径5cmの漳州窯系青花碗で、見込みに「壽」の文字が書かれている。漳州窯系青花片はこの他5点出土している。3は8世紀後半の須恵器で短頸壺と考えられる。この他、図化していないが、京都系土師器片や備前系陶器片が出土している。

以上の状況から、B-SK146の時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第3-105図 B-SK146実測図



第3-106図 B-SK146出土遺物実測図

B-SK147 (第3-107図)

B-SK147はL-42・43区で検出された不定形な土坑である。検出面の規模は長軸方向に1.8m、短軸方向が約1mであったが、掘り下げた結果底面は不揃いで、南部は浅く10数cmであったが、北部は東から約35cm、60cm、30cmで、数度の掘り返しが行われた可能性が高い。

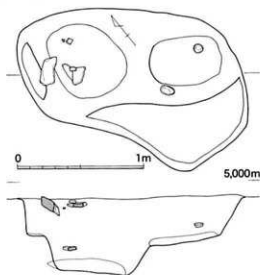
遺構内からは西側の上位で凝灰岩の角礫と扁平な川原石が出土したほか、東側の下位でロクロ成形による在地系土師質土器の坏が2点完形品で流れ込んだ状態で検出された。これらを含め、出土した主要な遺物は第3-108図に図示した。

図示した遺物はすべてロクロ成形による在地系土師質土器である。1は口径7.8cm、底径5cm、器高1.6cmの皿である。底部の器壁が厚く、口縁部は端部が尖るように引き出して、形成している。2は口径12.3cm、底径8cm、器高3.7cmの坏である。底部の器壁は薄く、口縁部は中位から下位にかけて器壁を厚くし、口唇部は尖っている。3は口径12.5cm、底径8.4cm、器高は歪なため、3.3cmから3.6cmを測る。底部の器壁は2に比較すると厚く、そのまま口縁部は端部に向けて尖るように粘土を引き出している。このため、底部近くの器壁が一番厚い。4は口径12.4cmの坏である。口縁部は横撫でで、断面はほぼ均一である。

以上の他、B-SK147からは、漳州窯系青花が2点、備前系陶器3点、吉備系土師器と思われる白色系土師質土器2点、瓦質土器2点が出土しており、遺物からみると多時期にわたる。遺構を検出した状況を見ても、底面が不揃いで数度にわたる掘り返しが行われたとしたら、こうした遺物相も理解できる。ただ、完形品の第3-108図2・3が出土した北部の約35cm掘り込まれた土坑は、14世紀中葉から後葉と考えられる。



第3-108図 B-SK147出土遺物実測図



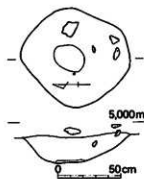
第3-107図 B-SK147実測図

B-SK153 (第3-109図)

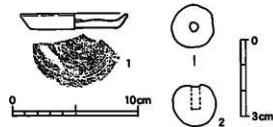
B-SK153は調査区の北端部、L-42区で検出された土坑である。遺構の規模は検出面で南北85cm、東西78cmの円形状であった。掘り下げを行った結果、約20cmで底面に達し、その規模は直径18cmの小さい円形であった。このため、B-SK153は断面形が浅い皿状をしている。遺構内からは扁平な掌大の礫が上面から出土した他、ロクロ成形による在地系土師質土器や瓦質土器の小片、銅銭が出土した。

第3-110図に図示した遺物はその代表である。1は口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.2cmの皿である。土製玉 2は土製の直径1.7cmの玉状の製品である。一ヶ所に直径3mm、深さ9mmの穴を開けているが、貫通はしていない。第3-111図は「開」「元」「寶」が判読でき、621年(唐)初鋳の「開元通寶」と考えられる銅銭である。

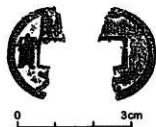
B-SK153の時期を明確に決定づける良好な資料は出土していない。しかし、小片であるがロクロ成形による在地系土師質土器が一定量出土していることから、14世紀代と考える。



第3-109図 B-SK153実測図



第3-110図 B-SK153出土遺物実測図



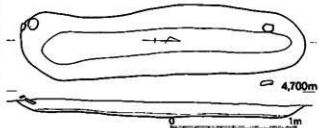
第3-111図 B-SK153出土銅銭実測図

B-SK157 (第3-112図)

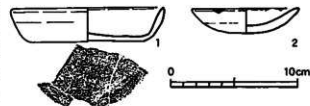
B-SK157はK-43区で、B-SD064の東側上面に沿って検出された南北に細長い土坑である。長さは約2.3m、幅0.55mの規模で、底面までの深さは10cmである。また、底面は長さ2.2m、幅20cmで狭く、横断面は皿状になる。遺構内からは南側の壁の斜面に沿って、京都系土師器の完形品が1点出土した。この他、小破片であるが泉徳鎖窯系青花、龍泉窯系青磁、備前系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。第3-113図に図示したのはその代表である。

1の法量は口径12.2cm、底径9.1cm、器高2.7cmで、口縁部の形態は、底周辺が薄く、器壁は中位が厚くなり、断面形は紡錘形になり、端部は尖る。2は非ロクロ系である京都系土師器である。口径は5.6cmで、器高は1.4cmである。この京都系土師器は、中世大友城下町跡出土の中でも、小型に属する。また、器壁も厚い。

B-SK157の時期は、龍泉窯系青磁、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土しているが、京都系土師器の完形品が良好な状態で出土していることから、その時期と考える。またB-SD064との切り合い状態や京都系土師器の形態などから、16世紀末葉と考える。



第3-112図 B-SK157実測図



第3-113図 B-SK157出土遺物実測図

B-SK161 (第3-114図)

B-SK161はK-43区で検出された円形の土坑であるが、東北側の壁は削平されている。残された遺構の規模は、南北約1.4m、東西約1.5mのほぼ円形を呈する。深さは約10数cmで、底面の東北部は削平され、残された壁は緩い斜面である。底面の残りの規模は直径約1m程度の円形で、遺構の断面形は浅い皿状をしている。

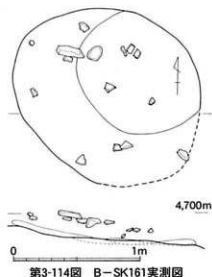
遺構内からは、龍泉窯系青磁、瀬戸美濃系陶器、ロクロ成形による在地系土師質土器、瓦質土器などが出土している。第3-115図に図示した3点はその代表的な遺物である。1は瀬戸美濃系陶器の小皿で、法量は口径3.1cm、底径3.0cm、器高0.6cmである。器壁は薄く、全体に薄く釉がかかっている。2は口縁部が外反するタイプの土鍋である。内面と口唇部に横方向の刷毛目が見られ、外面は撫で仕上げである。

瀬戸美濃系

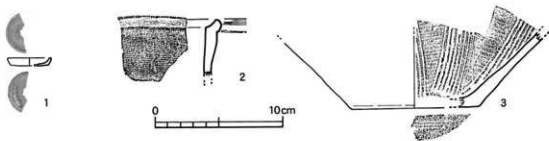
防長系播鉢

3は底径10.2cmの瓦質土器の播鉢である。底部の破片であるが、掘り目は、8本の櫛歯状工具で口縁部に対し直角に入れられており、防長系播鉢と考える。

B-SK161の時期は、遺構内から16世紀的な遺物である中国産青花や、京都系土師器、斜目掘り目の備前系陶器が出土しておらず、ロクロ成形による在地系土師質土器が一定量出土していることから、14世紀代と考える。



第3-114図 B-SK161実測図



第3-115図 B-SK161出土遺物実測図

B-SK164 (第3-116図)

B-SK164はK-43区で検出された小型の土坑である。検出面での規模は、長軸方向が約70cm、短軸方向が45cmの楕円形をしている。検出面から底面までの深さは約15cmで、底面の規模は長軸方向に50cm、短軸方向に約30cmで、平坦であった。

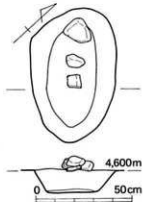
遺構内から遺物は出土せず、上面で拳大の川原石が3点並んで出土したのみである。このため、遺構の時期を想定することは出来ない。

B-SK170 (第3-117図)

B-SK170は調査区の西北隅、K-42区で検出した土坑である。遺構検出まで整地層が厚く、図示した遺構図は下部の状況と考えられる。確認出来た遺構の規模は、南北約2.5m、東西約1.2mで、南北に長い隅丸方形である。検出面から底面までの深さは10数cmで、規模は南北1.3m、東西0.7mである。底面には北側に直径30cm、深さ20cm、南側に直径45cm、深さ50cmの柱穴状の掘り込みがある。

常滑系

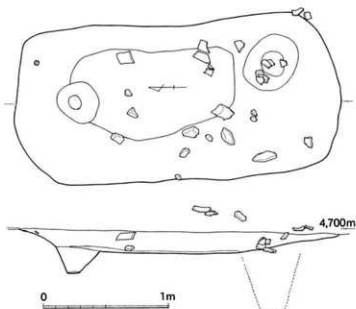
遺構内からは常滑系陶器や瓦質土器が出土している。第3-118図に図示したのはその代表である。1は常滑系陶器の壺で、口縁部の緑帯の幅



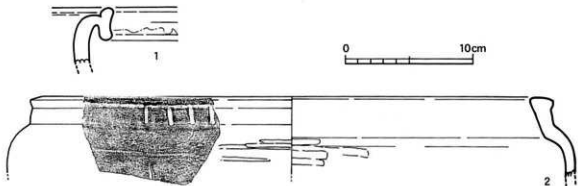
第3-116図 B-SK164実測図

は2.7cmである。外面には自然軸がかかる。2は口径41.4cmの瓦質土器の鉢である。この鉢と同類の資料はB-SK022・B-SK096からも出土している。内湾する胴部に直立する口縁部が付き頸部を形成し、口縁端部は肥厚する。頸部外面にはヘラ描きによる刻目が4ヶ所以上の単位で付く。

B-SK170の時期は、常滑系陶器の壺は13世紀に比定できるが、他に決定できる遺物の出土がないため保留する。



第3-117図 B-SK170実測図

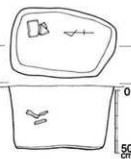


第3-118図 B-SK170出土遺物実測図

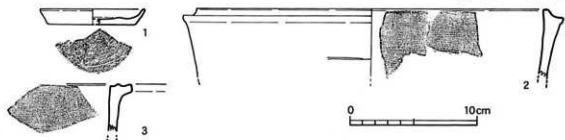
B-SK177 (第3-119図)

B-SK177は、L-43区で検出された土坑で、検出面での規模は、南北83cm、東西55cmを測り、歪な方形を呈する。検出面からの深さは50cmで、底面は平坦である。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

遺構内から出土した主要遺物は第3-120図に3点を図示した。1は口ク口成形による在地系土師質土器の皿で、口径8.2cm、底径7cm、器高1.3cmである。2は瓦質土器であるが、口径28cmで突帯の下位が肥厚する鈎付の土鍋と考える。内外面横方向にヘラ磨きされている。3も瓦質土器



第3-119図 B-SK177実測図



第3-120図 B-SK177出土遺物実測図

であるが、口縁部が外側に直角に外反する。内面は横方向の刷毛目調整で、外面は撫で仕上げである。土鍋であろうか。

この他、景徳鎮窯系青花片3点、龍泉窯系青磁1点、瀬戸美濃系陶器片1点、ロクロ成形による在地系土師質土器40点などが出土している。

B-SK177の時期は、龍泉窯系青磁1点やロクロ成形による在地系土師質土器40点などが出土し、14世紀代とも考えられるが、景徳鎮窯系青花片3点出土していることから、16世紀後半代とする。

B-SK178 (第3-121図)

B-SK178は、K・L-42で検出された土坑である。検出面での規模は、南北約80cm、東西約70cmを測り、楕円形を呈する。検出面からの深さは75cmで、底面の規模南北55cm、東西42cmで平坦である。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

遺構内からは、遺物の出土は少なく、ロクロ成形による在地系土師質土器や瓦質土器、吉備系土師器と想定される白色系の土器片が出土したに留まる。このため、遺構の時期を決定する良好な資料に欠けるが、在地系土師質土器の出土で、14世紀代と考える。

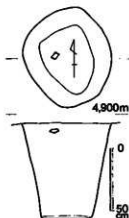
B-SK179 (第3-122図)

B-SK179は、L-42で検出された土坑である。検出面での規模は、南北約65cm、東西約75cmを測り、緩い方形を呈する。検出面からの深さは57cmで、底面の規模南北50cm、東西55cmで西側が低く、緩く傾斜する。壁は全面ほぼ垂直に立つ。

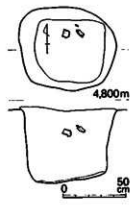
東播系

遺構内から出土した主要遺物は第3-123図に東播系須恵質土器を図示した。口径は28.3cmで、口縁端部が肥厚し、断面が三角形を呈する。器面調整は横方向の撫で仕上げである。

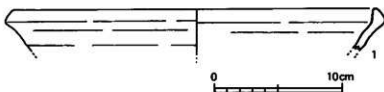
この他、常滑系陶器片1点、ロクロ成形による在地系土師質土器、吉備系土師器と推測される白色系土師器が出土しており、B-SK179の時期は、14世紀代と考える。



第3-121図 B-SK178実測図



第3-122図 B-SK179実測図

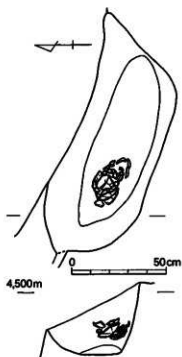


第3-123図 B-SK179出土遺物実測図

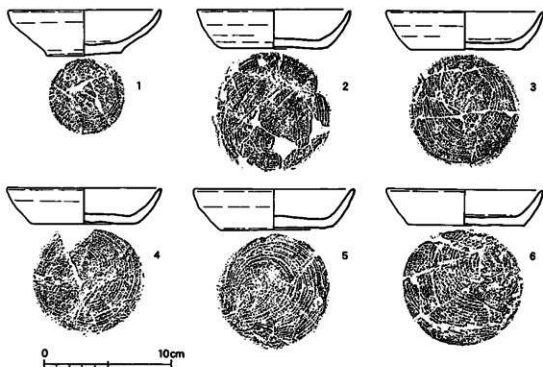
第2節 遺構と遺物

B-SK184 (第3-124図)

B-SK184はB-SE010の南側に沿って検出された。遺構の形態は細長く、その規模は、長軸方向が1.1m、短軸方向が0.45mである。検出面からの深さは約35cmで、底面も長さ96cm、幅28cmである。遺構内西寄り、底面から約10cm離れた状態で、ロクロ成形による在地系土師質土器がまとめて廃棄された状態で検出された。



第3-124図 B-SK184実測図



第3-125図 B-SK184出土遺物実測図

第3-125図に図示した6点が、一括廃棄された遺物である。1は口径12cm、底径6cm、器高3.8cmで、底径は口径の半分であり、口縁部は内湾気味に立ち上がり、碗形の形状をしている。底部の器壁も厚い。これに比べ、2～6は口径に対し底径は約70%で、安定感が高い坏である。2の法量は口径12.3cm、底径8.9cm、器高3.1cmで、3は口径12.4cm、底径8.4cm、器高3.1cmである。4は口径12.2cm、底径8.4cm、器高2.9cmで、5は口径12.9cm、底径8.7cm、器高3.2cmである。そして、6は口径12.3cm、底径9.4cm、器高2.9cmである。口縁部の形態は、底部周辺の器壁を厚くし、口縁端部が尖るように成形されている。この他、遺構内からは古備系土師器と思われる薄手の白色系の土師器が出土している。

B-SK184の時期は出土した在地系土師質土器の形態から、14世紀中葉から後葉と考える。

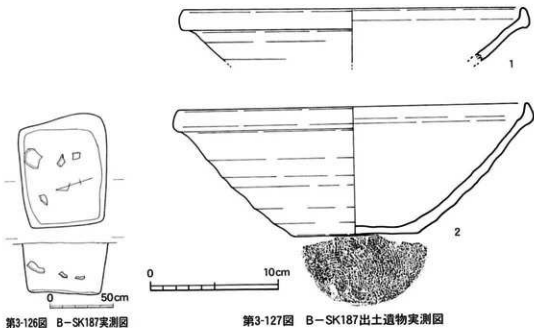
B-SK187 (第3-126図)

B-SK187はL-43区で検出された土坑である。検出面での規模は、南北65cm、東西85cmで、長方形をしている。深さは検出面から約40cmであり、底面は平坦で、規模は南北60cm、東西70cmの長方形となっている。周囲の壁はほぼ垂直に立つ。

東播系

遺構内から出土した主要な遺物は第3-127図に図示した。2点とも東播系須恵質土器の鉢で、1は口径26cmで、器面調整は全面横方向の撫で仕上げである。口縁端部は肥厚する。2は図上で復元され、口径27.4cm、底径9.8cm、器高10.3cmである。口縁端部は肥厚し、断面が三角形になる。器面は全面横方向の撫で、底部には糸切りの痕跡が残る。この他遺構内からは、小破片であるが、龍泉窯系青磁・備前系陶器・ロクロ成形による在地系土師質土器が出土している。

B-SK187の時期は、東播系須恵質土器の口縁部の形態や、その他の出土遺物から14世紀末葉から15世紀前葉と考える。



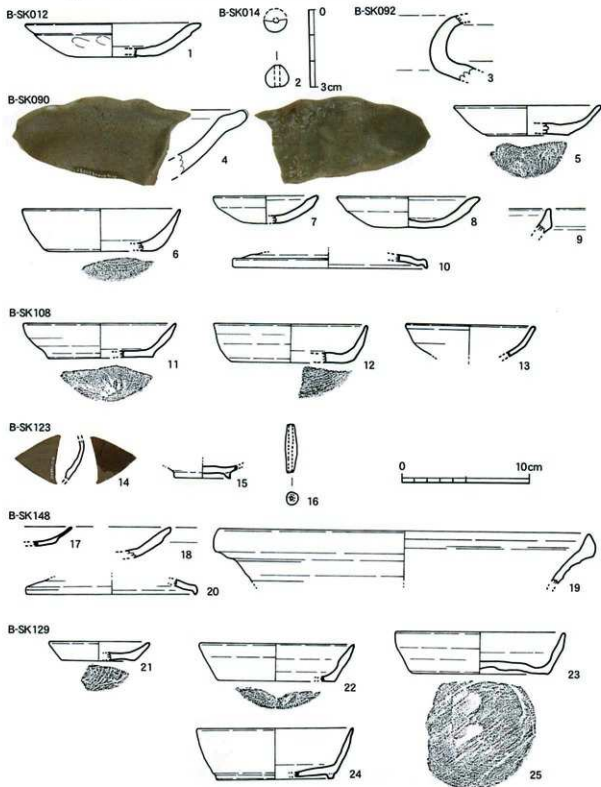
第3-126図 B-SK187実測図

第3-127図 B-SK187出土遺物実測図

その他の土坑出土遺物

府内町跡20次調査B区からは以上の主要な土坑の他、多くの土坑を調査している。ここでは、そうした土坑から出土した遺物を第3-128図と第3-129図に図示し報告する。

B-SK012はK-46区で検出された整地層の一部の可能性のある浅い土坑である。出土遺物は第3-128図1の口径13.8cm、器高2.6cmの京都系土師器が出土した。

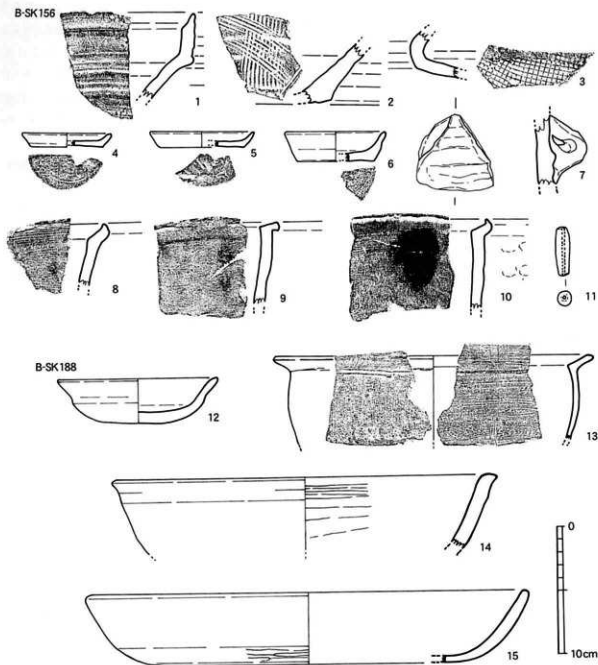


第3-128図 府内町跡20次調査A区土坑出土遺物実測図(1)

これ以外にも小片であるが、龍泉窯系青磁や中国産白磁、備前系陶器が出土しており、16世紀末葉と考える。

ガラス製の玉 B-SK014はL-43区で検出された小土坑である。2は緑色をした直径9mmのガラス製の玉の半分である。遺物はこの他、ロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が出土しているが、時期は不明である。

龍泉窯系 B-SK090はK-47で検出された土坑で、B-SD004と切り合い関係にある。4は龍泉窯系青磁の大型皿である。5・6はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、5は口径11.6cm、底径6.8cm、器高2.3cmで、6は口径12.5cm、底径9.2cm、器高3.4cmである。7・8は京都系土師器で、7の口径は8.4cm、器高2.2cmで、8は口径11.2cm、器高2.4cmである。9は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。



第3-129図 府内町跡20次調査A区土坑出土遺物実測図(2)

10は8世紀後半の坏蓋である。

B-SK090の時期は、14世紀代の遺物も含まれるが、図示した遺物以外にも、景徳鎮窯系青花や漳州窯系青花、備前系陶器が出土しており、16世紀後葉から末葉と考える。

B-SK092はL-42区で検出された小土坑である。出土した3は瓦質土器の蓋の頸部である。

B-SK108はK-45区で検出された土坑で、図示した11・12はロクロ成形による在地系土師質土器の坏で、法量は11が口径12.1cm、底径8.4cm、器高2.7cmで、口縁部は中位の器壁が厚い。12は口径12.3cm、底径9cm、器高3.1cmで、口縁部の形態は底部近くの器壁が厚く、口唇部に向けて薄くなる。13は口径10.2cmの古備系土師器である。

B-SK108の時期は、14世紀中葉から末葉と考える。

褐輪陶器

B-SK123はK-45で検出された土坑である。14は薄手の中国産褐輪陶器である。15は底径1.5

古備系土師器

cmの古備系土師器の底部である。16は紡錘形の上錐で、長さ4.9cm、最大径9mm、重さ3.4gである。この土坑の時期は、他にロクロ成形による在地系土師質土器が出土しており、14世紀代と考える。

B-SK129はB-SK123の西側に隣接して検出された同規模の土坑である。21～23はロクロ成形による在地系土師質土器で、21の皿は口径8cm、底径5.6cm、器高1.5cmである。22・23は坏であるが、22の口径12.4cm、底径9.4cm、器高3cmで、23は口径13.4cm、底径11.1cm、器高3.3cmである。口縁部は2点とも底部近くが薄く、中位の器壁が厚い。24は8世紀後半の須恵器の坏で、口径12.5cm、底径9.4cm、器高4cmである。

B-SK129からは図示した以外に京都系土師器がまとまって出土しており、時期は16世紀後葉から末葉と考える。

東播系

B-SK148はK-42区で検出された土坑で、B-SK064・B-SK157と重複している。17は精製粘土を使用した土師器である。18は京都系土師器で、19は口径29.6cmの東播系須恵質土器の鉢である。20は8世紀後半代の須恵器の坏蓋である。

遺構の時期は、図示した遺物以外に、景徳鎮窯系青花や京都系土師器が出土しており、16世紀末葉と考える。

備前系

亀山系

B-SK156はK-42区で検出された遺構であるが、整地層の一部である可能性を持つ。第3-129図主要な遺物を図示したが、1・2は備前系陶器の播鉢で、斜め摺り目や口縁部に16世紀末葉の特徴を持つ。3は亀山窯系須恵質土器で、肩部は格子目の叩きで調整されている。4～6はロクロ成形による在地系土師質土器で、皿である4・5の法量は、4が口径7.1cm、底径5.8cm、器高1.1cmで、5は口径8.3cm、底径6.9cm、器高1.6cmである。6は口径8.1cm、底径6.7cm、器高2.4cmの小皿である。7は古代の甔の取手である。8～10は口縁部が屈曲する土鍋である。内面は横方向の刷毛目で、外面は糞でと指押さえてある。11は土錘で、長さ4cm、最大径1.1cm、重さ5.1gの紡錘形である。

以上の他、京都系土師器も出土していることから、遺構の時期は、1・2の備前系播鉢を含め、16世紀末葉と考える。

B-SK188もK-42区で検出された遺構であるが、整地層の一部である可能性を持つ。第3-129図主要な遺物を図示したが、12は口径12.6cm、底径3.5cmの京都系土師器の坏である。13～15は瓦質土器である。13は口縁部が外反する口径25cmの甕である。器面は口縁部外面が撫であるが、胴部外面は縦、内面は横方向の刷毛目で調整されている。14は口径30.4cmの鉢である。15も口径34.8cm、底径22.8cm、器高5.8cmのタライ状の鉢で、2点とも器面は横方向のヘラ磨きで調整されている。

以上の他、景徳鎮窯系青花や備前系陶器などが出土しており、遺構の時期は、12の備前系播鉢を含め、16世紀末葉と考える。

3. 井戸

府内町跡20次調査B区では井戸が5基検出された。その分布は集中する場所はなく、全体に確認できる。時期は大きく16世紀代とそれ以前に分かれる。

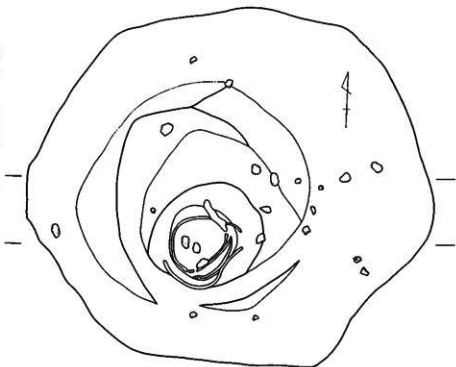
B-SE006

(第3-130図)

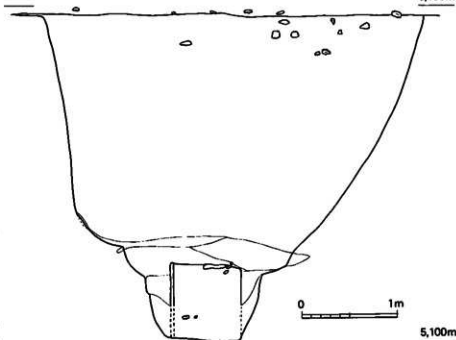
B-SE006

はK・L-45で検出された。検出面は、東西4m、南北3.6mの円形である。これを3.4m掘り下げ、直径60cmの結桶を被せ、水源を確保して井筒とした跡が確認できる。しかし、井筒の大部分は、再度掘り返して撤去したことが、土層で確認できる。

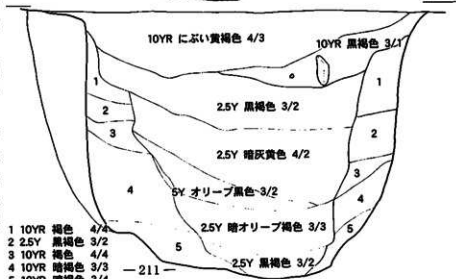
遺構内から出土した主要遺物は、第3-131図に図示した。1は底径4cmの龍泉窯系青磁碗の高台である。2・3は京都系土師器で、2の口径は11.2cm、器高1.9cmの皿であるが、3は口径



5,100m



5,100m



- 1 10YR 褐色 4/4
 2 2.5Y 黒褐色 3/2
 3 10YR 褐色 4/4
 4 10YR 暗褐色 3/3
 5 10YR 暗褐色 3/4

龍泉窯系

第3-130図 B-SE006実測図

第2節 遺構と遺物

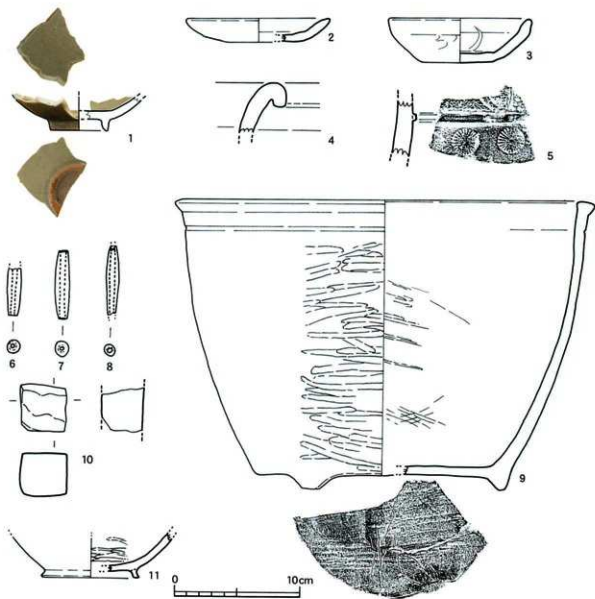
土錘

11.3cm、器高3.5cmの坏である。4は備前系陶器と考えられる壺である。5・9は瓦質土器である。5はスタンプの菊花文が付き、9は口径33cm、底径20.2cm、器高22.9cmで、口縁部は直口で、外縁部が肥厚し、底部には3ヶ所脚が付く。器面は内外面とも横方向のヘラ磨きで器面調整されている。6～8は紡錘形をした土錘で、6は一部を欠くが長さ3.7cmで、最大径1cm、重さ3.8gで、完形品の7は、長さ5.4cmで、最大径1.1cm、重さ6.3gである。8は両端を欠くが、長さ5.6cm、最大径0.9cm、重さ4.1gである。10は大部分を欠くが砥石で、11は高台が付く底径7.9cmの土師器の埴である。

B-SE006からはこの他、景德鎮窯系青花が出土しており、京都系土師器も出土していることから、この井戸の時期は、16世紀後葉から末葉と考える。

B-SE009 (第3-133図)

B-SE009は、L-44・45区で検出された井戸である。検出時は南北4.4m、東西3.2mの井戸と想定し、掘り下げを行ったが、調査の結果、新・旧2基の井戸が確認された。旧井戸の規模は、最深部しか把握することは出来なかったが、検出面から深さ3.2mの位置で直径70cm程度の最下部の井戸枠を設置する面が検出された。



第3-131図 B-SE006出土遺物実測図

この先行する井戸に接して掘り込まれた新井戸は検出面からの深さは旧井戸と同じ約3.2mであるが、下部に腐食した状態で、井戸枠が確認された。その形状と規模は、平面形が方形であり、板材を組み合わせ、一辺約80cmの井戸枠であった。また最下部の水源部にも一辺約60cmの弁を設置していた痕跡を確認した。なおこの井戸が埋め立てられた後、B-SK098が掘り込まれている。

この井戸から出土した遺物は第3-132図・第3-134～第3-136図に図示した。第3-132図1の銅銭は真書体で書かれた「熙寧元寶」で初鑄年は1068年(北宋)である。周辺は作爲的に周りを削り、直径が1.5cmになっている。2は草書体で書かれた「至道元寶」で初鑄年は995年(北宋)である。3は篆書体で書かれた「政和通寶」で初鑄年は1111年(北宋)である。

第3-134図1～19はロクロ成形による在地系土師質土器である。1～6は皿で、器高の高い5を除くと、法量の平均は、口径7.8cm、底径6.5cm、器高1.1cmである。3の底部には板状圧痕が残る。5は口径7.5cm、底径6cm、器高1.6cmで、他に比較すると器高が高い。7～19は坏である。法量の平均は、口径が12.1cm、底径が8.3cm、器高は3.2cmである。しかし、器形を見ると、17は口径に対し底径が小さく口縁部も内湾気味である。また口縁部の器壁の厚さは、9・14は上位が厚くなるが、他は底部近くが厚く、口縁部端に向けて、薄く仕上げている。18・19の内面にはラセン状のロクロ目が残る。

燭台 20は口径9.3cmの坏に孔を開けた粘土柱が付き、燭台と考える。

吉備系土師器 21～25は白色の色調をした薄手の吉備系土師器である。22の口径は10.2cm、底部は断面三角形の低い高台が廻る。底径は23が4.2cm、24が4.8cm、25が4.5cmである。

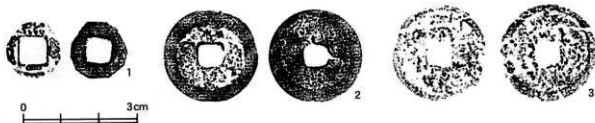
備前系 第3-135図26～28は備前系陶器である。26は口径32cmの挿鉢で、口縁部がわずかに肥厚し、6本の櫛歯状工具で施文されている。27・28は口縁部が玉縁状になる。29は口径18.7cmで胴部が張り、口縁部が外反する壺である。

東播系 30～34は東播系須恵質土器である。30は口径26.9cmで、肩部に明きのある甕である。31～33は鉢で、33の口径は32.4cmである。底径10cmの底部である40は鉢の底部と考える。

土鍋 35～39は口縁部が屈曲する土鍋で、内面は横方向の刷毛目、外面は撫でと指押さえである。器形が判る39は口径31.4cm、器高13.9cmで、丸底である。屈曲する口縁部下が肥厚し、最大の器壁の厚さとなっている。第3-136図40～43は口縁部下に突帯が廻る鈎付きの土鍋である。40・42・43は突帯部下から器壁が厚みを増し、丸底である。器面は、口縁部周辺は横撫でであるが、胴部外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目で調整されている。復元口径は41が26.7cm、42が28.8cm、43は24.6cmである。

瓦質土器 44は瓦質土器で、上面観が方形になり、器面は丁寧な横方向のヘラ磨きで調整されている。

土錘 45・46は紡錘形をした土錘である。45は長さ4.1cm、最大径1.2cm、重さ5.7gで、46は長さ5cm、最大径1cm、重さ7.2gである。47は輝緑凝灰岩製の硯である。規格は幅4.8cm、厚さは1cmである。48～52は8世紀後半から9世紀前半の遺物と考える。48は口径14cmの皿で、高台を持ち、その径は7.8cmである。49・50は同一個体と考えられる皿で、口縁部は屈曲し、口径は13cmである。51は口径23.6cmの広口の鉢である。52は口径32.7cmの口縁部が外反する甕である。53は弥生時代後期の壺形

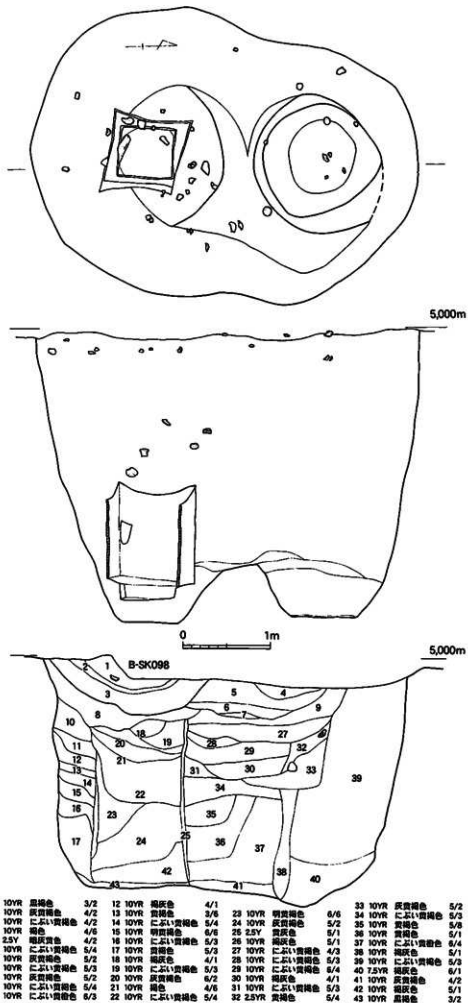


第3-132図 B-SE006出土銅銭実測図

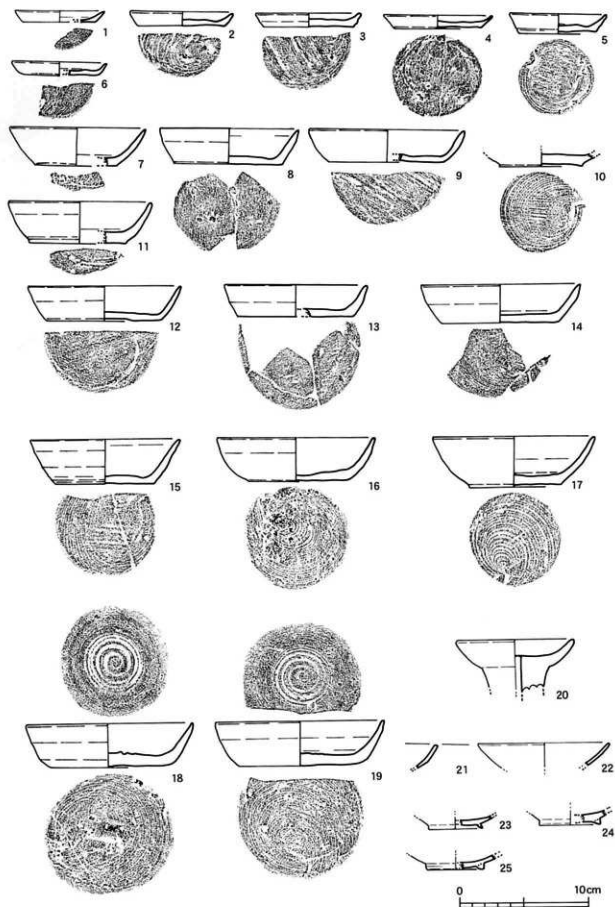
第2節 遺構と遺物

土器の頸部である。

B-S
E009の
時期は、
16世紀の
遺物が混
入せず、
上面に
14世紀中
葉から後
葉と想定
される遺
構(B-SK098)
があり、
備前系陶
器やロク
ロ成形に
よる在地
系土師質
土器の形
態からも、
ほぼ同時
期の14世
紀中葉か
ら後葉と
考える。

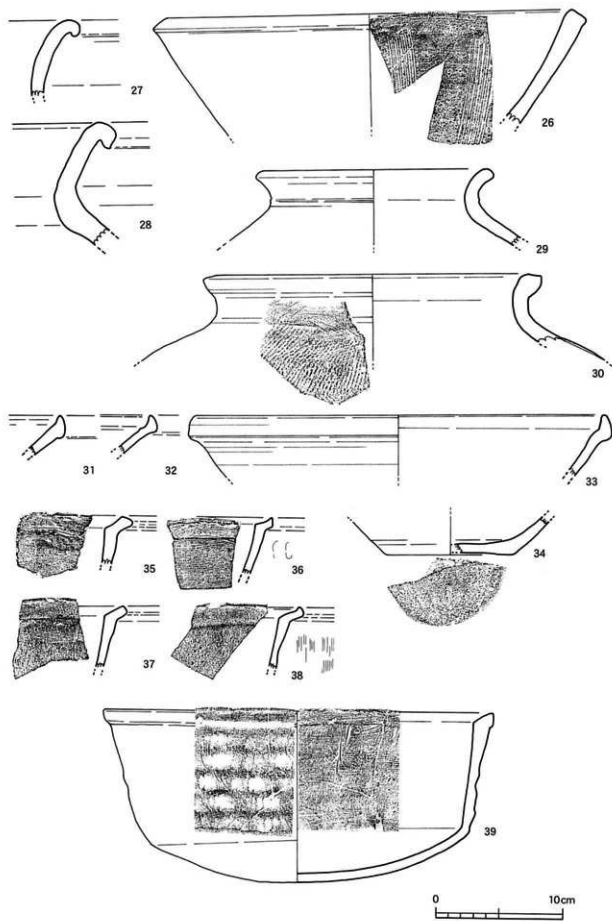


第3-133図 B-SK098実測図

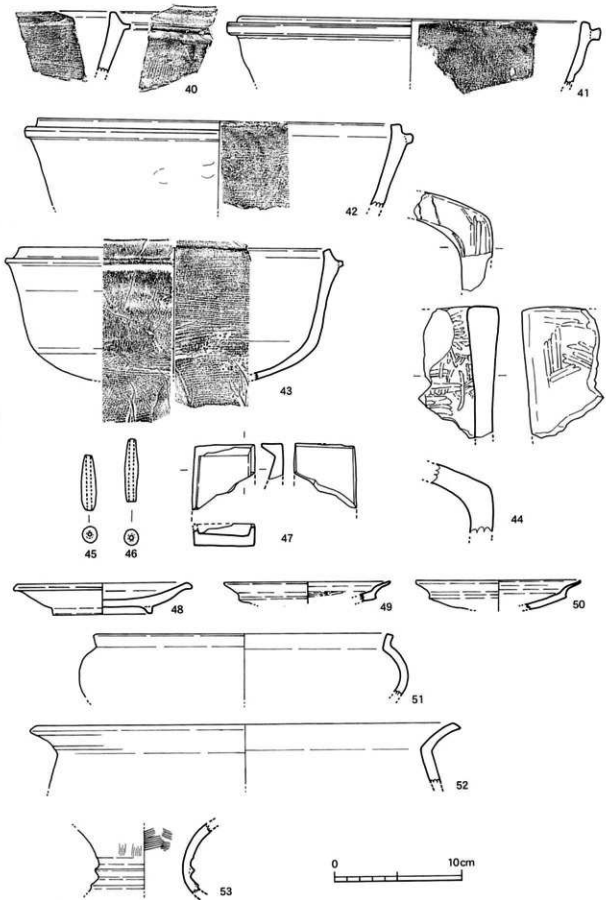


第3-134図 B-SE009出土遺物実測図(1)

第2節 遺構と遺物



第3-135図 B-SE009出土遺物実測図(2)



第3-136図 B-SE009出土遺物実測図(3)

B-SE010

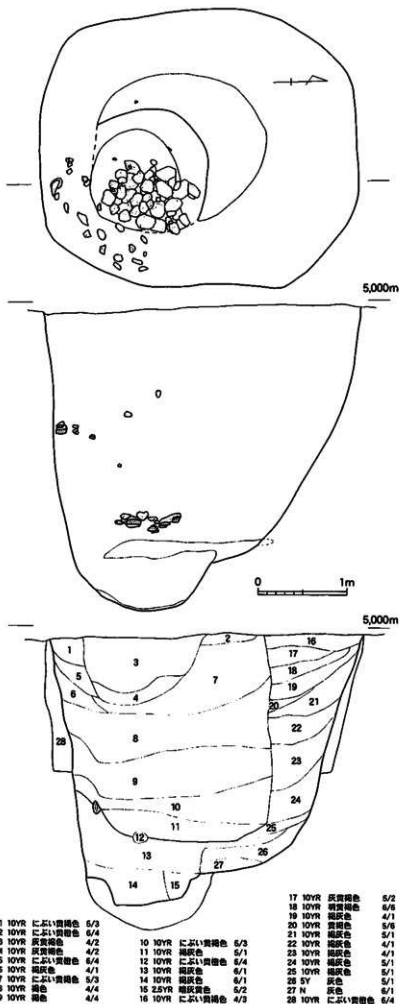
(第3-137図)

B-SE010は、B-SE006から北に15m離れた位置で検出された井戸である。検出面の規模は東西3.2m、南北3.6mの隅丸方形をしている。深さは、南東隅が最深で3.4mを測り、その場所から第3-138図1に図示した備前系陶器の挿鉢が出土した。土層断面図を観察すると、井筒は掘り返しにより、完全に撤去され、再度埋め戻される時には下位に礫をまとめて投棄している。

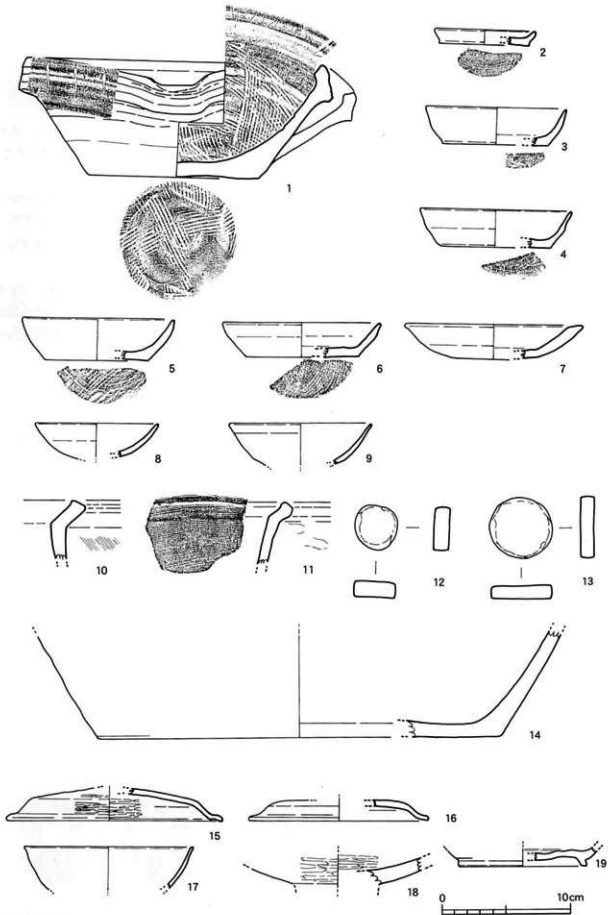
備前系挿鉢

遺構内から出土した主要な遺物は第3-138図1に図示した。1はやや歪んでいる備前系陶器の挿鉢である。口径は23.3cmで、底径は13.3cm、器高は9.1cmで、注口部も確認できる。口縁部は口唇部の内側を窪ませている。内面の横り目は斜目摺り目を交差させ、底面内側にも十字に入れている。

2～6はロクロ成形による在地系土師質土器で、皿の2は口径8cm、底径7.7cm、器高1.2cmである。3～6は円で、3は口径11.2cm、底径8.4cm、器高3.0cmで、4は口径12cm、底



第3-137図 B-SE010実測図



第3-138図 B-SE010出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物

径8.4cm、器高3.0cmである。5は口径12.1cm、底径8.2cm、器高3.3cmで、6は口径12.5cm、底径8.9cm、器高2.8cmである。

7は京都系土師器であるが、口径14cm、器高2.8cmの皿である。口縁部周辺の器壁が厚く、新しい傾向を示す。

吉備系土師器 8・9は吉備系土師器で、口径は8が9.7cm、9が11.3cmである。

10・11は口縁部が屈曲する土鍋の口縁部である。10は内面撫で、外面は斜め方向の刷毛目の後撫で仕上げであるが、11は内面が横方向の刷毛目で、外面は横方向の撫でのあと、指押さえなどで、平滑に仕上げている。

12・13は土器片の周辺を研磨して作成した円盤状の土製品である。12は長径3.5cm、短径3.3cmで、厚さは1.3cmで、重さは17.6gである。13は直径4.8cmの円形で、厚さは1.1cm、重さは33.4cmである。14は瓦質土器の底部で、底径は31.8cmで、全面入念なヘラ磨きで仕上げ、器壁も底部と胴部がほぼ均一である。

15～19は古代の遺物である。15・16は土師器の坏蓋で、2点とも内面・外面ともに回転ヘラ磨きで丁寧仕上げられている。15は口径17.2cm、16は14.2cmである。17は口径13.6cmの坏身の口縁部と考える。18は精製粘土を使用し、内外面をヘラ磨きで器面調整した高坏である。19は口径10cmの高台を廻らせた須恵器の坏の底部である。

銅銭 第3-139図はB-SE010から出土した銅銭である。20は行書体で書かれた「元豊通寶」で初鋳年は1078年（北宋）である。21は「大観通寶」で初鋳年は1107年（北宋）である。22は錆が付着しており、判読が不能である。

B-SE010の時期は、井筒を抜き取られた後に、一部を欠く第3-138図1の備前系播鉢が最深部に廃棄された状態で検出された。このため、最終的な井戸廃棄の時期は、この播鉢の時期と考える。また、同時期と考える京都系土師器も器壁が厚く、新しい傾向をみせる。すなわち、B-SE010が機能していた時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第3-139図 B-SE010出土銅銭実測図

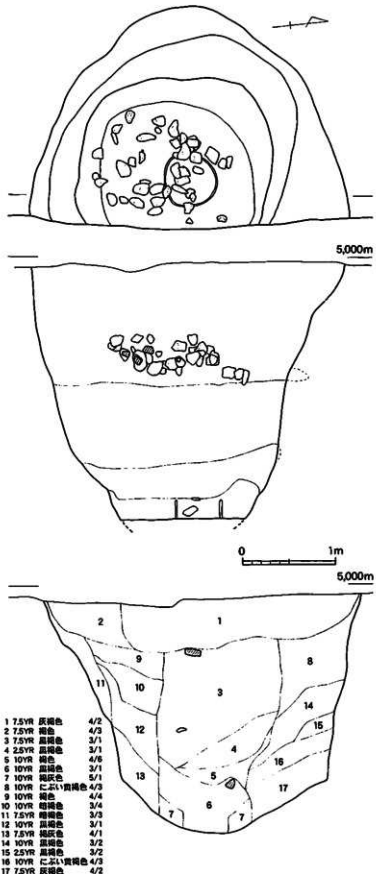
B-SE017 (第3-140図)

B-SE017は調査区の東壁沿のM-43区で検出された井戸である。検出面での規模は、南北3.4m、東西は東端が調査区外のため、計測できないが、3m以上はある。深さは、壁際のため完全に調査できなかったが、検出面から2.8mの位置で井筒を確認した。曲物の可能性が高い。土層観察によるとこの井筒から上位の井筒は掘り返され抜き取られている。さらに埋め戻しの際に、井戸の中位に礫を投棄している。

遺構内から出土した主要な遺物は第3-141図に図示した。1~5はロクロ成形による在地系土師質土器である。1の皿は蓋で口径は8.3cm~9cmで、底径も6.8~7.3cmで、口縁部は低く形成され器高は1.5cmである。2は器壁が比較的薄い。口径は9.8cm、底径は7.4cmで、器高は2cmである。皿よりも器高が高く、坏より口径が小さい。小型の坏と考える。3は口径12.5cm、底径10.2cm、器高2.9cmで、口縁部は中位が肥厚し、器壁が厚くなり断面は三角形になる。4は口径12.3cm、底径7.4cm、器高3.8cmであるが、口縁部は逆「ハ」の字上に直線的に開き、口縁端部は尖る。5は口径12.2cm、底径9cm、器高2.7cmで口縁部の断面は緩い紡錘形をしている。

吉備系土師器

6はほぼ完形品の吉備系土師器である。口縁部は斜めに傾き、吉備系土師器の本来の器形を知ることができる。口径10.8cmで、底部には断面三角形の低い高台が廻り、その



第3-140図 B-SE017実測図

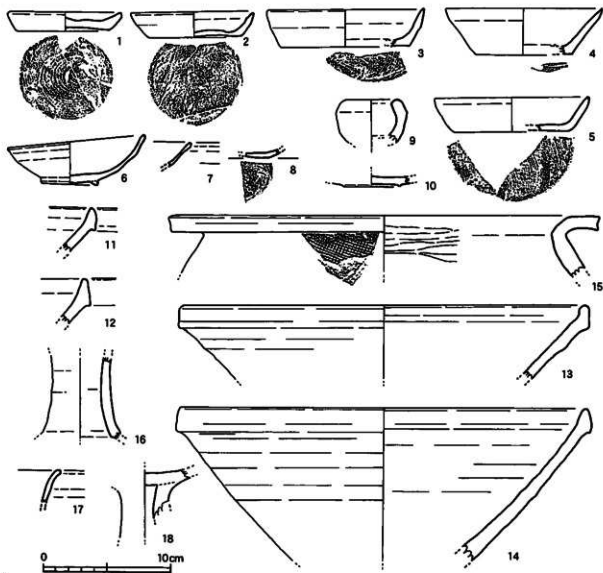
第2節 遺構と遺物

径は4.2cmである。器高は斜めのため、2.9～3.9cmを測る。胎土や色調は在地系土師器に比較すると白色で、器壁も薄い。

8は底部にロクロ成形のため、糸切り痕が残る。この資料は、吉備系土師器よりさらに胎土・色調が白く、器壁も薄い。器形は、口縁端部がやや肥厚する7も同じ色調と胎土をしており、このような口縁部が付く皿の可能性が高い。

9は口径4.3cmの埴塼である。器壁は厚く、器面は非ロクロ系のため、器面は内面が横撫で、外面は指押さえの痕跡を残す。

10は底径4.3cmの瓦質土器で、瓦器碗の底部と思われる。底部には退化した低く小さい高台が廻る。11～15は東播系須恵質土器である。このうち11～14は鉢である。11・12は肥厚し断面が三角形になる口縁部である。器面は横方向の撫でで調整しており、色調は灰色をしている。13は口径32.7cmで、口縁端部の形態は、屈曲し立ち上がるように肥厚し、11・12とは異なる。14は口径32.6cmで口縁部の形態は断面が丸みを帯びた三角形をしている。13・14ともに、器面調整は横方向の撫でで仕上げている。色調は灰色である。15は口径34.2の甕である。肩部は格子状の叩きで器面調整されている。



第3-141図 B-SE017出土遺物実測図

16・17は須恵器である。16は長頸壺と考えられる資料で、細い部分の径は4.8cmで、下位は肩部とつながる様子がみられる。17は須恵器の坏の口縁部と思われる。18は精製粘土を使用した高坏の坏部と脚部の接合部である。これらの3点は8世紀後半から9世紀前葉に属する資料と考える。

B-SE017の時期は、出土遺物の構成から14世紀中葉から後葉と考える。

B-SE056

B-SE056はK-47区で、南半分が調査区外になる状態で検出された井戸である。確認された遺構の規模は東西3.1m、南北1.3mの半円形状で、南側の半分は調査区外に広がっている。調査は約1mを掘り下げたが、崩落の危険が生じたため、完掘を断念した。遺構の規模や深さ、壁の立ち上がり状況から、この遺構を井戸と判断した。

備前系

第3-142図に、この遺構から出土した主要な遺物を図示した。1は備前系陶器の壺である。頸部は直立し、外反する口縁端部は小さな玉縁状になる。

2～4は口縁成形による在地系土師器の皿である。法量は、2の口径は歪なため8.4～8.8cmで、底径は7～7.2cmで、器高1～1.3cmである。3は口径8.4cm、底径6.5cm、器高1.3cmで、4は口径7.5cm、底径6.2cm、器高1.3cmである。

吉備系土師器

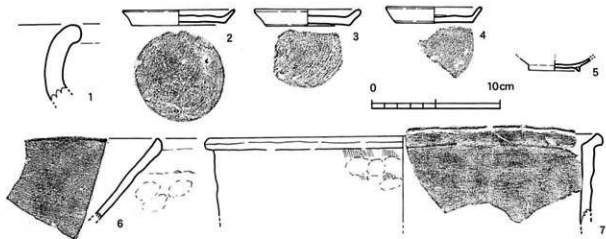
5は口径4cmの吉備系土師器の底部である。胎土・色調は白色で、断面三角形の高台が廻る。

6は瓦質土器で、内面は横や斜め方向の刷毛目調整で、外面は口縁部周辺が横撫で、下位は指押さえて器面を平滑に調整している。

7は口径31.4cmの口縁部が屈曲する土鍋である。器面調整は内面が横方向の撫で、外面は縦方向の刷毛目の後、指押さえや撫でて平滑に仕上げている。

以上の他、景德鎮窯系青花・龍泉窯系青磁・京都系土師器が出土している。

出土遺物の量は14世紀代の遺物が多いが、景德鎮窯系青花・京都系土師器なども出土している。京都系土師器はその形態から16世紀後葉から末葉と考えられ、遺構の時期もその時期に埋め立てられたと想定される。



第3-142図 B-SE056出土遺物実測図

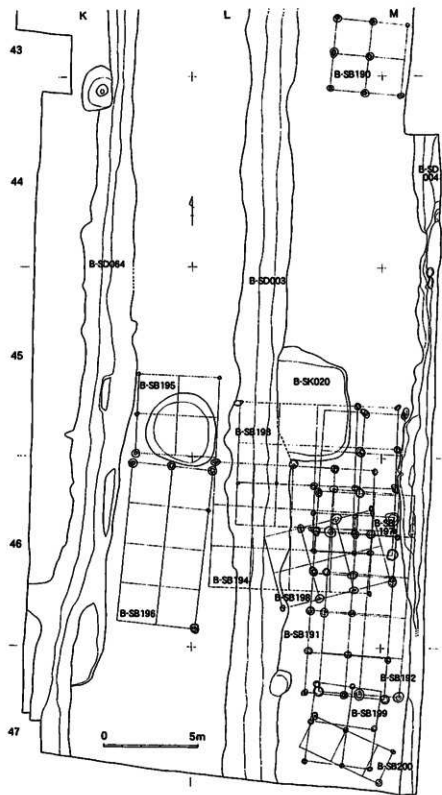
4. 建物遺構

府内町跡20次調査B区の東南隅を中心に、柱穴内に上面が平坦な川原石を据えた遺構が多数検出された。調査当時、そうした礎盤を据えた柱穴が明らかに等間隔に並び、建物遺構の存在が想定された。しかし、周辺にB-SD003・B-SD004・B-SK020・B-SE006などの大型遺構と切り合い、不明な柱穴も多い。さらに後世の削平により失われた柱穴も多い。また、柱穴内から二段に積み重ねられた川原石や隣接する柱穴

なども検出され、同じ場所で建て替えが繰り返されていることも推測できた。

そこで、報告書作成にあたり、検出された礎盤を据えた柱穴や、柱穴が削平され礎石状態で検出された川原石を積極的に評価し、礎盤建物として復元を行った。その結果、少なくとも8棟の礎盤建物が存在していたことを確認した。

礎盤建物



第3-143図 府内町跡20次調査区B区建物遺構配置図

B-SB190 (第3-144図)

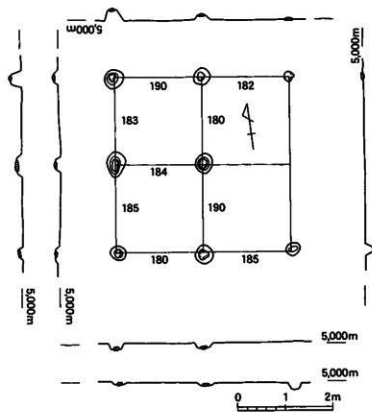
B-SB190は調査区の東側北寄りで見出された礎石建物で、方位は $N-8^{\circ}-E$ である。建物の規模は東西2軒、南北2間を確認したが、東の調査区外に延びている可能性も残る。検出された東側の南北列の北は礎石のみ、南は柱穴のみで、その間を取り去られたためか、確認できなかった。柱間は、最大で190cm、最小で180cmであり、平均すると184cmであり、六尺を1間とした建物である可能性が高い。

柱穴内から遺物はほとんど出土せず、わずかにロクロ成形による在地系土師質器が出土したのみで、時期もその頃と考えられ、14世紀代と想定する。

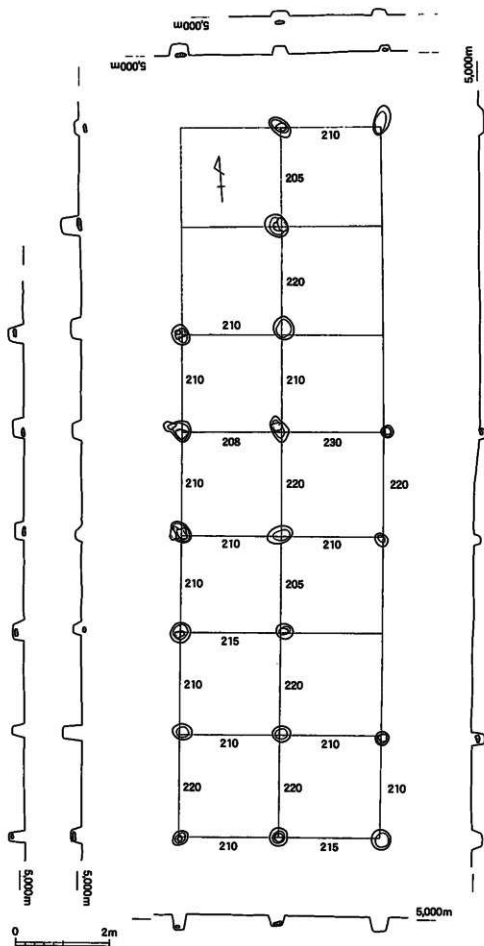
B-SB191 (第3-145図)

B-SB191はB-SD003とB-SD004の間に挟まれるような位置で見出された東西2間約4.2m、南北7間約15.0mの細長い建物と考える。部分的に礎盤が削平により失われているが、計測できる柱間は25ヶ所で、最も狭い柱間は205cmが2ヶ所で、208cmが1ヶ所、210cmが13ヶ所、215cmが2ヶ所、220cmが6ヶ所、230cmが1ヶ所である。平均すると213cmであり、ほぼ7尺の間尺で建てられていると想定することができる。建物の方位は $N-4^{\circ}-E$ で、検出された柱穴19ヶ所のうち、12ヶ所の柱穴に川原石が据えられている。

柱穴内からは、龍泉窯系青磁の小破片、備前系陶器の破片、ロクロ成形による在地系土師質器の坏、瓦質土器の小破片などが出土し、14世紀代と想定するが、南西隅の柱穴からはロクロ成形で、内側に螺旋状の段が付き、口縁部が逆「ハ」の字状に開く在地系土師質土器の坏の小破片が出土しており、15世紀末から16世紀初頭の可能性も残す。



第3-144図 B-SB190実測図

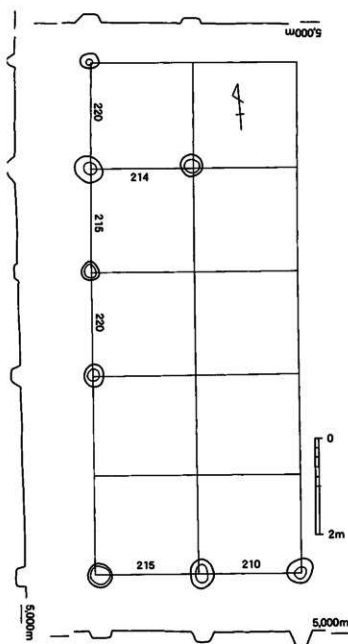


第3-145圖 B-SB191実測圖

B-SB192 (第3-146図)

B-SB192はB-SB191を東に約70cm平行移動した状態で検出された東西2間10.9m、南北5間約4.3mの規模で、南北に細長い建物である。このため、同じ方位を示すが、検出されたのは礎盤を持たない柱穴のみである。東北部の柱穴はさらにB-SD004と切り合うため、確認することが出来なかった。また、他の柱穴も深さが10cm~30cmと浅く、削平のため、失われているものも多い。この建物の柱穴は、本来18ヶ所存在するはずであるが、8ヶ所確認できたのみである。しかし、最南部で検出された柱穴の柱間は、215cm・210cmで、他の建物遺構と同じ規格である。さらに西側の柱穴列の柱間は、北から220cm、215cm、220cmで、方向も揃い、7尺単位を1間とする建物と想定できる。

柱穴内からは、ロクロ成形による在地系土師質土器の他に、備前系陶器の小片、瓦質土器などが出土しており、14世紀代の遺構と想定する。



第3-146図 B-SB192実測図

B-SB193 (第3-147図)

B-SB193は西側をB-SD003、北西部をB-SK020と切り合った南北3間、東西4間の建物と想定する。二つの遺構と重複するため、不明な部分も多い。しかし、検出された礎盤の状況を見ると、北西隅の石はB-SD003の西側の肩の部分の遺構内で検出された。また、南側から2列目の西寄りの2つの石もB-SD003の遺構内で検出されている。このように、B-SD003の遺構内に礎盤が残されることは、この建物が、清遺構より新しいことを示す。

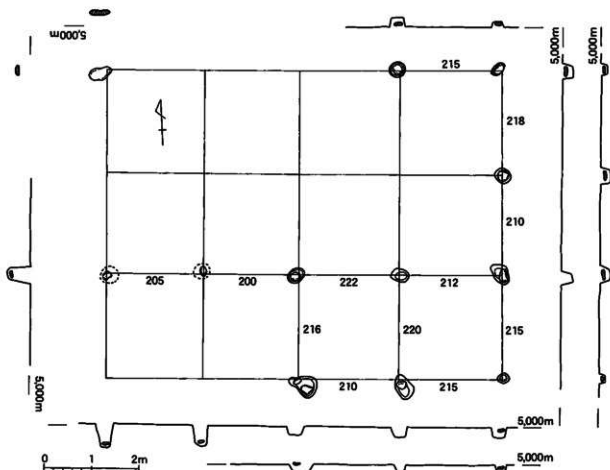
計測出来る礎盤建物の規模は、南北6.43m、東西8.36mで、柱間の平均は東西209cm、南北214cmである。全体の柱間の平均は、213cmで、7尺を1間とした建物が想定できる。また、建物の方位は、 $N-25^{\circ}-E$ である。

遺物は、各柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器の小破片が少量ずつ出土しており、B-SD003より新しいものの、14世紀代と考える。

B-SB194 (第3-148図)

B-SB194はB-SB193を南西方向に約4m移動した状態で検出された、東西方向に長い遺構である。

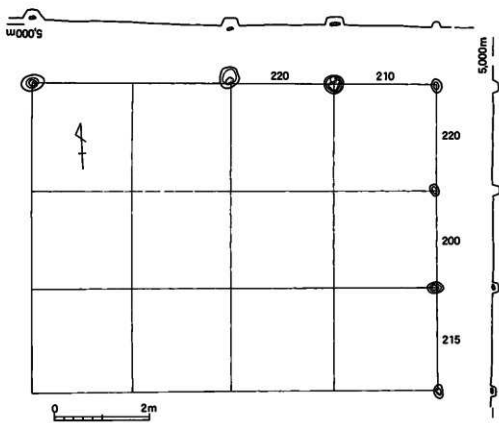
遺構の西寄りを南北にB-SD003が南北方向に掘り込まれており、その部分の柱穴は不明である。また、南西部も削平により柱穴が失われている。ただ、西北隅の柱穴が残されており、遺構の規模を知ることができた。それによると、東西4間8.44m、南北3間6.35mである。建物の方位は $N-3.5^{\circ}-E$ で、柱穴間の間尺は東側の柱六列の残りが良く、北から220cm、200cm、215cmを測る。また、



第3-147図 B-SB193実測図

北側の柱穴列も東から210cm、220cmで、平均は213cmであり、この建物も7尺を1間とした単位で建てられていると想定される。

遺構の時期は、東北隅の柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器と瓦質土器の小破片が出土しており、その西側の柱穴からは龍泉窯系青磁陶の小片が出土している。こうしたことから、この遺構は、14世紀代と考える。

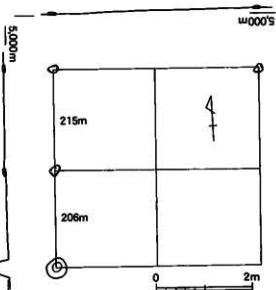


第3-148図 B-SB194実測図

B-SB195 (第3-149図)

B-SB195はB-SE006と切り合う状態で検出された建物遺構である。中心部を16世紀後葉から末葉の井戸が掘り込んでいるため、南東部の柱穴が不明である。また、柱の位置と認定した4ヶ所のうち、3ヶ所の柱穴はなく、遺構検出面で川原石が礎石状に据えられた状態で掘り出された。

建物の規模と形態は、B-SB190と類似し、2間四方である。規模は東西4.26m、南北4.21mで、柱穴間の距離を測ることが出来るのは西側の2間のみで、北から215cm、206cmである。このため、平均は210.5cmで、この建物も7尺を1間とした単位で建てられていると想定される。また、柱穴の方位はN-



第3-149図 B-SB195実測図

第2節 遺構と遺物

2° - Eである。

この遺構の時期は、礎石状に石が検出され、唯一発掘した南西隅の柱穴からは遺物が出土しなかつた。このため、遺構の時期は不明である。

B-SB196 (第3-150図)

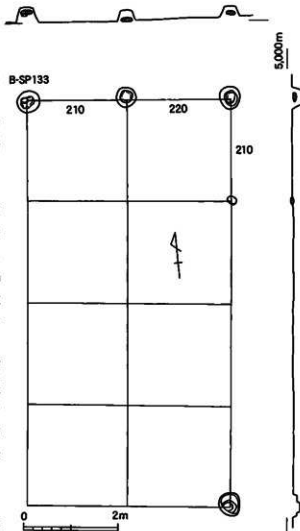
B-SB196はB-SB195の南側に隣接して検出された建物遺構である。中央部から南西部にかけては削平により、大きく抉られており、柱穴等の遺構を検出することは出来なかつた。しかし、北側の3個並んだ川原石を持つ柱穴は確実に礎盤建物を構成するものである。そこで、東側の列で、礎石状に露出して検出された石をたよりに、遺構を検討した結果、東西2間4.3m、南北4間8.42mを測る。このうち、確実な北側の柱穴間の距離は、210cm、220cmである。また、南北4間の8.42mの柱穴間は210cmであり、この建物も他と同様7尺を1単位としていると考えられる。建物の方位はN-7° - Eである。

B-SB196の時期は、北西隅の川原石が2段になった柱穴 (第3-155図) から埋納された状態で第3-156図に図示したロク口成形による在地系土師質土器の皿と坏が出土した。その遺物から判断すると、14世紀中葉から後葉と考える。

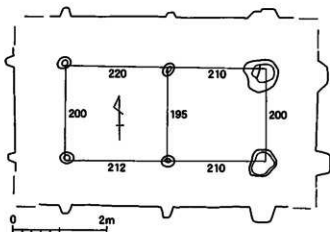
B-SB197 (第3-151図)

B-SB197は複雑に重複し合う礎盤建物群の中で、7尺1間を単位とした柱穴を探し、抽出した東西2間4.3m、南北1間2mの規模の小さい建物遺構と考える。

遺物は、全ての柱穴からロク口成形による土師質土器の小破片が出土した他、南東隅の柱穴から吉備系土師器と土師質土器、南側柱穴列の中央からは瓦質土器、南西隅の柱穴からは中国産白磁と吉備系土師器が出土している。このような遺物組成から、この遺構は14世紀代と推測する。



第3-150図 B-SB196実測図



第3-151図 B-SB197実測図

B-SB 198 (第3-152図)

B-SB 198は複雑に重複する礎盤建物の中で、建物を抽出した後、なお、柱六列が存在し、それをまとめたものである。このため、多少、柱穴間の距離にバラツキがある。特に、このB-SB 198は他と方位も異なり、N-15°-Wを示す。また、南側の4個の柱穴と北側の柱穴の間は394cmで、間があき、建物構造以外も考えられる。

遺物は南東隅の柱穴と北側柱穴列の中央から、ロクロ成形による在地系土師質土器が出土しており、14世紀代と考える。

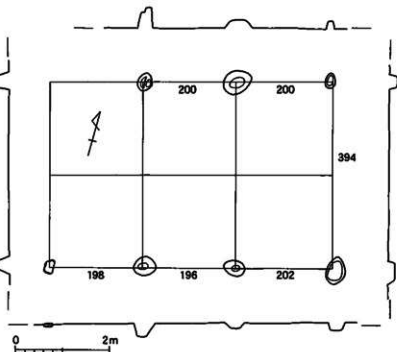
B-SB 199

(第3-153図)

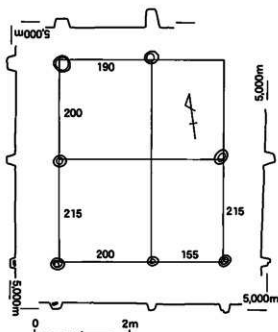
B-SB 199は調査区の南西隅に並ぶ柱穴列を組み合わせた遺構である。7個の柱穴で構成される、南側の3ヶ所と西側の3ヶ所の柱穴は直角になるが、柱穴間の距離は南北方向が北から200cm、215cmとほぼ等距離であるが、南側の列は西から200cm、155cmと不揃いである。

遺物は、西側列の

中央から古代の遺物が出土しているのみで、時期は不明である。



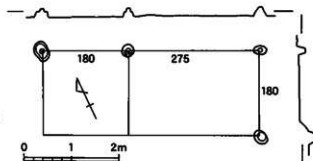
第3-152図 B-SB198実測図



第3-153図 B-SB199実測図

B-SB 200 (第3-154図) 4ヶ所の柱穴で構成され、北側の3ヶ所と南側の1ヶ所は直角になる。柱間の距離は北側が180cmと275cm、東側は180cmと微妙な間隔である。

遺物は東南隅の柱穴からロクロ成形による在地系土師質土器の一片が出土している。



第3-154図 B-SB200実測図

5. 柱穴及び柱穴状遺構

府内町跡20次調査B区からは、前項で報告した礎盤建物を構成する遺構として、柱穴が数多く検出された。また、それに類似する小竪穴も調査区の各所で検出された。ここでは、そうした遺構のうち、主要なもの、それから出土した遺物を報告する。

B-SP133 (第3-155図)

B-SP133はB-SB196の北西隅の柱穴である。遺構の規模は、上面径45cm、検出面からの深さ35cmで、遺構内下部に扁平な川原石を据え、その上にさらに1個小さい川原石を重ねている。また、その上位には第3-156図に図示したロクロ成形による在地系土師質土器の皿3点と坏1点が埋納された状態で検出された。この4点は出土位置から考えると、柱を抜き取った後に納められた、建物廃棄にかかわる祭祀行為と考えられる。

第3-156図の出土遺物の3点の皿は、口径が8.2cm、8.1cm、8.1cm、底径は6.2cm、6.8cm、6.4cm、器高は1.4cm、1.3cm、1.4cmとほぼ同じ規格であるが、断面を見ると、1は底部が外側に反り、2は内側に反る。また、3は底部の器壁が厚く、それぞれが異なる。4は図上復元であるが口径11.7cm、底径8.3cm、器高3cmである。

遺構の時期は坏の出土が少ないが14世紀後半から末葉と考える。

次に第3-157図に遺物が出土した柱穴を中心に図化し、第3-158図1~14に遺物を図示した。

B-SP032は調査区の東南隅のM-47区で検出された。遺構の規模は、上面径は40cm、深さ25cmの柱穴状の遺構で、上位から第3-158図1の土師器の坏が出土した。口径は15cmで、高台が廻る底径は7.9cm、器高5.5cmで、全面をへら磨きで器面調整している。8世紀後半の遺物である。

B-SP051も調査区の東南隅のM-47区で検出された。遺構の規模と形態は長軸方向に約80cm、短軸方向に約40cmの小規模な土坑である。深さ20cmで平坦な底面を検出し、さらに、深さ17cmと10cmのピットが確認された。遺物は上面で第3-158図2が出土した。口径は13cm、底径7.2cm、器高3.8cmで、底部は回転へら切である。

B-SP052はB-SB193の東側列柱穴の南から2番目の柱穴である。遺構の規模は南北42cm、東西37cmで、深さは23cmである。川原石は底面から上位に据えられている。出土遺物は第3-158図3~5で、3・4はロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏である。4は口径11.8cm、底径9.3cm、器高2.7cmである。5は高台が廻る底径8.6cmの古代の坏の底部である。

時期は14世紀中葉から後葉と考える。

B-SP053はB-SB197の南西隅の柱穴である。遺構の規模は上面径70cmであるが歪である。深さは17cmで浅い。出土遺物は第3-158図6で、口径12.8cm、底径7.5cm、器高3.8cmである。底部は回転へら切である。この他にも古代と思われるへら磨きの土器片が数点出土している。

時期は8世紀後半と考える。

B-SP055はB-SB197の東南隅の柱穴である。遺構の規模は南北80cm、東西54cmで、深さは35cmである。底面にはさらにピットが検出された。出土遺物は第3-158図7~9で、7は口径13.5cm、底径8cm、器高3.8cmである。底部は回転へら切で、8世紀後半と考える。8は口径10.4cm、底径3.8cmで小さい高台が廻り、器高は2.9cmの吉備系土師器である。9は鍋であろうか、内外面はへら磨きである。

時期は、吉備系土師器が出土しており、14世紀代と考える。

B-SP062はB-SB191の東側列の南から4番目の柱穴である。遺構の規模は南北54cm、東西40cmで、深さは8cmと17cmの2段掘りである。出土遺物は第3-158図10で、両面がへら磨きで、8世紀後半と考える。しかし、ロクロ成形による在地系土師質土器の皿の完形品や坏の破片が出土していることから、時期は14世紀代と考える。

B-SP067はB-SB194の北側列の東から2番目の柱穴である。遺構の規模は上面径38cmで、深さは20cmである。内部には上面が平らな川原石が据えられており、さらに固定するためか、拳大の礫が詰められている。遺構内からは龍泉窯系青磁の小破片が出土している。

B-SP081はL-46区で検出された遺構で、規模は上面径約60cmで、深さは30cmである。出土遺物は第3-158図11・12で、11は口径13.3cm、底径7.6cm、器高3.6cmで、底部は回転ヘラ切である。12は口径13.6cmで、8世紀後半と考える。

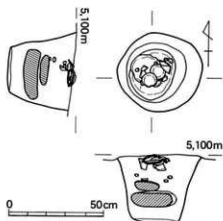
B-SP084はL-46区で検出された遺構で、規模は南北54cm、東西46cmで、深さは14cmである。出土遺物は第3-158図13で、底径6.6cm、底部は回転ヘラ切である。8世紀後半と考える。

B-SP101はL-46区で検出された遺構で、規模は南北47cm、東西44cmで、深さは15cmと24cmの二段掘りになっている。

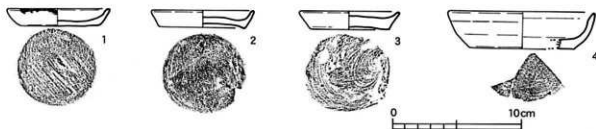
B-SP127はL-47区で検出された遺構で、規模は南北24cm、東西25cmで、深さは20cmである。遺構内からは、中国産白磁、ロクロ成形による在土系土師質土器、東播系須恵質土器、須恵質土器などの小破片が礫と共に出土している。時期は14世紀代と考える。

B-SP162はK-43区で検出された遺構で、規模は南北41cm、東西34cmで、深さは24cmである。遺構内からは遺物の出土はなかった。

B-SP185はK-42区で検出された遺構で、規模は南北70cm、東西38cmで、深さは14cmであるが、南側に南北22cm、東西30cm、深さは18cmのピットが掘り込まれている。遺構内からは第3-158図14で口径11.8cm、器高2.3cmの京都系土師器が出土している。

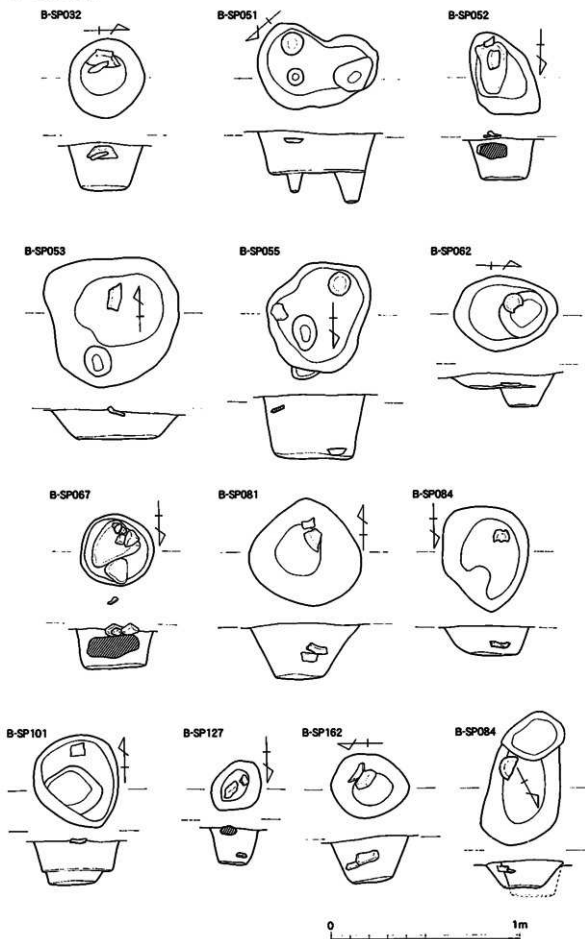


第3-155図 B-SP133実測図



第3-156図 B-SP133出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物



第3-157图 府内町跡20次調査B区主要柱穴出土実測図

6. 各土坑・柱穴出土遺物

府内町跡20次調査B区からは大小さまざまな遺構が検出され、前項まで、遺構とそこから出土した遺物を報告した。この項では、各遺構から出土した主要な遺物を第3-159図に図示し報告する。

土鍾

B-SP027からは1の紡錘形の土鍾が出土している。一部を欠くが長さ2.8cm、最大径1.3cm、重さ4.1gである。

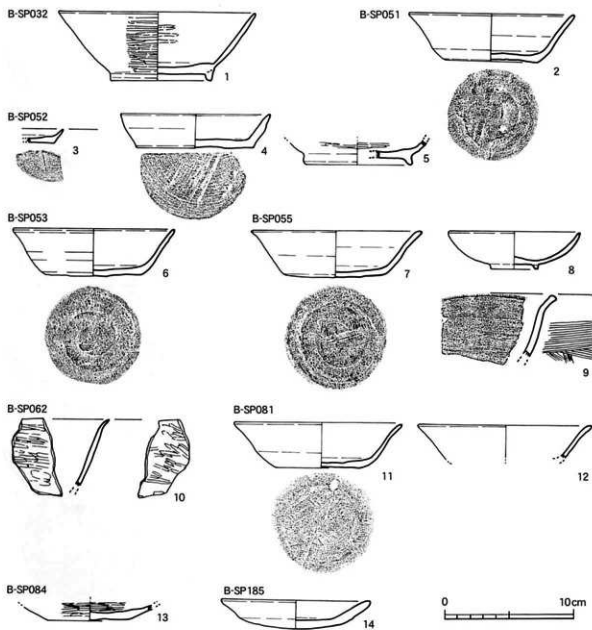
B-SP065からは2のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.1cm、底径8.5cm、器高2.7cmで口縁部は薄く尖るように仕上げている。

B-SP070からは3の口径11.6cm、底径8.7cm、器高3cmのロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口縁部は底部近くには器壁を厚くし、口縁端部に向け、ハの字状に開く。

土鍾

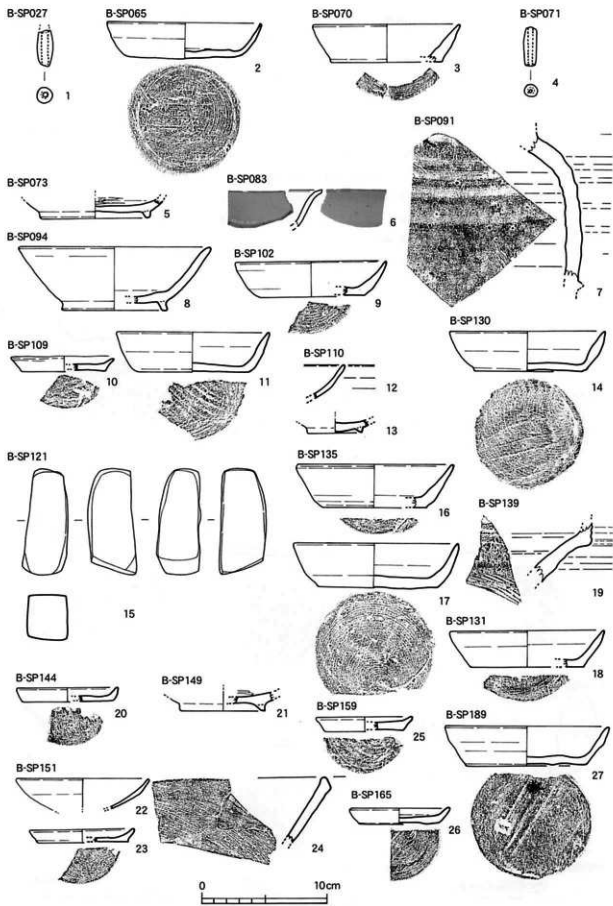
B-SP071からは長さ3.1cm、最大径1cm、重さ3gの紡錘形の土鍾が出土している。

B-SP073はB-SB191を構成する柱穴であるが5の高台が付き、底径8.8cmの8世紀後半の坏が出土している。器面は横方向のヘラ磨きである。



第3-158図 府内町跡20次調査B区主要柱穴出土遺物実測図

第2節 遺構と遺物



第3-159図 府内町跡20次調査B区各柱穴出土遺物実測図

- 白磁 B-SP083はB-SB197の南西隅の柱穴である。出土した6は中国産白磁で、口禿である。
- 備前系 B-SP091からは7の備前系陶器が出土している。器形は胴部に廻る糸帯付近まで破片が残り、水屋甕と考えられる。
- 水屋甕 B-SP094からは8の高台付き坏が出土している。法量は、口径15.2cm、底径8.3cm、器高5.1cmで8世紀後半の土師器と考える。
- B-SPI02からは9のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は、口径12cm、底径8.4cm、器高2.8cmで底部周辺の器壁が厚く、14世紀後葉と考える。
- B-SPI09からは10・11のロクロ成形による在地系土師質土器の皿と坏が出土している。法量は、10が口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.2cmで、11は径12.2cm、底径9cm、器高3.2cmで口縁部中位の器壁が厚く、14世紀中葉と考える。
- 吉備系土師器 B-SPI10からは12・13の吉備系土師器が出土し、13の低い高台が廻る底部の径は4.4cmである。
- 砥石 B-SPI21からは15の砥石が出土している。長さは8.5cm、幅は最大3.6cmで、全面使用されている。
- B-SPI30からは14のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.3cm、底径8.6cm、器高3.2cmで口縁部の器壁は中位が厚く、断面が紡錘形になる。
- B-SPI31からは18のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は口径12.3cm、底径9cm、器高3cmで口縁部の器壁は中位から下位が厚くなる。
- B-SPI35からは16・17のロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。法量は、16が口径12.6cm、底径8.3cm、器高3.4cmで、17は口径13.2cm、底径9.5cm、器高2.6cmで2点とも口縁部下位の器壁が厚く、14世紀後葉と考える。
- 備前系 B-SPI39からは19の備前系陶器の挿鉢が出土している。斜め摺り目で16世紀末葉である。
- B-SPI44からは20の口径8cm、底径6.9cm、器高1.1cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- 吉備系土師器 B-SPI49からは21の高台が付き底径6.8cmの古代の坏が出土している。
- B-SPI51からは22～23が出土しており、22は口径10.4cmの吉備系土師器である。23は口径8.3cm、底径7.2cm、器高1cmの在地系土師質土器の皿で、24は内面刷毛目の瓦質土器の鉢である。
- B-SPI59からは25の口径7.8cm、底径6.1cm、器高1.2cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- B-SPI65からも25の口径8cm、底径6.4cm、器高1.3cmの在地系土師質土器の皿が出土している。
- B-SPI89からは27の口径13cm、底径9.4cm、器高3.1cmロクロ成形による在地系土師質土器の坏が出土している。口縁部の器壁は中位が厚い。
- 第3-160図は、各遺構から出土した銅銭である。
- B-SF042からは28の真書体で書かれた銅銭である「嘉祐通寶」が出土している。初铸年は1056年(北宋)である。
- B-SK090から出土した29の銅銭は行書体で書かれた「元・通・寶」が読めるが、銭貨名は不明である。



第3-160図 府内町跡20次調査B区土坑・柱穴出土銅銭実測図

7. 整地土及び包含層

府内町跡第20次調査B区の調査では、遺構を検出するまで整地層や遺物包含層が形成されており、どの遺構に属するか不明な遺物が多く出土した。ここでは、それらを図化し、第3-161図～第3-170図に報告する。

第3-161図1～13は貿易陶磁器及び瀬戸美濃系陶器である。1は口径12.3cm、底径4.8cm、器高5.1cmの漳州窯系青花碗である。2・3は龍泉窯系青花碗で外面に鋤蓮弁が施文されている。4は黒褐色の釉がかかり、底部は露胎である。焼成の悪い青磁の可能性が高い。5は口径5cmの中国産白磁の小杯である。

越州窯系 6は底径5.4cmの越州窯系陶磁器の底部である。7～10は白泥釉を塗ったタイ産四耳壺の破片である。11～13は瀬戸美濃系陶器で、11は口径11.6cmの天目茶碗である。12は口径10.5cm、底径5.9cm、器高は2.5cmの皿であるが、口縁部は刻目が加えられ輪花状になる。13はヘラ描きされた上に緑色の釉がかかる梅瓶の胴部と思われる。

常滑系 第3-161図14は常滑系陶器の壺と考える。口縁部が肥厚している。

備前系 第3-161図15～23と第3-162図24～31は備前系陶器である。15は口縁部が内湾する鉢である。

16は口径6.6cmの小型の壺である。17は口径13.4cmの口縁部が直立する広口の壺と考える。18は注口部である。19は底径6.2cmの徳利の底部と思われる。火傷が見られる。20・21は壺の底部と思われる。底径は20が9cm、21が10.2cmである。22・23は口縁部が内側に突き出る皿である。第3-162図24は口径39.4cmで、口縁部が玉縁状に肥厚する壺である。25～31は楕鉢である。25は口径31.6cmで、器壁は胴部から口唇部まで、同じ厚さである。26は口径27.2cm、底径13.2cm、器高12.4cmの楕鉢で、口縁部の形態は、先端部が肥厚する。27～31は同じタイプの楕鉢と考える。いずれも口縁部が立ち上がり縁帯を形成し、凹線が廻る。また、口唇部に接する内面に凹線状の窪みが廻る。掘目は明確でないが、斜め掘り目である。口径が復元できる31は35.8cmである。

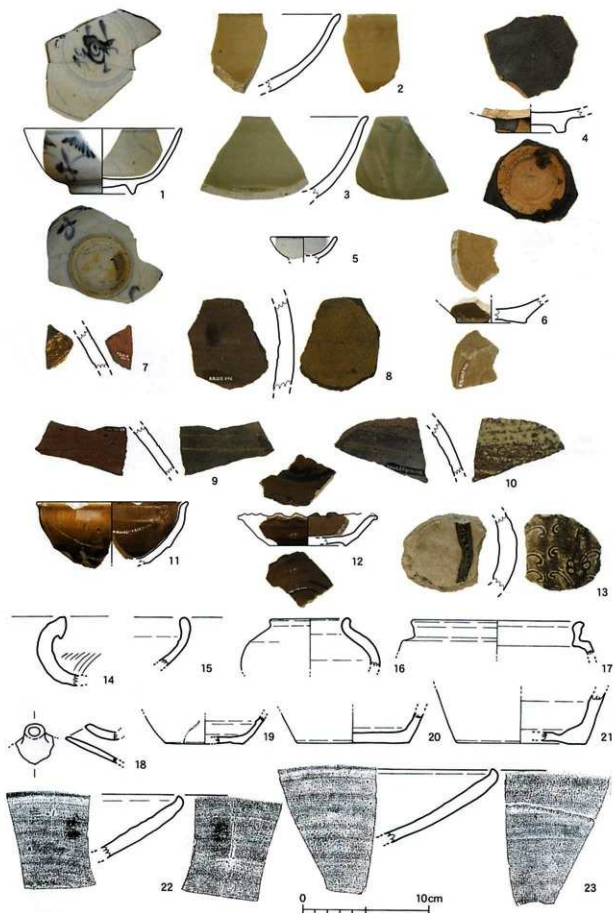
第3-162図32～41・第3-163図24～56はロクロ成形による在地系土師質土器である。32～41は皿である。口径は8.6cmから7.2cmで、平均は7.7cmである。底径は7cmから5.4cmまであり、平均は6.4cmである。器高は40が高く1.5cmであるが、他は1cm前後で、平均すると1.1cmである。42は口径が7.8cm、底径6cm、器高2cmで、小型の杯である。第3-163図43～56は杯である。口径は12.8cmから10cmまであり、底径は6.4cmから9.6cmまでである。また器高も2.1cmから3.7cmまでである。このように、大きさに差があり、口縁部の形態も、器壁が中位から上位にかけて厚くなる43～45・49・50・54や底部に近い下位が厚くなる48・51・53・55などがあり、時期幅の大きさを感ずる。

吉備系土師器 第3-163図57と58は吉備系土師器である。57は口径11.2cm、低い至不高台の径は約4.3cm、器高は3.2cmである。また、58の高台の付く底部の径は4.5cmである。

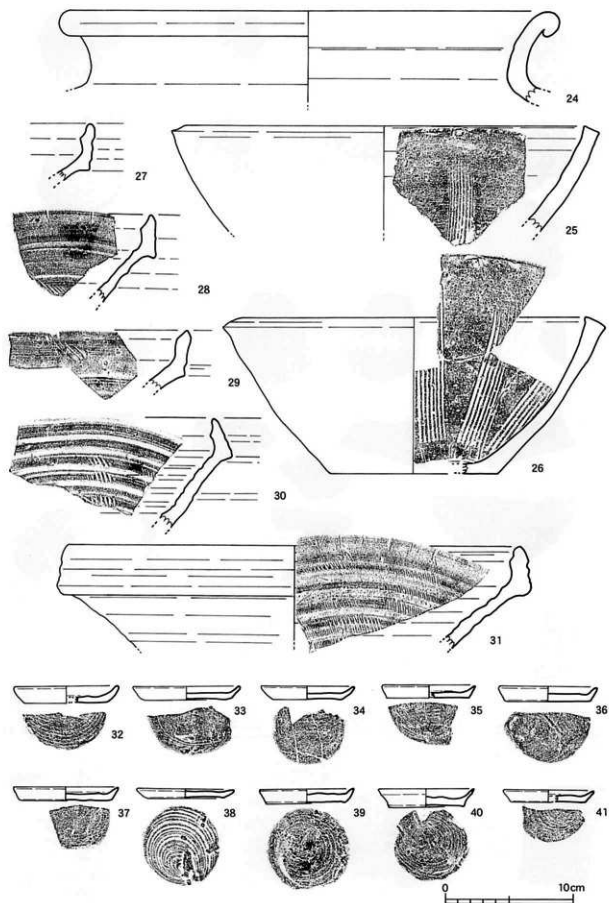
第3-163図59～74は京都系土師器である。京都系土師器は法量分化しており、59～62は口径が8.4cm～9.2cmで、最小のグループである。次に小さいグループが66の口径10.8cmである。そして、口径12cm～12.8cmの65・66・68・69・71～73グループがあり、4つめのグループが74の口径14cmである。また、「府内」出土の京都系土師器には、こうした皿形の器形と異なり、64・67・70は器高が2.5cm以上あり、杯形をするものもある。66・71の口縁部周辺にはスガが付着し、灯明皿として再利用されている。

灯明皿

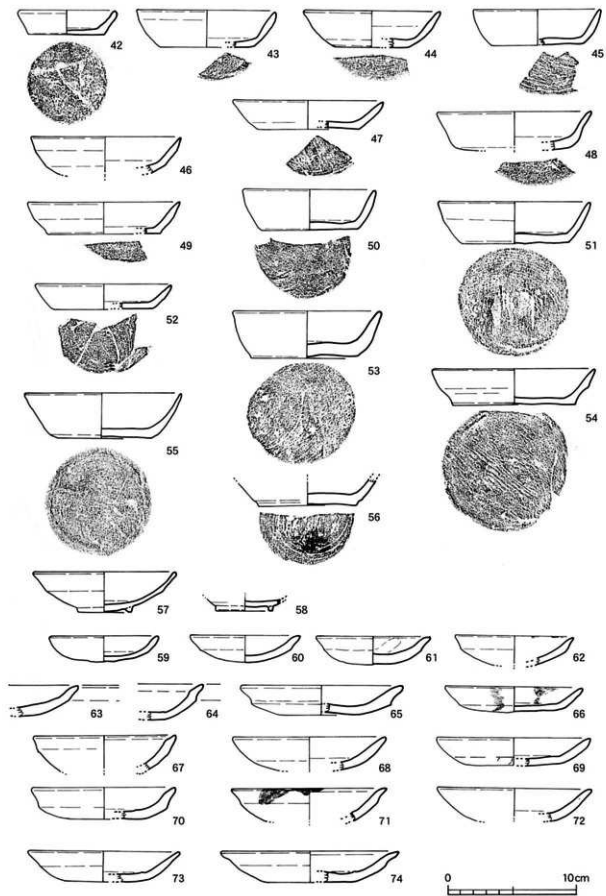
第3-164図の75～79・81は口縁部が屈曲する土鍋である。サイズは多様であり、75は口径21.4cmである。76は口径24.6cmで、口縁部を外側に折り返して口縁部を形成している。77も同様で口縁部を折り返している。78は口径29.4cmで口縁部短く屈曲する。79は口径32.8cmで屈曲する口縁部が肥厚する。81は口径34.8cmで口縁部が直角に屈曲する。土鍋の器面調整は、内面が横方向の刷毛目で、外面は79・81に刷毛目も残るが、横撫でや指圧痕が残る。



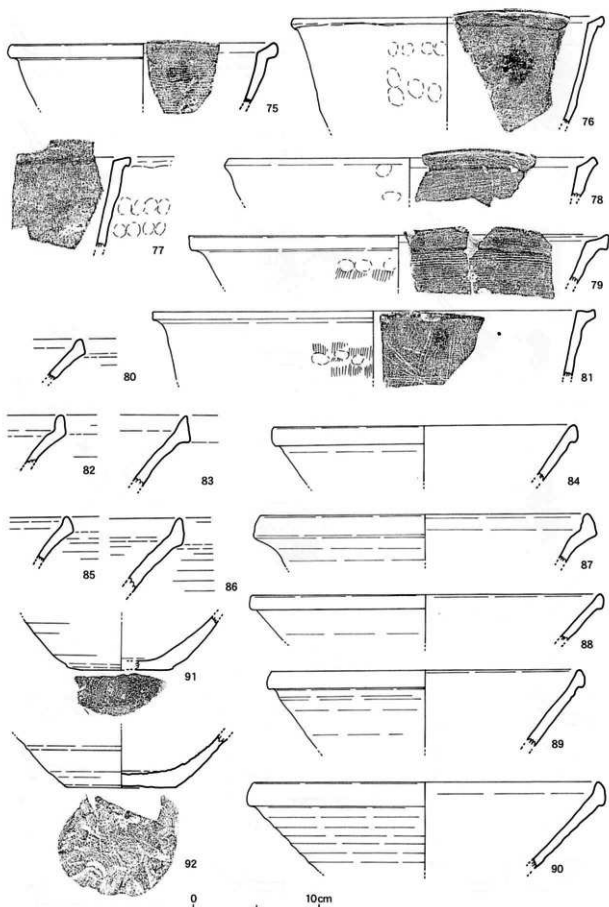
第3-161图 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(1)



第3-162図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(2)



第3-163図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(3)



第3-164図 府内町跡20次調査B区出土物実測図(4)

東播系 第3-164図の80・82～92は東播系須恵質土器の鉢である。直線的に外傾し、口縁端部の外側に肥厚する特徴を持つが、その形態はさまざまである。80や83、口径24cmの84、口径27.8cmの88、口径24.6の89は単純に口縁外端部が肥厚し、断面が三角形になる。82や86、口径26cmの87、口径27.6cmの90などは口縁端部が屈曲し直立するように肥厚する。このため、内側に屈曲線が入る。底径8.3cmの91と底径9cmの糸切り底の底部の資料は東播系須恵質土器のものである。

亀山系 第3-165図93～97は亀山系須恵質土器の甕である。器面は口縁部が横溝で調整されるが、93の外側には刷毛目が残る。また、胴部の外面は格子目の叩き、内面は93が刷毛目、96には指圧痕が残り、97は撫でで仕上げられている。93の口径は33.2cmである。

第3-165図98～102は瓦質土器である。98は口径31.4cm、底径18cm、器高10.4cmの鉢である。口縁部はやや内湾気味になり、器面は内外面とも丁寧な撫で仕上げである。99は口径36.6cm、底径23cm、器高10.3cmで、口縁部は外反気味になる。器面調整は内外面とも丁寧な撫でであるが、外面下位には指圧痕が残る。100・101は同じ器形の甕である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は内外に肥厚する。器面調整は外面がヘラ撫でであるが、100の胴部内面は刷毛目である。口径は100が36.8cm、101が34.4cmである。102は底径21.4cmの底部である。

滑石質石罏 第3-166図103～112は滑石質石罏の破片である。106は口縁部外面に付く鈎の部分である。110～112は底部の破片である。器面は縦方向に短い単位で、金属製工具により削りを入れ、形を整えている。しかし、図示した資料は破片の割れ口を研磨し再加工している。大きさは109が最大で190.3gであるが、110は20gしかない。

第3-166図113～115は燗台と考える遺物である。113はクロク成形による在地系土質土器に脚を付けたもので、底径は6cmである。上面の皿部には焼成前の穿孔がある。114は高さ約3cmの円柱の上面を皿状に仕上げ、中心部に底面まで貫く、焼成前の穿孔がある。底径は5.8cmである。115も径6.8cm、高さ6.6cmの円柱の上面を皿状にし、中央部に深さ4.2cmの焼成前の穴が開けられている。燗台としては、この中央部の穴に蠟燭を支える棒を立てたと推測する。

燗台 第3-166図116～121は土器片の周辺を敲打・研磨し円形に仕上げた土製品である。116は一部を欠くが直径2.9cm、重さ10.8gである。117は直径2.7cm、重さは9.3g、118は直径3.5cm、重さ12.2gである。119は直径3.1cm、重さは10.1g、120は直径2.1cm、重さ5gである。121は直径3.7cm、重さは14.5gである。

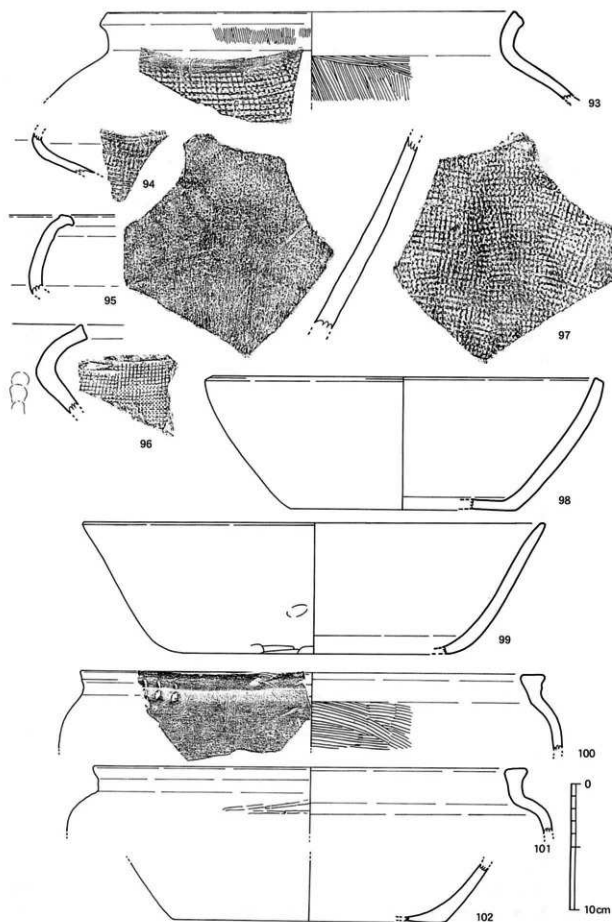
土鍾 第3-166図122～125は土鍾である。122は一部を欠くが長さ3.4cm、最大径0.8cm、重さ2.5gである。123は一部をわずかに欠くが長さ5.1cm、最大径1.4cm、重さ9.3gである。124は長さ4.1cm、最大径2.3cm、重さ18.1gである。125は一部を欠くが長さ5.2cm、最大径2.7cm、重さ34.4gである。いずれも紡錘形をし、長さ6cm前後を想定するが、重量に差がある。長さに制約があり、重量を増すためには径を大きくしたものと考える。

ガラス製の玉 第3-166図126・127は緑色をしたガラス製の玉である。2点とも半分欠けており、126は直径0.9cmで、重さ0.7g、128も直径0.9cmで、重さ0.8gである。

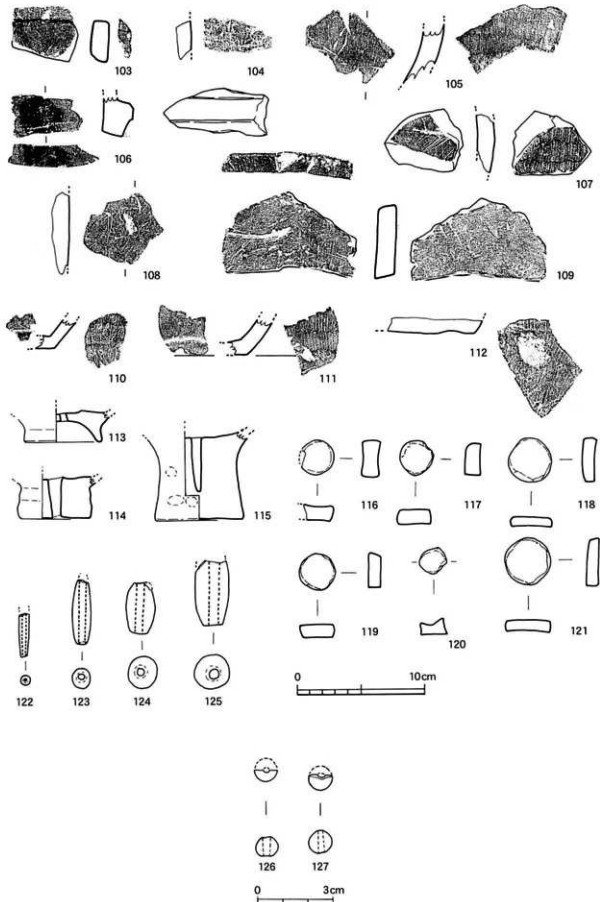
第3-167図128～149は古代の土器である。128は口径16.6cm、器高1.5cmの杯蓋である。129は口径17cm、器高2.8cmの皿と考える。130～135は杯である。130は口径13.8cm、底径6.5cm、器高3.6cmで口縁端部が外反する。131は口径12.8cm、底径は不明であるが、器高3.1cmである。132は口径13cm、丸底気味の底部は底径7cm、器高3.1cmである。133は口径13.4cmで、134は口径13.4cm、底径7.6cm、器高4.2cmである。135は口径15cm、底部は丸底気味で、器高3.7cmである。

136～140は高台付の杯である。137は口径12.8cm、底径7.4cm、器高3.3cmであるが、瓦質に近く中世の遺物の可能性がある。底径は136が7.8cm、138は9.6cm、139が11.5cm、140は8.2cmである。以上の蓋や杯の器面は回転を利用したヘラ磨きで仕上げられている。

第2節 遺構と遺物

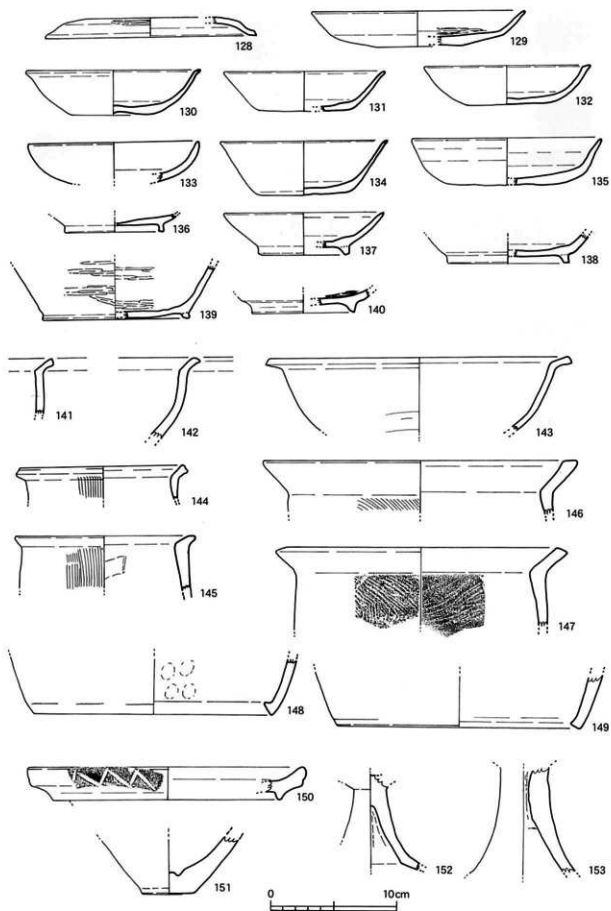


第3-165図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(5)



第3-166図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(6)

第2節 遺構と遺物



第3-167図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(7)

141～147は甕である。142・143は口径に比べ器高が低い鉢状を呈する。143の口径は24.2cmである。144～147は胴部が張らず口縁部が外反する甕である。器面調整は口縁部と胴部内面が横方向の撫であるが、胴部外面は縦方向の刷毛目である。口径は144が13.4cm、145は14.2cm、146が24.8cm、147は21.4cmである。

148～149は甕の底部と考える。底径は2点とも18cmで、器面調整は撫で、148には指圧痕が残る。第3-167図150～153は弥生土器である。150は外面に鋸歯文のある口径22cmの壺形土器の口縁部である。151は底部である。152と153は高坏の脚部である。これらの4点は弥生時代後期前半と考える。

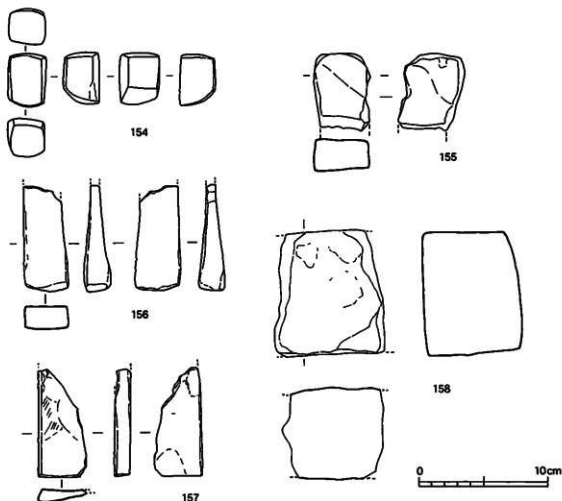
弥生土器

砥石

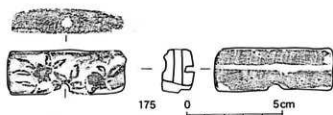
第3-168図154～158は砥石である。154は長さ4cm、幅2.5cm、厚さ2.6cm、重さ53.6gで、全面磨り面の砥石である。155は一部を欠くが、長さ5.9cm、幅4.2cm、厚さ2.9cm、重さ106.4gである。156は使用のため中央部が薄くなり、その部分が折れている。残された大きさは長さ8.3cm、幅3.4cm、厚さ0.7～2cm、重さ69.2gである。157は大部分を欠く。長さ8.7cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm、重さ45.4gである。158も一部の破片である。長さ9.3cm、幅3.7cm、厚さ7.6cm、重さ509.6gである。

銅銭

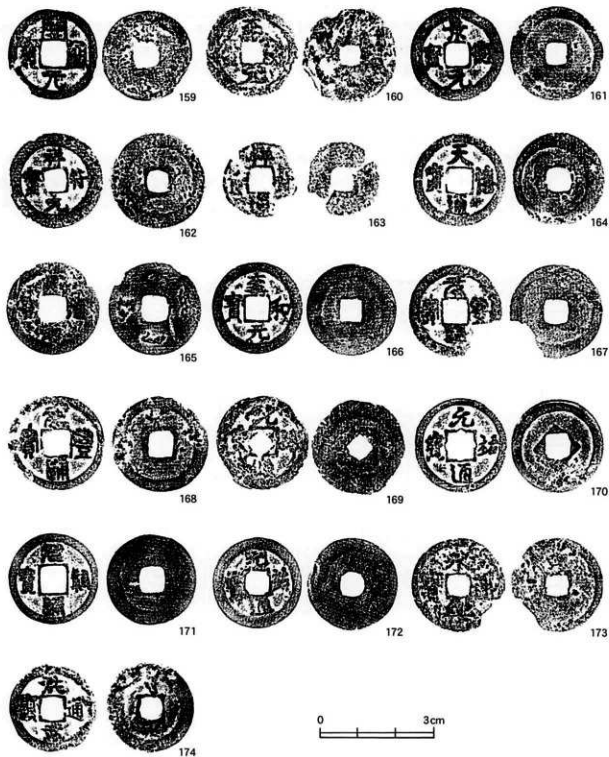
第3-169図159～174は銅銭である。159は「開元通寶」で初鑄年は621年(唐)である。169の「元祐通寶」と貼り付き出土した。160は真書体の「至道元寶」と考えられる。初鑄年は995年(北宋)である。161は「景德元寶」で、初鑄年は1004年(北宋)である。162・163は「祥符元寶」で、初鑄年は1009年(北宋)である。163は周囲を打ち欠いている。164は真書体の「天禧元寶」で初鑄年は1017年(北宋)である。165は真書体の「皇・通」が読め、「皇宋通寶」と考える。初鑄年は1038年(北宋)である。166は真書体の「至和元寶」で初鑄年は1054年(北宋)である。167・168は篆書体



第3-168図 府内町跡20次調査B区出土遺物実測図(8)



第3-170図 府内町跡20次調査B区出土石製品



第3-169図 府内町跡20次調査B区出土銅銭実測図

の「元豊通寶」で初鑄年は1078年（北宋）である。169・170・172は行書体の「元祐通寶」で、初鑄年は1086年（北宋）で星形孔である。169は159と貼り付き出土した。171の「元祐通寶」は篆書体である。173は「永樂通寶」で初鑄年は1408年（明）である。174は「洪武通寶」で初鑄年は1368年（明）である。

花文のスタンプ 第3-170図175は滑石製のスタンプと考える。花文と思われる文様が陽刻されている。長さ6.2cm、幅2.4cm、厚さ1.5cmで、裏面には溝、上面から下面にかけて穿孔など加工されている。

第3節 小 結

府内町跡20次調査B区はA区と同様に、櫻々万寿寺跡の西北隅にあたる。検出された遺構は、B-SD003やB-SD064 (A-SD1506) のように前章の府内町跡20次調査A区と連続する溝もあり、発掘調査で明らかになった内容も大きく変わることはない。検出された遺構は大きく14世紀中葉から15世紀初頭のグループと16世紀後葉から末葉のグループに分かれ、その間の遺構や遺物は希薄である。

14世紀中葉から15世紀初頭のグループの主要遺構はB-SD003・B-SD004のほぼ平行する区画性の強い南北方向の溝、井戸であるB-SE009とB-SE017、L-46区を中心に検出された礎礎を繰り返された礎礎建物遺構がある。これらの遺構は調査区の東寄りを中心に分布し、特に区画性の強いB-SD003の西側に大きな遺構はない。

礎礎建物

このB-SD003はN-2°-Eの方向性を持ち、14世紀中葉から後葉の遺物を出土することから、溝の機能はそれ以前から果たしていたと推測できる。そうすると、溝の掘削時期は1306年(徳治元年)の万寿寺創建期に近く、北端部のA区と接する部分で東に屈曲することは、当時の寺の西側境や範囲を示し、伽藍配置の方向をも意味する可能性がある。また、検出された井戸であるB-SE009とB-SE017はこの溝の東側にあり、万寿寺境内の井戸の可能性を持つ。

さらに、礎礎建物の方位も、A区で検出されたA-SB01が第1南北街路と同じN-9°-Eであるのに対し、B区ではB-SB190を除き、北から2°~4°東に振る方位で、B-SD003の溝の方位に近く、14世紀中葉以前の万寿寺創建時の一端を暗示している。

16世紀後葉から末葉のグループは、府内町跡20次調査A区と同様、調査区の西寄りを中心に遺構が分布する。検出された主要な遺構は、調査区を南北に貫きA区のA-SD1506につながる溝であるB-SD064、井戸であるB-SE006・B-SE010・B-SE056、そして、B-SK020を最大規模とするさまざまな規模の廃棄土坑である。

「西之屋敷」

16世紀後葉から末葉のこの地域は、第2章で述べたA区と同じ、「萬寿寺築地之内西之屋敷」と称された地域に関連すると考える。すなわち、検出された井戸は、A区の南端で検出された井戸を含めると、約30m—約15m—約18mの間隔で、南北に並ぶように配置されており、町屋の裏手に、数軒単位でひとつの井戸を共有するような景観が想定できる。

島津氏の侵攻

ところが、この地域を含め「府内」は1588年(天正14)、島津氏の侵攻により、焼失する。その時の生じたと想定される焼土や瓦礫を埋め立て処理した土坑が調査区の各所で検出される。その最大のもので、B-SK020であり、遺構内から焼土や被熱した礫が多量に出土した。こうして、「府内」は再興され、17世紀初頭まで存続する。その復興後の遺構も確認されている。B-SK016・B-SK096からは16世紀末葉の遺物が出土しており、最終段階の遺構といえる。その他、同じ16世紀後葉から末葉の遺構でも切り合いが認められ、島津氏侵攻以後の遺構も含まれる。

なお、調査区の南東隅のK・L-47区からは、8世紀後半から9世紀前半の遺物がまとまって出土した。特にB-SP032やB-SP047のような小土坑からは埋納された状態で遺物が検出され、この周辺に活動の中心のひとつがあることが判明した。この場所から約200m東北に離れた府内町跡7次調査¹⁾で、掘立柱建物群が検出されており、それと合わせて、「府内」成立する以前のこの地域の状況をつかむ手がかりを得た。

1)大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内3」(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第8集 2008年)

第4章 中世大友府内町跡第20次調査C区

第1節 調査の経過と概要

中世大友府内町跡第20次調査C区南調査区は大分県大分市元町に所在し、標高約4.5mの沖積低地上に立地する。一般国道10号古国府拡幅事業に伴い大分県教育委員会が2002年12月から2003年3月までかけて本調査を実施した。北側には第21次調査区、南側には第20次調査A・B区が位置する。調査対象面積は約350㎡である。

当該調査区は、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」では、万寿寺北側の境及び堀之口町に相当する地点である。現在当該調査区の東側は田畑になっているが、万寿寺の北側の境推定地部分だけが、今なお少し低くなっている。そこで当初から、当該調査区では万寿寺の北側を画する東西方向の溝が検出されるのではないかと推測がされていた。さらに、当該調査区の北側には第21次調査区が隣接して位置しているが、当調査では御内町の町屋は検出されたものの、東西方向の道路及び堀之口町の状況は把握できなかった。そこで当該調査区でそれらが明確にされるのではないかとされていた。

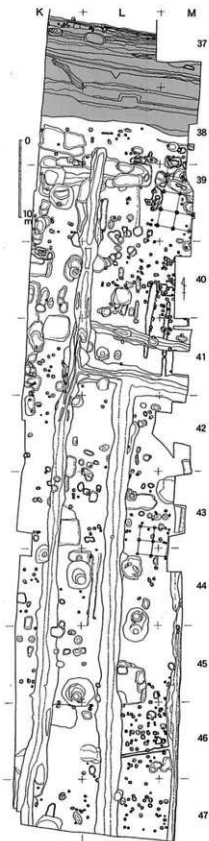
実際、調査によって東西方向の溝が検出されたが、検出された溝は1条ではなく、数条が時期を違えて存在していた。したがって、当該調査区一帯は、ある期間区画としての空間をもっていたことが判明した。また、道路も検出されたが、残存状況がよくなく明確な規模や方向を特定できるほどではなかった。ただ、検出された道路は、前述の溝がすべて埋まった後のことであり、府内古図に描かれた万寿寺の描写に、堀が描かれていないことに相応する結果が得られた。

なお、一般国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査では、事業対象地区を国土座標に乗せた10m方眼で区画しており、それぞれの区画を西から東へA～Z、北から南へ1～30の番号を付し、アルファベットと数字の組み合わせで、各々の区画を呼称することになっている(例えばK-37区、M-38区など。)本章で報告する第20次調査C区については、東西K～M区、南北36～38区の位置に相当する。(第4-1・第4-2図参照)

万寿寺
堀之口町

御内町

府内古図

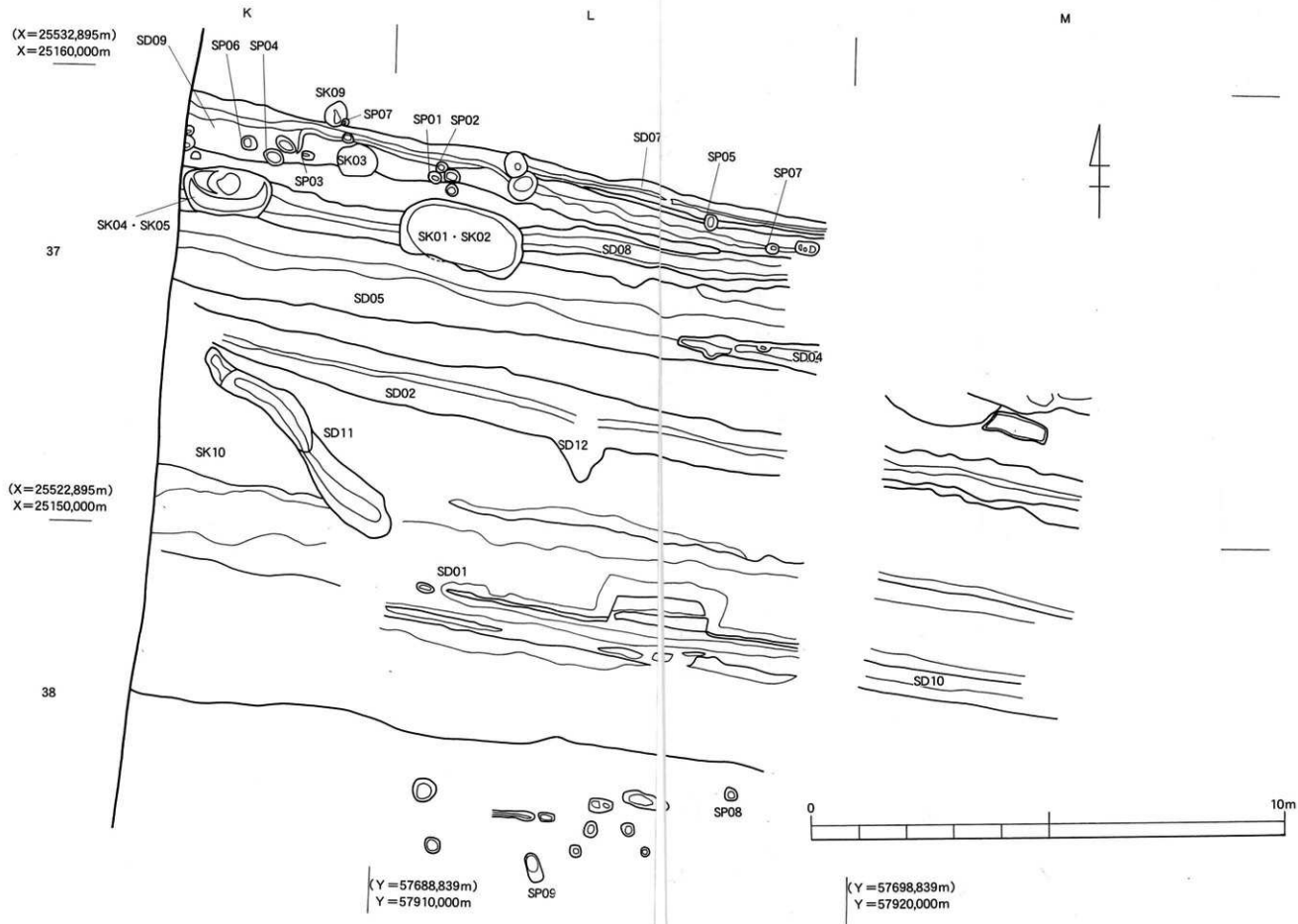


第4-1図 第20次調査C区遺構位置図(1/500)

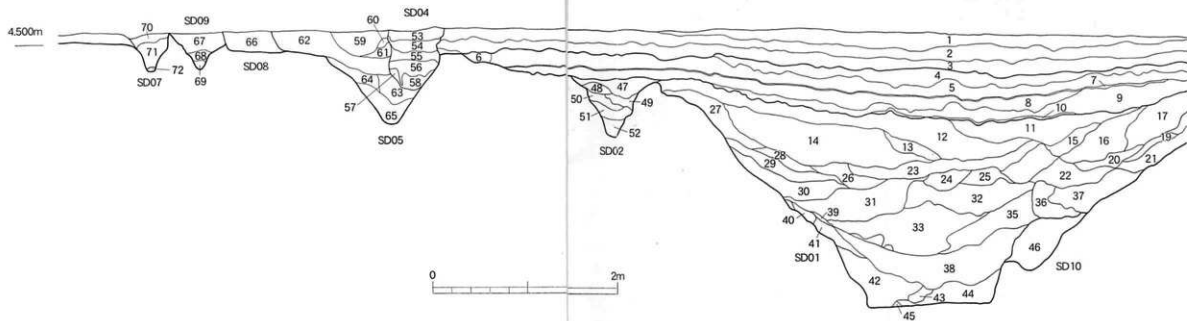
第1節 調査の経過と概要

表4-1表 第20次調査区 遺構一覧表

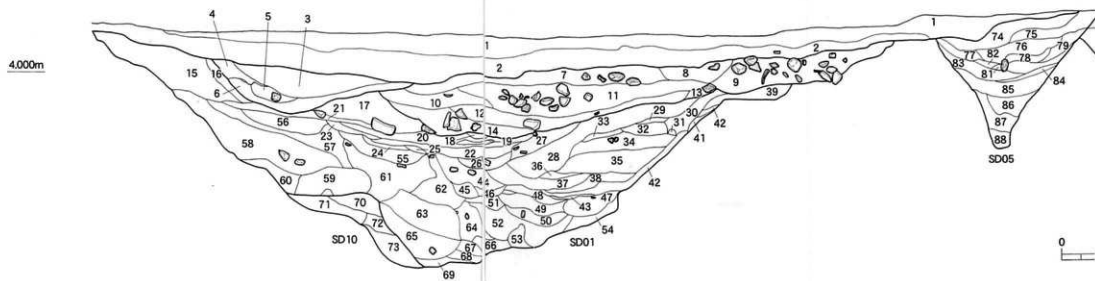
本報告での遺構番号	調査時の遺構番号	遺構の形状	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
C-SD01	SD01	溝	K37・38区・L37・38区・M37・38区	10世紀後半	景徳鎮窯系青花・漳州窯系青花・龍泉窯系青磁・景徳鎮窯系白磁・燕南三彩・磁州窯小皿・羯輪陶器・瀬戸美濃系陶器・軟質施釉陶器・備前系陶器・京都市土師器(3期)・在地系土師器(京都市土師器胎土)・瓦質土器・土鉢・円盤状土製品・硯・磁石・ガラス玉・高埴製小網・猿形木製品・漆器桶・舟形木製品・燭台(芯付)・柱杖・糸巻・箸・下駄・銅銭	259
C-SD02	SD02	溝	K37区・L37区・M37区	10世紀後半～末葉	景徳鎮窯系青花・瀬戸美濃系陶器・備前系陶器・京都市土師器(3期)・瓦質土器・磁石・青銅製管・銅銭	297
C-SD04	SD04	溝	L37区	10世紀後半～末葉	備前系陶器・丹波系陶器・在地系土師器・瓦質土器	288
C-SD05	SD05	溝	K37区・L37区	15世紀代		
C-SD05	SD06	溝	K37区・L37区	15世紀代	龍泉窯系青磁・備前系陶器・在地系土師器(口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す)	289
C-SD07	SD07	溝	L37区	14世紀前半～15世紀前半	SD08に切られる	300
C-SD08	SD08	溝	K37区・L37区	14世紀前半～15世紀前半	SD09を切る	300
C-SD09	SD09	溝	K37区・L37区	14世紀前半～15世紀前半	SD08に切られ、SD07を切る	300
C-SD10	SD10	溝	K38区・L38区・M38区	16世紀前半	龍泉窯系青磁・備前系陶器・京都市土師器(1期)・在地系土師器(口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す)・耳皿・瓦質土器(火鉢・焙烙)・銅銭	291
C-SD11	SD11	溝	K37区	10世紀後半～末葉	備前系陶器・京都市土師器(3期)・瓦質土器(火鉢)・円盤状土製品・円盤状土製品・銅銭	301
C-SD12	SD12	溝	L37区	10世紀後半～末葉	備前系陶器細鉢(近世1期)	297
C-SK01	SK01	土坑	L37区	10世紀後半～末葉		
C-SK01	SK02	土坑	L37区	10世紀後半～末葉	鹿島土坑: 景徳鎮窯系青花・京都市土師器(2～3期)・在地系土師器(口縁部が直線的に外に開き内外面にロクロ目を顕著に残す)・焼塩岩の蓋	303
C-SK05	SK04	土坑	K37区	10世紀後半～末葉	鹿島土坑: 朝鮮王朝産舟徳利	304
C-SK05	SK05	土坑	K37区	10世紀後半～末葉	瓦質土器(明壺)	304
C-SK06	SK06	土坑	L37区	不明	SD09を切る	305
C-SK06	SK08	土坑	K38区	16世紀後半～末葉	景徳鎮窯系白磁・羯輪陶器・京都市土師器(3期)	305
C-SK010	SK10	土坑	K37区・K38区	10世紀後半～末葉	景徳鎮窯系青花・漳州窯系青花・朝鮮王朝産白磁・磁州窯・瀬戸美濃系陶器・備前系陶器(把手付水注・二重壺)・京都市土師器(3期)・瓦質土器・石臼	307
C-SK010	SK11	土坑	K37区・K38区	10世紀後半～末葉		



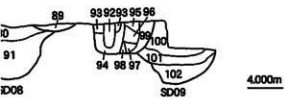
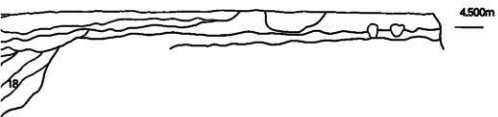
第4-2図 第20次調査 C区遺構分布図 (1/80)



第4-3図 調査区東壁土層図 (1/40)



第4-4図 調査区西壁土層図 (1/40)



第4-2表 府内町跡20次調査C区東壁上層観察表

	1層	10YR 7/3	にぶい黄褐色	砂質土	しまり悪く、小石・小粒の炭・白色の小ブロックが斑点状に混入。
	2層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	1層に類似。
	3層	7.5YR 6/1	にぶい褐色	砂質土	
	4層	10YR 4/1	褐色	割粘質土	
	5層	5Y 5/1	灰色	砂質土	
	6層	N5/	灰色	砂質土	
	7層	N6/	灰色		シルト質。
	8層	10YR4/1	褐灰色	砂質土	
	9層	5Y4/1	灰色	砂質土	
	10層	N6/	灰色		シルト質。
	11層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	12層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	13層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	14層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	石・土器が多量混入。
	15層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	16層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	17層	N6/	灰色	砂質土	
	18層	10YR 5/1	褐灰色	砂質土	
	19層	5Y 5/2	灰オリーブ色	砂質土	
	20層	10Y 5/1	灰色	砂質土	
	21層	5Y 4/1	灰色	砂質土	
	22層	7.5YR5/1	灰色	砂質土	
	23層	10YR 5/6	黄褐色	砂質土	
	24層	10YR 4/3	にぶい黄褐色	割粘質土	
	25層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	26層	10YR 3/1	暗灰色	砂質土	
	27層	2.5YR 4/6	赤褐色	砂質土	
C-SD04	28層	10YR 6/1	褐灰色	砂質土	
	29層	5Y 5/1	灰色	砂質土	
	30層	10YR 6/6	明黄褐色	砂質土	
	31層	2.5Y 5/2	暗灰褐色	割粘質土	
	32層	2.5Y 4/1	黄灰色	砂質土	
	33層	N4/	灰色	粘質土	石・木屑・土器等多量混入。
	34層	N5/	灰色	粘質土	
	35層	10BG5/1	青灰色	粘質土	
	36層	5BG5/1	青灰色	粘質土	
	37層	5B5/1	青灰色	粘質土	
	38層	5B4/1	暗青灰色	粘質土	下部にマンガンブロックが帯状に混入。木屑類の残りが良い。水がたまっていたと考えられる。
	39層	5BG5/1	青灰色	粘質土	
	40層	5BG4/1	青灰色	粘質土	
	41層	5B4/1	暗青灰色	粘質土	
	42層	N5/	灰色	粘質土	
	43層	5B5/1	青灰色	粘質土	
	44層	5Y 5/1	灰色	粘質土	きめの粗い砂が全体に混入。
	45層	N4/	灰色	粘質土	11層に類似。
C-SD18	46層	10YR 6/2	灰黄褐色	粘質土	
	47層	2.5Y 6/1	黄灰色	砂質土	しまり悪く、小石・小粒の炭等がまばらに混入。
	48層	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂質土	47層に類似。
C-SD02	49層	5Y 4/1	灰色	砂質土	褐色の小ブロックが斑点状に混入。
	50層	10YR 4/1	褐灰色	砂質土	土器混入。
	51層	10YR 6/6	明黄褐色	割粘質土	しまり良い。
	52層	2.5Y6/1	黄灰色	割粘質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。
	53層	7.5Y 7/3	浅黄褐色	砂質土	石混入。
	54層	3Y 5/1	灰色	割粘質土	しまりやや悪い。
C-SD01	55層	10YR5/2	灰黄褐色	割粘質土	褐色の小ブロックが全体にまばらに混入。
	56層	5Y 5/1	灰色	割粘質土	55層に類似。
	57層	2.5Y5/3	黄褐色	割粘質土	粘土ブロック。
	58層	2.5Y6/4	にぶい黄褐色	粘質土	しまり悪い。
	59層	10YR4/1	褐灰色	割粘質土	白色の小ブロックがまばらに混入。
	60層	10YR6/2	灰黄褐色	割粘質土	しまり悪く、小石・小粒の炭・白色の小ブロックが斑点状に混入。
	61層	2.5Y6/1	黄灰色	割粘質土	60層に類似。
C-SD05	62層	10Y5/1	灰色	割粘質土	混入物少ない。
	63層	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質土	しまりが良く、混入物ほとんどなし。
	64層	10YR4/6	褐色	粘質土	63層に類似。
	65層	10YR4/1	褐色	粘質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。
	66層	10YR6/2	灰黄褐色	砂質土	
C-SD06	67層	5Y7/3	浅黄褐色	砂質土	きめの細かい砂質土。
	68層	5Y 5/1	灰色	砂質土	小石・土器片がまばらに混入。
	69層	7.5Y 6/1	灰色	砂質土	混入物ほとんどなし。
	70層	2.5Y 6/2	灰オリーブ色	砂質土	きめの細かい砂質土。小粒の炭・土器片が少量混入。
C-SD07	71層	5GY 5/1	オリーブ灰色	砂質土	70層に類似。
	72層	3Y 5/2	灰オリーブ色	砂質土	混入物ほとんどなし。地山に近い。

第2節 遺構と遺物

1. 溝

C-SD01 (第4-5図)

有機質の残存
軟質施釉陶器

C-SD01はK-37・38区～M-37・38区までの範囲で東西方向に延びる溝で、本調査区の大半の面積を占める。C-SD01の規模は、確認できている東西長で20m、幅は6.3mほどである。深さは検出面から計測して約2.5mある。溝内では、1mほど下がったあたりから泥炭層が主体となり、排水していたことを示している。この土層中是有機質の残存状況が非常によく、人骨や動物骨遺体を始め、木器や金属器類が良好な状態で出土した。出土遺物は、有機質以外にも豊富で、陶磁器類や土師質土器等がかなりの量出土している。この内陶磁器類では、淨州窯系青花や軟質施釉陶器碗、近世1期の備前系陶器鉢鉢等が出土していることから、この溝は16世紀後葉以降、特に1570年代以降に埋没していると思われる。

北側を面する堀

この溝の位置は、1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」で、万寿寺北側の堀にあたる。この第20次調査C区の調査後、平成15年度に第34次調査区、平成16年度に第43次調査区が調査され、そこで万寿寺の西側の堀と思われる巨大な溝が検出された。さらに翌平成17年度には、第51次調査区で、万寿寺の堀の北西隅のコーナーと思われる箇所が検出された。特に第51次調査区で検出されたコーナーは、本調査区のC-SD01に続くものであり、したがってC-SD01は万寿寺の北側を面する堀であることはまず間違いないと思われる。

シルト層

ところで、この溝の埋没した後はその上に道路が形成された可能性が高い。第4-3図調査区東壁の土層図を見ると、C-SD01の直上にシルト層が堆積している状況が窺える。このシルト層の上面は、平面プラン検出時に、硬化面となっていたことが確認されている。残念ながら、第2南北街路のように道路面構築のための互層堆積等は見られず、さらにこの硬化面の広がりをも面的に拾えたのはL-37・38区～M-37・38区までで、道路面のプランとして提示できるほど明確なものは見られていない。ただ、この溝C-SD01の直上にピット等の遺構は見られないため、溝の埋没後に構築物は建てられていない可能性が高く、しばらくの間空閑地であったであろうと考えられる。さらに、第4-3図の土層図を見てみると、溝の直上のシルト層（硬化面）は、溝中央部分で下に窪んでいることが判る。つまり、このシルト層は溝中央部分で沈下しているものと思われる。シルト層上面が空閑地であるにもかかわらず沈下をするような比重がかかった状況、さらにその面が硬化しているという状況を考えて、このシルト層（硬化面）は道路と考えるのが妥当ではないかと考える。

東西方向の街路

府内古図を見ると、万寿寺の北側には東西方向の街路が描かれている。そして堀之口町はこの東西道路に面するように立ち並んでいる（下の府内古図参照）。したがって、本調査区はこの位置に東西方向の街路が存在することは、絵図の描写にも符合する。そして、さらにこの道路の形成時期は、この府内古図の描写を考える上で非常に興味深い事実を示している。

土取遺構

前述のように、溝C-SD01の中から出土する遺物から、この溝の埋没時期は1570年代以降である。最近の発掘調査の成果から、実はこの府内古図の描写は1570年代以降の府内の町の姿を描いたのではないかと考えられるようになった。大友氏館前に位置する桜町あたりの調査を行った第12次・48次調査区の所見から、絵図に描かれているような道路や町屋の形成が、1570年代以降の可能性が高まってきたのである¹¹⁾。調査の結果、桜町の東側は、16世紀後葉以前巨大な土取遺構が存在し、その時点で府内古図に描かれる町屋の姿は想像しにくい。その後この巨大な土取遺構は京都系土師器2期の段階に埋められ、その上に町屋が形成されている。そして大友氏館前を南北に通る道路（第2南北街路）が整備されていく。

(11)大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第28次・第48次調査区』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第9集 2006年）

第2節 遺構と遺物

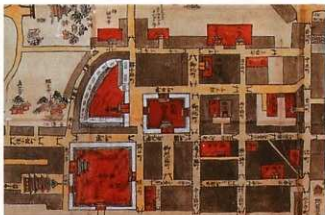
また、未報告であるが桜町の南、御内町推定地あたりでは、この第2南北街路が形成される直前には、その下に土坑が掘られ、それが直ちに埋められて道路が形成されていく過程が確認されている(第51次調査区)。その土坑からはやはり京都系土師器2期の段階の遺物が出土する。そしてさらに第2南北街路が形成される前は、巨大な溝が南北に延びていたことも確認されている。なお、これも未報告であるが、万寿寺の西側にある溝からは漳州窯系青花や彫三鳥等が出土し、その溝が埋められた後に第2南北街路が形成されるという状況が確認できている(第34・43・51次調査区)¹⁾。以上から第2南北街路の形成は京都系土師器2期以降であり、特に漳州窯系青花、近世1期の備前系陶器插鉢の出土等を勘案すると、1570年代以降の可能性が高い。それに伴い整備されていった町屋の形成もその頃と思われる。さらに、1570年代以降ということになると、大友氏における一つの大きな転機として、1573年(天正元年)における大友義統の家督相続がある。この大規模な町の形成の一つの要因として示唆される。

ところで、第2南北街路が整備された時期には、それ以前まで見られた巨大な溝(万寿寺の溝も含めて)はすべて埋まってしまっている。ここで今一度府内古図を見てみると、絵図の中には、堀の描写は全く無い。特に万寿寺周辺について見てみると、万寿寺を囲っているのは築地のような描写であり、堀は描かれていない。そして、その築地の前には東西方向へ道路が通り、堀之口町が面している。したがって、本調査区C-SD01で得られた、1570年代に埋められて、その上に街路が形成されるという所見は、絵図の描写に時期的にも合致しているといえる。

次に溝C-SD01が機能していた段階については、前述のように土層中に泥炭層が厚く堆積していることから、溝はある一定期間帯水していたことが判る。出土する遺物から埋没時期は1570年代以降であるが、掘削時期もさほど時期差がないと思われる²⁾。



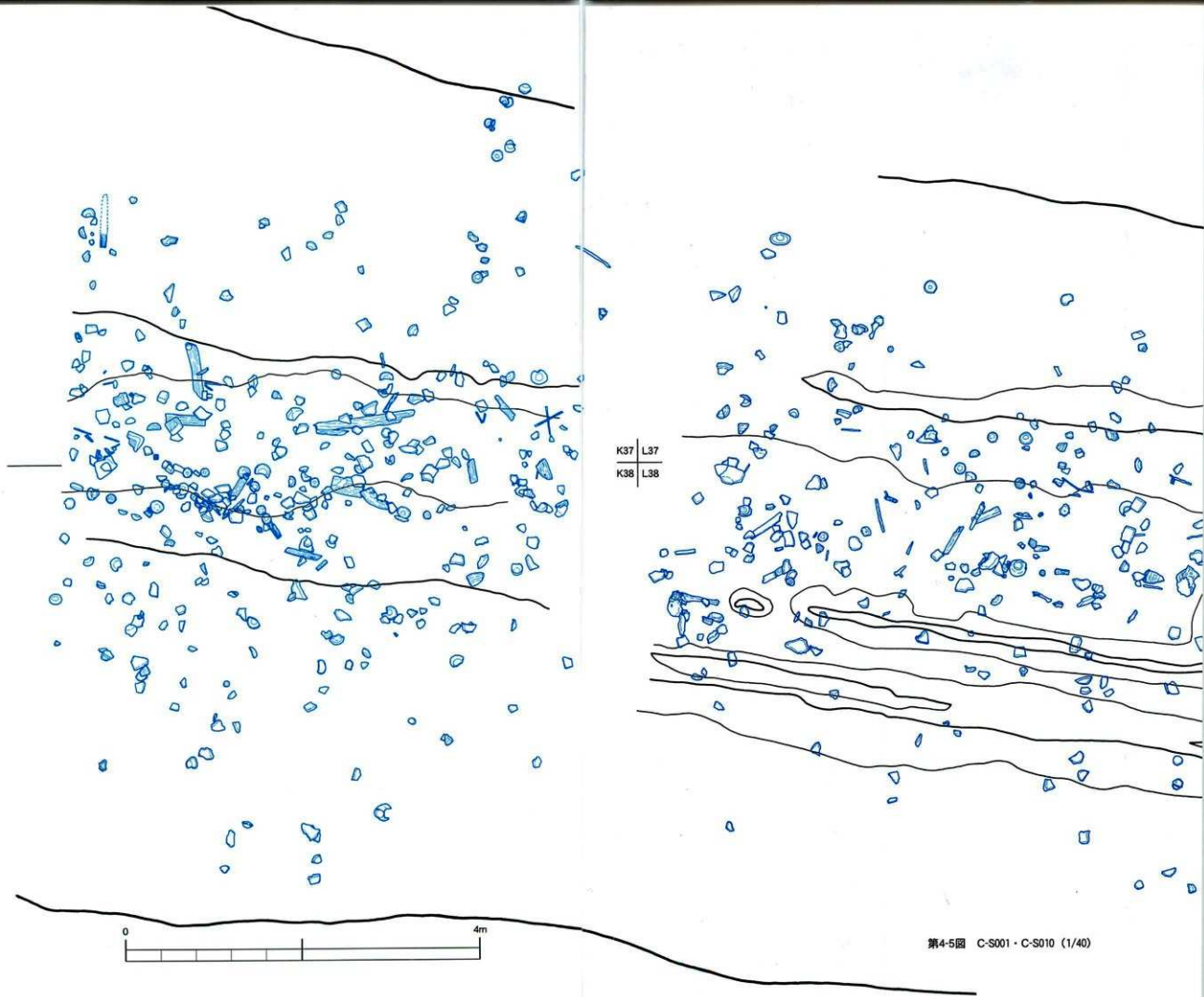
C-SD01を西側から望む

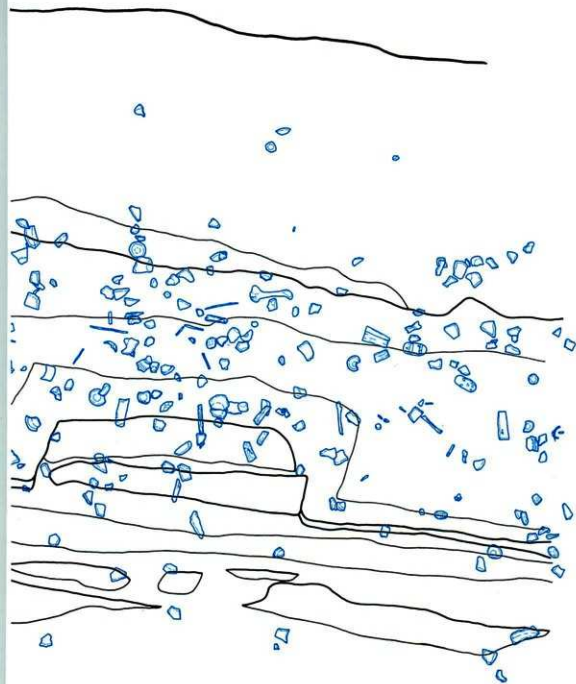


府内古図 C類

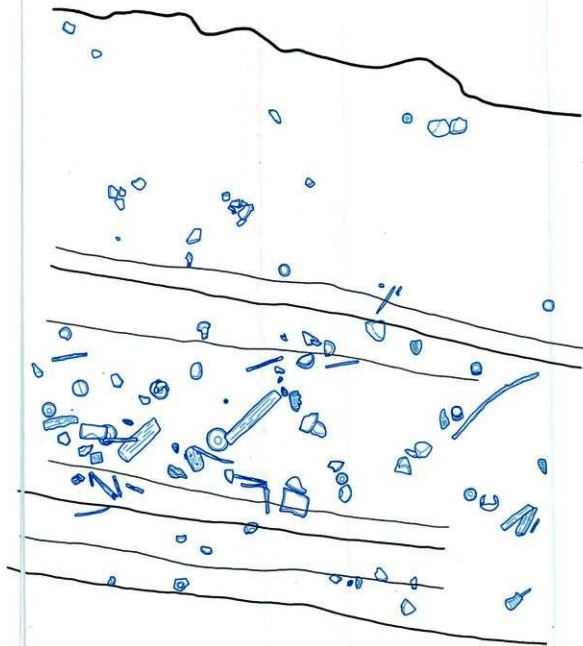
(1)これらの調査区についての正式な調査報告書は刊行されていないが、万寿寺の堀と道路の関係については、啓蒙用パンフレット「発掘された宗麟の城下町 Vol.3」で触れられている。

大分県教育庁蔵文化財センター編「発掘された宗麟の城下町 Vol.3」2006年
 (2)掘削時期については認定する資料がない。唯一切り合いが認められるSD10は、16世紀前葉であるが、そこまでは遡らないことが近年の調査によって判明した。調査平成15年度～17年度にかけての調査で検出された、万寿寺の西側及び北西隅コーナーの堀は、その縁辺部に平行するように並ぶ土坑を切って形成されていることが判明し、その並んでいる土坑群からは、やはり京都系土師器2期の遺物が出土している。





L37	M37
L38	M38



出土遺物

陶磁器(第4-6図-1~第4-14図-103)

- 景徳鎮窯系青花 1~14は景徳鎮窯系青花の皿である。
- つば皿 1は、丸く内湾する胴部から口縁部が屈曲してつばがつく、いわゆる「つば皿」である。底部には高台が付く。つばの部分、見込、胴部外面に文様が施される。高台内には界線が認められる。2も1と同様に口縁部につばがつくつば皿である。胴部から下は欠損して不明だが、つばの部分に文様が認められる。3は、口縁部はつばがつき、輪花をなす。胴部は内外面に筋を有す。文様はつばの内外面及び見込に施される。1~3はいずれも小野編年のF群に相当する。以下景徳鎮窯系青花の分類に使用される群の名称は小野編年に準拠する。
- F群 4は内湾する胴部から口縁部が端反る形態で、底部には高台を有す。口縁部内外面、胴部腰部及び見込に界線を巡らす。さらに胴部外面には牡丹唐草、見込には玉取獅子が描かれる。B1群に該当する。5は口縁部分の破片で、口縁部が端反る形態である。口縁部外面には界線が走り、口縁部内面には四方障文が描かれる。B2群か。
- 四方障文 6は高台部分から口縁部に向け、緩やかに外反していく形態で小野編年の分類にはないタイプである。文様構成は界線のみで、口縁部内外面、見込、胴部外面腰部に巡らされる。また高台内部には「富貴佳器」の字款が描かれる。E群の時期に併行するものか。
- 蒜苜底 7・8は底部がいわゆる「蒜苜底」を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。C群に該当する。7の見込には「寿」の文字が描かれ、胴部外面に描かれるのは略化した字のような文様か。8は口縁部内面に界線、外面は口縁部に波濤文帯、胴部に芭蕉葉文が描かれる。見込部分は界線と花鳥文様らしきものが描かれる。
- 9は皿の高台部分である。見込に文様は無い。高台内中央にわずかに文様の一部が認められるが判別ができない。
- E群 10は、低く内湾する胴部を有し、高台が付く。見込には蚊龍文が描かれ、高台内部には四角で枠取りした「福」の字款が描かれる。小野編年のE群に相当する。
- 11~14は皿の高台部分の破片で、口縁部は欠損しているが、いずれも内湾気味立ち上がる形態のものである。11は、高台内部・外面腰部・見込に界線が走る。見込にはさらに「長」と「富」の文字が見られ、「長命富貴」の字款が描かれているものと思われる。B群か。12は、高台内部に界線が走り、その中に「天」「下」「平」の文字が見られる。「天下太平」の字款が描かれているものと思われる。やはりB群か。13は高台内部に界線、見込部分には何らかの文様が描かれるが判別不能である。14は高台外面と見込に文様が施される。見込の文様は花卉文か。
- 15~24は景徳鎮窯系青花碗である。
- 観頭心 15は口縁部内面に界線、外面には波濤文帯が走る。胴部外面にも文様が施されるが、判別が難しい。16~22は見込部分が緩やかに盛り上がるいわゆる「観頭心」を呈する形態で、E群である。16は口縁部内外面に界線が走る。胴部外面には何かの植物の文様が描かれる。底部付近が欠損しているため正確には判れないが、恐らく観頭心を呈していると思われる。17は胴部以下の破片で、胴部外面、見込に文様が描かれる。見込には花卉文と月が描かれる。見込には「長春佳器」の字款が描かれる。18は胴部以下の破片で、外面腰部に文様帯が走る。また高台外面にも界線が走る。また見込にも文様が描かれ、七宝文のような文様が配されている。
- 「紋同」 19は見込に文様、高台内には字の様なものも描かれている。20は見込に牡丹唐草が描かれる。胴部外面にも文様が施されるが、構図は不明である。高台内部には「紋同」の文字が見え、「萬福紋同」の字款が描かれていたものと思われる。21は見込に文様、高台内部に文字が描かれる。共に詳細は不明だが、見込は山水人物、字は「大」の字か。22は見込と外面腰部に界線が認められるのみで、

第2節 遺構と遺物

他の文様は見られない。高台内部にわずかに四角の枠のようなものが見られる。23は見込に折菊、高台内部には「寿」の字款が描かれる。24は碗の口縁部の破片である。口縁部内面には四方博文が走る。外面は口縁部に界線、胴部にも文様が描かれる。

小坏 25は青花の小坏で、見込に捻花が描かれる。高台内部は無文である。

樽州窯系青花 26～31は樽州窯系青花である。

26は皿で、高台部分はいわゆる「荜苜底」を呈する。外面腰部に界線、見込には界線と文様が施される。27は盤の高台部分で、外面腰部には界線、見込にも文様が描かれるが、文様の構図は判別不能である。28は蓋である。梅瓶等の蓋か。内面は露胎で表面には唐草のような文様が描かれる。

蛇の目軸刺ぎ 29は碗で、口縁部内面に界線、外面胴部に文様が描かれる。30も碗の高台部分で、見込部分が蛇の目軸刺ぎがなされ、中央に捻花状の文様が描かれる。外面は腰部に界線が走る。31も碗の高台部と思われる。見込部分に文様の痕跡らしいものが見られる。

龍泉窯系青磁 32～37は龍泉窯系青磁である。

32は皿で、高台がつき、腰部で緩く折れて、口縁は外反気味に立ち上がる。33～35は碗である。33は内湾気味に胴部から口縁部へ立ち上がる。34・35は高台部分で、厚い高台が走る。36は蓋か瓶の胴部で、内面は露胎である。外面は腰部あたりで突帯状に隆起が走る。

37は青磁人物像燭台の台座部分である。台座の上に立っていた人物のものと思われる両足先が見られる。前後面の2枚の型づくりによって作られ、それを接合しているものと思われる。青磁人物像燭台の国内における出土例はさほど多くなく、総領野郎遺跡出土例・一乗朝倉氏遺跡出土例・常楽寺遺跡出土例がある程度である¹¹⁾。その他に伝世品として残っているものが清浄光寺・鑑阿寺に

寺院 ある。ところでこれらに共通する背景として注目されるのが、そこが寺院である点である。清浄光寺・鑑阿寺・常楽寺遺跡はもとより、一乗朝倉氏遺跡についても第36次調査の西山光照寺跡から出土しており、総領野郎遺跡にいたっても、関連は未確認であるが近くに正保寺の存在が知られている。今回本調査区で出土した遺構C-SD01も、前述の通り万寿寺の北限段の堀と考えられており、万寿寺関連の遺物である可能性は高い¹²⁾。よってこの青磁人物像燭台は寺院に關係するものである可能性が高い。石川氏によれば、寺院と関連の深い遺物の特徴として台座の蓮華文を挙げているが、本調査区出土資料には蓮華文が明確には確認できない。また本調査区出土資料の37の時期について

であるが、石川氏は台座の蓮華文が模式的になり簡略化する観点から一乗朝倉氏遺跡出土例を新しく位置づけている。そうした観点に浴えば本資料37は蓮華文がほとんど確認できず、したがって一乗朝倉氏遺跡出土例よりもさらに新しい位置づけが可能かもしれない。本資料を出土したC-SD01は前述のように16世紀後葉に位置づけられる。一乗朝倉氏遺跡で出土した資料は共伴土器から15世紀末～16世紀初頭に位置づけられていることから、その前後関係は遺構の時期から見ても齟齬はない。しかしながら、寺院に關係する遺物は、中世大友府内町跡の他の調査区出土例をみると、伝世していると思われるものが見られる。したがって、遺構の時期イコール遺物の時期とはいえない点もあり、今後さらなる検証が必要であろう。

高麗青磁 38は高麗青磁である。表に象嵌による文様が描かれる。器形は不明である。

(1)石川ゆずは「青磁人物像(燭台)について—総領野郎遺跡出土資料の紹介を兼ねて—」(『富山考古学研究』紀要第7号 財団法人富山県文化財団附埋蔵文化財調査事務所 2004.8)による。その他参考文献として『戦国時代 内と外』福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館 2003

栃木県教育委員会文化課HP <http://www.tochigi-c.ed.jp/bunkazai/bunkazai/list/630.htm>

(2)中世大友府内町跡では第34次調査区で青磁人物像燭台の顔の部分が出土している。顔は露胎で、これも他の類型と共通している。この顔が出土したのもやはり万寿寺の堀(万寿寺西側の堀)と考えられているところからである。

- 越州窯系青磁 39は越州窯系青磁の碗である。見込に目跡が認められる。
- 白磁 40～50は白磁である。
40・41は景德鎮窯系白磁皿で、口縁部が端反る。41は被熱しており、黒斑が見られる。42は中国南方産と思われる白磁の皿で、見込は蛇の目輪剥ぎがなされる。43は景德鎮窯系菊皿である。底部は欠損しているが、高台がつくものと思われる。44は中国産の皿の底部と思われる。
45～48は白磁の碗である。45～47は景德鎮窯系の碗で、47は口縁端部が端反る16世紀代の特徴を有している。48は中国産の白磁の高台部分である。
- 小坏 49・50は小坏である。49は景德鎮窯系、50は見込に蛇の目輪剥ぎが認められ、景德鎮窯以外の中国の窯で焼かれたものであろう。
- 華南三彩 51・52は華南三彩である。
51は壺の蓋である。内面は露胎となり、外面は刻花文が見られる。52は水注の脚部と思われる。底部外面は露胎となる。表面には波瀾文が描かれ、上部には鶴や魚がついていたものと思われる。
- 磁甕窯系盤 53は磁甕窯系盤の破片と思われる。C-SD01の時期のものではないが、南側に隣接する第20次A区では多数出土している。
- 青翠輪 54・55は中国産青翠輪の小皿である。口縁部が屈折して外反しつばのようになり、胴部は縮を有する。底部には高台を有する。
- 褐輪陶器 56は中国産褐輪陶器の胴部片である。57は碗の底部付近の破片で、見込と畳付に目跡が付けられる。産地は不明である。58は中国産陶器壺の底部付近の破片と思われる。底部下半は露胎となる。59は中国産陶器の天目茶碗である。高台部分は欠損している。
- 瀬戸美濃系陶器 60～64は瀬戸美濃系陶器である。
60・61は天目茶碗、62～64は皿である。63は高台部から口縁に向けて内湾気味に低く立ち上がる。また62・64は口縁部分が外に折れるいわゆる折縁皿である。大窯3期頃に比定できる。
- 折縁皿 65～70は軟質施軸陶器の碗である。赤褐色の胎土の表面に釉がかけられ、同一個体と思われる。
- 軟質施軸陶器 71～103は備前系陶器である。
- 備前系陶器 71は水屋甕の口縁部、72は壺である。いずれも口縁部が短く立ち上がる。73～75は徳利である。76・77は鉢である。口径に対して器高は低く扁平な形である。胴部上位から内傾して口縁部に至る。
- 水屋甕 78～97は播鉢である。まず時期認定の一つの鍵となるスリメの形態についてみてみたい。83・90・91・96を除いてすべてにスリメが確認される。この内大半が放射状のスリメに斜め方向のスリメを加えたいわゆる「ナナメスリメ」である。図面番号の78、80～82、85、87～89、92～94がそれに該当する。残りの79・84・97は放射状スリメと思われ、86・95についてはスリメの残存部分が少ないために形態は不明である。次に時期の認定に必要なもう一つの要素である口縁部の形態について見てみたいと思う。92～94、97の資料を除きすべての資料で口縁部の形態が把握できる。それらの資料を見ると、いずれも口縁帯が発達し、口縁部外面に施される凹線が多条化している。さらに口縁端部のナデが強く先細りをしており、乗岡編年の近世1期の特徴を示している。この近世1期のもう一つの特徴としてナナメスリメが挙げられるが、先にナナメスリメではなく放射状スリメとして取り上げた資料の内79・84についても、口縁部の形態では近世1期の特徴が見られる。また、残存部分が少なくスリメの形態が不明とした86・95についても、口縁部の形態では近世1期の特徴を有している。さらにスリメが全く確認できていない資料の内、83・96についても、やはり口縁部の形態は近世1期の特徴を示している。以上より、C-SD01で出土した備前系陶器の播鉢については、その大半が近世1期に位置づけることが可能である。なお、この時期に位置づけられなかった資料90・91・97については、まず90については、口縁帯の文様帯がさほど発達しておらず、凹線文の多条化も見られない。さらに口縁端部の先細りも認められないことから中世6期ごろであろうか。口

第2節 遺構と遺物

径も小さく、多少他の挿鉢とは性格を異にするものかもしれない。91は口縁帯が全く発達しておらず、古い様相を示している。中世3期頃に比定される資料と思われ、混入品であろう。97については、口縁帯がないため時期の認定は困難である。スリメは放射状であるが、79・84が近世1期に位置づけられることもあり、それらに併存することも十分あり得る。

小型壺 98・99は壺である。98は胴部が丸みを帯びて膨らむ小型の壺である。99は胴部下半に刻印の一部が認められる。

大甕 100～103は大甕である。100は肩部あたりに刻印が認められる。101・102は口縁部、103は底部の破片であるが、口縁部の形態より16世紀後半代に位置づけられそうである。

土師質土器（第4-14図-104～第4-17図-206）

京部系土師器Ⅱ 104～176は京部系土師器Ⅱである。いずれも器壁が比較的厚くなり、口縁部下のナデが強く、胴部上半に稜を有するものも含まれてくる。埴地編年の2～3期に位置づけられる。さらに掲載している資料95点中58点の口縁部に、ススの付着が認められ、灯明皿として使用されていたものと思われる。割合的には約61%に及び、かなり高い頻度で見られる。

糸切り痕 また、177～185については、京部系土師器の胎土を有し、底部に糸切り痕を残す在地系土師器である。ここでは京部系土師器と在地系土師器の「折衷様式」と仮称しておく。

坏 186～197は京部系土師器の坏である。底部から口縁部に向け内湾気味に立ち上がり、口縁部下では強いナデが廻り、稜を有す。器高も3cm～4cmを超えるものが含まれ、皿とは別形態である。

在地系土師器 198～206は在地系土師器である。いずれも底部に糸切り痕を残す。201～203のようにススが付着し灯明皿として使用されたと思われる資料も含まれる。器形的には、底部から口縁部に向けて直線的

顕著にロクロ目 的に開き、内面に顕著にロクロ目を残すタイプ（198・199・203）と、底部から口縁部に向けて内湾気味に低く立ち上がる（202～206）タイプがある。これらの資料は坂本編年で15世紀末葉から16世紀初頭頃に位置づけられる一群であるが、この時期まで残る資料なのか、混入しているのかが問題となる。この資料が出土しているC-SD01の下にはC-SD10があり、C-SD01はC-SD10の大半を切って形成されていることが判っている。このC-SD10からは京部系土師器1期の資料と、前述の底部から口縁部に向けて直線的に開き、内面に顕著にロクロ目を残すタイプがまとまって出土している。したがって、C-SD01から出土している在地系土師器は、この時期の他の資料と合併していると考えるよりも、C-SD10の遺物が混入していると考えの方が妥当であろう。

瓦質土器（第4-17図-207～第4-19図-231）

207～210は瓦質土器の埴である。いずれも胴部が内湾気味に立ち上がり、底部には高台が付く。高台は207が断面台形状、208・209は三角形状を呈す。

香炉 211は香炉で、三脚が付く。212も香炉もしくは火鉢の底部付近の破片で、双頭巖手流雲文が描かれる。213は皿の底部で、中央に穿孔が見られる。また見込部分に雷文が刻印される。214は鉢で直立ぎみに立ち上がる胴部から、口縁部が緩やかに内傾する。SK10で出土した破片と接合した。215と216も鉢である。215は口縁部が内傾し、口縁部屈曲部外面に2条の突帯が廻る。217は防長系の挿鉢である。口縁部が肥厚し、内面には放射状にスリメが施される。スリメは見込にまで及ぶ。

火鉢 218～226は火鉢である。218・219は口縁部が内側に台形状に肥厚する。220は口縁部外面に雷文が廻る。221は台形状に肥厚した口縁部とその下に廻る突帯間に縦方向の沈線が5本単位で施される。222は口縁部外面に1条の突帯が廻り、その下に花文が刻印される。223は口縁部下に2条の低い突帯が廻り、その間に雷文が描かれる。224～226は火鉢の脚部で、225は脚の上に2条の低い突帯が廻りその間に双頭巖手流雲文が施される。

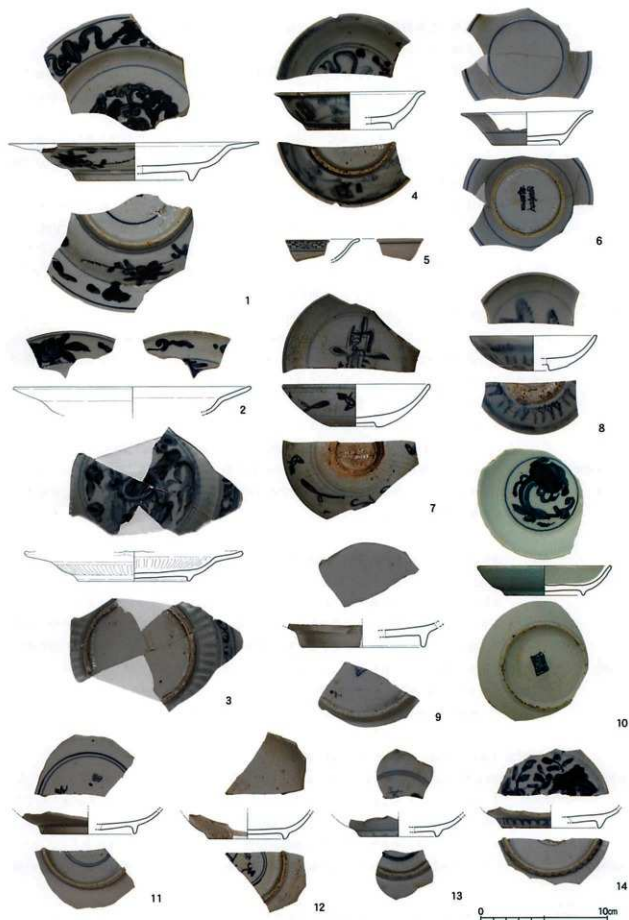
双頭巖手流雲文
内耳付鍋 227・228は壺、229は内耳付鍋である。口縁部内側に吊し用の穿孔部分が設けられる。230は鍋の口縁部で、胴部上半に突帯が廻る。231は焙烙で、胴部下半に柄を受けるための筒部がある。

土製品・石製品・金属製品（第4-19図-232～第4-21図-270）

232～234は土鍾、235は土玉である。

- 円盤状土製品** 236～244は円盤状土製品である。236～238は土師質土器を加工し、239～243は瓦質土器を加工して作られている。また244は瓦を加工して作られていると思われる。こうした円盤状の土製品が本遺構から比較的まとまって出土している。
- 硯** 245～248は硯、249～257は砥石である。258は円盤状の石製品で前述の円盤状土製品と一連のものであると思われる。259も石製品であるが、環状に加工された中央部に穿孔が施されている。260～263は石臼、264は方形柱状を呈す石製品であるが、用途は不明である。265は、恐らく方形に加工された部分に足が付き、テーブル状を呈す石製品であろうと思われるが、詳細は不明である。266は球形状の穴が複数穿たれている石で、人工的に加工されたものであろうが、用途は不明。
- ボタン状ガラス製品** 267・268はガラス製品である。267は白色を呈するボタン状ガラス製品である。裏面は平らになって接着痕らしき跡が見られる。用途は不明である。中世大友府内町跡では複数例が知られており、白色の他に青色のものが存在している。268は青銅製品で、簪と思われる。
- 小柄
真鍮製** 270は、小柄の柄の部分である。蛍光X線分析の結果、金の成分は含まれておらず、鍍金ではないことが判明した。そして銅と亜鉛が検出されていることから、この小柄は真鍮製であると考えられる（詳細は第5章自然科学的分析の項を参照）。真鍮製品は17世紀以降キセル等において国内でも顕例は多いものの、戦国期ではさほど多くはない。真鍮は金よりも安価に手に入るため、現代でもイミテーションゴールドとして普及しているが、その製作には特別の技術が必要である。特に亜鉛の製錬は、真空状態で行わなければならないが、この技術が日本で駆使できるようになるのは、17世紀以降のことと考えられている。したがって戦国期における真鍮製品の国内製作については、現段階では考えにくい。本遺跡で出土したこの真鍮製の小柄も鉛同位体比の結果、含まれる鉛は華南産のデータが得られている（詳細は第5章自然科学的分析の項を参照）。したがって素材に着眼すれば、中国から輸入された可能性が考えられよう。
- ところが、ここで問題となるのは、この小柄が製品として中国から輸入されたかという点である。本来日本独自の製品である小柄が中国で製作されたというのは考えにくい。そしてこの小柄には日本の伝統的技法とされる魚鱗地が施されている。したがってこの小柄は製品として輸入されたのではなく、真鍮そのものの素材が輸入をされ、それを国内で加工したと考えるのが妥当ではなかろうか。ところで、この小柄に描かれる文様でもう一つ注目すべき点がある。前述の魚鱗地の中に、細長い方形の絵が描かれている。そしてその一端は台形状を呈し屈曲する。この方形枠の中は幾何学的模様で充填され、その周囲をツツのようなものが取り巻いている。この形は「火縄銃」によく似ている。出土した清C-SD01の時期が16世紀末葉であることや、地点は違うがC-SD01と同じ万寿寺の塚から火縄銃の火挟みが出土している点、さらに同時期の遺構から鉛玉が出土している事などを考えると、十分にありうる図像である。
- 木製品（第4-22図-271～第4-28図-329）**
- 猿形木製品** 271は猿形木製品である。顔と臀部が赤く着色されている。顔には目・鼻・口が描写されている。また手と足を前て組んだような形をしているが、組んだ手の中央部と足の部分に穿孔が施されており、ここに細い棒が通されていたと思われる。この棒に沿って猿が上下に移動するような玩具であったのではなかろうか。職人歌合等に描かれる傀儡師が扱う人形の一つである可能性もある。また、
- 玩具**
- 鹿田遺跡** 中世における猿形木製品の顕例としては岡山県鹿田遺跡第7次調査出土の資料がある¹⁾。この資

(1)岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山市鹿田遺跡出土の猿形木製品」『動物考古学』第13号 動物考古学研究会 1999、11)
なお、山本悦代氏から資料を実見させて頂き、御指図を賜った。



第4-6図 C-SD01出土遺物実測図(1) (1/3)



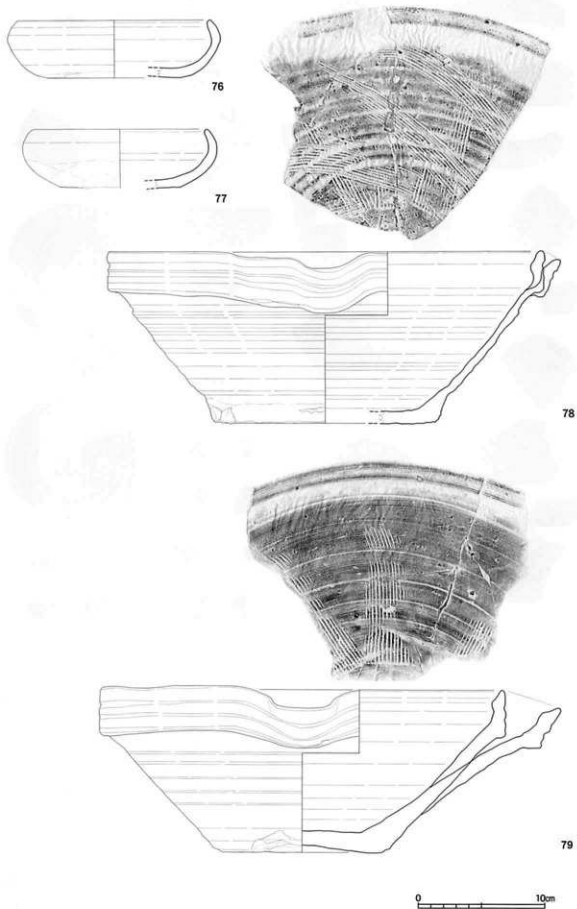
第4-7图 C-SD01出土遺物実測図(2) (1/3)



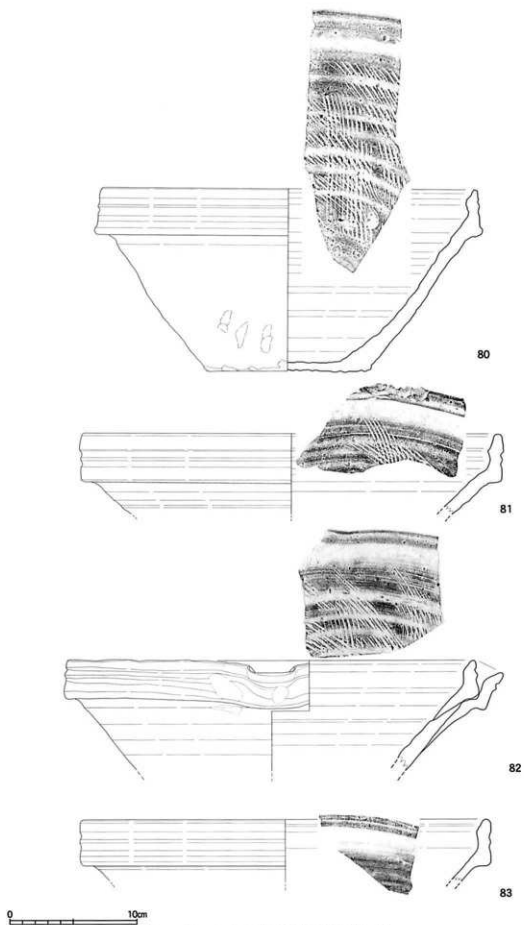
第4-8図 C-SD01出土遺物実測図(3) (1/3)



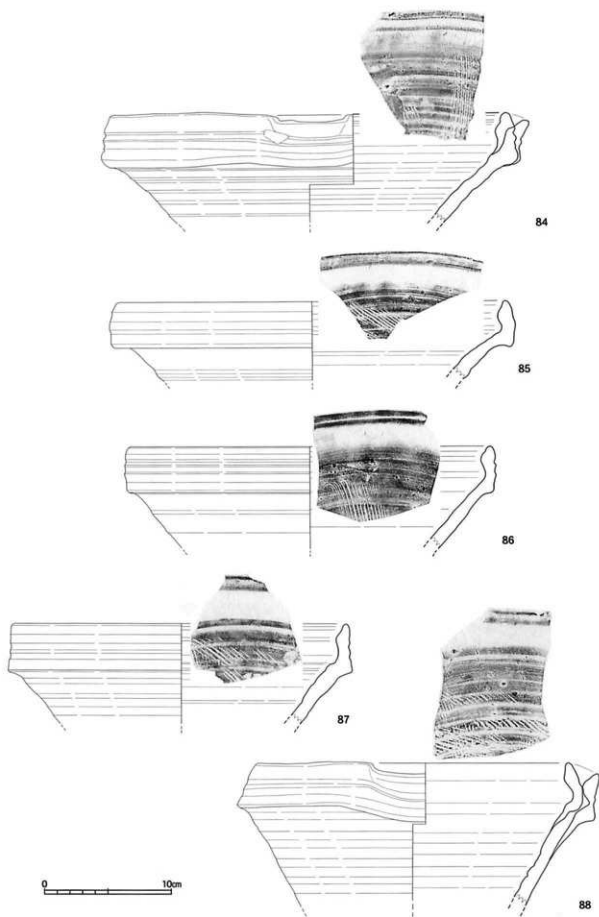
第4-9図 C-SD01出土遺物実測図(4) (1/3)



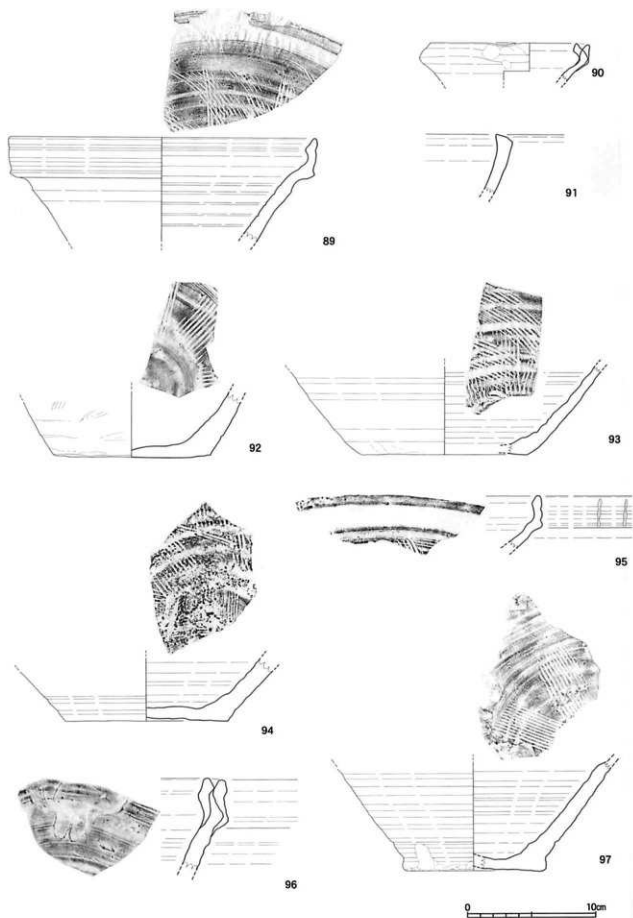
第4-10図 C-SD01出土遺物実測図(5) (1/3)



第4-11図 C-SD01出土遺物実測図(6) (1/3)

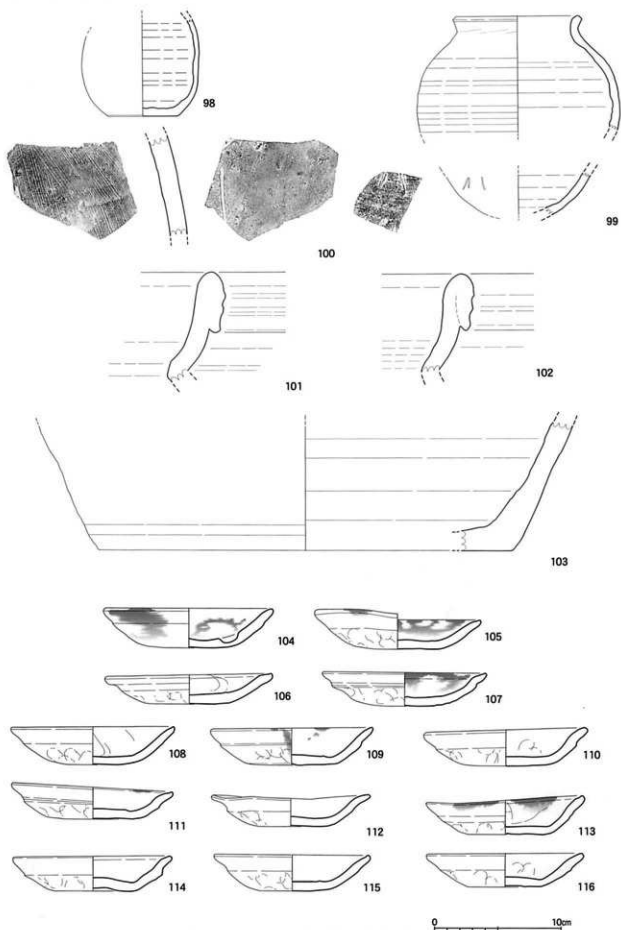


第4-12図 C-SD01出土遺物実測図(7) (1/3)

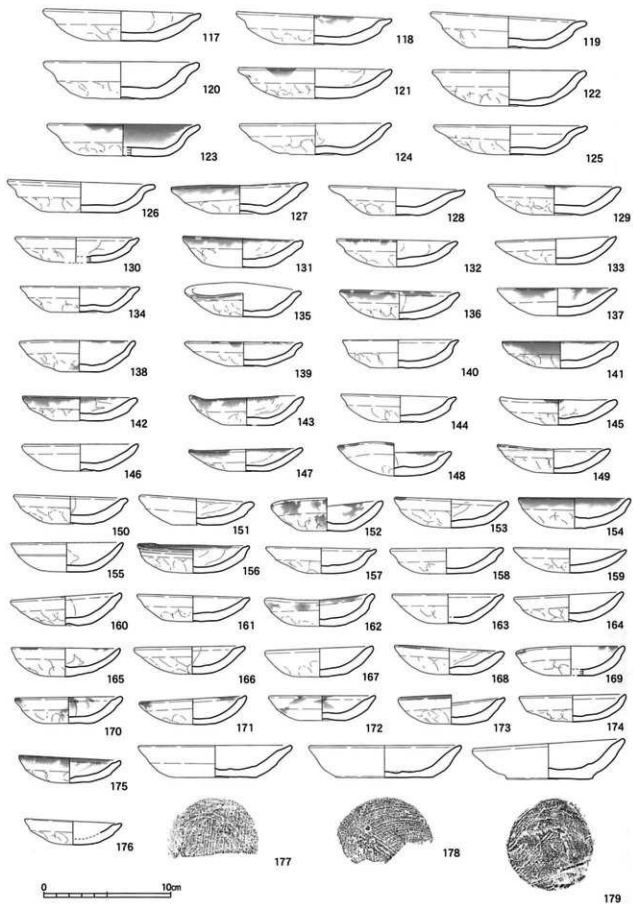


第4-13図 C-SD01出土遺物実測図(8) (1/3)

第2節 遺構と遺物

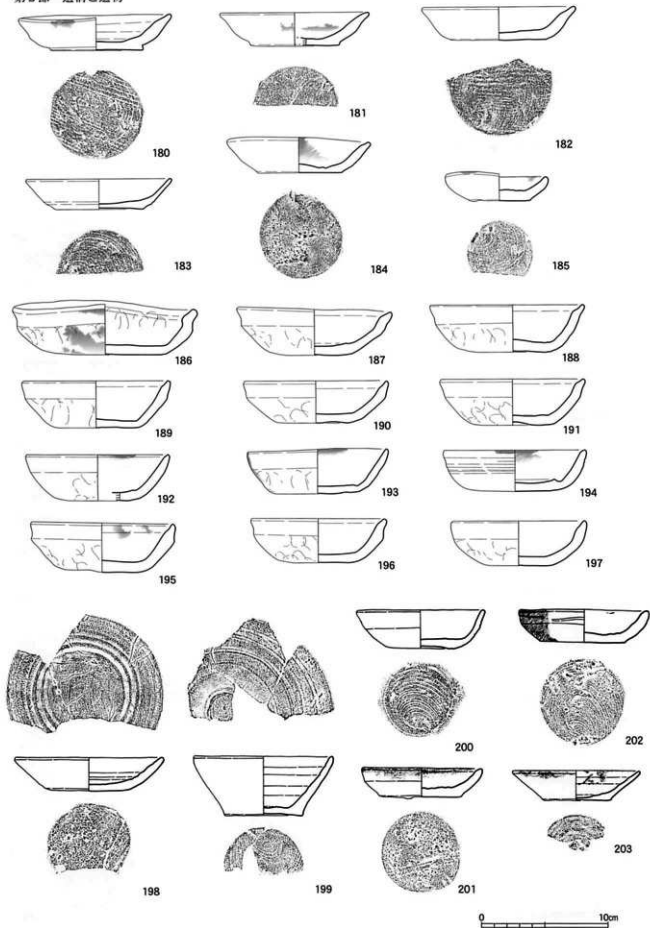


第4-14図 C-SD01出土遺物実測図(9) (1/3)

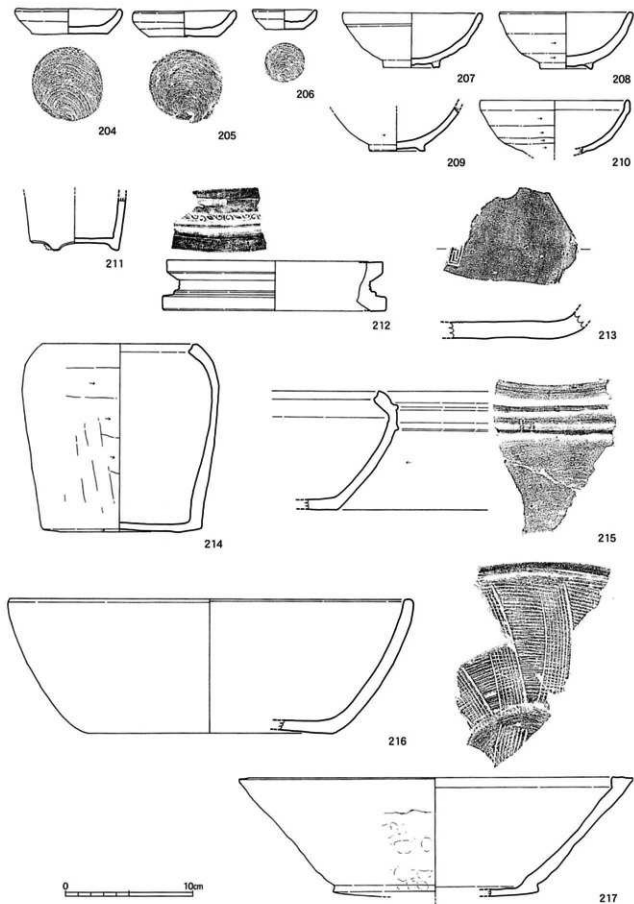


第4-15図 C-SD01出土遺物実測図(0) (1/3)

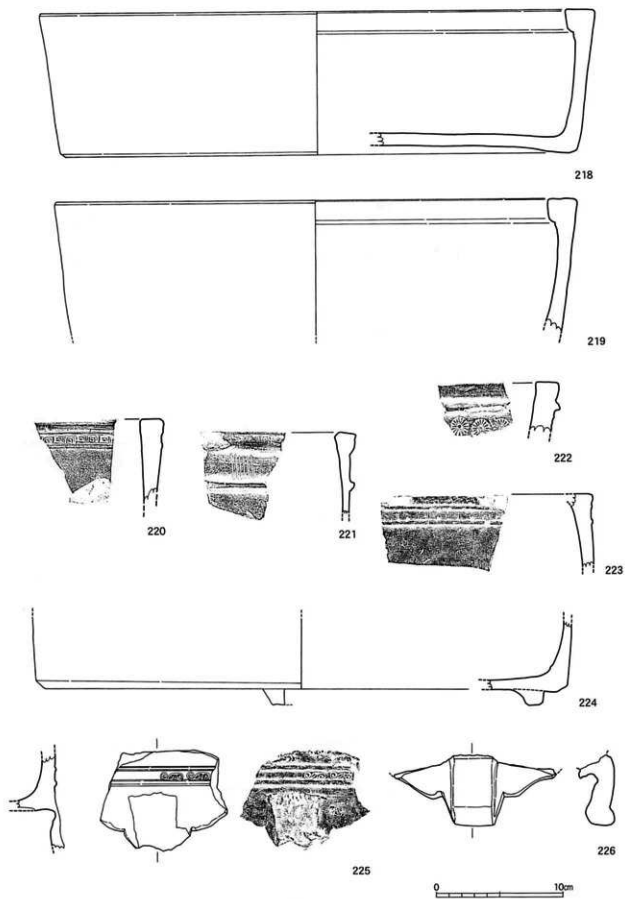
第2節 遺構と遺物



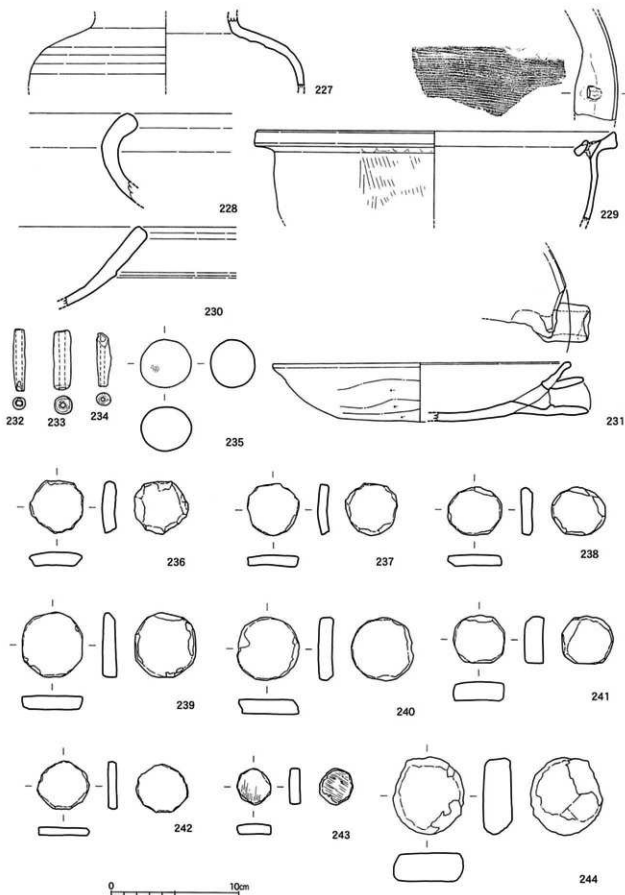
第4-16図 C-SD01出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-17图 C-SD01出土遺物実測図02 (1/3)

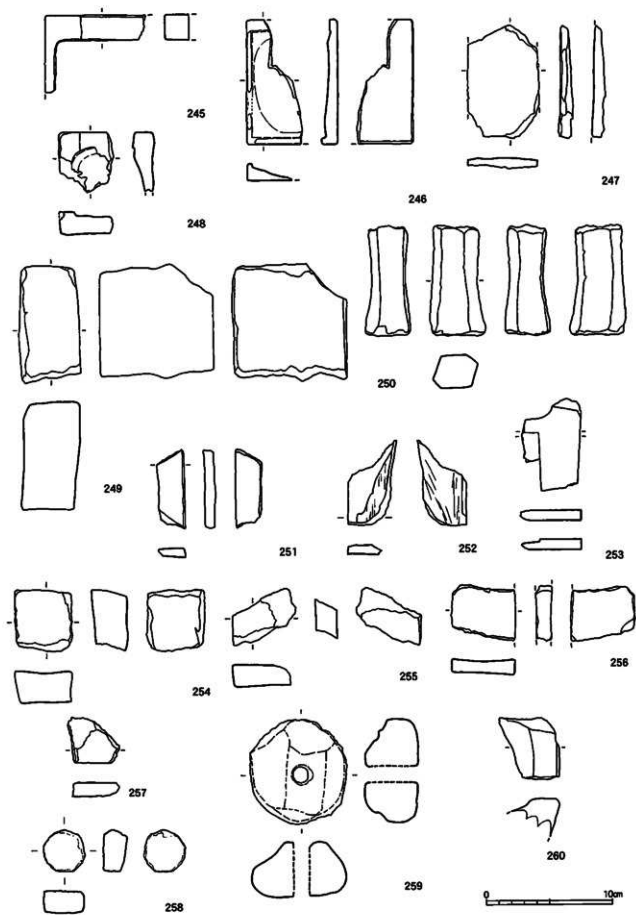


第4-18図 C-SD01出土遺物実測図(3) (1/3)

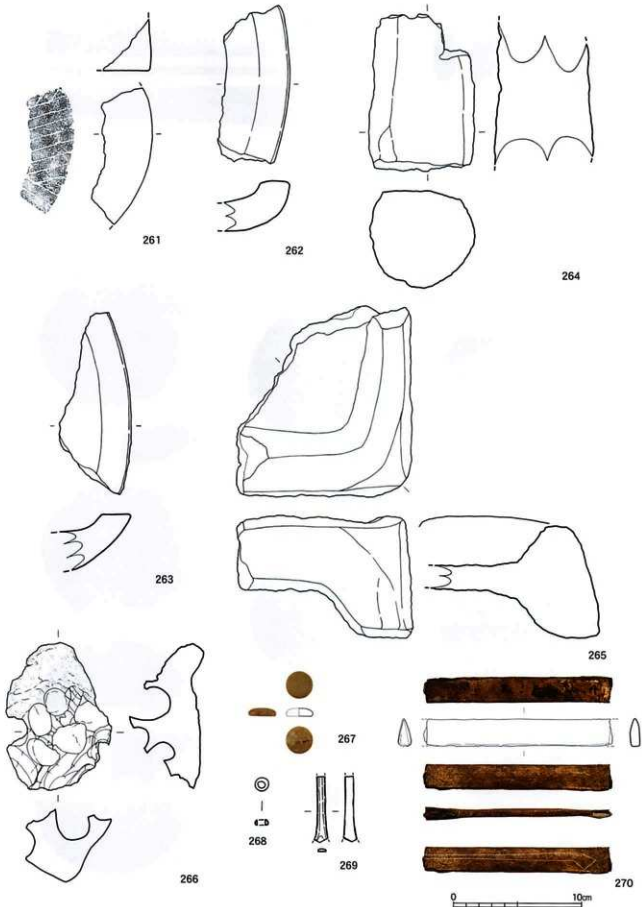


第4-19図 C-SD01出土遺物実測図(4) (1/3)

第2節 遺構と遺物

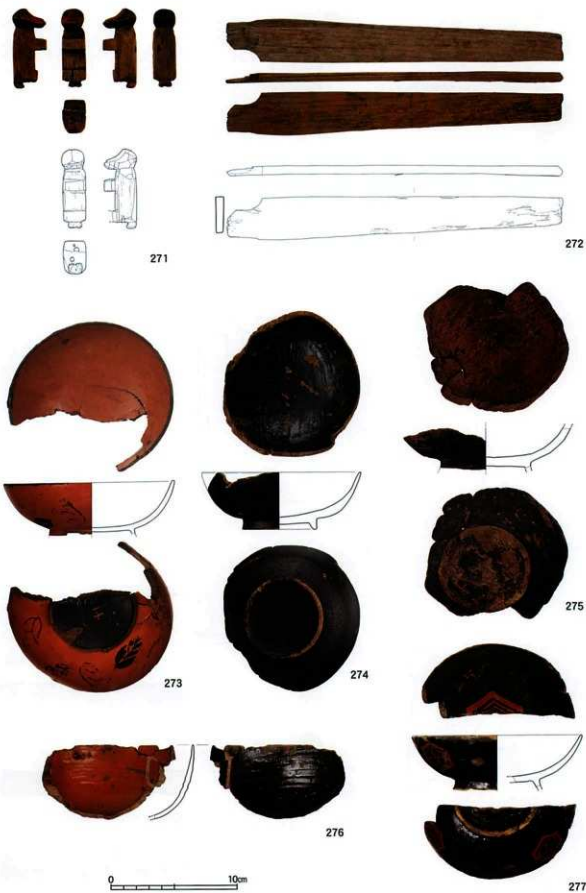


第4-20回 C-SD01出土遺物実測図(5) (1/3)

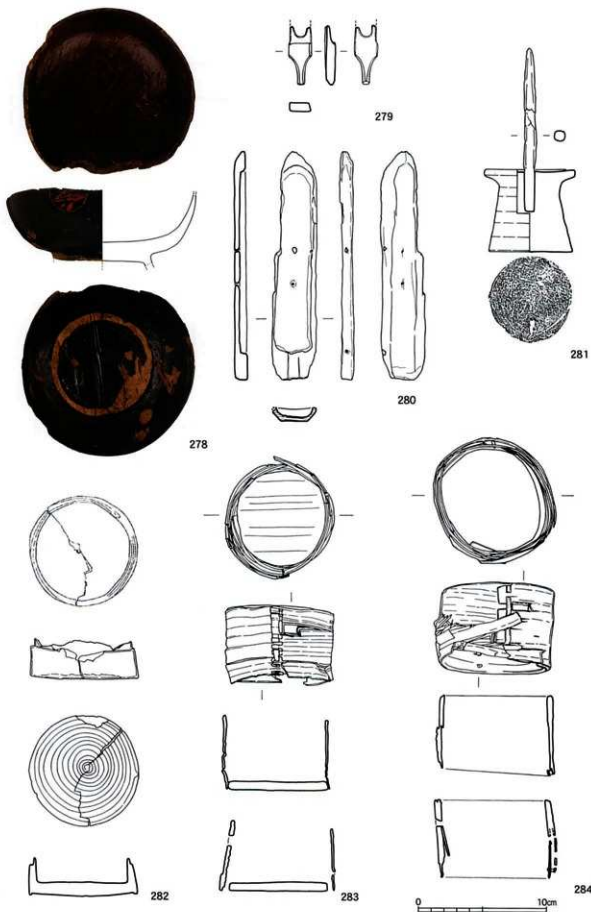


第4-21図 C-SD01出土遺物実測図(1/3) ※270のみ1/2

第2節 遺構と遺物

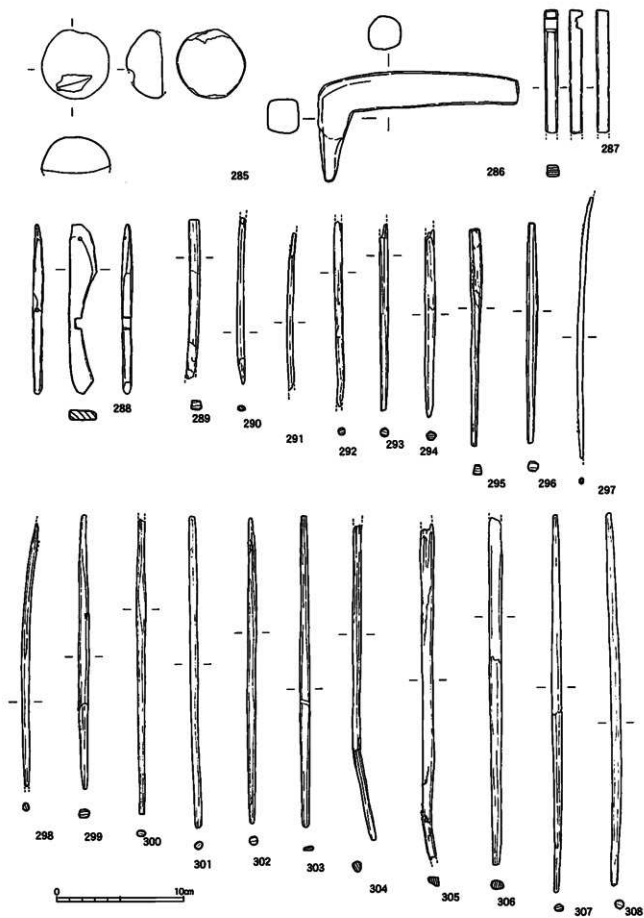


第4-22图 C-SD01出土遺物実測図(1) (1/3)

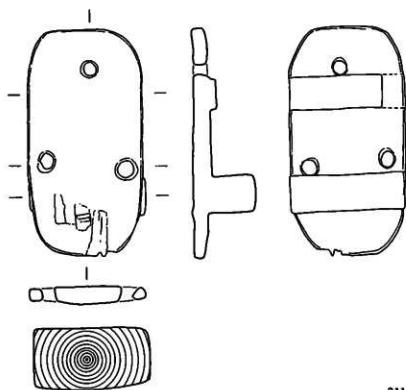
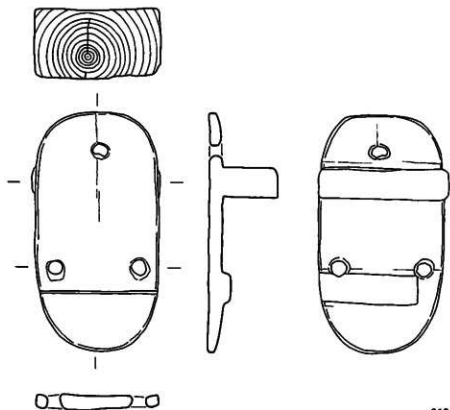


第4-23回 C-SD01出土遺物実測図(8) (1/3)

第2節 遺構之遺物

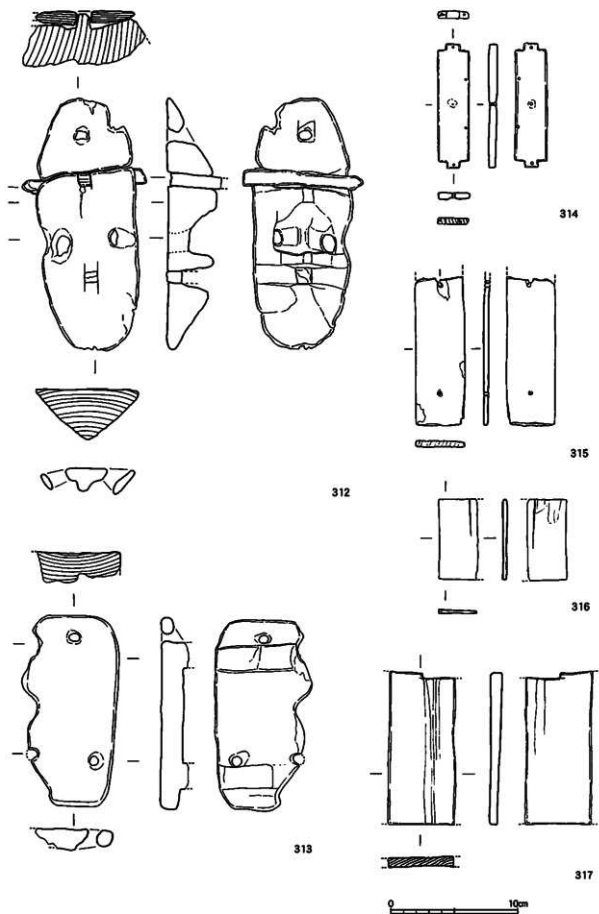


第4-24圖 C-SD01出土遺物実測図(例) (1/3)

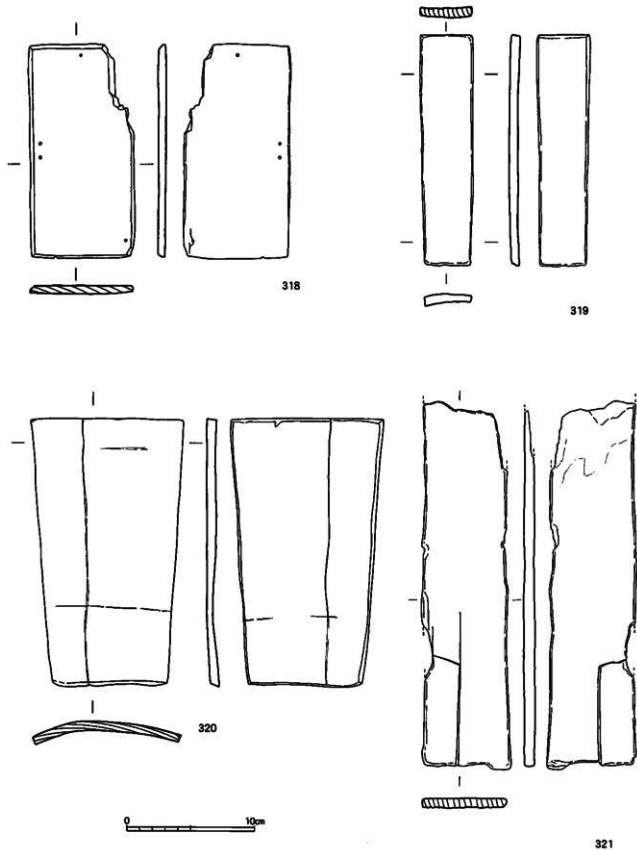


第4-25図 C-SD01出土遺物実測図(1/3)

第2節 遺構と遺物

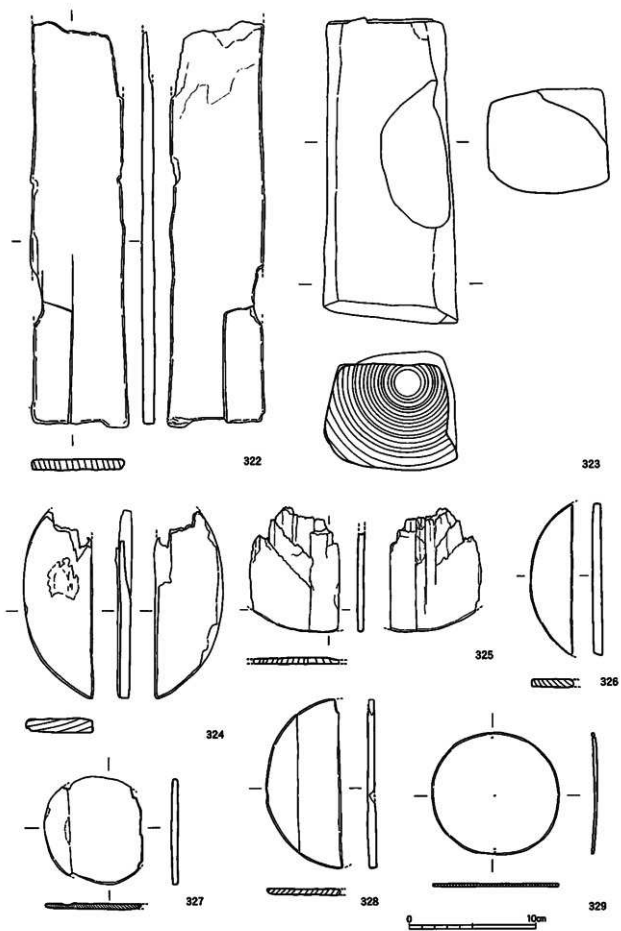


第4-26圖 C-SD01出土遺物実測圖(21) (1/3)



第4-27図 C-SD01出土遺物実測図(22) (1/3)

第2節 遺構と遺物



第4-28圖 C-SD01出土遺物実測圖(23) (1/3)

料は14世紀頃のもので時期が若干異なる。また烏帽子をかぶり形態も異なっていることから、別の用途が考えられる。また中世大友府内町跡においては第13次調査区で猿形の土製品が出土している¹¹⁾。

- 漆器類 272は細長扁平の板で用途は不明である。273～278は漆器類である。273は胴部外面に木の葉文様、277は胴部外面と見込に六角形の文様、278は胴部外面に文様が施される。
- 279は機織り用糸巻きの軸の部分である。
- 舟形木製品 280は舟形木製品で、中央部分にある穿孔は帆柱用のものと思われる。
- 燭台 281は燭台である。台の部分は在地系の土師質土器である。C-SD01の泥炭層中から出土したため、芯の木製品が刺さった状態で残っていた。芯の部分は中位あたりで抉りのようなものが入る。これが蠟燭の芯としたら、蠟燭はかなり大型のものとなる。
- 柄杓 282～284は柄杓である。柄の部分はない。いずれも曲物である。
- 筥杖の玉 285は筥杖の玉で、半分が欠けている。286はし字状に曲がる棒状製品で、用途は不明である。
- 287は柱状の木製品で端部に抉りが入る。他の部材と組み合わされていたものと思うが、用途は不明である。288は扁平板状製品であるが、一方の辺が内側に湾曲し、中央に抉りが入る。端部には穿孔が入る。組み合わせて使用されたものであろう。
- 笮状木製品 289～309は笮状木製品で、部分的に欠損しているものも多いが、数サイズが存在しそうである。
- 下駄 310～313は下駄である。310・311・313は差歯下駄、312は差歯下駄である。
- 314～322は板状の木製品である。314は両端部が方形に張り出し、穿孔が施される。315は両端部に穿孔、318は各辺に穿孔が設けられている。用途についてはいずれも不明である。
- 323は角柱状木製品である。大きさも大きいので建築部材かもしれない。
- 曲物 324～329は曲物の底もしくは蓋である。いずれも扁平で円形を呈す。特に329は穿孔が施され、他のものとは異なった用途が推測される。

C-SD10 (第4～5図)

C-SD10はK-37・38区～M-37・38区までの範囲で東西方向に延びる溝で、規模は確認できているだけで東西長で20m、深さは検出面から計測して約2.5mある。大半をC-SD01に切られているため、詳細は不明である。ただ、2.5mの深さからしてC-SD01に近い規模を有すると推測され、その位置関係から考えても、万寿寺北側を画する堀である可能性が高いと思われる。その場合、堀の時期が問題となってくるが、C-SD10から出土する遺物は、まず土師質土器に関してみれば1期段階の京都系土師器皿と、底部から口縁部に向けて直線的に開き内面にクロク目を顕著に残す在地系土師器皿がセットとなる。そして、備前系陶器についてはナナメスリメを有する近世1期の撞鉢は見られず、中世6期のものが主体となる。遺物のセット関係は切り合っているC-SD01とは明らかに異なっており、C-SD10の時期は16世紀前葉に比定できる。これは、C-SD10を徳治元年(1306年)に創建され16世紀末まで存続した万寿寺の堀とするのに矛盾しない。またこのC-SD10の時期と、これを切って形成されたC-SD01とは若干のタイムラグがある。C-SD10が完全に埋まってしまった後に、C-SD01は掘り返されたのであろう。ただ少なくとも15世紀末葉から16世紀末までは、万寿寺の北限に関する空間認識は変わっていないと考えられる。

また、C-SD10からは人骨の頭部が出土しており、第5章自然科学的分析の項を参照されたい。

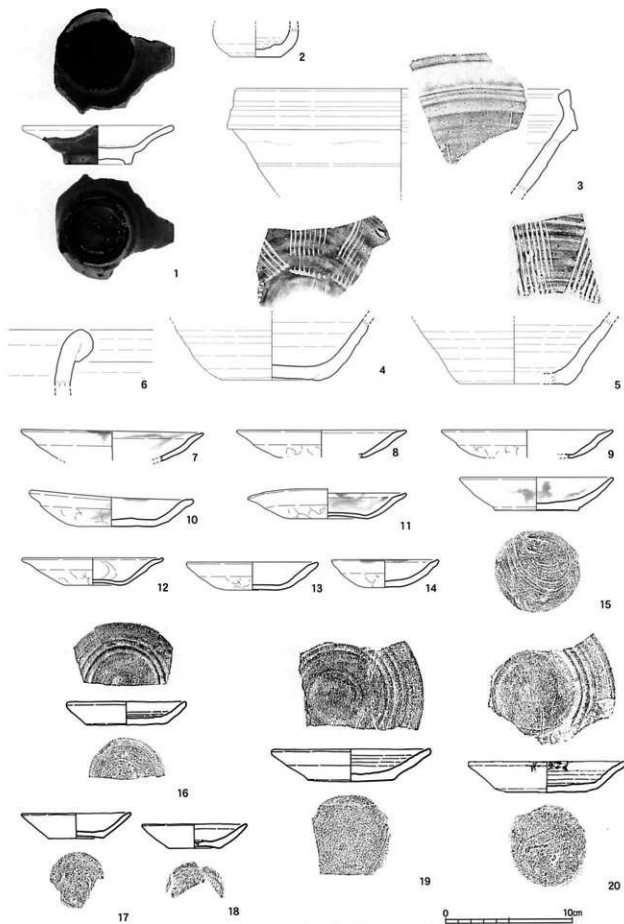
万寿寺北側を
画する堀

中世6期

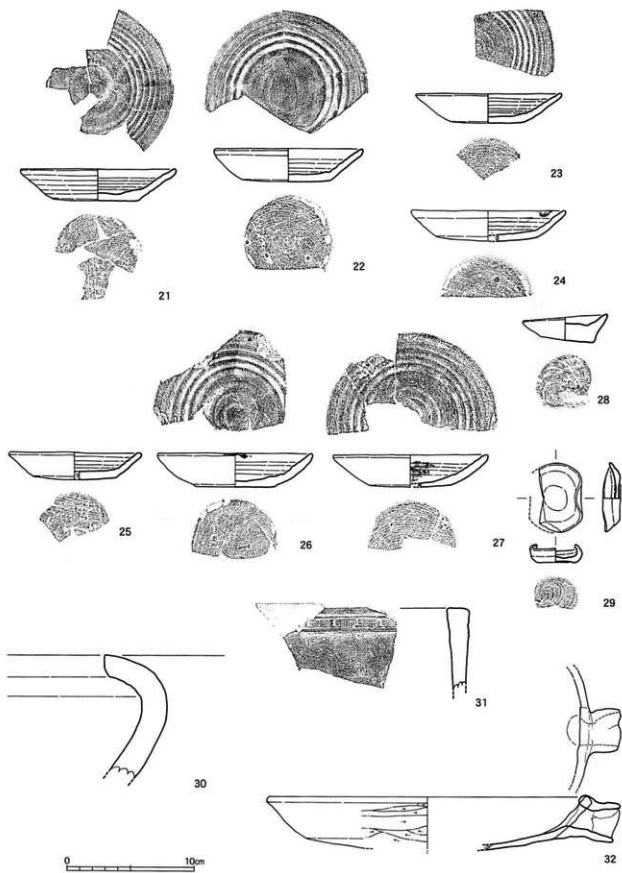
16世紀前葉

(1)大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内2 中世大友府内町跡第9次・第13次・第21次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 2005年)

第2節 遺構と遺物

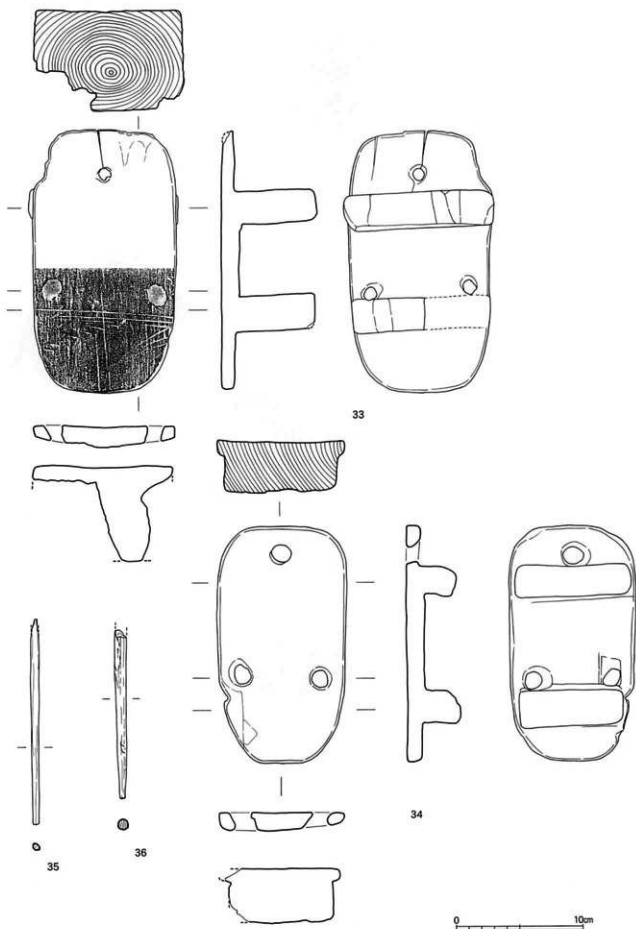


第4-29回 C-SD10出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-30圖 C-SD10出土遺物実測図(2) (1/3)

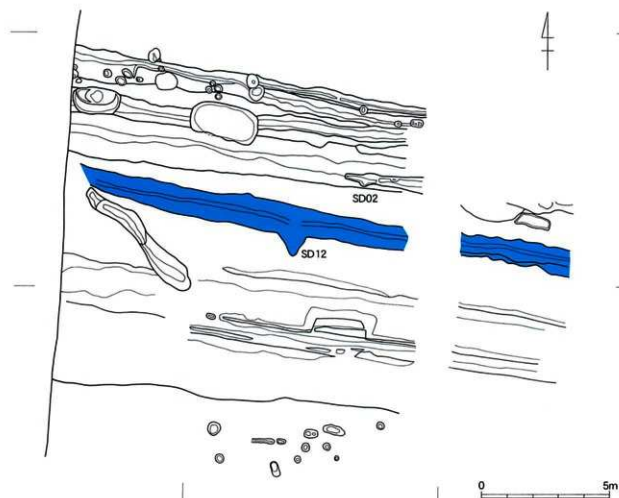
第2節 遺構と遺物



第4-31図 C-SD10出土遺物実測図(3) (1/3)

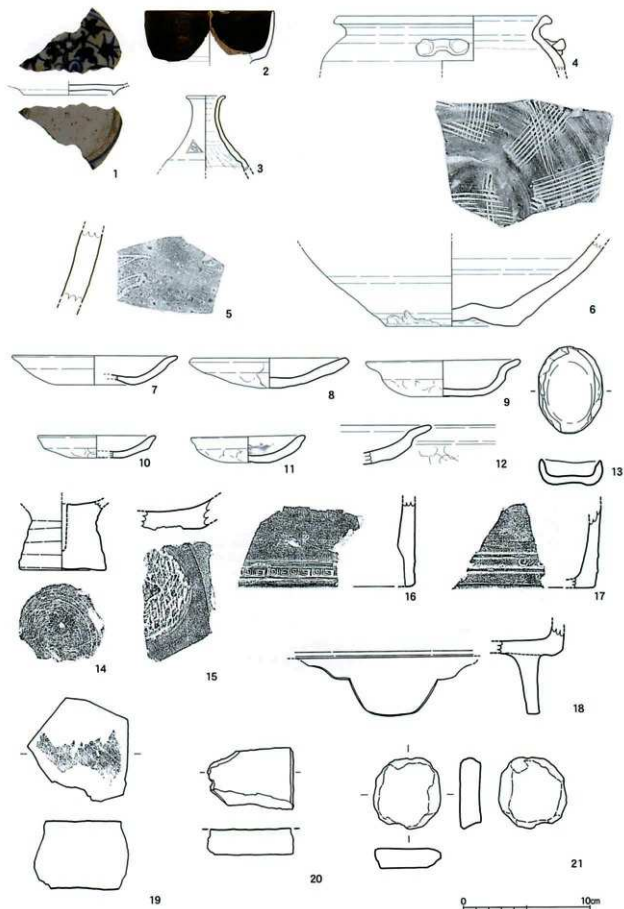
出土遺物(第4-29図-1~第4-31図-36)

- 龍泉窯系青磁皿 1は、龍泉窯系青磁皿である。底部には高台が付き、腰部下で折れて外反気味に口縁部が開く。2~6は備前系陶器である。2は小壺、3~5は播鉢、6は甕である。播鉢に関してはナナメスリ放射状スリメが見られず、すべて放射状スリメである。また口縁部の形態が判る3については、口縁部文様帯が発達するものの、凹線はさほど多条化しておらず、口縁端部のナデによる先細りも見られない。したがって中世6期に比定できるものと思われる。
- 京都系土師器 7~14は京都系土師器の皿である。C-SD01のものとは明らかに異なり、大半の資料の器壁が薄く、1期に位置づけられると思われる。中には10のように器壁が厚くナデが明瞭なものや15のように京都系土師器の胎土を持ち、糸切り痕を有する「折衷様式」のものも見られるが、これはC-SD01資料の混入として捉えておきたい。
- 顕著な口クロ目 16~28は在地系土師質土器の皿である。底部から口縁部に向けて直線的に開き、内面に顕著な口クロ目を残す。また底部には糸切り痕が見られる。中には20・24・26・27のように口唇部にススの付着が認められるものがあり、灯明皿として使用されたものと思われる。器高が15世紀末葉~16世紀初頭頃の資料に比べると低くなっている傾向があり、16世紀前葉に比定できよう。28の小皿については、若干形態が異なり混入品かもしれない。また29は耳皿である。
- 30~32は瓦質土器で30は鉢、31は火鉢である。31は口縁部に雷文帯が巡る。32は焙烙である。
- 連南下駄 33~36は木製品である。33・34は下駄で、いずれも連南下駄である。35・36は箸状木製品である。これらの木製品はC-SD01でかなりの出土が見られており、その混入かもしれない。

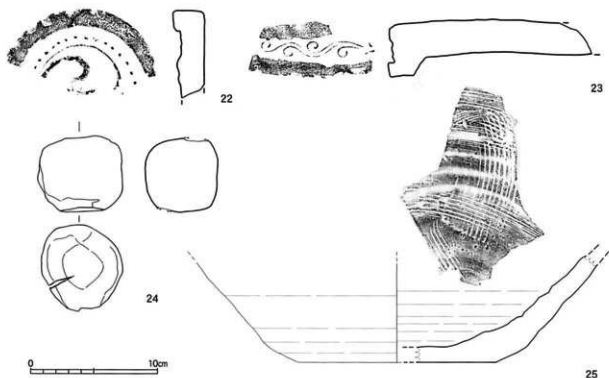


第4-32図 C-SD02・SD12実測図(1/150)

第2節 遺構と遺物



第4-33図 C-SD02出土遺物実測図 (1/3)



第4-34図 C-SD02・C-SD12出土遺物実測図 (1/3)

C-SD02・C-SD12 (第4-32図)

C-SD02は、C-SD01とはほぼ併行して東西に延びる溝で、確認できている長さで約20m、幅1m、深さ0.6mの規模を有す。C-SD01の北側に接するように延びており、両者の切り合い関係は東壁の土層観察からも判別できない。出土する遺物も3期の京都系土師器の皿や近世1期の備前系陶器播鉢などが主体で、C-SD01とほとんど時期差が認められない。したがって、C-SD01とは併存したか、もしくはさほど時期を置かない段階で存在したものと考えられる。ただ一つの可能性として、C-SD01直上の10層(第4-3図の調査区東壁土層図参照)がシルト層であり、C-SD01が埋まった後しばらくの間空地であった可能性を示している(道路の可能性もある)。このシルト層の面を北側(図面では左側)へ追っていくとC-SD02の掘形へつながっていく。高さはかなり違うが、C-SD01の直上が沈下したと考えれば、このシルト層の面の段階に、C-SD02は併存していた可能性があり、そうした場合C-SD02はC-SD01よりも新しいということになる。また、このシルト層がもし道路であったならば、併存するC-SD02は道路側溝としての位置づけも可能であるが、今のところこのシルト層を道路と断定できる材料もなく、今後更なる検証が必要である。

次にC-SD12は、C-SD02に直交するように短く延びる溝で、長さ2m、幅1.2m、深さ0.5mの規模を有す。近世1期の備前系陶器播鉢が出土しており、C-SD02とさほど時期差がないと思われ、併存した可能性もある。

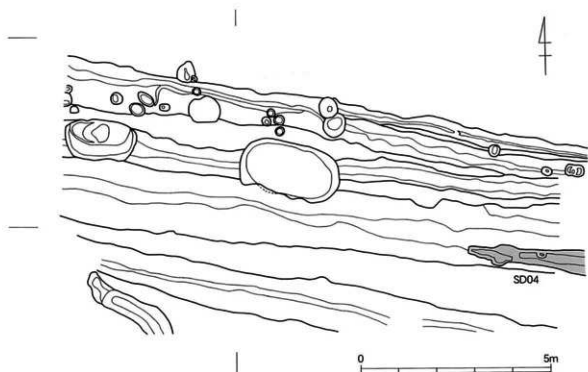
出土遺物(第4-33図-1~第4-34図-25)

瀬戸美濃系陶器

1は景徳鎮窯系の皿で、見込に文様が描かれる。2は瀬戸美濃系陶器で碗と思われる。3~6は備前系陶器で、3は德利、4は四耳壺である。5は裏で胴部に文字が刻まれる。6は播鉢で、ナメスリメが見られ、近世1期のものと思われる。7~12は京都系土師器の皿で器壁が厚く、口縁部下のナデも明瞭であることから2期~3期のものと思われる。13は耳皿、14は獨台でいずれも土師質土器である。15~18は瓦質土器で、15は風炉、16~18は火鉢である。16は雷文、17は双頭獣手流雲文が施される。19は石白か茶白、20は砥石、21は円盤状土製品である。22は軒丸瓦、23は軒平瓦、

佳杖の佳

24は佳杖の佳である。25のみがC-SD12出土で、備前系陶器播鉢である。



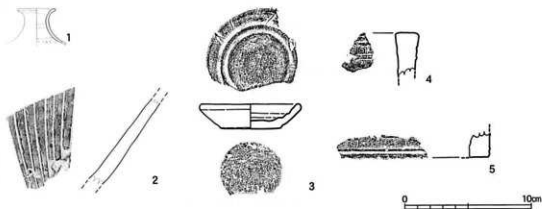
第4-35図 C-SD04実測図 (1/100)

C-SD04 (第4-35図)

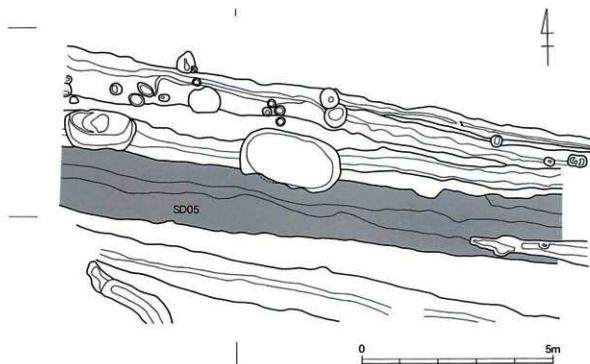
調査区の東隅L-37区で検出された短い溝で、確認長3.2m、幅0.6m、深さ0.6mの規模を有して東西南方向へ延びる。調査区東壁の土層を見る限り、C-SD01が埋まった後その上に堆積した層も切っているため、C-SD01等よりも新しく近世まで下るかもしれない。しかしながら、出土する遺物は16世紀代のもものが主体であり、C-SD04の上部にある2層(53・54層)は掘り返し後の層かもしれない。出土遺物が稀少なために、遺物から時期の認定を明確にすることは困難であるが、ただいずれにしても、C-SD01が埋まった後の溝であることは間違いないと思われ、万寿寺の区画とは別のものであろう。

出土遺物 (第4-36図1~5)

徳利 1は備前系陶器の徳利で、2は丹波系陶器の播鉢であろうか。3は、15世紀末葉~16世紀前葉に位置づけられる在地系土師質土器の小皿で、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、内面には顕著にロクロ目が残る。底部は糸切り痕が残る。4・5は瓦質土器の火鉢の口縁部と底部付近の破片で、両者とも雷文が巡る。



第4-36図 C-SD04出土遺物実測図 (1/3)

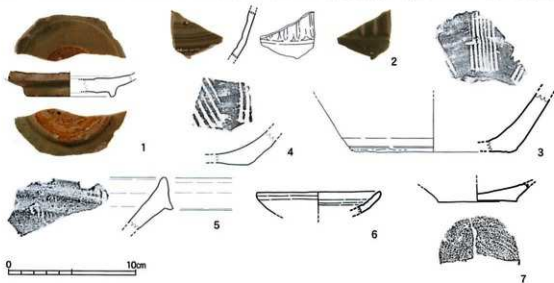


第4-37図 C-SD05実測図 (1/100)

C-SD05 (第4-37図)

C-SD01の北側 (K-37区・L-37区) をほぼ併行して東西に延びる溝で、確認長13.4m、幅1.5m、V字形の掘形 深さ1.5mの規模を有する。溝は断面V字形の掘形をなす。土層観察から把握できる前後関係については (第4-3・4図参照)、まず調査区東壁の土層より、C-SD04よりは古く、C-SD08より新しいことが判る。C-SD01とは接しておらず、前後関係は不明である。次に調査区西壁の土層では、SK08とSK10の上に堆積する1・2層には切られているが、SK08・SK10との前後関係については土層からだけでは不明といわざるを得ない。北側のC-SD08との関係については、東壁同様C-SD08よりも新しいことが判る。

次に出土遺物を見てみると、出土量はさほど多くはないが、中世4期の備前系陶器插鉢や内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの在地系土師質土器の皿等が出土しており、出土する遺物の大半は15世紀代のものである。さらに昨年度本調査区の西側隣接部分を調査しており (第51次調査区)、



第4-38図 C-SD05出土遺物実測図 (1/3)

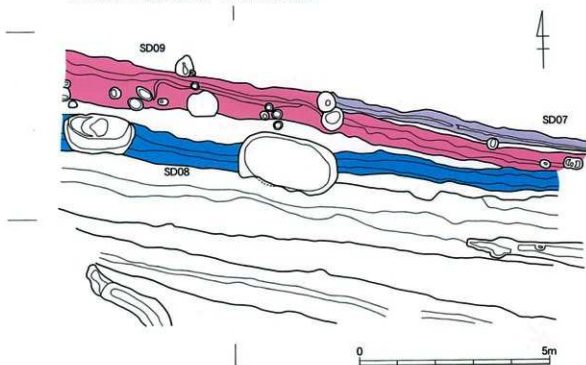
このC-SD05の延長部分と思われる溝が検出されている。そこから、胎土は白色を呈し、薄手の器壁で、内外面にロクロ目を顕著に残す土師質土器が出土している。このタイプの土師質土器は、中世大友府内町跡では15世紀後葉の遺構から出土しており、本調査区で出土する遺物と時期的にも齟齬がない。よって遺物から判断する限りでは、C-SD05は15世紀代に掘られ、15世紀後葉～末葉の段階で埋まっているものと考えられる。

溝の方向から考えると、C-SD01等と同じような性格が感じ取られるが、果たしてこれが万寿寺の北の区画に関連するものであるかどうかは現時点では不明である。ただ、構築時期の順序で考えると、近接する空間にC-SD05→C-SD10→C-SD01と同じ軸性を持って掘られている点は注目に値する。

出土遺物 (第4-38図1~7)

龍泉窯系青磁 1・2は龍泉窯系青磁である。1は碗の底部で高台が付く。2は碗もしくは香炉か。表には蓮弁のような文様が描かれる。3~5は備前系陶器播鉢である。3・4は底部から胴部の破片で、放射状スリメが見られる。5は口縁部であるが、口縁の上方への拡張が始まりかけている段階で、口縁下角が垂下している。乗阿彌年の中世4期に比定され、15世紀前半段階に位置づけられよう。

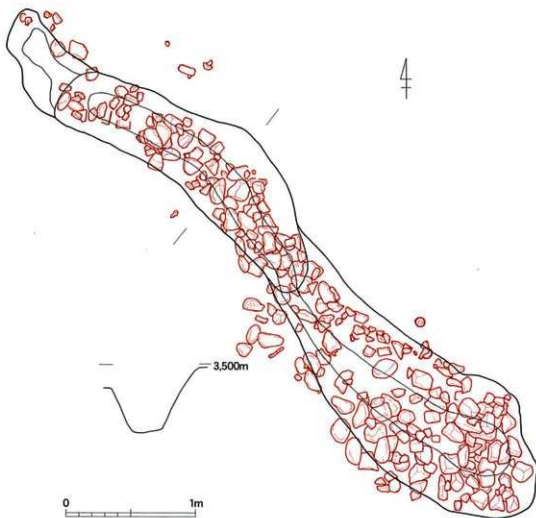
ロクロ目 6・7は在地系土師質土器の皿で、底部から口縁部に向けて直線的に開き、内部にロクロ目を顕著に残す。7は底部の破片で糸切り痕が残る。



第4-39図 C-SD07・C-SD08・C-SD09実測図 (1/100)

C-SD07・C-SD08・C-SD09 (第4-39図)

本調査区の北側 (K-37区・L-37区) を東西に延びる溝で、それぞれの規模はC-SD07が確認長6.9m、幅0.5m、深さ0.4m、C-SD08は確認長13.6m、幅0.9m、深さ0.2m、C-SD09は確認長14.2m、幅0.9m、深さ0.4mである。3条ともほぼ同じ方位で延びるが、すべて切り合っており、時間差がある。まず、C-SD07はK-37区とL-37区の境付近でC-SD09に切られている。またC-SD09は調査区東隅でC-SD08に切られている。よって3条の溝の前後関係は古い順にC-SD07→C-SD09→C-SD08となる。出土遺物が希少で時期の認定が困難であるが、C-SD08が15世紀代の溝C-SD09に切られていることから、3条ともそれ以前であることが判る。



第4-40図 C-SD11実測図 (1/30)

C-SD11 (第4-40図)

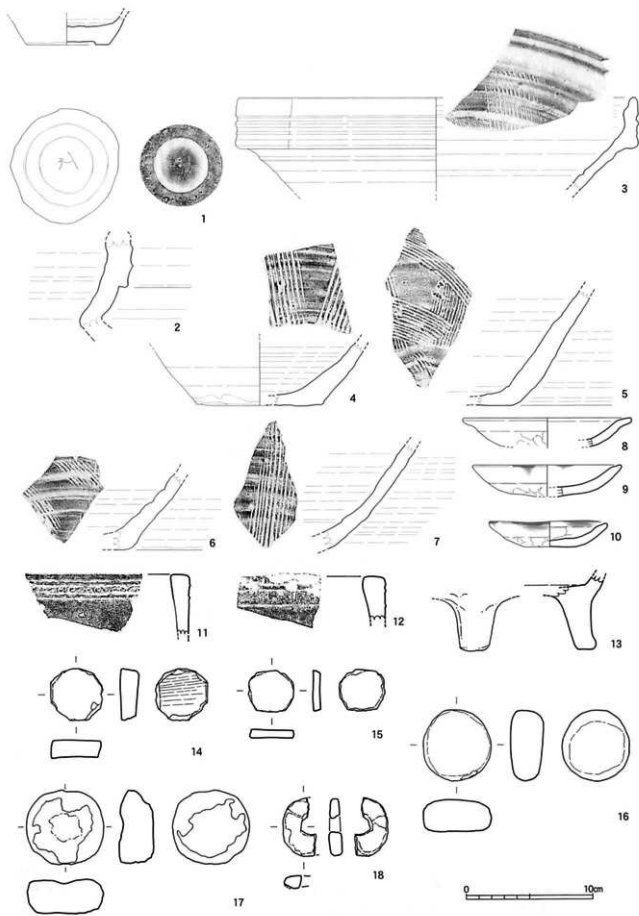
調査区西側K-37区に位置する溝状の遺構で、本調査区で検出される他の溝とは方向を違え、南方向へ軸を振っている。長さ5.6m、幅1.1m、深さ0.4mで大量の石も検出している。

この溝の性格についてであるが、まずC-SD01の直上にありながら、C-SD01が検出された時にこのC-SD11の存在は確認されておらず、C-SD01を掘り下げていく過程で初めて検出された。溝から出土する遺物は、近世1期の備前系陶器搦鉢や3期の京都系土師器皿で、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。この遺物構成は、直下に存在するC-SD01とほとんど同じである。さらに、この溝の底は南西方向、つまりC-SD01の中央部に向けて下がりながら延びている。

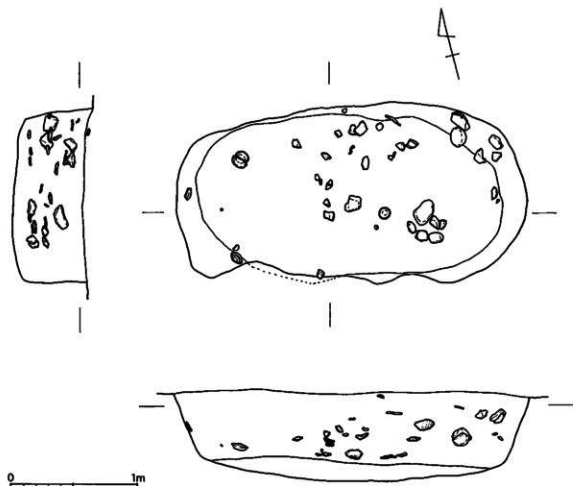
以上より、C-SD01上にありながら掘形を確認できず、他の溝と方向を違えてC-SD01の中央つまり底の方へ下がり下っていくという形状、そして出土する遺物はC-SD01とほとんど同時期ということをも案すると、このC-SD11は独立した一つの溝というよりは、C-SD01が埋まっていく形成過程で自然発生的に生じた、溝状の堆積と考えた方がよさそうである。

出土遺物 (第4-41図-1~18)

1～7は備前系陶器である。1は徳利の底部で、底面にヘラ記号がある。2は大甕の口縁部、3ナナメスリメ、4～7は搦鉢である。先細りした口縁部やナナメスリメ等から近世1期に比定できる。8～10は京都系土師器の皿で、3期に比定できる。11・12は瓦質土器の火鉢の口縁部で、11は双頭葺手流雲文、12は雷文が巡る。13は瓦質土器火鉢の脚部である。14～18は円盤状製品で、14は備前系陶器、15は瓦質土器、16～18は石製品である。18は中央部が穿孔され、環状になる。



第4-41图 C-SD11出土遺物実測図 (1/3)



第4-42図 C-SK01実測図 (1/30)

2. 土坑

C-SK01 (第4-42図)

L-37区に位置し、楕円形状を呈する土坑である。長径は2.8m、短径1.4m、深さは0.5mほどである。埋土は途中で炭の堆積層が認められることから、廃棄行為に伴う土坑であると考えられる。

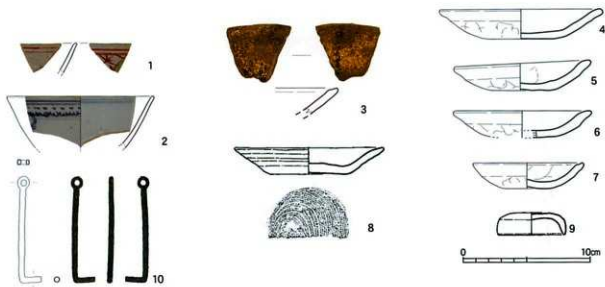
土坑の位置する所には溝C-SD05・C-SD08が通っているが、いずれも切って形成されている。さらに遺構内からは、中国産の五彩、景德鎮窯系青花、2～3期の京都系土師器の皿等が出土していることから、遺構の時期は16世紀後半代に位置づけられる。

この土坑C-SK01は、ほぼ同時期に存在したと思われる万寿寺の堀であるC-SD01の北側に位置することから、万寿寺の寺城外の遺構である。万寿寺の北側には、府内古図によれば「御内町」が存在している。この北側延長線上には既に第21次調査区等で発掘調査が行われており、御内町の裏手の遺構と思われるものが確認されている。具体的には井戸や廃棄土坑が中心となって検出されており、本遺構C-SK01もその一連のものである可能性がある。

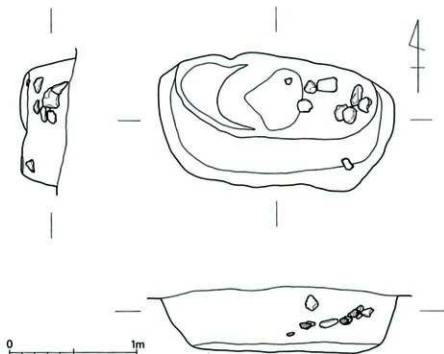
出土遺物 (第4-43図-1～10)

五彩 1は景德鎮窯系五彩の碗で、口縁部内面に界線、外面にも界線とその下に文様が描かれる。2は景德鎮窯系青花の碗で、口縁部外面に波濤文の崩れたような文様帯が巡る。3～7は京都系土師器の皿で、器壁が比較的厚くなり、口縁部下のナデも明瞭になっている。2～3期に位置づけられる。また、3は表裏に金箔が貼られている。8は口縁部が直線的に開き、外面に顕著にロクロ目を残す在地系土師器の皿である。9は焼塩壺の蓋と思われる。10は青銅製の甕である。

第2節 遺構と遺物



第4-43図 C-SK01出土遺物実測図 (1/3)



第4-44図 C-SK05実測図 (1/30)

C-SK05 (第4-44図)

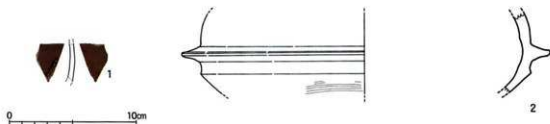
K-37区に位置する土坑で、長径1.9m、短径1.0mの隅丸方形プランを呈する。深さは0.4mほどである。出土遺物は希少であるが、朝鮮王朝産の舟徳利が出土しており、16世紀後葉～末葉にかけて掘られたものと思われる。C-SK05はC-SK01から5mほど西へ離れて、同じような軸性をもって位置している。規模はひとまわりほど小さいもの、出土する遺物から存在した時期は近いと考えられる。さらに立地的にも方向的にも近いことから、同じような性格の土坑と思われる、廃棄土坑として位置づけしておく。

廃棄土坑

出土遺物 (第4-45図-1・2)

舟徳利

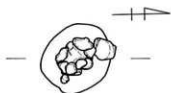
1は朝鮮王朝産舟徳利の胴部、2は瓦質土器の羽釜の胴部である。



第4-45図 C-SK05出土遺物実測図 (1/3)

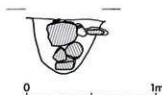
C-SK06 (第4-46図)

L-37区に位置し、C-SD09を切って掘られている土坑で、長径0.6m、短径0.5mのほぼ円形に近いプランを呈する。深さは0.4mほどである。土坑内にはぎっしりと礫が詰まっているが、時期を認定できるような遺物の出土は見られない。



C-SK08 (第4-47図)

K-38区に位置し、C-SD01及びC-SK10を掘り下げ途中に確認された土坑である。半分が調査区外に及ぶため、プランの全形は不明であるが、楕円形状を呈するものと思われる。確認されている規模は、長径1.2m、短径0.5m、深さは0.4mほどである。埋土には炭がかなり入っており(第4-4図参照)、廃棄土坑と思われる。



第4-46図 C-SK06実測図 (1/30)

C-SD01が埋まった後に掘られており、さらにはC-SK10をも切っている。出土する遺物には3期の京都系土師器皿等が見られ、16世紀後葉～末葉に位置づけられる。切り合い関係からC-SD01やC-SK10よりも新しいが、それほど時間差はないものと思われる。

出土遺物 (第4-48図-1~3)

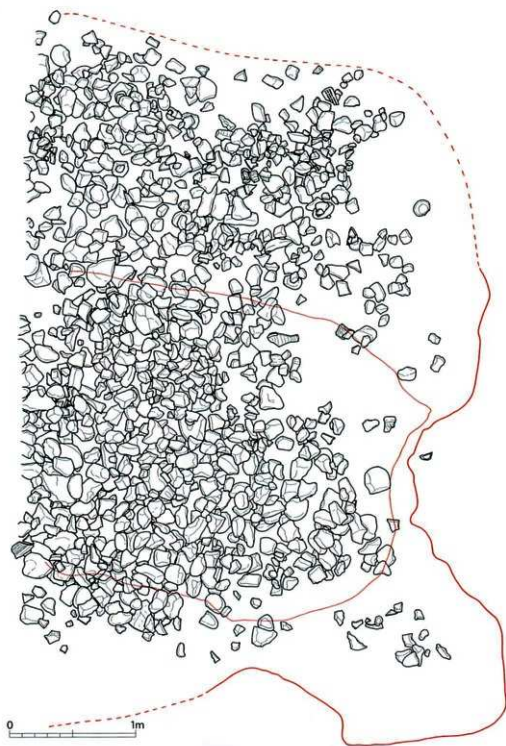
1は景徳鎮窯系白磁の蓋である。2は中国産の褐釉陶器の胴部片であるが、器種は不明である。3は京都系土師器の皿で、器壁が厚くナデが明瞭であることから3期に位置づけられる。



第4-47図 C-SK08実測図 (1/30)



第4-48図 C-SK08出土遺物実測図 (1/3)



第4-49図 C-SK10実測図 (1/30)

C-SK10 (第4-49圖)

大泉の石

K-37区・K-38区に位置する土坑である。当初C-SD01の直上で大量の石が集中する範囲が確認され、その範囲内の遺物を分けて取上を行った。ただ、C-SD01の埋土を掘りこんで形成されているために、C-SD01とC-SK10の埋土の差を平面的に拾っていくのが非常に困難で、さらには石が大量に入っていたこともあって、土坑の底のプランは明確に把握できなかった。そこで石が集中している範囲と調査区西壁土層の所見から、おおよその規模を割り出してみると、長径5.3m、短径3.6mほどであり、深さは西壁土層にかかっている所で0.5mほどである。深さについては実際はまだ深いものと思われる。なお、この土坑は調査区西側へと続いていくが、平成17年度に実施された第51調査区でその続きが確認されている。

C-SD01の直上

出土する遺物には、近世1期の備前系陶器鉢鉢や3期の京都系土師器の皿などが見られ、16世紀後半～末葉に位置づけられる。C-SK10は万寿寺北境の堀であるC-SD01の直上に位置していることから、C-SD01が埋まった後に掘られているわけであるが、出土する遺物に大きな時期差は認められない。さらにC-SD01が埋まった後、その直上は道路になっていくことが確認されていることから、このC-SK10は掘ってすぐ埋められたものと考えられる。そして大量の石が埋められているのは、このC-SK10の直下がC-SD01のコーナー付近(万寿寺北西隅のコーナー)であるがために、かなりの地盤沈下が起こり、それを補強する目的だったのではないかとと思われる。

地盤沈下

出土遺物 (第4-50圖-1～第4-54圖-62)

備前系青花
蛇の目輪割ぎ

1は備前系青花の皿である。底部から口縁部にむけて内湾気味に立ち上がり、底部には高台が付く。胴部内外面と見込に文様が描かれる。見込は蛇の目輪割ぎがなされる。2～6は京徳鎮窯系青花である。2は京徳鎮窯系青花の壺である。内面は露胎で、外面には鳳凰の尻尾の部分が描かれている。3は碗で、胴部外面に文様が描かれる。4も碗で、見込部分がわずかに盛り上がり、恐らく饅頭心を呈するものと思われる。見込には花卉文、高台内部には字款が描かれる。E群と思われる。5は壺で斜めにつばが付く。つばの内面には文様が描かれる。6は小壺である。外面には文様が描かれ、内面は露胎となる。

朝鮮王朝産白磁

7は朝鮮王朝産の白磁皿の高台である。高台内部まで施釉され、見込には目跡がみられる。8は中国南方産の白磁皿で、見込は蛇の目輪割ぎがなされる。9は龍泉窯系青磁碗の高台部分である。10・11は華南三彩である。9は鯛か羽のような文様が見られる。11は文様が見えず、器形も不明である。12は中国産翡翠軸の皿である。口縁部はつばがつき、輪花をなす。

華南三彩

13は瀬戸美濃系陶器の皿である。口縁部が外側に折れるいわゆる折縁皿である。大量の3期に比定される。14も瀬戸美濃系陶器で天目碗である。

把手付水注

15～27備前系陶器である。15は把手付水注である。胴部にはロクロ成形による凹凸が残る。上端の一方には注ぎ口を付け、その反対側には粘土紐を貼り付けて把手を付けている。底面にはヘラ記号がみられる。16・17は壺であるが、この内17の壺の胴部には、もう一個体の壺の胴部と思われる部分が付着していた。よって、図に示したように2つの壺が連結した二重壺であると思われる。18・19は鉢である。いずれも胴部が内湾し、19は口縁端部が短く立ち上がる。20～24は鉢鉢である。口縁部が発達し凹縁が多条化する。口縁端部が強いナデで先細りし、スリメはナメスリメである。近世1期に比定できる。25は水屋壺、26・27は大甕である。

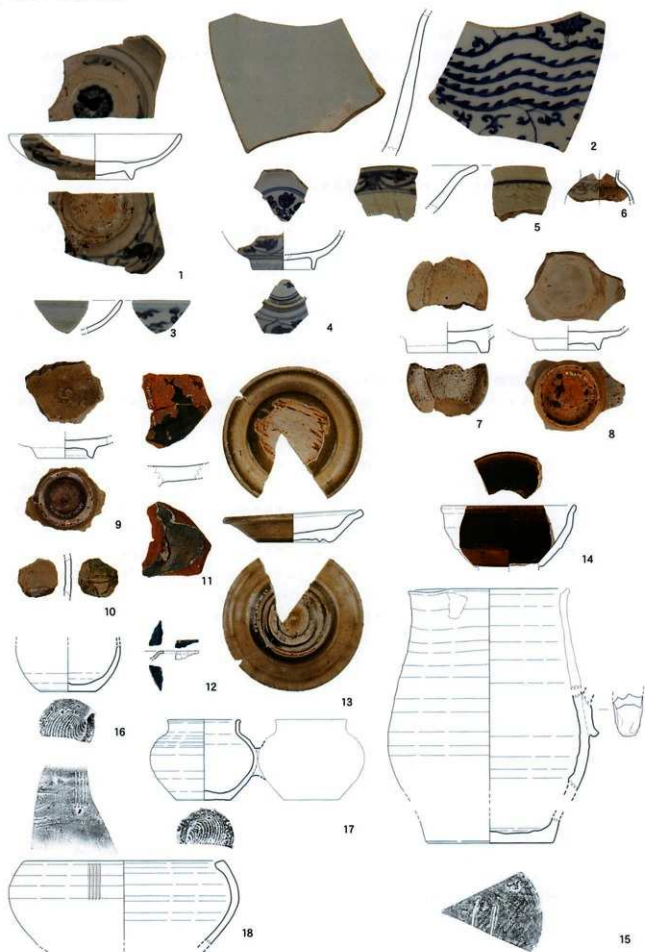
二重壺

28～48は京都系土師器である。28～42は皿、43～48は坏である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデが強い。3期に比定できる資料である。49・50は土師質土器の焼塩壺である。

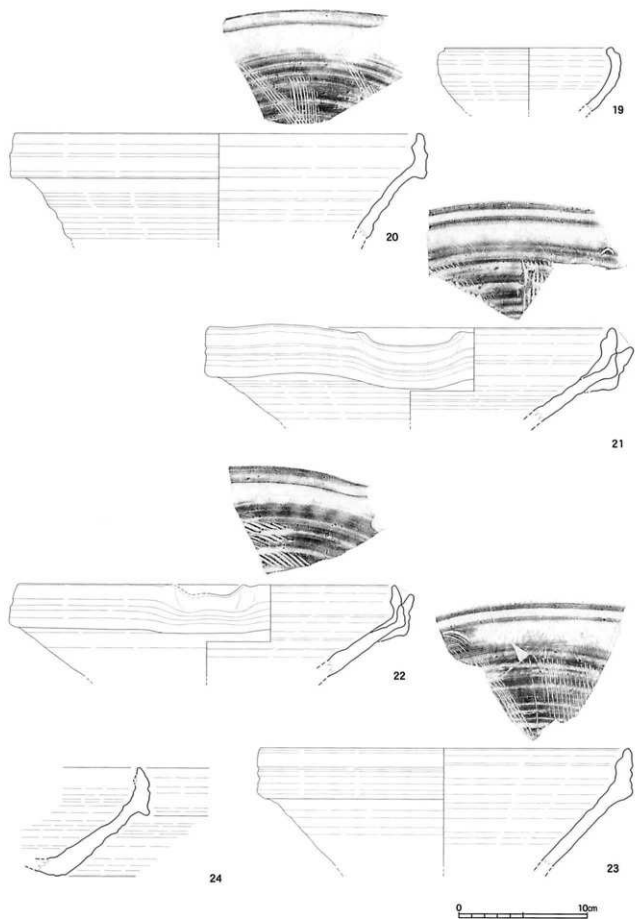
防長系鉢鉢

51～80は瓦質土器である。51～53は鉢で51は脚が付く。54～56は防長系の鉢鉢で、この内55はC-SD01上層で出土した資料と接合した。57～59は火鉢である。57は脚部、58・59は口縁部の破片で、58・59は雷文が走る。60は風炉の脚部か。

61・62は石臼である。

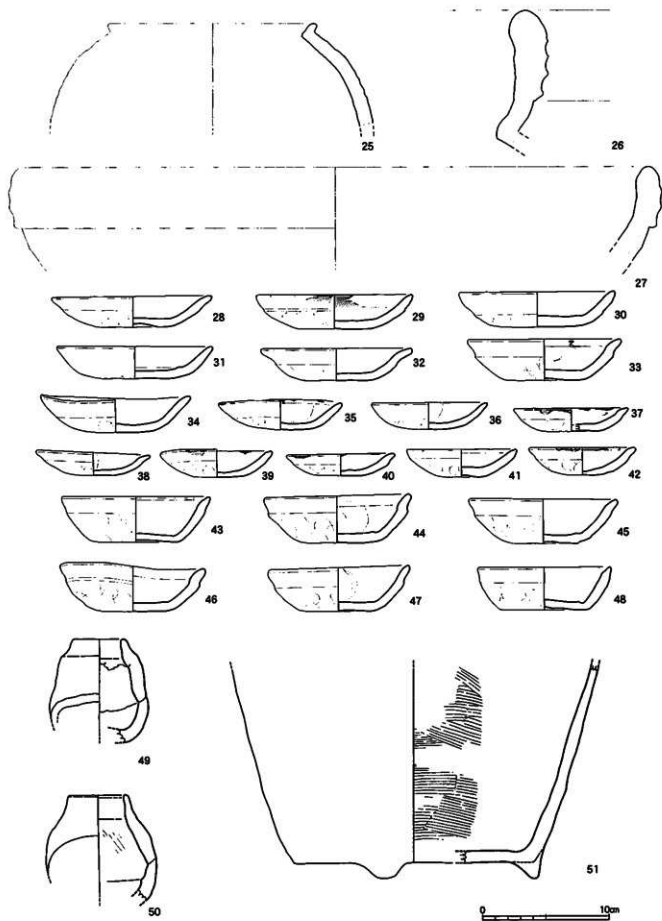


第4-50図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)

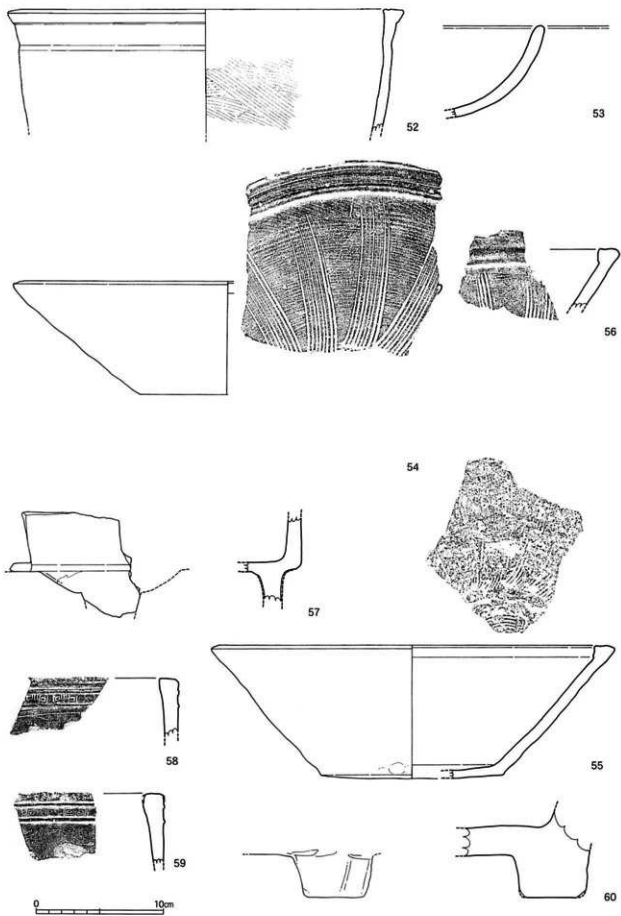


第4-51図 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)

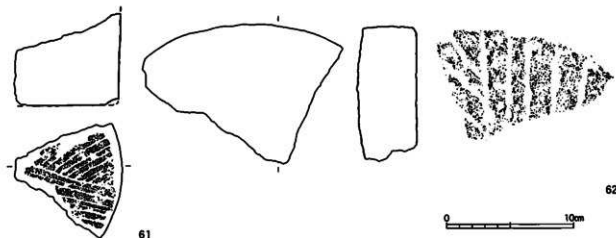
第2節 遺構と遺物



第4-52图 C-SK10出土遺物実測图 (1/3)



第4-53图 C-SK10出土遺物実測図 (1/3)

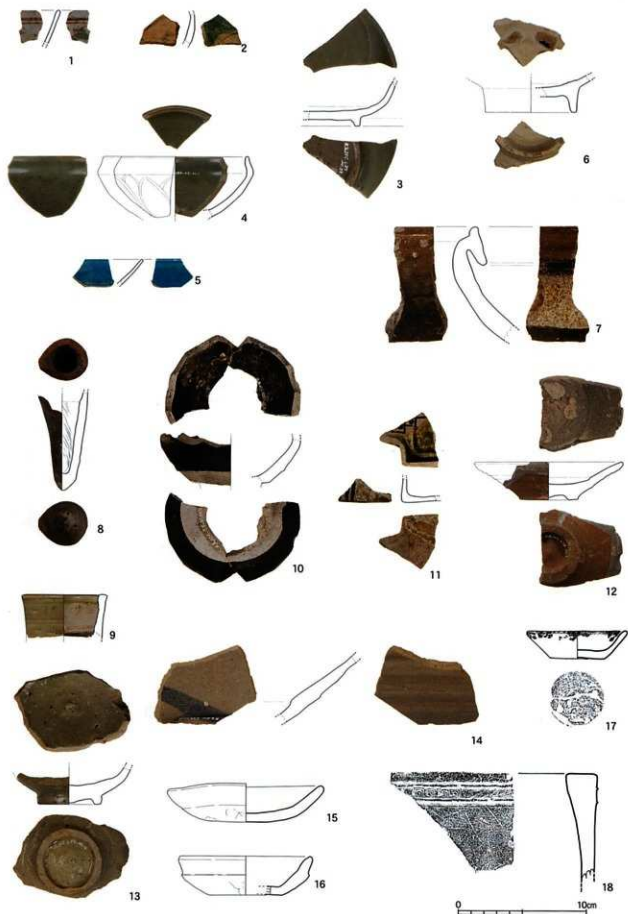


第4-54図 C-SK10出土遺物実測図(4)

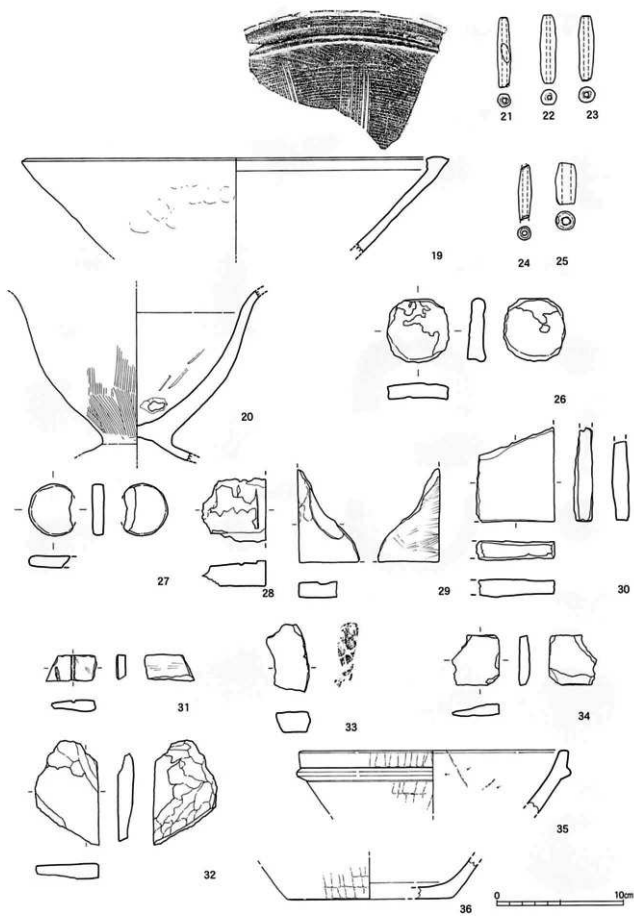
3. 包含層出土遺物(第4-55図-1~第4-58図-44)

包含層・トレンチ・表土等で出土した遺物を一括して掲載した。包含層とは、各遺構の検出面より上層部分を指し、第4-3図の調査区東壁土層図で言えば1~10層、第4-4図の調査区西壁土層図で言えば1・2層が該当する。またトレンチは調査当初、調査区東隅に南北方向に入れて行い、そこから出土した遺物は大半が包含層とSD01のものである。遺物は種類毎に掲載し、以下その順にしたがって触れていく。

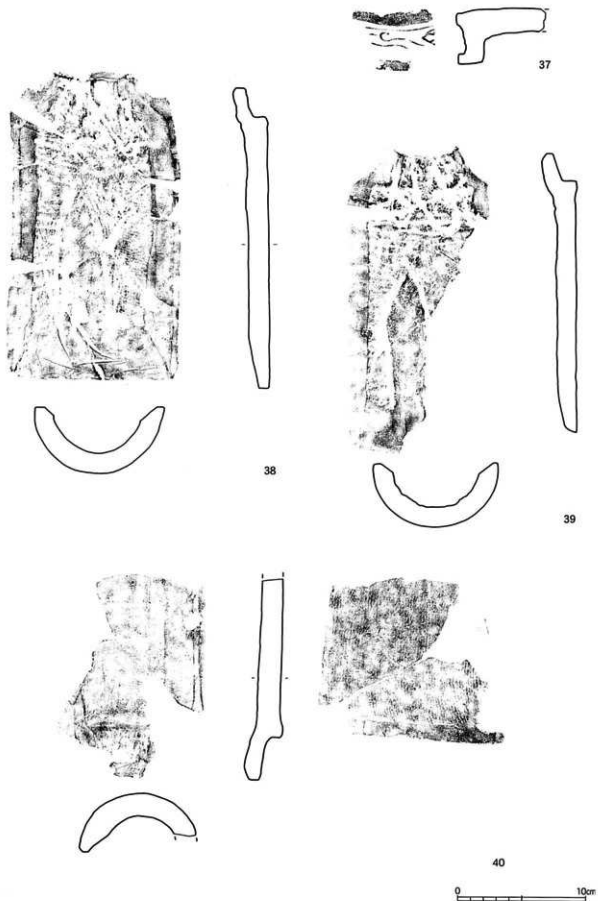
- 五彩
 華南三彩
 翡翠軸
 掛花入
 織部系陶器
 向付
 灯明皿
 赤間硯
 滑石製石罨
 メダイ様金属
 製品
- 1~6は輸入陶磁器である。1は景德鎮窯系五彩の碗で、口縁部内外面に界線が走り、その下に文様が描かれる。2は華南三彩で、外面には文様が描かれるが、器種は不明である。3・4は龍泉窯系青磁の碗である。3は高台部分、4は口縁部がくの字状に内傾し、胴部に蓮弁文がみられる。5は中国産翡翠軸の皿である。口縁部は直線的に開く。6は朝鮮王朝産の白磁の碗である。見込には目跡があり、漆離ぎが認められる。
- 7~14は国内産陶器で、7は常滑系陶器の甕の口縁部である。8は備前系陶器で掛花入である。筒状の器形を呈し底部がとがる。9・10は瀬戸美濃系陶器で9は香炉、10は天目である。11は織部系陶器で向付である。直立する口縁の外面と見込に文様が描かれる。12~14は肥前系陶器である。12は皿で低い高台が付く。外反気味に口縁部が開く。見込には砂目が付く。13は碗の底部で高台が付く。14は鉢であろうか。内外面に文様が見られる。
- 15・16は京都系土師器である。15は皿、16は坏である。いずれも器壁が厚く、口縁部下のナデも顕著で、3期に位置づけられる。17は在地系土師質土器で底部に糸切り痕が認められる。口唇部にはススが付着しており、灯明皿と思われる。18・19は瓦質土器である。18は火鉢の口縁部で雷文が走る。19は防長系滑鉢である。20は古墳時代の甕である。
- 21~25は土埴である。26・27は円盤状土製品。いずれも瓦質土器を加工している。28~30は硯である。28・29は赤間硯、30は砥石の可能性もある。31~34は砥石である。この内31は有溝の砥石である。35・36は滑石製の石罨である。
- 37~41は瓦で、37は均整唐草文軒平瓦で中心飾りは変形四蓋文である。38~41は丸瓦である。
- 42は青銅製の鏡、43は鉛玉である。44はメダイ様金属製品である。楕円形部分の上に、鋸の部分が付く。穿孔は不明である。鉛同位体比の結果、鉛玉は国内産、メダイ様金属製品は現在未知の領域とされている産地データを示した。(詳細は第5章自然科学的分析の項を参照)



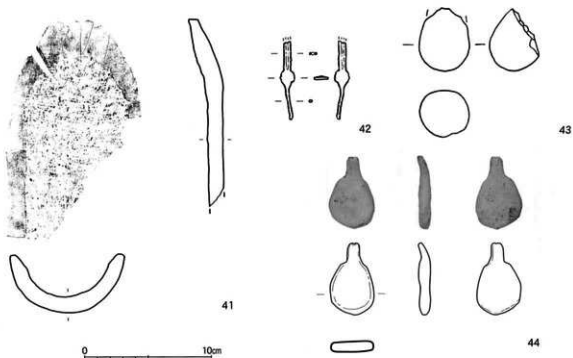
第4-55図 包含層 出土遺物実測図(1) (1/3)



第4-56回 包含層 出土物実測図(2) (1/3)



第4-57图 包含層 出土遺物実測図(3) (1/3)



第4-58図 包含層 出土遺物実測図(4) (1/3) ※43・44のみ1/1

銭貨 (第4-59図-1~第4-60図-36)

C-SD01・C-SD10出土銭貨 (第4-59図-1~第4-59図-13)

1は文字が判読できない。2は皇宋通寶で北宋銭。初鑄造年は1038年で、篆書である。3は元祐通寶で北宋銭。初鑄造年は1086年である。4は紹聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1094年である。5は政和通寶で北宋銭。初鑄造年は1111年で、真書である。また 錆が付着している。6は元豐通寶で北宋銭。初鑄造年は1078年で、篆書である。7は判読できる文字が「寶」のみである。8は元豐通寶で北宋銭。鑄造年は1078年で、篆書である。9は判読できる文字が「寶」のみである。10は聖元元寶で北宋銭。初鑄造年は1101年で、篆書である。11は熙寧元寶で北宋銭。初鑄造年は1068年で、真書である。12は紹聖元寶で北宋銭。初鑄造年は1094年で、行書である。13のみC-SD10出土で、皇宋通寶である。北宋銭で初鑄造年は1038年である。篆書である。

C-SD02出土銭貨 (第4-59図-14)

14は祥符通寶で北宋銭、初鑄造年は1008年である。

C-SD11出土銭貨 (第4-59図-15~第4-60図-19)

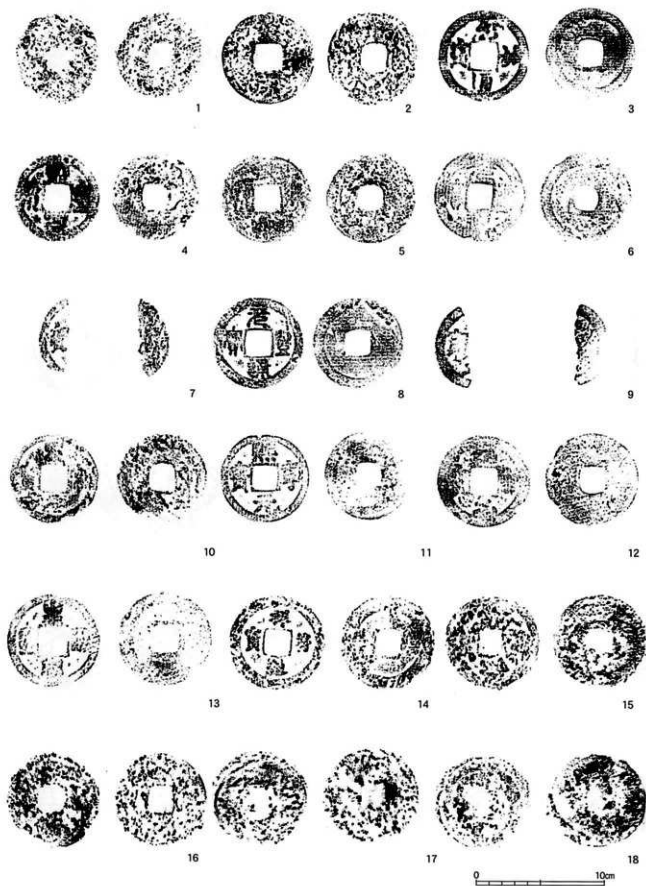
15~18は4枚重なった状態で出土した。錆付着しており、いずれも判読不能であった。19は、天聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1023年である。篆書である。

C-SK01出土銭貨 (第4-60図-20・21)・C-SK10出土銭貨 (第4-60図-22)

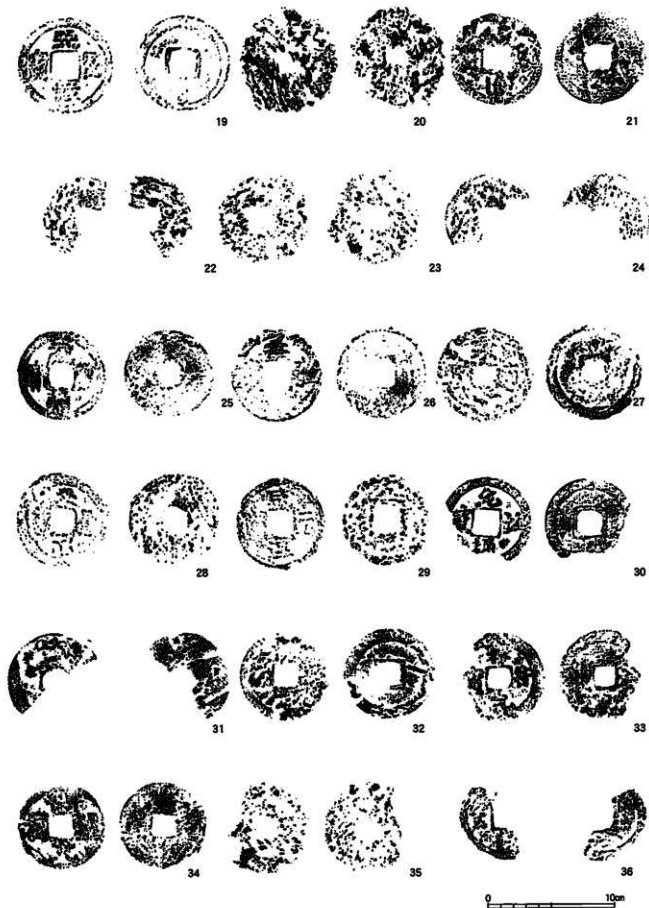
C-SK01で2、C-SK10で1枚出土しているが、いずれも錆で判読不能である。

包含層出土銭貨 (第4-60図-23~第4-60図-36)

23・24は錆で判読不能である。25は元豐通寶で北宋銭、初鑄造年1078年である。篆書である。26は嘉祐通寶で北宋銭、初鑄造年は1056年である。篆書である。27は永樂通寶で明銭、初鑄造年は1408年である。28は天聖元寶で北宋銭、初鑄造年は1023年である。真書である。29は咸淳元寶で南宋銭、初鑄造年は1265年である。背八である。30は元祐通寶で北宋銭、初鑄造年は1086年、一部欠損している。31・32は判読不能である。33は祥符通寶で北宋銭、初鑄造年は1008年である。34は開元通寶、初鑄造年は621年唐の時代である。35・36は判読不能である。



第4-59図 20次調査C区 出土銭貨実測図(1) (1/1)



第4-60圖 20次調査C区 出土錢貨実測圖(2) (1/1)

第3節 小 結

1. 各遺構の変遷過程

(第1段階：14世紀前葉～15世紀前葉)

C-SD07・C-SD08・C-SD09が存在していた時期である。遺構の切り合い関係から古い順にC-SD07→C-SD09→C-SD08となる。いずれの溝も遺物から時期認定ができないが、最も新しいC-SD08がC-SD05に切られており、C-SD05は15世紀代に位置づけられる。したがって3条の溝は全て15世紀代以前であることは間違いない。また、この溝のすぐ北側に隣接して第21次調査区があるが、その調査所見では、調査区南側に14世紀前葉～15世紀前葉の遺構が集中することが指摘されている。つまり位置的に、14世紀前葉～15世紀前葉の遺構は本調査区の3条の溝と関連がある可能性があり、よってこの段階に位置づけておく。

(第2段階：15世紀代)

C-SD05が存在していた時期である。中世4期の備前系陶器插鉢や内外面にロクロ目を顕著に残すタイプの在地系土師質土器等が出土しており15世紀代に掘られ、15世紀後葉～末葉の段階で埋まっているものと思われる。

(第3段階：16世紀前葉)

C-SD10が存在していた時期である。C-SD10はその大半をC-SD01に切られており、正確な規模は不明である。しかし一部確認されている深さが2.5mほどあることから、C-SD01ほどではないにしても、近い規模を有した可能性がある。C-SD01が万寿寺北境の堀であれば、この段階の堀も同様の位置づけができる。

(第4段階：16世紀後葉)

C-SD01が存在していた時期である。東西長20m、幅6.3m、深さ2.5mの規模を有し、万寿寺の北境となる堀である可能性が高い。堀内からは近世1期備前系陶器插鉢や京都系土師器3期等が出土しており、16世紀後葉に埋没している。またこの堀の東側延長線上は現大分川へと向かっており、もし川まで堀が続いていたとしたら、小舟等が入ってくる運河的な要素も推測される。

(第5-1段階・第5-2段階：16世紀後葉～末葉)

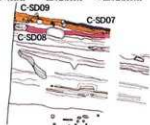
C-SD01が完全に埋没した段階で、大きく2段階認められる。この段階の溝としては、第5-1段階にC-SD02・C-SD12、第5-2段階にC-SD04がある。

第5-1段階では埋没したC-SD01の直上にシルト層の広がりが見られ、一定期間空地であったとみられる。この空地が道路として機能していれば、C-SD02はその側溝だった可能性もある。第5-2段階ではC-SD01直上に硬化面が認められ、道路の可能性が高い。位置の関係からC-SD04はその側溝の可能性があるが、部分的にしか検出できておらず明確なところは判らない。

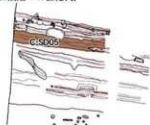
土坑については、第5-1段階から第5-2段階までの間のどこかに併存したと考えられる。中でもC-SK08・10については掘ってからすぐに埋められたものと思われる。そしてC-SK10に見られる大量の石の廃棄等は、その直上を硬化させる意図が感じられ、道路整備に伴うものであろう。また、C-SK01・05については、第2南北街路に面した、御内町の裏手に位置する廃棄土坑と思われる。

以上の道路の形成と、町屋の遺構の出現は、府内古園に描かれた万寿寺北の景観によく似ている。近年の調査成果から、府内古園は16世紀後葉以降（1570年代以降）の府内を描いた可能性が高く、本調査区の見解はその傍証となろう。

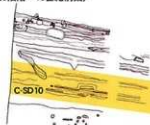
(第1段階：14世紀前葉～15世紀前葉)



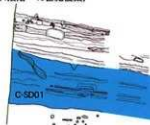
(第2段階：15世紀代)



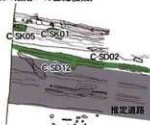
(第3段階：16世紀前葉)



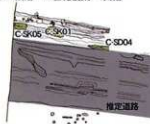
(第4段階：16世紀後葉)



(第5-1段階：16世紀後葉)



(第5-2段階：16世紀後葉～末葉)



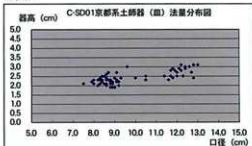
第4-61図 府内町跡20次調査C区遺構変遷図

2. 16世紀後葉～末葉にかけての土師質土器について一法量を中心として一

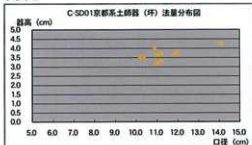
本調査区において、16世紀後葉～末葉の遺構から出土する土師質土器は、京都系土師器が主体となる。埴地編年ではいば京都系土師器3期に比定される。この段階は本調査区で見える限り、前段階の京都系土師器2期段階で見られる、底部から口縁部に向けて直線的に開き、内外面に顕著にロクロ目を有する在地系土師器は姿を消している。そして代わって登場する在地系土師器は、京都系土師器の胎土を有し、底部に糸切り痕を有する土師質土器である（今後「折衷様式」と仮称する）。さらに京都系土師器の中でも、皿に加えて坏の出土も増えてきており、器種分化が進んでいる傾向が看取される。そこでここではこれらの資料が比較的まとまって出土したC-SD01の資料を中心に分析し、当該期の傾向を検証していきたいと思う。

まずグラフ1にはC-SD01から出土した京都系土師器皿の法量分布を示した。これを見ると大きく2つの集中域があることが判る。一つは器高が2cm前後で口径が8～9cm前後のグループで、もう一つは器高が3cm前後で口径が12～13cm前後のグループである。そしてその中間域である、器高2.5cm前後口径10～11cm前後のグループがあるが、これは極端に少ない事が判る。次にグラフ2の坏の法量分布を見てみると、器高3～4cm前後、口径10～11cm前後に集中域があることが判る。この坏の集中域は、口径だけで見ると、前述の皿の空白域にちょうど当てはまること判る。さらにグラフ3の折衷様式を見てみると、口径2.5cm～3cm前後、口径11cm～12cm前後に集中していることが判り、この集中域も皿の空白域を埋める所に位置する。以上より、大きく2つに分かれた皿のサイズの間を埋めるように、坏と折衷様式が入ってきていることが判る。それを示したのがグラフ4である。この法量分布から、全部で何法量（幾サイズ）あったのかということは判別しがたいが、皿の空間域を埋める資料が、坏と折衷様式という明らかに形態の異なるものであることから、この空間域には2種類が存在していることは明らかである。こうした目で皿の2つの集中域をもう一度見てみると、口径8～9cmのグループは、8cmのグループと9cmのグループに、口径12～13cm前後のグループは口径12cmと13cmのグループに分けることも可能かもしれない。そうすると口径だけという、8cmの皿・9cmの皿・10cmの坏・11cmの折衷様式・12cmの皿・13cmの皿という6サイズのパターンが成り立つ可能性もある。ただこれはあくまで傾向であり、今後さらに資料の増加を待つて検証をしていく必要がある。なお、グラフ5にはこのSD01以外の遺構から出土した京都系土師器の皿の法量分布図を示した。これを見ると、やはり他の遺構においてもC-SD01と同じように、皿のサイズの間隙に坏が入ってきており、同じような傾向を示していることが判る。

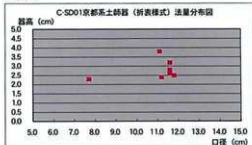
グラフ1



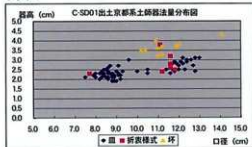
グラフ2



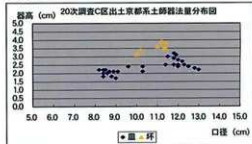
グラフ3



グラフ4



グラフ5

第4-62図 府内町跡20次調査C区
C-SD01出土京都系土師器法量分布図

第5章 自然科学的分析

第1節 中世大友府内町跡第20次調査C区出土人骨について

塚鴻森*・舟橋京子**・田中良之***

*九州大学大学院比較社会文化学府

**九州大学大学院人文科学研究院

***九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

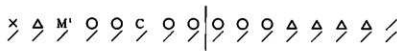
大分県中世大友府内町跡の20次調査において中世の万寿寺堀埋土中から人骨が出土し、九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座へ搬送され、同講座において、整理・分析をおこなった。以下にその結果を報告する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化学府考古人類資料室に保管されている。

2. 人骨所見

【保存状態】

本人骨は、頭骨の一部が遺存しているのみである。主な遺存部位は、前頭骨・鼻骨・左上顎骨・左右頬骨・右側頭骨鱗部・蝶形骨が遺存している。眼窩上隆起の発達は顕著であり、側頭線も発達している。また、冠状縫合は外板内板ともに閉鎖している。

歯牙も一部遺存しており、残存歯牙は以下の通りである。



(○歯槽閉鎖 ×歯槽閉鎖 /欠損 Δ歯根のみ ●遊離歯 ()未萌出 c頰歯)

咬耗度は栃原の2° bである(栃原1957)。

【性別・年齢】

年齢は、縫合の癒合状況および歯牙咬耗度から熟年後半と推定される。

性別は、眼窩上隆起に顕著な発達が見られ、側頭線も発達していることから、男性と判定される。

【形質的特徴】

頭蓋計測が一部可能であった。その結果は第5-1表の通りである。歯槽側面角は57°で超突顎に分類される。示数は上顔示数(V)は70.7で低上顔、眼窩示数は78.0(左)・76.0(右)で中眼窩、鼻示数は58.5で通広鼻にそれぞれ分類される。

【特記事項】

左前頭鱗の外板表面が3.7cm×2.5cmの卵円形にやや陥凹している。病変部表面は正常な骨表面より粗く、歯痕を示している。これに対応する内板側には病変が現われていない。軽度の梅毒性変化あるいは結核性変化の症状との類似が認められるが、前頭部以外の観察が困難であることから、病因の推定は困難である。また、外傷性の可能性も残される。

頭蓋底部の右卵円孔内側から鱗縁に近いところまで長さ約1.3cm切創状の痕跡が見られる。切痕の縁は鋭く、鋭利な利器により生じた傷と考えられる。但し、その成因に関しては不明である。

3. まとめ

出土人骨に関して以下の点が明らかになった。

形質的特徴のうち、上顔示数(V) (70.7) は、北部九州の古墳人(70.2)に近い値であり、緒方町千人塚遺跡出土中世人骨(71.8: 舟橋他1999)と同様に豊後古墳人 (68.6: Doi and Tanaka1987) とは異なる傾向を示している。鼻示数(58.5)は千人塚中世人(47.1)よりも大きく、広い鼻であることを示している。眼窩示数(左: 78.0, 右: 76.0)は豊後古墳人(77.1)に近い値である。このように本人骨の形質は、縄文的形質を残すとされる豊後古墳人と渡来的形質を持った北部九州の弥生・古墳人の両方と類似する特徴を有している。このような特徴は千人塚中世人と共通しており、古代以来の人口移動によって渡来的形質が拡散していく過程を示していると見られることもできるが、いまだ事例が不足しており資料増加が待たれる。また、吉母浜中世人にも見られる歯槽性突顎(中橋・永井1985)が認められており、全国的に歯槽性突顎が広がっていたとする指摘(池田1982)を裏付けるものである。

この他にも、前頭部に病変が認められ、頭蓋底付近には切削状の痕跡が認められた。

最後に本報告にあたり、大分県教育委員会各位にはご便宜を賜り、かつご迷惑をおかけした。深謝したい。

参考文献

- Doi, N. and Tanaka, Y., 1987: A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *J. Anthrop. Soc. Nippon*, 95-3.
- 舟橋京子・井村公洋・金幸賢・田中良之, 1999: 千人塚遺跡出土人骨について。千人塚遺跡。緒方町教育委員会。大分
- Gertrud Hauser, G.F.De Stefano, 1989: Epigenetic Variants of the Human Skull. E. Schweizerbartsche Verlagsbuchhandlung Stuttgart published, Germany.
- 池田次郎, 1982: 日本人の起源。講談社。東京
- 中橋孝博・永井昌文, 1985: 人骨。吉母浜遺跡。下関市教育委員会。下関
- 折原博, 1957: 日本人歯牙の咬耗に関する研究。熊本医学会雑誌, 31。補冊4
- Ubelaker, D.H., 1989: Human skeletal remains: Excavation, Analysis, Interpretation (2nd Edition). Washington, D.C.: Taraxacum.

第5-1表 頭骨計測値

項目	計測部位	計測値(mm)	項目	計測部位	計測値(mm)	
M 9	最小前頭幅	106.5	M54	鼻幅	30.2	
M43	上顔幅	116.2	M55	鼻高	51.5	
M44	両眼窩幅	109.2	M57	鼻骨最小幅	10.6	
M46	中顔幅	110.2	M72	全側面角	75°	
M48	上顔高	77.9	M74	歯槽側面角	57°	
M50	前眼窩間幅	22.1	M48/46	上顔示数(V)	70.7	
M51	眼窩幅(左X右)	40.3	40.6	M52/51	眼窩示数(左)(右)	78 76
M52	眼窩高(左X右)	31.5	30.9	M54/55	鼻示数	58.5

第5-2表 頭蓋小変異観察表

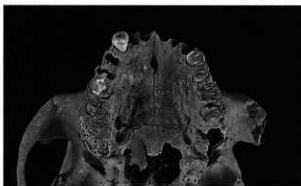
項目	右	左	項目	右	左
内側口蓋管骨橋	-	-	副眼下孔	-	-
眼窩上縁孔	-	-	二分頬骨・頬骨分裂	-	-
ヴェサリウス孔	-	+	前頭骨縫合	-	
卵円孔棘孔交通	-	-	頬骨顔面孔	+	+
眼窩上神経溝	-	-			



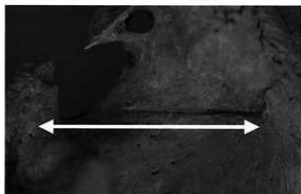
第5-1図 頭蓋骨 (正面観)



第5-2図 前頭骨病変部拡大図



第5-3図 上顎骨・歯牙



第5-4図 頭蓋底に見られる切痕

第2節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

久松 平尾良光

(別府大学大学院 文学研究科)

1. はじめに¹⁾

中世大友府内町跡は大分県大分市内に位置する中世大友氏の城下町跡である。この遺跡がある大分市には九州の有力な戦国大名である大友義統の守護所がおかれていた。当時の領主であった大友義統は南方貿易から得られる利益のため、ポルトガル貿易と密接な関係にあるキリスト教の布教を許可し、また自らもキリスト教に帰依したため、キリシタン大名になった。

南方貿易を含め、活発な対外交流が行われたことを示すように、府内町跡からは中国、朝鮮半島、東南アジアなどからの遺物が数多く出土した。その中にはキリスト教との関連があると考えられるメダイ、ロザリオなども含まれていた。

2005年には大分県教育庁埋蔵文化財センターの依頼で中世大友府内町跡から出土した金属製品に関する自然科学的な調査を行った。その結果、メダイと推定される金属製品とガラス、鉛玉などに中国、朝鮮半島産の材料、日本産の材料または未知の地域の材料が使用されたことがわかった。特に注目される特徴は東アジアではない未知の材料が新しく使われたことで、これは当時の貿易ルートを示唆しているとも言える。

未知の地域の材料が使用されたと考えられる製品はほとんどがキリスト教と関係があるメダイあるいはメダイと推定される資料で、この地域はキリスト教との深い関係があるところの可能性を示した。

ただし、これまで測定された中世大友府内町跡出土の製品の数が少ないため、どんな製品が未知の地域の材料を利用したか、あるいは未知の地域産の材料がどんな規模で使われたかを理解するためにはより研究が必要である。そこで中世大友府内町跡から出土した他の金属製品に関して自然科学的な調査を大分県教育庁埋蔵文化財センターの依頼を受け、化学組成および鉛同位体比分析を用いた産地推定の研究を行った。

2. 資料

今回測定した資料は中世大友府内町跡から出土した金属製品10点である。7点はメダイ様金属製品であり、1点がソーダ石灰ガラス、1点が鉛玉、また1点が小柄である。これらの資料から鉛を微量採取し、測定用試料とした。試料採取は表面クリーニングして落ちた鉛を用い、資料の記載は第5-3表で示した。

第5-3表 府内町跡12・20次調査出土の測定金属製品の一覧表

番号	資料名	出土地	出土区	残存状況	生産地	測定番号
1	メダイ様金属製品	12次		元形	在地	BP1240
2	メダイ様金属製品	12次		元形	在地	BP1241
3	メダイ様金属製品	12次	C-S B01焼土層	元形	在地	BP1242
4	メダイ様金属製品	12次	L-12区	元形	在地	BP1243
5	メダイ様金属製品	12次	K-12区	元形	在地	BP1244
6	メダイ様金属製品	12次	南北大路町屋側掘溝	元形	在地	BP1019
7	ソーダ石灰ガラス	20次C	C-S D01中層	元形		BP1245
8	メダイ様金属製品	20次C	L-37区	元形	在地	BP1246
9	鉛玉	20次C		元形	在地	BP1247
10	小柄	20次	C-S D01			BP1248

3. 鉛同位体比の原理²⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、それは地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しないが、例外的ないくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた ^{238}U は ^{206}Pb に、 ^{235}U は ^{207}Pb に、 ^{232}Th は ^{208}Pb に変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表すことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない ^{204}Pb 量と、変化した ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb 量との比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.2 μg の鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上にのせた。準備したフィラメントを質量分析計(本学に設置されているサーモエレクトロン社の表面電離型質量分析計MAT262)の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200 $^{\circ}\text{C}$ で測定した。同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

5. 測定値の表し方²⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するため、材料の同位体比を次のように示した。鉛には ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の独立した4つの同位体があり、同位体比は $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ 、 $^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ と $^{204}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、 $^{204}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ 、 $^{204}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$ という12の方法で表現される。この方法の中で一番整った図で表現でき、4種類の同位体を含む $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ と $^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ – $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ という2つの図(図1と図2)を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。中国の前漢時代・後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域とした。

朝鮮半島産材料の領域を設定する場合、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鍍細文鏡を用い、それらが示す分布を朝鮮半島産材料の領域とした。

6. 化学組成

今回の測定試料である10点の製品に関して化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定は本学に設置されているHORIBA MESA-500Sで行った。測定された蛍光X線スペクトルを付録として末尾に付し、その化学組成を第5-4表でまとめた。化学組成の結果、試料番号2、7、10を除いた試料は鉛製品であることがわかった。また、試料番号2はほぼ純銅製品であり、7番はカルシウムを主成分とするソーダ石灰ガラスであった。鉛成分の比率が比較的に高いことは鉛が銅より手に入りやすかったためであると考えられる。資料番号10は黄銅製品であり、この時代に黄銅が日本で使われていたことを示す貴重な資料である。

第5-4表 中世大友府内町跡から出土した製品の化学組成

番号	資料名	Cu	Sn	Pb	As	Fe	測定番号
1	メダイ様金属製品	0.1	0.7	96.9	0.1	0.1	BP1240
2	メダイ様金属製品	96.6	0.1	1.7	0.1	1.7	BP1241
3	メダイ様金属製品	0.2	6.6	91.0	0.1	0.2	BP1242
4	メダイ様金属製品	0.0	0.5	96.0	0.1	0.7	BP1243
5	メダイ様金属製品	1.2	3.7	88.1	0.0	2.0	BP1244
6	メダイ様金属製品	0.0	0.5	93.0	0.1	1.5	BP1019
8	メダイ様金属製品	0.1	1.9	97.9	0.1	0.1	BP1246
9	鉛玉	0.1	0.5	95.7	0.1	3.7	BP1247

番号	資料名								測定番号
7	ソーダ石灰ガラス	Ca 64.1	Sn 0.0	Pb 0.1	Sr 1.8	Fe 18.1	K 14.1		BP1245
10	小柄	Zn 20.0	Sn 0.1	Pb 0.8	As 0.1	Fe 0.5			BP1248

7. 結果

測定の結果として得られた鉛同位体比を第5-5表に示し、第5-5図～第5-8図に図化した。資料番号7はカリガラスのため、鉛同位体比の測定を行わなかった。図から判断すると、今回測定した試料には日本産、中国の華南産、朝鮮半島産、未知の地域産の材料が利用されていた。資料番号1は朝鮮半島の領域に位置し、9は日本の領域に位置した。資料番号2と10は中国の華南の領域に位置した。そしてその他の資料は未知の地域のところに位置した。

この測定結果をこれまで測定した中世大友府内町跡出土の金属製品や鉛玉と比較し、図5～図6に示した。これらの図でも今までに測定した資料は日本、華南、朝鮮半島、未知の地域の領域に分布した。特に、いくつかの資料は今回測定した資料4、5、6、8と同じように未知の地域のところに重なって分布したことが注目される。

8. 考察

大分市に位置する中世大友府内町跡では中世の磁器、ガラス玉、鉄砲玉、金属製品、土製品などが出土しており、その中には朝鮮半島、中国、タイ、ヨーロッパとの貿易でもたらされた製品もたくさん含まれていた。この実史を示すように、2005年に測定された鉛同位体比の結果では金属製品に朝鮮半島、中国、未知の地域の材料が利用されたことがわかった。この未知の材料はどこからたらされたかはわからないが、スペインの鉛鉱石に近い値を示していることが注目された。

今回鉛同位体比の測定を行った資料は10点の中9点であり、測定の結果、1点(資料番号1)が朝鮮半島産材料、2点(資料番号2、10)が中国の華南産材料、1点(資料番号9)が日本産材料で作られたことがわかった。また、4点の資料(資料番号4、5、6、8)が未知の地域産の材料を利用し

たことがわかった。ここで資料番号10の小柄は黄銅(真鍮)でできており、この真鍮が中国からもたらされていることを示す。

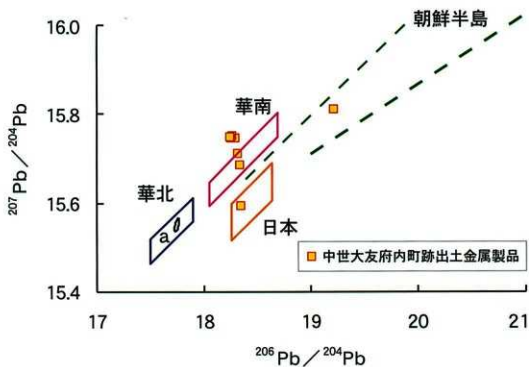
これは大友義鎧が中国、朝鮮半島、東アジアとの国際交流に力を入れた事実を示すことであろう。また、未知の地域に位置した資料に関してはその近くにスペインの鉛鉱石が分布することから、これらはスペイン付近のどこかの材料を利用した可能性があることを示唆する。しかし、このことはスペインを含むヨーロッパの金属製品及び鉛鉱石に関するより深い研究が必要である。

第5-5表 中世大友府内町跡から出土した製品に関する鉛同位体比值

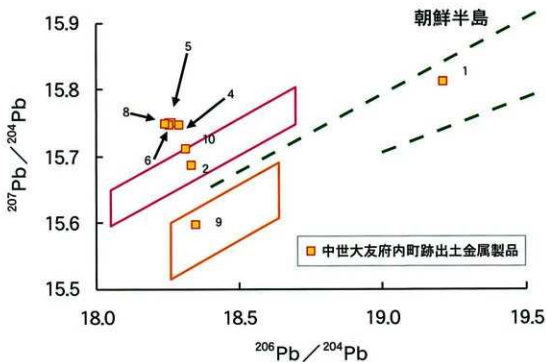
番号	資料名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{205}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{205}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	測定番号
1	メダイ様金属製品	19.208	15.814	39.700	0.8233	2.0669	BP1240
2	メダイ様金属製品	18.331	15.678	38.834	0.8558	2.1185	BP1241
3	メダイ様金属製品	18.252	15.751	38.497	0.8630	2.1092	BP1242
4	メダイ様金属製品	18.288	15.748	38.545	0.8611	2.1076	BP1243
5	メダイ様金属製品	18.260	15.752	38.518	0.8626	2.1094	BP1244
6	メダイ様金属製品	18.252	15.749	38.487	0.8628	2.1086	BP1019
7	ソーダ石灰ガラス	なし	なし	なし	なし	なし	BP1245
8	メダイ様金属製品	18.238	15.750	38.477	0.8636	2.1097	BP1246
9	鉛玉	18.346	15.597	38.623	0.8502	2.1052	BP1247
10	小柄	18.312	15.713	38.776	0.8581	2.1175	BP1248
誤差		±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

※参考文献

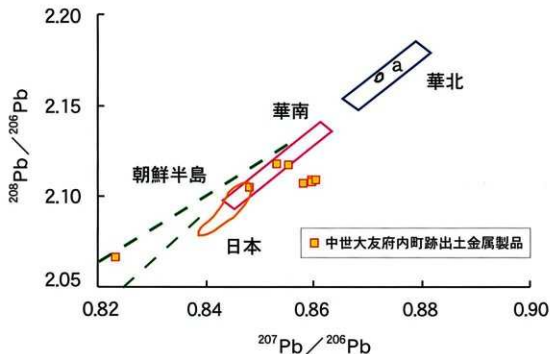
- 1) 大分市教育委員会、2006「中世大友再発見フォーラムⅡ：府内のまちなみ宗廟の栄華」大分市教育委員会文化財課
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂(東京)、p31～p33
- 3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と鋳造」鶴山堂(東京)、p35～p39
- 4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター、2006「豊後府内4」埋蔵文化財調査報告書 第8集



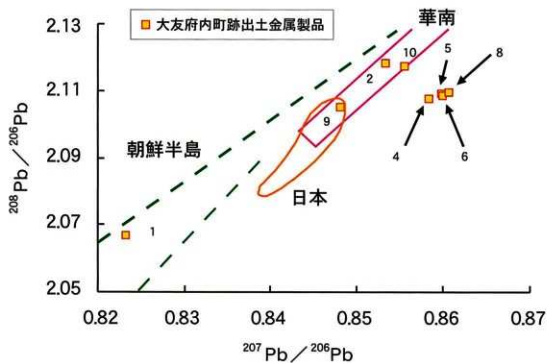
第5-5図 大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



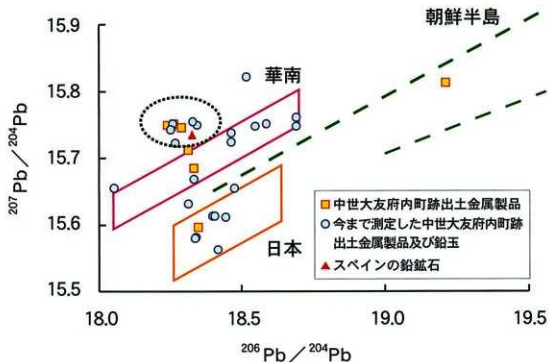
第5-6図 第5-5図の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



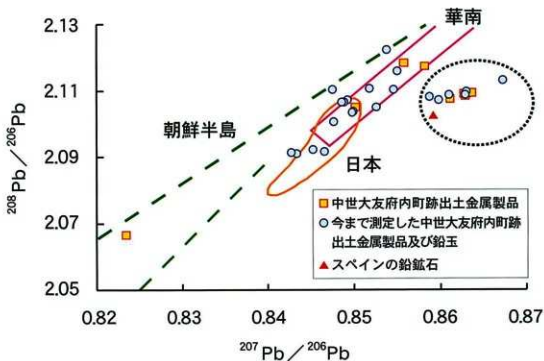
第5-7図 大友府内町跡から出土した金属製品の鉛同位体比
($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ vs $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



第5-8図 第5-7図の拡大図
($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ vs $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



第5-9図 今回測定した金属製品とこれまで測定した中世大友府内町跡出土金属製品及び鉛玉の鉛同位体比 ($^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



第5-10図 今回測定した金属製品とこれまで測定した中世大友府内町跡出土金属製品及び鉛玉の鉛同位体比 ($^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)

第5-6表 付録 蛍光X線スペクトル

資料番号1(大友12次)

測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 15:43:41
電圧: 50kV
電流: 10 μ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.1	0.1	0.185
Cu 銅	0.1	0.1	0.184
As 七素	0.1	0.1	0.515
Sn スズ	0.7	0.1	0.728
Pb 鉛	96.9	0.1	169.827

資料番号6(大友12次 南北大町路側側溝)

測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:13:31
電圧: 50kV
電流: 10 μ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	1.5	0.1	3.341
Cu 銅	0.0	0.0	0.000
As 七素	0.1	0.1	0.494
Sn スズ	0.5	0.1	0.526
Pb 鉛	93.9	0.2	160.682

資料番号2(大友12次)

測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:19:14
電圧: 50kV
電流: 22 μ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	1.7	0.1	4.810
Cu 銅	96.6	0.1	143.039
As 七素	0.1	0.1	0.039
Sn スズ	0.1	0.1	0.012
Pb 鉛	1.7	0.1	0.869

資料番号7(大友20次C C-SD01中割)

測定条件

日付: 06. 10. 05
時刻: 14:44:36
電圧: 15kV
電流: 300 μ A
時間: 1500秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 真空

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
SiO ₂	82.0	1.0	6.528
Al ₂ O ₃	5.5	0.1	0.230
CaO	5.3	0.1	1.968
Na ₂ O	5.0	0.1	0.009
K ₂ O	1.3	0.1	0.424
Fe ₂ O ₃	0.9	0.1	0.830
TiO ₂	0.1	0.1	0.058

資料番号3(大友12次 SD01 焼土割)

測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:00:52
電圧: 50kV
電流: 9 μ A
時間: 300秒
DT%: 21%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.2	0.1	0.356
Cu 銅	0.2	0.1	0.560
As 七素	0.1	0.1	0.492
Sn スズ	6.6	0.1	7.127
Pb 鉛	91.0	0.3	159.519

資料番号8(大友20次C L-37K)

測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:48:08
電圧: 50kV
電流: 9 μ A
時間: 300秒
DT%: 22%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.1	0.1	0.168
Cu 銅	0.1	0.1	0.018
As 七素	0.1	0.1	0.520
Sn スズ	1.9	0.1	1.999
Pb 鉛	97.9	0.1	165.406

資料番号4(大友12次 L-12K)

測定条件

日付: 06. 09. 19
時刻: 16:25:54
電圧: 50kV
電流: 11 μ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.7	0.1	1.506
Cu 銅	0.0	0.0	0.000
As 七素	0.1	0.1	0.476
Sn スズ	0.5	0.1	0.534
Pb 鉛	96.0	0.1	155.511

資料番号9(大友20次C)

測定条件

日付: 06. 10. 01
時刻: 17:33:41
電圧: 50kV
電流: 14 μ A
時間: 300秒
DT%: 24%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	3.7	0.1	5.363
Cu 銅	0.1	0.1	0.03
As 七素	0.1	0.1	0.341
Sn スズ	0.5	0.1	0.352
Pb 鉛	95.7	0.1	106.000

資料番号5(大友12次 K-12K)

測定条件

日付: 07. 01. 22
時刻: 15:54:30
電圧: 50kV
電流: 12 μ A
時間: 300秒
DT%: 23%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	2.67	0.05	4.89
As 七素	0.00	0.04	0.000
Sn スズ	7.35	0.12	6.535
Pb 鉛	89.98	0.13	122.429

資料番号10(大友20次C C-SD01)

測定条件

日付: 06. 08. 03
時刻: 14:41:22
電圧: 50kV
電流: 62 μ A
時間: 300秒
DT%: 25%
試料セル: なし
試料室: 大気

HORIBA MESA500定量結果

成分	濃度 (wt%)	標準 偏差	強度 (cps/ μ A)
Fe 鉄	0.5	0.1	0.343
Cu 銅	78.7	0.1	38.33
As 七素	0.0	0.0	0.000
Sn スズ	0.1	0.1	0.009
Pb 鉛	0.8	0.1	0.091
Zn 亜鉛	20.0	0.1	11.34

第6章 総 括

第1節 文献・絵画資料から見た万寿寺

1. 万寿寺の変遷と意義

本書は平成14年に発掘調査を実施した中世大友城下町跡の中の府内町跡20次調査の報告書である。その調査範囲は、すでに述べてきたように、鎌倉・室町時代において、九州最大級の禅宗寺院であった万寿寺の北西部にあたる。そこで、万寿寺の変遷・意義、現存する禅宗寺院の伽藍配置と、文献・絵画資料に表れる万寿寺の施設名の抽出を行い、その伽藍や施設の配置の復元を試みる。

徳治元年(1306)、大分川河口に近い西岸の自然堤防上に禅宗寺院である万寿寺が建立される。『大分郡志』には「万寿寺は豊後にて最初の禅窟也。妙心寺より、舊し。」とある。その創建に当たっては、近世の史料であるが「豊筑乱記」や「豊府紀聞」によると、大友氏五代目の貞親が嘉元三年(1305)に鎌倉に参上した際に、執権北条貞時との仏心や僧衆の供養の問答から建立を決意し、博多承天寺の直翁智佩を招聘し、その任に当たらせたと、伝えられている。

直翁智佩
雪村友梅

その後、万寿寺は、中国(元)からの渡海僧である元晦・雪村友梅・圓月・獨芳などが、来院・止住し、暦応4年(1341)に禅宗寺院の官位制である五山十刹の中で、十刹に位置づけられ、万寿寺はその第十位に、翌康永元年(1342)にはその第八位に列せられている。こうして、万寿寺は博多の聖福寺と並び、九州最大規模と格式の禅宗寺院として14世紀前半に豊後府中(府内)に出現した。この時期の万寿寺周辺の状況を物語る史料として、文和4年(1355)6月18日「緩以萬壽寺北辺塵敷島地等」とあり、万寿寺の北側は塵敷と島地が混在する風景が広がっていたことがわかる。

雪舟
天園図面樓

15世紀になると文明8年(1476)には雪舟が京都の戦乱を避け、万寿寺に在院していた僧侶景浦玄圻を頼り来院し、府内にアトリエである「天園図面樓」を構えて創作活動を行った。このように、14・15世紀の万寿寺は、元や明への留学経験のある高僧が住持となる一方、文和元年(1352)將軍足利義詮が僧元光を万寿寺住持も命ずるなど、万寿寺-大友家-京都五山-將軍家と密接な関係が保たれていたと考えられる。

菊池武光

また、万寿寺は軍事的な拠点としても存在した。貞治元年(1362)、菊池武光は豊後高崎城に立て籠もる鎮西管領斯波氏経・大友氏時・田原氏能・志賀頼房を討とうと豊後に進軍し、9月9日に万寿寺に陣を張った。これに対し、斯波氏経は、既に8月7日に阿蘇大宮司惟村に援軍を求め、さらに9月9日に再び援助を求めた。このため、菊池武光は高崎城攻略を断行せず、5日後の9月14日に万寿寺の陣を解き、豊前へ去ったと言う。

姫岳の戦い

さらに、1430年代初め、応永6年(1399)に起った大内義弘が室町幕府と戦った応永の乱以後の影響で、室町將軍を背景に、大友持直と弟の親綱が対立し、これに大内氏・菊池氏がそれぞれに付き、豊後が戦乱状態に陥った。さらに安芸・石見・伊予からも大内氏への援軍が送られた。永享8年(1436)、府内を逃れた大友持直は臼杵市と津久見市の境にある姫岳に籠城した。その際、万寿寺は石見からの軍勢などの拠点となっている¹⁾。

14・15世紀の万寿寺は府中(府内)において、巨大な宗教的施設としての存在以外にも、京都や中国との文化的な交流の拠点、ある時は軍事的な施設としての役割を果たしている。

2. 16世紀の万寿寺

大内義興

16世紀になると、万寿寺は永正11年(1514)に、万寿寺が炎上し、「殿堂焦土」となっている。そこで、永正13年(1516)に周防の大内義興が、室町幕府の管領であったためか、朝鮮王朝に対し、万寿寺の再建費を募っている。このことから、万寿寺の存在は豊後一国に留まらず、西日本の武家社

(1)久多羅木儀一郎「豊後萬壽寺の史蹟」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯 大分縣史蹟名勝天然記念物調査会 1934年

会の中で、禅宗寺院としての大きな位置を占め、国家支援の下に復興を目指していることが分かる。

工藤帯刀

16世紀の万寿寺に係わる火災の記録は、近世に編纂された「九州記」に、元禄元年(1570)正月21日、大友宗麟近習の侍工藤帯刀が白杵で狼藉を働き、府内の万寿寺に逃げ込んだ。それを宗麟の命で追った二百余人の兵が、万寿寺に乱入し、火を放ち、全焼したと記されている。

白杵の教会

また、ルイス＝フロイスの日本史にも万寿寺に関する火災の記録が2ヶ所に見られる。まず、1581年のことであるが「豊後の府内の市では、巡察師が同所を出発した二、三日後に、やがてもたらされることになる神仏の零落を予告するかのようになり、ある事件が生じた。万寿寺は、その市の最良の場所であり、豊後の国中でもっとも主要な寺院で、建築や収入においてももっとも豪華であったが、我らの白杵の教会の礎石が置かれた同じ週に、一夜、突如として火災を起こし、その壮大な建築物は何一つ残らずごとごとく消滅した。」^①と記述している。

もう1ヶ所は、1585年(天正13年)に岡城主志賀親次が洗礼を受けたことを大友義統の命により派遣された高山・大津留殿に訪問され、「殿は、自らの領内に繁栄をもたらした四力国を喪失された後は、幾多の貧困と窮乏に囲まれておられた。なぜなら、殿には随伴する人々もなく、兵士たちは戦いにおいて殿に奉仕したそうにも、武器がない有様であった。そこで殿は思慮(をめぐらされ)、またしかるべき助言に基づいて、日々の損失と窮乏を補わんがために、実に当を得、かつ時宜にかなった対策をおとり遊ばされた。(ほかならず)殿は密かに、府内の町において主要な僧院であり、(豊後の)国中でもっとも有名な寺院である万寿寺に放火するよう命ぜられ、そしてその莫大な収入を、戦争において殿に奉仕していた貧しい武士や兵士に分配された。」^②と述べている。

この3つの火災についての文字史料のうち、時系列的に「フロイスの日本史」の2ヶ所は矛盾がないが、日本の「九州記」とは2度火災がない限り矛盾がある。

国王の居住する府内

1570年頃の万寿寺については「1571年10月6日(元禄2年9月18日)付け、バードレ・ガルバス・ビレラがゴアよりポルトガルのアピスの住院のバードレ等に贈りし書翰に『豊後国において国王の居住せる府内という市に多数の大いなる僧院あり。特に二つは甚だ立派にしてその一つ(萬寿寺ならん)は坊主150人を有し、収入多く、寺は建築後年を経たがゆえに新しくあらざれども、地所甚だ広く、うちに多数の庭園あり、果物ならびに葡萄、その他目を楽しませむるもの植えたり。この僧院は豊後の諸王の墓所にして、これがため収入豊なり。彼等は教壇より説教をなし、朝夕祈禱の定時あり、国王の庇護を被るがゆえに甚だ傲慢にして、各種の罪を犯して躊躇せず。…』^③と報告されている。

このバードレ・ガルバス・ビレラは1556年7月から1569年9月までの間、一時1566年5月に畿内へ移ることもあったが、豊後に駐在し、その後西九州に移り、病と日本情勢報告のため1570年10月末か11月初旬にインドに帰った。この書簡は、そこで書かれたものであろうが、「九州記」の万寿寺火災は1570年1月21日のことであり、ガルバス・ビレラが日本を離れるまで10ヶ月近い時間がある。しかし、書簡にはそのことが触れていない。おそらく、万寿寺の炎上は1581年の出来事と考える^④。

さらに、この1581年の火災の背景には「府内のかの主要な寺院がふたび勢力を伸ばすことがないようにと、国王フランシスコの助言によるものと思われるが、嫡子(義統)は、同寺が所有していた収入を幾人かの貴人たちに配分し、その地所を、さしあたっては一人のキリシタンの貴人に授与した。かくてやがては、我らの学院がその地所に移るようになって、我らの同僚たちが早くから予言していたことが実現するかも知れない。なぜならば、国王フランシスコがキリシタンとなり、嫡

①松田毅一・川崎桃太郎『フロイス 日本史10』中央公論新社 1979年

②松田毅一・川崎桃太郎『フロイス 日本史8』中央公論新社 1978年

③村上武次郎『イエズス会士日本通信 下』新興図書刊 雄松堂出版 1969年

④加藤知弘(大分大学名誉教授)先生から教示

子が先に述べたような熱意を示し始めた日から、彼ら国王と嫡子および我らイエズス会員の念願には、かの寺院が将来、司祭たちの居住となり、同寺院が悪魔の礼拝の場ではなく、ゆくゆくはデウスの礼拝所となるようにとの願いがあったからである。」と記述されており、宣教師たちの思惑もあったようである。

また、こうした万寿寺罹災と呼応するように、天正10年(1582)に大友義統は、キリシタンの家臣柴田筑前入道 万寿寺町屋敷 寺町屋敷之事、無残所預置候事…の文書^①を発給しており、万寿寺西側周辺が大友家の家臣達により町屋敷化していることを示している。

このように、16世紀になると、万寿寺は大友家の衰退、大友家のキリスト教への傾斜などにより寺勢は衰え、境内の一部は町屋敷化し、ついには1581年の火災で、禪宗寺院としての機能が停止してしまうと考えられる。

3. 禪宗寺院と万寿寺の構造

中世の禪宗寺院は、総門―山門―仏殿―法堂―方丈が直線的に配置される構造を持つ。建長3年(1251)から造営が開始された鎌倉建長寺は、当時の姿を示す「建長寺指図」から藤井忠介の分析によると、「谷口の方から中心軸上に三門、仏殿(金堂に相当)、法堂(講堂に相当)を並べ、それらを回廊でつなぎ、その両脇に僧堂(寝、食、座禅に用いる)、庫院(寺務所・庫裏に相当)、が向かい合い、奥の方に衆寮、役者寮などがあり、最奥に一山の住持の起居するための方丈があった。^②」と述べている。

万寿寺が描かれた唯一の資料である「府内古図」には、南側に瓦を乗せた白壁の築地塼が直線的に延び、そこに二階樓門と、その東に小門が描かれている。さらにこの壁に南側に五重の塔がそびえている。「府内古図」には南側の築地塼しか描かれていないが、先の「万寿寺築地之内并西之屋敷」の文書が示すとおり、四周は築地塼で囲まれていたものと思われる。

文字資料では、万寿寺の輪蔵と推定される場所に、現存も残されている宝永3年(1706)銘の石碑には、寺院の規模について「界分統二百五十歩綽三百六十歩」とあり、東西二百五十歩、南北三百六十歩で、南北長い境内であることが判る。そしてその内側に、「有大殿山門法堂東西之方丈僧堂輪蔵鐘樓四圍開山塔十門之塔院五十四院諸寮諸堂矣。」と刻まれており、「大殿」・「山門」・「法堂」・「東西之方丈」・「僧堂」・「輪蔵」・「鐘樓」・「四圍」・「開山塔」・「十門之塔」・「院五十四院」・「諸寮」・「諸堂」と多くの施設の存在が読み取れる。

このうち、「東西之方丈」については、元弘3年(1333)(正慶元年)の5月に僧中嚴圓月が萬寿寺に在院し、その後著作した「東海一嘯集」の自題語に、「時予在豊後万寿寺西方丈」と記されており、方丈が東西に2棟存在していることが推測できる。

また、先の「九州記」の万寿寺炎上の記述の中で、「四方の大門小門」より押入て二百余人の軍兵共、「庫裏方丈衆寮其他院々」に乱れ入り、…「鐘樓」に火を懸けたり、…魔風吹来て「法堂方丈」に燃付、「八十六間之廻廊」、「山門仏殿」に吹付しかば、…ときまざまな施設名が見える。魔風吹来て以下の連記した施設名は類焼順を示しているとも考えられ、隣接していた建物の可能性がある。

さらに寛文4年(1664)頃に万寿寺の乾叟和尚が水禄9年(1566)の古紙から説き起こし記したと伝「禪餘集」えられる「禪餘集」には^③、「總門」・「山門」・「仏殿」・「土地堂」・「法堂」・「祖師堂」・「上祠堂」・

(1)「大友松野文書」7「大分県史料」25 1964年

(2)藤井忠介・玉井哲雄『建築の歴史』中公文庫 2006年

(3)久多福本儀一郎『豊後萬寿寺の史蹟』『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第12輯 大分県史蹟名勝天然記念物調査会 1934年

(4)乾叟和尚『禪餘集』郷土史蹟傳説研究会 1931年

「慈光閣」・「衆寮」・「虚空蔵」・「僧堂」・「輪藏殿」・「東明樓」・「西明樓」・「観音殿」・「牟駄天閣」・「鐘樓」・「地蔵堂」・「風呂」・「西浄」・「雪隠」・「東司」・「浄頭寮」の主要建物名が見られ、塔頭には「仏殿」・「室間」・「土地間」・「竿籠塔」が見られる。そして、諸寮舎は東西に分かれ、東分については、「東方丈井大庫」・「衣鉢閣」・「西廡」・「侍香寮」・「待客寮」をはじめ蒙堂寮として、「都官寮」・「監寺寮」・「副司寮」・「桂隣閣」・「祠堂寮」・「東閣」・「渡雲軒」・「妙蘭軒」・「都官寮」・「修造寮」・「化城軒」・「知客寮」・「浴主寮」・「点部廳」が記され、西分については、「西方丈」・「客殿」・「礼之間」・「待業寮」・「待状寮」・「雪竹軒」・「霜松軒」・「首座寮」・「双樹軒」・「有方軒」・「寮元寮」・「瑞巖軒」・「維那寮」・「祝司」・「亀蔵軒」・「龍蟠軒」・「金相軒」・「玉蘊軒」・「来宵軒」・「瓜芳軒」・「于倉」・「医倉」・「羅漢倉」が配置されている。これらの建物群の中で、「慈光閣」・「衣鉢閣」・「桂隣閣」・「東閣」は「四閣」と呼ばれ、先の万寿寺の石碑に見られる「四閣」を意味すると考えられる。またこうした建物群以外にも、万寿寺の境内や院外を含め、四橋と呼ばれる「青雲橋」・「豊楽橋」・「利濟橋」・「七歩橋」があり、「利濟橋」を除き、「万年松」・「上原石」・「三生石」・「文殊劍」・「鬼氏爐」・「白蓮池」・「清客境」を加え、十境とされている。

『当家中作
法日記』

文禄4年(1595)に大友義統が水戸に幽閉中作成させた「当家中作法日記」にも、大友家が正月に万寿寺を公式に訪問した際、「都官寮」で、接待を受け、次に「方丈」で再度の食事を含む儀式をし、さらに「西堂寮」でくつろいだことが記されている。

以上の資料から、徳治元年(1306)に造営された万寿寺の16世紀後半の姿を推測すると、東西二百五十歩、南北三百六十歩の四周に瓦の乗った白壁の築地塼を廻らせ、その東西北の塼に小門を構え、特に南側には山門として二階樓門が建てられている。そこから境内に入ると正面に仏殿、そして北側に法堂と続く。こうした施設は廻廊で結ばれていた可能性が高い。こうした主軸となる禪宗寺院の中核の建物の周辺に「祖師堂」・「上祠堂」・「慈光閣」・「衆寮」・「虚空蔵」・「僧堂」・「輪藏殿」・「東明樓」・「西明樓」・「観音殿」・「牟駄天閣」・「鐘樓」・「地蔵堂」・「風呂」・「西浄」・「雪隠」・「東司」・「浄頭寮」などが建ち並んでいたことが想像される。

そして、この建物群の東側の奥まった場所には、「東之方丈」を中心に「衣鉢閣」・「西廡」・「侍香寮」・「待客寮」、大友家を正月に接待する「都官寮」などがあり、西側には同じく、「西之方丈」を中心に「客殿」・「礼之間」・「待業寮」・「待状寮」などが配置されていたと推測できる。

こうした、建物の間は、「多数の庭園あり、果物ならびに蕃菹、その他目を楽しませるもの植えたり。」と宣教師の報告にあるように、庭園が整備されている。それは、「禪餘集」の十境にある「万年松」・「三生石」・「白蓮池」などで、そこには、四橋と言われる「青雲橋」・「豊楽橋」・「利濟橋」なども架けられていたものと考えられる。

なお、「府内古園」には万寿寺南側の築地塼の外に五重塔が描かれているが、現存する宝永三年の石碑や「禪餘集」などの文字資料には記述が見られない。ただ、永徳2年(1382)に足利義満が室町幕府東北側に建立した臨済宗寺院である相国寺境内の東側には七重塔が建てられている⁹⁾。同じ臨済宗寺院で、大友館の南に隣接する万寿寺にも府内のランドマークとして五重塔が建てていたのであろうか。

すなわち、万寿寺主要建物である山門・仏殿・法堂・方丈をはじめとする御藍と、それを取り巻き、54もの寮・閣・軒・倉・廡と名前の付く建物が建ち並ぶ。その中には、「当家中作法日記」の中の記述に見られる「万寿寺大工」など職能集団も任在しており、それらを築地塼で囲み、境内が構成されていたと考えられる。「府内古園」によると、その南側の境内の外側には門前町と思われる寺小路町が形成されている。こうした状況は伊藤鑿の指摘する禪宗寺院に見られる「境内」系寺院に相当する⁹⁾。

(1)高橋康夫「室町期京都の都市空間—室町殿と相国寺と土御門内裏」『中世都市研究9』中世都市研究会編 新人物往来社 2004年
(2)伊藤鑿『都市の空間史』吉川弘文館 2003年

第2節 考古学から見た万寿寺跡の西北隅

1. 万寿寺の建立期

万寿寺の創建は、徳治元年(1306)と伝えられている。そこで、出土遺物からこの時期の検証を試みる。出土遺物で最も数量の多いものはロクロ成形による在地系土師質土器であるが、この遺物は、相対編年は可能であるが、単独で実年代との比較を行うには、現時点では良好な資料がなく、困難である。そこで、ここでは、比較的編年研究が進行し、13世紀末から14世紀初頭・前葉に編年されている青磁・白磁などの貿易陶磁器、備前系陶器、吉備系土師器、常滑系陶器から探ってみる。

白磁皿

貿易陶磁器の白磁であるが、第3-6図38~40・第3-36図等に図示した口売げの白磁皿がある。この遺物は、13世紀後半から14世紀前半までに位置づけられており、府内町跡20次調査区からも溝や土坑から66点が出土している。同じく、この時期に編年されている能泉窯系青磁碗がある。第3-6図24~28・第3-24図1~3・第3-10・12・14に図示した青磁碗で、外面に鑄蓮弁の模様が施文されている。この青磁碗の出土例も多く、58点を数える。このような貿易陶磁は、貴重品であり威信財として存在し、輸入から廃棄まで、長期にわたる可能性もある。

能泉窯系

備前系陶器

これに対し、備前系陶器・吉備系土師器・常滑系陶器など国内産土器・陶器は消耗度が大いと考えられる。備前系陶器は挿鉢と壺・甕が出土している。挿鉢は口縁部が第3-11図82・83・第3-24図5、第3-162図25に見られるように直線的で、挿り目が6~7本の、13世紀末から14世紀前半に編年されているそれと類似している。また、壺・甕は、口縁部が玉縁にならない、第3-10図69~76などが見られ、これらも、先の挿鉢と同様の時期に位置づけられている。さらに、第3-141図6

吉備系土師器

でその全形を知ることが出来る吉備系土師器¹⁾は、第3-13図133~144、第3-24図20~23、第3-40図109~115など、多く出土している。これらに共通する特徴は、口径が11cm前後と小さく、底部の高台も縮小して断面が三角形になる。こうした特徴は、13世紀末から14世紀初頭と考えられている。そして、常滑系陶器の壺・甕は、第3-3図6、第3-8図56・60・61、第3-118図1に見られるように、その特徴であるN字屈曲は、縁帯化が未発達な段階であり、このような口縁部形態は、13世紀末から14世紀前葉に編年されている²⁾。

常滑系陶器

このように、万寿寺跡の西北隅である府内町跡20次調査からは、13世紀末から14世紀前葉頃の国内外の土器・陶磁器が数多く出土している。その時期は、万寿寺創建時から暦応4年(1341)に五山十刹に列せられる頃にあたる。また、この時期は、万寿寺の最初の住持である直翁智僊や圓月・富村友梅などが、京都と豊後府中(府内)を行き来している。府内町跡20次調査からは東海地方を含み、西日本全域での物流を読み取ることが出来、在地系の遺物を含め、この時期から急激に出土遺物が増加する。

そのことは、万寿寺の造営を意味し、以後途切れることなく16世紀末まで、遺構が存在する。すなわち、万寿寺造営を契機として、府内(府中)の一角が形成されると考えることができる。

2. 14世紀の万寿寺の遺構

前者の遺構は区画性の強い南北方向と東西方向の溝、礎盤建物、井戸などがある。この範囲に想定される建築物は、先の「禅餘集」では「西方丈」以下約20棟の建物名が上げられている。それらを見ると、建物名称の最後に付く名称で、機能や規模が異なることが感じられる。「殿」が1、「寮」が5、「軒」が11、「倉」が3、「間」が1、「司」が1である。一方建物名称から想定すると、主要伽藍ははじめ多くは礎石建てであることが想定され、B-SD004から多量の瓦が出土しているように、瓦葺きであったことが想像できる。その一方、建築名称に軒や倉または寮が付く建物の全て

(1)山本悦代「吉備南部地域における古代末~中世の土師器の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会 1992年
(2)中野晴久「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館 1995

が礎石建てで瓦葺きとは考えられない。A-SB001やB-SB190～B-SB200の柱穴の底に川原石を据え、礎盤とした建物で、規模の大小が認められる。これらは、倉庫と考えられる「干倉」・「医倉」・「羅漢倉」、また、万寿寺西方向以下多く見られる建物名称の最後に「軒」が付くものの一部が想定できる。また、A-SB001など南北7尺間で5間、東西方向に3間以上の建物で、さらに西側に石の礎盤を欠く柱穴列があり、庇を想定する。この建物もこれに相当すると考える。

古庄屋遺跡

こうした建物は、近年大分県内の各所で類例を増やしており、県北の山国川の支流で、谷底平野を形成しながら流れる跡田川沿いに立地する古庄屋遺跡¹⁶⁾では、14世紀前葉に位置づけられる大型の川原石による礎盤建物が検出されている。その規模は、梁行3間で6.2m、桁行6間で12.8mを測り、四周の側柱列から1.1m離れた周囲に庇が廻る。報告では谷間の有力支配層の居館と理解している。

上城遺跡

また、久住山麓の高原地域に立地する上城遺跡¹⁷⁾は掘り囲まれた中に39棟の掘立柱建物が検出され、その内、8棟が川原石による礎盤建物であり、規模も桁行が4～5間と10間のものがある。報告では、この遺跡をⅠ～Ⅲ期に分け、13世紀前半から14世紀後半まで存続すると考えている。8棟の礎盤建物は、Ⅱ・Ⅲ期に多く、14世紀代と想定されるが、この地域を支配した有力者の居館と想定できる。

大友氏館跡
12次調査

さらに、府内町跡20次調査区の北西約200mの位置で調査した、大友氏館跡12次調査¹⁸⁾では、万寿寺と同じ間尺である、7尺を1間とする15世紀前葉の企画性の強い大規模な川原石による礎盤建物が、検出されている。大友館はこの時期以後、府内(府中)の中でも特別な場所となり、継続的に土地の嵩上げが行われ、重要遺構が構築されて、最終的には16世紀後葉を描いたと言われる「府内古園」の「大友館」となる。

このように、14世紀から15世紀前葉にかけての堂前・豊後では、礎石建物と堀立柱建物の中間形態とも言える柱穴内に川原石を据え、礎盤とする建物が出現する。こうした建物は、寺院内では瓦葺きの礎石建物に次ぐ、位置を占めていたと考えることが出来、建物名称の最後に「寮」や「軒」・「倉」の付く建物に採用されていた可能性がある。寺院外では、地域の拠点的な場所の有力者の居館や守護所的な場所に採用されている可能性が高い。

次に、府内町跡で検出された14世紀代の区画性の強い溝についてであるが、調査区を南北に延びるB-SD003と東側に約9m離れて同じ方向に延びるB-SD004、そしてB-SD003が北端でT字状につながる東西方向のA-SD1501、その北側に5m離れてほぼ並行するA-SD1505がある。中でもB-SD003は断面が逆台形で規格性が強く、方位はN-2°-Eである。この溝は境内でも西側にあり、出土遺物から14世紀中葉には機能していたことが推測出来る。しかし、存続期間は短く、15世紀代には埋没している。万寿寺の西側境であることを証明するのは困難である。

ただ、何らかの区画施設であった可能性は高く、約60m延びる長さは、掘削された時期から、万寿寺の造営期の主要伽藍である総門-山門-仏殿-法堂-方丈の方向と同じ可能性はある。今後の寺城内の調査の経緯を見守りたい。

3. 16世紀の万寿寺西北隅

万寿寺西北隅にあたる府内町跡20次調査で、検出された遺構や遺物で、もう一時期ピークを示すのが16世紀後半である。この時期のこの場所は、「府内古園」や古文書に記述されている。「府内古園」では、万寿寺の西側は第2南北街路であり、北側は東西方向の街路が描かれ、その北側に堀之

(1)大分県教育委員会「古庄屋遺跡」大分県文化財調査報告書 第141輯 2002年

(2)久住町教育委員会「上城遺跡」2002年

(3)大分市教育委員会「大友氏館跡第12次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol.14 2002年度』2003年

口町の名称が見られる。すなわち、南側に描かれている瓦葺きの白壁の築地が四周を廻っているとするならば、白壁の築地塙と堀之口町の町屋は万寿寺北側街路を挟み対峙している。

また、万寿寺西側については、天正10年(1582)に大友義統が柴田筑前入道(柴田礼能)に発給した「一、万寿寺築地之内并西之屋敷両所、令所望候之事」の文書がある。このことから、万寿寺の「築地之内」や「西之屋敷」と呼ばれる場所が存在していたことがわかる。

北側は地表面の観察でも表れているように、発掘調査以前から東西方向の堀が予測された。発掘調査の結果は、第4章で詳細を報告したとおりであるが、この場所からは、規模の大小や形態に差はあるが、14世紀前半から16世紀後半に至るまで、東西方向の幾筋もの堀や溝が検出されている。このことは、万寿寺の北境の場所として、永年にわたり認識されていたことを示している。

そして、最大規模の堀を掘削するのが16世紀である。まず、16世紀第2四半期頃に万寿寺の北側に大規模な区画性の強い堀が掘られている。その規模は、後にさらに大規模な堀が掘られるため、不明であるが、深さ2.5m底の一部から内面にロクロ目を残す在地系土師器と京都系土師器1期が共存状態で出土しており、地表面での幅も5m以上は想像できる。

その後、北側の堀は再度掘削される。その時期は堀の中からの出土遺物で、1570年代と想定されている。その規模は、幅が6.3mで、深さは2.5mである。この堀に沿った万寿寺側はA区の調査で、遺構が希薄で、掘削をあまり受けていない部分が幅5mの範囲に認められる。その南側で検出される遺構も堀に沿って東西に細長い遺構であり、南側から続く区画性強いA-SD1506(B-SD064)の溝も堀の南側で終わる。このように、堀の万寿寺境内側は築地等の遮蔽施設が存在が予測される。しかし、この堀もすぐに埋め立てられ、1580年代には東西方向の道路として機能し、「府内古図」に描かれる状況になったものと考えられる。

一方、「万寿寺築地之内并西之屋敷両所」も北側と、ほぼ同じ経過をたどる。平成15年の発掘調査では、万寿寺西側にも北側と同じ規模の堀が廻ることが確認されている。すなわち、1580年代にはその堀もすでに埋め立てられ、万寿寺の西側は町屋化し、万寿寺の築地の内も大友家家臣の私的所有地となっている。

府内町跡20次調査で得られた結果は、そのことを裏付けるもので、幅約20m長さ105mの調査区内で、16世紀後半の遺構が検出されたのは西半分である。しかも、検出された遺構は、廃棄物を処理するために掘られた土坑や井戸など、町屋の裏手の状況を示す。そして、井戸は一定間隔で、掘削されており、万寿寺西之屋敷が計画的に建設されていることが想像できる。こうした、町屋の裏手状況は、万寿寺の北側境の堀近くまで認められ、「万寿寺西之屋敷」の範囲を知ることができる。

島津氏の豊後侵攻

この「万寿寺西之屋敷」は天正14年(1586)の島津氏の豊後侵攻により焼失するが、その後復興している可能性が高く、調査区の内から1590年代に比定されている遺物やそれを含むB-SK016・B-SK096などが検出されている。その一方、万寿寺は完全にその機能を失う。文禄2年(1593)に大友氏が除国されたこともあり、すぐには再建することはなく、現在の万寿寺が姿を現すのは、寛永8年(1631)のことであった。

第6章については、故加藤知弘(大分大学名誉教授)と小野貴文(大分航空トラベル)の両氏から多くのお教えを受けた。



第6-1圖 府内町跡20次調査区主要遺構位置圖

遺物觀察表

遺物観察表 1

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.		
			口径	高さ					
第2-401	陶器	徳利	—	5.0	A-SD1501	上層			
第2-402	在地系土師器	坏	—	2.9	A-SD1501	上層			
第2-403	在地系土師器	坏	—	4.0	A-SD1501	上層			
第2-404	京部系土師器	皿	—	11.1	A-SD1501	上層			
第2-405	京部系土師器	皿	—	12.0	A-SD1501	上層			
第2-406	京部系土師器	皿	—	12.8	A-SD1501	上層			
第2-407	瓦質土器	鉢	—	—	A-SD1501	上層			
第2-408	瓦質土器	土鍋	—	23.0	A-SD1501	上層			
第2-409	須恵質土器	鉢	—	—	A-SD1501	上層			
第2-4010	瓦質土器	鉢	—	34.8	A-SD1501	上層			
第2-4011	瓦質土器	鉢	—	22.1	A-SD1501	上層			
第2-4012	弥生土器	甕形土器	—	7.0	A-SD1501	上層			
第2-5015	在地系土師器	皿	—	8.8	1.1	A-SD1501	下層		
第2-5016	在地系土師器	皿	—	8.6	7.1	1.2	A-SD1501	下層	
第2-5017	在地系土師器	皿	—	8.8	7.6	1.3	A-SD1501	下層	
第2-5018	在地系土師器	坏	—	—	3.1	A-SD1501	下層		
第2-5019	在地系土師器	坏	—	11.6	7.8	3.1	A-SD1501	下層	
第2-5020	在地系土師器	坏	—	11.2	8.8	3.0	A-SD1501	下層	
第2-5021	在地系土師器	坏	—	12.2	8.8	3.1	A-SD1501	下層	
第2-5022	在地系土師器	坏	—	11.8	8.1	2.9	A-SD1501	下層	
第2-5023	在地系土師器	坏	—	12.1	9.6	2.9	A-SD1501	下層	
第2-5024	在地系土師器	坏	—	12.6	8.8	2.7	A-SD1501	下層	
第2-5025	在地系土師器	坏	—	13.1	8.1	3.2	A-SD1501	下層	
第2-5026	在地系土師器	坏	—	—	8.2	—	A-SD1501	下層	
第2-5027	在地系土師器	坏	—	—	9.6	—	A-SD1501	下層	
第2-5028	須恵質土器	土鍋	—	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5029	須恵質土器	鉢	—	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5030	須恵質土器	鉢	—	—	8.8	—	A-SD1501	下層	
第2-5031	須恵質土器	鉢	—	—	11.1	—	A-SD1501	下層	
第2-5032	在地系土師器	甕台	—	—	—	—	A-SD1501	32・33・34は同一個体	
第2-5033	在地系土師器	甕台	—	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-5034	在地系土師器	甕台	—	—	—	—	A-SD1501	下層	
第2-6034	甕	甕	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	白磁	合子	—	—	7.0	—	A-SD1501		
第2-6034	白磁	小坂	—	—	3.1	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	天目茶碗	—	—	11.6	—	A-SD1501		
第2-6034	青花	碗	—	—	11.8	—	A-SD1501		
第2-6034	甕古炒煎?	甕	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	褐釉陶器	甕	—	—	6.4	—	A-SD1501		
第2-6034	鉢	鉢	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	茶碗三彩	水罐	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	鉢	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	徳利	—	—	5.6	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	鉢鉢	—	—	32.1	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	鉢鉢	—	—	26.8	—	A-SD1501		
第2-6034	陶器	徳利	—	—	9.2	—	A-SD1501	底面にX印のヘラ記号	
第2-6034	土師質土器	土鍋	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	土師質土器	土鍋	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-6034	土師質土器	土鍋	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-7036	在地系土師器	皿	—	7.9	6.1	1.2	A-SD1501	底面にスタレ状圧痕	
第2-7037	在地系土師器	坏	—	—	11.1	—	A-SD1501		
第2-7038	在地系土師器	坏	—	11.1	8.6	3.3	A-SD1501		
第2-7039	在地系土師器	坏	—	12.2	8.8	3.1	A-SD1501		
第2-7040	在地系土師器	坏	—	13.2	9.0	3.6	A-SD1501		
第2-7041	在地系土師器	坏	—	10.9	8.2	2.9	A-SD1501		
第2-7042	在地系土師器	坏	—	11.5	7.8	3.2	A-SD1501	飯目圧痕	
第2-7043	在地系土師器	坏	—	14.0	8.8	3.1	A-SD1501		
第2-7044	在地系土師器	坏	—	12.0	8.1	3.3	A-SD1501		
第2-7045	在地系土師器	坏	—	12.8	9.0	3.1	A-SD1501	飯目圧痕	
第2-7046	在地系土師器	坏	—	—	7.3	—	A-SD1501		
第2-7047	京部系土師器	皿	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-7048	京部系土師器	皿	—	—	—	—	A-SD1501		
第2-7049	京部系土師器	皿	—	—	8.2	—	2.2	A-SD1501	
第2-7070	京部系土師器	皿	—	—	10.1	—	1.9	A-SD1501	
第2-7071	京部系土師器	皿	—	—	10.0	—	—	A-SD1501	
第2-7072	京部系土師器	皿	—	—	12.0	—	2.4	A-SD1501	
第2-7073	京部系土師器	皿	—	—	13.6	—	—	A-SD1501	
第2-7074	京部系土師器	皿	—	—	12.8	—	2.1	A-SD1501	
第2-7075	京部系土師器	皿	—	—	14.0	—	2.3	A-SD1501	
第2-7076	京部系土師器	皿	—	—	12.0	—	2.2	A-SD1501	
第2-7077	京部系土師器	皿	—	—	14.8	—	2.4	A-SD1501	
第2-7078	京部系土師器	坏	—	—	11.1	—	3.0	A-SD1501	
第2-7079	京部系土師器	坏	—	—	11.9	—	2.5	A-SD1501	
第2-7080	土師質土器	甕	—	—	38.8	—	—	A-SD1501	
第2-8021	須恵質土器	鉢	—	—	35.1	—	—	A-SD1501	

遺物観察表 2

府内町跡20次調査 A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)②

神田No.	器 種	生産地	法量 (単位cm)			遺物名	備 考	図版 No.
			口径	底径	高さ			
第2-8082	瓦質土器	鉢鉢	筋及系	—	—	A-SD1501		
第2-8083	須恵質土器	鉢	東横系	27.8	—	A-SD1501		
第2-8084	須恵質土器	鉢	東横系	—	7.8	A-SD1501		
第2-8085	須恵質土器	鉢	東横系	—	8.1	A-SD1501		
第2-8086	陶器	甕	備前	—	18.9	A-SD1501		
第2-8087	土師器	甕	在産	—	—	A-SD1501		
第2-8088	土師器	甕	在産	—	—	A-SD1501		
第2-8089	須恵質土器	甕	在産	—	8.9	A-SD1501		甕の把手
第2-8090	弥生土器	高坏	在産	—	—	A-SD1501		
第2-8091	弥生土器	在産	在産	—	6.0	A-SD1501		
第2-8092	弥生土器	覆形土器	在産	—	6.8	A-SD1501		
第2-15021	在産系土師器	皿	在産	7.8	5.9 1.6	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15022	在産系土師器	皿	在産	8.6	7.7 1.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15023	在産系土師器	皿	在産	8.2	7.0 1.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15024	在産系土師器	皿	在産	7.0	6.0 1.0	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15025	在産系土師器	皿	在産	7.1	6.0 1.7	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15026	在産系土師器	皿	在産	8.1	6.6 1.3	A-SD1505		
第2-15027	在産系土師器	皿	在産	8.2	7.5 1.1	A-SD1505		
第2-15028	在産系土師器	皿	在産	8.0	6.5 1.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15029	在産系土師器	皿	在産	7.8	6.4 1.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15030	在産系土師器	皿	在産	7.8	6.3 1.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15031	在産系土師器	小甕坏	在産	7.2	5.1 2.0	A-SD1505		
第2-15032	在産系土師器	坏	在産	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15033	在産系土師器	坏	在産	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15034	在産系土師器	坏	在産	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15035	在産系土師器	坏	在産	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15036	在産系土師器	坏	在産	—	—	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15037	在産系土師器	坏	在産	10.5	7.8 3.6	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15038	在産系土師器	坏	在産	11.4	8.0 4.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15039	在産系土師器	坏	在産	11.1	7.0 4.2	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15040	在産系土師器	坏	在産	12.6	8.2 3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15041	在産系土師器	坏	在産	13.2	8.1 3.7	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15042	在産系土師器	坏	在産	13.2	8.0 3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15043	在産系土師器	坏	在産	12.6	8.5 4.1	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15044	在産系土師器	坏	在産	12.3	8.0 4.1	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15045	在産系土師器	坏	在産	12.3	8.5 3.6	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15046	在産系土師器	坏	在産	12.0	8.0 3.9	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15047	在産系土師器	坏	在産	11.1	7.4 4.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15048	在産系土師器	坏	在産	12.8	8.8 4.3	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15049	在産系土師器	坏	在産	13.2	8.0 3.1	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15050	在産系土師器	坏	在産	12	8.1 3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15051	在産系土師器	坏	在産	10.8	8.7 3.6	A-SD1505		
第2-15052	在産系土師器	坏	在産	12.6	8.8 3.1	A-SD1505		
第2-15053	在産系土師器	坏	在産	11.2	7.8 2.8	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15054	在産系土師器	坏	在産	13.4	9.8 3.4	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15055	在産系土師器	坏	在産	12.0	8.2 3.6	A-SD1505		
第2-15056	在産系土師器	坏	在産	12.6	8.6 4.1	A-SD1505		
第2-15057	在産系土師器	坏	在産	12.0	8.2 3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15058	在産系土師器	坏	在産	12.3	8.7 3.1	A-SD1505		
第2-15059	在産系土師器	坏	在産	11.4	6.8 3.6	A-SD1505		
第2-15060	在産系土師器	坏	在産	13.0	8.1 3.6	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15061	在産系土師器	坏	在産	12.0	7.8 2.9	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15062	在産系土師器	坏	在産	12.2	7.8 3.6	A-SD1505		
第2-15063	在産系土師器	坏	在産	13.2	8.8 3.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15064	在産系土師器	坏	在産	12.3	8.1 3.7	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15065	在産系土師器	坏	在産	12.0	7.7 3.3	A-SD1505	A-SK1024	
第2-15066	在産系土師器	坏	在産	—	8.0	A-SD1505		
第2-15067	在産系土師器	坏	在産	—	10.6	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15068	在産系土師器	坏	在産	—	8.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15069	在産系土師器	坏	在産	—	9.0	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15070	在産系土師器	坏	在産	—	7.5	A-SD1505	A-SK1505	
第2-15071	在産系土師器	坏	在産	—	6.9	A-SD1505		
第2-17052	瓦質土器	甕	在産	—	5.0	A-SD1505		
第2-17053	須恵質土器	鉢	東横系	—	—	A-SD1505		
第2-17054	須恵質土器	鉢	東横系	21.1	8.7 8.5	A-SD1505	A-SK1505 銅鉄3枚出土	10
第2-17055	須恵質土器	鉢	東横系	—	—	A-SD1505		
第2-17056	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SD1505		
第2-17057	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SD1505		
第2-17058	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SD1505		
第2-17059	土師質土器	甕	在産	22.3	—	A-SD1505		
第2-17060	須恵質土器	甕	龜山系	—	—	A-SD1505		11
第2-17061	瓦質土器	鉢	國內	28.5	—	A-SD1505		
第2-17062	土師質土器	埴埴	在産	—	—	A-SD1505		
第2-17063	須恵質土器	甕	在産	—	10.6	A-SD1505	古代	
第2-17064	弥生土器	高坏	在産	—	—	A-SD1505		

遺物観察表 3

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③

採掘No.	器 種	生産地	法位(単位cm)			遺物名	備 考	図版No.
			法位 口径	底径	高さ			
第2-20001	京橋系土師器	皿	花壇	11.6	—	A-SD1500	上層	
第2-20002	京橋系土師器	皿	花壇	9.6	—	A-SD1500	上層	
第2-20003	京橋系土師器	皿	花壇	10.8	—	A-SD1500	上層	
第2-20004	京橋系土師器	皿	花壇	10.2	—	A-SD1500	上層	
第2-20005	京橋系土師器	皿	花壇	11.8	—	A-SD1500	上層	
第2-20006	瓦質土器	土鍋	埴内	—	—	A-SD1500	上層	
第2-20007	瓦質土器	土鍋	埴内	31.9	—	A-SD1500	上層	
第2-20008	瓦質土器	甕	埴内	—	—	A-SD1500	上層	
第2-20009	土師質土器	駒台	花壇	—	8.1	A-SD1500	上層	
第2-20013	花壇系土師器	坏	花壇	7.5	5.8	A-SD1500	中層	
第2-20014	花壇系土師器	坏	花壇	—	8.4	A-SD1500	中層	
第2-20015	花壇系土師器	坏	花壇	12.2	9.2	A-SD1500	中層	
第2-20016	京橋系土師器	皿	花壇	9.0	—	A-SD1500	中層	
第2-20017	京橋系土師器	皿	花壇	12.6	—	A-SD1500	中層	
第2-20018	京橋系土師器	皿	花壇	10.6	—	A-SD1500	中層	
第2-20019	京橋系土師器	皿	花壇	14.1	—	A-SD1500	中層	
第2-20020	瓦質土器	土鍋	埴内	—	—	A-SD1500	中層	
第2-20022	須賀貫土器	鉢	東橋系	23.9	—	A-SD1500	中層	
第2-20023	陶器	甕	常滑	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20024	花壇系土師器	皿	花壇	8.1	7.2	A-SD1500	下層	
第2-20025	京橋系土師器	皿	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20026	土師質土器	皿	吉野系	—	4.0	A-SD1500	下層	
第2-20027	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20028	須賀貫土器	鉢	東橋系	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20029	須賀貫土器	鉢	東橋系	25.6	—	A-SD1500	下層	
第2-20030	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20031	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20032	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-20033	瓦質土器	鉢	埴内	33.9	—	A-SD1500	下層	
第2-20034	陶器	坏	瀬戸瓦葺	11.8	—	A-SD1500	下層	
第2-20035	土師器	坏	花壇	—	—	A-SD1500	下層	
第2-21006	青花	皿	徳州窯	—	—	A-SD1500	下層	
第2-21007	青花	皿	徳州窯	—	—	A-SD1500	下層	
第2-21008	青花	皿	徳州窯	14.0	5.0	6.1	A-SD1500	
第2-21009	青花	皿	徳州窯	—	11.2	—	A-SD1500	
第2-21040	陶器	天目茶碗	瀬戸瓦葺	—	4.3	—	A-SD1500	
第2-21041	青花	皿	瀬戸瓦葺	—	—	—	A-SD1500	
第2-21042	青磁	駒台	—	—	—	A-SD1500		
第2-21043	陶器	大甕	—	—	—	A-SD1500	動物形	
第2-21044	陶器	高頸甕	—	—	5.1	A-SD1500		
第2-21045	陶器	注口甕	—	—	1.8	A-SD1500		
第2-21046	陶器	鉢鉢	—	26.8	—	A-SD1500		
第2-21047	陶器	鉢鉢	—	15.1	—	A-SD1500		
第2-21048	陶器	鉢鉢	—	11.2	—	A-SD1500		
第2-22009	花壇系土師器	皿	花壇	7.8	6.0	1.0	A-SD1500	
第2-22050	花壇系土師器	坏	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22051	花壇系土師器	坏	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22052	花壇系土師器	坏	花壇	—	2.9	A-SD1500		
第2-22053	花壇系土師器	坏	花壇	—	7.1	A-SD1500		
第2-22054	花壇系土師器	坏	花壇	11.2	8.1	2.7	A-SD1500	
第2-22055	花壇系土師器	坏	花壇	12.1	9.0	2.6	A-SD1500	
第2-22056	花壇系土師器	坏	花壇	—	9.8	—	A-SD1500	
第2-22057	花壇系土師器	坏	花壇	12.2	9.6	2.7	A-SD1500	
第2-22058	花壇系土師器	坏	花壇	11.4	9.6	3.0	A-SD1500	
第2-22059	花壇系土師器	坏	花壇	11.8	6.2	3.0	A-SD1500	
第2-22060	京橋系土師器	皿	花壇	8.1	—	2.2	A-SD1500	
第2-22061	京橋系土師器	皿	花壇	11.0	—	A-SD1500		
第2-22062	京橋系土師器	皿	花壇	12.2	—	2.2	A-SD1500	
第2-22063	京橋系土師器	皿	花壇	12.1	—	2.5	A-SD1500	
第2-22064	京橋系土師器	皿	花壇	13.0	—	2.5	A-SD1500	
第2-22065	京橋系土師器	皿	花壇	11.1	—	2.9	A-SD1500	
第2-22066	京橋系土師器	皿	花壇	12.6	—	2.7	A-SD1500	
第2-22067	瓦質土器	鉢	埴内	—	—	A-SD1500		
第2-22068	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22069	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22070	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22071	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22072	土師質土器	土鍋	花壇	—	—	A-SD1500		
第2-22073	土師質土器	土鍋	花壇	25.1	—	A-SD1500		
第2-22074	陶器	甕	—	32.2	—	A-SD1500		
第2-22075	瓦質土器	甕	埴内	14.2	—	A-SD1500		
第2-22076	瓦質土器	鉢	埴内	21.9	—	A-SD1500		
第2-22077	瓦質土器	鉢	埴内	—	—	A-SD1500		
第2-22078	瓦質土器	鉢	埴内	30.6	—	A-SD1500		
第2-22079	瓦質土器	鉢	埴内	38.1	—	A-SD1500		

遺物観察表 4

府内町跡20次調査 A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類) ④

神田No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	別表No.
			口径	底径	高さ			
第2-23080	瓦質土器	鉢	国内	—	—	A-SD1506		
第2-23081	須恵質土器	鉢	東播系	—	10.0	A-SD1506		
第2-24082	瓦質土器	鉢	国内	43.5	—	A-SD1506		
第2-24083	瓦質土器	鉢	国内	37.7	—	A-SD1506		
第2-24084	瓦質土器	鉢	国内	—	33.0	A-SD1506		
第2-25091	須恵質土器	甕	龜山系	44.8	—	A-SD1506	貯と同一個体	11
第2-25092	須恵質土器	甕	東播系	—	—	A-SD1506		
第2-30081	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SP004	A-SB01の柱穴	
第2-30082	佐治系土師器	坏	在産	4.2	—	A-SP005	A-SB01の柱穴	
第2-30083	佐治系土師器	陶台	在産	—	—	A-SP006	A-SB01の柱穴	
第2-30084	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SP019	A-SB01の柱穴	
第2-30085	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SP010	A-SB01の柱穴	
第2-30086	佐治系土師器	皿	在産	8.2	6.1 1.6	A-SP040	A-SB01の柱穴	
第2-30087	佐治系土師器	坏	在産	12.8	8.8 3.3	A-SP101	A-SB01の柱穴	
第2-31081	佐治系土師器	皿	在産	—	0.9	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31082	佐治系土師器	皿	在産	—	0.9	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31083	佐治系土師器	坏	在産	11.0	7.0 2.7	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31084	佐治系土師器	坏	在産	—	2.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31085	佐治系土師器	皿	在産	8.0	6.0 1.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31086	佐治系土師器	皿	在産	9.0	6.1 1.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31087	佐治系土師器	皿	在産	8.3	7.1 1.6	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31088	佐治系土師器	皿	在産	7.3	6.2 2.3	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31089	佐治系土師器	坏	在産	11.4	—	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31090	佐治系土師器	坏	在産	12.8	8.4 2.7	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31091	佐治系土師器	坏	在産	12.7	8.5 3.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31092	佐治系土師器	坏	在産	13.8	8.3 3.4	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31093	佐治系土師器	坏	在産	—	8.0	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31094	佐治系土師器	坏	在産	12.8	8.2 3.2	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-31095	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-34081	佐治系土師器	皿	在産	8.0	6.5 1.4	A-SK041		
第2-34082	佐治系土師器	皿	在産	7.4	6.2 1.6	A-SK041		
第2-34083	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK041		
第2-34084	瓦質土器	鉢	国内	36.0	—	A-SK041		
第2-34085	佐治系土師器	皿	在産	—	—	A-SK042		
第2-34086	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK069		
第2-34087	瓦質土器	鉢	国内	53.4	—	A-SK040		
第2-34088	瓦質土器	鉢	国内	29.4	—	A-SK102		
第2-38081	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	A-SK102		
第2-38082	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	A-SK102		
第2-38083	須恵質土器	鉢	東播系	8.7	6.3 1.9	A-SK112		
第2-38084	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK113		
第2-38085	佐治系土師器	皿	在産	—	—	A-SK114		
第2-38086	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK114		
第2-38087	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK114		
第2-38088	土師質土器	土鍋	在産	13.2	—	A-SK114		
第2-38089	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SK114		
第2-40081	京橋系土師器	皿	在産	11.3	—	A-SK1010		
第2-40082	佐治系土師器	坏	在産	6.8	6.0 1.5	A-SK1010		
第2-40083	佐治系土師器	坏	在産	—	0.9	A-SK1010		
第2-40084	佐治系土師器	坏	在産	—	—	A-SK1010		
第2-40085	陶器	甕	備前	—	—	A-SK1010		
第2-40086	土師質土器	坏	在産	—	—	A-SK1010	古代	
第2-43081	青磁	甕	瀬戸美濃	—	—	A-SK1013		
第2-43082	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	—	—	A-SK1013		
第2-43083	陶器	鉢	備前	26.1	—	A-SK1013		
第2-43084	陶器	鉢	備前	25.2	—	A-SK1013		
第2-43085	陶器	鉢	備前	27.6	—	A-SK1013		
第2-43086	陶器	鉢	備前	—	—	A-SK1013		
第2-43087	佐治系土師器	坏	在産	—	7.2	A-SK1013		
第2-43088	京橋系土師器	皿	在産	8.4	—	A-SK1013		
第2-43089	京橋系土師器	皿	在産	12.0	—	A-SK1013		
第2-43090	京橋系土師器	皿	在産	11.8	—	A-SK1013		
第2-43091	京橋系土師器	皿	在産	12.2	—	A-SK1013		
第2-43092	京橋系土師器	坏	在産	—	—	A-SK1013		
第2-43093	京橋系土師器	坏	在産	11.6	—	A-SK1013		
第2-43094	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SK1013		
第2-43095	土師質土器	土鍋	在産	—	—	A-SK1013	野付	
第2-43096	瓦質土器	鉢	国内	35.8	—	A-SK1013		
第2-43097	青花	甕	瀬戸美濃	7.4	—	A-SK1013		
第2-48081	緑釉	鉢	備前	—	—	A-SK1017		
第2-48082	陶器	皿	瀬戸美濃	10.0	5.0 1.0	A-SK1017		
第2-48083	陶器	鉢	備前	31.9	—	A-SK1017		
第2-48084	陶器	鉢	備前	—	6.8	A-SK1017		
第2-48085	京橋系土師器	皿	在産	—	—	A-SK1017		
第2-48086	京橋系土師器	皿	在産	12.0	—	2.5	A-SK1017	
第2-48087	京橋系土師器	皿	在産	12.0	—	2.4	A-SK1017	
第2-48088	須恵質土器	坏	在産	—	—	A-SK1017	古代	

遺物観察表 5

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

探洞No.	器種	生産地	法尺(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
302-50081	陶器	鉢	8.9	—	A-SK1018		
302-50082	陶器	甕	—	—	A-SK1018		
302-50083	在地系土師器	甕	7.0	6.0	A-SK1018		
302-50084	土師貫土師	土師	—	—	A-SK1018		
302-53081	在地系土師器	甕	—	—	A-SK1019		
302-53082	在地系土師器	甕	8.8	6.0	A-SK1019		
302-53083	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1019		
302-53084	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1019		
302-53085	在地系土師器	坏	11.4	—	A-SK1019		
302-53086	在地系土師器	甕	8.0	6.0	A-SK1019		
302-53087	京師系土師器	甕	—	—	A-SK1019		
302-53088	京師系土師器	甕	—	—	A-SK1019		
302-53089	瓦貫土師	鉢	21.0	—	A-SK1019		
302-53090	土師貫土師	甕	—	—	A-SK1019		
302-53091	瓦貫土師	火鉢	—	—	A-SK1019		
302-55081	陶器	大甕	—	—	A-SK1023		
302-55082	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1023		
302-55083	土師貫土師	甕	—	—	A-SK1023		
302-55084	瓦貫土師	羽釜	—	—	A-SK1023		
302-58081	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1030		
302-58082	京師系土師器	甕	—	—	A-SK1030		
302-58083	京師系土師器	甕	9.0	—	A-SK1030		
302-58084	京師系土師器	甕	13.8	—	A-SK1030		
302-61081	埴輪陶器	壺	—	—	A-SK1030		
302-61082	瓦貫土師	鉢	—	—	A-SK1030		
302-61083	瓦貫土師	鉢	—	—	A-SK1030		
302-63081	在地系土師器	坏	12.0	—	A-SK1042		
302-63082	在地系土師器	坏	11.5	8.4	A-SK1042		
302-63083	在地系土師器	坏	12.2	7.0	A-SK1042		
302-63084	在地系土師器	坏	12.6	8.2	A-SK1042		
302-63085	在地系土師器	坏	12.7	7.8	A-SK1042		
302-63086	在地系土師器	坏	12.7	7.8	A-SK1042		
302-63087	土師貫土師	土師	—	—	A-SK1042		
302-63088	土師貫土師	土師	37.6	—	A-SK1042		
302-65081	百瑠	甕	13.0	—	A-SK1043		
302-65082	鉢	甕	—	7.5	A-SK1043		
302-65083	白磁	甕	—	7.0	A-SK1043		
302-65084	在地系土師器	坏	10.4	7.8	A-SK1043		
302-65085	在地系土師器	坏	12.3	8.0	A-SK1043		
302-65086	瓦貫土師	甕	—	—	A-SK1043		
302-65088	瓦貫土師	甕	—	8	A-SK1043		
302-67081	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1051		
302-70081	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1058		
302-70082	在地系土師器	燗台	8.4	8.2	A-SK1058		
302-70083	瓦貫土師	鉢	—	—	A-SK1058		
302-70084	在地系土師器	坏	—	—	A-SK1058		
302-71081	在地系土師器	坏	12.0	—	A-SK1059		
302-71082	在地系土師器	燗台	—	7.4	A-SK1059		
302-73081	瓦貫土師	鉢	—	—	A-SK1065		
302-73082	陶器	天目茶碗	7.4	3.4	A-SK1068		
302-78081	在地系土師器	坏	14.2	11.4	A-SK1069		
302-78082	土師貫土師	土師	30.8	—	A-SK1069		
302-80081	陶器	甕	—	—	A-SK1081		
302-81081	在地系土師器	甕	9.2	7.8	A-SK1082		
302-85081	在地系土師器	坏	12.3	9.5	A-SK1083		
302-85082	在地系土師器	坏	12.1	7.1	A-SK1083		
302-87081	苜花	甕	8.1	—	A-SK1084		
302-87082	苜花	甕	10.1	—	A-SK1084		
302-87083	埴輪陶器	壺	3.8	—	A-SK1084		
302-87084	埴輪陶器	壺	—	9.0	A-SK1084		
302-87085	京師系土師器	甕	9.4	2.3	A-SK1084		
302-87086	京師系土師器	甕	12.6	3.4	A-SK1084		
302-87087	瓦貫土師	鉢	—	—	A-SK1084		
302-89081	在地系土師器	坏	12.0	8.2	A-SK1089		
302-89082	在地系土師器	坏	12.0	8.4	A-SK1089		
302-90081	在地系土師器	坏	10.8	9.2	A-SK1091		
302-90082	在地系土師器	坏	12.8	8.6	A-SK1091		
302-92081	京師系土師器	甕	12.6	—	A-SK1092		
302-95081	苜花	埴輪茶碗	—	—	A-SK1093		
302-95082	在地系土師器	甕	8.4	6.6	A-SK1093		
302-95083	在地系土師器	坏	11.4	8.5	A-SK1093		
302-97081	須山器	坏	—	—	A-SK1094		
302-97082	土師貫土師	土師	—	—	A-SK1094		
302-99081	百瑠	甕	—	—	A-SK1096		
302-99082	須山器	甕	—	—	A-SK1096		

遺物観察表 6

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥

標記No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第2-10983	陶器	大甕	甕前	—	—	A-SK1096		
第2-10981	陶器	甕鉢	甕前	24.0	—	A-SK1099		
第2-10491	苧磁	甕	甕泉室	—	—	A-SK1100		
第2-10492	陶器	甕	甕前	—	—	A-SK1100		
第2-10493	在地球系土師器	坏	在池	10.8	—	A-SK1100		
第2-10494	在地球系土師器	坏	在池	11.2	8.1	3.6	A-SK1100	
第2-10495	京都市土師器	甕	在池	8.2	—	2.0	A-SK1100	
第2-10496	京都市土師器	甕	在池	10.2	—	2.0	A-SK1100	
第2-10497	土師質土器	土鍋	在池	—	—	—	A-SK1100	
第2-10499	瓦質土器	鉢	国内	42.0	—	—	A-SK1100	
第2-104910	土師器	高坏	在池	—	—	—	A-SK1100	古代
第2-10791	陶器	甕	甕前	—	—	—	A-SK1101	
第2-10792	在地球系土師器	甕	在池	9.2	7.0	1.3	A-SK1101	
第2-10793	京都市土師器	甕	在池	5.0	—	1.5	A-SK1101	焼き塩釜の蓋
第2-10794	在地球系土師器	甕	在池	10.1	3.1	2.1	A-SK1101	
第2-10795	瓦質土器	甕	国内	34.0	—	—	A-SK1104	
第2-11091	陶器	甕鉢	甕前	—	—	—	A-SK1104	
第2-11092	陶器	甕鉢	甕前	26.1	—	—	A-SK1104	
第2-11093	在地球系土師器	坏	在池	—	—	1.7	A-SK1104	
第2-11094	在地球系土師器	坏	在池	7.2	6.0	1.6	A-SK1104	
第2-11095	在地球系土師器	坏	在池	—	—	6.0	A-SK1101	
第2-11096	在地球系土師器	坏	在池	—	—	3.0	A-SK1104	内面にロクロ目
第2-11097	京都市土師器	甕	在池	5.2	—	2.0	A-SK1104	
第2-11098	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	6.0	A-SK1104	
第2-11099	瓦質土器	火鉢	国内	—	—	—	A-SK1104	
第2-11191	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SK1105	
第2-11491	在地球系土師器	坏	在池	—	—	—	A-SK1061	
第2-11492	在地球系土師器	坏	在池	—	—	—	A-SK1061	
第2-11493	京都市土師器	坏	在池	9.0	—	2.6	A-SK1065	
第2-11495	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1020	
第2-11496	土師器	坏蓋	在池	12.1	—	—	A-SK1022	
第2-11497	在地球系土師器	坏	在池	—	9.1	—	A-SK1025	
第2-11499	在地球系土師器	甕	在池	—	—	1.3	A-SK1041	
第2-114910	在地球系土師器	甕	在池	8.1	6.6	1.3	A-SK1041	
第2-114911	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SK1041	
第2-114912	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SK1041	
第2-114913	陶器	甕	甕前	—	—	—	A-SK1044	
第2-114914	在地球系土師器	甕	在池	—	—	1.7	A-SK1047	
第2-114915	在地球系土師器	坏	在池	11.1	7.1	3.3	A-SK1047	
第2-114916	在地球系土師器	坏	在池	13.8	6.0	3.0	A-SK1047	
第2-114917	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SK1047	
第2-114918	在地球系土師器	坏	在池	—	—	6.6	A-SK1047	
第2-114919	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SK1047	
第2-114920	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SK1047	
第2-114921	在地球系土師器	坏	在池	—	—	2.8	A-SK1049	
第2-114922	在地球系土師器	坏	在池	11.0	8.6	3.4	A-SK1049	
第2-114923	在地球系土師器	坏	在池	11.8	8.6	3.1	A-SK1049	
第2-114924	在地球系土師器	坏	在池	—	—	6.0	A-SK1053	
第2-114925	在地球系土師器	坏	在池	—	—	—	A-SK1060	
第2-114926	京都市土師器	甕	在池	12.2	—	2.3	A-SK1061	
第2-114927	土師器	坏蓋	在池	—	—	—	A-SK1062	
第2-114928	在地球系土師器	甕	在池	—	—	1.5	A-SK1062	
第2-114929	在地球系土師器	甕	在池	12.1	8.1	2.9	A-SK1063	
第2-114930	在地球系土師器	坏	在池	7.8	6.4	1.6	A-SK1064	
第2-114931	在地球系土師器	坏	在池	—	—	—	A-SK1066	
第2-114932	瓦質土器	甕	国内	—	—	—	A-SK1071	内里土器
第2-114933	在地球系土師器	坏	在池	—	—	—	A-SK1071	
第2-11691	陶器	大甕	甕前	—	—	—	A-SE1045	
第2-11692	在地球系土師器	甕	在池	7.0	6.0	0.9	A-SE1045	
第2-11693	在地球系土師器	坏	在池	—	—	8.1	A-SE1045	
第2-11694	在地球系土師器	坏	在池	12.0	8.1	3.9	A-SE1045	
第2-11695	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SE1045	
第2-11696	京都市土師器	甕	在池	13.0	—	2.0	A-SE1045	
第2-11697	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	A-SE1045	
第2-11698	陶器	大甕	甕前	—	35.0	—	A-SE1045	
第2-116911	陶器	甕鉢	甕前	—	—	—	A-SE1045	
第2-116912	陶器	甕鉢	甕前	—	6.0	—	A-SE1045	
第2-116913	陶器	甕鉢	甕前	—	—	—	A-SE1045	
第2-116914	陶器	大甕	甕前	—	35.0	—	A-SE1045	
第2-117915	在地球系土師器	坏	在池	—	—	2.3	A-SE1045	
第2-117916	京都市土師器	甕	在池	—	—	—	A-SE1045	
第2-117917	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	A-SE1045	
第2-117918	須恵質土器	甕	角山系	44.4	—	—	A-SE1045	
第2-117919	瓦質土器	火鉢	国内	44.0	—	—	A-SE1045	臼鉢部に雷文
第2-117920	須恵土器	坏	在池	—	—	6.0	A-SE1045	古代

遺物観察表 7

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦

採掘No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺物名	備考	図版No.	
			口径	底径				
第2-117820	須恵系土器	在産	—	9.0	—	A-SE1045	古代	
第2-117821	須恵系土器	陸	—	11.8	—	A-SE1045		
第2-120821	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP036		
第2-120822	陶器	瀬戸文遺	—	3.6	—	A-SP036		
第2-120823	陶器	瀬戸文遺	—	6.0	—	A-SP036		
第2-120824	在地系土師器	在産	—	9.2	—	A-SP036		
第2-120825	在地系土師器	在産	12.0	8.2	4.1	A-SP036		
第2-120826	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP043		
第2-120827	在地系土師器	在産	—	6.1	—	A-SP043		
第2-120829	土師系土師	土師	—	—	—	A-SP045		
第2-120830	在地系土師器	在産	—	7.2	—	A-SP077		
第2-120831	弥生土器	豊前土師	—	6.0	—	A-SP081		
第2-120832	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP083		
第2-120833	土師系土師	土師	—	—	—	A-SP085		
第2-120834	京橋系土師器	在産	10.1	—	3.1	A-SP117		
第2-120835	在地系土師器	在産	11.0	9.0	3.3	A-SP1080		
第2-120836	在地系土師器	在産	7.1	6.8	1.1	A-SP1051		
第2-120837	在地系土師器	在産	8.0	6.0	1.1	A-SP1051		
第2-121821	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP020		
第2-121822	在地系土師器	在産	—	7.0	—	A-SP048		
第2-121823	在地系土師器	在産	—	9.8	—	A-SP048		
第2-121824	在地系土師器	在産	—	—	3.2	A-SP056		
第2-121825	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP060		
第2-121826	在地系土師器	在産	—	—	3.3	A-SP064		
第2-121827	在地系土師器	陶	11.8	6.8	3.3	A-SP065		
第2-121829	在地系土師器	在産	13.2	—	—	A-SP073		
第2-121830	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP078		
第2-121831	在地系土師器	在産	—	—	1.0	A-SP079		
第2-121832	在地系土師器	在産	—	6.5	—	A-SP086		
第2-121833	在地系土師器	在産	7.2	6.0	1.3	A-SP090		
第2-121834	土師系土師	陶	—	—	—	A-SP091		
第2-121835	在地系土師器	在産	—	6.0	—	A-SP091		
第2-121836	土師系土師	陶	—	4.0	—	A-SP091		
第2-121838	在地系土師器	在産	7.2	6.0	1.3	A-SP107		
第2-121839	瓦器土器	陶内	—	—	—	A-SP108		
第2-121840	在地系土師器	在産	14.0	—	—	A-SP118		
第2-121821	陶器	水戸遺	24.1	—	—	A-SP119		
第2-121822	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP121		
第2-121823	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP123		
第2-121824	京橋系土師器	在産	10.1	—	2.7	A-SP125		
第2-121825	在地系土師器	在産	—	8.0	—	A-SP126		
第2-121826	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP131		
第2-121827	在地系土師器	在産	—	—	—	A-SP131		
第2-121828	土師系土師	土師	—	—	—	A-SP131		
第2-121829	在地系土師器	在産	—	—	0.9	A-SP163		
第2-122821	陶器	備前	10.6	—	—	A-SK1073		
第2-122822	在地系土師器	在産	8.0	7.8	1.3	A-SK1073		
第2-122823	在地系土師器	在産	11.6	—	—	A-SK1086		
第2-122824	在地系土師器	在産	12.8	—	—	A-SK1086		
第2-122825	在地系土師器	在産	12.8	—	—	A-SK1086		
第2-122826	在地系土師器	在産	13.5	—	—	A-SK1086		
第2-122827	須恵系土師	陸	27.0	—	—	A-SK1086		
第2-122830	在地系土師器	在産	7.8	5.3	1.3	A-SK1102		
第2-122831	京橋系土師器	在産	8.0	—	2.1	A-SK1103		
第2-122832	京橋系土師器	在産	12.9	—	—	A-SK1502		
第2-122834	在地系土師器	在産	—	—	1.9	A-SK1501		
第2-122835	陶器	天日京跡	瀬戸文遺	—	3.1	A-SK1606		
第2-123821	白磁	陶安窯	—	—	—	L-30		
第2-123822	白磁	陶内	11.0	5.8	3.3	L-39		
第2-123823	青磁	陶	—	—	—	K-11		
第2-123824	青磁	龍泉窯	—	—	—	K-11		
第2-123825	青磁	陶	—	—	—	包含層		
第2-123826	青磁	陶	11.8	5.4	4.9	40区	始末作	
第2-123827	青磁	陶	11.1	4.3	5.7	K-11	双魚文	
第2-123828	白磁	陶	12.2	—	4.7	K-39	荒削している	
第2-123829	白磁	陶	6.6	4.0	1.5	39区		
第2-123830	陶器	合下	瀬戸文遺	3.2	2.2	1.6	40区	
第2-123831	白磁	陶	10.0	4.3	2.5	40区		
第2-123832	青磁	陶	10.4	5.8	3.0	40区		
第2-123833	青磁	陶	—	—	—	坂部区		
第2-123834	磁物陶器	中国	—	—	—	K-39		
第2-124825	青花	陶	景徳窯	—	—	40区		
第2-124826	青花	陶	景徳窯	—	—	K-30		
第2-124827	青花	陶	景徳窯	—	—	K-11		
第2-124828	青花	陶	景徳窯	13.2	6.6	3.1	L-38	

遺物観察表 8

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑧

神田No.	器 種	生産地	法尺(単位cm)			遺積名	備 考	図版 No.
			口径	底径	高さ			
第2-124019-1	青花	皿	京極朝雲	—	—	K-30		
第2-124019-2	青花	皿	京極朝雲	—	16.0	L-40		
第2-124020	小皿	小皿	京極朝雲	—	2.1	41区		
第2-124021	青花	皿	神州	—	4.2	K-30		
第2-124022	白磁	皿	中国	11.6	—	K-41		
第2-124023	白磁	小皿	中国	—	2.6	K-30		
第2-124024	陶器	長柄蓋	瀬戸英造	—	—	K-30		
第2-124025	陶器	梅皿	瀬戸英造	—	—	K-38		
第2-124026	陶器	香炉	瀬戸英造	—	3.4	40区	3ヶ所に脚	
第2-124027	陶器	天目	瀬戸英造	—	4.8	M-41		
第2-125028	陶器	皿	瀬戸英造	0.2	5.9	27	41区	
第2-125029	陶器	皿	瀬戸英造	11.4	6.4	1.0	K-41	
第2-125030	陶器	皿	瀬戸英造	11.0	7.0	2.3	40区	
第2-125031	陶器	皿	瀬戸英造	11.0	4.4	2.0	41区	新緑ソノ風
第2-125032	陶器	皿	瀬戸英造	11.3	—	—	41区	新緑ソノ風
第2-125033	陶器	皿	瀬戸英造	—	5.0	—	40区	
第2-125034	陶器	皿	肥前系	10.6	3.2	2.8	41区	
第2-125035	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	包含層	
第2-125036	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	40区	
第2-125037	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	41区	
第2-125038	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	包含層	
第2-125039	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	41区	
第2-125040	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	41区	
第2-125041	緑釉	鉢	肥前系	—	—	—	39	
第2-125042	陶器	徳利	朝鮮王朝	—	10.0	—	KL-41	舟徳利
第2-126043	陶器	甕	常滑	—	—	M-38		
第2-126044	陶器	甕	常滑	15.2	—	M-11		
第2-126045	陶器	甕	常滑	17.6	—	41区		
第2-126046	陶器	挿花入れ	備前	0.2	—	K-39	第2-116図12と同一体	10
第2-126047	陶器	挿花入れ	備前	—	—	K-39	最大径8.2cm	10
第2-126048	陶器	鉢	備前	—	—	—	包含層	
第2-126049	陶器	鉢	備前	—	—	—	39区	
第2-126050	陶器	皿	備前	—	—	—	包含層	
第2-126051	陶器	皿	備前	28.2	15.0	4.2	K-39	
第2-126052	陶器	鉢	高麗	14.8	8.8	4.0	41区	
第2-126053	陶器	徳利	備前	3.0	—	—	K-40	
第2-126054	陶器	徳利	備前	—	5.0	—	K-40	
第2-126055	陶器	徳利	備前	—	7.0	—	K-39	
第2-126056	陶器	徳利	備前	—	5.2	—	K-39	
第2-126057	陶器	水屋壺	備前	17.4	—	—	包含層	
第2-126058	陶器	徳利	備前	30.8	—	—	包含層	
第2-126059	陶器	徳利	備前	—	10.4	—	包含層	
第2-126060	陶器	大甕	備前	—	—	—	L-40	
第2-127061	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.0	1.1	L-39	
第2-127062	在地系土師器	皿	在地	8.4	7.0	1.0	K-41	
第2-127063	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.2	0.9	包含層	
第2-127064	在地系土師器	皿	在地	9.0	8.0	1.3	39区	
第2-127065	在地系土師器	皿	在地	8.2	8.2	1.0	M-41	
第2-127066	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.6	1.6	40区	
第2-127067	在地系土師器	皿	在地	8.5	7.3	1.1	L-38	
第2-127068	在地系土師器	皿	在地	8.6	6.4	1.1	41区	
第2-127069	在地系土師器	皿	在地	8.0	6.2	1.1	K-39	
第2-127070	在地系土師器	坏	在地	6.7	4.7	1.8	M-11	
第2-127071	在地系土師器	坏	在地	13.0	8.4	2.8	40区	
第2-127072	在地系土師器	坏	在地	12.6	8.0	3.1	M-11	
第2-127073	在地系土師器	坏	在地	11.2	8.0	4.0	包含層	
第2-127074	在地系土師器	坏	在地	11.2	7.9	3.7	41区	
第2-127075	在地系土師器	坏	在地	13.0	10.0	3.0	M-11	
第2-127076	在地系土師器	坏	在地	13.4	9.0	3.7	包含層	
第2-127077	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.2	3.7	包含層	
第2-127078	在地系土師器	坏	在地	—	—	—	K-41	内面にロクロ目
第2-127079	京系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39	
第2-127080	京系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39	
第2-127081	京系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39	
第2-127082	京系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39	
第2-127083	京系土師器	皿	在地	—	—	—	K-39	
第2-127084	京系土師器	皿	在地	—	—	—	包含層	
第2-127085	京系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	L-38	
第2-127086	京系土師器	皿	在地	8.0	—	—	K-40	
第2-127087	京系土師器	皿	在地	8.8	—	1.0	40区	
第2-127088	京系土師器	皿	在地	9.0	—	1.8	包含層	
第2-127089	京系土師器	皿	在地	9.6	—	2.1	K-39	
第2-127090	京系土師器	皿	在地	8.4	—	2.0	L-40	
第2-127091	京系土師器	皿	在地	9.2	—	2.1	L-39	
第2-127092	京系土師器	皿	在地	8.8	—	1.8	K-39	

遺物観察表 9

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨

発掘No.	器 種	生源地	法区(単位cm)			遺構名	備 考	図版No.
			口径	底径	高さ			
302-127083	京都系土師器	皿	在	在	9.4	-	-	K-39
302-127084	京都系土師器	皿	在	在	9.0	-	1.7	40区
302-127085	京都系土師器	皿	在	在	10.4	-	-	包含層
302-127086	京都系土師器	皿	在	在	9.1	-	1.6	41区
302-127087	京都系土師器	皿	在	在	9.0	-	-	41区
302-127088	京都系土師器	皿	在	在	10.1	-	2.1	L-41
302-127089	京都系土師器	皿	在	在	10.6	-	1.9	K-39
302-127090	京都系土師器	皿	在	在	10.8	-	2.2	K-39
302-127091	京都系土師器	皿	在	在	10.9	-	2.1	K-40
302-127092	京都系土師器	皿	在	在	11.7	-	2.1	L-38
302-127093	京都系土師器	皿	在	在	10.6	-	-	K-39
302-127094	京都系土師器	皿	在	在	11.2	-	-	40区
302-127095	京都系土師器	皿	在	在	11.8	-	2.8	L-38
302-128096	京都系土師器	皿	在	在	12.7	-	-	40区
302-128097	京都系土師器	皿	在	在	11.8	-	-	L-39
302-128098	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	-	包含層
302-128099	京都系土師器	皿	在	在	12.6	-	2.2	K-39
302-128100	京都系土師器	皿	在	在	12.8	-	2.0	40区
302-128101	京都系土師器	皿	在	在	13.0	-	-	L-38
302-128102	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	-	L-39
302-128103	京都系土師器	皿	在	在	12.6	-	-	K-39
302-128104	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	-	L-41
302-128105	京都系土師器	皿	在	在	11.6	-	2.1	41区
302-128106	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	2.3	40区
302-128107	京都系土師器	皿	在	在	12.6	-	1.9	K-40
302-128108	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	2.1	41区
302-128109	京都系土師器	皿	在	在	13.0	-	2.1	K-39
302-128110	京都系土師器	皿	在	在	12.8	-	1.9	K-40
302-128111	京都系土師器	皿	在	在	11.6	-	-	41区
302-128112	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	-	41区
302-128113	京都系土師器	皿	在	在	12.0	-	2.1	41
302-128114	京都系土師器	皿	在	在	12.0	-	2.3	40区
302-128115	京都系土師器	皿	在	在	12.0	-	2.5	K-40
302-128116	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	2.2	41区
302-128117	京都系土師器	皿	在	在	12.6	-	2.1	K-41
302-128118	京都系土師器	皿	在	在	12.8	-	2.3	K-40
302-128119	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	2.1	K-40
302-128120	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	-	41区
302-128121	京都系土師器	皿	在	在	12.0	-	2.3	40区
302-128122	京都系土師器	皿	在	在	12.0	-	2.5	K-40
302-128123	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	2.2	41区
302-128124	京都系土師器	皿	在	在	12.6	-	2.1	K-41
302-128125	京都系土師器	皿	在	在	12.8	-	2.3	K-40
302-128126	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	2.1	K-40
302-128127	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	-	41区
302-128128	京都系土師器	皿	在	在	13.6	-	2.2	K-40
302-128129	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	2.0	L-38
302-128130	京都系土師器	皿	在	在	12.8	-	-	L-41
302-128131	京都系土師器	皿	在	在	13.1	-	2.1	L-38
302-128132	京都系土師器	皿	在	在	11.8	-	2.5	K-40
302-128133	京都系土師器	皿	在	在	13.2	-	1.9	K-40
302-128134	京都系土師器	皿	在	在	16.1	-	1.9	L-38
302-128135	京都系土師器	皿	在	在	-	-	-	39区
302-128136	京都系土師器	皿	在	在	10.0	-	2.7	39区
302-128137	京都系土師器	皿	在	在	11.2	-	3.0	L-39
302-128138	京都系土師器	皿	在	在	10.0	-	3.2	K-40
302-128139	京都系土師器	皿	在	在	11.2	-	-	K-40
302-128140	京都系土師器	皿	在	在	12.1	-	3.0	L-39
302-128141	京都系土師器	皿	在	在	11.8	-	2.9	K-41
302-128142	京都系土師器	皿	在	在	-	-	-	L-39
302-128143	京都系土師器	皿	在	在	-	-	-	41区
302-128144	京都系土師器	皿	在	在	-	-	-	41区
302-128145	京都系土師器	埴壇	在	在	-	-	-	底部径3.0cm
302-128146	土師土器	皿	在	在	8.2	-	3.1	41区
302-129048	須恵質土器	甕	魚山系	36.8	-	-	-	L-40
302-129049	須恵質土器	甕	不明	-	-	-	-	包含層
302-129050	瓦質土器	土鍋	在	在	-	-	-	L-41
302-129051	瓦質土器	土鍋	在	在	21.1	-	-	41区
302-129052	土師質土器	土鍋	在	在	16.1	-	-	M-11
302-129053	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	M-11
302-129054	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	M-39
302-129055	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	40区
302-129056	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	40区
302-129057	土師質土器	土鍋	在	在	18.1	-	-	L-38
302-129058	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	K-39
302-129059	土師質土器	土鍋	在	在	23.2	-	-	41区
302-129060	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	40区
302-129061	土師質土器	土鍋	在	在	2.1	-	-	40区
302-129062	土師質土器	土鍋	在	在	-	-	-	KL-41
302-129063	土師質土器	土鍋	在	在	37.0	-	-	N-38
302-130064	須恵質土器	鉢	東播磨系	-	-	-	-	包含層
302-130065	須恵質土器	鉢	東播磨系	-	-	-	-	40区
302-130066	須恵質土器	鉢	東播磨系	-	-	-	-	40区
302-130067	須恵質土器	鉢	東播磨系	-	-	-	-	L-39
302-130068	瓦質土器	鉢	40区	-	-	-	-	K-39

遺物観察表10

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土器・陶磁器類) ⑩

神田No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第2-130図169	真貫土器	鉢	陶内	-	-	M-41		
第2-130図170	真貫土器	甕	陶内	12.0	-	40区	170~171同一体	スタンプ文
第2-130図171	真貫土器	甕	陶内	-	-	40区		スタンプ文
第2-130図172	真貫土器	甕	陶内	-	-	K-39		スタンプ文
第2-130図173	真貫土器	鉢	陶内	-	21.5	K-38		
第2-130図174	真貫土器	鉢	陶内	20.8	-	40区		
第2-130図175	真貫土器	鉢	陶内	21.1	-	L-40		
第2-130図176	真貫土器	鉢	陶内	-	-	K-39		
第2-130図177	真貫土器	鉢	陶内	-	-	K-39		
第2-130図178	真貫土器	鉢	陶内	-	-	K-41		
第2-130図179	真貫土器	鉢	陶内	-	-	K-39		
第2-130図180	真貫土器	鉢	陶内	33.6	-	41区		
第2-130図181	真貫土器	鉢	陶内	34.2	-	K-39		
第2-130図182	真貫土器	鉢	陶内	-	32.0	40区		
第2-130図183	真貫土器	鉢	陶内	-	-	KL-11		
第2-130図184	真貫土器	鉢	陶内	-	-	39区	火鉢の脚	
第2-131図194	須恵器	坏	在埋	-	8.0	41区	古代	
第2-131図195	土師器	坏	在埋	-	5.0	41区	古代	
第2-131図196	土師器	坏	在埋	-	7.4	39区	古代	

遺物観察表11

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土製品・石製品) ⑪

神田No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-180図13	土塊	土質		2.5	1.0	-	5.0	A-SD1501		
第2-180図14	土塊	土質		2.6	1.0	-	2.5	A-SD1501		
第2-50図35	フイゴ	土質		-	-	-	-	A-SD1501	中室部系2.5cm	
第2-50図36	土器片加工品	土器		-	-	1.8	-	A-SD1501		
第2-50図37	土塊	土質		4.7	1.2	-	7.2	A-SD1501		
第2-50図38	土塊	土質		1.7	2.0	-	-	A-SD1501		
第2-178図62	砥石	磨石	土層?	長さ13.0	口径22	底径9.1	-	A-SD1505		11
第2-180図66	砥石	磨石		5.7	4.0	-	-	A-SD1505		
第2-200図10	砥石	磨石		4.1	1.5	-	-	A-SD1506	上層	
第2-200図11	砥石	磨石		3.4	4.8	0.8	-	A-SD1506	上層	
第2-200図12	砥石	磨石		7.8	5.7	1.1	-	A-SD1506	上層	
第2-200図21	砥石	磨石		-	-	-	-	A-SD1506	中層	
第2-240図85	砥石	磨石		-	口径18	-	-	A-SD1506		
第2-240図86	砥石	磨石		-	口径33	-	-	A-SD1506		
第2-240図88	土塊	土質		5.3	0.9	-	3.1	A-SD1506		
第2-240図89	土塊	土質		3.2	1.1	-	3.0	A-SD1506		
第2-240図90	土玉	土質		1.7	1.7	-	-	A-SD1506	貫通しない孔	
第2-310図16	脚	土質	土層?	5.7	1.7	-	-	A-SP026	A-SB01の柱穴	
第2-360図3	土塊	土質		5.5	0.9	-	4.1	A-SK102		
第2-500図5	フイゴ	土質		-	-	-	-	A-SK1018		
第2-500図6	土玉	土質		1.5	1.7	-	3.6	A-SK1018	貫通しない孔	12
第2-500図7	土玉	土質		1.5	1.4	-	2.7	A-SK1018	貫通しない孔	12
第2-530図12	石臼	石質		-	-	-	-	A-SK1019		
第2-580図5	土塊	土質		4.0	1.2	-	6.3	A-SK1030		
第2-650図7	土塊	土質		3.8	1.1	-	3.5	A-SK1043		
第2-700図5	切石	凝灰岩		-	-	-	-	A-SK1058	石炭?	
第2-970図3	土器片加工品	土器		5.8	-	1.5	-	A-SK1094		
第2-1010図2	硯	石質		3.6	3.4	0.9	16.1	A-SK1099		
第2-1010図3	砥石	磨石		13.2	5.4	5.1	496.1	A-SK1099		
第2-110図10	土塊	土質		3.1	0.9	-	1.9	A-SK1104		
第2-1140図4	砥石	磨石		3.8	3.0	0.9	9.8	A-SK1099		
第2-1140図8	土器片加工品	土器		5.5	-	-	-	A-SK1037	京原系土師器を利用	
第2-1160図9	土塊	土質		3.7	2.0	-	12.5	A-SE1045		
第2-1160図10	砥石	磨石		4.5	3.7	1.3	35.2	A-SE1045		
第2-120図8	土塊	土質		4.2	1.1	-	5.1	A-SP043		
第2-1210図8	土塊	土質		5.3	1.0	-	5.1	A-SP065		
第2-1210図17	土塊	土質		4.5	1.2	-	4.7	A-SP091		
第2-1220図8	土塊	土質		3.3	1.8	-	6.8	A-SK1095		
第2-1220図9	土層の脚	土質		5.8	2.2	-	-	A-SK1098		
第2-1220図13	土塊	土質		5.8	2.0	-	18.3	A-SK1502		
第2-1280図146	土塊	土質		-	-	-	-	K-39	最大径3.5cm	
第2-1310図185	砥石	磨石	口縁部	-	-	-	-	40区	口径20.6cm	
第2-1310図186	砥石	磨石	口縁部	-	-	-	-	41区		
第2-1310図187	砥石	磨石		-	-	-	-	L-41		
第2-1310図188	砥石	磨石		-	-	-	-	K-39		
第2-1310図189	砥石	磨石		-	-	-	-	K-38		
第2-1310図190	砥石	磨石		-	-	-	-	包含層		
第2-1310図191	砥石	磨石		-	-	-	-	K-40		
第2-1310図192	砥石	磨石		-	-	-	-	K-40		
第2-1310図193	砥石	磨石		-	-	-	-	39区		

遺物観察表12

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(土製品・石製品)②

神隠No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-13118200	土器片加工品	土器		2.5	2.6	0.8	5.7	39区		
第2-13118201	土器片加工品	土器		3.0	3.0	0.8	7.5	包含層		
第2-13118202	土器片加工品	土器		2.9	3.1	0.8	11.1	包含層		
第2-13118203	土器片加工品	土器		3.2	5.2	1.2	27.0	39区		
第2-13118204	土器片加工品	土器		3.1	3.1	0.8	10.5	40区		
第2-13118205	土器片加工品	土器		4.3	4.4	1.0	25.5	K-39		
第2-13118206	土器片加工品	土器		1.1	4.3	2.0	37.9	40区		
第2-13118207	土器片加工品	土器		4.0	4.2	1.1	35.8	K-39		
第2-13118208	土器片加工品	土器		5.3	5.6	2.1	62.8	K-39		
第2-13118209	土器片加工品	土器		5.9	6.1	1.5	97.2	40区		
第2-13118210	土器片加工品	土器		-	-	-	-	40区		
第2-13118211	脚	土製		6.9	-	2.1	-	L-40		
第2-13118212	分解?	磨石		1.5	3.0	1.1	50.2	L-40	土製の脚組がある。	12
第2-13118213	砥石	石製		6.0	7.0	4.8	-	K-40	天石	
第2-13218214	土器	土製		2.9	0.9	-	2.0	40区		
第2-13218215	土器	土製		3.2	1.2	-	3.7	K-39		
第2-13218216	土器	土製		2.7	1.0	-	2.9	40区		
第2-13218217	土器	土製		2.8	1.0	-	2.9	40区		
第2-13218218	土器	土製		3.0	1.1	-	3.3	40区		
第2-13218219	土器	土製		3.8	1.1	-	4.4	40区		
第2-13218220	土器	土製		3.2	1.2	-	3.8	40区		
第2-13218221	土器	土製		2.8	0.8	-	2.3	40区		
第2-13218222	土器	土製		3.0	1.2	-	4.3	40区		
第2-13218223	土器	土製		4.0	1.1	-	4.0	包含層		
第2-13218224	土器	土製		3.8	1.3	-	4.9	K-39		
第2-13218225	土器	土製		4.7	1.1	-	8.5	包含層		
第2-13218226	土器	土製		1.1	1.0	-	1.1	40区		
第2-13218227	土器	土製		5.3	1.0	-	6.3	41区		
第2-13218228	土器	土製		5.8	1.2	-	5.6	39区		
第2-13218229	土器	土製		5.7	1.2	-	6.7	40区		
第2-13218230	土器	土製		4.9	1.1	-	4.8	40区		
第2-13218231	土器	土製		5.7	1.0	-	5.0	40区		
第2-13218232	土器	土製		5.5	1.2	-	5.8	39区		
第2-13218233	土器	土製		5.2	1.1	-	6.2	41区		
第2-13218234	土器	土製		5.4	1.1	-	5.9	40区		
第2-13218235	土器	土製		5.2	1.0	-	4.8	包含層		
第2-13218236	土器	土製		5.8	1.1	-	5.8	39区		
第2-13218237	土器	土製		5.1	1.0	-	4.9	39区		
第2-13218238	土器	土製		5.0	1.1	-	5.6	M-38		
第2-13218239	土器	土製		5.2	1.0	-	4.7	M-40		
第2-13218240	土器	土製		6.1	1.0	-	6.2	包含層		
第2-13218241	土器	土製		5.5	1.0	-	4.8	39区		
第2-13218242	土器	土製		5.7	1.0	-	5.1	39区		
第2-13218243	土器	土製		5.1	1.2	-	6.6	39区		
第2-13218244	土器	土製		5.4	1.1	-	6.1	40区		
第2-13218245	土器	土製		5.7	1.1	-	5.5	L-39		
第2-13218246	土器	土製		3.8	1.8	-	10.8	40区		
第2-13218247	土器	土製		4.7	1.9	-	15.1	41区		
第2-13218248	土器	土製		5.9	1.8	-	17.3	包含層		
第2-13218249	土器	土製		6.0	2.2	-	25.5	39区		
第2-13218250	土器	土製		4.8	2.3	-	21.4	40区		

遺物観察表13

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(玉・ガラス製品)

神隠No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-13318252	玉	水晶		1.55	1.35	1.83	-	A-SK101J	0.5cmの孔	
第2-13318253	玉	水晶		1.50	1.50	1.50	-	L-38		
第2-13318253	玉	水晶		1.70	1.40	0.90	-	K-39		

遺物観察表14

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(金属製品)

神田No.	器種	材質	部位	法長(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-18087	不明	青銅		2.1	—	—	0.4	A-SD1505		
第2-18088	不明	青銅		3.5	—	—	0.7	A-SD1505		
第2-26083	不明	青銅		1.1	1.6	—	2.1	A-SD1505	上縁に係3ミリの穴	12
第2-26084	不明	青銅		4.1	1.2	—	—	A-SD1505		12
第2-9023	不明	青銅		10.0	1.6	0.2	17.8	A-SK1091		
第2-1338251	分割	青銅		0.8	0.8	0.2	0.5	包合層	三印の扁層	12
第2-1338254		青銅		0.7	0.4	—	—	K-40		12
第2-1338255		青銅		1.5	0.9	—	1.3	L-39		12
第2-1338256		青銅		4.5	0.6	0.1	2.0	L-39		
第2-1338257		青銅		2.5	1.9	1.0	—	L-41		
第2-1338258		青銅		3.3	2.2	0.2	—	M-41		12
第2-1338259		青銅		3.5	2.1	0.1	—	K-41		
第2-1338260		鉄		8.1	1.3	0.5	18.2	K-41		12

遺物観察表15

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(瓦)

神田No.	器種	材質	部位	法長(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第2-10087	平瓦	土製	軒	—	—	—	—	A-SD1501	瓦当の幅1.8cm	
第2-10088	平瓦	土製		—	28.5	—	—	A-SD1501		
第2-10089	平瓦	土製		—	21.3	—	—	A-SD1501		
第2-24087	平瓦	土製	軒	—	—	—	—	A-SD1506	瓦当の幅6.0cm	
第2-34089	平瓦	土製		—	—	—	—	A-SK040	格子目叩き	
第2-104088	平瓦	土製		—	—	—	—	A-SK1100		
第2-13108187	丸瓦	土製	軒	—	—	—	—	K-38		
第2-13108188	丸瓦	土製	軒	—	—	—	—	40区		
第2-13108189	丸瓦	土製	軒	—	—	—	—	包合層		

遺物観察表16

府内町跡20次調査A区出土遺物観察表(銅銭)

神田No.	銭貨名	国・王朝名	初鋳造年	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第2-90894	天聖元寶	北宋	1023年	1.9	25.0	真書	A-SD1501	一部欠損	
第2-90895	紹聖元寶	北宋	1094年	2.6	25.0	篆書	A-SD1501		
第2-90896	元祐通寶	北宋	1086年	2.0	25.0	篆書	A-SD1501	一部欠損	
第2-180899	政和通寶	北宋	1111年	3.1	25.0	篆書	A-SD1505	第2-170854から出土	
第2-180870	政和通寶	北宋	1111年	2.9	25.0	篆書	A-SD1505	第2-170854から出土	
第2-180871	宣和通寶	北宋	1119年	3.2	—	篆書	A-SD1505	第2-170854から出土	
第2-180872	咸・・寶	北宋	—	1.5	24.5	—	A-SD1505		
第2-180873	崇寧元寶	北宋	1068年	2.4	24.0	真書	A-SD1505		
第2-270895	元祐通寶	北宋	1086年	2.8	25.0	篆書	A-SD1501		
第2-330801	元祐通寶	北宋	—	1.6	25.0	篆書	A-SK052	銭貨名は不明	
第2-410801	政和通寶	北宋	1111年	3.0	25.5	真書	A-SK1013		
第2-510801.3	元祐通寶	北宋	1078年	2.6	24.0	—	A-SK1019		
第2-500801	明道通寶	北宋	1032年	2.7	25.0	真書	A-SK1035	泉貨通寶と貼りつく	
第2-500802	信安通寶	北宋	1038年	1.4	23.5	真書	A-SK1035	明道通寶と貼りつく	
第2-102804	崇寧元寶	北宋	1068年	2.4	23.0	真書	A-SK1099		
第2-105801	元祐通寶	北宋	1078年	2.6	24.0	—	A-SK1101		
第2-109801.1	永樂通寶	明	1408年	3.0	25.0	—	A-SK1104		
第2-1180822	紹聖元寶	北宋	1094年	2.7	24.0	行書	A-SE1045		
第2-13408261	天禧通寶	北宋	1017年	2.2	25.0	真書	L-39		
第2-13408282	景祐元寶	北宋	1034年	1.8	25.0	—	K-41		
第2-13408283	崇寧通寶	北宋	1038年	1.3	24.5	篆書	K-39		
第2-13408284	元祐通寶	北宋	1078年	2.1	24.0	篆書	K-39		
第2-13408285	元祐通寶	北宋	1078年	2.0	24.0	行書	L-41		
第2-13408286	元祐通寶	北宋	1088年	2.4	24.0	篆書	L-41		
第2-13408287	元祐通寶	北宋	1088年	2.1	2.4	篆書	L-40		
第2-13408288	紹聖元寶	北宋	1094年	2.8	25.0	篆書	M-40		
第2-13408289	紹聖元寶	北宋	1094年	2.6	25.0	篆書	39区		
第2-13408270	永樂通寶	明	1408年	2.6	25.0	—	L-40		
第2-13408271	景	—	—	—	—	—	K-39	不明	
第2-13408272	景	—	—	0.6	—	—	K-39		
第2-13408273	寶永通寶	江戸	1836年	2.0	—	—	L-40	古貨水	

遺物観察表17

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

持取No.	器種	生産地	法尺(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第3-3881	陶器	楕鉢	備前	—	—	B-SD001	
第3-3882	京鹿系土師器	皿	在地	12.6	—	B-SD001	
第3-3883	京鹿系土師器	皿	在地	12.6	—	B-SD001	
第3-3884	瓦質土器	羽釜	備内	—	—	B-SD001	胴部内径25.5cm
第3-3885	土師器	坏	在地	12.0	7.0	B-SD001	
第3-3886	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD002	
第3-3887	陶器	楕鉢	備前	—	—	B-SD002	
第3-3888	須惠系土師	甕	鳥山	—	—	B-SD002	
第3-3889	須惠系土師	鉢	東播磨	—	—	B-SD002	
第3-3890	須惠系土師	鉢	東播磨	—	8.3	B-SD002	
第3-3891	須惠系土師	鉢	東播磨	—	11.0	B-SD002	
第3-3892	土師器	坏	在地	—	—	B-SD002	
第3-3893	土師器	坏	在地	11.7	—	B-SD002	
第3-3894	土師器	坏	在地	13.6	—	B-SD002	
第3-3895	土師器	甕	在地	20.5	—	B-SD002	
第3-3896	土師器	坏	在地	—	7.0	B-SD002	
第3-3897	土師器	坏	在地	—	8.0	B-SD002	
第3-5081	在地系土師器	皿	在地	8.1	7.1	B-SD003	上層
第3-5082	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.0	B-SD003	上層
第3-5083	在地系土師器	皿	在地	8.1	6.4	B-SD003	上層
第3-5084	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.0	B-SD003	上層
第3-5085	在地系土師器	皿	在地	7.6	4.2	B-SD003	上層
第3-5086	在地系土師器	坏	在地	13.1	9.8	B-SD003	上層
第3-5087	在地系土師器	坏	在地	12.8	10.0	B-SD003	上層
第3-5088	在地系土師器	皿	在地	7.1	5.1	B-SD003	中層
第3-5089	在地系土師器	皿	在地	7.6	6.0	B-SD003	中層
第3-5090	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	B-SD003	中層
第3-5091	在地系土師器	皿	在地	7.6	10.0	B-SD003	中層
第3-5092	在地系土師器	皿	在地	8.0	7.2	B-SD003	中層
第3-5093	在地系土師器	坏	在地	7.8	5.5	B-SD003	中層
第3-5094	在地系土師器	坏	在地	11.6	7.0	B-SD003	中層
第3-5095	在地系土師器	坏	在地	11.6	8.6	B-SD003	中層
第3-5096	在地系土師器	坏	在地	13.0	10.0	B-SD003	中層
第3-5097	在地系土師器	皿	在地	12.1	7.0	B-SD003	中層
第3-5098	在地系土師器	皿	在地	8.7	7.0	B-SD003	下層
第3-5099	在地系土師器	坏	在地	12.4	8.6	B-SD003	下層
第3-5100	在地系土師器	坏	在地	12.5	8.0	B-SD003	下層
第3-5101	在地系土師器	坏	在地	11.8	7.8	B-SD003	下層
第3-5102	在地系土師器	坏	在地	12.0	8.0	B-SD003	下層
第3-5103	在地系土師器	坏	在地	11.8	9.0	B-SD003	下層
第3-02824	青磁	碗	鹿島窯	—	—	B-SD003	
第3-02825	青磁	碗	鹿島窯	—	—	B-SD003	
第3-02826	青磁	碗	鹿島窯	—	—	B-SD003	
第3-02827	青磁	碗	鹿島窯	—	—	B-SD003	
第3-02828	青磁	碗	鹿島窯	—	—	B-SD003	
第3-02829	青磁	碗	鹿島窯	13.9	8.3	B-SD003	
第3-02830	青磁	碗	鹿島窯	—	3.8	B-SD003	
第3-02831	青磁	碗	鹿島窯	—	6.0	B-SD003	
第3-02832	青磁	碗	鹿島窯	—	5.2	B-SD003	
第3-02833	青磁	碗	鹿島窯	8.0	—	B-SD003	
第3-02834	青磁	碗	鹿島窯	—	5.0	B-SD003	
第3-02835	青磁	碗	鹿島窯	—	5.5	B-SD003	
第3-02836	白磁	碗	中国	—	—	B-SD003	玉縁口縁
第3-02837	白磁	坏	中国	11.0	—	B-SD003	
第3-02838	白磁	坏	中国	10.6	5.8	B-SD003	口壳
第3-02839	白磁	坏	中国	11.2	5.8	B-SD003	口壳
第3-02840	白磁	坏	中国	11.0	6.3	B-SD003	口壳
第3-72841	青花	碗	京極船窯	—	—	B-SD003	
第3-72842	陶磁器	碗	京極船窯	—	—	B-SD003	
第3-72843	白磁	皿	中国	—	—	B-SD003	
第3-72844	白磁	皿	中国	—	—	B-SD003	
第3-72845	緑吉施	碗	中国	—	—	B-SD003	
第3-72846	陶器	皿	瀬戸美濃	2.8	2.7	B-SD003	
第3-72847	陶器	楕鉢	中国	—	10.1	B-SD003	
第3-72848	緑釉	碗	備内	—	6.0	B-SD003	須惠系に緑釉 古代
第3-72849	緑釉	鉢	備前窯	—	—	B-SD003	
第3-72850	緑釉	鉢	備前窯	—	—	B-SD003	
第3-72851	黒釉	鉢	備前窯	27.7	21.7	B-SD003	見込みに「天下太平」
第3-72851A	黒釉	鉢	備前窯	—	—	B-SD003	第3-72851を固化
第3-82852	陶器	坏	瀬戸美濃	7.2	3.6	B-SD003	
第3-82853	陶器	坏	瀬戸美濃	9.8	4.0	B-SD003	
第3-82854	陶器	坏	瀬戸美濃	10.6	4.6	B-SD003	
第3-82855	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003	
第3-82856	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003	
第3-82857	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003	

遺物觀察表18

府内町跡20次調査B区出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)②

神田No.	器 種	生産地	法量(単位cm)			遺物名	備 考	附版No.
			口径	底径	高さ			
第3-8058	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-8059	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-8060	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-8061	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-9062	陶器	甕	常滑	38.8	—	B-SD003		
第3-9063	陶器	甕	常滑	47.0	—	B-SD003		
第3-9064	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-9065	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-9066	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-9067	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-9068	陶器	甕	常滑	—	—	B-SD003		
第3-10069	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10070	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10071	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10072	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10073	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10074	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10075	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10076	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10077	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-10078	陶器	甕	備前	16.1	—	B-SD003		
第3-10079	陶器	甕	備前	23.0	—	B-SD003		
第3-10080	陶器	甕	備前	13.6	—	B-SD003		
第3-10081	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-11082	陶器	甕	備前	32.4	—	B-SD003		
第3-11083	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-11084	陶器	甕	備前	31.3	11.9	14.8	B-SD003	
第3-11085	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-11086	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-11087	陶器	甕	備前	—	14.0	—	B-SD003	
第3-11088	陶器	甕	備前	—	—	B-SD003		
第3-12089	在地球系土師器	甕	在地球	7.0	—	B-SD003		
第3-12090	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	5.8	0.8	B-SD003	
第3-12091	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.8	1.1	B-SD003	
第3-12092	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.0	1.1	B-SD003	
第3-12093	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	7.0	1.2	B-SD003	
第3-12094	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	6.7	1.1	B-SD003	
第3-12095	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.0	1.1	B-SD003	
第3-12096	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.2	1.1	B-SD003	
第3-12097	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	5.6	1.4	B-SD003	
第3-12098	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	6.1	1.2	B-SD003	
第3-12099	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	6.2	1.1	B-SD003	
第3-12100	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.0	1.1	B-SD003	
第3-12101	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.8	1.1	B-SD003	
第3-12102	在地球系土師器	甕	在地球	8.1	6.5	1.3	B-SD003	
第3-12103	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	5.8	1.5	B-SD003	
第3-12104	在地球系土師器	甕	在地球	8.2	6.8	1.3	B-SD003	
第3-12105	在地球系土師器	甕	在地球	7.8	5.5	1.5	B-SD003	
第3-12106	在地球系土師器	甕	在地球	8.0	7.0	1.1	B-SD003	
第3-12107	在地球系土師器	甕	在地球	7.1	4.6	1.0	B-SD003	
第3-12108	在地球系土師器	甕	在地球	6.1	4.7	2.1	B-SD003	
第3-12109	在地球系土師器	甕	在地球	6.9	4.6	2.5	B-SD003	
第3-12110	在地球系土師器	甕	在地球	7.6	6.6	1.8	B-SD003	
第3-12111	在地球系土師器	甕	在地球	8.3	6.7	3.3	B-SD003	
第3-12112	在地球系土師器	甕	在地球	7.1	4.8	1.9	B-SD003	
第3-12113	在地球系土師器	甕	在地球	11.4	—	2.1	B-SD003	
第3-12114	在地球系土師器	甕	在地球	11.2	6.8	2.1	B-SD003	
第3-12115	在地球系土師器	甕	在地球	13.0	9.0	2.5	B-SD003	
第3-12116	在地球系土師器	甕	在地球	11.1	8.0	2.5	B-SD003	
第3-12117	在地球系土師器	甕	在地球	11.6	6.8	2.1	B-SD003	
第3-12118	在地球系土師器	甕	在地球	12.8	6.6	2.7	B-SD003	
第3-12119	在地球系土師器	甕	在地球	11.8	8.4	2.9	B-SD003	
第3-12120	在地球系土師器	甕	在地球	11.8	8.2	2.7	B-SD003	
第3-12121	在地球系土師器	甕	在地球	13.2	7.8	3.2	B-SD003	
第3-12122	在地球系土師器	甕	在地球	12.2	7.8	3.2	B-SD003	
第3-12123	在地球系土師器	甕	在地球	12.0	7.7	2.8	B-SD003	
第3-13124	在地球系土師器	甕	在地球	12.5	9.2	3.1	B-SD003	
第3-13125	在地球系土師器	甕	在地球	12.6	9.4	3.0	B-SD003	
第3-13126	在地球系土師器	甕	在地球	12.2	7.2	3.2	B-SD003	
第3-13127	在地球系土師器	甕	在地球	11.8	7.8	3.2	B-SD003	
第3-13128	在地球系土師器	甕	在地球	12.8	9.0	3.2	B-SD003	
第3-13129	在地球系土師器	甕	在地球	11.5	7.8	2.5	B-SD003	
第3-13130	在地球系土師器	甕	在地球	12.2	9.2	3.2	B-SD003	
第3-13131	在地球系土師器	甕	在地球	13.2	7.2	3.9	B-SD003	
第3-13132	在地球系土師器	甕	在地球	11.0	8.0	3.5	B-SD003	

遺物観察表19

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)③

標図No.	器種	生産地	法隆(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第3-1302133	土師質土器	坏	吉備系	—	—	B-SD003	
第3-1302134	土師質土器	坏	吉備系	12.0	—	B-SD003	
第3-1302135	土師質土器	坏	吉備系	11.2	—	B-SD003	
第3-1302136	土師質土器	坏	吉備系	10.6	—	B-SD003	
第3-1302137	土師質土器	坏	吉備系	—	4.1	B-SD003	
第3-1302138	土師質土器	坏	吉備系	—	4.0	B-SD003	
第3-1302139	土師質土器	坏	吉備系	—	4.0	B-SD003	
第3-1302140	土師質土器	坏	吉備系	—	3.6	B-SD003	
第3-1302141	土師質土器	坏	吉備系	—	3.8	B-SD003	
第3-1302142	土師質土器	坏	吉備系	—	3.1	B-SD003	
第3-1302143	土師質土器	坏	吉備系	—	3.1	B-SD003	
第3-1302144	土師質土器	坏	吉備系	—	5.0	B-SD003	
第3-1302145	白色系	皿	—	8.0	—	B-SD003	京都系土師質?
第3-1302146	白色系	皿	—	—	1.8	B-SD003	京都系土師質?
第3-1302147	在地系土師器	燗台	在地	8.7	7.0	B-SD003	底面に焼成溝の穿孔
第3-1302148	在地系土師器	燗台	在地	—	5.8	B-SD003	
第3-1302149	在地系土師器	燗台	在地	7.8	—	B-SD003	
第3-1302150	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302151	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302152	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302153	土師質土器	土鍋	在地	2.0	—	B-SD003	
第3-1302154	土師質土器	土鍋	在地	28.0	—	B-SD003	
第3-1302155	土師質土器	土鍋	在地	34.1	—	B-SD003	
第3-1302156	土師質土器	土鍋	在地	32.6	—	B-SD003	
第3-1302157	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302158	土師質土器	土鍋	在地	23.1	—	B-SD003	
第3-1302159	土師質土器	土鍋	在地	21.6	—	B-SD003	
第3-1302160	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302161	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	
第3-1302162	土師質土器	土鍋	在地	—	25.0	B-SD003	
第3-1302163	土師質土器	土鍋	在地	—	24.6	B-SD003	
第3-1302164	土師質土器	土鍋	在地	—	23.0	B-SD003	
第3-1302165	土師質土器	土鍋	在地	—	—	B-SD003	土鍋の脚
第3-1502166	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1502167	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1502168	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1502169	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1502170	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1502171	須恵質土器	鉢	東播磨系	20.8	—	B-SD003	
第3-1502172	須恵質土器	鉢	東播磨系	23.4	—	B-SD003	
第3-1502173	須恵質土器	鉢	東播磨系	26.2	—	B-SD003	
第3-1502174	須恵質土器	鉢	東播磨系	22.6	7.8	B-SD003	9.3
第3-1502175	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	8.0	B-SD003	
第3-1502176	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	8.1	B-SD003	
第3-1502177	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	8.4	B-SD003	
第3-1602178	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	B-SD003	
第3-1602179	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	B-SD003	
第3-1602180	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	B-SD003	
第3-1602181	須恵質土器	甕	東播磨系	24.0	—	B-SD003	
第3-1602182	須恵質土器	小壺	國內	—	1.0	B-SD003	
第3-1602183	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	B-SD003	
第3-1602184	須恵質土器	甕	東播磨系	—	—	B-SD003	
第3-1602185	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	B-SD003	
第3-1602186	須恵質土器	甕	東播磨系	—	10.0	B-SD003	
第3-1702187	瓦質土器	甕	國內	—	21.6	B-SD003	
第3-1702188	瓦質土器	甕	國內	12.4	—	B-SD003	
第3-1702189	瓦質土器	甕	國內	—	—	B-SD003	
第3-1702190	瓦質土器	甕	國內	—	3.0	B-SD003	
第3-1702191	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	
第3-1702192	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	
第3-1702193	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	
第3-1702194	瓦質土器	鉢	國內	34.0	—	B-SD003	
第3-1702195	瓦質土器	鉢	國內	—	10.4	B-SD003	
第3-1702196	瓦質土器	鉢	國內	—	10.8	B-SD003	
第3-1702197	瓦質土器	鉢	國內	—	9.2	B-SD003	
第3-1702198	瓦質土器	鉢	國內	—	10.2	B-SD003	
第3-1702199	瓦質土器	鉢	國內	—	10.0	B-SD003	
第3-1702200	瓦質土器	燗鉢	防長系	—	11.2	B-SD003	
第3-1802201	土師質土器	甕	在地	32.0	—	B-SD003	
第3-1802202	土師質土器	甕	在地	47.8	—	B-SD003	
第3-1802203	瓦質土器	甕	國內	22.0	—	B-SD003	
第3-1802204	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	角火鉢
第3-1802205	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	角火鉢
第3-1802206	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	菊花文スタンプ
第3-1802207	瓦質土器	鉢	國內	—	—	B-SD003	

遺物観察表20

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)④

拝園No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	図版No.	
			口径	底径	高さ				
第3-20図249	土師器	甕	国内	18.2	—	B-SD003	内黒土器		
第3-20図250	土師器	坏	在池	—	—	B-SD003			
第3-20図251	土師器	甕	在池	—	6.0	B-SD003			
第3-20図252	土師器	甕	在池	18.0	13.6	2.3		B-SD003	
第3-20図253	土師器	坏蓋	在池	19.0	—	B-SD003			
第3-20図254	土師器	坏	在池	1.4	—	B-SD003			
第3-20図255	土師器	坏	在池	12.8	—	B-SD003			
第3-20図256	土師器	坏	在池	—	6.6	—		B-SD003	
第3-20図257	土師器	坏	在池	12.1	6.6	3.7		B-SD003	
第3-20図258	土師器	坏	在池	13.6	7.3	3.7		B-SD003	
第3-20図259	土師器	坏	在池	13.1	7.1	3.4		B-SD003	
第3-20図260	土師器	坏	在池	—	9.8	—		B-SD003	
第3-20図261	土師器	坏	在池	—	9.0	—		B-SD003	
第3-20図262	須恵器	坏	在池	—	9.0	—		B-SD003	
第3-20図263	土師器	坏	在池	—	8.8	—		B-SD003	
第3-20図264	土師器	坏	在池	—	7.8	—		B-SD003	
第3-20図265	須恵器	坏	在池	—	9.8	—		B-SD003	
第3-20図266	土師器	坏	在池	—	7.8	—		B-SD003	
第3-20図267	須恵器	坏	在池	—	9.2	—		B-SD003	
第3-20図268	須恵器	甕	在池	11.2	—	B-SD003		胴部最大径14.6cm	
第3-20図269	須恵器	甕	在池	—	—	B-SD003			
第3-20図270	土師器	甕	在池	27.9	—	B-SD003			
第3-21図271	土師質土器	甕	在池	22.2	—	B-SD003			
第3-21図272	土師質土器	甕	在池	24.4	—	B-SD003			
第3-21図273	土師質土器	甕	在池	24.8	—	B-SD003			
第3-21図274	土師質土器	甕	在池	21.8	—	B-SD003	胴部最大径14.6cm		
第3-21図275	土師質土器	甕	在池	—	—	B-SD003			
第3-21図276	赤土土器	甕	在池	—	—	B-SD003			
第3-21図277	赤土土器	高坏	在池	—	—	B-SD003			
第3-24図1	青磁	甕	龍泉窯	—	—	B-SD004			
第3-24図2	青磁	甕	龍泉窯	—	—	B-SD004			
第3-24図3	青磁	甕	龍泉窯	—	—	B-SD004			
第3-24図4	陶器	香	—	—	—	B-SD004			
第3-24図5	陶器	楯鉢	—	—	—	B-SD004			
第3-24図6	在池系土師器	甕	在池	8.4	6.3	1.2	B-SD004		
第3-24図7	在池系土師器	甕	在池	7.7	6.6	0.9	B-SD004		
第3-24図8	在池系土師器	甕	在池	8.5	66.0	1.0	B-SD004		
第3-24図9	在池系土師器	甕	在池	9.0	7.1	1.2	B-SD004		
第3-24図10	在池系土師器	甕	在池	7.8	6.2	1.0	B-SD004		
第3-24図11	在池系土師器	甕	在池	7.8	6.2	1.1	B-SD004		
第3-24図12	在池系土師器	甕	在池	8.6	7.1	1.3	B-SD004		
第3-24図13	在池系土師器	甕	在池	8.4	6.3	1.2	B-SD004		
第3-24図14	在池系土師器	坏	在池	17.5	—	B-SD004			
第3-24図15	在池系土師器	坏	在池	12.9	8.9	2.4	B-SD004		
第3-24図16	在池系土師器	坏	在池	12.1	9.0	2.9	B-SD004		
第3-24図17	在池系土師器	坏	在池	12.0	8.2	3.2	B-SD004		
第3-24図18	在池系土師器	坏	在池	12.3	8.3	3.2	B-SD004		
第3-24図19	在池系土師器	坏	在池	12.1	8.0	3.5	B-SD004		
第3-24図20	土師質土器	坏	吉備系	—	—	B-SD004			
第3-24図21	土師質土器	坏	吉備系	11.2	4.3	3.1	B-SD004		
第3-24図22	土師質土器	坏	吉備系	—	5.1	—	B-SD004		
第3-24図23	土師質土器	坏	吉備系	—	4.4	—	B-SD004		
第3-24図24	土師質土器	土鍋	在池	—	—	B-SD004			
第3-24図25	土師質土器	土鍋	在池	—	—	B-SD004			
第3-24図26	土師質土器	甕	在池	—	—	B-SD004			
第3-24図27	須恵質土器	鉢	東播系	19.2	—	B-SD004			
第3-24図28	須恵質土器	鉢	東播系	36.5	—	B-SD004			
第3-25図29	瓦質土器	鉢	国内	11.9	—	B-SD004			
第3-25図30	瓦質土器	鉢	国内	—	—	B-SD004			
第3-25図31	瓦質土器	鉢	国内	—	—	B-SD004			
第3-25図32	須恵器	坏蓋	在池	—	—	B-SD004			
第3-25図33	土師器	坏蓋	在池	19.3	—	B-SD004			
第3-25図34	土師器	坏	在池	16.3	—	B-SD004			
第3-25図35	土師器	坏	在池	13.1	—	B-SD004			
第3-25図36	土師器	坏	在池	—	7.0	—	B-SD004		
第3-25図37	土師器	甕	在池	—	—	B-SD004			
第3-25図38	土師器	甕	在池	—	—	B-SD004			
第3-25図39	土師器	甕	在池	19.5	—	B-SD004			
第3-25図40	土師器	高坏	在池	—	—	B-SD004			
第3-25図41	瓦質土器	鉢	国内	21.3	—	B-SD004			
第3-25図42	赤土土器	甕	在池	—	—	B-SD004			
第3-25図43	土師質土器	甕	在池	—	33.2	—	B-SD004		
第3-30図1	青花	甕	辰野窯	—	—	B-SD004			
第3-30図2	青花	甕	辰野窯	—	—	B-SD004			
第3-30図3	青花	甕	辰野窯	—	—	B-SD004			
第3-30図4	青花	甕	辰野窯	—	2.0	—	B-SD004		

遺物観察表21

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

採掘No.	器 種		生産地	法厚(単位cm)		遺構名	備 考	図版 No.
				口径	底径			
第3-38085	青花	皿	景徳朝窯	—	7.8	—	B-S0061	
第3-38086	青花	皿	景徳朝窯	—	8.0	—	B-S0061	
第3-38087	青花	碗	漳州窯	—	5.8	—	B-S0061	
第3-38088	青花	皿	景徳朝窯	12.3	6.7	2.9	B-S0061	
第3-38089	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-S0061	
第3-38090	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-S0061	
第3-38091	青磁	碗	龍泉窯	—	—	—	B-S0061	
第3-38092	青磁	碗	龍泉窯	15.2	—	—	B-S0061	
第3-38093	青磁	碗	龍泉窯	10.8	—	—	B-S0061	
第3-38094	青磁	碗	龍泉窯	10.6	—	—	B-S0061	
第3-38095	青白磁	皿	阿宏窯	9.6	1.2	2.3	B-S0061	
第3-38096	青磁	碗	龍泉窯	—	1.2	—	B-S0061	
第3-38097	白磁	皿	中国	—	—	—	B-S0061	
第3-38098	白磁	皿	中国	—	5.0	—	B-S0061	
第3-38099	白磁	皿	中国	—	—	—	B-S0061	
第3-38100	白磁	皿	中国	10.1	5.2	2.9	B-S0061	
第3-38101	白磁	碗	中国	—	—	—	B-S0061	
第3-38102	白磁	皿	中国	—	—	—	B-S0061	
第3-38103	白磁	碗	中国	—	—	—	B-S0061	
第3-38104	陶胎	鉢	御窯堂	—	—	—	B-S0061	
第3-38105	陶胎	鉢	御窯堂	—	—	—	B-S0061	
第3-38106	陶胎	鉢	御窯堂	—	—	—	B-S0061	
第3-37827	陶胎	四耳壺	タイ	—	—	—	B-S0061	
第3-37828	陶胎	四耳壺	タイ	—	—	—	B-S0061	
第3-37829	陶胎	四耳壺	タイ	—	—	—	B-S0061	
第3-37830	陶胎	四耳壺	タイ	—	—	—	B-S0061	
第3-37831	陶胎	天目	瀬戸英道	—	—	—	B-S0061	
第3-37832	陶胎	甕	常滑	—	—	—	B-S0061	
第3-37833	陶胎	坏	瀬戸英道	—	1.2	—	B-S0061	
第3-37834	陶胎	坏	瀬戸英道	6.6	1.1	2.0	B-S0061	
第3-37835	陶胎	椀	御前	—	6.0	—	B-S0061	
第3-37836	陶胎	水罎	御前	12.0	—	—	B-S0061	
第3-37837	陶胎	水罎	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-37838	陶胎	水罎	御前	—	15.0	—	B-S0061	
第3-37839	陶胎	水罎	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-37840	陶胎	壺	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-37841	陶胎	壺	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-37842	陶胎	博鉢	御前	33.0	—	—	B-S0061	
第3-37843	陶胎	博鉢	御前	31.6	—	—	B-S0061	
第3-38044	陶胎	博鉢	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-38045	陶胎	博鉢	御前	28.7	—	—	B-S0061	
第3-38046	陶胎	博鉢	御前	29.2	—	—	B-S0061	
第3-38047	陶胎	博鉢	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-38048	陶胎	博鉢	御前	31.0	—	—	B-S0061	
第3-38049	陶胎	博鉢	御前	37.7	—	—	B-S0061	
第3-38050	陶胎	博鉢	御前	32.7	12.8	12.3	B-S0061	
第3-38051	陶胎	博鉢	御前	—	—	—	B-S0061	
第3-38052	陶胎	博鉢	御前	—	15.0	—	B-S0061	
第3-38053	在胎系土師器	皿	在胎	—	—	1.3	B-S0061	
第3-38054	在胎系土師器	皿	在胎	—	—	1.2	B-S0061	
第3-38055	在胎系土師器	皿	在胎	8.9	7.9	0.9	B-S0061	
第3-38056	在胎系土師器	皿	在胎	8.2	6.8	1.1	B-S0061	
第3-38057	在胎系土師器	皿	在胎	8.2	6.1	1.1	B-S0061	
第3-38058	在胎系土師器	皿	在胎	8.2	6.6	1.3	B-S0061	
第3-38059	在胎系土師器	皿	在胎	8.2	7.0	1.5	B-S0061	
第3-38060	在胎系土師器	皿	在胎	8.1	6.1	1.2	B-S0061	
第3-38061	在胎系土師器	皿	在胎	8.2	6.8	1.0	B-S0061	
第3-38062	在胎系土師器	皿	在胎	7.9	6.2	1.0	B-S0061	
第3-38063	在胎系土師器	皿	在胎	7.2	5.8	1.1	B-S0061	
第3-38064	在胎系土師器	皿	在胎	8.1	7.2	1.1	B-S0061	
第3-38065	在胎系土師器	皿	在胎	9.0	7.0	1.0	B-S0061	
第3-38066	在胎系土師器	皿	在胎	9.5	7.6	1.8	B-S0061	
第3-38067	在胎系土師器	皿	在胎	8.1	5.3	2.1	B-S0061	
第3-38068	在胎系土師器	坏	在胎	—	—	3.8	B-S0061	
第3-38069	在胎系土師器	坏	在胎	—	—	3.5	B-S0061	
第3-38070	在胎系土師器	坏	在胎	11.7	8.7	2.9	B-S0061	
第3-38071	在胎系土師器	坏	在胎	12.1	8.2	3.0	B-S0061	
第3-38072	在胎系土師器	坏	在胎	12.6	8.5	3.0	B-S0061	
第3-38073	在胎系土師器	坏	在胎	13.0	9.0	3.5	B-S0061	
第3-38074	在胎系土師器	坏	在胎	13.0	9.8	3.0	B-S0061	
第3-38075	在胎系土師器	坏	在胎	11.3	8.2	2.6	B-S0061	
第3-38076	在胎系土師器	坏	在胎	12.8	9.0	2.1	B-S0061	
第3-38077	在胎系土師器	坏	在胎	11.1	8.6	2.7	B-S0061	
第3-38078	在胎系土師器	坏	在胎	11.6	8.2	2.6	B-S0061	
第3-38079	在胎系土師器	坏	在胎	11.2	7.3	3.0	B-S0061	

遺物觀察表22

府内町跡20次調査B区出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)⑥

標記No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺跡名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
303-39280	在地位土師器	坏	在地位	13.0	10.1	2.9	B-SD061	
303-39281	在地位土師器	坏	在地位	12.0	9.4	2.9	B-SD061	
303-39282	在地位土師器	坏	在地位	12.2	9.3	2.9	B-SD061	
303-39283	在地位土師器	坏	在地位	12.2	8.4	3.0	B-SD061	
303-39284	在地位土師器	坏	在地位	13.2	7.8	3.6	B-SD061	
303-39285	在地位土師器	坏	在地位	13.6	8.4	3.4	B-SD061	
303-39286	在地位土師器	坏	在地位	12.6	8.2	3.0	B-SD061	
303-39287	在地位土師器	坏	在地位	12.4	8.0	3.0	B-SD061	
303-39288	在地位土師器	坏	在地位	12.8	8.6	3.0	B-SD061	
303-39289	在地位土師器	坏	在地位	12.4	9.0	3.0	B-SD061	
303-39290	在地位土師器	坏	在地位	12.4	8.6	3.3	B-SD061	
303-40281	在地位土師器	坏	在地位	13.0	9.0	4.2	B-SD061	
303-40282	在地位土師器	坏	在地位	—	8.5	—	B-SD061	
303-40283	在地位土師器	坏	在地位	13.0	7.6	3.2	B-SD061	
303-40284	在地位土師器	坏	在地位	13.0	6.8	3.2	B-SD061	
303-40285	在地位土師器	坏	在地位	11.8	7.6	3.7	B-SD061	
303-40286	京橋系土師器	皿	在地位	8.4	—	2.1	B-SD061	
303-40287	京橋系土師器	皿	在地位	9.0	—	1.9	B-SD061	
303-40288	京橋系土師器	皿	在地位	9.0	—	2.1	B-SD061	
303-40289	京橋系土師器	皿	在地位	9.2	—	1.8	B-SD061	
303-40290	京橋系土師器	皿	在地位	8.8	—	1.9	B-SD061	
303-40291	京橋系土師器	皿	在地位	11.0	—	2.0	B-SD061	
303-40292	京橋系土師器	皿	在地位	12.4	—	2.6	B-SD061	
303-40293	京橋系土師器	皿	在地位	11.4	—	3.2	B-SD061	
303-40294	京橋系土師器	皿	在地位	13.0	—	2.7	B-SD061	
303-40295	京橋系土師器	皿	在地位	11.8	—	—	B-SD061	
303-40296	京橋系土師器	皿	在地位	12.8	—	—	B-SD061	
303-40297	京橋系土師器	皿	在地位	13.0	—	—	B-SD061	
303-40298	京橋系土師器	皿	在地位	12.0	—	—	B-SD061	
303-40299	土師器土器	陶	吉備系	—	—	—	B-SD061	
303-40300	土師器土器	陶	吉備系	—	—	—	B-SD061	
303-40301	土師器土器	陶	吉備系	10.0	—	—	B-SD061	
303-40302	土師器土器	陶	吉備系	10.2	—	—	B-SD061	
303-40303	土師器土器	陶	吉備系	11.6	3.5	3.1	B-SD061	
303-40304	土師器土器	陶	吉備系	—	4.6	—	B-SD061	
303-40305	土師器土器	陶	吉備系	—	4.0	—	B-SD061	
303-40306	土師器土器	陶	吉備系	—	4.6	—	B-SD061	
303-11281	土師器土器	陶	吉備系	—	8.0	—	B-SD061	
303-11282	土師器土器	陶	吉備系	—	6.7	—	B-SD061	
303-11283	土師器土器	陶	吉備系	8.5	7.4	7.3	B-SD061	
303-11284	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11285	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11286	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11287	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11288	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11289	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11290	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11291	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11292	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11293	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11294	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11295	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11296	須恵貫土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SD061	
303-11297	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11298	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11299	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11300	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11301	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11302	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11303	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11304	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11305	土師器土器	土器	在地位	—	—	—	B-SD061	
303-11306	土師器土器	甕	在地位	13.1	—	—	B-SD061	
303-11307	土師器土器	甕	在地位	22.0	—	—	B-SD061	
303-11308	土師器土器	甕	在地位	24.0	—	—	B-SD061	
303-12281	瓦質土器	鉢	国内	26.4	17.0	4.3	B-SD061	
303-12282	瓦質土器	鉢	国内	31.2	—	—	B-SD061	
303-12283	瓦質土器	鉢	国内	31.8	—	—	B-SD061	
303-12284	瓦質土器	鉢	国内	33.0	23.0	10.1	B-SD061	
303-12285	瓦質土器	鉢	国内	37.8	—	—	B-SD061	
303-12286	瓦質土器	土碗	国内	—	—	—	B-SD061	
303-12287	瓦質土器	甕	国内	—	13.2	—	B-SD061	
303-12288	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SD061	
303-12289	瓦質土器	鉢	国内	26.2	10.6	10.1	B-SD061	
303-13281	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13282	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13283	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13284	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13285	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13286	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13287	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13288	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13289	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13290	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13291	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13292	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13293	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13294	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13295	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13296	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13297	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13298	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13299	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-13300	瓦質土器	鉢	国内	—	9.0	—	B-SD061	
303-14281	土師器	土師器	防及系	28.6	11.6	8.0	B-SD061	
303-15281	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15282	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15283	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15284	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15285	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15286	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15287	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15288	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15289	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15290	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15291	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15292	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15293	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15294	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15295	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15296	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15297	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15298	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15299	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-15300	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16281	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16282	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16283	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16284	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16285	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16286	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16287	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16288	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16289	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16290	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16291	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16292	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16293	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16294	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16295	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16296	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16297	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16298	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16299	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	
303-16300	土師器	土師器	防及系	—	—	—	B-SD061	

遺物観察表23

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦

探洞No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第3-46回181	土師器	灰煮	在	14.8	—	2.3	B-SD061	
第3-46回182	土師器	灰煮	在	15.6	—	2.2	B-SD061	
第3-46回183	須恵器	坏	在	13.2	7.8	3.8	B-SD061	
第3-46回184	須恵器	坏	在	14.0	8.2	3.8	B-SD061	
第3-46回185	土師器	坏	在	15.6	—	—	B-SD061	
第3-46回186	土師器	坏	在	18.1	—	—	B-SD061	
第3-46回187	土師器	坏	在	13.2	6.8	4.2	B-SD061	
第3-46回188	土師器	坏	在	13.2	6.5	5.3	B-SD061	
第3-46回189	土師器	坏	在	13.0	—	—	B-SD061	
第3-46回190	土師器	坏	在	—	8.8	—	B-SD061	内黒土器
第3-46回191	須恵器	坏	在	—	7.9	—	B-SD061	
第3-46回192	土師器	坏	在	—	8.0	—	B-SD061	
第3-46回193	土師器	坏	在	—	8.1	—	B-SD061	
第3-46回194	土師器	坏	在	—	10.0	—	B-SD061	
第3-46回195	土師器	坏	在	—	8.5	—	B-SD061	
第3-46回196	須恵器	長頸甕	在	—	8.8	—	B-SD061	
第3-46回197	土師器	坏	在	13.9	7.8	3.0	B-SD061	
第3-46回198	土師器	坏	在	13.1	10.2	3.1	B-SD061	
第3-46回199	土師器	坏	在	13.2	8.0	3.5	B-SD061	
第3-46回200	土師器	坏	在	13.1	8.0	3.5	B-SD061	
第3-46回201	土師器	坏	在	13.6	5.1	4.1	B-SD061	
第3-46回202	土師器	坏	在	12.1	7.8	3.0	B-SD061	
第3-46回203	土師器	坏	在	—	8.5	—	B-SD061	
第3-46回204	土師器	坏	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回205	土師器	坏	在	—	—	3.0	B-SD061	
第3-46回206	土師器	坏	在	14.2	8.1	—	B-SD061	
第3-46回207	土師器	高坏	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回208	土師器	甕	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回209	須恵器	甕	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回210	土師器	甕	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回211	土師器	甕	在	18.4	—	—	B-SD061	
第3-46回212	土師器	甕	在	18.1	—	—	B-SD061	
第3-46回213	土師器	甕	在	23.0	—	—	B-SD061	
第3-46回214	土師器	甕	在	—	—	—	B-SD061	
第3-46回215	土師器	甕	在	—	9.3	—	B-SD061	
第3-46回215	土師器	小甕	在	12.9	—	12.2	B-SD061	
第3-50回2	青花	甕	景徳期室	—	—	—	B-SK015	
第3-50回3	青花	甕	景徳期室	13.8	8.0	2.9	B-SK015	
第3-50回4	白磁	甕	中国	—	—	—	B-SK015	
第3-50回5	白磁	甕	中国	—	—	—	B-SK015	
第3-50回6	陶器	磁鉢	甕前	—	—	—	B-SK015	
第3-50回7	京橋系土師器	甕	在	13.0	—	7.0	B-SK015	
第3-50回8	京橋系土師器	甕	在	12.6	—	—	B-SK015	
第3-50回9	京橋系土師器	甕	在	12.3	—	—	B-SK015	
第3-50回10	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015	
第3-50回11	瓦質土器	土罐	国内	23.2	—	—	B-SK015	
第3-50回12	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015	
第3-50回13	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK015	
第3-50回14	須恵器	甕	在	—	—	—	B-SK015	
第3-50回15	菅生土器	甕	在	—	6.5	—	B-SK015	
第3-52回1	白磁	甕	中国	—	—	—	B-SK016	
第3-52回2	陶器	甕	瀬戸英器	—	—	—	B-SK016	折鉢ノケ皿
第3-52回3	在地系土師器	坏	在	12.3	9.6	2.1	B-SK016	
第3-52回4	京橋系土師器	甕	在	9.1	1.7	—	B-SK016	
第3-52回5	須恵系土師器	鉢	東播磨系	—	—	—	B-SK016	
第3-51回1	在地系土師器	甕	在	7.8	1.3	5.7	B-SK018	
第3-51回2	在地系土師器	甕	在	8.7	7.3	1.9	B-SK018	
第3-51回3	在地系土師器	甕	在	9.1	7.5	1.1	B-SK018	
第3-51回4	在地系土師器	坏	在	12.0	8.2	3.1	B-SK018	
第3-51回5	在地系土師器	坏	在	12.7	8.3	3.1	B-SK018	
第3-51回6	在地系土師器	坏	在	12.2	8.3	3.3	B-SK018	
第3-51回7	在地系土師器	坏	在	—	6.7	—	B-SK018	
第3-51回8	土師質土器	土罐	在	—	—	—	B-SK018	
第3-56回1	黒釉陶器	小甕	中国	—	3.0	—	B-SK020	
第3-56回2	黒釉陶器	甕	中国	—	—	—	B-SK020	
第3-56回3	黒釉陶器	梅瓶	中国	—	10.0	—	B-SK020	
第3-56回4	黒釉陶器	梅瓶	中国	—	7.8	—	B-SK020	
第3-56回5	陶器	甕	甕前	25.1	16.2	3.8	B-SK020	
第3-56回6	陶器	磁鉢	甕前	—	—	—	B-SK020	
第3-56回7	陶器	磁鉢	甕前	—	—	—	B-SK020	
第3-56回8	陶器	磁鉢	甕前	—	—	—	B-SK020	
第3-56回9	陶器	磁鉢	甕前	—	13.1	—	B-SK020	
第3-56回10	陶器	磁鉢	甕前	28.1	—	—	B-SK020	
第3-56回11	陶器	磁鉢	甕前	—	12.1	—	B-SK020	
第3-56回12	陶器	磁鉢	甕前	33.8	—	—	B-SK020	
第3-57回13	陶器	磁鉢	甕前	—	13.9	—	B-SK020	

遺物観察表24

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑧

標記No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第3-570814	陶器	撚鉢	甕前	—	13.8	—	B-SK020
第3-570815	陶器	甕	甕前	—	14.4	—	B-SK020
第3-570816	陶器	甕	甕前	—	—	—	B-SK020
第3-570817	瓦質土器	鉢	甕内	—	—	—	B-SK020
第3-570818	瓦質土器	鉢	在池	—	—	—	B-SK020
第3-570819	瓦質土器	甕	在池	—	77.2	—	B-SK020
第3-570820	瓦質土器	鉢	東橋系	—	—	—	B-SK020
第3-570821	土師質土器	土師	在池	—	—	—	B-SK020
第3-570822	瓦質土器	甕	在池	—	—	—	B-SK020
第3-570823	土師質土器	鉢	在池	10.5	—	11.0	B-SK020
第3-580826	土師質土器	鉢	吉備系	—	—	—	B-SK020
第3-580827	土師質土器	鉢	吉備系	—	—	—	B-SK020
第3-580828	土師質土器	鉢	吉備系	11.2	—	—	B-SK020
第3-580829	土師質土器	鉢	吉備系	10.4	—	—	B-SK020
第3-580830	土師質土器	鉢	吉備系	12.0	—	—	B-SK020
第3-580831	土師質土器	鉢	吉備系	—	5.1	—	B-SK020
第3-580832	在池系土師器	皿	在池	7.8	5.7	1.3	B-SK020
第3-580833	在池系土師器	皿	在池	8.0	6.7	1.2	B-SK020
第3-580834	在池系土師器	皿	在池	8.3	7.3	1.1	B-SK020
第3-580835	在池系土師器	皿	在池	8.4	6.5	1.0	B-SK020
第3-580836	在池系土師器	杯	在池	—	—	2.8	B-SK020
第3-580837	在池系土師器	杯	在池	12.6	—	—	B-SK020
第3-580838	在池系土師器	杯	在池	12.8	9.0	2.8	B-SK020
第3-580839	在池系土師器	杯	在池	12.0	8.7	2.5	B-SK020
第3-580840	在池系土師器	杯	在池	12.2	8.8	2.7	B-SK020
第3-580841	在池系土師器	杯	在池	12.0	8.7	2.8	B-SK020
第3-580842	在池系土師器	杯	在池	12.0	8.8	2.8	B-SK020
第3-580843	在池系土師器	杯	在池	12.2	10.2	2.8	B-SK020
第3-580844	在池系土師器	杯	在池	12.2	8.7	3.0	B-SK020
第3-580845	在池系土師器	杯	在池	12.8	10.2	2.8	B-SK020
第3-580846	在池系土師器	杯	在池	12.3	9.0	2.7	B-SK020
第3-580847	在池系土師器	杯	在池	8.3	4.8	1.8	B-SK020
第3-580848	在池系土師器	杯	在池	7.8	4.3	1.7	B-SK020
第3-580849	在池系土師器	杯	在池	7.5	4.8	2.4	B-SK020
第3-580850	京橋系土師器	皿	在池	8.8	—	2.2	B-SK020
第3-580851	京橋系土師器	皿	在池	10.9	—	—	B-SK020
第3-580852	京橋系土師器	皿	在池	11.4	—	—	B-SK020
第3-580853	京橋系土師器	皿	在池	12.2	—	—	B-SK020
第3-580854	京橋系土師器	皿	在池	13.5	—	—	B-SK020
第3-580855	京橋系土師器	皿	在池	12.2	—	2.1	B-SK020
第3-580856	京橋系土師器	皿	在池	12.6	—	2.7	B-SK020
第3-580857	京橋系土師器	皿	在池	12.5	—	2.8	B-SK020
第3-580858	京橋系土師器	皿	在池	12.4	—	2.5	B-SK020
第3-580859	京橋系土師器	皿	在池	12.6	—	2.7	B-SK020
第3-580860	京橋系土師器	皿	在池	12.8	—	—	B-SK020
第3-580861	京橋系土師器	杯	在池	10.2	—	3.3	B-SK020
第3-580862	京橋系土師器	杯	在池	10.8	—	3.0	B-SK020
第3-580863	京橋系土師器	杯	在池	12.3	—	3.0	B-SK020
第3-580864	京橋系土師器	杯	在池	11.8	—	3.4	B-SK020
第3-580865	京橋系土師器	杯	在池	12.0	—	3.8	B-SK020
第3-590867	土師器	杯蓋	在池	15.9	—	—	B-SK020
第3-590868	土師器	杯	在池	15.3	—	—	B-SK020
第3-590869	土師器	杯	在池	12.9	7.4	3.1	B-SK020
第3-590870	土師器	杯	在池	14.8	9.3	3.5	B-SK020
第3-590871	土師器	杯	在池	14.7	6.5	3.7	B-SK020
第3-590872	土師器	杯	在池	—	7.4	—	B-SK020
第3-590873	土師器	杯	在池	—	8.0	—	B-SK020
第3-590874	土師器	杯	在池	—	8.0	—	B-SK020
第3-590875	土師器	杯	在池	—	8.7	—	B-SK020
第3-590876	土師器	甕	在池	—	—	1.8	B-SK020
第3-590877	土師器	甕	在池	14.6	7.9	1.3	B-SK020
第3-590878	土師器	甕	在池	—	—	—	B-SK020
第3-590879	土師器	甕	在池	15.4	—	—	B-SK020
第3-590880	土師器	甕	在池	15.1	—	—	B-SK020
第3-590881	土師器	甕	在池	22.1	—	—	B-SK020
第3-590882	土師器	甕	在池	23.8	—	—	B-SK020
第3-590883	土師器	甕	在池	20.0	—	—	B-SK020
第3-62081	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	—	B-SK022
第3-62082	土師質土器	土師	在池	—	—	—	B-SK022
第3-62083	土師質土器	土師	在池	—	—	—	B-SK022
第3-62084	瓦質土器	鉢	甕内	35.2	—	—	B-SK022
第3-65082	在池系土師器	皿	在池	8.0	7.2	1.4	B-SK023
第3-65083	在池系土師器	皿	在池	7.8	6.5	1.2	B-SK023
第3-65084	在池系土師器	皿	在池	8.8	7.9	1.3	B-SK023
第3-65085	在池系土師器	皿	在池	8.8	7.7	1.1	B-SK023

内面にロクロ目
内面にロクロ目
内面にロクロ目

遺物観察表25

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)②

神田No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.	
			口径	底径				
第3-85808	在来系土師器	皿	在来	8.8	6.5	1.1	B-SK023	
第3-85807	在来系土師器	坏	在来	12.8	9.0	3.1	B-SK024	
第3-85809	白磁	碗	龍泉窯	—	5.6	—	B-SK024	
第3-85809	在来系土師器	皿	在来	8.7	7.0	1.6	B-SK021	
第3-85810	在来系土師器	皿	在来	8.9	7.8	1.6	B-SK024	
第3-85811	在来系土師器	坏	在来	—	9.5	—	B-SK021	
第3-85812	土師質土器	碗	吉備系	—	1.8	—	B-SK021	
第3-88101	土師器	坏	在来	18.8	7.9	3.4	B-SK047	
第3-88102	土師器	甕	在来	23.4	—	15.5	B-SK047	埋納土器
第3-70101	在来系土師器	皿	在来	7.5	6.7	1.3	B-SK048	
第3-70102	在来系土師器	皿	在来	9.1	7.2	1.2	B-SK048	15
第3-70103	在来系土師器	皿	在来	8.5	7.0	1.1	B-SK048	15
第3-70104	在来系土師器	皿	在来	9.0	7.2	1.1	B-SK048	15
第3-70105	在来系土師器	皿	在来	8.3	6.3	1.3	B-SK048	15
第3-70106	在来系土師器	皿	在来	8.1	7.3	1.2	B-SK048	15
第3-70107	在来系土師器	皿	在来	8.3	6.6	1.2	B-SK048	15
第3-70108	在来系土師器	皿	在来	8.8	6.1	1.8	B-SK048	15
第3-70109	在来系土師器	坏	在来	12.1	9.5	2.6	B-SK048	15
第3-70110	在来系土師器	坏	在来	12.2	8.1	2.9	B-SK048	15
第3-70111	在来系土師器	坏	在来	13.0	9.8	3.0	B-SK048	15
第3-70112	在来系土師器	坏	在来	13.2	10.2	2.9	B-SK048	15
第3-70113	在来系土師器	坏	在来	12.1	9.1	3.2	B-SK048	15
第3-70114	在来系土師器	坏	在来	12.7	9.1	2.8	B-SK048	15
第3-70115	在来系土師器	坏	在来	12.6	8.3	3.0	B-SK048	15
第3-70116	在来系土師器	坏	在来	12.7	9.0	2.7	B-SK048	15
第3-70117	在来系土師器	坏	在来	12.6	9.6	2.7	B-SK048	15
第3-721019	在来系土師器	坏	在来	12.9	7.3	3.1	B-SK048	
第3-721020	在来系土師器	坏	在来	12.1	7.1	3.3	B-SK048	
第3-721021	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.1	2.7	B-SK048	
第3-721022	在来系土師器	坏	在来	12.8	8.8	3.0	B-SK048	
第3-721023	在来系土師器	坏	在来	12.7	9.0	2.9	B-SK048	
第3-721024	土師質土器	土師	在来	—	—	—	B-SK048	
第3-721025	土師器	坏	在来	—	7.8	—	B-SK048	古代
第3-721026	瓦質土器	埴内	—	—	—	—	B-SK048	種類不明
第3-72104	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	—	B-SK057	
第3-72102	須恵質土器	鉢	東播磨系	—	—	—	B-SK057	
第3-75101	京都系土師器	皿	在来	7.8	—	2.3	B-SK060	
第3-75102	土師器	碗	在来	—	—	—	B-SK060	古代
第3-78101	在来系土師器	坏	在来	12.8	9.2	2.6	B-SK063	
第3-78102	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.6	2.8	B-SK063	
第3-78103	在来系土師器	坏	在来	13.0	9.5	2.9	B-SK063	
第3-80101	在来系土師器	皿	在来	7.8	6.8	1.2	B-SK066	
第3-80102	在来系土師器	皿	在来	7.8	6.8	1.1	B-SK066	
第3-80103	土師器	坏	在来	14.8	—	—	B-SK066	
第3-80104	土師器	坏	在来	17.8	—	—	B-SK066	
第3-80105	土師器	甕	在来	24.8	—	—	B-SK066	
第3-81101	白磁	皿	中国	—	5.8	—	B-SK096	
第3-81102	陶器	皿	瀬戸系	10.0	—	—	B-SK096	瀬戸系
第3-81103	陶器	皿	瀬戸系	10.8	6.0	2.2	B-SK096	
第3-81104	陶器	皿	瀬戸系	8.0	4.0	2.0	B-SK096	
第3-81106	白磁	碗	肥後	—	5.0	—	B-SK096	
第3-81108	陶器	小坏	瀬前	3.8	—	2.4	B-SK096	
第3-81109	陶器	埴鉢	瀬前	26.0	—	—	B-SK096	
第3-81110	陶器	埴鉢	瀬前	—	—	14.2	B-SK096	
第3-81111	陶器	埴鉢	瀬前	—	—	—	B-SK096	
第3-811012	在来系土師器	皿	在来	8.0	7.0	1.2	B-SK096	
第3-811013	在来系土師器	坏	在来	12.0	7.6	3.3	B-SK096	
第3-811014	瓦質土器	鉢	埴内	33.1	—	—	B-SK096	
第3-811015	瓦質土器	鉢	埴内	31.8	—	—	B-SK096	
第3-811016	京都系土師器	皿	在来	12.0	—	2.5	B-SK096	
第3-811017	土師器	甕	在来	—	—	—	B-SK096	
第3-811018	土師器	甕	在来	18.1	—	—	B-SK096	
第3-83101	陶器	埴鉢	瀬前	—	6.1	—	B-SK097	「太」筋
第3-83102	陶器	大甕	瀬前	—	—	—	B-SK097	「ひねり」の筋
第3-83103	陶器	小甕	瀬前	4.0	—	—	B-SK097	「太」筋
第3-83104	陶器	埴鉢	瀬前	31.2	16.2	17.1	B-SK097	
第3-83105	在来系土師器	坏	在来	—	8.8	—	B-SK097	
第3-83106	京都系土師器	皿	在来	—	—	—	B-SK097	
第3-83107	京都系土師器	皿	在来	8.8	—	2.2	B-SK097	
第3-83108	瓦質土器	鉢	埴内	—	—	—	B-SK097	
第3-85101	在来系土師器	坏	在来	12.6	8.1	3.3	B-SK088	
第3-85102	在来系土師器	坏	在来	12.2	8.8	2.7	B-SK088	
第3-85103	在来系土師器	坏	在来	13.1	9.3	3.5	B-SK088	
第3-85104	在来系土師器	坏	在来	13.0	9.1	3.2	B-SK088	
第3-85104	在来系土師器	皿	在来	8.1	7.0	1.3	B-SK107	

遺物観察表26

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

神田No.	器種	生産地	法位(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第3-88図2	在来系土師器	坏	在来	12.0	9.0	2.9	B-SK107	
第3-90図1	瓦質土器	甗鉢	防長系	26.8	—	—	B-SK113	
第3-91図1	在来系土師器	坏	在来	11.9	8.7	3.0	B-SK122	
第3-91図2	在来系土師器	坏	在来	12.7	9.6	2.8	B-SK122	
第3-94図1	陶器	皿	瀬戸系	10.0	6.0	2.1	B-SK121	
第3-94図2	青花	皿	樽州系	10.0	5.0	2.8	B-SK124	
第3-94図3	苜蓿	皿	景徳系	11.2	6.4	2.7	B-SK121	
第3-94図4	京系土師器	皿	在来	11.4	—	—	B-SK121	
第3-94図5	京系土師器	皿	在来	12.0	—	1.9	B-SK121	
第3-94図6	土師質土器	土鍋	在来	—	—	—	B-SK121	
第3-96図1	苜蓿	碗	飯泉系	15.8	—	—	B-SK126	
第3-96図2	白磁	皿	中国	9.5	4.9	2.2	B-SK128	
第3-96図3	在来系土師器	坏	在来	12.0	9.3	2.9	B-SK126	
第3-96図4	在来系土師器	坏	在来	12.9	7.9	4.1	B-SK126	
第3-96図5	在来系土師器	坏	在来	12.9	6.5	3.8	B-SK126	
第3-96図6	土師質土器	碗	吉備系	—	5.0	—	B-SK126	
第3-96図7	土師質土器	碗	吉備系	—	5.0	—	B-SK126	
第3-96図8	瓦質土器	鉢	国内	—	28.4	—	B-SK126	
第3-96図9	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK126	
第3-96図10	土師質土器	土鍋	在来	—	—	—	B-SK126	
第3-97図1	須恵系	坏	在来	—	7.8	—	B-SK128	
第3-97図2	須恵系	坏	在来	—	7.8	—	B-SK128	
第3-100図1	土師質土器	土鍋	在来	—	—	—	B-SK131	
第3-100図2	土師質土器	碗	吉備系	—	4.4	—	B-SK131	
第3-100図3	陶器	甗	常滑	—	—	—	B-SK131	
第3-102図1	在来系土師器	坏	在来	13.2	7.0	3.9	B-SK132	
第3-102図2	在来系土師器	坏	在来	12.0	8.7	3.1	B-SK132	
第3-106図1	陶器	甗	常滑	30.3	—	—	B-SK146	
第3-106図2	青花	碗	州系	—	5.0	—	B-SK146	
第3-106図3	須恵系	瓦割	在来	—	10.6	—	B-SK146	
第3-108図1	在来系土師器	坏	在来	7.8	5.0	1.8	B-SK147	
第3-108図2	在来系土師器	坏	在来	12.3	8.0	3.7	B-SK147	
第3-108図3	在来系土師器	坏	在来	12.5	8.1	3.5	B-SK147	
第3-108図4	在来系土師器	坏	在来	12.4	—	—	B-SK147	
第3-110図1	在来系土師器	皿	在来	8.6	6.8	1.2	B-SK153	
第3-113図1	在来系土師器	坏	在来	12.2	9.1	2.7	B-SK157	
第3-113図2	京系土師器	皿	在来	5.6	—	1.4	B-SK157	
第3-115図1	陶器	皿	瀬戸系	3.1	3.0	0.6	B-SK161	
第3-115図2	土師質土器	土鍋	在来	—	—	—	B-SK161	
第3-115図3	瓦質土器	甗鉢	防長系	—	10.2	—	B-SK161	
第3-118図1	陶器	甗	常滑	—	—	—	B-SK170	
第3-118図2	瓦質土器	鉢	国内	41.4	—	—	B-SK170	
第3-120図1	在来系土師器	皿	在来	8.2	7.9	1.3	B-SK177	
第3-120図2	瓦質土器	鉢	国内	28.0	—	—	B-SK177	
第3-120図3	瓦質土器	鉢	国内	—	—	—	B-SK177	
第3-123図1	須恵質土器	鉢	東播系	28.3	—	—	B-SK179	
第3-125図1	在来系土師器	坏	在来	12.0	6.0	3.6	B-SK184	15
第3-125図2	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.9	3.1	B-SK184	15
第3-125図3	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.1	3.1	B-SK184	15
第3-125図4	在来系土師器	坏	在来	12.7	8.1	2.9	B-SK184	15
第3-125図5	在来系土師器	坏	在来	12.9	8.7	3.2	B-SK184	15
第3-125図6	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.4	2.9	B-SK184	15
第3-127図1	須恵質土器	鉢	東播系	26.1	—	—	B-SK187	
第3-127図2	須恵質土器	鉢	東播系	27.4	9.8	10.3	B-SK187	
第3-128図1	京系土師器	皿	在来	13.8	—	7.0	B-SK012	14
第3-128図3	瓦質土器	甗	国内	—	—	—	B-SK092	
第3-128図4	苜蓿	皿	飯泉系	—	—	—	B-SK090	
第3-128図5	在来系土師器	坏	在来	11.6	6.8	2.3	B-SK090	
第3-128図6	在来系土師器	坏	在来	12.5	9.2	3.4	B-SK090	
第3-128図7	京系土師器	皿	在来	8.1	—	2.2	B-SK090	
第3-128図8	京系土師器	皿	在来	11.2	—	2.1	B-SK090	
第3-128図9	須恵質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SK090	
第3-128図10	須恵系	坏蓋	在来	15.1	—	—	B-SK090	
第3-128図11	在来系土師器	坏	在来	12.1	8.1	2.7	B-SK108	
第3-128図12	在来系土師器	坏	在来	12.3	9.0	3.1	B-SK108	
第3-128図13	土師質土器	碗	吉備系	10.2	—	—	B-SK108	
第3-128図14	龜輪陶器	小破	中国	—	—	—	B-SK123	
第3-128図15	土師質土器	碗	吉備系	—	4.5	—	B-SK123	
第3-128図17	土師器	皿	在来	—	—	—	B-SK148	古代
第3-128図18	京系土師器	皿	在来	—	—	—	B-SK148	
第3-128図19	須恵質土器	鉢	東播系	29.6	—	—	B-SK148	
第3-128図20	須恵系	坏蓋	在来	13.4	—	—	B-SK148	古代
第3-128図21	在来系土師器	皿	在来	8.0	5.6	1.5	B-SK129	
第3-128図22	在来系土師器	坏	在来	12.4	8.4	3.0	B-SK129	
第3-128図23	在来系土師器	坏	在来	13.4	11.1	3.3	B-SK129	

遺物観察表27

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)①

採掘No.	器種	生産地	法目(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第3-128241	須恵器	坪	在埋	12.5	9.1	4.0	B-SK129
第3-129241	陶器	埴埴	表面	—	—	—	B-SK150
第3-129242	陶器	埴埴	表面	—	—	—	B-SK150
第3-129243	須恵質土器	甕	亀山系	—	—	—	B-SK150
第3-129244	在埋系土師器	皿	在埋	7.1	5.8	1.1	B-SK150
第3-129245	在埋系土師器	皿	在埋	8.3	6.9	1.2	B-SK150
第3-129246	在埋系土師器	坪	在埋	8.1	6.1	2.1	B-SK150
第3-129247	土師器	皿	在埋	—	—	—	B-SK150
第3-129248	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SK150
第3-129249	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SK150
第3-1292410	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SK150
第3-1292411	京都系土師器	坪	在埋	12.6	—	3.5	B-SK188
第3-1292412	土師質土器	甕	在埋	25.0	—	—	B-SK188
第3-1292413	瓦質土器	埴埴	埴内	30.1	—	—	B-SK188
第3-1292414	瓦質土器	埴埴	埴内	31.8	22.8	5.8	B-SK188
第3-1292415	瓦質土器	埴埴	埴内	—	—	—	B-SF000
第3-131241	青磁	甕	龍泉窯	—	4.0	—	B-SF000
第3-131242	京都系土師器	皿	在埋	11.7	—	1.9	B-SF000
第3-131243	京都系土師器	坪	在埋	11.3	—	3.5	B-SF000
第3-131244	陶器	甕	表面	—	—	—	B-SF000
第3-131245	瓦質土器	埴埴	埴内	—	—	—	B-SF000
第3-131249	瓦質土器	埴埴	埴内	33.3	20.2	22.9	B-SF000
第3-1312411	土師器	坪	在埋	—	7.9	—	B-SF000
第3-134241	在埋系土師器	皿	在埋	7.9	5.6	0.9	B-SF000
第3-134242	在埋系土師器	皿	在埋	8.0	6.6	1.1	B-SF000
第3-134243	在埋系土師器	皿	在埋	8.2	7.2	1.1	B-SF000
第3-134244	在埋系土師器	皿	在埋	8.8	6.8	1.1	B-SF000
第3-134245	在埋系土師器	皿	在埋	7.5	6.0	1.0	B-SF000
第3-134246	在埋系土師器	皿	在埋	7.6	6.6	1.1	B-SF000
第3-134247	在埋系土師器	坪	在埋	11.0	6.6	2.9	B-SF000
第3-134248	在埋系土師器	坪	在埋	11.0	8.6	2.8	B-SF000
第3-134249	在埋系土師器	坪	在埋	12.2	8.0	2.0	B-SF000
第3-1342410	在埋系土師器	坪	在埋	—	6.1	—	B-SF000
第3-1342411	在埋系土師器	坪	在埋	11.8	7.8	3.2	B-SF000
第3-1342412	在埋系土師器	坪	在埋	12.0	8.0	2.7	B-SF000
第3-1342413	在埋系土師器	坪	在埋	11.2	8.2	2.5	B-SF000
第3-1342414	在埋系土師器	坪	在埋	12.1	8.0	3.1	B-SF000
第3-1342415	在埋系土師器	坪	在埋	11.8	7.8	3.5	B-SF000
第3-1342416	在埋系土師器	坪	在埋	12.6	8.1	3.5	B-SF000
第3-1342417	在埋系土師器	坪	在埋	12.8	7.2	1.1	B-SF000
第3-1342418	在埋系土師器	坪	在埋	13.2	6.6	3.4	B-SF000
第3-1342419	在埋系土師器	坪	在埋	13.2	8.8	3.5	B-SF000
第3-1342420	土師質土器	燗台	在埋	9.3	—	—	B-SF000
第3-1342421	土師質土器	甕	吉備系	—	—	—	B-SF000
第3-1342422	土師質土器	甕	吉備系	10.2	—	—	B-SF000
第3-1342423	土師質土器	甕	吉備系	—	4.2	—	B-SF000
第3-1342424	土師質土器	甕	吉備系	—	4.8	—	B-SF000
第3-1342425	土師質土器	甕	吉備系	—	4.5	—	B-SF000
第3-135246	陶器	甕	吉備系	—	—	—	B-SF000
第3-135247	陶器	甕	吉備系	—	—	—	B-SF000
第3-1352428	陶器	埴埴	吉備系	32.0	—	—	B-SF000
第3-1352429	須恵質土器	甕	東播磨系	18.7	—	—	B-SF000
第3-1352430	須恵質土器	甕	東播磨系	26.9	—	—	B-SF000
第3-1352431	須恵質土器	埴埴	東播磨系	—	—	—	B-SF000
第3-1352432	須恵質土器	埴埴	東播磨系	—	—	—	B-SF000
第3-1352433	須恵質土器	埴埴	東播磨系	32.1	—	—	B-SF000
第3-1352434	須恵質土器	埴埴	東播磨系	—	10.0	—	B-SF000
第3-1352435	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1352436	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1352437	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1352438	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1352439	土師質土器	土鍋	在埋	31.1	—	13.6	B-SF000
第3-1362440	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1362441	土師質土器	土鍋	在埋	38.7	—	—	B-SF000
第3-1362442	土師質土器	土鍋	在埋	28.2	—	—	B-SF000
第3-1362443	土師質土器	土鍋	在埋	24.6	—	—	B-SF000
第3-1362444	瓦質土器	埴埴	埴内	—	—	—	B-SF000
第3-1362445	瓦質土器	埴埴	在埋	14.0	7.8	2.5	B-SF000
第3-1362446	土師器	皿	在埋	13.0	—	—	B-SF000
第3-1362447	土師器	皿	在埋	13.0	—	—	B-SF000
第3-1362448	土師器	皿	在埋	13.0	—	—	B-SF000
第3-1362449	土師器	埴埴	在埋	23.6	—	—	B-SF000
第3-1362450	土師器	埴埴	在埋	32.7	—	—	B-SF000
第3-1362451	土師器	埴埴	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1362452	瓦質土器	甕	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-1362453	瓦質土器	甕	在埋	—	—	—	B-SF000
第3-138241	陶器	埴埴	埴内	23.3	13.3	9.1	B-SF010
第3-138242	在埋系土師器	皿	在埋	8.0	7.7	1.2	B-SF010
第3-138243	在埋系土師器	坪	在埋	11.2	8.1	3.0	B-SF010

遺物觀察表28

府内町跡20次調査B区出土遺物觀察表(土器・陶磁器類)②

拝印No.	器 種	生産地	法尺(単位cm)			遺物名	備 考	図版No.
			口径	底径	高さ			
第3-13894	在地区土師器	坏	在埋	12.0	8.4	3.0	B-SE010	
第3-13895	在地区土師器	坏	在埋	12.1	8.2	3.3	B-SE010	
第3-13896	在地区土師器	坏	在埋	12.5	8.9	2.8	B-SE010	
第3-13897	京原系土師器	皿	在埋	14.0	—	2.8	B-SE010	
第3-13898	土師質土器	筒	吉備系	9.7	—	—	B-SE010	
第3-13899	土師質土器	筒	吉備系	11.3	—	—	B-SE010	
第3-13900	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SE010	
第3-13901	土師質土器	土鍋	在埋	—	—	—	B-SE010	
第3-13904	瓦質土器	鉢	国内	—	31.8	—	B-SE010	
第3-13905	土師器	坏蓋	在埋	17.2	—	—	B-SE010	
第3-13906	土師器	坏蓋	在埋	14.2	—	—	B-SE010	
第3-13907	土師器	坏	在埋	13.6	—	—	B-SE010	
第3-13908	土師器	高坏	在埋	—	—	—	B-SE010	
第3-13909	須臾器	坏	在埋	—	10.0	—	B-SE010	
第3-14101	在地区土師器	皿	在埋	8.8	7.9	1.5	B-SE017	
第3-14102	在地区土師器	坏	在埋	8.8	7.1	2.0	B-SE017	
第3-14103	在地区土師器	坏	在埋	12.5	10.2	2.9	B-SE017	
第3-14104	在地区土師器	坏	在埋	12.3	7.1	3.6	B-SE017	
第3-14105	在地区土師器	坏	在埋	12.2	8.0	2.7	B-SE017	
第3-14106	土師質土器	筒	吉備系	10.8	3.4	4.2	B-SE017	
第3-14107	土師質土器	筒	吉備系	—	—	—	B-SE017	
第3-14108	土師質土器	埴埴	在埋	—	—	—	B-SE017	
第3-14109	土師質土器	埴埴	在埋	4.3	—	—	B-SE017	
第3-14110	瓦質土器	鉢	在埋	4.3	—	—	B-SE017	
第3-14111	須臾質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE017	
第3-14112	須臾質土器	鉢	東播系	—	—	—	B-SE017	
第3-14113	須臾質土器	鉢	東播系	32.7	—	—	B-SE017	
第3-14114	須臾質土器	鉢	東播系	32.6	—	—	B-SE017	
第3-14115	須臾質土器	鉢	龜山系	34.2	—	—	B-SE017	
第3-14116	須臾器	以須成	在埋	—	—	—	B-SE017	
第3-14117	土師器	筒	在埋	—	—	—	B-SE017	
第3-14118	土師器	高坏	在埋	—	—	—	B-SE017	
第3-14201	陶器	豆	輪前	—	—	—	B-SE056	
第3-14202	在地区土師器	皿	在埋	8.6	7.1	1.1	B-SE056	
第3-14203	在地区土師器	皿	在埋	8.1	6.1	1.3	B-SE056	
第3-14204	在地区土師器	皿	在埋	7.5	6.2	1.2	B-SE056	
第3-14205	土師質土器	筒	吉備系	—	4.0	—	B-SE056	
第3-14206	瓦質土器	鉢	在埋	—	—	—	B-SE056	
第3-14207	土師質土器	土鍋	在埋	31.1	—	—	B-SE056	
第3-15001	在地区土師器	皿	在埋	8.2	6.2	1.4	B-SP113	
第3-15002	在地区土師器	皿	在埋	8.1	6.8	1.3	B-SP113	
第3-15003	在地区土師器	皿	在埋	8.1	6.4	1.4	B-SP113	
第3-15004	在地区土師器	坏	在埋	11.7	8.3	3.0	B-SP113	
第3-15005	土師器	坏	在埋	15.0	7.9	5.5	B-SP052	
第3-15006	土師器	坏	在埋	13.0	7.2	3.8	B-SP451	
第3-15007	在地区土師器	皿	在埋	—	—	1.2	B-SP052	
第3-15008	在地区土師器	坏	在埋	11.8	9.3	2.7	B-SP052	
第3-15009	土師器	坏	在埋	—	8.6	—	B-SP052	
第3-15010	土師器	坏	在埋	12.8	7.5	3.8	B-SP053	
第3-15011	土師器	坏	在埋	13.5	8.0	3.8	B-SP055	
第3-15012	土師質土器	筒	吉備系	10.4	3.8	2.9	B-SP055	
第3-15013	土師質土器	筒	在埋	—	—	—	B-SP055	
第3-15014	土師器	坏	在埋	—	—	—	B-SP062	
第3-15015	土師器	坏	在埋	13.3	7.8	3.6	B-SP068	
第3-15016	土師器	坏	在埋	13.6	—	—	B-SP068	
第3-15017	土師器	坏	在埋	—	6.6	—	B-SP084	
第3-15018	京原系土師器	皿	在埋	11.8	—	2.3	B-SP185	
第3-15019	在地区土師器	坏	在埋	12.1	8.5	2.8	B-SP065	
第3-15020	在地区土師器	坏	在埋	11.8	8.9	3.0	B-SP070	
第3-15021	土師器	坏	在埋	—	8.8	—	B-SP073	
第3-15022	白磁	皿	川島	—	—	—	B-SP083	
第3-15023	陶器	水引甕	輪前	—	—	—	B-SP091	
第3-15024	土師器	坏	在埋	15.2	8.3	5.1	B-SP094	
第3-15025	在地区土師器	坏	在埋	12.0	8.4	2.8	B-SP102	
第3-15026	在地区土師器	皿	在埋	8.2	6.6	1.2	B-SP109	
第3-15027	在地区土師器	坏	在埋	12.2	9.0	3.2	B-SP108	
第3-15028	土師質土器	筒	吉備系	—	—	—	B-SP110	
第3-15029	土師質土器	筒	吉備系	—	4.1	—	B-SP110	
第3-15030	在地区土師器	坏	在埋	12.3	8.6	3.2	B-SP130	
第3-15031	在地区土師器	坏	在埋	12.6	8.3	3.1	B-SP135	
第3-15032	在地区土師器	坏	在埋	13.2	9.5	2.6	B-SP135	
第3-15033	在地区土師器	坏	在埋	12.2	9.0	3.0	B-SP131	
第3-15034	陶器	植鉢	輪前	—	—	—	B-SP139	
第3-15035	在地区土師器	皿	在埋	8.0	6.9	1.1	B-SP144	
第3-15036	土師器	坏	在埋	—	8.8	—	B-SP149	

遺物観察表29

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類)⑨

標本No.	器 種	生産地	法尺(単位cm)		遺構名	備 考	図版No.
			口径	底径			
第3-158022	土師質土器	陶	吉備系	10.1	—	—	B-S-P151
第3-158023	在地系土師器	皿	在地	8.3	7.2	1.0	B-S-P151
第3-158024	瓦質土器	井	国内	—	—	—	B-S-P151
第3-158025	在地系土師器	在	在地	7.8	6.1	1.7	B-S-P150
第3-158026	在地系土師器	在	在地	8.0	6.4	1.3	B-S-P150
第3-158027	在地系土師器	坏	在地	13.0	9.4	3.1	B-S-P150
第3-161021	青花	陶	神州窯	12.3	1.8	5.0	K-17
第3-161022	青花	陶	鹿島窯	—	—	—	L-12
第3-161023	青花	陶	鹿島窯	—	—	—	L-12
第3-161024	青花	陶	鹿島窯	—	5.1	—	K-16
第3-161025	白磁	小杯	中国	5.0	—	—	L-12
第3-161026	緑釉	陶	国内	—	5.1	—	L-10
第3-161027	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-16
第3-161028	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-16
第3-161029	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-16
第3-161030	焼締陶器	四耳壺	タイ	—	—	—	K-16
第3-161031	陶器	天目	瀬戸英濃	11.6	—	—	包含層
第3-161032	陶器	皿	瀬戸英濃	10.5	5.9	2.5	L-12
第3-161033	陶器	梅瓶	瀬戸英濃	—	—	—	K-11
第3-161034	陶器	壺	備前	—	—	—	包含層
第3-161035	陶器	鉢	備前	—	—	—	K-43
第3-161036	陶器	小壺	備前	6.6	—	—	K-16
第3-161037	陶器	鉢	備前	13.1	—	—	包含層
第3-161038	陶器	急須	備前	—	—	—	K-43
第3-161039	陶器	徳利	備前	—	6.2	—	K-16
第3-161040	陶器	徳利	備前	—	9.0	—	K-13
第3-161041	陶器	徳利	備前	—	10.2	—	包含層
第3-161042	陶器	皿	備前	—	—	—	K-16
第3-161043	陶器	皿	備前	—	—	—	K-16
第3-162021	陶器	壺	備前	38.4	—	—	L-17
第3-162022	陶器	壺	備前	31.8	—	—	L-16
第3-162023	陶器	壺	備前	27.2	13.2	12.1	包含層
第3-162024	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162025	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162026	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162027	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162028	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162029	陶器	壺	備前	—	—	—	L-16
第3-162030	陶器	壺	備前	—	—	—	包含層
第3-162031	陶器	壺	備前	35.8	—	—	S-43 上面
第3-162032	在地系土師器	皿	在地	8.2	6.6	1.3	K-15
第3-162033	在地系土師器	皿	在地	8.6	7.0	1.1	K-43
第3-162034	在地系土師器	皿	在地	7.1	5.1	1.0	包含層
第3-162035	在地系土師器	皿	在地	7.1	6.6	1.1	K-12
第3-162036	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.6	1.2	K-12
第3-162037	在地系土師器	皿	在地	8.2	7.0	1.1	K-12
第3-162038	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.0	0.8	K-12
第3-162039	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.3	1.2	包含層
第3-162040	在地系土師器	皿	在地	7.8	6.0	1.5	包含層
第3-162041	在地系土師器	皿	在地	7.2	6.0	1.0	K-45
第3-163012	在地系土師器	坏	在地	7.8	6.0	2.0	L-12
第3-163013	在地系土師器	坏	在地	11.0	7.2	3.0	K-13
第3-163014	在地系土師器	坏	在地	10.8	6.1	2.8	M-12
第3-163015	在地系土師器	坏	在地	10.0	7.0	2.8	K-13
第3-163016	在地系土師器	坏	在地	12.0	—	—	K-13
第3-163017	在地系土師器	坏	在地	12.0	3.0	2.3	K-11
第3-163018	在地系土師器	坏	在地	12.2	9.0	—	L-17
第3-163019	在地系土師器	坏	在地	10.0	9.0	2.5	K-16
第3-163020	在地系土師器	坏	在地	10.4	7.8	3.2	K-13
第3-163021	在地系土師器	坏	在地	12.3	8.1	3.3	K-15
第3-163022	在地系土師器	坏	在地	10.8	7.8	2.1	K-12
第3-163023	在地系土師器	坏	在地	11.7	8.2	3.7	L-12
第3-163024	在地系土師器	坏	在地	12.8	9.6	2.9	包含層
第3-163025	在地系土師器	坏	在地	12.1	8.3	3.7	L-13
第3-163026	在地系土師器	坏	在地	—	7.6	—	L-11
第3-163027	土師質土器	陶	吉備系	11.2	4.1	3.2	K-13
第3-163028	土師質土器	陶	吉備系	—	4.3	—	K-14
第3-163029	京橋系土師器	皿	在地	8.1	—	2.1	包含層
第3-163030	京橋系土師器	皿	在地	8.8	—	2.1	K-16
第3-163031	京橋系土師器	皿	在地	9.0	—	2.2	K-12
第3-163032	京橋系土師器	皿	在地	8.2	—	—	K-14
第3-163033	京橋系土師器	皿	在地	—	—	—	K-13
第3-163034	京橋系土師器	坏	在地	—	—	3.0	K-16
第3-163035	京橋系土師器	皿	在地	12.8	—	2.3	K-16
第3-163036	京橋系土師器	皿	在地	10.8	—	2.0	K-13
第3-163037	京橋系土師器	皿	在地	11.2	—	—	包含層
第3-163038	京橋系土師器	皿	在地	12.2	—	—	K-12
第3-163039	京橋系土師器	皿	在地	12.0	—	3.2	K-11

遺物観察表30

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土器・陶磁器類) ⑧

神田No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
			口径	底径	高さ			
303-163R70	京都系土師器	皿	在池	11.4	—	2.5	K-16	
303-163R71	京都系土師器	皿	在池	12.4	—	—	包含層	
303-163R72	京都系土師器	皿	在池	12.0	—	—	包含層	
303-163R73	京都系土師器	皿	在池	12.0	—	2.5	K-12	
303-163R74	京都系土師器	皿	在池	14.0	—	2.5	包含層	
303-164R75	土師器土器	土鍋	在池	21.4	—	—	包含層	
303-164R76	土師器土器	土鍋	在池	24.6	—	—	K-12	
303-164R77	土師器土器	土鍋	在池	—	—	—	包含層	
303-164R78	土師器土器	土鍋	在池	29.1	—	—	包含層	
303-164R79	土師器土器	土鍋	在池	32.8	—	—	包含層	
303-164R80	須恵器土器	鉢	東播系	—	—	—	L-43	
303-164R81	土師器土器	土鍋	在池	34.8	—	—	包含層	
303-164R82	須恵器土器	鉢	東播系	—	—	—	K-43	
303-164R83	須恵器土器	鉢	東播系	—	—	—	包含層	
303-164R84	須恵器土器	鉢	東播系	24.0	—	—	K-43	
303-164R85	須恵器土器	鉢	東播系	—	—	—	L-43	
303-164R86	須恵器土器	鉢	東播系	—	—	—	L-46	
303-164R87	須恵器土器	鉢	東播系	26.0	—	—	K-43	
303-164R88	須恵器土器	鉢	東播系	27.8	—	—	K-43	
303-164R89	須恵器土器	鉢	東播系	24.6	—	—	K-43	
303-164R90	須恵器土器	鉢	東播系	27.6	—	—	包含層	
303-164R91	須恵器土器	鉢	東播系	—	8.3	—	L-43	
303-164R92	須恵器土器	鉢	東播系	—	9.0	—	包含層	
303-165R93	須恵器土器	甕	龜山系	33.2	—	—	包含層	
303-165R94	須恵器土器	甕	龜山系	—	—	—	包含層	
303-165R95	須恵器土器	甕	龜山系	—	—	—	包含層	
303-165R96	須恵器土器	甕	龜山系	—	—	—	L-43	
303-165R97	須恵器土器	甕	龜山系	—	—	—	K-42	
303-165R98	瓦質土器	鉢	国内	31.4	18.0	10.4	K-45	
303-165R99	瓦質土器	鉢	国内	36.3	22.0	10.3	K-42	
303-165R100	瓦質土器	鉢	国内	36.8	—	—	包含層	
303-165R101	瓦質土器	鉢	国内	34.4	—	—	包含層	
303-165R102	瓦質土器	鉢	国内	—	21.4	—	K-42	
303-166R113	土師器土器	甕	在池	—	6.0	—	K-43	
303-166R114	土師器土器	甕	在池	—	5.8	—	包含層	
303-166R115	土師器土器	甕	在池	—	6.8	—	K-45	
303-167R128	土師器	坏	在池	16.6	—	1.5	L-42	
303-167R129	土師器	坏	在池	17.0	—	2.8	K-44	
303-167R130	土師器	坏	在池	13.8	6.5	3.6	L-46	
303-167R131	土師器	坏	在池	12.8	—	3.1	K-46	
303-167R132	土師器	坏	在池	13.0	7.0	3.1	L-45	
303-167R133	土師器	坏	在池	13.4	—	—	包含層	
303-167R134	土師器	坏	在池	13.4	7.6	4.2	L-46	
303-167R135	土師器	坏	在池	15.0	—	3.7	K-42	
303-167R136	土師器	坏	在池	—	7.8	—	L-46	
303-167R137	瓦質土器	坏	在池	12.8	7.4	3.3	L-47	
303-167R138	土師器	坏	在池	—	9.6	—	K-46	
303-167R139	土師器	坏	在池	—	11.5	—	包含層	
303-167R140	土師器	坏	在池	—	8.2	—	K-46	
303-167R141	土師器	甕	在池	—	—	—	K-44	
303-167R142	土師器	甕	在池	—	—	—	L-46	
303-167R143	土師器	甕	在池	24.2	—	—	L-45	
303-167R144	土師器	甕	在池	13.4	—	—	K-46	
303-167R145	土師器	甕	在池	14.2	—	—	包含層	
303-167R146	土師器	甕	在池	24.8	—	—	K-45	
303-167R147	土師器	甕	在池	21.4	—	—	L-46	
303-167R148	土師器	甕	在池	—	19.0	—	K-46	
303-167R149	土師器	甕	在池	—	19.0	—	包含層	
303-167R150	弥生土器	甕	在池	22.0	—	—	K-47	
303-167R151	弥生土器	甕	在池	—	4.2	—	K-42	
303-167R152	弥生土器	高坏	在池	—	—	—	K-44	
303-167R153	弥生土器	高坏	在池	—	—	—	包含層	

瓶合口縁の断面文

遺物観察表31

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土製品・石製品)①

標本No.	器種	材質	部位	法尺(単位cm)			重量g	遺構名	備考	図版No.	
				長さ	幅	厚さ					
第3-190208	石鍋	磨石		—	—	—	22.2	B-SD003			
第3-190209	石鍋	磨石		—	—	—	14.2	B-SD003			
第3-190210	石鍋	磨石		—	—	—	118.2	B-SD003	再加工品		
第3-190211	石鍋	磨石		—	—	—	113.8	B-SD003			
第3-190212	石鍋	磨石		—	—	—	78.8	B-SD003	底径径20.8cm		
第3-190213	砥石	土製		—	—	—	20.0	B-SD003			
第3-190214	土製	土製		4.3	1.0	0.5	—	B-SD003			
第3-190215	土製	土製		2.6	—	—	1.0	2.7	B-SD003		
第3-190216	土製	土製		3.1	—	—	1.0	2.9	B-SD003		
第3-190217	土製	土製		2.7	—	—	0.9	2.7	B-SD003		
第3-190218	土製	土製		23.0	—	—	1.5	2.2	B-SD003		
第3-190219	土製	土製		2.7	—	—	1.2	1.2	B-SD003		
第3-190220	土製	土製		2.9	—	—	0.9	1.5	B-SD003		
第3-190221	土製	土製		2.7	—	—	1.1	3.0	B-SD003		
第3-190222	土製	土製		4.1	—	—	1.1	3.8	B-SD003		
第3-190223	土製	土製		4.5	—	—	1.0	4.2	B-SD003		
第3-190224	土製	土製		3.5	—	—	1.1	1.0	B-SD003		
第3-190225	土製	土製		3.8	—	—	0.8	2.5	B-SD003		
第3-190226	土製	土製		4.0	—	—	1.3	7.8	B-SD003		
第3-190227	土製	土製		4.1	—	—	1.0	3.8	B-SD003		
第3-190228	土製	土製		4.1	—	—	0.9	3.8	B-SD003		
第3-190229	土製	土製		4.5	—	—	1.0	4.3	B-SD003		
第3-190230	土製	土製		3.2	—	—	1.1	5.5	B-SD003		
第3-190231	土製	土製		1.5	—	—	1.0	1.0	B-SD003		
第3-190232	土製	土製		1.7	—	—	0.8	2.8	B-SD003		
第3-190233	土製	土製		1.9	—	—	1.0	4.6	B-SD003		
第3-190234	土製	土製		1.7	—	—	1.0	1.9	B-SD003		
第3-190235	土製	土製		1.6	—	—	1.0	5.0	B-SD003		
第3-190236	土製	土製		1.7	—	—	0.8	3.5	B-SD003		
第3-190237	土製	土製		5.5	—	—	1.0	5.5	B-SD003		
第3-190238	土製	土製		3.1	—	—	1.1	5.0	B-SD003		
第3-190239	土製	土製		5.0	—	—	1.0	4.3	B-SD003		
第3-190240	土製	土製		3.1	—	—	1.1	4.0	B-SD003		
第3-190241	土製	土製		3.8	—	—	1.3	6.1	B-SD003		
第3-190242	土製	土製		4.3	—	—	1.8	11.1	B-SD003		
第3-250232	土製	土製		3.5	—	—	1.3	3.5	B-SD001		
第3-250233	土製	土製		5.1	—	—	1.0	3.0	B-SD001		
第3-250234	土製	土製		6.3	—	—	2.9	49.3	B-SD001		
第3-250235	砥石	土製		7.5	2.6	—	35.0	B-SD001			
第3-4302151	フイゴ	土製	別口	12.0	9.3	3.1	—	B-SD061	中空部径径3.1cm		
第3-4302153	石鍋	磨石		—	—	—	—	B-SD061	再加工品		
第3-4302154	石鍋	磨石		—	—	—	—	B-SD061	再加工品		
第3-4302155	土器片加工品	土器		3.1	3.1	1.0	12.6	B-SD061			
第3-4302156	土器片加工品	土器		5.1	6.2	1.0	39.1	B-SD061			
第3-4302157	土器	土製		3.5	—	—	1.1	4.3	B-SD061		
第3-4302158	土器	土製		3.9	—	—	0.8	2.6	B-SD061		
第3-4302159	土器	土製		3.4	—	—	1.0	2.8	B-SD061		
第3-4302160	土器	土製		3.7	—	—	1.1	4.2	B-SD061		
第3-4302161	土器	土製		3.6	—	—	1.1	4.9	B-SD061		
第3-4302162	土器	土製		3.1	—	—	1.1	4.0	B-SD061		
第3-4302163	土器	土製		4.3	—	—	1.1	4.2	B-SD061		
第3-4302164	土器	土製		4.6	—	—	1.2	6.2	B-SD061		
第3-4302165	土器	土製		4.9	—	—	1.0	4.9	B-SD061		
第3-4302166	土器	土製		5.3	—	—	1.0	4.8	B-SD061		
第3-4302167	土器	土製		5.2	—	—	1.0	5.8	B-SD061		
第3-4302168	土器	土製		5.2	—	—	1.0	5.8	B-SD061		
第3-4302169	土器	土製		5.0	—	—	1.8	11.2	B-SD061		
第3-4302170	土器	土製		1.7	—	—	1.0	4.6	B-SD061		
第3-4302171	土器	土製		5.0	—	—	1.0	4.6	B-SD061		
第3-4302172	土器	土製		4.9	—	—	1.3	8.3	B-SD061		
第3-4402175	石製存留	凝灰岩		20.1	15.0	14.1	—	B-SD061	11径・底径・高さの順		
第3-4402176	石製	凝灰岩		—	—	16.8	—	B-SD061	八角形の台座		
第3-4402178	石製台	凝灰岩		12.9	—	11.6	—	B-SD061			
第3-500216	石鍋	磨石		—	—	—	16.1	B-SK015			
第3-500217	石鍋	磨石		—	—	—	46.8	B-SK015			
第3-500218	土製	土製		4.5	—	—	1.3	6.5	B-SK015		
第3-500219	砥石	石製		5.1	3.7	0.9	37.3	B-SK015			
第3-570224	石鍋	磨石		—	—	—	—	B-SK020			
第3-570225	石鍋	磨石		—	—	—	—	B-SK020			
第3-590244	土器片加工品	土器		3.0	2.7	0.7	3.7	B-SK020			
第3-590245	土器片加工品	土器		4.8	3.5	1.0	14.5	B-SK020			
第3-590247	土器	土製		3.2	—	—	1.1	3.5	B-SK020		
第3-590248	土器	土製		3.1	—	—	1.1	3.1	B-SK020		
第3-590249	土器	土製		3.7	—	—	1.1	4.1	B-SK020		
第3-590250	土器	土製		4.0	—	—	0.9	3.2	B-SK020		
第3-590251	土器	土製		2.9	—	—	1.0	3.2	B-SK020		

遺物観察表32

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(土製品・石製品)②

神田No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量 g	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ				
第3-59892	土器	土製		4.5	—	1.1	4.6	B-SK020		
第3-59893	土器	土製		3.8	—	2.1	12.9	B-SK020		
第3-59894	土器	土製		4.3	—	1.6	11.5	B-SK020		
第3-81185	土器片加工品	陶製		3.2	3.6	—	—	—	瀬戸瓦葺の天目	
第3-81187	土器片加工品	陶製		4.4	4.4	—	—	—	瀬戸瓦葺の天目の底面	
第3-83899	土器片加工品	土製		6.3	—	—	—	B-SK096		
第3-12816	土器	土製		1.9	—	0.9	1.0	46.2	B-SK097	
第3-129111	土器	土製		4.0	—	1.1	5.1	B-SK156		
第3-131106	土器	土製		2.7	—	1.0	3.8	B-S-E006		
第3-131107	土器	土製		5.4	—	1.1	6.3	B-S-E006		
第3-131108	土器	土製		5.6	—	0.9	4.1	B-S-E006		
第3-131110	砥石	石製		3.2	3.5	3.1	76.4	B-S-E006		
第3-136145	土器	土製		4.4	—	1.2	5.7	B-S-E009		
第3-136146	土器	土製		5.0	—	1.0	7.2	B-S-E009		
第3-136147	甌	石製		3.0	4.8	1.0	—	B-S-E009		
第3-138112	土器片加工品	土製		3.5	3.3	1.3	17.6	B-S-E010		
第3-138113	土器片加工品	土製		4.8	4.8	1.1	33.1	B-S-E010		
第3-150111	土器	土製		2.8	—	1.3	4.1	B-S-P027		
第3-15014	土器	土製		3.1	—	1.0	3.0	B-S-P071		
第3-150115	砥石	石製		8.5	3.6	2.5	162.4	B-S-P121		
第3-166103	石磨	磨石		—	—	—	43.7	L-47		
第3-166104	石磨	磨石		—	—	—	25.6	M-46		
第3-166105	石磨	磨石		—	—	—	111.6	K-43		
第3-166106	石磨	磨石		—	—	—	100.7	L-42		
第3-166107	石磨	磨石		—	—	—	48.5	包含層		
第3-166108	石磨	磨石		—	—	—	86.2	包含層		
第3-166109	石磨	磨石		—	—	—	100.3	包含層		
第3-166110	石磨	磨石		—	—	—	20.0	包含層	底面	
第3-166111	石磨	磨石		—	—	—	37.0	M-42	底面	
第3-166112	石磨	磨石		—	—	—	59.5	K-43	底面	
第3-166116	土器片加工品	土製		2.9	2.5	1.3	10.8	包含層		
第3-166117	土器片加工品	土製		2.6	2.7	1.2	9.3	—		
第3-166118	土器片加工品	土製		3.6	3.4	0.8	12.2	—		
第3-166119	土器片加工品	土製		3.1	2.8	1.0	10.1	K-43		
第3-166120	土器片加工品	土製		2.1	2.1	1.3	5.0	K-42		
第3-166121	土器片加工品	土製		3.8	3.5	1.0	14.5	包含層		
第3-166122	土器	土製		3.4	—	0.8	2.5	K-42		
第3-166123	土器	土製		5.1	—	1.1	9.3	K-42		
第3-166124	土器	土製		4.1	—	2.3	15.1	M-47		
第3-166125	土器	土製		5.2	—	2.7	34.4	包含層		
第3-16810	砥石	石製		4.0	2.5	2.0	53.6	K-46		
第3-16812	砥石	石製		5.9	4.2	2.9	106.1	K-45		
第3-16810	砥石	石製		8.3	3.1	2.0	69.2	包含層		
第3-16810	砥石	石製		8.3	8.7	7.6	508.6	包含層		
第3-16810	砥石	石製		8.7	3.8	1.2	45.5	包含層		
第3-17014	スタンブ	磨石		2.3	6.2	1.7	47.3	K-47	花卉文様	

遺物観察表33

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(玉・ガラス製品)

神田No.	器種	材質	部位	法量(単位cm)			重量 g	遺構名	備考	図版 No.
				長さ	幅	厚さ				
第3-191242	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-191243	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-191244	玉	ガラス		0.3	0.2	—	0.1	B-SD003	らせん状にねじれる	
第3-191245	玉	ガラス		0.5	0.5	—	0.7	B-SD003		
第3-191246	玉	ガラス		1.0	0.9	—	0.9	B-SD003		
第3-191247	玉	ガラス		0.9	0.8	—	0.7	B-SD003		
第3-191248	玉	土製		1.7	1.6	—	71.0	B-SD003	貫通しない穿孔	
第3-321173	玉	ガラス		1.0	1.0	—	0.8	B-SD004	径2mm穿孔	
第3-321174	玉	ガラス		1.0	0.8	—	1.0	B-SD004	径2mm穿孔	
第3-502186	玉	ガラス		0.8	0.9	—	0.7	B-SK020	径2mm穿孔	
第3-110182	玉	土製		1.7	1.7	—	72.0	B-SK153	貫通しない穿孔	
第3-128182	玉	ガラス		0.9	0.9	—	0.7	B-SK014	径2mm穿孔	
第3-1461126	玉	ガラス		0.9	0.8	—	0.7	包含層		
第3-1461127	玉	ガラス		1.1	0.9	—	0.8	包含層		

遺物観察表34

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(瓦類)①

神田No.	器種	部位	法尺(単位cm)			遺物名	備考	図版No.
			長さ	幅	厚さ			
第3-26248	東瓦	胴縁	—	—	2.8	B-SD001		17
第3-26249	東瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-26250	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	鳥倉?	17
第3-26251	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-26252	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	鳥倉?	
第3-26253	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-26254	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26255	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD001		
第3-26256	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD001		
第3-26257	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-26258	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004	コビキAの檜通版	
第3-26259	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		17
第3-27060	丸瓦	軒丸	—	—	—	B-SD004		
第3-27061	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	
第3-27062	丸瓦	—	—	17.0	—	B-SD004		
第3-27063	丸瓦	—	—	16.8	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	17
第3-27064	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	夏当の縁合版	
第3-28065	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	
第3-28066	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-28067	丸瓦	—	—	16.8	—	B-SD004		
第3-28068	丸瓦	—	—	14.1	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	
第3-28069	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-29070	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001	本州タイプの吊り縁版	17
第3-29071	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り縁版	
第3-29072	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り縁版	
第3-29073	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り縁版	
第3-29074	丸瓦	—	—	11.0	—	B-SD004	本州タイプの吊り縁版	
第3-29075	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-29076	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001	九州タイプの吊り縁	
第3-29077	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-30078	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-30079	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	
第3-30080	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	本州タイプの吊り縁版	17
第3-30081	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-30082	丸瓦	—	—	—	—	B-SD004	九州タイプの吊り縁	17
第3-30083	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001	本州タイプの吊り縁版	
第3-30084	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001	九州タイプの吊り縁	
第3-30085	丸瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-31086	平瓦	軒平	—	—	3.6	B-SD004	夏当の幅3.6cm	
第3-31087	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001	夏当の幅5.8cm	17
第3-31088	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	夏当の幅4.4cm	17
第3-31089	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001		
第3-31090	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001	夏当の幅5.3cm	
第3-31091	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001	夏当の幅5.9cm	17
第3-31092	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001		
第3-31093	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD001		17
第3-31094	平瓦	軒平	—	—	—	B-SD004	夏当の幅5.6cm	
第3-32095	平瓦	—	—	—	—	B-SD001	釘穴	
第3-32096	平瓦	—	30.1	24.0	—	B-SD004		
第3-32097	平瓦	—	—	24.0	—	B-SD004		
第3-33098	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33099	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33100	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33101	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33102	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33103	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33104	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33105	平瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-33106	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-33107	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34108	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34109	平瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-34110	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34111	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34112	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34113	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34114	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34115	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-34116	平瓦	—	—	—	—	B-SD001		
第3-350117	雁尾瓦	—	—	—	—	B-SD004		
第3-350118	埴	—	—	—	2.6	B-SD001	菊花文のスタンブ	
第3-350119	埴	—	—	—	3.2	B-SD004		
第3-350120	埴	—	—	—	2.1	B-SD001	コビキAの檜通版	
第3-350121	埴	—	—	—	2.6	B-SD001		
第3-350122	埴	—	—	—	3.3	B-SD001		

遺物観察表35

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(瓦類)②

棟号No.	器種	部位	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			長さ	厚さ			
第3-350123	埴	—	—	3.0	B-SD004		
第3-350124	埴	—	—	3.3	B-SD004		
第3-350125	埴	—	—	3.5	B-SD004		
第3-350126	埴	—	—	3.4	B-SD004		
第3-350127	埴	—	—	2.8	B-SD004		
第3-350128	埴	—	—	2.9	B-SD004		

遺物観察表36

府内町跡20次調査B区出土遺物観察表(銅銭)

棟号No.	銭貨名	国・王朝名	初鋳年	直径(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図版No.
第3-220278	開元通寶	唐	815年	1.3	—	—	B-SD003		
第3-220279	咸平通寶	北宋	989年	0.9	25.0	—	B-SD003	磨輪銭?	
第3-220280	景德通寶	北宋	1004年	2.0	24.5	—	B-SD003		
第3-220281	天聖元寶	北宋	1023年	2.0	24.5	篆書	B-SD003	星形孔状	
第3-220282	嘉祐通寶	北宋	1056年	3.1	24.0	真書	B-SD003	291と貼り付き出土	
第3-220283	治平元寶	北宋	1064年	2.8	24.5	真書	B-SD003		
第3-220284	元祐通寶	北宋	1078年	2.1	24.5	行書	B-SD003		
第3-220285	元祐通寶	北宋	1078年	2.0	2.5	行書	B-SD003		
第3-220286	元祐通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	B-SD003		
第3-220287	熙寧元寶	北宋	1068年	2.7	24.5	篆書	B-SD003		
第3-220288	元祐通寶	北宋	1068年	2.1	24.0	行書	B-SD003	星形孔状	
第3-220289	元祐通寶	北宋	1068年	2.2	24.0	篆書	B-SD003		
第3-220290	元祐通寶	北宋	1068年	1.3	24.0	行書	B-SD003		
第3-220291	元祐通寶	北宋	1068年	2.1	23.0	行書	B-SD003	282と貼り付き出土	
第3-220292	元祐通寶	北宋	1068年	2.0	24.0	篆書	B-SD003		
第3-220293	紹聖元寶	北宋	1094年	3.1	24.0	篆書	B-SD003		
第3-220294	紹聖元寶	北宋	1094年	2.5	24.0	篆書	B-SD003		
第3-220295	政和通寶	北宋	1111年	2.0	24.0	真書	B-SD003		
第3-220296	—	—	—	3.8	25.0	—	B-SD003	不明	
第3-220297	—	—	—	1.1	—	—	B-SD003	「元」・「寶」のみ判読	
第3-230847	熙寧元寶	北宋	1068年	2.3	24.0	真書	B-SD004		
第3-470216	聖宗元寶	北宋	995年	3.2	24.0	篆書	B-SD004		
第3-470217	皇宗通寶	北宋	1038年	1.9	24.0	真書	B-SD004		
第3-470218	皇宗通寶	北宋	1038年	2.6	25.0	真書	B-SD004		
第3-470219	皇宗通寶	北宋	1038年	1.8	25.0	真書	B-SD004		
第3-470220	皇宗通寶	北宋	1038年	1.5	23.0	篆書	B-SD004		
第3-470221	熙寧元寶	北宋	1068年	1.3	24.0	真書	B-SD004		
第3-470222	元祐通寶	北宋	1068年	2.8	24.0	行書	B-SD004		
第3-470223	不明	—	—	2.3	24.0	—	B-SD004		
第3-4804	不明	—	—	3.7	24.0	—	B-SK 015	結のため判読不能	
第3-600995	天聖元寶	北宋	1023年	1.7	23.0	—	B-SK 020		
第3-600996	嘉祐通寶	南宋	1208年	2.2	25.0	—	B-SK 020		
第3-600997	—	—	—	2.3	25.0	篆書	B-SK 020		
第3-400998	天聖元寶	北宋	1023年	3.1	24.5	行書	B-SK 020	「政」・「通」・「寶」が判読	
第3-4404	天聖元寶	北宋	1023年	1.8	25.5	篆書	B-SK 020	「聖」・「元」・「寶」が判読	
第3-710018	皇宗通寶	北宋	1038年	—	—	真書	B-SD004	4ヶ所を穿孔	
第3-11108	開元通寶	唐	815年	—	—	—	B-SK 153	「宋」・「通」が判読	
第3-132081	熙寧元寶	北宋	1068年	1.1	15.0	真書	B-SK 009	半分欠ける	
第3-132082	聖宗元寶	北宋	995年	2.1	25.0	真書	B-SK 009	作為的に周辺を削る	
第3-132083	政和通寶	北宋	1111年	3.3	25.0	篆書	B-SK 009		
第3-139081	元祐通寶	北宋	1078年	2.0	2.5	行書	B-SK 010		
第3-139082	天聖通寶	北宋	1107年	2.6	24.0	—	B-SK 010		
第3-139083	不明	—	—	—	24.0	—	B-SK 010		
第3-160028	嘉祐通寶	北宋	1056年	1.9	25.0	真書	B-SK 042		
第3-160029	—	—	—	1.1	25.0	行書	B-SK 090		
第3-160030	開元通寶	唐	815年	1.2	24.0	—	K-42	「元」・「通」・「寶」が判読	
第3-160031	聖宗元寶?	北宋	995年	2.5	25.0	篆書	L-45	160と貼りつく	
第3-160032	景祐元寶	北宋	1004年	2.9	24.0	真書	K-43		
第3-160033	祥符元寶	北宋	1009年	3.1	25.0	—	—	包含刷	
第3-160034	祥符通寶	北宋	1009年	0.9	18.0	—	—	包含刷	
第3-160035	天祐元寶	北宋	1017年	2.4	24.5	真書	L-44		
第3-160036	皇宗通寶	北宋	1038年	2.4	25.0	真書	K-42		
第3-160037	聖和元寶	北宋	1054年	3.5	24.0	真書	L-43		
第3-160038	元祐通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	K-43		
第3-160039	元祐通寶	北宋	1078年	2.5	24.0	篆書	K-42		
第3-160040	元祐通寶	北宋	1068年	3.4	25.0	行書	包含刷	150と貼りつき出土	
第3-160041	元祐通寶	北宋	1068年	3.1	25.0	行書	包含刷	星形孔	
第3-160042	元祐通寶	北宋	1068年	2.0	24.0	篆書	K-42		
第3-160043	元祐通寶	北宋	1068年	2.1	24.0	行書	K-42		
第3-160044	明	—	1408年	2.2	25.0	—	K-43		
第3-160045	洪武通寶	明	1368年	2.3	23.0	—	K-43		

遺物観察表37

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)①

採掘No.	器種	生産地	法尺(単位cm)		遺構名	備考	図版No.	
			口径	底径				
第1-68001	青花	鳳	京焼窯室	(19.1)	9.0	3.0	C-S01	F群
第1-68002	青花	鳳	京焼窯室	(18.4)	-	(2.2)	C-S01	F群(つば面)
第1-68003	青花	鳳	京焼窯室	(16.8)	8.6	2.1	C-S01	
第1-68004	青花	鳳	京焼窯室	(11.8)	6.8	2.9	C-S01	B群
第1-68005	青花	鳳	京焼窯室	-	-	(1.7)	C-S01	B群
第1-68006	青花	鳳	京焼窯室	(10.2)	5.2	2.6	C-S01	
第1-68007	青花	鳳	京焼窯室	(11.6)	3.2	3.3	C-S01	C群(非功底)
第1-68008	青花	鳳	京焼窯室	(10.0)	2.6	2.7	C-S01	C群(非功底)
第1-68009	青花	鳳	京焼窯室	-	9.8	(1.8)	C-S01	
第1-68010	青花	鳳	京焼窯室	(10.1)	6.0	2.3	C-S01	
第1-68011	青花	鳳	京焼窯室	-	7.2	(1.8)	C-S01	「長命富貴」
第1-68012	青花	鳳	京焼窯室	-	6.0	(2.0)	C-S01	「天下太平」
第1-68013	青花	鳳	京焼窯室	-	6.0	(1.8)	C-S01	
第1-68014	青花	鳳	京焼窯室	-	7.8	(1.5)	C-S01	
第1-78015	青花	碗	京焼窯室	(11.2)	-	(1.2)	C-S01	
第1-78016	青花	碗	京焼窯室	(13.0)	-	(6.0)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78017	青花	碗	京焼窯室	-	4.8	(4.6)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78018	青花	碗	京焼窯室	-	5.5	(3.6)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78019	青花	碗	京焼窯室	-	4.3	(1.7)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78020	青花	碗	京焼窯室	-	5.0	(1.9)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78021	青花	碗	京焼窯室	-	4.6	(2.0)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78022	青花	碗	京焼窯室	-	4.1	(4.9)	C-S01	E群(陶頭心)
第1-78023	青花	碗	京焼窯室	-	3.7	(1.4)	C-S01	「寿」
第1-78024	青花	碗	京焼窯室	-	-	(3.6)	C-S01	
第1-78025	青花	小坏	京焼窯室	-	2.9	(1.5)	C-S01	
第1-78026	青花	鳳	徳州窯	-	3.9	(2.0)	C-S01	非功底
第1-78027	青花	鳳	徳州窯	-	-	(2.7)	C-S01	
第1-78028	青花	蓋	徳州窯	(15.3)	-	(3.1)	C-S01	
第1-78029	青花	碗	徳州窯	(17.4)	-	(6.1)	C-S01	
第1-78030	青花	碗	徳州窯	-	5.8	(2.1)	C-S01	
第1-78031	青花	碗	徳州窯	-	-	(1.5)	C-S01	
第1-78032	青磁	鳳	龍泉窯	(12.2)	7.8	3.1	C-S01	
第1-78033	青磁	鳳	龍泉窯	(14.4)	-	(4.8)	C-S01	
第1-88034	青磁	碗	龍泉窯	-	6.3	(2.1)	C-S01	
第1-88035	青磁	碗	龍泉窯	-	6.0	(2.1)	C-S01	
第1-88036	青磁	碗Or瓶	龍泉窯	-	-	(5.5)	C-S01	
第1-88037	青磁	碗台	龍泉窯	-	4.7	(2.6)	C-S01	青磁人物像燗台
第1-88038	青磁	瓶	高橋	-	-	(3.8)	C-S01	
第1-88039	青磁	碗	徳州窯	-	10.8	(2.2)	C-S01	
第1-88040	白磁	鳳	京焼窯室	(19.8)	-	(2.3)	C-S01	
第1-88041	白磁	鳳	京焼窯室	(15.4)	-	(2.8)	C-S01	
第1-88042	白磁	甕罎	中国	-	-	(2.9)	C-S01	
第1-88043	白磁	鳳	中国南方	-	6.0	(1.8)	C-S01	
第1-88044	白磁	鳳	中国	-	7.8	(2.2)	C-S01	
第1-88045	白磁	碗	京焼窯室	-	7.8	(1.6)	C-S01	
第1-88046	白磁	碗	京焼窯室	-	5.0	(2.2)	C-S01	
第1-88047	白磁	碗	京焼窯室	-	-	(4.0)	C-S01	
第1-88048	白磁	碗	中国	-	8.6	(2.5)	C-S01	
第1-88049	白磁	小坏	京焼窯室	-	3.0	(1.5)	C-S01	
第1-88050	白磁	小坏	中国南方	(6.3)	2.8	2.9	C-S01	
第1-98051	紫南三彩	蓋	中国	-	-	(5.5)	C-S01	蓋
第1-98052	紫南三彩	水注台座	中国	-	8.8	(3.1)	C-S01	
第1-98053	紫南三彩	中国	-	-	-	(2.5)	C-S01	
第1-98054	青磁輪	鳳	中国	(7.0)	4.2	1.1	C-S01	
第1-98055	青磁輪	鳳	中国	(6.1)	-	(1.2)	C-S01	包合刷一括合含む
第1-98056	陶磁器	中国	-	-	-	(4.2)	C-S01	
第1-98057	陶器	碗	-	-	5.0	(3.1)	C-S01	
第1-98058	陶器	甕	中国	-	-	(6.1)	C-S01	
第1-98059	陶器	天目	中国	(12.0)	-	(5.6)	C-S01	
第1-98060	陶器	天目	瀬戸美濃	(8.0)	-	(3.1)	C-S01	
第1-98061	陶器	天目	瀬戸美濃	-	4.2	(1.3)	C-S01	
第1-98062	陶器	折縁皿	瀬戸美濃	10.7	5.7	2.0	C-S01	
第1-98063	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.1)	6.6	2.1	C-S01	
第1-98064	陶器	皿	瀬戸美濃	(10.4)	5.3	2.2	C-S01	折縁皿
第1-98065	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(1.9)	C-S01	
第1-98066	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(2.3)	C-S01	
第1-98067	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(1.2)	C-S01	
第1-98068	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(2.1)	C-S01	
第1-98069	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(1.5)	C-S01	
第1-98070	陶器	碗	軟質施釉陶器	-	-	(3.2)	C-S01	
第1-98071	陶器	水増登	備前	(18.7)	-	(1.7)	C-S01	
第1-98072	陶器	壺	備前	(14.2)	-	(17.0)	C-S01	
第1-98073	陶器	徳利	備前	(4.6)	-	(4.2)	C-S01	
第1-98074	陶器	徳利	備前	-	-	(11.7)	C-S01	
第1-108075	陶器	徳利	備前	-	-	(11.3)	C-S01	

遺物観察表38

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)②

神田No.	器種		生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.	
				口径	底径				高さ
第1-1028076	陶器	鉢	甕前	(15.0)	—	4.5	C-SD01	22	
第1-1028077	陶器	鉢	甕前	(13.7)	—	(4.8)	C-SD01	22	
第1-1028078	陶器	楕鉢	甕前	(34.1)	(17.8)	13.5	C-SD01	22	
第1-1028079	陶器	楕鉢	甕前	31.8	12.8	12.9	C-SD01	22	
第1-1128080	陶器	楕鉢	甕前	29.4	12.0	14.2	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1128081	陶器	楕鉢	甕前	(32.8)	—	(8.3)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1128082	陶器	楕鉢	甕前	(32.0)	—	(8.7)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1128083	陶器	楕鉢	甕前	(31.8)	—	(5.0)	C-SD01	近世1層	
第1-1228084	陶器	楕鉢	甕前	(31.1)	—	(8.5)	C-SD01	近世1層	
第1-1228085	陶器	楕鉢	甕前	(30.9)	—	(6.2)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1228086	陶器	楕鉢	甕前	(28.6)	—	(8.0)	C-SD01	近世1層	
第1-1228087	陶器	楕鉢	甕前	(26.4)	—	(7.9)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1228088	陶器	楕鉢	甕前	(24.6)	—	(11.4)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1328089	陶器	楕鉢	甕前	(24.0)	—	(8.1)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1328090	陶器	楕鉢	甕前	(11.4)	—	(3.0)	C-SD01	中世6層	
第1-1328091	陶器	楕鉢	甕前	—	—	(4.7)	C-SD01	中世3層	
第1-1328092	陶器	楕鉢	甕前	—	(12.4)	(5.2)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1328093	陶器	楕鉢	甕前	—	(12.8)	(7.0)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1328094	陶器	楕鉢	甕前	—	(14.8)	(5.0)	C-SD01	近世1層(ナナメスリス)	
第1-1328095	陶器	楕鉢	甕前	—	—	(4.2)	C-SD01	近世1層	
第1-1328096	陶器	楕鉢	甕前	—	—	(5.3)	C-SD01	近世1層	
第1-1328097	陶器	楕鉢	甕前	—	(10.5)	(8.9)	C-SD01	近世1層?	
第1-1428098	陶器	甕	甕前	—	—	3.5	(7.6)	C-SD01	
第1-1428099	陶器	甕	甕前	(9.6)	—	(9.0)	C-SD01	22	
第1-1428100	陶器	大甕	甕前	—	—	(7.8)	C-SD01		
第1-1428101	陶器	大甕	甕前	—	—	(8.0)	C-SD01		
第1-1428102	陶器	大甕	甕前	—	—	(7.7)	C-SD01		
第1-1428103	陶器	大甕	甕前	—	(32.7)	(9.0)	C-SD01		
第1-1428104	京橋系土師器	甕	在池	13.0	3.8	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428105	京橋系土師器	甕	在池	12.8	4.2	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428106	京橋系土師器	甕	在池	12.8	5.0	2.4	C-SD01		
第1-1428107	京橋系土師器	甕	在池	12.7	3.8	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428108	京橋系土師器	甕	在池	12.6	3.8	3.0	C-SD01		
第1-1428109	京橋系土師器	甕	在池	12.6	7.0	3.0	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428110	京橋系土師器	甕	在池	12.4	3.9	3.0	C-SD01	灯明皿	
第1-1428111	京橋系土師器	甕	在池	12.4	5.5	2.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428112	京橋系土師器	甕	在池	12.3	5.0	2.5	C-SD01		
第1-1428113	京橋系土師器	甕	在池	12.2	5.8	3.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428114	京橋系土師器	甕	在池	12.2	6.0	2.8	C-SD01		
第1-1428115	京橋系土師器	甕	在池	12.1	5.4	2.9	C-SD01	灯明皿・スス付着?	
第1-1428116	京橋系土師器	甕	在池	12.0	5.6	2.7	C-SD01	灯明皿? スス付着?	
第1-1428117	京橋系土師器	甕	在池	12.0	5.2	2.5	C-SD01		
第1-1428118	京橋系土師器	甕	在池	12.0	5.3	2.5	C-SD01	スス付着	
第1-1428119	京橋系土師器	甕	在池	11.9	6.0	2.8	C-SD01		
第1-1428120	京橋系土師器	甕	在池	11.8	5.8	2.9	C-SD01	砂付	
第1-1428121	京橋系土師器	甕	在池	11.8	4.0	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428122	京橋系土師器	甕	在池	11.7	4.0	2.8	C-SD01		
第1-1428123	京橋系土師器	甕	在池	11.7	6.0	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428124	京橋系土師器	甕	在池	11.7	4.5	2.5	C-SD01		
第1-1428125	京橋系土師器	甕	在池	11.6	4.0	2.3	C-SD01		
第1-1428126	京橋系土師器	甕	在池	11.4	5.2	2.5	C-SD01		
第1-1428127	京橋系土師器	甕	在池	10.5	4.0	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428128	京橋系土師器	甕	在池	10.3	3.8	2.3	C-SD01		
第1-1428129	京橋系土師器	甕	在池	10.0	3.6	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428130	京橋系土師器	甕	在池	9.6	—	(3.0)	C-SD01		
第1-1428131	京橋系土師器	甕	在池	9.3	3.0	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428132	京橋系土師器	甕	在池	9.2	—	2.2	C-SD01	灯明皿・砂、スス付着	
第1-1428133	京橋系土師器	甕	在池	9.2	—	2.2	C-SD01	底面: Δシロ麻か?	
第1-1428134	京橋系土師器	甕	在池	9.2	4.4	2.0	C-SD01	内面付着物着、ススか?	
第1-1428135	京橋系土師器	甕	在池	8.1	—	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428136	京橋系土師器	甕	在池	8.1	2.2	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428137	京橋系土師器	甕	在池	8.1	2.5	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428138	京橋系土師器	甕	在池	9.0	3.0	2.4	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428139	京橋系土師器	甕	在池	9.0	3.0	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428140	京橋系土師器	甕	在池	8.9	3.0	2.2	C-SD01		
第1-1428141	京橋系土師器	甕	在池	8.9	—	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428142	京橋系土師器	甕	在池	8.9	3.8	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428143	京橋系土師器	甕	在池	8.8	3.1	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428144	京橋系土師器	甕	在池	8.8	3.2	2.2	C-SD01	内面に付着物着	
第1-1428145	京橋系土師器	甕	在池	8.8	—	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428146	京橋系土師器	甕	在池	8.8	2.8	2.1	C-SD01	内面: スス付着?	
第1-1428147	京橋系土師器	甕	在池	8.8	2.7	1.9	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428148	京橋系土師器	甕	在池	8.7	—	2.7	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428149	京橋系土師器	甕	在池	8.7	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着	
第1-1428150	京橋系土師器	甕	在池	8.7	3.0	2.3	C-SD01		

遺物観察表39

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)③

検出No.	器種	生産地	法尺(単位cm)		遺物名	備考	図版No.
			口径	高さ			
第4-1508151	灰部系土師器	風	8.7	3.3	2.3	C-SD01	
第4-1508152	灰部系土師器	風	8.6	3.1	2.8	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508153	灰部系土師器	風	8.6	—	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着・内面布目痕か?
第4-1508154	灰部系土師器	風	8.6	—	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508155	灰部系土師器	風	8.6	—	2.3	C-SD01	
第4-1508156	灰部系土師器	風	8.6	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508157	灰部系土師器	風	8.6	—	2.1	C-SD01	
第4-1508158	灰部系土師器	風	8.6	—	2.1	C-SD01	
第4-1508159	灰部系土師器	風	8.6	—	2.0	C-SD01	
第4-1508160	灰部系土師器	風	8.5	2.3	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508161	灰部系土師器	風	8.5	2.0	2.1	C-SD01	外面付着物有
第4-1508162	灰部系土師器	風	8.4	—	2.5	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508163	灰部系土師器	風	8.4	2.0	2.3	C-SD01	
第4-1508164	灰部系土師器	風	8.4	2.0	2.3	C-SD01	
第4-1508165	灰部系土師器	風	8.4	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508166	灰部系土師器	風	8.4	—	2.2	C-SD01	底面:ムシ口痕か?
第4-1508167	灰部系土師器	風	8.3	—	2.1	C-SD01	
第4-1508168	灰部系土師器	風	8.3	2.5	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508169	灰部系土師器	風	8.3	3.8	2.3	C-SD01	スス付着
第4-1508170	灰部系土師器	風	8.3	3.8	2.1	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508171	灰部系土師器	風	8.2	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508172	灰部系土師器	風	8.2	3.8	2.0	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508173	灰部系土師器	風	8.0	—	2.3	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508174	灰部系土師器	風	8.0	—	2.1	C-SD01	
第4-1508175	灰部系土師器	風	7.9	—	2.2	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1508176	灰部系土師器	風	7.5	—	2.1	C-SD01	内面付着物有
第4-1508177	灰部系土師器	風	11.8	6.1	2.5	C-SD01	折衷様式・灯明皿・内面:スス付着
第4-1508178	灰部系土師器	風	11.8	7.8	2.5	C-SD01	折衷様式・灯明皿・内面ススカ
第4-1508179	灰部系土師器	風	11.8	6.7	3.2	C-SD01	折衷様式
第4-1808180	灰部系土師器	風	11.8	6.8	2.8	C-SD01	折衷様式・スス付着
第4-1808181	灰部系土師器	風	11.8	6.8	2.6	C-SD01	折衷様式・スス付着
第4-1808182	灰部系土師器	風	11.8	7.1	2.6	C-SD01	折衷様式
第4-1808183	灰部系土師器	風	11.1	6.8	2.1	C-SD01	折衷様式
第4-1808184	灰部系土師器	風	11.1	6.6	3.8	C-SD01	折衷様式・スス付着
第4-1808185	灰部系土師器	風	7.7	1.8	3.3	C-SD01	折衷様式・スス付着
第4-1808186	灰部系土師器	風	7.7	1.8	3.3	C-SD01	スス付着
第4-1808187	灰部系土師器	塚	14.1	6.9	4.3	C-SD01	
第4-1808188	灰部系土師器	塚	12.0	4.0	3.8	C-SD01	
第4-1808189	灰部系土師器	塚	11.9	5.0	3.7	C-SD01	
第4-1808190	灰部系土師器	塚	11.2	5.8	3.7	C-SD01	
第4-1808191	灰部系土師器	塚	11.2	5.0	3.3	C-SD01	底面:胴体痕?
第4-1808192	灰部系土師器	塚	11.0	4.2	3.8	C-SD01	
第4-1808193	灰部系土師器	塚	11.0	4.0	3.8	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1808194	灰部系土師器	塚	11.0	6.6	3.6	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1808195	灰部系土師器	塚	11.0	5.0	3.2	C-SD01	灯明皿・スス付着
第4-1808196	灰部系土師器	塚	10.9	5.7	4.0	C-SD01	スス付着
第4-1808197	灰部系土師器	塚	10.1	4.1	3.5	C-SD01	
第4-1808198	灰部系土師器	塚	10.2	4.1	3.5	C-SD01	
第4-1808199	在来系土師器	風	11.1	5.1	2.6	C-SD01	クロロ目・灯明皿
第4-1808200	在来系土師器	風	10.8	6.1	4.7	C-SD01	クロロ目・灯明皿
第4-1808201	在来系土師器	風	9.9	4.3	3.0	C-SD01	クロロ目
第4-1808202	在来系土師器	風	8.5	5.3	2.2	C-SD01	灯明皿
第4-1808203	在来系土師器	風	8.4	5.8	2.1	C-SD01	灯明皿
第4-1808204	在来系土師器	風	8.3	4.1	2.1	C-SD01	クロロ目・灯明皿
第4-1708205	在来系土師器	風	8.1	5.9	2.0	C-SD01	
第4-1708206	在来系土師器	風	7.7	5.1	2.0	C-SD01	
第4-1708207	在来系土師器	小皿	4.9	3.1	1.5	C-SD01	
第4-1708208	瓦質土器	?	10.7	4.3	4.2	C-SD01	
第4-1708209	瓦質土器	?	—	4.5	4.1	C-SD01	
第4-1708210	瓦質土器	?	—	4.3	3.5	C-SD01	
第4-1708211	瓦質土器	?	—	—	4.2	C-SD01	
第4-1708212	瓦質土器	香炉	7.9	6.8	4.2	C-SD01	
第4-1708213	瓦質土器	香炉	—	—	3.8	C-SD01	もしくは火鉢
第4-1708214	瓦質土器	鉢か皿	—	—	2.1	C-SD01	穿孔有り
第4-1708215	瓦質土器	鉢	12.1	12.3	14.7	C-SD01	S K 10-117・130と接合
第4-1708216	瓦質土器	鉢	—	—	9.3	C-SD01	S D 01上唇と接合
第4-1708217	瓦質土器	鉢	—	—	10.5	C-SD01	
第4-1708218	瓦質土器	筒鉢	28.8	—	8.1	C-SD01	S K 10-116・191と接合
第4-1808219	瓦質土器	火鉢	13.1	—	11.2	C-SD01	
第4-1808220	瓦質土器	火鉢	4.7	—	10.7	C-SD01	砂付
第4-1808221	瓦質土器	火鉢	—	—	6.6	C-SD01	
第4-1808222	瓦質土器	火鉢	—	—	6.3	C-SD01	
第4-1808223	瓦質土器	火鉢	—	—	3.8	C-SD01	
第4-1808224	瓦質土器	火鉢	—	—	5.7	C-SD01	
第4-1808225	瓦質土器	火鉢	—	—	5.5	C-SD01	もしくは鉢
第4-1808226	瓦質土器	火鉢	—	—	7.3	C-SD01	

遺物観察表40

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)④

緯度No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第1-18図226	瓦質土器	火鉢脚	-	-	5.7	C-SD01	23
第1-18図227	瓦質土器	燵	-	-	5.3	C-SD01	23
第1-18図228	瓦質土器	燵	-	-	7.0	C-SD01	
第1-18図229	瓦質土器	燵	-	-	6.8	C-SD01	23
第1-18図230	瓦質土器	燵	-	-	6.2	C-SD01	23
第1-18図231	瓦質土器	燵	-	-	1.6	C-SD01	23
第1-29図001	竹編	甕	飯泉堂	(11.8)	5.0 3.0	C-SD10	
第1-29図002	陶器	小甕	甕	-	4.0 (2.2)	C-SD10	25
第1-29図003	陶器	燗鉢	甕	(28.2)	- (8.1)	C-SD10	25
第1-29図004	陶器	燗鉢	甕	-	(8.1) (4.9)	C-SD10	25
第1-29図005	陶器	燗鉢	甕	-	(8.5) (4.9)	C-SD10	25
第1-29図006	陶器	燗鉢	甕	-	- (4.1)	C-SD10	
第1-29図007	京系土師器	甕	在り	14.0	- (2.3)	C-SD10	灯明皿・スス付着
第1-29図008	京系土師器	甕	在り	13.2	- (2.2)	C-SD10	
第1-29図009	京系土師器	甕	在り	13.2	- (2.2)	C-SD10	
第1-29図010	京系土師器	甕	在り	12.6	5.8 2.8	C-SD10	灯明皿?・スス付着
第1-29図011	京系土師器	甕	在り	12.1	6.0 2.3	C-SD10	灯明皿・スス付着
第1-29図012	京系土師器	甕	在り	10.8	4.2 2.2	C-SD10	
第1-29図013	京系土師器	甕	在り	10.2	3.6 2.2	C-SD10	
第1-29図014	京系土師器	甕	在り	8.2	- (2.2)	C-SD10	灯明皿・スス付着
第1-29図015	京系土師器	甕	在り	11.8	6.6 2.6	C-SD10	折衷様式・スス付着
第1-30図016	在り土師器	甕	在り	8.1	6.3 1.3	C-SD10	幾々土師器
第1-30図017	在り土師器	甕	在り	8.4	4.3 2.0	C-SD10	灯明皿
第1-30図018	在り土師器	甕	在り	8.2	- (1.9)	C-SD10	
第1-30図019	在り土師器	甕	在り	12.5	6.8 2.5	C-SD10	ロクロ目
第1-30図020	在り土師器	甕	在り	12.5	6.2 2.4	C-SD10	ロクロ目・灯明皿
第1-30図021	在り土師器	甕	在り	11.8	6.3 2.5	C-SD10	ロクロ目
第1-30図022	在り土師器	甕	在り	11.6	6.6 2.6	C-SD10	ロクロ目
第1-30図023	在り土師器	甕	在り	11.2	3.5 2.2	C-SD10	ロクロ目
第1-30図024	在り土師器	甕	在り	11.2	- (2.4)	C-SD10	ロクロ目・灯明皿
第1-30図025	在り土師器	甕	在り	10.0	6.5 2.7	C-SD10	ロクロ目
第1-30図026	在り土師器	甕	在り	12.0	6.3 2.1	C-SD10	ロクロ目・灯明皿
第1-30図027	在り土師器	甕	在り	12.0	- (2.5)	C-SD10	ロクロ目・灯明皿
第1-30図028	在り土師器	小皿	在り	6.5	4.0 2.2	C-SD10	金雲母多く含む
第1-30図029	在り土師器	耳皿	在り	5.3	3.5 1.4	C-SD10	
第1-30図030	赤灰瓦質土器	不明	在り	-	- (9.0)	C-SD10	
第1-30図031	瓦質土器	火鉢	在り	-	- (6.4)	C-SD10	
第1-30図032	瓦質土器	燗鉢	在り	-	- (4.2)	C-SD10	取手付屬・SD01上層・中下層
第1-33図001	竹花	甕	京徳酒業	-	(7.0) (0.8)	C-SD02	
第1-33図002	陶器	燗鉢	瀬戸大甕	(10.0)	- (3.9)	C-SD02	
第1-33図003	陶器	燗鉢	甕	(3.0)	- (5.6)	C-SD02	26
第1-33図004	陶器	燗鉢	甕	(16.6)	- (4.2)	C-SD02	26
第1-33図005	陶器	燗鉢	甕	-	- (5.8)	C-SD02	26
第1-33図006	陶器	燗鉢	甕	-	- (6.4)	C-SD02	近世1層(ナナメスリ)
第1-33図007	京系土師器	甕	在り	12.8	6.0 2.7	C-SD02	
第1-33図008	京系土師器	甕	在り	12.0	- (2.1)	C-SD02	粘土の織目僅有
第1-33図009	京系土師器	甕	在り	11.8	4.7 2.9	C-SD02	26
第1-33図010	京系土師器	甕	在り	9.0	3.9 1.7	C-SD02	
第1-33図011	京系土師器	甕	在り	8.9	3.0 2.1	C-SD02	スス付着
第1-33図012	京系土師器	甕	在り	-	- (3.0)	C-SD02	
第1-33図013	京系土師器	耳皿?	在り	6.8	- (2.0)	C-SD02	
第1-33図014	土師質土器	燗鉢	在り	-	- (6.5 5.2)	C-SD02	26
第1-33図015	瓦質土器	燗鉢	在り	-	- (2.5)	C-SD02	燗鉢割破
第1-33図016	瓦質土器	火鉢	在り	-	- (6.5)	C-SD02	26
第1-33図017	瓦質土器	火鉢	在り	-	- (6.4)	C-SD02	26
第1-33図018	瓦質土器	火鉢脚	在り	-	- (7.0)	C-SD02	26
第1-34図025	陶器	燗鉢	甕	(10.5)	(5.3)	C-SD12	近世1層(ナナメスリ)
第1-36図001	陶器	燗鉢	甕	(5.4)	- (5.4)	C-SD04	27
第1-36図002	陶器	燗鉢	甕	-	- (7.1)	C-SD04	27
第1-36図003	在り土師器	甕	在り	7.3	3.9 2.0	C-SD04	ロクロ目
第1-36図004	瓦質土器	火鉢	在り	-	- (3.5)	C-SD04	
第1-36図005	瓦質土器	火鉢	在り	-	- (1.9)	C-SD04	
第1-38図001	竹編	甕	飯泉堂	-	(6.8) (1.7)	C-SD05	
第1-38図002	竹編	甕	飯泉堂	-	- (3.8)	C-SD05	
第1-38図003	陶器	燗鉢	甕	-	- (13.2) (4.7)	C-SD05	
第1-38図004	陶器	燗鉢	甕	-	- (2.8)	C-SD05	
第1-38図005	陶器	燗鉢	甕	-	- (4.2)	C-SD05	
第1-38図006	在り土師器	甕	在り	-	- (1.7)	C-SD05	ロクロ目
第1-38図007	在り土師器	甕	在り	-	- (1.4)	C-SD05	ロクロ目
第1-41図001	陶器	燗鉢	甕	-	- (8.5) (8.8)	C-SD11	底部へタ泥号
第1-41図002	陶器	燗鉢	甕	-	- (5.8)	C-SD11	
第1-41図003	陶器	燗鉢	甕	(31.2)	- (7.3)	C-SD11	
第1-41図004	陶器	燗鉢	甕	-	- (10.0) (4.9)	C-SD11	
第1-41図005	陶器	燗鉢	甕	-	- (9.2)	C-SD11	近世1層(ナナメスリ)
第1-41図006	陶器	燗鉢	甕	-	- (6.0)	C-SD11	近世1層(ナナメスリ)

遺物観察表41

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)⑤

探洞No.	器種	生産地	法量(単位cm)		遺物名	備考	図版No.	
			口径	底径				
第1-410007	陶器	播磨	-	-	(8.3)	C-SD11		
第1-410008	京都系土師器	在産	13.0	-	(2.2)	C-SD11		
第1-410009	京都系土師器	在産	11.1	-	(2.5)	C-SD11	灯明皿・スス付着	
第1-410010	京都系土師器	在産	9.1	4.0	2.1	C-SD11	灯明皿・スス付着	
第1-410011	瓦質土器	火鉢	在産	-	4.7	C-SD11		
第1-410012	瓦質土器	火鉢	在産	-	3.2	C-SD11		
第1-410013	瓦質土器	火鉢脚	在産	-	6.2	C-SD11		
第1-430001	五彩	陶	景徳窯	-	(2.3)	C-SK01		
第1-430002	苧花	陶	景徳窯	(11.1)	-	(4.0)	C-SK01	
第1-430003	京都系土師器	皿	在産	-	(2.6)	C-SK01	金箔貼り付け	
第1-430004	京都系土師器	皿	在産	12.5	5.0	2.1	C-SK01	
第1-430005	京都系土師器	皿	在産	10.5	4.1	2.1	C-SK01	灯明皿
第1-430006	京都系土師器	皿	在産	10.5	-	(2.1)	C-SK01	
第1-430007	京都系土師器	皿	在産	8.1	3.4	2.0	C-SK01	
第1-430008	在産系土師器	皿	在産	11.7	6.1	2.1	C-SK01	ロクロ目
第1-430009	土師器土器	埴師京の器	在産	5.1	3.0	1.7	C-SK01	
第1-450001	陶器	舟地利	朝鮮土師	-	-	(3.0)	C-SK05	
第1-450002	瓦質土器	羽釜	在産	-	-	6.3	C-SK05	
第1-480001	白磁	蓋	景徳窯	(4.4)	-	(1.2)	C-SK08	
第1-480002	褐釉陶器?	?	中国	-	-	(3.8)	C-SK08	
第1-480003	京都系土師器	皿	在産	8.7	-	2.1	C-SK08	灯明皿・スス付着
第1-500001	苧花	陶	博州窯	(13.4)	(3.6)	3.5	C-SK10	
第1-500002	苧花	豆	景徳窯	-	-	(10.7)	C-SK10	
第1-500003	苧花	陶	景徳窯	-	-	(2.6)	C-SK10	
第1-500004	苧花	陶	景徳窯	-	(4.8)	(2.7)	C-SK10	
第1-500005	苧花	盤	景徳窯	-	-	(8.1)	C-SK10	F群
第1-500006	苧花	小皿	景徳窯	-	-	(2.2)	C-SK10	
第1-500007	白磁	陶	朝鮮土師	-	(6.3)	(2.0)	C-SK10	
第1-500008	青磁	皿	中国南方	-	4.7	(1.6)	C-SK10	
第1-500009	青磁	陶	龍泉窯	-	4.3	(1.6)	C-SK10	
第1-500010	淮南三彩	陶	中国	-	-	(3.1)	C-SK10	
第1-500011	淮南三彩	陶	中国	-	-	(1.6)	C-SK10	
第1-500012	青磁	皿	中国	-	-	(6.0)	C-SK10	
第1-500013	陶器	折鉢皿	瀬戸入瀬	10.8	5.8	-	C-SK10	
第1-500014	陶器	天目	瀬戸入瀬	(10.4)	-	(4.7)	C-SK10	
第1-500015	陶器	花生	瀬戸	(12.3)	(6.8)	-	C-SK10	
第1-500016	陶器	小豆	瀬戸	-	(4.2)	(3.6)	C-SK10	27
第1-500017	陶器	一重袋	瀬戸	(5.1)	4.3	6.3	C-SK10	
第1-500018	陶器	鉢	瀬戸	(15.6)	-	4.3	C-SK10	27
第1-500019	陶器	鉢	瀬戸	(11.5)	-	(7.0)	C-SK10	
第1-500020	陶器	播鉢	瀬戸	(92.0)	-	(8.5)	C-SK10	遊世1期(ナナメスリ)
第1-500021	陶器	播鉢	瀬戸	(31.8)	-	(7.1)	C-SK10	遊世1期(ナナメスリ)
第1-500022	陶器	播鉢	瀬戸	(29.6)	-	(7.3)	C-SK10	遊世1期(ナナメスリ)
第1-500023	陶器	播鉢	瀬戸	(28.8)	-	(6.3)	C-SK10	
第1-500024	陶器	播鉢	瀬戸	-	-	8.7	C-SK10	
第1-500025	陶器	水戻罌	瀬戸	(16.0)	-	(8.0)	C-SK10	
第1-500026	陶器	大甕	瀬戸	-	-	(10.8)	C-SK10	27
第1-500027	陶器	大甕	瀬戸	-	-	(7.1)	C-SK10	
第1-500028	京都系土師器	皿	在産	12.3	5.2	2.5	C-SK10	
第1-500029	京都系土師器	皿	在産	12.2	5.6	2.7	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500030	京都系土師器	皿	在産	12.0	-	2.8	C-SK10	
第1-500031	京都系土師器	皿	在産	12.0	5.0	2.5	C-SK10	灯明皿・内面:付着物存。ススカ?
第1-500032	京都系土師器	皿	在産	11.8	5.2	2.5	C-SK10	灯明皿
第1-500033	京都系土師器	皿	在産	11.8	5.0	2.2	C-SK10	スス付着
第1-500034	京都系土師器	皿	在産	11.5	4.1	3.0	C-SK10	灯明皿
第1-500035	京都系土師器	皿	在産	9.6	-	2.4	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500036	京都系土師器	皿	在産	8.9	-	2.1	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500037	京都系土師器	皿	在産	8.8	3.6	1.8	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500038	京都系土師器	皿	在産	8.6	-	2.0	C-SK10	
第1-500039	京都系土師器	皿	在産	8.5	-	2.2	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500040	京都系土師器	皿	在産	8.4	3.0	1.8	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500041	京都系土師器	皿	在産	8.1	2.8	2.2	C-SK10	
第1-500042	京都系土師器	皿	在産	8.2	-	2.2	C-SK10	灯明皿・スス付着
第1-500043	京都系土師器	坪	在産	11.1	6.0	3.5	C-SK10	
第1-500044	京都系土師器	坪	在産	11.1	4.8	3.8	C-SK10	
第1-500045	京都系土師器	坪	在産	11.3	5.1	3.5	C-SK10	底面:ムシロ痕?
第1-500046	京都系土師器	坪	在産	11.2	4.6	3.9	C-SK10	スス付着?
第1-500047	京都系土師器	坪	在産	11.0	5.0	3.6	C-SK10	灯明皿
第1-500048	京都系土師器	坪	在産	10.2	6.2	3.1	C-SK10	
第1-500049	土師器土器	埴師京の器	在産	4.0	-	8.1	C-SK10	SD01上層・K37・下層土と接合
第1-500050	土師器土器	埴師京の器	在産	4.1	-	8.1	C-SK10	
第1-500051	瓦質土器	鉢	在産	-	-	16.0	C-SK10	SD01上層ベルト・SD11・SK10
第1-500052	瓦質土器	鉢	在産	-	-	9.0	C-SK10	
第1-500053	瓦質土器	鉢	在産	-	-	5.6	C-SK10	
第1-500054	瓦質土器	播鉢	防長	33.6	-	8.7	C-SK10	周防形播鉢

遺物観察表42

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(土器・陶磁器)⑥

採掘No.	器種	生産地	法尺(単位cm)		遺構名	備考	図版No.
			口径	底径			
第4-5308955	瓦質土器	薩摩	助長	30.3	10.5	C-SK10	SD11上層・SK10と接合
第4-5308956	瓦質土器	薩摩	助長	—	4.5	C-SK10	西防衛堀跡
第4-5308957	瓦質土器	火鉢	在池	—	6.5	C-SK10	
第4-5308958	瓦質土器	火鉢	在池	—	3.7	C-SK10	
第4-5308959	瓦質土器	火鉢	在池	—	5.4	C-SK10	
第4-5308960	瓦質土器	風炉	在池	—	7.1	C-SK10	
第4-5508901	五彩	陶	中国	—	(2.6)	包含層	
第4-5508902	東南三彩	陶	中国	—	(2.4)	道路	
第4-5508903	青磁	陶	肥前	—	(3.4)	包含層	
第4-5508904	青磁	陶	肥前	(11.2)	—	(4.7)	SX05
第4-5508905	積栗釉	陶	中国	—	(2.0)	H2/A	
第4-5508906	白磁	陶	朝鮮王朝	—	(7.0)	(2.8)	包含層
第4-5508907	陶器	壺	常滑	—	(8.9)	包含層	
第4-5508908	陶器	掛花入	備前	—	(7.6)	包含層	
第4-5508909	陶器	香炉	瀬戸美濃	(6.8)	—	(3.3)	H2/A
第4-5508910	陶器	天目	瀬戸美濃	—	—	(3.6)	SX01
第4-5508911	陶器	内付	備前	—	—	—	包含層
第4-5508912	肥前系陶器	陶	肥前	(11.4)	(4.1)	3.6	包含層
第4-5508913	肥前系陶器	陶	肥前	—	4.8	(2.9)	包含層
第4-5508914	肥前系陶器	鉢?	肥前	—	—	(5.2)	包含層
第4-5508915	京系土師器	皿	在池	11.9	3.0	3.1	陶埴
第4-5508916	京系土師器	坏	在池	(10.0)	(5.5)	3.1	SX01
第4-5508917	在池系土師器	皿	在池	8.8	4.7	2.4	S X01
第4-5508918	瓦質土器	火鉢	在池	—	—	8.5	S X01
第4-5508919	瓦質土器	火鉢	在池	—	—	7.1	西壁
第4-5508920	土師器	甕	—	—	—	13.3	S150

遺物観察表43

20次調査区C出土遺物観察表(土製品・石製品)①

採掘No.	品種	材質	部位	寸法(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第4-1908232	土塊	土師質	長さ	4.8	幅	1.0	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908233	土塊		長さ	4.6	幅	0.7	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908234	土塊		長さ	4.2	幅	1.1	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908235	土玉		長さ	3.8	幅	4.0	厚さ	—	C-SD01	23
第4-1908236	土師質内装土製品		長さ	4.1	幅	4.1	厚さ	—	C-SD01	23
第4-1908237	土師質内装土製品		長さ	4.0	幅	4.0	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908238	土師質内装土製品		長さ	3.8	幅	4.2	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908239	瓦質内装土製品		長さ	5.1	幅	4.8	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908240	瓦質内装土製品		長さ	5.0	幅	4.8	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908241	瓦質内装土製品		長さ	3.7	幅	4.0	厚さ	—	C-SD01	
第4-1908242	瓦質内装土製品	長さ	3.3	幅	4.1	厚さ	—	C-SD01	23	
第4-1908243	瓦質内装土製品	長さ	2.8	幅	2.8	厚さ	—	C-SD01		
第4-1908244	瓦加工品	長さ	—	幅	6.1	厚さ	—	C-SD01	23	
第4-2008245	陶	長さ	6.1	幅	7.9	厚さ	2.0	C-SD01	24	
第4-2008246	陶	長さ	9.8	幅	4.5	厚さ	1.3	C-SD01	24	
第4-2008247	陶	長さ	8.8	幅	5.6	厚さ	1.1	C-SD01		
第4-2008248	陶	長さ	4.6	幅	4.5	厚さ	1.8	C-SD01	24	
第4-2008249	磁石	長さ	9.0	幅	8.9	厚さ	8.8	C-SD01		
第4-2008250	磁石	長さ	8.6	幅	4.4	厚さ	3.6	C-SD01	24	
第4-2008251	磁石	長さ	8.1	幅	2.1	厚さ	1.0	C-SD01		
第4-2008252	磁石	長さ	6.8	幅	3.9	厚さ	0.8	C-SD01		
第4-2008253	磁石	長さ	7.1	幅	4.6	厚さ	0.8	C-SD01	24	
第4-2008254	磁石	長さ	4.8	幅	4.5	厚さ	2.8	C-SD01		
第4-2008255	磁石	長さ	4.5	幅	5.1	厚さ	1.7	C-SD01		
第4-2008256	磁石	長さ	4.3	幅	5.0	厚さ	1.7	C-SD01		
第4-2008257	磁石	長さ	3.5	幅	4.1	厚さ	1.2	C-SD01		
第4-2008258	内装状石製品	長さ	3.3	幅	3.3	厚さ	—	C-SD01		
第4-2008259	擬状石	長さ	8.1	幅	7.1	厚さ	4.2	C-SD01	24	
第4-2008260	石白	長さ	4.8	幅	4.8	厚さ	—	C-SD01		
第4-2108261	石白	長さ	—	幅	3.9	厚さ	—	C-SD01		
第4-2108262	石白	長さ	—	幅	3.9	厚さ	—	C-SD01		
第4-2108263	石白	長さ	—	幅	4.1	厚さ	—	C-SD01		
第4-2108264	石製品	長さ	12.1	幅	8.3	厚さ	7.7	C-SD01		
第4-2108265	石製品	長さ	14.9	幅	14.9	厚さ	9.5	C-SD01	24	
第4-2108266	石製品	長さ	11.5	幅	8.5	厚さ	5.8	C-SD01	24	
第4-33089019	石白(茶白)	—	—	幅	8.1	厚さ	7.9	C-SD02		
第4-33089020	磁石	長さ	6.9	幅	4.9	厚さ	—	2.1	C-SD02	結晶片質
第4-33089021	土師質土製品	長さ	5.6	幅	5.3	厚さ	—	C-SD02		
第4-4108904	備前系内装土製品	長さ	4.1	幅	4.0	厚さ	—	C-SD11	27	
第4-4108905	瓦質内装土製品	長さ	3.7	幅	3.0	厚さ	—	C-SD11		
第4-4108906	内装状石製品	長さ	5.5	幅	5.3	厚さ	—	C-SD11	磁石	
第4-4108907	内装状石製品	長さ	6.9	幅	5.8	厚さ	—	C-SD11	磁石	
第4-4108908	有孔石製品	長さ	4.1	幅	—	厚さ	—	C-SD11	27	
第4-5408906	石白	長さ	—	幅	7.0	厚さ	—	C-SK10		

遺物観察表44

府内町跡20次調査区C出土遺物観察表(土製品・石製品)②

探検No.	品名	材質	形状	長さ	幅	厚さ	重量(g)	遺構名	備考	図版No.
第1-58(0602)	石臼			長さ 6.8	幅 -	-	-	C-SK10		
第1-58(06021)	土埴			長さ 5.4	幅 1.0	-	-	包含層		
第1-58(06022)	土埴			長さ 5.3	幅 1.2	-	-	トレンチ		
第1-58(06023)	土埴			長さ 5.0	幅 1.2	-	-	トレンチ		
第1-58(06024)	土埴			長さ 3.3	幅 1.0	-	-	包含層		
第1-58(06025)	土埴			長さ 3.2	幅 1.5	-	-	包含層		
第1-58(06026)	瓦質円筒状土製品			長さ 4.9	幅 4.8	-	-	包含層		
第1-58(06027)	瓦質円筒状土製品			長さ 3.1	幅 3.5	-	-	包含層		
第1-58(06028)	赤陶版			長さ 5.0	幅 5.0	-	2.0	包含層		27
第1-58(06029)	赤陶版			長さ 7.2	幅 4.8	-	-	包含層		27
第1-58(06030)	版			長さ 7.0	幅 6.1	-	1.2	トレンチ	既石の可能性もあり	
第1-58(06031)	有溝既石			長さ 2.1	幅 3.9	-	-	トレンチ		
第1-58(06032)	既石			長さ 8.2	幅 5.0	-	1.3	トレンチ		
第1-58(06033)	既石			長さ 5.8	幅 -	-	-	包含層	既石?	
第1-58(06034)	既石			長さ 3.9	幅 3.7	-	1.0	包含層		
第1-58(06035)	附石既石類			長さ 21.3	幅 -	-	-	包含層		
第1-58(06038)	附石既石類			長さ 13.0	幅 -	-	-	包含層		27

遺物観察表44

府内町跡20次調査区C出土遺物観察表(金属製品・ガラス製品)

探検No.	品名	材質	形状	寸法(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第1-21(02067)	扁平玉	ガラス		長さ 2.2	幅 2	厚さ 1.0	-	C-SD01		
第1-21(02068)	ガラス玉			長さ -	幅 1	厚さ 1.0	-	C-SD01	青色	24
第1-21(02069)	銅製品	銅		長さ 3.2	幅 -	厚さ -	-	C-SD01		24
第1-21(02070)	小柄	金属		長さ (0.9)	幅 (1.1)	厚さ (0.70)	-	C-SD01		
第1-23(010)	鍔	青銅		長さ 8.3	幅 -	厚さ 0.10	-	C-SK02		
第1-58(0402)	浮彫製品	銅		長さ 6.1	幅 1.2	-	-	包含層	近世か?	27
第1-58(0403)	碧玉			長さ 7.6	幅 1.3	-	-	表上		
第1-58(04031)	マイタ銀金属製品	鉛		長さ 1.9	幅 1.2	厚さ 0.30	3.5	包含層		

遺物観察表46

府内町跡20次調査区C出土遺物観察表(木製品)①

探検No.	品名	材質	形状	寸法(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.
				長さ	幅	厚さ				
第1-22(0271)	楕円木製品	木製		長さ 6.0	幅 1.8	厚さ 2.5	-	C-SD01		
第1-22(0272)	木製加工品	木製		長さ 26.3	幅 3.1	厚さ 0.8	-	C-SD01		
第1-22(0273)	筒	漆器	口徑	13.1	底径 5.8	器高 (4.2)	-	C-SD01		
第1-22(0274)	筒	漆器	口徑	12.6	底径 5.8	器高 1.5	-	C-SD01		
第1-22(0275)	筒	漆器	口徑	-	底径 -	器高 (3.1)	-	C-SD01		
第1-22(0276)	筒	漆器	口徑	-	底径 -	器高 (5.9)	-	C-SD01		
第1-22(0277)	筒	漆器	口徑	13.3	底径 -	器高 (4.1)	-	C-SD01		
第1-22(0278)	筒	漆器	口徑	-	底径 -	器高 (5.0)	-	C-SD01		
第1-22(0279)	糸巻	木製		長さ 4.7	幅 1.8	-	-	C-SD01		24
第1-22(0280)	舟形木製品	木製		長さ 17.8	幅 3.5	高さ 1.1	-	C-SD01		24
第1-22(0281)	楕円	木製	芯	長さ 12.8	幅 0.9	-	-	C-SD01		24
第1-22(0282)	楕円	木製		長さ 8.5	高さ -	-	-	C-SD01		24
第1-22(0283)	楕円	木製		長さ 7.8	高さ 5.5	-	-	C-SD01		24
第1-22(0284)	楕円	木製		口徑 0.8	高さ 6.3	-	-	C-SD01		24
第1-22(0285)	楕円	木製	紐	長さ 5.1	厚さ 2.7	-	-	C-SD01		24
第1-22(0286)	不明	木製	棒状	長さ 15.7	幅 2.6	-	-	C-SD01		25
第1-22(0287)	素材	木製	角状	長さ 9.6	幅 0.9	-	-	C-SD01		25
第1-22(0288)	不明	木製	板状	長さ 18.2	幅 2.1	厚さ 0.8	-	C-SD01		25
第1-22(0289)	苜	木製		長さ -	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0290)	苜	木製		長さ -	幅 0.6	-	-	C-SD01		
第1-22(0291)	苜	木製		長さ -	幅 0.5	-	-	C-SD01	竹製品 (B13に同じ)	
第1-22(0292)	苜	木製		長さ -	幅 0.6	-	-	C-SD01		
第1-22(0293)	苜	木製		長さ -	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0294)	苜	木製		長さ -	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0295)	苜	木製		長さ 17.0	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0296)	苜	木製		長さ 17.2	幅 0.8	-	-	C-SD02		
第1-22(0297)	苜	木製		長さ -	幅 0.3	-	-	C-SD01	竹製品	
第1-22(0298)	苜	木製		長さ 20.6	幅 0.5	-	-	C-SD01		
第1-22(0299)	苜	木製		長さ 21.3	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0300)	苜	木製		長さ -	幅 0.7	-	-	C-SD01		
第1-22(0301)	苜	木製		長さ 24.3	幅 0.6	-	-	C-SD01		
第1-22(0302)	苜	木製		長さ 23.9	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0303)	苜	木製		長さ 24.3	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0304)	苜	木製		長さ -	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0305)	苜	木製		長さ -	幅 0.9	-	-	C-SD01		
第1-22(0306)	苜	木製		長さ -	幅 1.1	-	-	C-SD01		
第1-22(0307)	苜	木製		長さ 29.6	幅 0.8	-	-	C-SD01		25
第1-22(0308)	苜	木製		長さ 29.3	幅 0.8	-	-	C-SD01		
第1-22(0309)	棒状製品	木製		長さ 25.0	幅 1.1	-	-	C-SD01		
第1-25(0310)	下駄	木製		長さ 18.5	幅 10.0	高さ 5.3	-	C-SD01		25
第1-25(0311)	下駄	木製		長さ 17.7	幅 9.0	高さ 4.9	-	C-SD01		25
第1-25(0312)	下駄	木製		長さ 10.5	幅 7.8	高さ 1.3	-	C-SD01		25
第1-25(0313)	下駄	木製		長さ 14.8	幅 -	高さ 2.1	-	C-SD01		25

遺物観察表47

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(木製品)①

種目No.	品名	材質	形状	長さ	幅	厚さ	重量	遺構名	備考	図版No.
第4-2602314	不明	木器	板状	長さ 9.8	幅 2.4	厚さ 0.5		C-SD01		25
第4-2602315	板状製品	木器	板状	長さ 11.6	幅 3.8	厚さ 0.4		C-SD01		25
第4-2602316	不明	木器	板状	長さ 6.2	幅 -	厚さ 0.4		C-SD01		
第4-2602317	不明	木器	板状	長さ 12.0	幅 -	厚さ 0.9		C-SD01		
第4-2702318	不明	木器	板状	長さ 16.7	幅 8.3	厚さ 0.6		C-SD01		25
第4-2702319	不明	木器	板状	長さ 17.8	幅 4.0	厚さ 0.7		C-SD01		
第4-2702320	板状製品	木器	板状	長さ 20.8	幅 9.2	厚さ 0.6		C-SD01		
第4-2702321	不明	木器	板状	長さ 28.0	幅 5.4	厚さ 0.8		C-SD01		
第4-2802322	不明	木器	板状	長さ 31.5	幅 7.5	厚さ 0.8		C-SD01		
第4-2802323	角材	木器	板状	長さ 23.5	幅 10.4			C-SD01		
第4-2802324	曲物	木器	流	長さ 12.3	幅 5.4	厚さ 0.7		C-SD01		
第4-2802325	曲物	木器	流	長さ -	幅 -	厚さ 0.4		C-SD01		
第4-2802326	曲物	木器	流	長さ 11.5	厚さ 0.5			C-SD01		
第4-2802327	曲物	木器	流	長さ 8.4	厚さ 0.4			C-SD01		
第4-2802328	曲物	木器	流	長さ 13.3	厚さ 0.5			C-SD01		25
第4-2802329	曲物	木器	流	長さ 10.0	厚さ 0.2			C-SD01		
第4-3102033	下駄	木器	板状	長さ 20.5	幅 11.3	高さ 7.6		C-SD10		25
第4-3102034	下駄	木器	板状	長さ 18.5	幅 10.0	高さ 4.2		C-SD10		26
第4-3102035	笮	木器	板状	長さ -	幅 0.6			C-SD10		
第4-3102036	笮	木器	板状	長さ -	幅 0.8			C-SD10		
第4-3402024	杖柱	木器	柱	長さ 6.8	厚さ 3.6			C-SD02		26

遺物観察表48

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(瓦)

種目No.	品名	材質	寸法(単位cm)		重量(g)	遺構名	備考	図版No.
			長さ	幅				
第4-3402022	軒瓦		長さ -	幅 6.8	厚さ -	-	C-SD02	26
第4-3402023	軒平瓦		長さ -	幅 4.5	厚さ -	-	C-SD02	26
第4-5702037	軒平瓦		長さ -	幅 -	厚さ -	-	トレンチ	
第4-5702038	丸瓦		長さ 31.5	幅 -	厚さ -	-	C-SK10	
第4-5702039	丸瓦		長さ 31.0	幅 -	厚さ -	-	C-SK10	
第4-5702040	丸瓦		長さ (21.8)	幅 -	厚さ -	-	C-SK10	
第4-5702041	丸瓦		長さ (22.9)	幅 -	厚さ -	-	C-SK10	

遺物観察表49

府内町跡20次調査C区出土遺物観察表(銅銭)

種目No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	直径(mm)	重量(g)	書体	遺構名	備考	図版No.
第4-5902011	不明			4.5	2.4		C-SD01		
第4-5902012	皇宋通寶	1038年	北宋	3.0	2.4	篆書	C-SD01	精付者	
第4-5902013	元祐通寶	1088年	北宋	3.2	2.4	篆書	C-SD01		
第4-5902014	紹聖元寶	1094年	北宋	2.3	2.3	篆書	C-SD01		
第4-5902015	政和通寶	1111年	北宋	2.3	2.4	行書	C-SD01		
第4-5902016	元豐通寶	1078年	北宋	2.9	2.4	篆書	C-SD01		
第4-5902017	不明			0.6	-		C-SD01		
第4-5902018	元豐通寶	1078年	北宋	2.7	2.4	篆書	C-SD01		
第4-5902019	不明			1.1	-		C-SD01	「寶」のみ	
第4-5902020	聖宗元寶	1101年	北宋	2.0	2.4	篆書	C-SD01		
第4-5902021	順寧元寶	1068年	北宋	3.5	2.3	行書	C-SD01		
第4-5902022	紹聖元寶	1094年	北宋	2.1	2.4	行書	C-SD01		
第4-5902023	皇宋通寶	1038年	北宋	3.2	2.4	篆書	C-SD10		
第4-5902024	祥符通寶	1008年	北宋	2.1	2.5		C-SD02		
第4-5902025	不明			3.4	2.5		C-SD11	精で絞めず	4枚重なっている
第4-5902026	不明			3.5	2.5		C-SD11	精で絞めず	4枚重なっている
第4-5902027	不明			4.0	2.5		C-SD11	精で絞めず	4枚重なっている
第4-5902028	不明			3.5	2.4		C-SD11	精で絞めず	4枚重なっている
第4-6002019	天聖元寶	1023年	北宋	3.1	2.5	篆書	C-SD11		
第4-6002020	不明			6.8	2.5		C-SK02	精で絞めず	
第4-6002021	不明			1.0	-		C-SK02		
第4-6002022	不明			2.3	-		C-SK10		
第4-6002023	不明			3.4	2.5		包含層	精付者	
第4-6002024	不明			1.3	2.4		包含層	精付者 半分欠損	
第4-6002025	元豐通寶	1078年	北宋	2.6	2.3	篆書	包含層		
第4-6002026	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.7	2.4	篆書	包含層		
第4-6002027	永樂通寶	1408年	明	3.0	2.5		包含層		
第4-6002028	天聖元寶	1023年	北宋	2.5	2.4	行書	包含層		
第4-6002029	咸淳元寶	1265年	南宋	2.1	2.4		包含層	背ハ	
第4-6002030	元祐通寶	1088年	北宋	1.8	2.4		包含層	一部欠損	
第4-6002031	不明			1.2	2.5		包含層	一部のみ	
第4-6002032	不明			3.1	2.5		包含層	精で絞めず	
第4-6002033	祥符通寶	1008年	北宋	1.8	2.4		包含層	一部欠損	
第4-6002034	開元通寶	621年	唐	2.5	2.3		包含層		
第4-6002035	不明			2.6	2.4		包含層	精付者	
第4-6002036	不明			1.1	-		包含層	半分欠損	

写 真 图 版



大分川

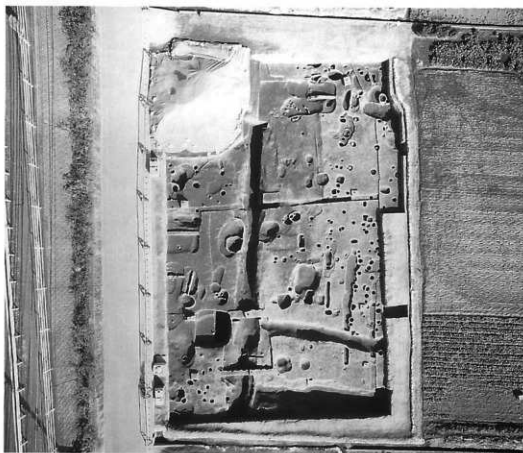
府内町跡20次調査区と万寿寺跡（西上空から）



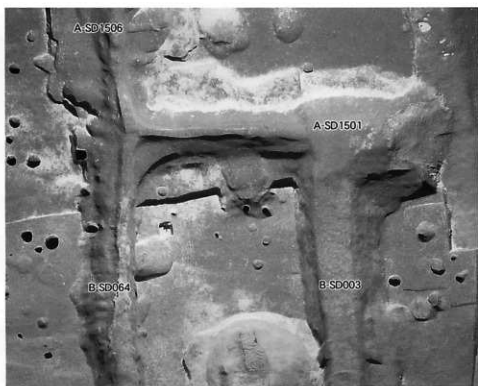
府内町跡20次調査 全景写真



府内町跡20次調査と国道10号線



府内町跡20次調査 A区 全景



府内町跡20次調査 各溝の接合部



府内町跡20次調査 B区 礎 建物群



A-SB01 近景 1



A-SB01 近景 2



A-SB01 の基盤の川厚石 (A-SP026)



A-SK1505



A-SD1505



A-SD1501



A-SD1501 土層断面



A-SD1506



A-SK1017



A-SE1045 (井戸)



A-SK1039



B-SK047



B-SD003



B-SD003 土層断面



B-SD064 土層断面



B-SD004 互出土状況



B-SD004



B-SD003 と B-SK020



B-SK020 全景



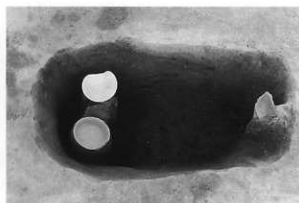
B-SK020 近景



B-SK048



B-SK184



B-SK063



B-SE009 (井戸)



B-SE006 (井筒)



B-SE010 井戸内道具



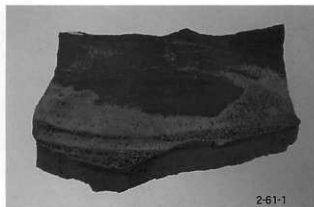
B-SE010 裏込めの石



B-SK015

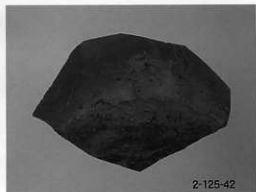


B-SD004 瓦出土状況



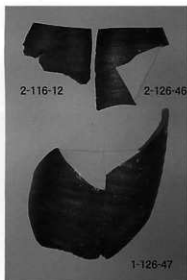
2-61-1

タイ産陶器(四耳壺)



2-125-42

朝鮮王朝産(舟徳利)



2-116-12

2-126-46

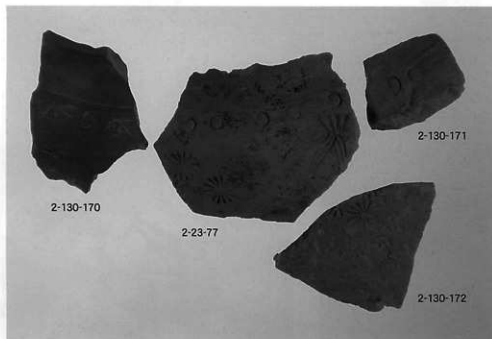
1-126-47

備前系陶器(掛花入)



2-17-59

A-SK1505のこね鉢



2-130-170

2-23-77

2-130-171

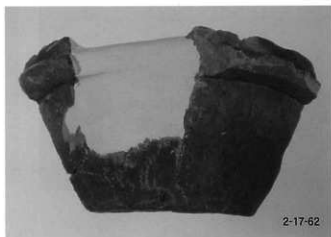
2-130-172

瓦質土器



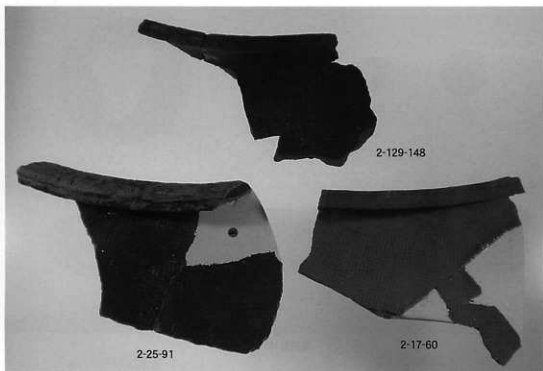
2-48-4

備前系陶器のヘラ記号



2-17-62

石鍋



2-129-148

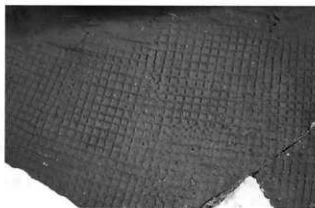
2-25-91

2-17-60

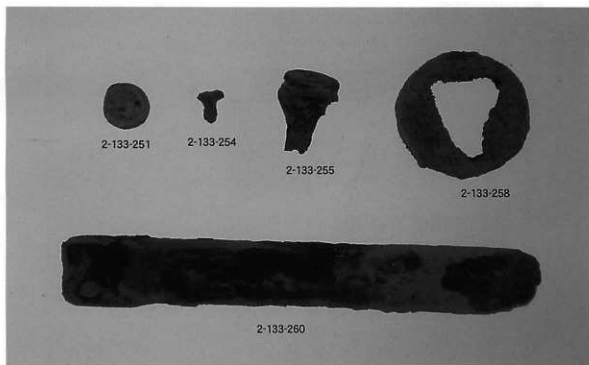
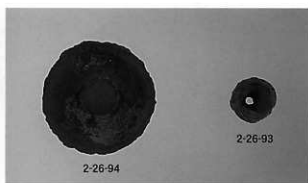
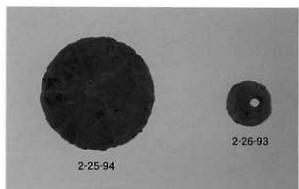


龜山系須恵質土器

2-25-91



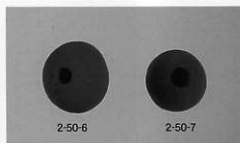
2-17-60



金銅製品



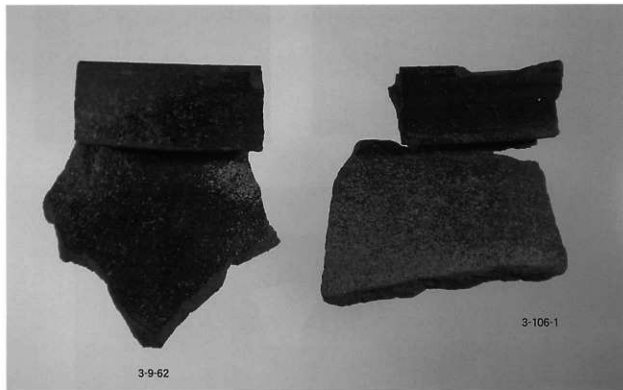
分銅



土製玉



石製品（滑石製）



常滑系陶器



備前系陶器 (擂鉢)



備前系陶器ヘラ記号



備前系陶器大甕のヘラ記号

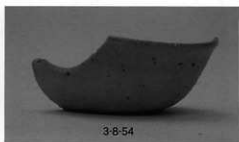


備前系陶器ヘラ記号



3-141-6

吉備系土師器



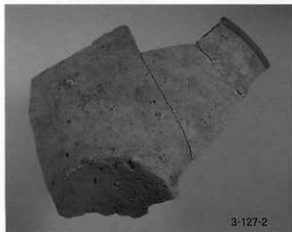
3-8-54

瀬戸美濃系陶器



3-135-39

土鍋



3-127-2

東播系須恵質土器



3-131-9

瓦製土器(鉢)



B-SK048 出土 在地系土師質土器

3-70-



B-SK184 出土 在地系土師質土器

3-125-1~6



B-SK047 出土 土師器

3-68-2



B-SD004 出土 瓦



九州タイプの吊り紐痕



本州タイプの吊り紐痕

B-SD004 出土 丸瓦の製作痕



C-SD01[上層]遺物出土状況



C-SD01[上層]青磁人物像燭台出土状況



C-SD01[中層]遺物出土状況



C-SD01[中層]粘質土内遺物出土状況



C-SD01[中層]猿形木製品出土状況



C-SD01[中層]華南三彩・舟徳利出土状況



C-SD01[下層]遺物出土状況(1)



C-SD01[下層]遺物出土状況(2)



C-SD01[下層]燭台出土状況



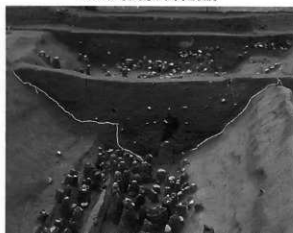
C-SD01[下層]土師質土器出土状況



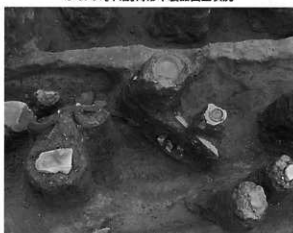
C-SD01[下層]下駄出土状況



C-SD01[下層]舟形木製品出土状況



C-SD01・C-SD10切り合い状況(左:C-SD10 右:C-SD01)



C-SD10 遺物出土状況



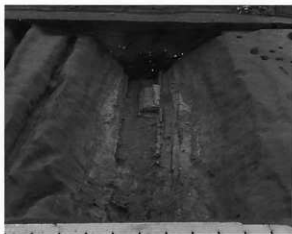
C-SD10 人骨出土状況(1)



C-SD10 人骨出土状況(2)



C-SD01直上 道路検出状況(東から)



C-SD01・C-SD10 完掘状況(東から)



C-SD02 遺物出土状況



C-SD12 遺物出土状況



遺物出土状況

C-SD04 遺物出土状況



C-SD11 遺物出土状況



C-SD05・C-SD07・C-SD08・C-SD09 遺物出土状況



C-SD05・C-SD07・C-SD08・C-SD09 完掘状況



SK01 遺物出土状況



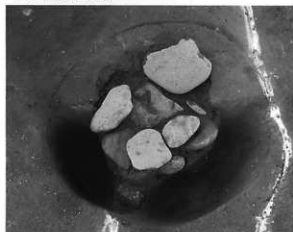
金箔土師器出土状況



SK05 完掘状況



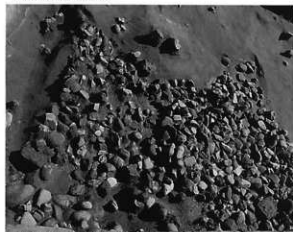
遺物出土状況



SK06 遺物出土状況



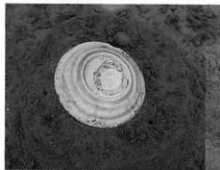
SK08 遺物出土状況



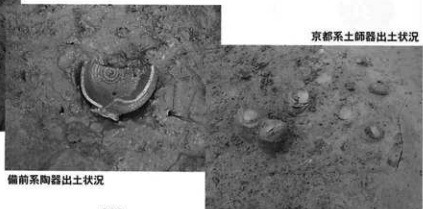
SK10 遺物出土状況(1)



SK10 遺物出土状況(2)



瀬戸美濃系陶器出土状況

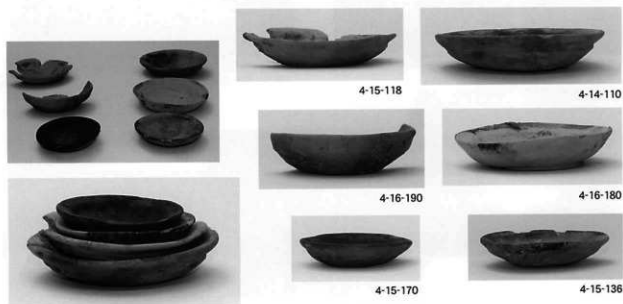


京都系土師器出土状況

備前系陶器出土状況



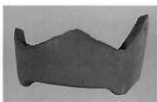
C-SD01出土遺物【備前系陶器】(第4-9図～第4-14図)



C-SD01出土遺物【土師質土器】(第4-14図～第4-16図)



4-17-207



4-17-211



4-17-212



4-17-213



4-17-214



4-17-215



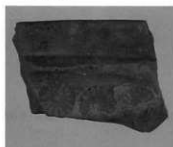
4-18-217



4-18-220



4-18-221



4-18-222



4-18-225



4-18-226



4-19-227



4-19-229



4-19-230



4-19-231

C-SD01出土遺物〔瓦質土器〕(第4-17回～第4-19回)



4-19-235



4-19-236



4-19-239



4-19-244

C-SD01出土遺物〔土製品〕(第4-19回)



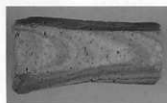
4-20-245



4-20-246



4-20-248



4-20-250



4-20-253



4-20-259



4-21-266



4-21-268



4-21-269

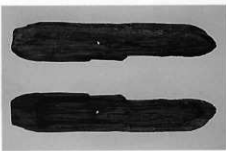


4-21-265

C-SD01出土遺物【石製品・ガラス製品・金属製品】(第4-20回・第4-21回)



4-23-279



4-23-280



4-23-281



4-23-282



4-23-283



4-23-284



4-24-285

C-SD01出土遺物【木製品】(1) (第4-23回～第4-24回)



4-24-286



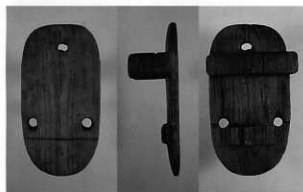
4-24-287



4-24-288



4-24-307



4-25-310



4-25-311



4-26-312



4-26-313



4-26-314



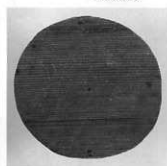
4-26-315



4-27-318

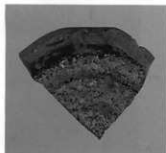


4-28-327



4-28-329

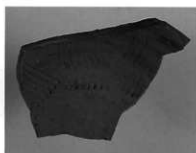
C-SD01出土遺物【木製品】(2) (第4-20回・第4-21回)



4-29-2



4-29-3



4-29-4

C-SD10出土遺物【備前系陶器】(第4-29回)



4-29-11

4-29-12



4-30-22



4-30-27

C-SD10出土遺物[土師質土器] (第4-29回・第4-30回)



4-31-33



4-31-34

C-SD10出土遺物[木製品] (第4-31回)



4-33-3



4-33-4



4-33-5



4-33-9



4-33-14



4-33-15



4-33-17



4-33-18



4-34-22



4-34-23

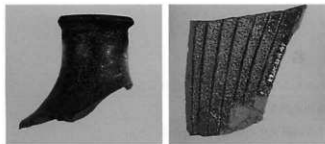


4-34-24



4-34-25

C-SD02・C-SD12出土遺物 (第4-33回・第4-34回)



4-36-1

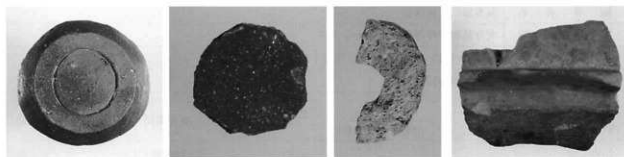
4-36-2

C-SD04出土遺物 (第4-36図)



4-38-5

C-SD05出土遺物 (第4-38図)



4-41-1

4-41-14

4-41-18

4-45-2

C-SD11出土遺物 (第4-41図)

C-SK05出土遺物 (第4-45図)



4-50-15

4-50-17

4-52-25

4-52-49

4-52-29

4-52-44

4-53-54

C-SK10出土遺物 (第4-50図～第4-53図)



4-56-28

4-56-29

4-56-35

4-56-36

4-58-42

含有層出土遺物 (第4-56図～第4-58図)

報告書名抄録

ふりがな	ぶんごふない7-ちゅうせいおおもふないまちあとだい20じょうさー
番 名	豊後府内7-中世大友府内町跡第20次調査-
副 番 名	一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	(3)
シ リ ー ズ 名	大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第16集
編 著 者 名	坂本嘉弘・後藤晃一
編 集 機 関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 在 地	〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
発 行 年 月 日	平成19年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中世大友 府内町跡 第20次 調査区	大分市元町	322	051	33° 13' 28"	131° 37' 17"	2002年 5月 ～ 2003年 3月	2,100㎡	一般国道 10号古国府 拡幅事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友 府内町跡第20 次調査区	倉庫地 ほか	中世 14世紀～ 16世紀	区画性の強い堀と 溝・井戸・土坑 礎盤建物	在地系土師質土器、青磁・ 白磁、青花等貿易陶磁、 中世瓦、銅銭、ガラス玉、 木製人形、各種木製品	調査区は豊後「府内」の中核的 寺院の西北部隅にあたり、北境 の区画施設やこの部分の区画や 建物を検出した。

要 約	<p>中世大友城下町跡の中でも最大の占有面積を占める万寿寺の西北隅の調査を実施した。その結果、万寿寺の創建時である14世紀初頭から、焼失機能を失う16世紀末までの遺構を検出した。14世紀代では区画性の強い南北方向や東西方向の溝を検出し、ほぼ同じ時期の建物である川原石を礎盤とする建物を検出した。また、16世紀後半においては、文献に見られる万寿寺西之屋敷の裏手の状況を検出した。さらに北側では、万寿寺と御内町との境になる大規模な堀を検出した。この堀の周辺は14世紀代からの東西方向の溝が幾筋も検出され、古くから北側の境であったことが推測された。</p>
-----	---

